

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14

**平成9年度発掘調査報告
(第1分冊)**

平成10年3月

鎌倉市教育委員会



名越ヶ谷遺跡



円覚寺旧境内遺跡

序 文

鎌倉市教育委員会

教育長 米 倉 雄二郎

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に対して影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施につとめてきました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であります。が、市内のおよそ6割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が不可能であることは言うまでもありません。工事計画の策定にあたっては、できるだけ早い時期から当委員会と協議を行い、文化財の保護について最善の措置をはかってくださいますようお願いを申しあげます。

本書は平成8年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅・店舗併用住宅等の建設に伴う発掘調査の記録です。本書が鎌倉の歴史を明らかにするために少しでも役立つことを祈念するとともに、調査の実施に際してお世話になった調査員・事業者・工事関係者をはじめ多くの方々に、心からお礼を申しあげます。

例　　言

- 1 本書は平成9年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係わる発掘調査報告書（2分冊）である。
- 2 本書所収の調査地点及び所収分冊は別表・図及び目次のとおりである。
- 3 現地調査及び出土資料の整理は鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
- 4 出土遺物及び写真・図面等の資料は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
- 5 各調査内容の詳細は、各々の報文を参照されたい。

総 目 次

(第1分冊)

序文	III
例言	IV
平成9年度調査の概観	X
1 名越ケ谷遺跡 (No.231) 大町四丁目1736番2外地点	
第一章 遺跡地の歴史と地理的環境	5
第二章 調査の経過と概要	9
第三章 基本層序	11
第四章 発見された遺構と遺物	12
第1節 第5面	12
第2節 第4面	15
第3節 第3面	28
第4節 第2面	42
第5節 第1面	47
第五章 まとめ	56
2 米町遺跡 (No.245) 大町二丁目391番1地点	
第一章 遺跡地の概要	99
第1節 歴史的環境	99
第2節 調査地点	104
第二章 発見された遺構と遺物	105
第1節 中世・第1面	105
第2節 近世・第1面上層	128
第三章 米町遺跡の花粉化石	135
第四章 まとめ	142
3 北条時房・顯時邸跡 (No.278) 雪ノ下一丁目272番地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	159
第1節 鎌倉の地勢と遺跡の位置	159
第2節 遺跡地の歴史的環境	161
第二章 調査の経緯と成果の概要	167
第1節 調査の経緯	167
第2節 調査成果の概要	168
第三章 発見された遺構と遺物	173
第1節 遺跡の基本土層層序	173
第2節 第4面(古代)	174

第3節 第3面（中世）	177
第四章 自然科学分析	226
第1節 北条時房・頼時邸跡の中世以前の堆積層の粒度組成	226
第2節 土壌34の花粉化石	229
第3節 寄生虫卵からみた土壌34	233
第五章 調査成果のまとめと考察	236
第1節 遺構の変遷	236
第2節 若宮大路御溝と地割り	240
第3節 中世と近世以降の便所出土遺物について	245
第4節 柱穴底面に置かれるアワビについて	246
4 北条小町邸跡（No.282）雪ノ下一丁目370番1地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	273
第二章 調査の経緯	276
第1節 調査に至る経緯	276
第2節 調量方眼の設定	276
第3節 調査経過	276
第4節 堆積土層	279
第三章 発見した遺構と遺物	282
第1節 I面	284
第2節 II面	286
第3節 III面	289
第4節 IV面	292
第5節 V面	295
第四章 まとめ	299
5 円覚寺旧境内遺跡（No.434）山ノ内字瑞鹿山509番地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	321
第二章 調査の概要	325
1. 調査の経緯	325
2. 調量軸の設定	325
3. 堆積土層と生活面	325
第三章 発見された遺構	329
1. 一面の遺構	329
2. 二面の遺構	331
3. 三面の遺構	339
4. 最終確認トレンチ	339
第四章 出土遺物	341
1. 一面出土の遺物	341
2. 二面出土の遺物	341
3. 三面出土の遺物	348

4. その他の遺物	358
第五章　まとめ	375
1. 年代と変遷	375
2. 建物の性格	376
3. 遺物の様相	376
附 編　円覚寺旧境内遺跡の花粉化石	399
6 極楽寺旧境内遺跡（No.291）極楽寺三丁目348番2地点	
第一章　遺跡の諸環境	415
第1節　遺跡の地理的環境	415
第2節　遺跡の歴史的環境	415
第3節　周辺の遺跡	415
第二章　調査の概要	418
第1節　調査に至る経緯と経過	418
第2節　基本層序	418
第三章　発見遺構と出土遺物	420
第1節　発見遺構	420
第2節　出土遺物	429
第四章　まとめ	432

(第2分冊)

7 佐助ヶ谷遺跡（No.203）佐助一丁目450番24地点	
第一章　遺跡の位置と歴史的環境	7
第二章　調査経過とグリッド配置、基本土層	9
第三章　検出遺構と出土遺物	11
1. 現代地下構築出土遺物及び、表土層出土遺物	11
2. 1面の遺構と出土遺物	15
3. 2面の遺構と出土遺物	19
4. 3面の遺構と出土遺物	26
5. 4面の遺構と出土遺物	31
6. 5面の遺構と出土遺物	35
7. 5面下層確認トレーンチ、中世層出土古代遺物	36
第四章　まとめ	37
8 佐助ヶ谷遺跡（No.203）佐助一丁目450番25, 27地点	
第一章　調査経過とグリッド配置	80
第二章　検出遺構と出土遺物	81
1) 1面の遺構と遺物	81
2) 1B面の遺構と遺物	86
3) 2面の遺構と遺物	92

4) 3面の遺構と遺物	104
5) 4面の遺構と遺物	113
6) 4B面の遺構と遺物	120
第三章 まとめ	123
附 編 佐助ヶ谷遺跡の花粉化石	126
9 大倉幕府周辺遺跡群 (No.49) 雪ノ下四丁目620番5地点	
第一章 調査地点概観	185
1. 位置と地勢	185
2. 歴史的環境	188
第二章 調査の概要	190
1. 調査にいたる経緯	190
2. 方眼設定方法	190
3. 調査経過	191
第三章 調査結果	193
第1節 概要	193
第2節 各説	195
第四章 まとめと若干の展望	255
1. 弥生時代	255
2. 鎌倉時代	255
3. 中世後期	256
4. 近世	256
10 北条小町跡跡 (No.282) 雪ノ下一丁目369番1地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	291
1. 遺跡の位置	291
2. 遺跡の歴史的環境	291
第二章 調査の概略	296
1. 調査の経緯と経過	296
2. グリット設定方法	296
3. 調査の概要	296
第三章 検出遺構と出土遺物	299
1. 近代・近世の遺構と遺物	299
2. 中世の遺構と遺物	304
第四章 まとめ	322
11 横小路周辺遺跡 (No.259) 雪ノ下五丁目557番1地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	347
第二章 検出された遺構と出土遺物	348
第三章 まとめ	350
12 長谷小路周辺遺跡 (No.236) 由比ガ浜三丁目228番2地点	
第一章 調査の概要と成果	359

第1節 調査に至る経緯	359
第2節 調査の成果	359
第二章 遺跡地の概要	361
第1節 鎌倉の地勢と遺跡の位置	361
第三章 発見された遺構と遺物	365
第1節 第1調査墳	365
第2節 第2調査墳	369
第3節 第3調査墳	370
第4節 第4調査墳	376
第四章 まとめ	388
13 円覚寺門前遺跡（No.287）山ノ内字藤源治951番2地点	
第一章 遺跡の歴史的環境	402
第二章 調査の概要	404
第1節 調査に至る経緯と経過	404
第2節 基本層序	404
第三章 発見した遺構と遺物	407
第1節 発見遺構	407
第2節 発見遺物	407
第四章 まとめ	411
－附編－ 鎌倉市円覚寺門前遺跡のテフラ（火山灰）分析結果	412
14 積善遺跡（No.440）十二所字積善952番6地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	426
第二章 調査の経過と層序	428
第三章 検出遺構と出土遺物	429
第四章 積善遺跡の花粉化石	448
第五章 まとめ	454
15 若宮大路周辺遺跡群（No.242）小町二丁目28番3,5地点	
第一章 調査地点の位置と歴史的環境	468
第二章 調査の経過と概要	470
第三章 検出遺構と出土遺物	472
1. 第1トレンチ	472
2. 第2トレンチ	475
第四章 まとめ	480

平成 9 年度調査の概観

平成 9 年度の緊急調査実施件数は前年度からの継続を含め、18 件で対象面積は 1,189.31m² であった。前年度の 19 件、1,253.93m² と比較し件数、面積ともにはば同様の傾向を示している。

調査原因の内訳は、個人専用住宅建設に関するものが 14 件、店舗併用住宅建設に関するものが 4 件となっている。個人専用住宅建設に係るものの中、5 件が車庫の造成を直接的な調査原因としている。このことは敷地内に車庫を確保し、土地の有効利用を図ろうとするものに他ならないものと窺われる。また同様に土地の有効利用を図ろうとするものとして、地下室を設置しようとするものが 2 件みられた。平成 7 年の阪神・淡路大震災の発生以降、個人専用住宅においても耐震性を考慮して地盤改良や鋼管杭打設工法を採用するものが増加しており、本年度はこれらの方工法を調査原因とするものが 5 件みられた。こうした調査原因による発掘調査は今後もさらに増加していくものと予測される。

本年度は若宮大路を中心とする市街地中心部での発掘調査事例が例年より少なく、市街地中心部を取り巻く谷戸内や鎌倉地区の外周にあたる丘陵部等に調査地点が分散する傾向が認められた。いわゆるバブル景気の崩壊後、景気の低迷が継続市街地中心部において個人専用住宅との併用を含む店舗ビル建設に代表されるような規模の大きな建設事業が活発に展開されるまでには景気動向が回復を見せていないことが皮肉にも発掘調査の実施状況からも窺われるところである。以下、各地点の調査に至る経過と調査成果の概要を紹介する。

1 若宮大路周辺遺跡群 (No.242)

鎌倉駅の西隣、若宮大路を中心として大きく広がる当該遺跡の西端近くに位置する。平成 8 年 11 月に店舗併用住宅の事前相談があり、地下室を設置する計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下 80cm 以下に造構面が確認された。このため、事業者と協議したところ、工事の実施により造構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、自己用区域を対象として平成 9 年 3 月 10 日から 5 月 20 日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀中葉から14世紀後葉にかけての方形堅穴式造構、土壙及び溝状造構等が発見された。調査地点西方をほぼ南北に通る今小路から現 JR 横須賀線にかけての地域では、これまで駅西口広場から市役所前にかけての一角を除いて発掘調査の事例が少なかったため、中世の土地利用の実態が明らかになっていなかったが、本調査地点での調査成果は大きな収穫と位置付けられる。

2 北条時房・顯時邸跡 (No.278)

若宮大路の西側、鶴岡八幡宮から南に約 220m の位置に所在する。平成 8 年 1 月に店舗併用住宅の事前相談があり、クイ基礎の計画であり、隣地の発掘調査の結果から工事の実施により造構の損傷が避けられないものと判断されたため、発掘調査の実施を前提に事業者と協議し、文化財保護法の手続きを経て、調査実施方法等の協議が整った後、自己用区域を対象として平成 9 年 3 月 12 日から 6 月 19 日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、これまでに近隣の調査地点で明らかにされているのとほぼ同様に、井戸跡、溝跡、多数の柱穴群及び土壙等が発見されている。出土遺物についてみると、やはり木製品の多さが目立つ遺跡である。

3 宝蓮寺跡 (No.374)

鎌倉駅の西方、佐助ヶ谷の奥の一支谷に位置する。平成8年12月に専用住宅建設の事前相談があり、地盤改良のクイ基礎計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下70cm以下に遺構面が確認された。このため、設計変更を含め、事業者と協議したが設計変更等が不可能とのことであり、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、平成9年3月17日から5月21日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀から14世紀中頃にかけての合計8枚の生活面が確認され、2軒以上の比較的規模の大きな掘立柱建物跡や、据置構等が発見された。地業面の多さからは破砕泥岩による版築行為が繰り返しく実施された谷戸内における活発な開発の様子が窺われる。

4 若宮大路周辺遺跡群 (No.242)

若宮大路の西側、商店街として知られる小町通りの中程から若宮大路に抜ける四ツ角の東側にある位置に所在する。平成8年7月に店舗併用住宅の事前相談があり、クイ基礎の計画であり、隣地の発掘調査の結果から工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、発掘調査の実施を前提に事業者と協議し、文化財保護法の手続きを経て、調査実施方法等の協議が整った後、自己用区域を対象として、平成9年4月24日から7月15日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、破砕泥岩の版築地業による道路遺構や、木材によって壁や床を構築した半地下式の建物遺構が極めて良好な状態で発見された。

5 積善遺跡 (No.440)

市域の東部、十二所の六浦道の南側に位置する。平成9年3月、自己用住宅に係る車庫造成の事前相談があり、本調査地点が前年度に発掘調査を実施した地点の北側に隣接する地点であることから、隣接地における発掘調査の成果からみて当該工事計画の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断された。このため事業者と協議し、文化財保護法の手続きを行い、事業者の準備が整った後、平成9年5月8日から6月12日まで発掘調査を実施した。

調査対象地は狭小であったが、工事掘削深度までの深さに13世紀末から14世紀にかけて造成された数枚の地業面が確認され、それに伴う掘立柱建物跡やかわらけ溜まりが検出された。なお、工事掘削深度以下にも包含層が続くことが確認されたが、工事による掘削が及ばないため、調査の対象外とした。

なお、本遺跡の遺跡名称は従前、「明王院門前遺跡」とされていたものであるが、市内の埋蔵文化財包蔵地の名称の適否について検討を実施した結果、平成10年1月31日付で「積善遺跡」と名称変更を行ったものである。

6 浄妙寺旧境内遺跡 (No.408)

市域の東部、県道金沢・鎌倉線の沿道北側に面し、史跡浄妙寺境内の東南に位置する。平成9年3月に専用住宅建設の事前相談があり、県道に面した敷地の南側を部分的に切り下げて車庫を作る設計であるため、試掘調査を実施したところ、現地表下60cm以下に遺構面が確認された。このため、埋蔵文化財に対する影響が避けられないものと判断されたため、事業者と協議し、文化財保護法の手続きを行い、平成9年5月12日から6月13日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀中頃から14世紀前半にかけての合計3面にわたる中世遺構面を確認し、礎板を有する柱穴等が発見された。

7 長勝寺遺跡（No.313）

材木座に所在する日蓮宗寺院長勝寺の南側丘陵部に位置する。平成9年4月に専用住宅の事前相談があり、敷地が斜面地の縁辺部にあたるため、基礎の一部をクイ構造とする計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下30cm以下に遺構面が確認された。このため、設計変更を含め、事業者と協議したが設計変更等が不可能とのことであり、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、平成9年6月16日から7月1日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、15世紀後半から16世紀にかけての時期と考えられる火葬址が確認され、錢、かわらけ、歯及び焼骨等が出土している。該期における長勝寺周辺の土地利用の実態として注目される調査成果といえよう。

8 大倉幕府北遺跡（No.193）

大倉幕府跡の北方、西御門二丁目に展開する谷戸の最奥部近くに位置する。平成9年5月に個人専用住宅建設の事前相談があり、敷地の一部を切り下げ車庫及び隣地との境に擁壁を建設する設計であったため試掘調査を実施したところ、地表下70cm以下に遺物包含層とみられる土層堆積が確認され、埋蔵文化財に対する影響が避けられないものと判断されたため、事業者と協議し、文化財保護法の手続きを経て、事業者の準備が整った後、平成9年7月1日から7月4日まで発掘調査を実施した。

本格調査を開始し順次、調査区を拡大してゆくなかで、当初、遺物包含層とみられた土層堆積の大半が僅かに中世遺物を含むものの、後世の造成による盛り土であることが判明したため、調査計画を変更して早々に現地での調査を終了した。

なお、本遺跡の遺跡名称は從前、「北御門遺跡」とされていたものであるが、市内の埋蔵文化財包蔵地の名称の適否について検討を実施した結果、平成10年1月31日付で「大倉幕府北遺跡」と名称変更を行ったものである。

9 政所跡（No.247）

鶴岡八幡宮の東側一帯に位置する。平成9年5月、折しも当該地においてクイ工法による基礎工事が実施されている状況を文化財課職員が確認し、この工事が埋蔵文化財を損なう工事であるとの判断から一時、工事の中断を事業者に指示した。当該地の近隣においては、これまでにも数地点において発掘調査が実施されており、これらの調査成果から埋蔵文化財がかなりの密度をもって存在することが充分に予想されるところであった。ただちに本件工事が実施されるにいたる経過を調査のうえ、事業者との協議を開始するとともに、既に着工された工事によって遺構の一部が損なわれている状況の取り扱いを含め、文化庁記念物課ならびに神奈川県文化財保護課との数回にわたる協議を経て、最終的には当該建築工事が個人専用住宅の建設に係るものであり、早急に発掘調査を実施すべきとの指導がなされたため、事業者に文化財保護法の手続きを指導し、現地調査の準備が整った平成9年7月14日から8月6日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、上層、下層2時期の遺構面が確認され、土丹地業面上に礎石建物等が発見されている。これまでにも政所跡では数地点の発掘調査が実施されているが、主たる建物遺構を検出することができ

たのは本調査地点が初めてである。

10 台山遺跡（No.29）

台峯と言われる丘陵部の東側に位置する。当該地において宅地造成を内容とする開発事業が計画された。この開発区域内には、現に個人専用住宅が1軒含まれており、この開発計画の実施と軒を一にして既存住宅の建て替えが実施されるところとなった。先行して開始された発掘調査の進捗状況を勘案しながら、個人住宅の建て替えに係る部分を対象として、平成9年7月14日から8月12日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、弥生時代中期から平安時代にかけての集落が発見され、数軒の堅穴住居址が検出されている。

11 玉繩城跡（No.63）

市域の北部、玉繩城跡の西側外郭部に位置する。平成9年6月に個人専用住宅建設の事前相談があった。当該地一帯は現在、宅地造成のされた住宅地となっているものの、造成の実施された昭和30年代後半から昭和40年代前半の時点では、いまだ本市では文化財保護行政に十分な行政の組織・体制が整備されていなかったこともあり、発掘調査の実施等を経ないまま宅地造成等の開発が実施される状況であった。したがって、造成後の住宅地内においても、一部には現在でも当時の工事によって損傷を受けなかった遺構の存在している部分が見受けられている。事前相談のあった建築計画では、敷地の南側を高さ4m程に切り下げ、現況道路に面した部分に地下車庫及び住宅への入口となる階段等を建設する計画が含まれるものであったため試掘調査を実施した。その結果、地表下60cm以下に旧地形の岩盤を確認するとともに、この岩盤上において溝等の遺構が発見された。このため工事の実施により遺構の損傷が避けられないものとの判断から、事業者と協議し文化財保護法の手続きを経て、事業者の準備が整った後、平成9年8月18日から8月28日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、岩盤上に4条の溝跡が発見された。これらの溝は出土遺物がないため明確な構築時期等を確定できないものの、16世紀末から17世紀初頭における玉繩城廃絶時に埋め立てられた遺構ではないかと予想される。

12 長谷小路周辺遺跡（No.236）

長谷觀音前の交差点から東に位置する。平成9年7月に店舗併用住宅建設の事前相談があり、深基礎の構造を内容とする計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下70cm以下に埋蔵文化財が確認された。このため設計変更を含め事業者と協議したが、設計変更等が不可能とのことであったため文化財保護法の手続きを行い、平成9年9月8日から10月1日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、14世紀前半の方形堅穴建築址2軒、14世紀中頃のかわらけ溜り2ヶ所等の遺構が発見された。また、中世遺構の下層からは須恵器をはじめとする古代の土器類が若干量出土していることも注目される。

13 大倉幕府跡（No.253）

市域の東部、県道金沢・鎌倉線の北側にあたる大倉幕府跡の一角に位置する。平成9年6月に個人専用住宅建て替えについての事前相談がなされた。住宅の基礎工事部分は、その掘削深度が既存住宅の基

礎の深さを超えるものではないため埋蔵文化財への影響はないものと判断されたが、敷地東側の現況道路の拡幅・後退部分については、今後ガス及び上・下水道等の各種ライフライン管が埋設される予定であり、それらの埋設にともなう掘削が埋蔵文化財へ影響を及ぼすことが避けられないものと判断されたため、道路の拡幅・後退部分について発掘調査を実施することとなった。工事に際して必要となる文化財保護法の手続きを行い、平成9年12月15日から12月26日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、合計3面の遺構面が確認され、各遺構面上において柱穴等の遺構を発見した。調査面積が非常に少ないのでなかわらず、土器・陶磁器類を主体とする多量の遺物が出土しており、このことは大倉幕府跡の一角という調査地点の性格によるものと考えられる。

14 倉久保遺跡（No.226）

かつて『鎌倉市史』考古編に紹介されたことでも著名な山崎横穴墓群の西側に位置する。平成9年12月に既存の個人専用住宅に係る防災工事を実施したいとの事前相談があり、擁壁の築造を内容とする計画であったため現地踏査を実施したところ、工事施工範囲内に横穴墓1基の存在している現状が確認された。個人専用住宅に係る防災工事という工事の性格上、設計変更等が不可能であるため、文化財保護法の手続きを行い、平成10年1月7日から1月10日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、玄室の前面部分はその大半が既に消滅していたものの、高棺座を有する玄室構造の横穴墓であることが確認されるとともに、玄室の床面直上において完形の須恵器フラスコ形提瓶1個を発見することができた。

15 横小路周辺遺跡（No.259）

鎌倉宮の南東にあたり、かつての二階堂大路の西側に位置する。平成9年11月に専用住宅の建築確認申請があり、基礎の構築される地盤の柱状改良および敷地の一部を切り下げて車庫を建設する内容の計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下40cm以下に遺構面が確認された。このため、設計変更を含め、事業者と協議したが設計変更等が不可能とのことであり、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、必要となる文化財保護法の手続きを行い、平成10年1月14日から発掘調査を開始し途中、降雪・降雨によって調査期間を1週間程度延長せざるを得ない状況を経て3月7日に現地での調査を完了した。

調査の結果、合計3面にわたる中世遺構面を検出し、礎石建物跡、掘立柱建物跡及び井戸跡等の多数の遺構が確認された。出土遺物では和鏡が非常に良好な状態で発見されたことが特筆される。また調査の最終段階で、中世遺構群の下層からは比較的まとまった量の弥生土器が出土し、部分的に竪穴住居址の痕跡の一部とみられる焼土も確認された。このことから現地表下170cm以下における弥生時代遺構群の存在が高い確率で予想されたが、工事計画の掘削深度に規制されて調査を実施するには至らなかった。

16 瑞泉寺周辺遺跡（No.338）

史跡永福寺跡の堀池南隅から瑞泉寺に向かう紅葉ヶ谷のなかの南向きに開く谷戸最奥部に位置する。平成8年に縄塚が発見された丘陵尾根部の東側山裾にあたる。平成10年1月に鋼管杭打ち工法の基礎構造による個人専用住宅の建設について事前相談があり、試掘調査を実施したところ地表下40cm以下にかわらけ溜り状を呈する遺構が確認され、さらに下位にも遺物包含層が確認された。このため設計変更を含め、事業者と協議したが設計変更等が不可能とのことであり、工事の実施により遺構の損傷が避けら

れないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、平成10年3月9日から発掘調査に着手した。

17 西方寺跡（No.219）

中世都市鎌倉を取り巻く、いわゆる鎌倉七口と呼ばれる切り通しの一つ、極楽寺坂の途中、東側に位置する。紫陽花の花でよく知られる成就院とは斜め向かいの位置関係になる。また敷地の東側には鎌倉市指定有形文化財の西方寺址石塔群が所在している。平成9年12月に現況道路面から4m程高い地盤を切り下げて車庫及び擁壁を建設する工事について事前相談があり、試掘調査を実施したところ地表下50cm以下に中世遺物包含層及び遺構面が確認され、現計画どおりの建築工事による遺構の損傷が避けられず、文化財保護法の手続きを行い、平成10年3月9日から発掘調査に着手した。

18 海蔵寺旧境内遺跡（No.299）

史跡仮坂の北側に隣接する地点に位置する。平成9年2月に個人専用住宅建築の事前相談があり、建築計画のなかに地下室の建築が含まれるものであったため試掘調査を実施したところ、地表下260cm以下に埋蔵文化財の存在が確認された。このため設計変更を含め事業者と協議したが限られた敷地内に建築する住宅であり、住宅内部の空間利用にあってもできる限り間取りを多く確保したいという事業主の意向が強く、現計画どおりの建築工事による遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い発掘調査の実施を前提とした協議を数回にわたって行った。これ以降、建築主側で若干の計画変更等が生じ、建築確認申請の再申請がなされ、また発掘調査実施に際して必要となる土留め工事の工法検討等に多くの時間を要し、ようやく平成10年3月12日から発掘調査に着手することができた。

平成9年度発掘調査地点一覧

No.	遺跡名	所在地	調査原因	種別	面積	調査期間
1	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	御成町123番5	店舗併用住宅	都市	46.40m ²	H9.03.10 ～05.20
2	北条時房・顯時邸跡 (No.278)	雪ノ下一丁目273番4	店舗併用住宅	城館	94.82m ²	H9.03.12 ～06.19
3	宝蓮寺跡 (No.374)	佐助二丁目897番11	個人専用住宅	社寺	63.20m ²	H9.03.17 ～05.21
4	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町二丁目5番8	店舗併用住宅	都市	182.00m ²	H9.04.24 ～07.15
5	積善遺跡 (No.440)	十二所字積善952番8	個人専用住宅 (車庫造成)	社寺	29.28m ²	H9.05.08 ～06.12
6	淨妙寺旧境内遺跡 (No.408)	淨明寺三丁目115番2	個人専用住宅 (車庫造成)	社寺	31.08m ²	H9.05.12 ～06.13
7	長勝寺遺跡 (No.313)	材木座二丁目2168番3	個人専用住宅	社寺	26.25m ²	H9.06.16 ～07.01
8	大倉幕府北遺跡 (No.193)	西御門二丁目803番17	個人専用住宅 (車庫造成)	都市	35.58m ²	H9.07.01 ～07.04
9	政所跡 (No.247)	雪ノ下三丁目970番2外	個人専用住宅	官衙	80.06m ²	H9.07.14 ～08.06
10	台山遺跡 (No.29)	台字西ノ台1733番3外	個人専用住宅	集落	94.00m ²	H9.07.14 ～08.12
11	玉綱城跡 (No.63)	城廻字清水小路673番10	個人専用住宅 (車庫造成)	城跡	38.50m ²	H9.08.18 ～08.28

No.	遺 跡 名	所 在 地	調査原因	種 別	面 積	調査期間
12	長谷小路周辺遺跡 (No.236)	長谷一丁目33番3外	店舗併用住宅	都 市	51.30m ²	H9.09.08 ~10.01
13	大倉幕府跡 (No.253)	雪ノ下三丁目651番8外	個人専用住宅	官 衛	14.94m ²	H9.12.15 ~12.26
14	倉久保遺跡 (No.226)	山崎字富士塚868番82	個人専用住宅	横穴墓	10.00m ²	H10.1.07 ~1.10
15	横小路周辺遺跡 (No.259)	二階堂字横小路93番11 の一部	個人専用住宅 (車庫造成)	都 市	142.38m ²	H10.1.14 ~3.07
16	瑞泉寺周辺遺跡 (No.338)	二階堂字紅葉谷653番3	個人専用住宅	社 寺	63.76m ²	H10.3.09 ~3.26
17	西方寺跡 (No.219)	極楽寺二丁目18番外	個人専用住宅 (車庫造成)	社 寺	118.48m ²	H10.3.09 ~5.15
18	海藏寺旧境内遺跡 (No.299)	扇ガ谷四丁目632番2外	個人専用住宅 (地 下 室)	社 寺	67.28m ²	H10.3.12 ~4.16

本誌所収の平成8年度発掘調査地点一覧

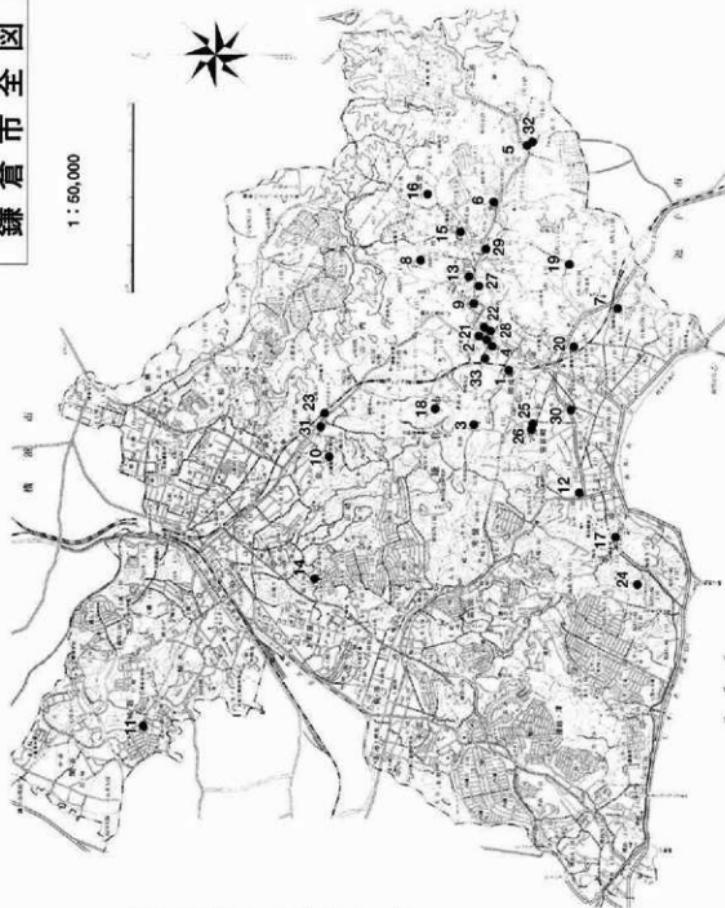
(調査実施順)

No.	遺 跡 名	所 在 地	調査原因	種 別	面 積	調査期間
19	名越ヶ谷遺跡 (No.231)	大町四丁目1736番2外	個人専用住宅 (車庫造成)	都 市	182.00m ²	H8.02.15 ～07.01
20	米町遺跡 (No.245)	大町二丁目391番1	店舗併用住宅	都 市	140.00m ²	H8.03.19 ～07.01
21	北条時房・頼時邸跡 (No.278)	雪ノ下一丁目272番	店舗併用住宅	城 館	110.00m ²	H8.04.15 ～07.22
22	北条小町邸跡 (No.282)	雪ノ下一丁目370番1	店舗併用住宅	城 館	68.00m ²	H8.04.22 ～05.14
23	円覚寺旧境内遺跡 (No.434)	山ノ内字瑞鹿山509番1 の一部	個人専用住宅	社 寺	59.52m ²	H8.05.24 ～07.13
24	極楽寺旧境内遺跡 (No.291)	極楽寺三丁目348番2	個人専用住宅	社 寺	30.45m ²	H8.06.17 ～08.06
25	佐助ヶ谷遺跡 (No.203)	佐助一丁目450番24	個人専用住宅	都 市	80.06m ²	H8.05.20 ～08.05
26	佐助ヶ谷遺跡 (No.203)	佐助一丁目450番25、27	個人専用住宅	都 市	61.56m ²	H8.06.10 ～08.05
27	大倉幕府周辺遺跡群 (No.49)	雪ノ下四丁目620番5	共同住宅併用 個人専用住宅	都 市	126.29m ²	H8.08.01 ～12.05
28	北条小町邸跡 (No.282)	雪ノ下一丁目369番1	店舗併用住宅	城 館	45.43m ²	H8.08.12 ～10.11

No.	遺 跡 名	所 在 地	調査原因	種 別	面 積	調査期間
29	横小路周辺遺跡 (No.259)	雪ノ下五丁目557番1	個人専用住宅 (二世帯)	都 市	18.00m ²	H8.09.06 ～09.20
30	長谷小路周辺遺跡 (No.236)	由比ガ浜三丁目228番2 の一部外2	診療所併用 住宅	都 市	11.45m ²	H8.10.28 ～11.19
31	円覚寺門前遺跡 (No.287)	山ノ内字藤源治951番2	個人専用住宅	都 市	63.62m ²	H8.11.06 ～11.29
32	積善遺跡 (No.440)	十二所字積善952番6	個人専用住宅 (車庫造成)	都 市	12.00m ²	H8.11.28 ～9.1.10
33	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町二丁目28番3、5	店舗併用住宅	都 市	9.13m ²	H8.12.21 ～9.1.27

鎌倉市全図

1:50,000



平成9年度の緊急救援拠点
本部救援の平成8年救援拠点(1~19)
※道路名は一覧表参照

な ごえ が やつ い せき
名越ヶ谷遺跡 (No.231)

大町四丁目1736番2外

例　　言

1. 本報は、神奈川県鎌倉市大町四丁目1736番2外に所在する個人住宅地下式車庫造成に伴う、国庫補助事業発掘調査の報告である。

2. 発掘調査は鎌倉市教育委員会が、平成8年2月15日から同年5月18日にかけて実地した。調査対象面積は182m²である。

3. 調査にあたっては以下のとおり体制を編成して行った。

調査主任　田代郁夫（東国歴史考古学研究所長）

調査員　繼 実、浜野洋一、土屋浩美（以上、東国歴史考古学研究所研究員）

調査補助員　梅本信之、村上和久、渡辺王夫、高橋健一郎、遠藤雅一、岩崎卓治、町井俊逸、橋本勝正、安田信夫、上田求実、根本 公、森かおり、本田 礼、安田ヒデ、青木綾子、成田サキ、荒井ソノ、蒲谷山利子、龜山千恵子、山田純子、高井和彦

調査協力者　柴崎英輔、出川清次、沼上三代治、吉本修三、藤枝正義、岸 親男、渡辺久夫、池田義春、照井三喜、千葉盛男、高井真一郎、田口康雄（以上、社団法人 鎌倉市シルバー人材センター）、奥寺章典

4. 本報作成にあたっては、資料整理および遺物実測・トレースを宗茎秀明、遠藤雅一、宗茎富貴子、深尾義子、小野和代、馬瀬直子、笠原さやか、牛追こまち、浜田美智子、大坪聖子が行ったうえ、遺構関係を遠藤雅一が、遺物関係を宗茎富貴子がそれぞれ執筆し、まとめは調査関係者討議の上、宗茎秀明、遠藤雅一、宗茎富貴子が共同責任執筆した。編集は宗茎富貴子がおこなった。

5. 本報に使用した写真は、遺構を上田求実が、遺物を馬瀬直子と笠原さやかが撮影した。

6. 発見されたピットの詳細は本編後掲のピット一覧表を、また、出土遺物の詳細については遺物観察表を参照されたい。

7. 掃図中のスクリーントーンは、被熱痕を示す。

8. 発掘調査及び本報作成に際し、下記の方々よりご協力・ご教示を賜った。記して深く感謝いたします。

（敬称略、順不同）

手塚直樹、馬瀬和雄、木材美代治、菊川 泉、汐見一夫（鎌倉考古学研究所）

桜井準也（慶應義塾大学）

9. 本調査における出土遺物、図面、写真などは鎌倉市教育委員会が保管している。

本文 目 次

第一章 遺跡地の歴史と地理的環境	5
第二章 調査の経過と概要	9
第三章 基本層序	11
第四章 発見された遺構と遺物	12
第1節 第5面	12
第2節 第4面	15
第3節 第3面	28
第4節 第2面	42
第5節 第1面	47
第五章まとめ	56

挿 図 目 次

図1 遺跡位置図(1)	6	図24 第4面土壤2出土遺物	23
図2 遺跡位置図(2)	7	図25 第4面土壤3	23
図3 調査区壁面上層堆積図	10	図26 第4面土壤3出土遺物	23
図4 基本層序模式図	11	図27 第4面石組炉1	24
図5 第5面全測図	12	図28 第4面ピット2・11・29・45・50 出土遺物	25
図6 第5面板囲い建物1	13	図29 第4面下出土遺物(1)	26
図7 第5面井戸1	13	図30 第4面下出土遺物(2)	27
図8 第5面土壤1	14	図31 第3面全測図(1)	29~30
図9 第5面土壤1出土遺物	14	図32 第3面全測図(2)	31
図10 第5面ピット20・22・37出土遺物	14	図33 第3面土壙2・3	32
図11 第5面下出土遺物	14	図34 第3面土壙3出土遺物	33
図12 第4面全測図	15	図35 第3面掘立柱建物1、塚1・2・3	33
図13 第4面掘立柱建物1	16	図36 第3面掘立柱建物1出土遺物	33
図14 第4面掘立柱建物1出土遺物	16	図37 第3面炉1、石組炉1	34
図15 第4面基壇1	16	図38 第3面炉1出土遺物	35
図16 第4面横1	16	図39 第3面通路状遺構出土遺物	35
図17 第4面土壤1	17	図40 第3面ピット64・81・128出土遺物	36
図18 第4面土壤1出土遺物(1)	18	図41 第3面下出土遺物(1)	37
図19 第4面土壤1出土遺物(2)	19	図42 第3面下出土遺物(2)	38
図20 第4面土壤1出土遺物(3)	20	図43 第3面下出土遺物(3)	39
図21 第4面土壤1出土遺物(4)	21	図44 第3面下出土遺物(4)	40
図22 第4面土壤1出土遺物(5)	22	図45 第3面下出土遺物(5)	41
図23 第4面土壤2	23		

図46 第2面全測図	42
図47 第2面土壙1・2	43
図48 第2面土壙1出土遺物	43
図49 第2面土壙3	44
図50 第2面土壙3出土遺物	44
図51 第2面下出土遺物(1)	45
図52 第2面下出土遺物(2)	46
図53 第1面全測図	48
図54 第1面下造成状況(1)	49
図55 第1面下造成状況(2)	50
図56 第1面下かわらけ溜まり	51
図57 第1面下かわらけ溜まり出土遺物	52
図58 第1面下出土遺物(1)	54
図59 第1面下出土遺物(2)	55
図60 第1面上出土遺物	55
図61 遺構変遷図	57

表 目 次

表1 第5面ピット一覧表(1)～(2)	60～61
表2 第4面ピット一覧表(1)～(2)	62～63
表3 第3面ピット一覧表(1)～(3)	64～66
表4 遺物観察表(1)～(15)	67～81

写真図版目次

図版1 a. 調査地点を上空から望む	c. 第3面水滴出土状況
b. 調査区西壁土層堆積状況	d. 第3面石組炉1(東から)
c. 調査区東壁土層堆積状況	85
図版2 a. 第5面全景(南から)	a. 第2面全景(東から)
b. 第5面板開い建物1(東から)	b. 第1面構成地業状況(南から)
c. 第5面板開い建物1内遺物出土状況	c. かわらけ溜り1
d. 第5面井戸1(西から)	86
図版3 a. 第4面全景(南から)	かわらけ
b. 第4面基壇1(東から)	90
c. 第4面柵1(南から)	常滑、舶載磁器
図版4 a. 第3面全景(西から)	91
b. 第3面土壙3(北から)	図版8 a. 白磁水注
	b. 銅製灯明台
	c. 銅製水滴と水滴容器
	92
	図版9 木製品
	93

第一章 遺跡地の歴史と地理的環境

調査地のある鎌倉市大町四丁目1736番2外は、中世において、現在の鎌倉市の東南部から逗子市にかけての広大な地域を漠然と名越と称していた旧名越地区内に包括される。現在でも名越切通の東側（逗子市）に東名越、西名越の地名が見られる。

鎌倉側の旧名越地区内には大きな谷戸が二つあり、その一つである山王ヶ谷、釈迦堂口、黄金矢倉等の大小の支谷からなる名越大谷のほぼ中央部に遺跡地は位置する。ここは名越切通から西方の大町へと流れ下る逆川が作り出した谷戸の中でも、北の釈迦堂切通しへ向かう道と谷奥から名越切通しに向かう道とが分岐する地点にある。釈迦堂切通しに向かえば、釈迦堂ヶ谷から武藏国六浦莊、あるいは大倉へと続く六浦道に、また名越切通しに向かえば現在の逗子市久木に至る。これらの道は、名越大谷の南方を東西に走る大町大路から、名越坂の切通しを経て三浦郡へと通じる道と共に、当時重要な交通路であったと考えられる。本遺跡の北側、釈迦堂口東北側の平地は北条時政名越山莊（名越亭）と推定され、ここからは蔵骨器と思われる青磁の花卉文大鉢（元末明初の龍泉窯系天童寺手青磁）が1点、篇蓮弁文鉢が2点出土している。時政以来、名越亭付近は名越坂切通し方面の防御拠点として重要な位置を占め、谷戸内の各支谷には名越北条氏の居館の他にも、多くの御家人が居住していたと考えられる。本遺跡地も三善善信邸推定地（名越文庫推定地）にあたる¹⁰。

この他、谷戸内には多くの寺院のあったことが『吾妻鏡』や『鎌倉廃寺事典』¹¹等から読みとれる。本遺跡地の西側にある花ヶ谷は、「華谷」とも書かれ、貞享2年（1685）刊行の『新編鎌倉志』は「花ヶ谷は佐竹屋敷の東方にあり、この谷に昔恩寺と云寺あり、足利直冬の菩提寺なり」と記す。また、「としよりの話」¹²「材木座」の項では「もくそく寺名越の花ヶ谷の手前東側で、山の裾が川っぷちまでのびているところに『山の神』があって、その下にちっちゃい寺があった」とあり、谷戸内には押宗寺院の恩寺や目足（木束・無垢息）寺が存在していたとする。また、鶴岡八幡宮の祭祀職である供僧二十五坊の補任記『鶴岡八幡宮寺供僧次第』には、「宝蔵坊（海光院）招贊」の項に、彼が西門の別當であったこと、ついで「名越花谷」とあり、西門寺なる寺が花ヶ谷にあった事を示唆しているようである¹³。

釈迦堂口は、『吾妻鏡』嘉禄元年（1225）六月十三日条に見える北条泰時が父義時の一周年忌供養のために建立した釈迦堂（大歳御堂）にちなむ。谷奥には普川国師定窟を中心とする釈迦堂ヶ谷やぐら群があったが、1965年の宅地造成工事でその多くが破壊された。また同地ではその後、1965年3月から4月にかけて釈迦堂推定地の一部が発掘調査され、鎌倉期から室町期にかけての建築遺構が発見されている¹⁴。

山王谷の由来は『吾妻鏡』に出てくる「名越山王堂」がこのあたりにあったと言われることの他に、山王社とよばれる小さな社が谷奥にあったこと等による¹⁵。1986年6月から試掘調査を含めて4回にわたり実施された大町三丁目1340他地点¹⁶の調査では、谷あいの平場から室町時代の墓跡や石垣、鎌倉時代後期の岩窟等が発見されている。

上記以外にも本遺跡地周辺の支谷内には、釈迦堂口の上にある「唐糸やぐら」や「日月やぐら」を含むやぐら群、ムジナヶ谷の浅間山南山腹やぐら群、谷戸の最奥部（大町七丁目）の「黄金やぐら」を含むやぐら群が分布している。

さて、前述のように本遺跡地は三善善信邸（名越文庫）推定地にあるが、三善善信邸について、善信（康信）が執事であった間注所の記録が善信邸に収納されていたことから名越文庫（三善文庫）とも



1. 本調査地点（伝・三普善信邸）
2. 名越ヶ谷遺跡（太町三丁目1367地点）
諸倉市教育委員会編1986「諸倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」
3. 聖迦堂口やぐら群
4. 伝・北条時政邸
5. 花ヶ谷・慈恩寺跡
6. 山王堂遺跡
山王堂跡発掘調査1990「名越・山王堂跡発掘調査報告書」

図1 遺跡位置図(1)

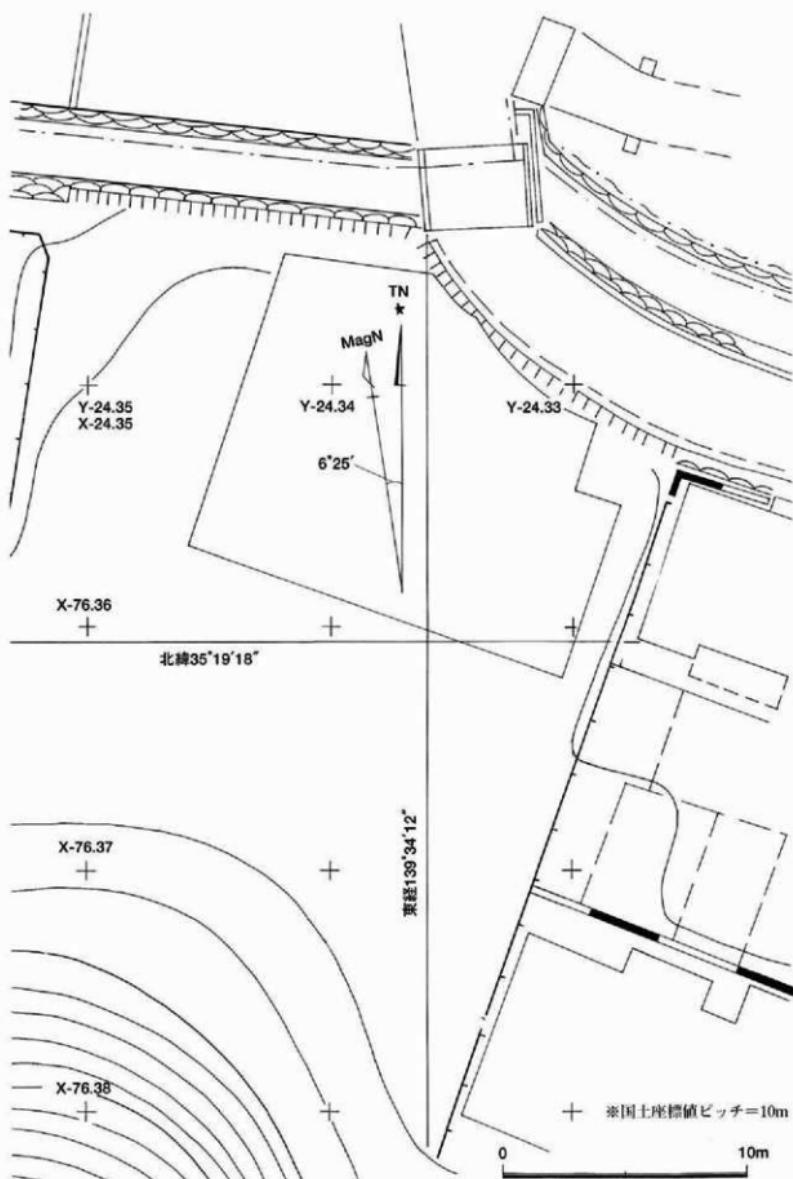


図2 遺跡位置図(2)

呼ばれており⁽⁹⁾、承元二年（1208）正月十六日と承元三年（1209）正月二十五日に焼失した事が『吾妻鏡』に記されている⁽¹⁰⁾。モメンジ・円応寺に関する文献資料は見つけ出す事ができなかった。往時の様子や寺史については不明である。円応寺については、現在、山ノ内小袋坂に臨済宗建長寺派・円応寺があるが、本遺跡地との関係は不明である。地元ではモメンジ、円応寺等と呼称されていることが『鎌倉史蹟めぐり会』の実地踏査記録に残されている⁽¹¹⁾。

註

- (1) 鎌倉文化研究会編 1972 「第18回東勝寺名越山王堂長勝寺他」『鎌倉－鎌倉史蹟めぐり会記録－』 25～32頁
- (2) 貢達人・川副武胤 1980 『鎌倉廃寺事典』 有隣堂刊
- (3) 鎌倉市教育委員会編 1971 「としよりのはなし」 鎌倉市文化財資料第7集 99頁
- (4) 三浦勝男 1986 「鎌倉の地名考（八）」『鎌倉52』 24～28頁
- (5) 三浦勝男 1986 「鎌倉の地名考（七）」『鎌倉51』 51～53頁
- (6) 前掲 『鎌倉廃寺事典』「山王堂」の項 42頁
- (7) 山王堂跡発掘調査団編 1990 『名越・山王堂跡発掘調査報告書』
- (8) 白井永二編 1992 『鎌倉事典』「名越文庫」の項 227頁
- (9) 『吾妻鏡』「承元二年正月十六日。午刻。門社所入道名越家滅亡。而於彼家後面之山際構文庫。將軍家御文堵、（中略）累代文書等納置之處。悉以為灰墟。善信聞之。愁歎之餘。落涙數行。心神為惆然。仍入訪之。」
- (10) 註（1）と同じ

第二章 調査の経過と概要

建設予定地内において鎌倉市教育委員会による試掘調査が実地され、4枚の泥岩版築面に伴って出土した遺物から、この地点に鎌倉時代から室町時代初頭までの中世前半期の生活の痕跡が遺されていることが明らかにされた。これを受けて、造成工事の及ぶ現地表下250cmまでの発掘調査が必要であると判断され、本調査を1996年2月15日に開始した。現地表下40~50cmまでの近現代の耕作土を重機により除去した後、破碎したかわらけを多量に含む繊まり、粘性共に強い暗褐色粘質土の中世遺物包含層以下に対して人力による生活面検出作業を行った。調査では調査深度限界までに5枚の泥岩版築面を確認した。幸い近世以降の擾乱は受けなくて、各土層は整然と堆積しており、各版築面とそれに伴う遺構から出土した遺物を層位的に把握することが出来た。調査は5月28日に図面と写真による記録保存作業を終え、翌29日に機材の撤収を行い、現地調査を無事終了した。以下に各生活面の出土遺構の概要を記す。

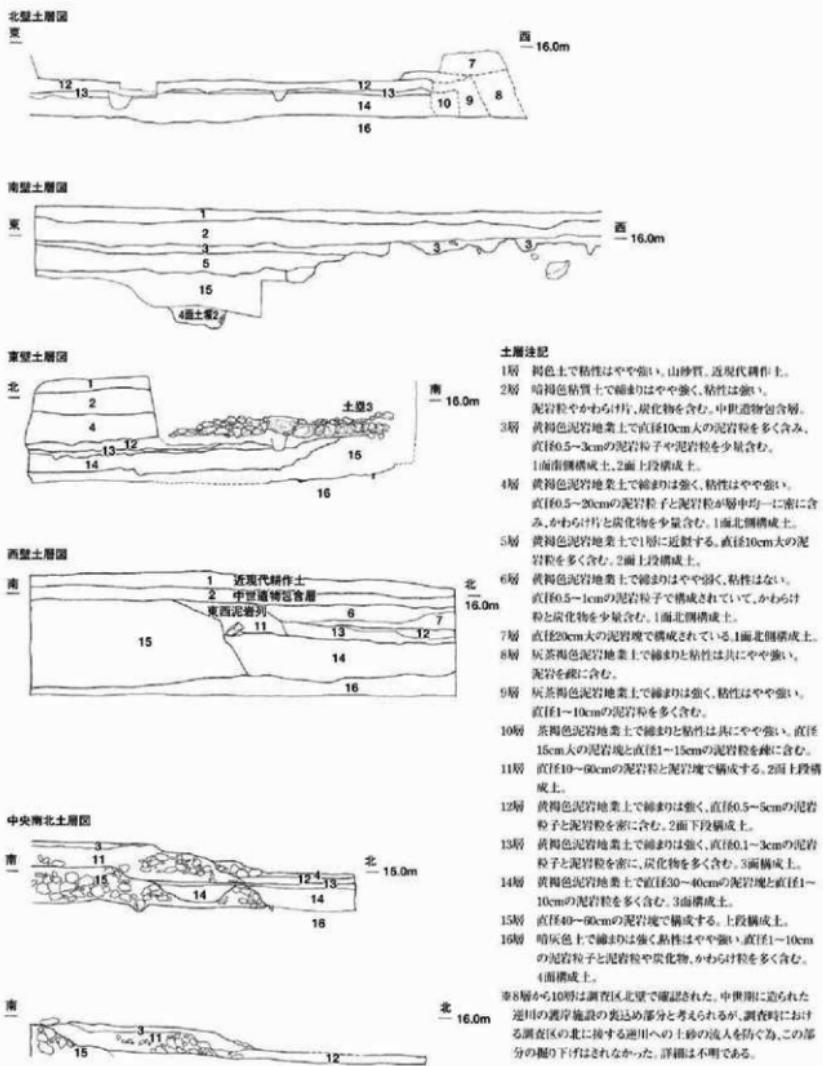
第1面 海抜15.90m~15.60m。南西部から北東方向に向かってやや低くなる緩斜面を呈する。面上には礎石やピット等の建物を推定させる遺構を発見できなかった。第1面下において、第1面の構築を目的とした造成を確認した。ここからは土地の造営行為に伴う地鎮めと考えられるかわらけ溜まりを6カ所発見した。

第2面 東西方向に長さ1290cmにわたる無調整の泥岩を主体とした野積み様の石垣を発見した。この石垣によって、調査区内は南側部分の上段部と北側の下段部とに分割され、雑段状の区画を形成する。海抜は上段部では15.80m~15.70m、下段部では14.95m。上段部、下段部共に面上からは礎石やピットなどの建物を推定させる遺構は発見されていない。下段部からは3基の土壙を発見した。

第3面 第2面の東西石垣の肩部から南側へ320cm程後退した地点で、東西方向に土壙を発見した。これと共に調査区東側で発見した南北方向の土壙とによって区画が造られ、区画内からは1×1間以上の掘立柱建物1棟、塀と思われる3列のピット列、ピット140口、炉1基、石組炉1基を発見した。海抜は上段部で15.50m、下段部で14.80m~14.50m。

第4面 海抜14.00m~13.80m。第3面の構成土である厚さ90cmの黄褐色泥岩地業層を除去した後、確認した水分を多く含んだ青灰色土をベースとする版築地業面を第4面とした。北側に向かって低く、緩く傾斜する平坦面である。また、第3面発見の東西土壙は第4面に構築されたものであることを確認した。遺構は1×5間以上の掘立柱建物1棟とピット63口、基壇1基、柵1列、土壙3基、石組炉1基を発見した。

第5面 海抜13.90m~13.70m。第4面下10~20cm下で、直径0.5~3cmの破碎泥岩粒を密に含む、やや青緑色に変色した黄褐色粘質土による版築地業面。ここからはピット57口、板圍い建物1棟、井戸1基、土壙1基を発見した。



0 4m

図3 調査区壁面土層堆積図

第三章 基本層序 (図3・4)



図4 基本層序模式図

調査の最終面である5面までこの様相は変わらない。

第5面以下については、第5面から掘り込まれた井戸壁面でも地山層を確認できず、また北側道路での水道工事でも道路面下1メートルほどまで地業層と考えられる破碎泥岩の堆積層が確認されており、第5面より下層においても遺構面が存在する可能性は高いものと考えられる。

第四章 発見された遺構と遺物

調査では5枚の版築地業面（生活面）が確認され、それぞれの生活面からは多くの遺構と遺物が発見されている。生活面は確認した順に上層より番号を付けた。すなわち最上層の地業面が第1面である。

本文で使用する数字のうち、遺構の標高は海拔数値であり、メートル単位で示し、遺構の規模と遺物の記述にはセンチを単位としている。以下、時期の古い第5面から詳述する。

第1節 第5面（図5）

直径0.5~3cmの破碎泥岩粒を密に含む、やや青緑色に変色した黄褐色粘質土による版築地業面である。海拔高は13.85m~13.70m。

発見した遺構は、板塀い建物1棟、井戸1基、土壙1基、ピット56口である。板塀い建物と井戸が隣り合うように位置し、その周囲にピットが確認された。ピットには明瞭な並びを認めることができなかった。

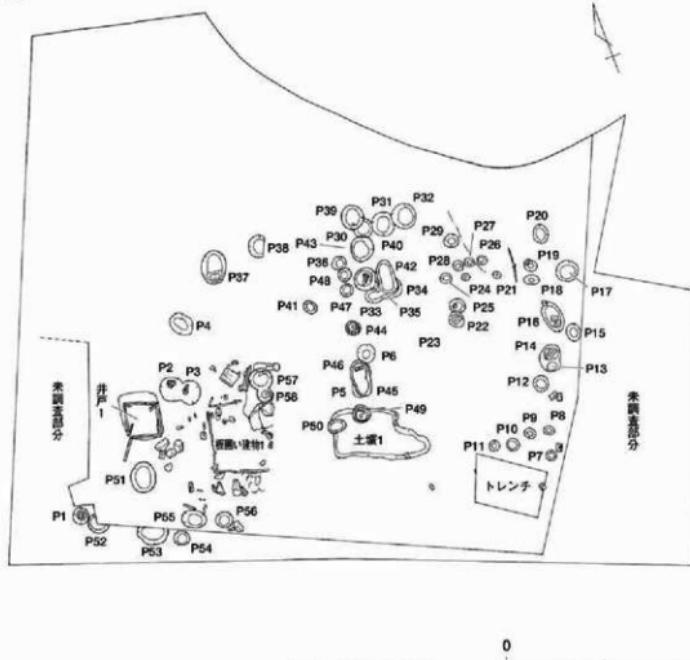


図5 第5面全測図

板囲い建物1 (図6)

調査区南西寄りに位置している。建物は南側と西側の横板と、北側に東西に並ぶ角杭によって三方を囲まれた東西方向150cm以上、南北方向200cm以上の規模を持つ。東西軸方位はN-72.5°-E。壁板は東西、南北方向共に1段分、最下段部分のみの遺存であった。建物内には床構造の基礎をなすと考えられる礎板が位置する。壁板部材は幅11cm、厚さ2cm、長さ90cmである。また、西側の壁板の北端残存部から10cm程の間をおいて、東西方向の壁板が見られる。この壁板は、部材は前述のものと同規模であるが、28cmの間隔で2ヶ所、 3×3 cm大の角杭が壁板を挟むように南北両側から打ち込まれている。これら3方向の板壁に囲まれた部屋は東西150cm以上、南北135cmの規模である。ただし、これより北側、50cmの間隔をおいて発見した壁板、角杭の並び方から、この板囲い建物が複数の部屋から構成されていたと考えられる。北東部には建物の三和土と考えられる泥岩による地業がなされている。三和土上には南北に並ぶ3枚の礎板が位置し、その間隔は北側から芯まで50cmと80cmで、南端の礎板から壁板までは70cmを測る。中央の礎板は12×12cm、厚さ8cmの板を2枚重ねている。

本遺構中より出土した遺物はなかった。



図6 第5面 板囲い建物1

井戸1 (図7)

調査区の南西に位置している。東側に発見された板囲い建物に伴う井戸と考えられる。掘り方平面形は井戸枠に合わせた長方形で、断面形は箱型、掘り込みはほぼ垂直である。東西軸方位はN-72.5°-E。掘り方の規模は東西82cm、南北100cmである。やや南寄りに据えられた側板は東西方向、南北方向共に内寸で65cmの平面方形をなし、確認面からの深さは113cm(底面標高12.77m)を測る。井戸底は平らで水溜めの施設は見られない。井戸枠は、「方形横柱支柱型」。

横桟は1段のみ遺存し、 5×5 cm大の角材を使用。はぞ組を基本とするが、西側の横桟は先端部の下側

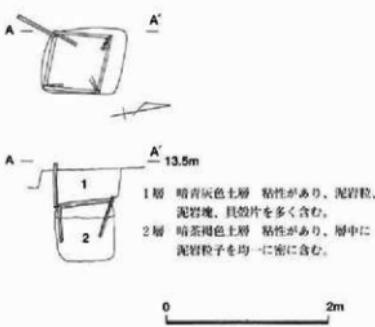


図7 第5面井戸1

約4cmを半割りにして、下側の支柱を固定している。支柱は残存数値で長さ50cmを測る4~5cm大の角材を使用している。側板は発見できなかった。

井戸枠内覆土は2層に大別できる。上層は泥岩粒、泥岩塊、貝殻片を全体に多く含む粘性のある暗青灰色土。下層は泥岩粒子を全体に均一に含んだ粘質暗茶褐色土である。

本遺構より出土した遺物はない。

土壤1(図8)

調査区中央やや南寄りに位置する。本来は2基であったと思われるが、土層の観察からは明確な新旧関係を把握できなかった。平面形は東西137cm、南北は93cmの長方形と、東西60cm、南北72cmのやや歪んだ梢円形を呈する。東西軸方位はN-75°-E。断面形は浅い皿形で底面は平坦である。確認面からの深さは16cmを測る。

覆土は水気を帯びた泥岩粒を均一に含む青黑色粘質土で、他の第5面検出遺構の覆土と同様である。

図9-1は常滑の甕の口縁部片。6型式くらいか。2は釘。3は「元祐通寶」。4はさらら状の竹製品。断面は長方形を呈する。

その他のピット

第5面で発見したピットは57口である。規模は大小様々で、検出面からの深さもまちまちである。各ピットの規模・覆土等については後掲のピット一覧表を参照されたい。

図10-1はピット20より出土した常滑の6型式の甕口縁部片。2はピット22より出土した伊勢系土鍋の口縁部片。口縁部外面周辺は煤が付着する。3~4はピット37より出土した。3はかわらけ。4は白磁口元皿。

第5面下出土遺物

図11-1は手づくねかわらけ、2は糸切りかわらけである。

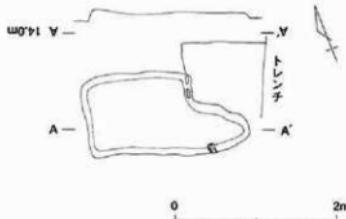


図8 第5面土壤1

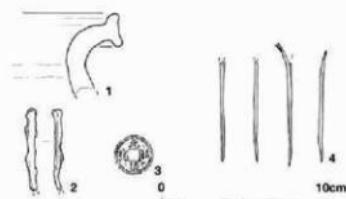


図9 第5面土壤1出土遺物

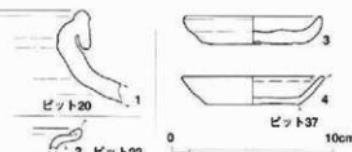


図10 第5面ピット20・22・37出土遺物

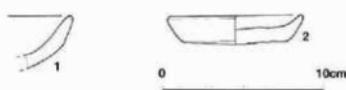


図11 第5面下出土遺物

第2節 第4面(図12)

水分を多く含んだやや軟弱な青灰色土上面の版築面を第4面として確認した。海拔高は14.00m~13.75m。上層からの掘り込みは見られず遺構の遺存状況は良い。

調査区の北部を中心に 1×5 間以上の掘立柱建物1棟、基壇1基と橋1列、ピット63口を、調査区の南部に土壤3基と石組が1基を発見した。また、この第4面後半期に調査区南部に泥岩を積み上げた土塁が構築される。

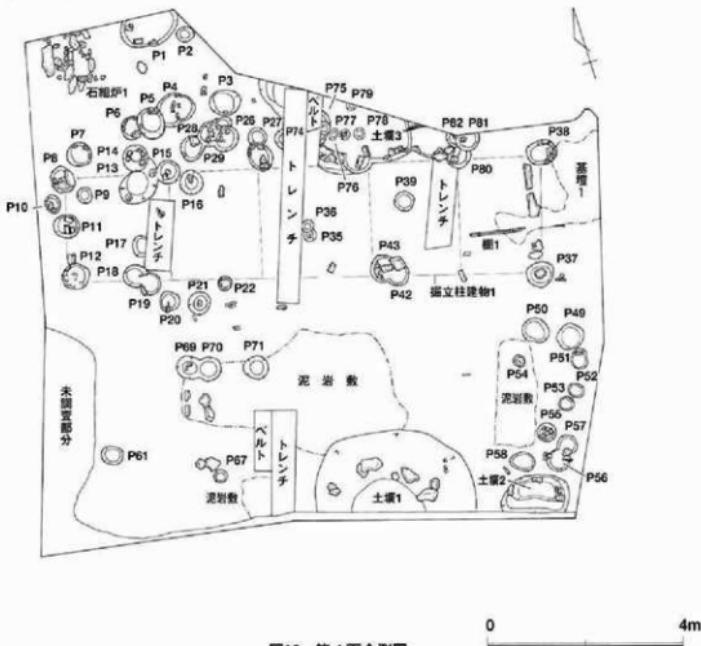


図12 第4面全測図

掘立柱建物1 (ピット8・12・15・25・37・38・42・43・80・83)(図13)

調査区北側に位置する。調査区外の東西へ広がる可能性のある 5×1 間以上の規模をもつ。確認した10口のピットのうち、4口には礎板、1口には伊豆石の礎石が遺存し、3口には底部中央に泥岩塊が据えられている。ピットの平面形は円形から稍円形を呈し、各ピットの規模は径44~62cm、深さは18~34cmである。また、ピットの発見されなかった柱位置からは、礎板の遺存を確認している。東西軸方位はN-70°-E。各ピット間の柱間は東西2m、南北2m10cmである。

図14-1はピット37より出土したかわらけ。胎土はとても砂っぽく、体部外面中位に強い稜を持ち口唇は強く外反する。

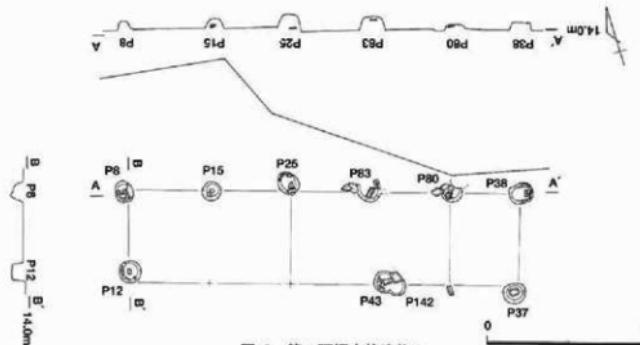


図13 第4面掘立柱建物1

基壇1と柵1(図15・16)

調査区北東隅に位置する。東西方向に並べられた柵と泥岩による建物基壇を発見した。

基壇は直径30~40cmの泥岩塊を外端で直線で構成するように並べ、上面はほぼ水平、平面形は方形をなす。調査区内での確認範囲は東西142cm、南北206cmである。基壇上からは礎板や、建物の基礎部材の出土はなかった。

この基壇の南西に柵が東西に配置される。東西軸方位はN-70°-E。板材は長さ10cm、厚さ0.8cm、幅11.5cmの比較的薄いものを2枚合わせに並べ、その間に厚さ0.8cm、幅5.5cmの杭状の薄板を芯々で47cmの間隔で2カ所打ち込んでいる。杭状の薄板は東側のもので残存部の長さ37cm、下から約7cm程を逆V字形に尖らせ26cm地中に打ち込んでいる。

本遺構より出土した図示可能な遺物はなかった。

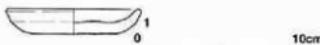


図14 第4面掘立柱建物1出土遺物

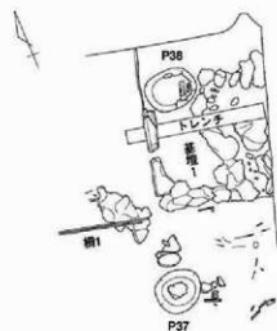


図15 第4面基壇1



図16 第4面柵1

土壤1 (図17)

調査区中央南端に位置する。南半分は調査区外へ延びる。平面形は円形、もしくは梢円形を呈すると思われ、断面形は腫形。規模は東西330cm、南北145cm以上である。深さは確認面から102cmを測る。東西方位はN-62°-E。

覆土は暗灰色土から暗青灰色土で8層に分層できた。上層から中層までは、各々20~30cmの厚さではほぼ水平に、下層では各々12~18cmの厚さで緩やかなレンズ状に堆積する。全体に締まり弱く、水気を帯びて粘性が強い。

覆土中からは、少量の炭化物、貝殻片の他に漆器・箸・折敷等の木製品、礎板を含む建築部材、それに本来の形が不明瞭な木片が大量に出土した。図18~22は土壤1より出土した木製品のまとまった資料である。

図18-1~9はかわらけ。小型、大型ともにおおむね粉質胎土である。1、2はやや背高で輪型に近い。大型かわらけは体部内面中位にやや強い棱を持ち外反する。10~11は常滑の堀口縁部片。12は山茶碗窓系こね鉢。体部内面中位付近から下方は使用による磨滅痕が残る。13は亀山の堀肩部。内外面とともに二次焼成を受け器表はハゼており、成形痕および調整痕は不明であるが、口縁部下は格子目叩きがわずかに残る。

図18-14~図22-50までが木製品。図示できた以外にも多くの箸をはじめとする木製飲食具、建築部材がある。14~18は草履芯。14の全長は15.6cm、15が16.7cmを測り、通常、出土する物よりやや小振りなことから、子供用の草履芯の可能性が考えられる。14は小孔の下に切り込み痕が、15は切り込み痕と鼻緒痕が残る。また、前部の小孔より0.5cmほど下方に別の小孔が穿たれている。17は切り込み痕が残る。19は速歯下駄。前縁の上方に指圧痕が残る。また、右横縁には鼻緒を押さえる木釘が残る。

図18-20は横櫛。1cmあたりの歯数は12枚であった。21は調度類に装飾用として用いられた雲形。表裏面に黒色漆が塗布される。22は調度類の脚部。全面に黒色漆が塗布されている。23は六弁花の飾り。表面にのみ黒色漆が塗布され、中央には止め金具用の孔が穿たれる。また、孔の周辺は止め金による圧痕で周囲より薄くなっている。24は形代。表面には刃物痕が残る。25は漆刷毛。先端部に黒色漆が残る。26は斎巾。上方は二枚に裂かれる。27~28は漆器椀。27は黒色漆を塗布後、赤色漆による手描きの草花文が描かれる。錐状工具による掻き取りで葉脈を表現している。28は全面に黒色漆が塗布される。高台内には錐状工具による掻き傷文様が残る。29は漆器皿。黒色漆を塗布後、赤色漆による手描きの桐と笹竹文が描かれる。

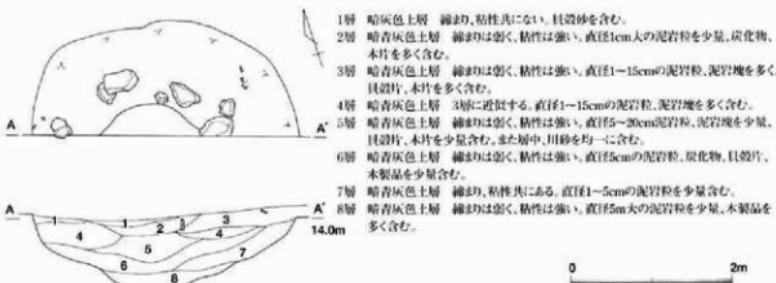


図17 第4面土壤1

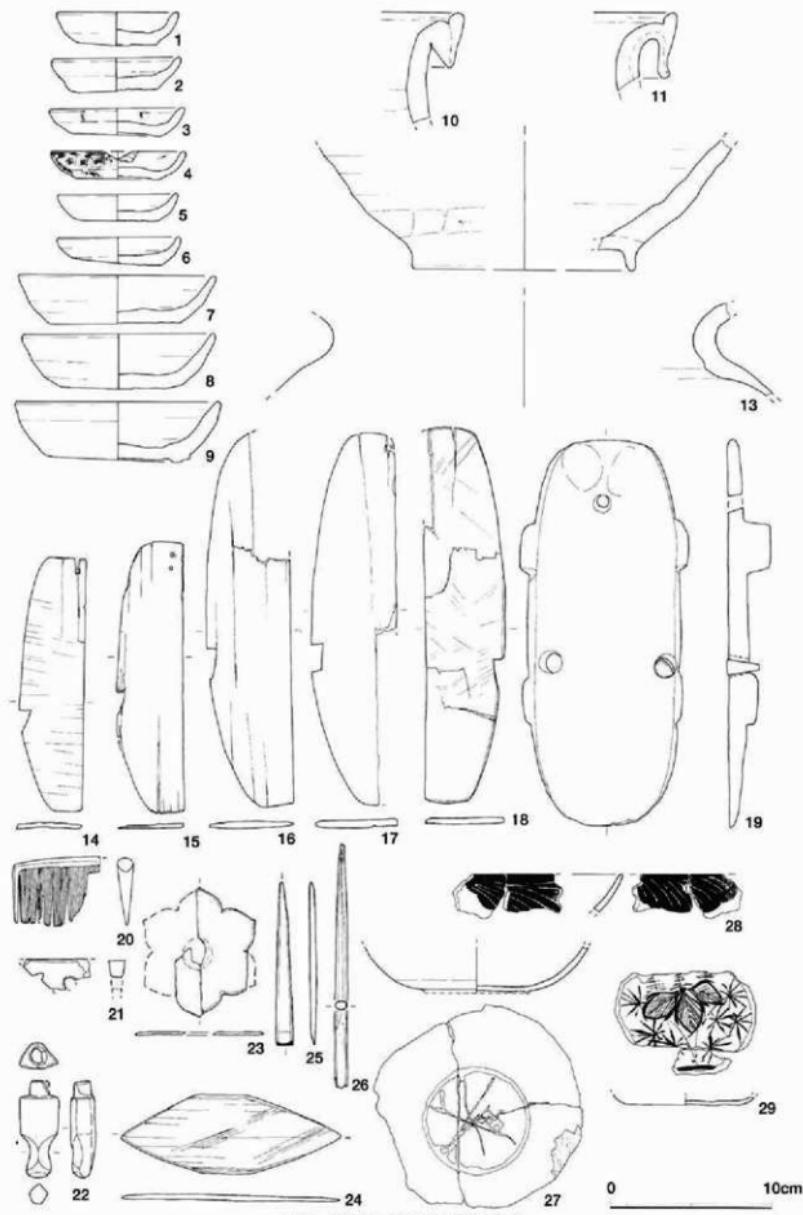


图18 第4面土壤1出土遗物(1)

図19-1は木製容器の蓋と思われる。中央に2ヶ所、下位に1ヶ所小孔が穿たれる。中央付近の1孔には桜の皮が残っている。また、下位の小孔は左側面に向けて貫通している。2~4はヘラ。5~7は全長が30cmを越え、下端のみに削りが入れられる。菜箸と思われる。7は中央部にフシがあったと思われるが、フシを取り除いた後に丁寧に調整している。

図19-8~図22-50は箸。本遺構より出土した箸は、左右側面が割り取られたまで何ら調整を行わなければならないものと、左右側面が面取り風に丁寧に調整されるものとに大きく分類できる。さらに後者の左右側面が面取り風に調整されるものには上下両端に削りが入るものと上端もしくは下端のどちらか一端にのみ削りが入るものとに分類できる。図19-10は下端にのみ削りが入り、上端は割り取りのままであることから製作途中の可能性も考えられる。箸は本遺構より500本以上出土したが、それらはおおむね1~2箇所に「折れ」が確認されたが、「折れ」が確認されなかったものは出土本数に対する割合は少ないと言えよう。図示したものは全長を計測できるものに限ったが、最も短いもので16.7cm、最も長いもので28.6cmで、22~23cmのものが一番多く出土している。

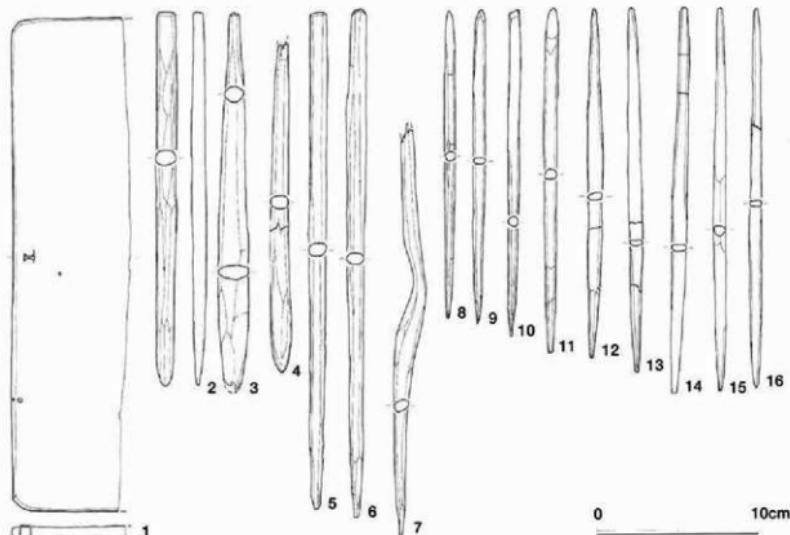


図19 第3面土櫓1出土遺物(2)

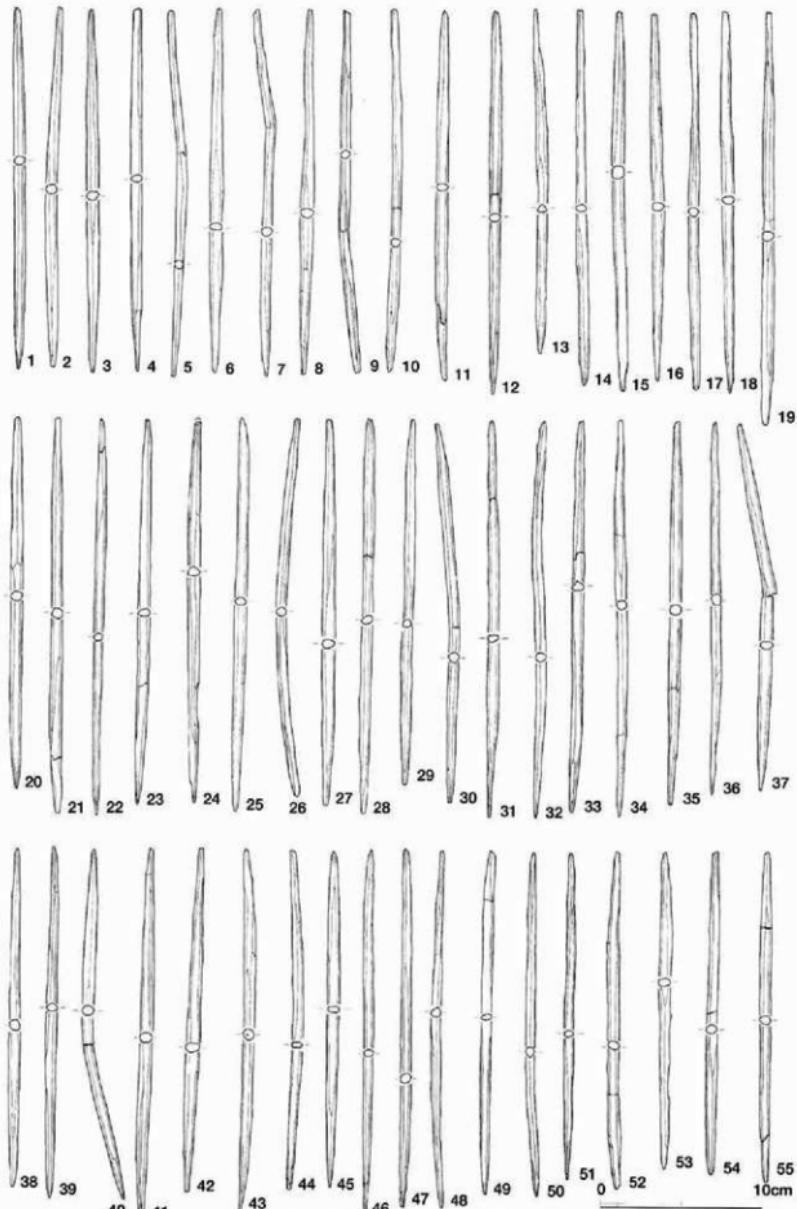


图20 第4面土壤1出土遗物(3)

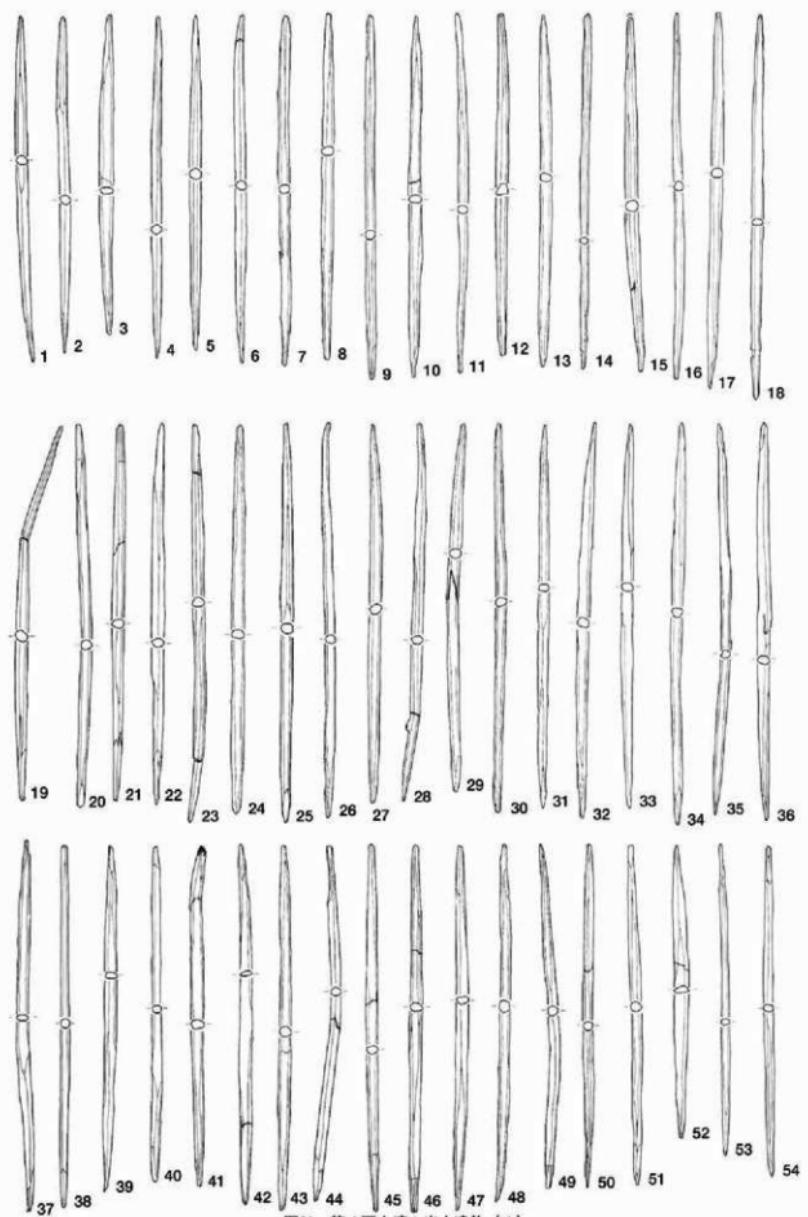


図21 第4面土壌1出土遺物(4)

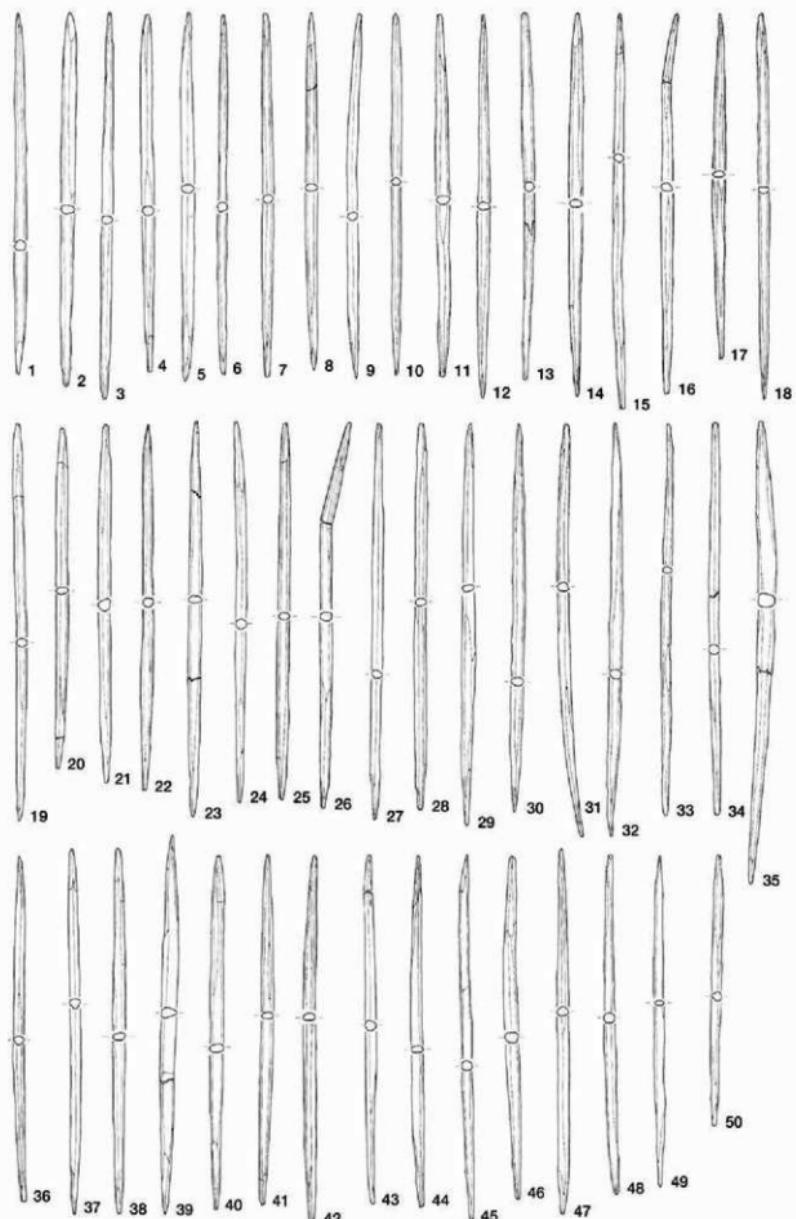
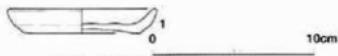
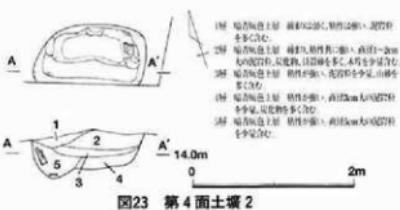
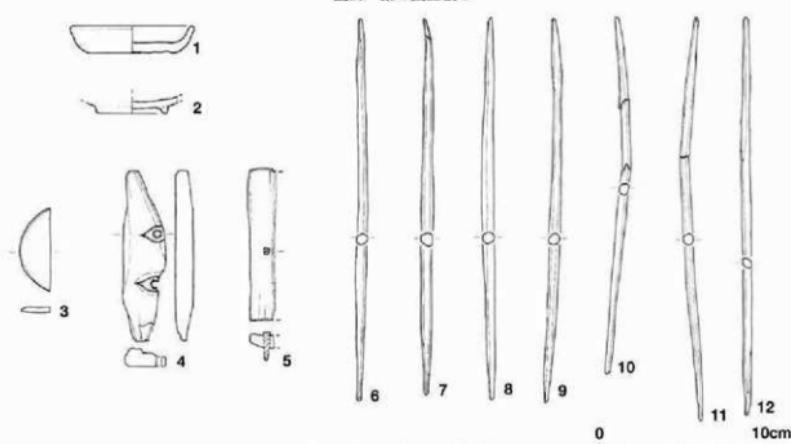
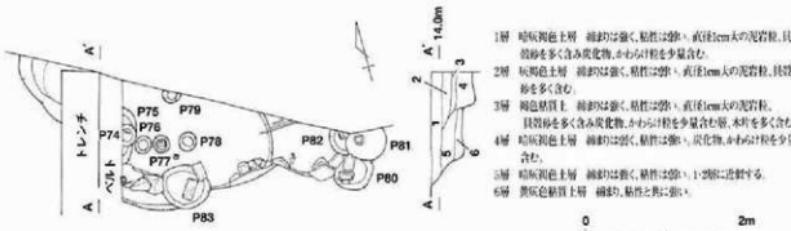


図22 第4面土壤1出土遺物(5)



土壌3(図25)

調査区北側中央に位置する。数基の土壌とピットが切り合っている。遺構の大部分は調査区北側外へ広がる。平面形は円形もしくは指円形、断面形は段を有する皿形を呈する。規模は東西400cm、南北150cm以上、確認面からの深さ50cmを測る。



土壤2(図23)

調査区南東隅に位置する。北側部分のみ確認し、南側は調査区外へ延びる。平面形は円形もしくは指円形を呈すると思われ。断面形は皿形。土壤の規模は東西140cm、南北75cm以上である。底面の深さは確認面から60cmを測る。

覆土は、締まり粘性共に強い暗青灰色土で5層に分層できた。上層の観察から3基以上の土壌が切り合っていたものと考えられる。

図24-1はかわらけ。粉質胎土。背低で器壁は直立気味に立ち上がる。

覆土は6層に分層できた。各層は10~20cmの厚みでほぼ水平に堆積をする。上層は直径1cmの大泥岩粒、貝殻砂を多く、炭化物とかわらけ粒を少量含む締まりの強い粘性の弱い灰褐色土。中層は木片を多く含む褐色粘土質。下層は炭化物とかわらけ粒を少量含む締まりの弱い暗灰褐色土である。

図26-1はかわらけ。弱砂質胎土で器壁は直立気味に立ち上がる。2は早島の碗。3は木製容器の底と思われる。4は人形。表面にのみ横向きの顔が掘り込まれている。裏面は無調整。5は不明木製品。中央付近に木釘が残る。6~12は箸。

石組炉1(図27)

調査区北西隅に位置する。浅い掘り込みの四周に泥岩を据えた炉である。平面形は不整方形、断面形は浅い皿形を呈する。規模は、内寸で東西34cm、南北40cm、確認面からの深さ18.3cmを測る。石組は直径20~30cmの泥岩塊を13個使用して上面をほぼ平坦に構築している。一部の泥岩には赤化、煤の付着が見られる。炉内から火葬骨などは出土していない。

覆土は泥岩粒を密に、炭化物、焼土を多く含む黒色土が充填している。また、東側には東西65cm、南北120cm以上の範囲で黄色粘土の硬化面が認められ、炉に伴う作業面と思われる。

本遺構より出土した遺物はない。

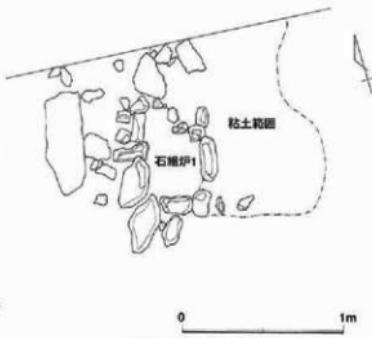


図27 第4面石組炉1

土壙1(調査区土層堆積図)

調査区南部に位置し、東西方向に1220cm確認した。土壙東端は、調査地の南側背後にある丘陵の尾根が張りだした地点に延びる。東側は土壙2によって壊される。西側、南側は調査区外へ延びる。

造築構造は浅い掘り込みに入れた直径40~60cmの泥岩塊を基盤とし、その上に直径20~40cmの泥岩塊を積み上げる。土壙の頂部は、上層における整地により削り取られている。石面や石積み時における石材の配置に明瞭な組み上げ方は認められず、乱雑な組み上げである。

規模は、調査区西側で基底幅540cm以上、上幅350cm以上、残存高は西側で220cmを測る。断面は台形。石面で最も突き出た部分をもってその石積みの勾配(矩方)とすると、63度の傾斜となる。調査区東側では、基底幅340cm以上、上幅185cm以上、残存高80cmを測る。断面は台形。石積みの勾配は(矩方)30度の傾斜となる。東西軸方位はN-64.5°-E。

本遺構より出土した図示可能な遺物はなかった。

その他のピット

第4面に発見したピットは63口であった。各ピットの規模と覆土については後掲のピット一覧表を参照されたい。

図28-1はピット2より出土したかわらけ。砂質胎土で底部が厚い。2はピット11より出土した瓦器碗。体部外面はヘラ削りで調整されるが、中位から上方はヘラ削りの後、指頭による横ナデ調整される。3はピット29より出土した青磁折線鉢。4~6はピット45より出土した。4は青磁蓮弁文碗。5は「太

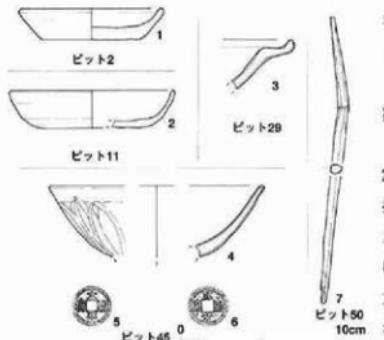


図28 第4面ピット2・11・29・45・50出土遺物
 面に磨滅痕はない。19は渥美の壺破片。20は常
 灰～暗灰色緻密土。器表は茶褐色を呈する。口
 い。21は山茶窓窓系こね鉢。磨滅痕はない。22
 部片。27は青磁碗。施釉は厚めで、釉下に砂粒
 29は青磁蓮弁文折線小鉢。釉色は暗オリーブ色
 ともに軽い二次焼成を受ける。32は青白磁壺類
 状陶製品。34は釣。35は「天祐通寶」、36は「好
 をノミ状工具で削り落としている。38は黒色粘
 は柵目叩き痕が残る。四面の全面と凸面の一部
 産の砥石。左側面は上方と下方より中央付近ま
 ら再成形している可能性がある。41は黄味淡紅
 が残る。42は淡緑色凝灰岩の上野産砥石。裏面
 による調整痕が残る。

図30-1～4は漆器皿。1は全面に黒色漆が塗布されるが、遺存部に文様は残っていない。2は口径7.6cmとやや小振りの皿である。表裏面ともに黒色漆が塗布され、内面は赤色漆による手描きの細かい筆竹文が描かれる。3は外底部を除き黒色漆が塗布され、見込みに赤色漆による手描きの楓文が描かれる。高台は剥落したものと思われる。4は全面に黒色漆が塗布され、見込みに赤色漆による手描きの酢漿草が描かれる。5～6は漆器椀。5は外底面を除いて黒色漆が塗布され、内外面ともに赤色漆によるスタンプの梅文が押印される。高台は剥落したものと思われる。6は外底面を除き、黒色漆が塗布され、内外面に赤色漆による手描きの文様が描かれる。見込みに描かれているのは菊花を半円で囲んだ3つの菊花文と流水文、外面に描かれているのと同じ鳥文が内面にもわずかに見られる。高台は剥落している。7は板杓子。8は曲物の蓋と思われる。9～13は箸。12は両先端にのみ削りが入り、中央付近の側面は調整されない。

平通寶」、6は「皇宋通寶」。7はピット50より出土した等。

第4面下出土遺物

図29-30は第4面下より出土した遺物である。図29-1~16はかわらけ。1は砂質胎土の手づくね。指痕は不明瞭でササラ状圧痕が明瞭に残る。小型、大型ともにおおむね弱砂質~砂質胎土。小型かわらけの器壁は内縁気味に立ち上がるものが多い。他方、大型かわらけは直立気味に立ち上がる。11は穿孔かわらけ。17は内外面に黒色漆を塗布した瓦質火鉢。

18は瀬戸の碗型の入子。外底部はヘラ切り。体部内

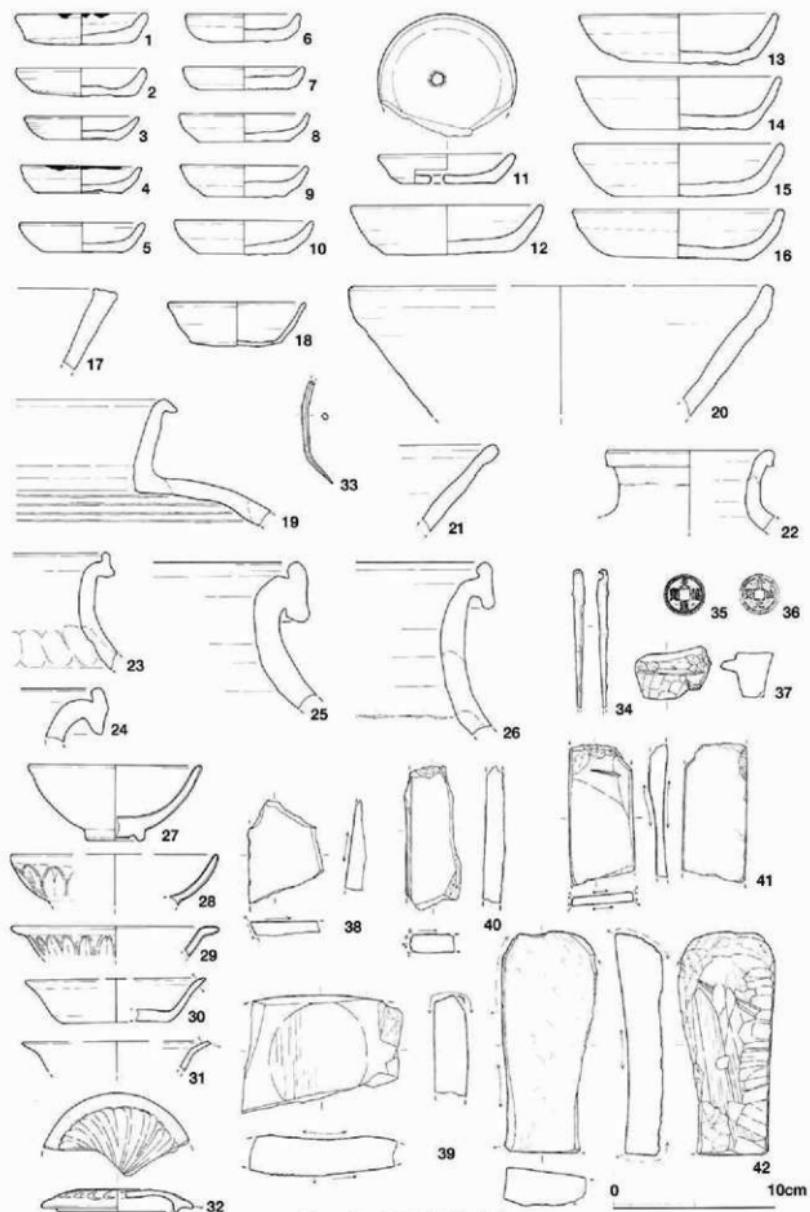


图29 第4面下出土遗物(1)

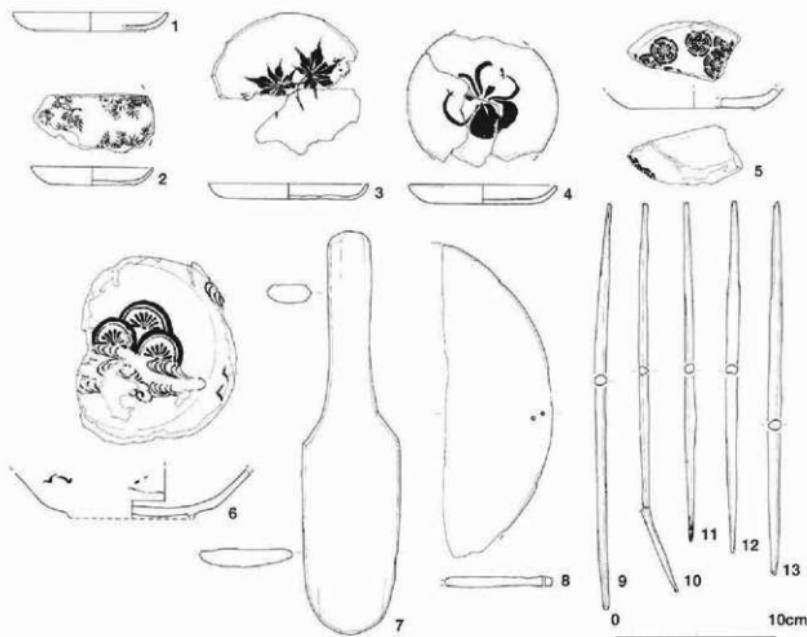


圖30 第4面下出土遺物（2）

第3節 第3面(図31、32)

第4面上に盛り土された厚さ90cmの泥岩地業面が第3面である。第3面は、第4面から引き続き利用される土壠1と第3面で新たに作られる土壠2・3によって、二辺を限られた区画内に、1×1間以上の掘立柱建物1棟、塀と思われる3つのピット列、か1基、石組炉1基、ピット140口が発見された。

土壠1

第4面に引き続き同位置にあるが、土壠北側の生活面更新の地業によって、基底部が埋没する。この生活面の更新によって、相対的に低くなった土壠に対して、嵩上げがなされたのかは後世の削平により不明である。

本遺構より出土した遺物はなかった。

土壠2(図33)

調査区東側に位置する。調査区内において南北560cmにわたって確認した。東側部分が高い段状をなす。南側は調査区外へ延びるが、北端部分は第2面構築の東西石垣によって壊されており、東西方向の緩い傾斜部として残っている。

浅い掘込を基底部として、直径15~30cmの規格性の見られない泥岩塊を3~5段積んでいる。構築は4度にわたる版築の目を残して行われ、慎重な作りである。東西の比高差は残存状況の良い南側で48cmを測る。北端部分は第2面構築の東西石垣によって壊されている。

本遺構より出土した遺物はない。

土壠3(図33)

土壠2を覆うように土壠3に作り替えられる。土壠2の東側の第3面上に、30cmの厚さで黄褐色土に泥岩粒を混入させた上で地業を施し、その上から土壠2を覆うように泥岩を積み上げる。この石積みは、土壠3の中央部に位置するピット89を挟んで、南北で若干の違いを見せる。南側では石面に規格性がないものの28×30cm大から22×16cm大の泥岩を丁寧に並べ、その上に12×16cm大の泥岩を長軸を石面に並行に並べる。他方、北側では44×20、20×10cm大の規格性のない泥岩の長軸を石面に向けて乱雑に2~3段積む。使用する泥岩の調整は難であるが、石積み時に石尻を下位に置き、積み石の重心を奥部へもたせかける工夫がなされる。生活面との比高差は土壠中央で約40cm、石面で最も突き出た部分をもってその石積みの勾配(矩方)とすると、62度の傾斜を持つ。南北軸方位はN-19°-Eである。

図34は土壠3より出土したかわらけ。1、2は弱砂質~粉質胎土。3は粉質胎土。背高で側面觀碗型である。

掘立柱建物1(ピット51・52・53・56・57・77・79・100・123)(図35)

調査区中央部西側に位置する、1×1間以上の規模をもつ。東西軸方位はN-64.5°-E。北側のピット79または123、南側のピット56、57の、南北柱並びがこの建物の東限と考えられ、西側は調査区外へのびる。確認したピットは9口であるが、各々2~3口の切り合いで認められ、短期間に内に建て替えられたものと考えられる。柱間は、ほぼ200cm。平面形は円形から橢円形を呈し、各ピットの規模はピット79が径80cmと大きい他は径30~50cm。ピットの深さは最も深いピット79で35cm、浅いピット77

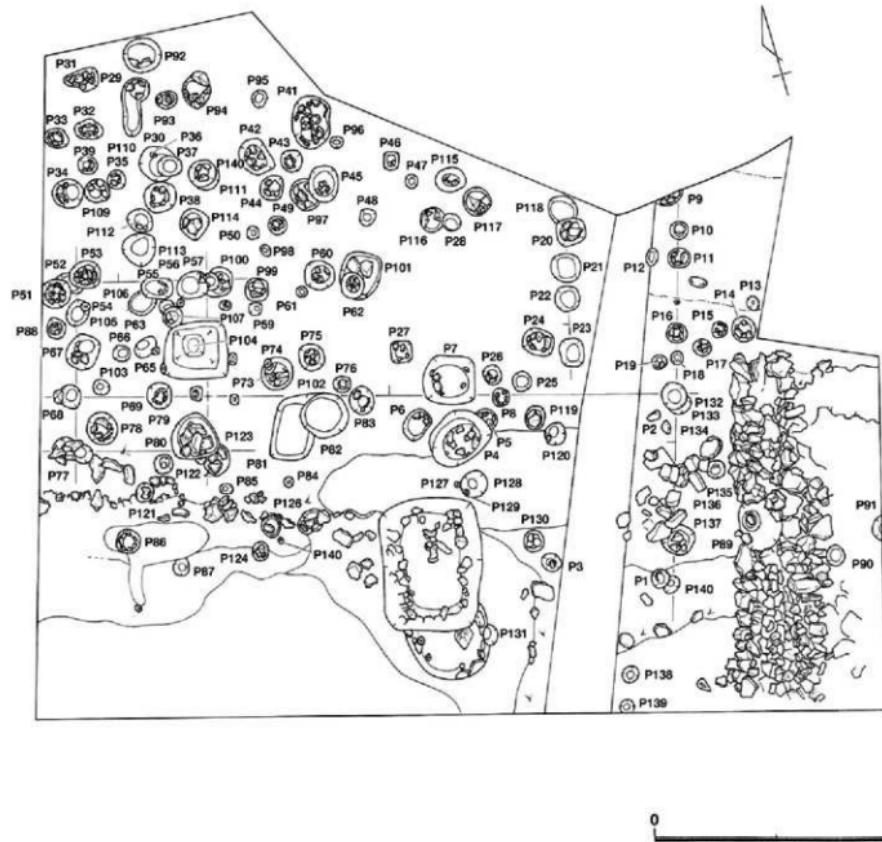


図31 第3面全測図(1)

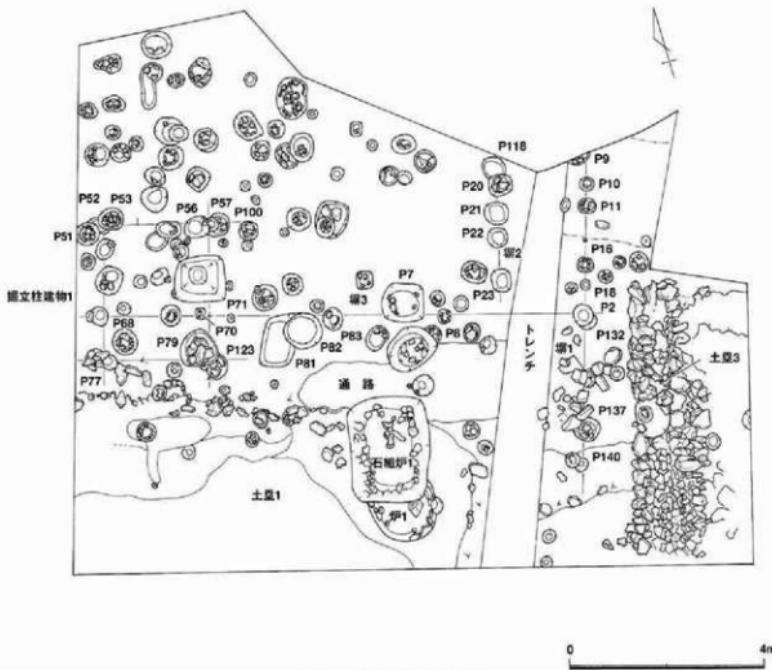


図32 第3面全測図(2)

で12.5cmを割る他は、20~30cmである。

図36-1はピット56より出土した常滑の第6型式の甕。2はピット123より出土した粉質緻密胎土のかわらけ。器壁は薄く、内側氣味に立ち上がる。

図1 (ピット19・10・11・16・132・137・140)(図35)

調査区東側、土塁2の100cm西側に南北方向に並ぶピット列である。南北軸方位はN-19°-E。確認できたピットは8口で、各ピットの規模・平面形は直径32~40mの円形を呈している。ピットの間隔は、ピット132と137の間で約220cmを測り、このピットの両サイドに100cmの間隔をおいてピット140と16が並ぶ。北側ではさらに100cmおいて50cmの間隔で3口（北側からピット19・10・11）が並び、このまま調査区外へのびるものと考えられる。土塁2の方向からの柱間の広い出入り口が跡にあったとは考えにくく、ピット間隔は50cmが基本と思われる。ピットの深さはピット132・137・16では20~29cmを測り、10・11はそれぞれ9.5cmと13cmと浅めである。

図示できる出土遺物はなかった。

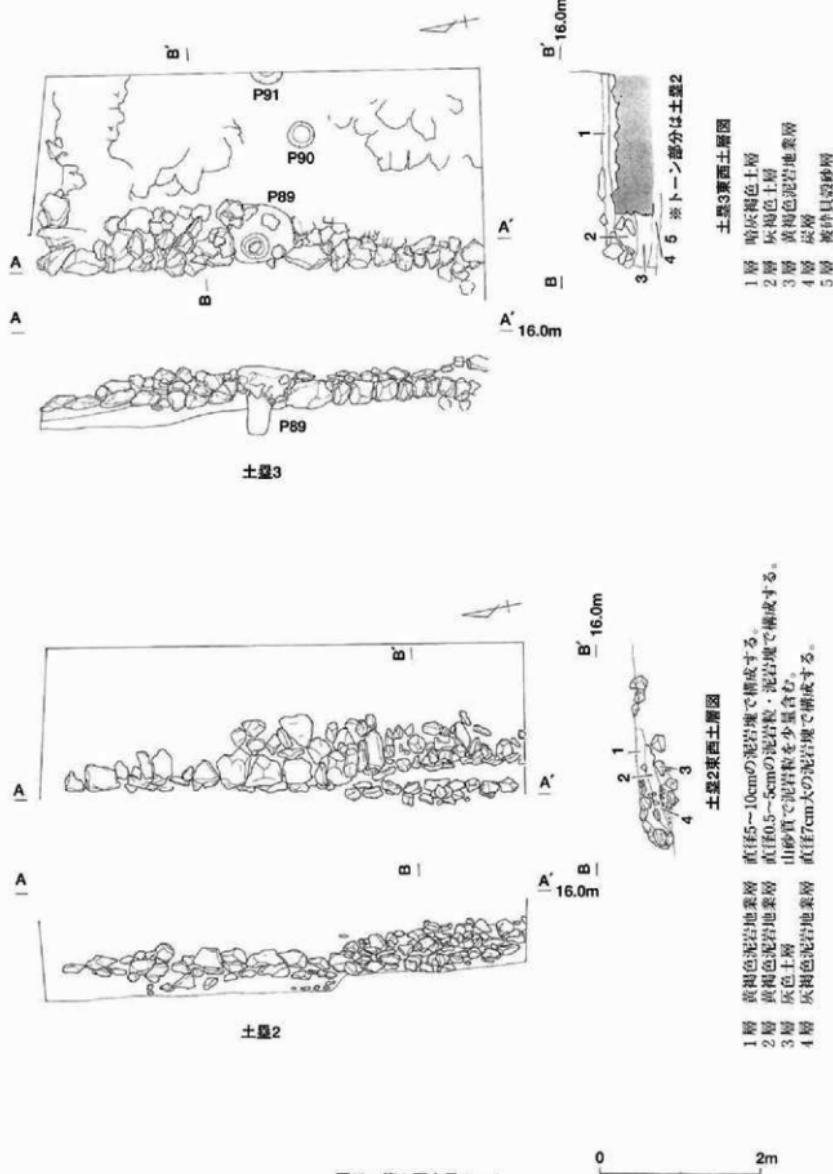


図33 第3面土壌2・3

その他のピット

土星1と土星2・3によって造られた区画内からは、ピット140口を発見している。各ピットの規模、出土遺物、覆土等については後掲の一覧表を参照されたい。

図40-1はピット64より出土したかわらけ。砂質胎土で器壁は薄く、内縁気味に立ち上がる。口唇部の周辺に煤が付着する。2~3はピット81より出土

したかわらけ。弱砂質胎土で器壁は薄く、2はやや外反気味に、3は内縁しながら立ち上がる。4はピット128より出土した常滑小壺の口縁部片。

第3面下出土遺物

図41~68はかわらけ。小型かわらけはおむね弱砂質~弱粉質胎土で器壁薄く、ゆっくり開きながら立ち上がるものが多い。また、54のように粉質胎土で薄手丸深タイプもわずかに混じっている。55~57は中型かわらけ。精良な粉質胎土。背高で、器壁はとても薄く内縁しながら立ち上がる。57は弱砂質胎土で側面觀盤型を呈する。器壁下位に穿孔がある。58~68は大型かわらけ。58~62は弱砂質胎土で器壁は厚く直立気味、もしくはゆっくり開きながら立ち上がる。63~66は弱粉質~粉質胎土。器壁は薄めで内縁気味に立ち上がり、口唇付近で大きく外反している。67~68は混入物の少ない粉質胎土の薄手丸深型。69は軒丸瓦。瓦当の文様は永福寺Ⅰ期の文様を呈するが、胎土は13世紀後半の極楽寺のものと同胎である。

図42-1は古瀬戸前期後半の四耳壺。2は常滑の小壺。3~4は壺。6型式くらいか。5~8は壺口縁部片。5~6は5型式、7は6型式、8は7型式くらいと思われる。9はこね鉢口縁部片。磨滅痕は確認できなかった。10はすり常滑。左右側面は著しく磨滅している。11は山茶碗窯系こね鉢。体部内面下位から内底面にかけて使用による磨減が残る。また、体部内面中位から内底面にかけては煤が付着している。

図43は船載磁器。1は青磁の百合口碗。素地は黒色微砂を混じえる灰褐色粘質密土。釉は不透明な水色を呈し、全体に厚めに施釉される。青磁百合口碗は鎌倉市街地遺跡では、この他に今小路西遺跡（御成小学校内）の北谷3面より出土している。2は青磁劃花蓮弁文碗。体部内面にのみ蓮弁文が施される。体部外面は無文。口唇部と高台周辺は鉄発色する。3~8は青磁蓮弁文碗。9は青磁碗。脇付周辺は露胎だが、一部鉄発色している。見込みには型押しの蓮華文が残る。10は青磁折腰鉢。暗灰緑色を呈する釉は厚めに施釉される。11~13は青磁蓮弁文折縁鉢。いずれも外面に施された蓮弁文はかなり退化し、釉は厚く施釉される。14は青磁双魚文鉢。外面は蓮弁文、見込みは魚文が貼り付けられる。素地は黄味灰白色粘質密土。釉は暗オリーブ色を呈し、厚めに施釉される。15~16は青磁皿。15は内底面に使用によるキズが著しい。16は強い二次焼成を受けハゼで細破片化していた。17は白磁水注。素地は黒色微砂を多く混じえる淡灰色弱粘質密土。釉は青味乳白色を呈し、ごく薄く施釉される。高台上から外底部にかけては露胎。体部の器壁は薄く、口縁は玉縁状になる。注口と紐様の把手との中间2ヶ所に縫耳が付くと思われる。鎌倉市街地遺跡での出土例はない。18は白磁の口元碗。19は白磁口元皿。20~21は白磁型作りの口元碗。内面に20は牡丹文、21は雷文と牡丹文が精緻に施される。22は白磁型作りの皿。見込みに施された牡丹文は20、21の精緻さと比べるとかなり粗雑である。23は白磁型作りの合子の身。

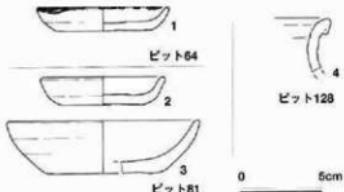


図40 第3面ピット64・81・128出土遺物

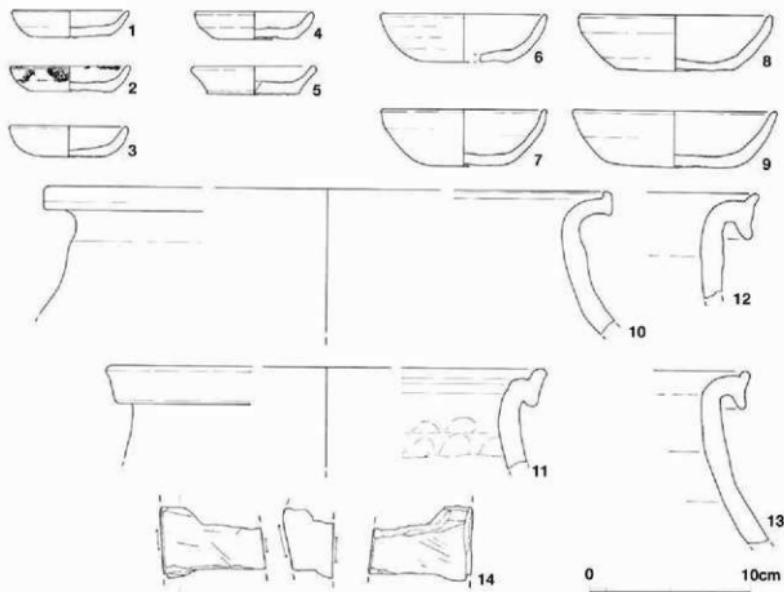


図38 第3面炉1出土遺物

石組炉1（図37）

が1を切ってその北に位置する。平面は隅丸長方形、断面は深めの腫形を呈する。規模は東西162cm、南北217cmで、確認面からの深さ64cmを測る。製造構造は、北東隅に直径14~30cmの無調整の錠倉石（砂質凝灰岩）を4石、北西隅には直径15cm大の同様の錠倉石を2石据える他は、泥岩塊を用いる。石組部分と四周の縁となる泥岩には赤化、煤の付着が見られた。

覆土は、上層に繊まり弱く粘性の強い褐色粘質土、中層に厚さ10cmの粘質化した炭の堆積が見られ、下層に褐色粘質土が厚く堆積する。底面上には、赤化した焼土と山砂混じりの炭が薄く堆積する。底部中央部からは、やや浮いた状態で22×13cm大の伊豆石が1点、常滑洞部片がまとった形で5点出土しているが、特に赤化、煤の付着等は見られなかった。南北軸方位はN-19°-W。

この石組炉1、炉1とともに炉内から火葬骨などは出土していない。

図示できる出土遺物はなかった。

通路状遺構（第3面全測図）

土塁1の北側に東西420cm、南北194cmにわたって細かく破碎された貝殻砂で整地された通路状の硬化面を確認した。堀3との切り合い関係を持っていないため明確ではないが、掘立柱建物にともなって土塁1を南の限界とする敷地内の通路と思われる。

図39-1は砂敷面より出土した「天祐通寶」。

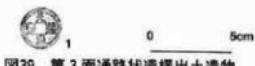


図39 第3面通路状遺構出土遺物



図34 第3面土壙3出土遺物

図2 (ピット20・21・22・23・118) (図35)

塚1の西側150cmに南北方向に並ぶピット列で、
塚1の作り替えと考えられる。南北軸方位はN-
19°-E。北側は調査区外へのびると思われる。各
ピットの規模・平面形は直径50mで円形を呈している。ピットの深さは、ピット20・21・22でそれぞ
れ22~26cmを測り、ピット23・118はそれぞれ19.3cmと14.8cmと浅めである。ピットの間隔は300cmの間に
5口(北側からピット118・20・21・22・23)が不揃いに並んでいる。

図示できる出土遺物はなかった。

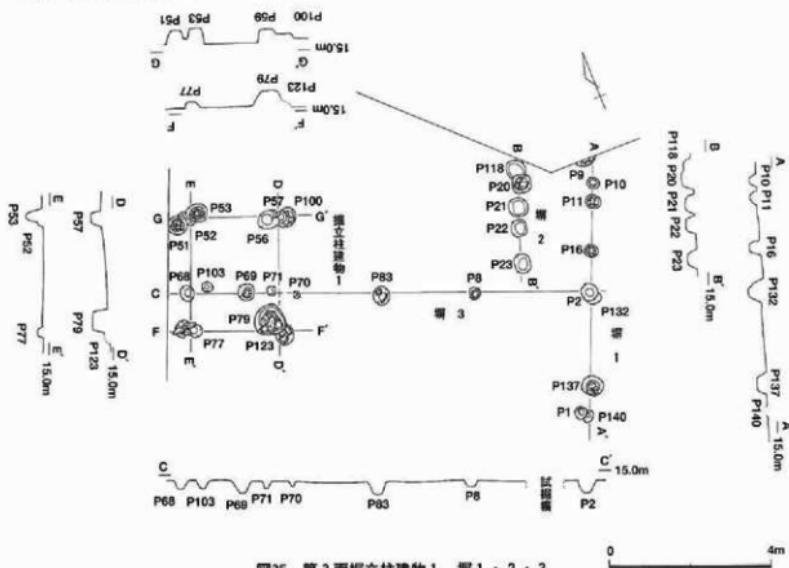


図35 第3面据立柱建物1、塚1・2・3

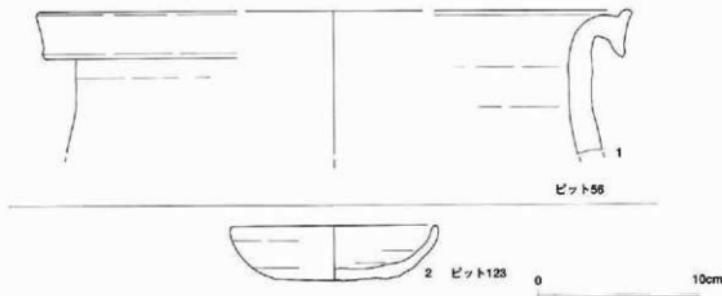


図36 第3面据立柱建物1出土遺物

図3 (ピット2・8・68・69・70・71・63・103) (国35)

土壌1の北側200cmに東西方向に並ぶピット列である。東西軸方位はN-64.5°-E。ピット2がピット列の東限で、塙1と接続する。また南北塙の作り替え後は塙2と接続する。南北塙1と2とは直角に交わる。西側は調査区外へのびる。確認できたピットは8口。各ピットの規模はピット2・8・68・69・83・103の6穴は直径28~46cm、ピット70・71はそれぞれ22cmと18cmとやや小さい。ピットの深さはもっとも深いピット83で31cm、浅いピット8で14.4cmを測る。ピットの間隔は芯々で、北側からピット2と8の間で290cm、8と83の間で230cm、83と71の間で210cmを測る。ピット71の西側に位置する70・69・103・68のピットの間隔は約50~80cmと狭くなる。

これらの塙1・2・3のうち塙1が古く、その遺存中に塙3が付け加えられ、最新の時期に塙2に作り替えられたと思われる。掘立柱建物は、塙3が作られる前に存在したもので、塙3が作られてからは、建物立地はより北へ移動したと考えられる。

図示できる出土遺物はなかった。

炉1 (国37)

調査区中央南側に位置する。後述の石組炉1に北壁を壊されている。平面は楕円形、断面は皿形を呈する。規模は東西130cm、南北122cm以上で、確認面からの深さ55cmを測る。周囲の壁となる盛り土に用いられた泥岩塊には赤化や煤の付着が見られた。

覆土は6層に分層できた。上層から下層までは直径1~6cmの泥岩粒を混じえる褐色弱粘質土が各々、10~20cmの厚みでほぼ水平に堆積する。ただし、底面上には山砂を含む炭が薄く堆積し、底面近くでは炭化物粒子を含む焼土が最大8cm堆積している。南北軸方位はN-16.5°-W。

図38-1~9はかわらけ。1~5の小型かわらけは弱砂質~砂質胎土で器壁はゆっくり開きながら立ち上がる。6~7は口径が10cm台の弱砂質胎土の中型かわらけ。背高で側面規範型を呈する。8~9は大型かわらけ。弱粉質~弱砂質胎土で、器壁はゆっくり開きながら立ち上がる。10~13は常滑の第5~第6型式の甕口縁部片。14は淡紅灰色凝灰岩の天草産砥石。



図37 第3面炉1、石組炉1

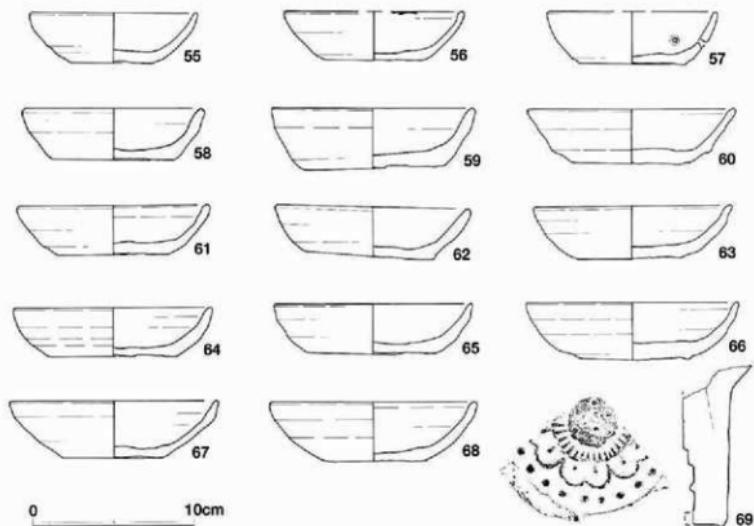
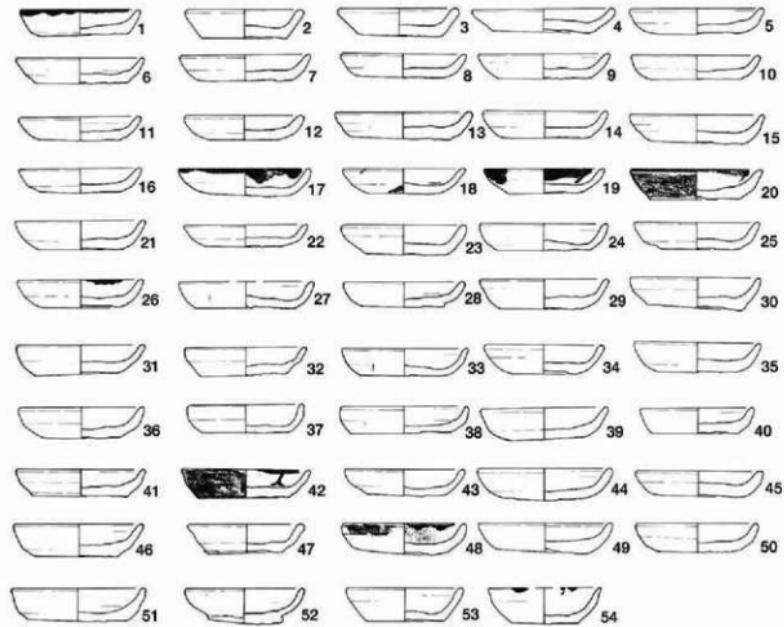


图41 第3面下出土遗物（1）

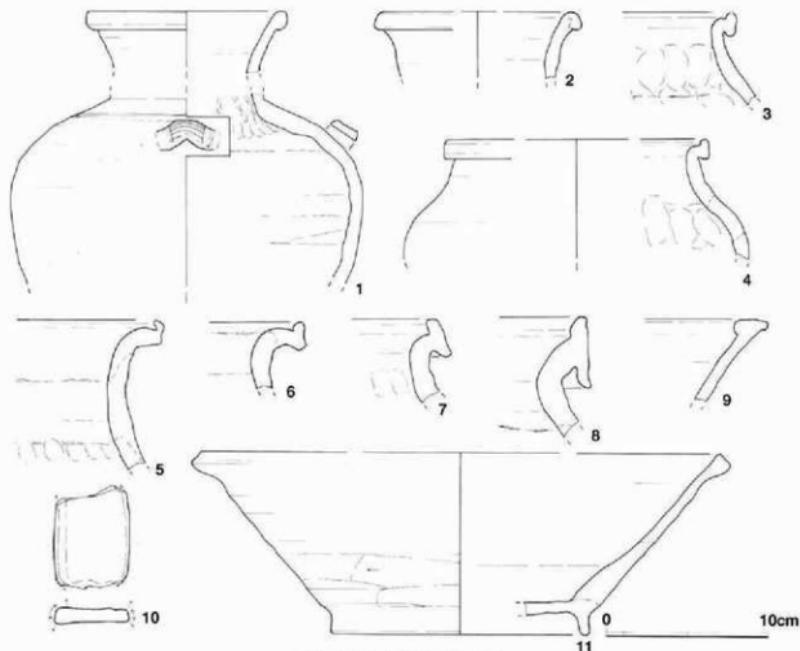


図42 第3面下出土遺物（2）

体部外面中位から外底部にかけては露胎。底部は破損後に、周囲を打ち欠いてきれいに「底抜け」様にしている。

図44-1・2は硯箱に付属すると思われる銅製水滴入れと銅製水滴。1の水滴入れは底板と壁板の2枚の銅版で組み立てた後、壁板下方に4ヶ所の切り込みを入れ、底板をかぶせるように折り曲げて両者をしっかりと固定させている。溶接技術を用いず、簡素な作りだが、外底面に見られる4ヶ所の折り曲げ部は目立たないよう小さくなされ、細部の作りもとても丁寧に仕上げられている。一方、壁板上方は軽く折り曲げられ、花弁を呈する2枚の飾り輪が外れないようにしている。水滴入れの体部外面には文様が施されておらず、また、2枚の飾り輪の位置などを考え合わせると硯箱にこの水滴入れを埋め込んだものと想定できる。2の銅製水滴は底板と壁板は溶接によって貼り合わされ、口縁部は水滴入れ同様、軽く折り曲げられ、玉線状になる。肩部から体部にかけて毛彫による「松喰い鶴」が描かれる。3は銅製と思われる灯明台。燭台との押さえ金具は3本だが、そのうちの1本だけが遺存していた。押さえ金具と灯明台との接合は溶接でないことがわかる。4は銅製と思われる火箸か。5～6は刀子。7は釘。8～20は銭。8は「開元通寶」。背面は「月」、「京」。9は「祥符元寶」。10は「皇宋通寶」。11は「熙寧通寶」。12～14は「元豐通寶」。15～17は「元祐通寶」。18は「紹聖元寶」。19は「聖宋元寶」。20は「大觀通寶」。21～22は笄。21は頂部と下端部周辺はノミ状工具による削り痕が残ることから破損後に再加工したものと思われる。23～25は砥石。23は鳴瀧向田産の淡緑色泥岩の砥石。24は鳴瀧中山産の淡黄色泥岩の砥石。25は天草産の淡紅灰色凝灰岩の砥石である。

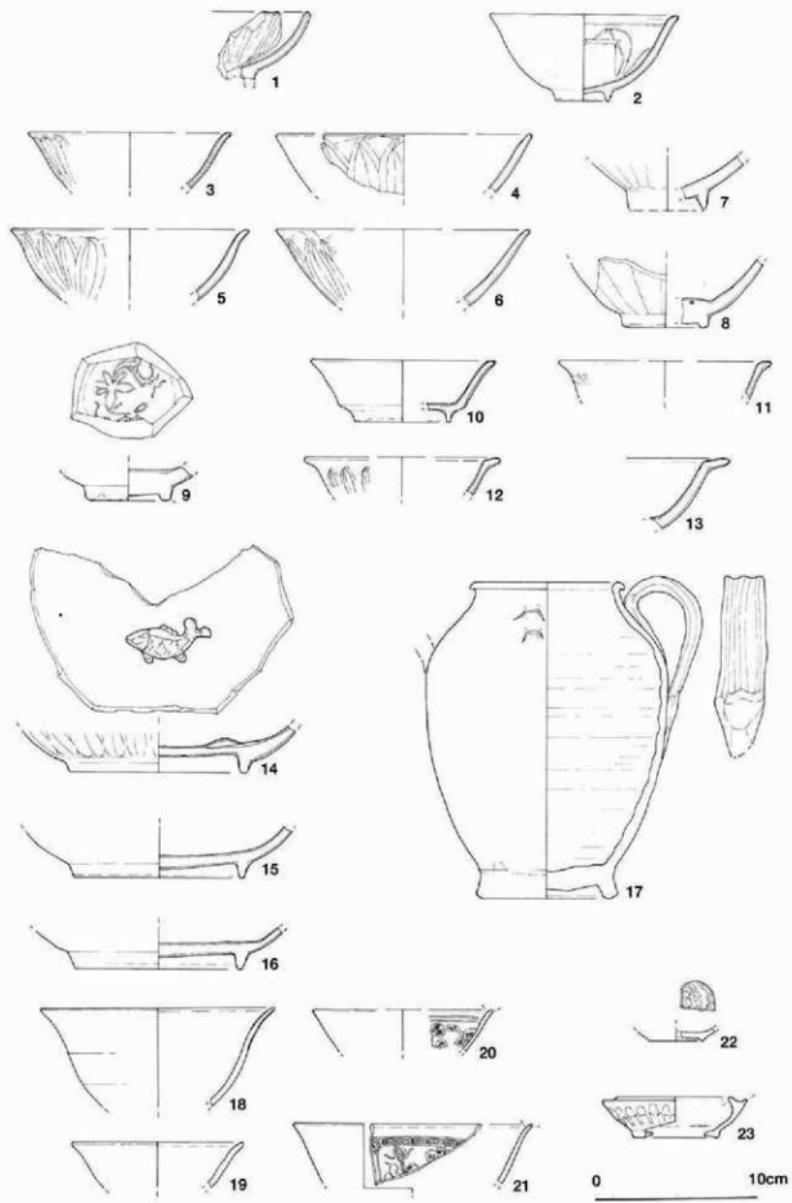


图43 第3面下出土遗物（3）

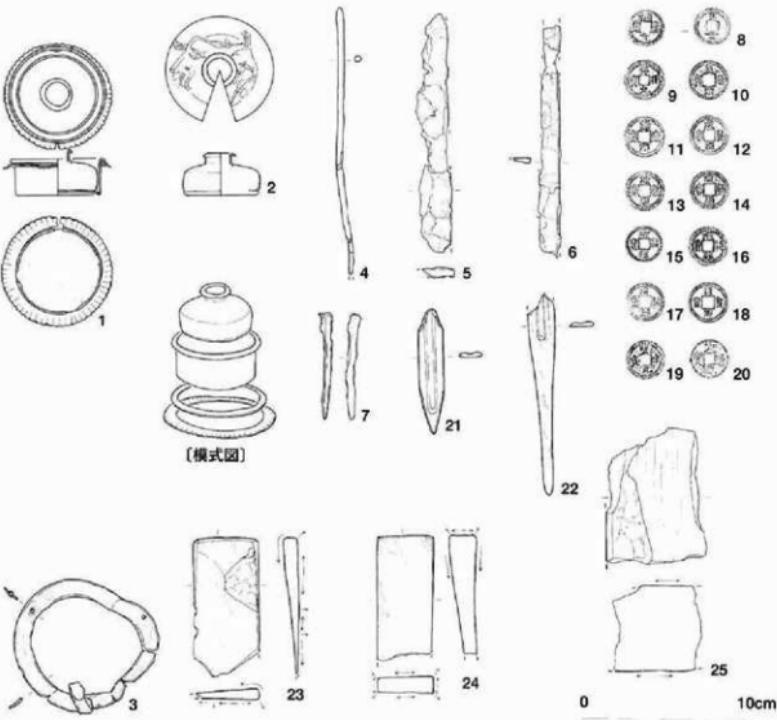


図44 第3面下出土遺物(4)

図45-1～3は連巻下駄。4は草履芯。中央よりやや上方に鼻緒痕が残る。5～9は箸。9は上端が炭化している。10～13は漆製品。10は漆器椀。全面に黒色漆を塗布した後、内外面に赤色漆の手書きによる桐と筆と思われる植物文が描かれる。11は漆器椀。内面は赤色漆を塗布しただけで無文であるが、外面は黒色漆を塗布した後に赤色漆による手書きの植物文が描かれる。12は漆器皿。全面に黒色漆が塗布されるが、遺存部分には文様は見られない。13は漆器皿。全面に黒色漆を塗布した後、内面は赤色漆の手書きによる水辺の風景が描かれている。14は板状円板。15は形代。

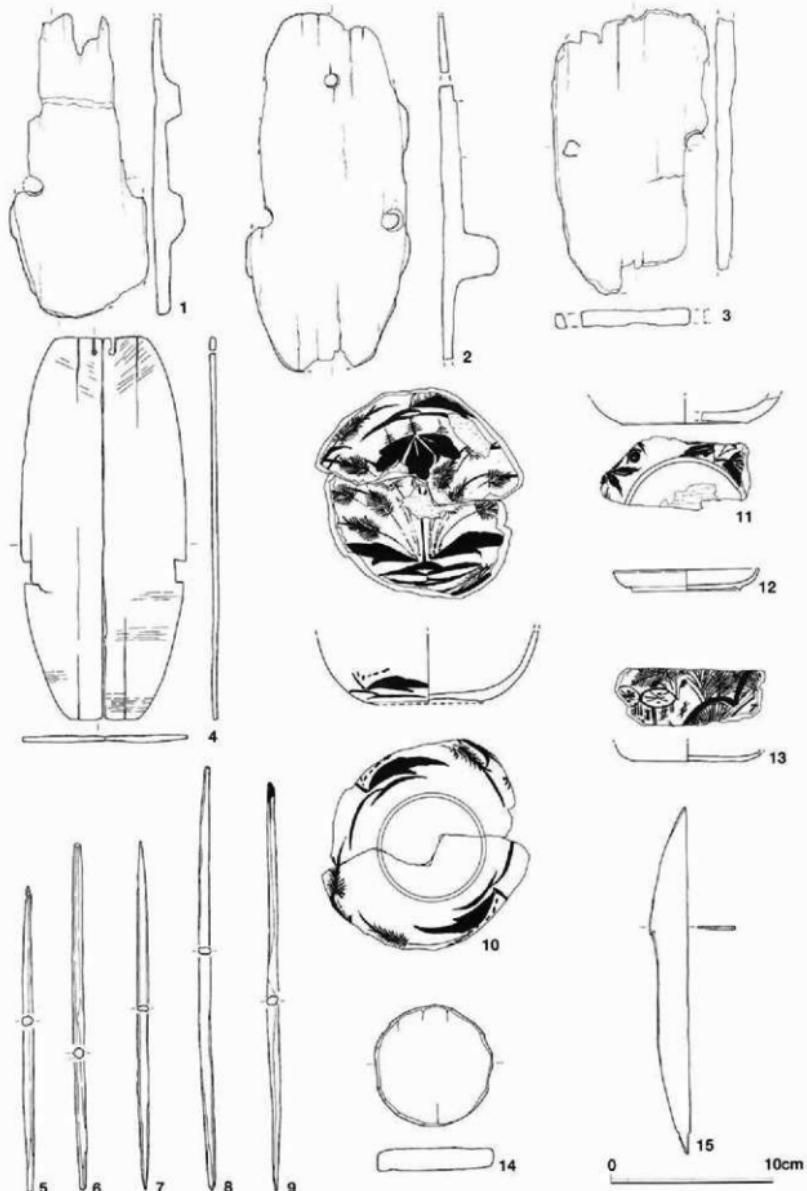


图45 第3面下出土遗物(5)

第4節 第2面(図46)

第2面は、土壌による敷地区画の一端が確認できた第3面に、泥岩による大規模な盛り土造成が行われ、調査区内の様相が一変する。この盛り土造成は、調査区内いっぱいに東西の石垣を作り、南側が高くなる上下2段の雑段状を構成する。上段部は直径4~6cmの泥岩塊を混じえる縮まりの強い灰褐色上の版築地盤面、下段部では泥岩粒と炭化物を含む水気帯びた粘性の強い褐色粘質土によるやや軟質な版築地盤面を構成している。第2面の海拔高は、上段部で15.80m~15.70m、下段部で14.95mである。

また、下段部に3基の土壤を見出した。

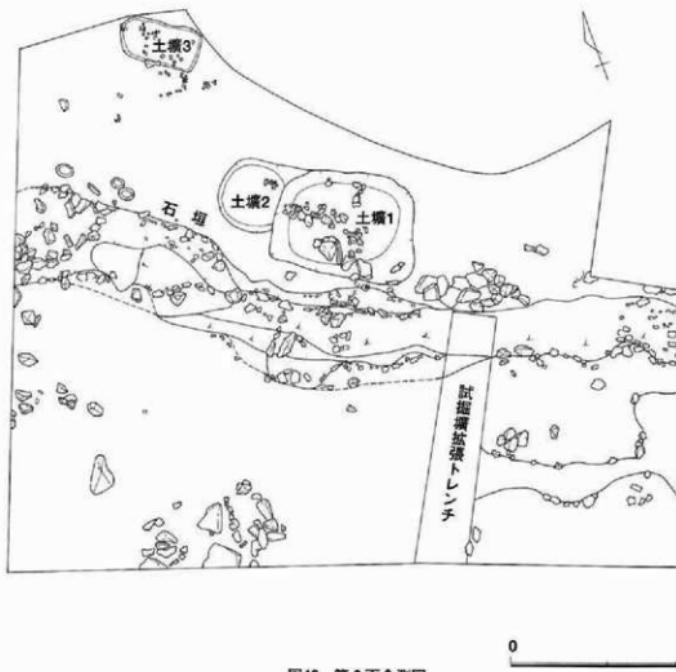


図46 第2面全測図

東西石垣(第2面全測図)

東西に調査区内いっぱいに築造され、さらに調査区外へと拡がる。この石垣を境にして南側の高い南北の雑段を形成する。石積み構造は、石面が直径10~40cm大的規格性の見られない泥岩を乱雜に2~3段積む。石面は北側を正面にして、部分的にテラス状に小さな平坦面をつくり一見、二段になっている。南北の比高差は、調査区中央部で約28cm、17°の緩傾斜をもつ。調査区東側では比高差約52cm。石面で最も突き出た部分をもってその石積みの勾配(矩方)とすると、勾配は約30°とやや急である。

安定性に欠ける造りの為か、崩落した泥岩塊の堆積が見られた。東西軸方位はN-69°-E。

本遺構中より出土した遺物で図示できるものはなかった。

土壌1 (図47)

東西石垣直下に位置する。西側に位置する土壌2の東壁を切る。平面は東西に長軸を持つ不整形。断面は皿形を呈する。規模は東西293cm、南北213cmで、確認面からの深さ53cmを測る。東西軸方位はN-57.5°-E。覆土は、南側に黄褐色～灰褐色粘質土中に直径20cm大のものを主体とする投げ込み様の泥岩塊、北側に破碎貝殻砂、炭化物を混じえる黒色土が厚く堆積する。

図48は土壌1より出土したかわらけ。大・中・小型と分化している様相が明瞭である。2～5の中型かわらけはいずれも混入物の少ない橙色粉質胎土上。器壁は薄く内縫気味に立ち上がる。大型かわらけはいずれも粉質胎土だが、11～13は混入物が少ない薄手丸深タイプである。

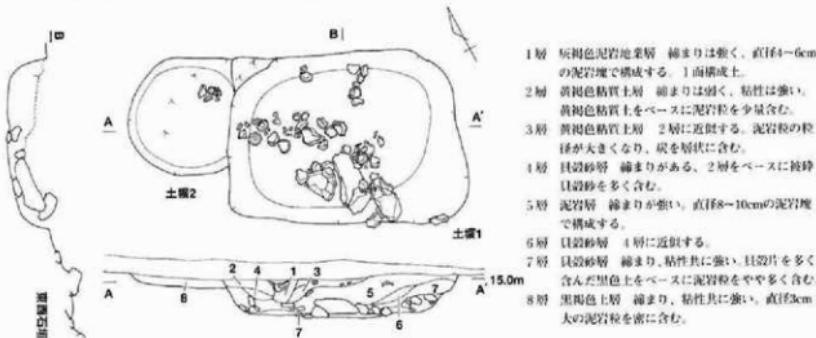
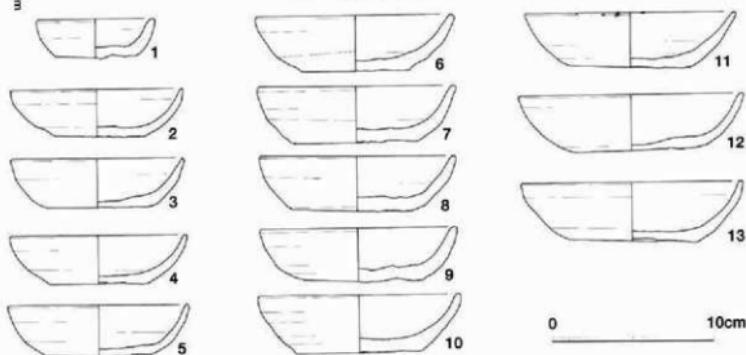


図47 第2面土壌1・2



土壌2 (図47)

土壌1の西隣に位置する。土壌1に東壁を壊されている。平面は円形、断面は浅い皿形を呈する。規模は東西127cm、南北135cm、確認面からの深さ12cmを測る。

覆土は、締まり粘性共に強く、直径3cm大の泥岩粒を密に含む黒褐色土。東西軸方位はN-57.5°-E。

本造構中より出土した遺物で図示できるものはなかった。

土壤3 (図49)

調査区北西隅に位置している。平面は方形、断面は浅い皿形を呈する。規模は東西170cm、南北85cm、確認面からの深さ13cmを測る。覆土は軟質で、粒状の炭化物を含む灰黄褐色土。

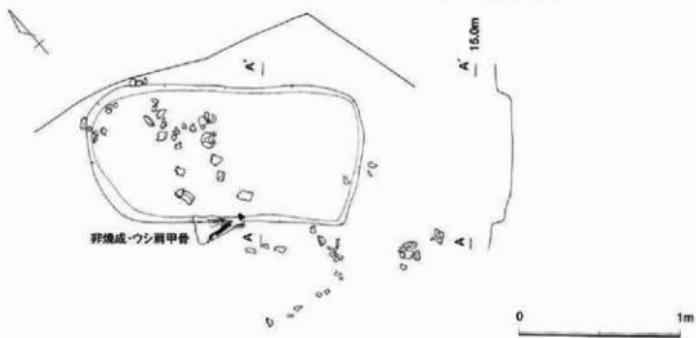


図49 第2面土壤3

東西軸方位はN-52.5°-E。

図50-1、2は土壤3より出土したかわらけ。両者ともに淡橙色を呈する粉質胎土だが、1は器壁が薄く、内縁気味に立ち上がる中型の薄手丸深タイプである。

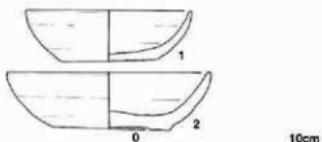


図50 第2面土壤3出土遺物

第2面下出土遺物

図51-1～2は極小かわらけ。黒色微砂をわずかに混じえる弱粉質胎土。1は外底部に糸切り痕を残すが、2は指頭ナデで糸切り痕を消している。3～37は小型かわらけ。3～4はおおむね弱砂質～弱粉質胎土。背低で器壁はゆっくり開きながら立ち上がる。15～37は弱粉質～粉質胎土。いずれも背高だが、器壁は直立気味に立ち上がるもの、内縁気味に立ち上がるもの、側面観碗型を呈する混入物の少ない薄手丸深タイプなどが見られる。38～42は中型かわらけ。おおむね弱砂質～粉質胎土。器壁は薄く内縁気味に立ち上がる。43～48は大型かわらけ。弱砂質～弱粉質胎土。器壁は薄めでやや内縁気味に立ち上がり、口唇部が外反するものが多い。49は平瓦。凹、凸とともに離れ砂痕が残る。50は瓦質浅鉢型火鉢。体部外面下位は軽いナダ調整、中位は押さえの後、木口状工具によるハケ目調整がなされる。

図52-1は瀬戸前二期の四耳壺の口縁部片。2は瀬戸の輪花型入子。外底部には3個の团子状の脚を付ける。見込みの外周に著しい磨滅痕が残る。3は瀬戸の碗型入子。体部内面に磨滅痕は残っていない。4～8は常滑の甕口縁部片。4～7は6型式、8は7型式に分類できる。9は青磁割花文碗。釉は軽い二次焼成を受け、わずかに白濁する。10は青磁双魚文鉢。外面は蓮弁文が施され、見込みに魚文が貼り付けられる。11は白磁口元皿。12～13は白磁型作りの小皿。12は蓮弁文、13は唐草牡丹文が施される。14は鳴流中山産の泥岩砥石。裏面は剥離後に再利用している。15～16は淡紅色を呈する凝灰岩の砥石。天草もしくは伊予産と思われる。17は滑石製鏡の再加工途上品。18は「嘉祐通寶」。

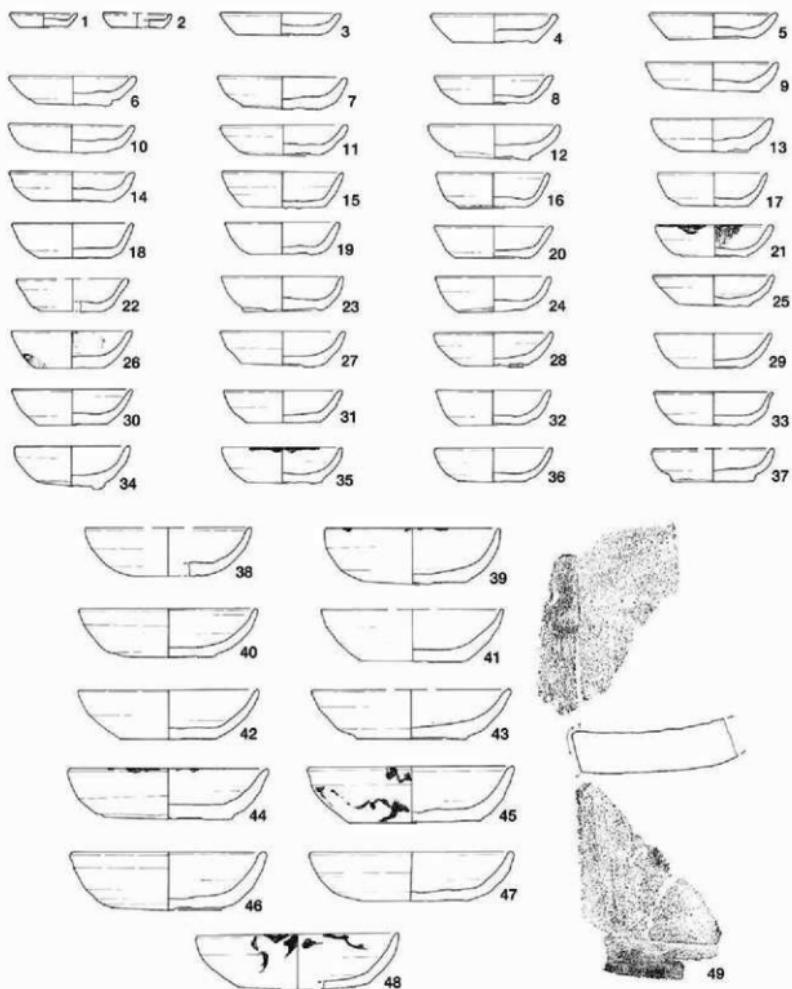


図51 第2面下出土遺物（1）

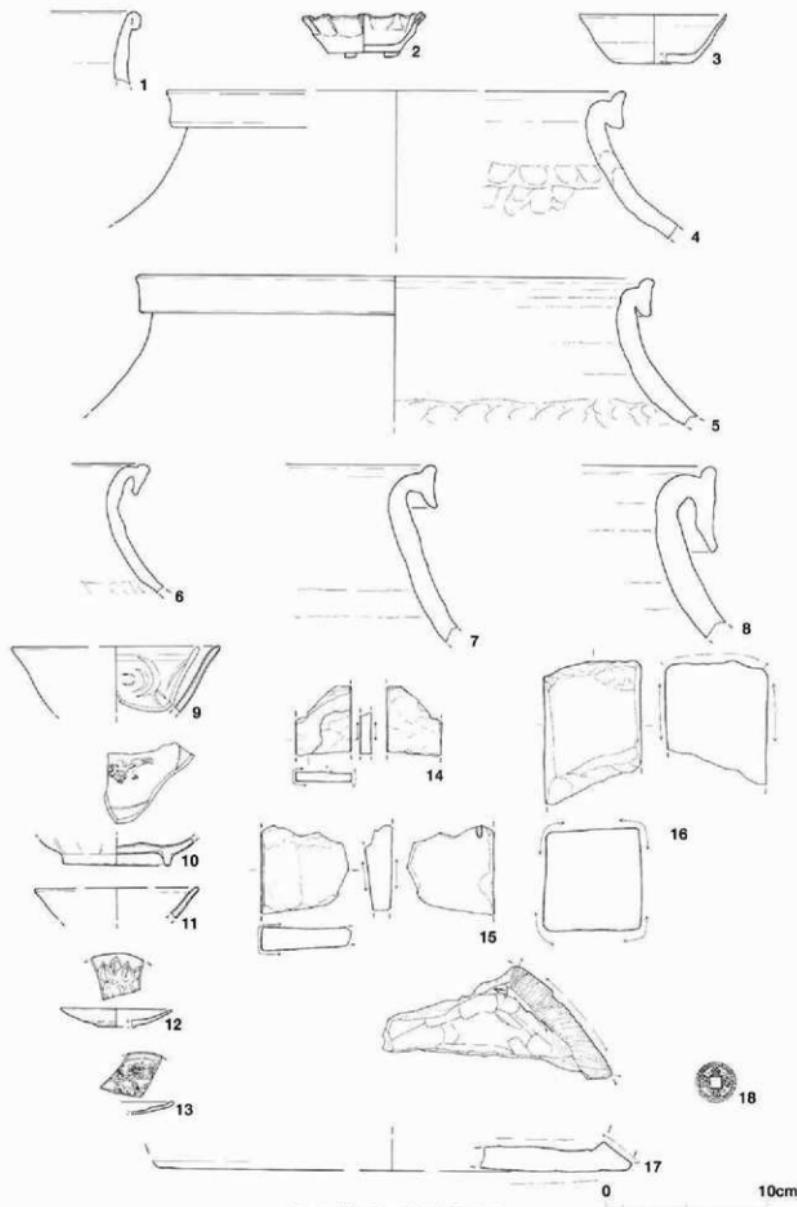


图52 第2面下出土遗物 (2)

第5節 第1面 (図53)

第2面上に直径1~4cmの破片泥岩を密に含む褐色粘質土による版塗地葉面が第1面である。海拔高は調査区南西部で15.90m、北西部で15.80m、南東部で15.75m、北東部で15.58mを測る。ほぼ平坦であるが、南西部で高く、北東方向に向かってやや下る緩斜面を呈している。この第1面に帰属する遺構は発見されなかったが、第1面の造成の過程を示す盛り土に伴う6箇所のかわらけ溜まりを発見した。

造成は第2面の下段部に拳大から人頭大の泥岩塊を入れた後に、泥岩粒を密に含む暗褐色粘質土を南から流し込むようにして平坦面を作り出している。この高さ50cmに及ぶ造成に当たっては、図に示したように何度もわたって順次盛り土を行った造成の目を確認でき、そこにかわらけ溜りが発見される。盛り土版塗が周到になされた様子を見て取れる(図54・55)。

かわらけ溜まり1 (図56)

確認地点の標高は海拔15.85m~15.50m。東西170cm、南北510cmの範囲に広がる。出土したかわらけの破片は1510点以上に及ぶが、そのほとんどが細片であった。かわらけの出土状況は上に口を開いた(正位)ものが多く、大小のかわらけを2~4枚重ねているものも見られる。

図57-1~15はかわらけ溜まり1より出土した。小・中・大型に分化している。1~3は橙色を呈する粉質胎土。4は淡橙色を呈する砂質胎土。1は背高で、器壁はゆっくり開きながら立ち上がる。2~4は背高で、器壁は内厚気味に立ち上がる。5~6は中型かわらけ。弱砂質~弱粉質胎土。器壁はゆっくり開きながら立ち上がる。7~11は弱粉質胎土の大型かわらけ。10・11は背高で、器壁が薄く、薄手丸深型に近くになっている。12~14は混入物の少ない粉質胎土の薄手丸深型。口唇部周辺で外反している。15は白磁口兀皿。

かわらけ溜まり2 (図56)

出土したかわらけの破片は380点以上に及ぶが、そのほとんどが細破片であった。確認地点の標高は海拔15.95m~15.70m。東西100cm、南北140cmの浅い窪みにかわらけが正位と伏位に混じて斜位や立位のものも混在して発見された。

図57-16~19はかわらけ溜まり2より出土した遺物である。細破片のものが多く、図示できたものは小型かわらけだけである。16~17は粉質胎土だが、特に16は薄手丸深型に見られるような混入物の少ない精良胎土で作られている。一方、18~19は弱砂質~砂質胎土。いずれも器壁はゆっくり開きながら立ち上がる。かわらけ以外には常滑甕胴部小片、瓦質火鉢胴部片が1点ずつ出土している。

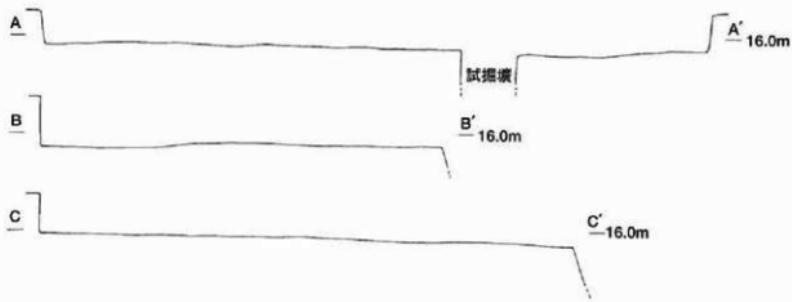
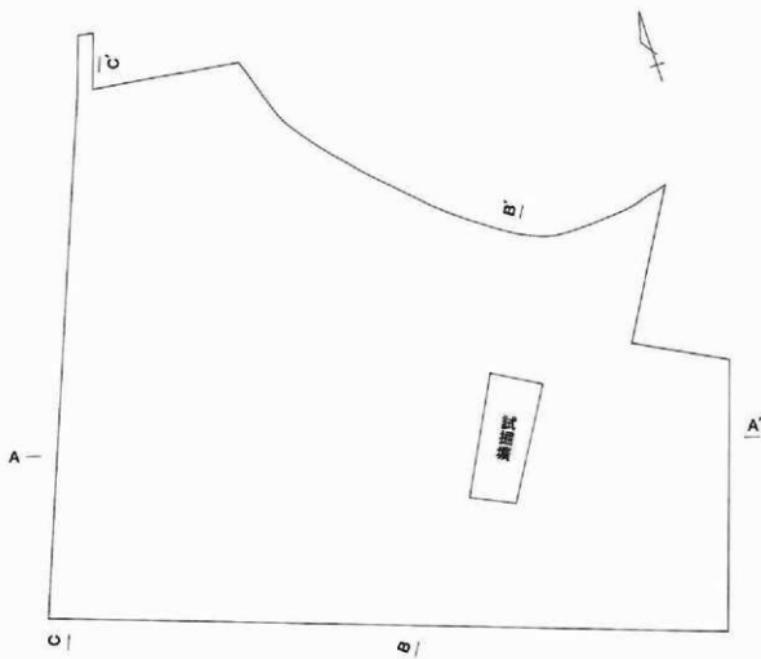
かわらけ溜まり3 (図56)

細片ばかり140点以上が出土している。確認地点の標高は海拔15.83m。東西60cm、南北80cmの浅い窪みに伏位で押し潰されたかわらけが発見された。

図示できる遺物はなかった。

かわらけ溜まり4 (図56)

細片ばかり90点以上が出土している。確認地点の標高は海拔15.85mである。東西170cm、南北50cmの範囲に、正位に混じて伏位と斜位または立位のかわらけが発見された。



0 4m

図53 第1面全測図

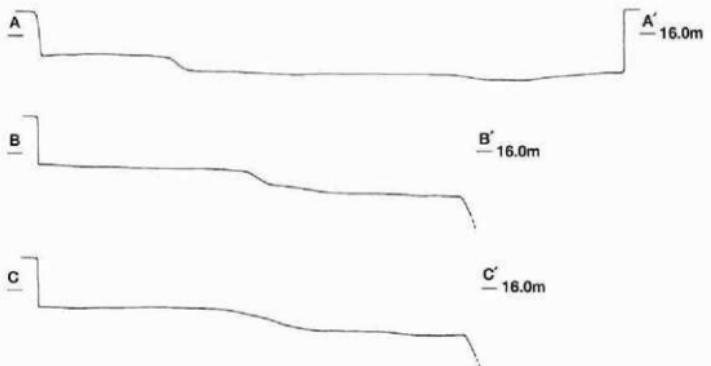
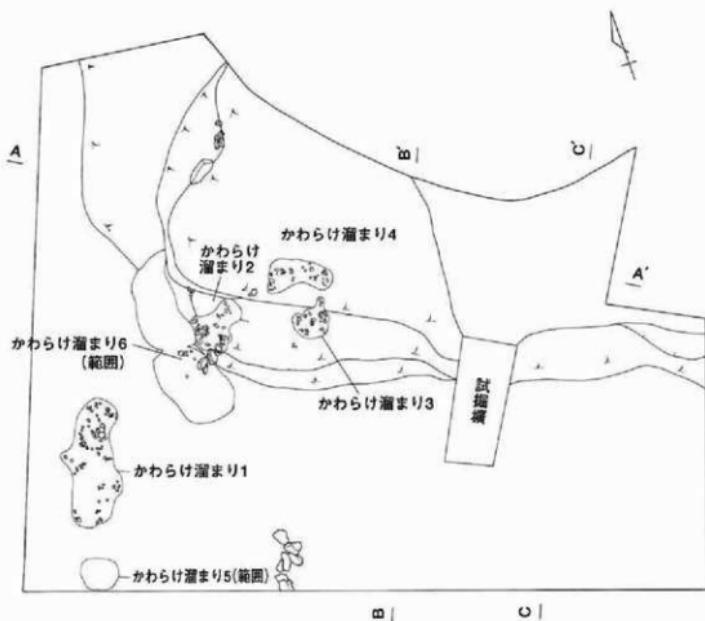


図54 第1面下造成状況 (1)

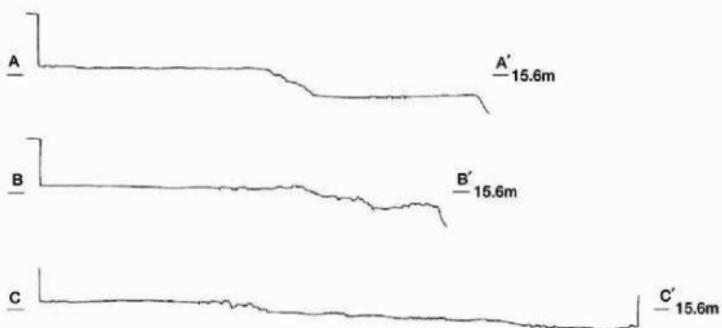
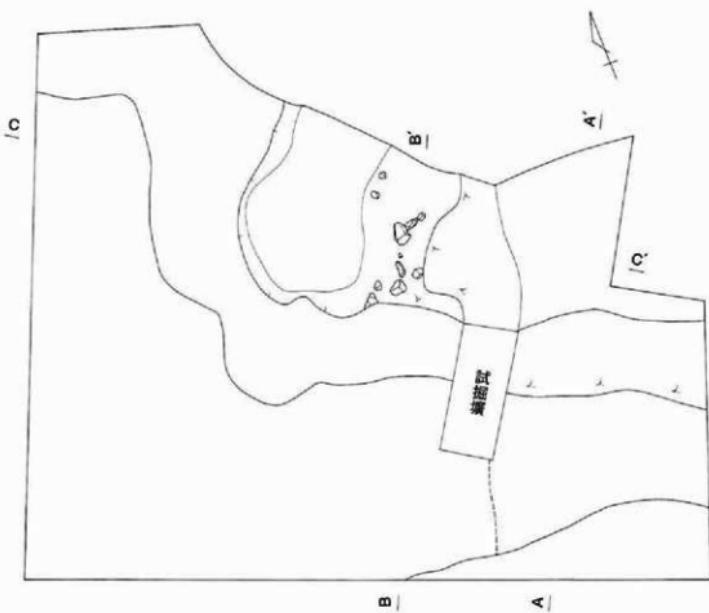


図55 第1面下造成状況 (2)

0 4m

図示できる遺物はなかった。

かわらけ溜まり 5 (図56)

東西に長軸をもつ東西78cm、南北66cmの楕円形に広がる。確認地点の標高は海拔15,92m。直径2～5cmの泥岩塊に同程度まで破碎されたかわらけ碎片が密に入り版築状を呈している。

図57-20は淡橙色を呈する砂質胎土。器壁は直立気味に立ち上がる。

かわらけ溜まり 6 (図56)

かわらけ溜まり5同様、直径2～5cmの泥岩塊に同程度まで破碎されたかわらけ細片が密に入り、版築状を呈している。平面は東西方向に長軸をもつ楕円形。規模は東西196cm、南北115cm。確認地点の標高は海拔15,80m。

図57-21はかわらけ溜り6から出土した滑石製の温石。表面の上方は剥離するが、下方は工具痕が著しい。また、右および上側面はノミ状工具痕が残っていること、右側面と裏面の一部に煤が付着することなどから滑石鑄の転用上品とも考えられる。図示できるかわらけはなかった。

以上のかわらけ溜まりは、第1面盛り土造成時における造成の目から発見されており、造成全体にかかる地鎮に関係した行為の結果と考えられる。かわらけ溜まり5・6は埋置されたかわらけが土圧によって細かく碎かれたもので、特に他のかわらけ溜まりと変わらない。

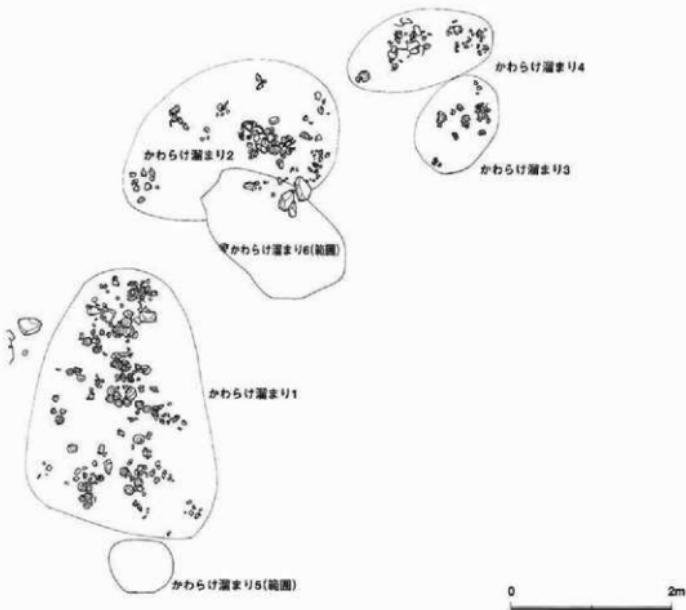
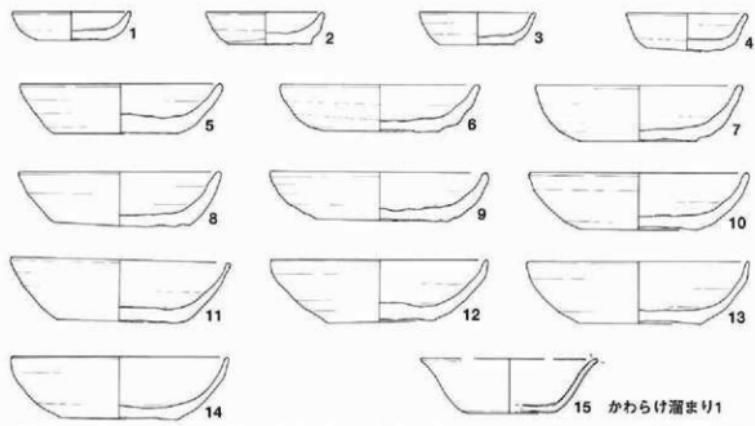
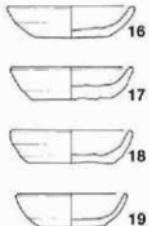


図56 第1面下かわらけ溜まり



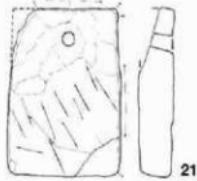
15 かわらけ溜まり1



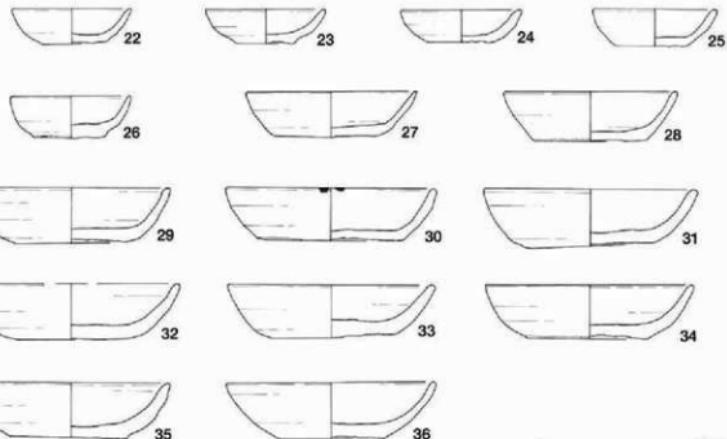
かわらけ溜まり2



かわらけ溜まり5



かわらけ溜まり6



0 10cm

図57 第1面下かわらけ溜まり出土遺物

かわらけ溜まり周辺出土遺物

図57-22～36は、かわらけ溜まり周辺より出土した遺物を図示した。小型かわらけは弱砂質～砂質胎土で器壁は薄く、背高で側面觀碗型を呈する。中型かわらけは弱砂質～粉質胎土で器壁は薄く、直立氣味に立ち上がる。体部外面に稜は持たない。大型かわらけは弱砂質～粉質胎土。器型的には器壁が直立氣味に立ち上がるもの、ゆっくり開きながら立ち上がるもの、薄手丸深のものの3種類が見られる。

第1面下出土遺物

図58・59は、かわらけ溜まり以外の第1面造成土中より出土した遺物である。

図58はかわらけ。小型かわらけは弱砂質～粉質胎土で薄手丸深のものがかなり目立っている。中型かわらけは、かわらけ溜まりより出土したものと同様、器壁は薄く、直立氣味に立ち上がるものが多い。大型かわらけはおおむね弱砂質～粉質胎土で、器壁が厚めでゆっくり開きながら立ち上がるものと、薄手丸深のものが混在している。

図59-1は瓦質浅鉢型火鉢。胎土は黒色砂粒と雲母片を混じえる淡紅色粉質土で胎芯は黒色を呈する。外底部には糸切り痕が残り、体部内外面とともにナデによる調整が残る。2～3は瓦質輪花型火鉢。胎土は石英細石を混じえる淡紅色粉質土。体部外面はヘラミガキが施され、黒色を呈している。体部内面は指頭による押さえとヨコナデで調整される。外面には、2は亀甲文、3は菊花文のスタンプが押印される。4は鉄鉢の外型鋳型。胎土は黒色砂を多く、他に雲母微片と白針を混じえる淡橙色粉質土。体部小片だったが、2個で構成する外型のかみ合わせ部が遺存していた。5は舶載天目碗。胎土は白色微粒を混じえる暗灰色弱粘質緻密土。釉は不透明な黒色を呈し、強い二次焼成を受け、吹き上がっている。6は青白磁の短頸壺もしくは酒会壺の蓋。牡丹文の周間に連珠文を配した型押し作りである。7は「政和通寶」。

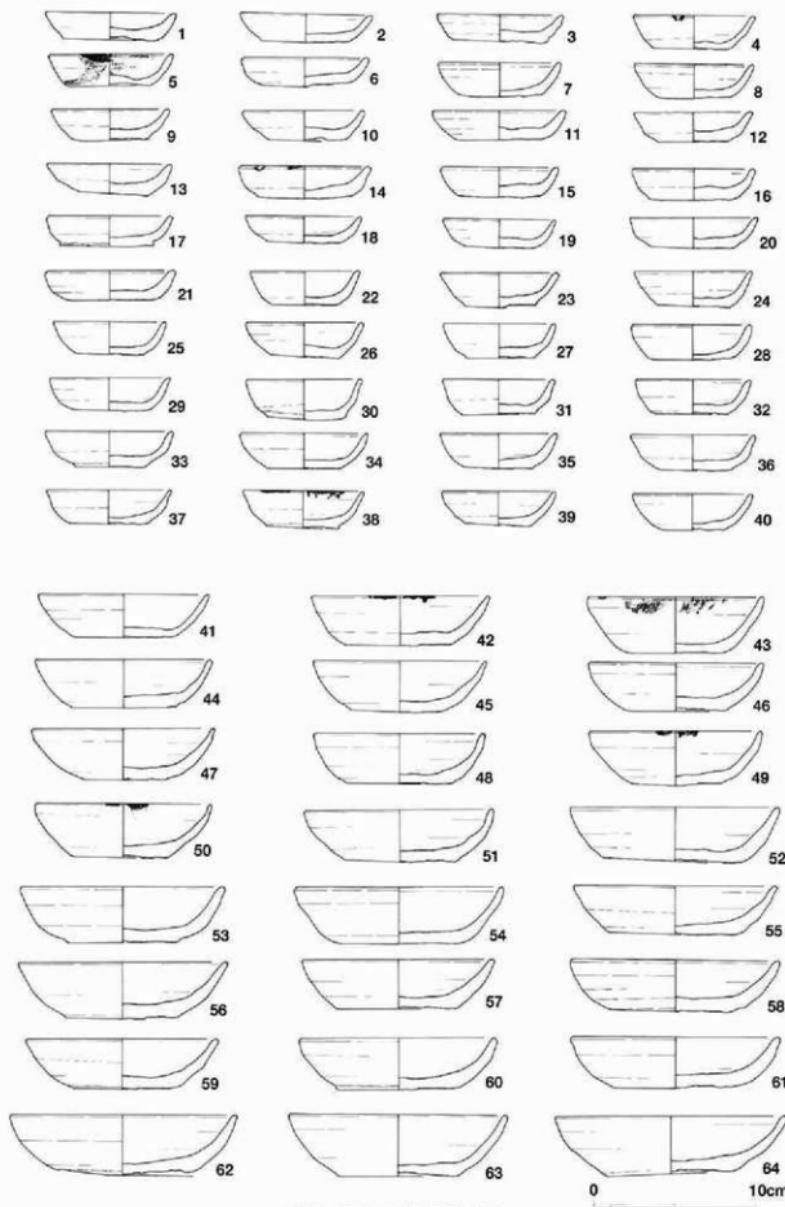


图58 第1面下出土遗物 (1)

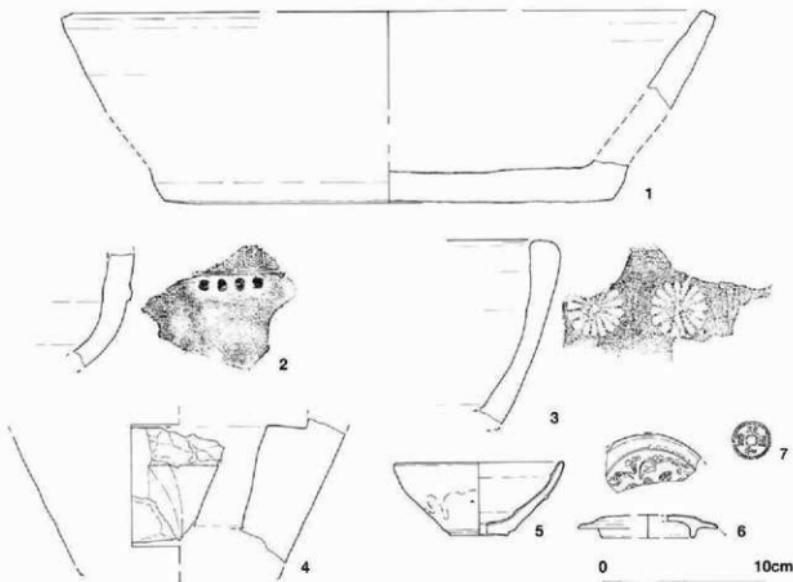


図59 第1面上出土遺物(2)

第1面上出土遺物

図60-1～8はかわらけ。おおむね砂質～粉質胎土で、器壁はとても薄く側面觀鏡型を呈している。9は瓦質輪花型火鉢。外面上位にはスタンプによる菊花文が押印され、その下方に宝珠が貼り付けられる。10は瀬戸の中期の折縁小皿か底鉄目皿。11は瀬戸の後II期の縁軸小皿。12は鳴滝中山産の淡黄色泥岩の砥石。破損後、表裏面とも再利用している。13～14は鳴滝産の淡黄色泥岩の砥石。14の表面は浅い溝状の筋が残っている。

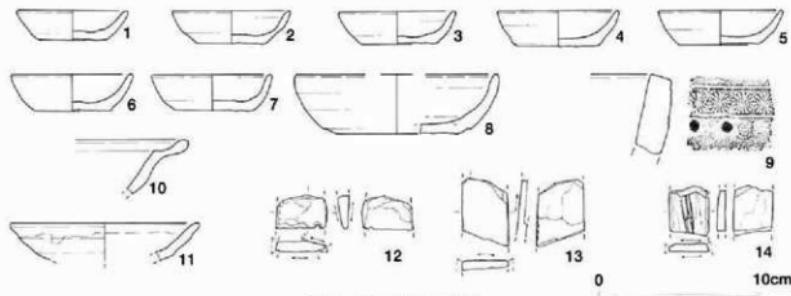


図60 第1面上出土遺物

第五章　まとめ

名越ヶ谷遺跡地内における今回の調査地点では、5枚の中世版築地業面とそこに展開する土塁を作り敷地利用を確認することができた。しかし、発掘調査深度規制により調査の行われていない第5面以下では、どのような敷地利用もしくは土地造成が行われていたのか不明な点が残されていることを付け加えておかねばならない。

以下、図61の造構変遷模式図を用いて、調査によって得られた成果に若干の考察を加え、まとめに代えたい。

第5面には、板廻い建物と井戸、土塁それに多くのピットを平坦な地業面に確認した。しかしながら、丘陵寄りの板廻い建物は部分的な確認にとどまり、その全体像を把握できず、また調査地に散在する多くのピットを何らかの掘立柱建物を構成する柱穴とも認識できなかつた。多くのピットは簡素な建物の跡と考えられる。このように第5面における敷地利用は不明瞭ではあるが、木枠を備えた井戸が開墾されており、調査地点において永続的な生活が営まれていたことは確実である。

出土した遺物は他の生活面と比べると、量的に非常に少ないが、深度規制により完掘できなかった状況を考慮しなければならない。かわらけは手づくねがわずかに出土したが、多くは背低で底径口徑比の小さい圓面規型を呈する糸切りかわらけであった。

第4面になると、それ以前と比べて、かなりしっかりした建物跡を確認できる。それは、これ以後の上層に認められる建物と敷地利用の変遷から見て、おそらくはより古いと考えられる板廻い建物を壊して作られる5×1間以上の掘立柱建物である。掘立柱建物は調査地南方の丘陵から離れた地域に東西に長く配置され、丘陵寄りには土塁のほかは空閑地として残される。第4面に発見されたピットも建物側に多く、この時期には調査地周辺を大きな範囲で利用するなか、丘陵寄りを空間地とする敷地利用へと変化していることを読み取れる。この敷地利用の変化は、第4面の中でも後半期に築かれる土塁によって明確に示される。土塁1は調査地の丘陵寄りにその裾に沿って築かれ、敷地の空間を人為的に分離している。土塁の構築にともなって、敷地内では掘立柱建物が壊され、基壇を持つ建物が建てられる。敷地利用の変化、板廻い建物から掘立柱建物、そして基壇建物への移行、さらに土塁の構築など、前代と比べて敷地内造構が大きく変化している。そこからは、調査地を利用する人的変化も想定できる。ただし、この土塁がどれほどの規模を持ち、土塁で区画された敷地がどれほどの広さであったのかは不明である。

第4面では、土塁1より一括で出土した500本以上の箸、漆器椀、皿、調度類、宗教関連具、漆刷毛などの木製品が多く出土した。かわらけは糸切りかわらけが多く、手づくねは小型のものがわずかに混じる。器型も第5面で出土したかわらけと大きな変化は見られず、小型かわらけは背低で皿型を呈し、大型かわらけは器盤がやや直立気味に立ち上がるものが多いようである。第5面と第4面の年代差は大きく違わず、およそ13世紀後半くらいと思われる。

こうした第4面上に、炭化物を多く含むやや軟質な版築地業によって更新された生活面が第3面である。焼土や均一な炭屑はないものの、第4面は火災を被り、第3面に作り替えられた可能性があり、基本的に敷地の利用法は第4面と変わらない。しかし、土塁1が第4面以来、調査地の南側を丘陵部から分離し続ける一方、調査地の東端に新たな土塁2が構築され、調査地内にみられる敷地利用の東の限界が示される。さらに、土塁の内側には、壠もしくは欄をなす東西ピット列が1条、南北ピット列が2条

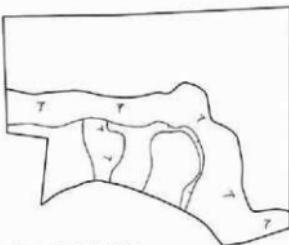
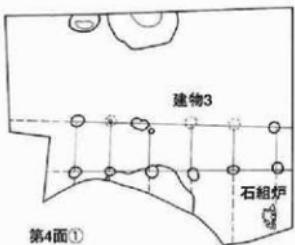


図61 造構変遷図

確認でき、調査地内から北西方向へ広がると考えられる敷地の空間分離構造が強化される。ただし、土塁1と塀3の間には、東西方向に幅200cmほどの通路状の破片貝殻砂を薄くまいた整地面があり、東西の塀は一時的なものであると考えられる。東西の塀をまたぐように位置する掘立柱建物がこの整地面と同時に存在していたと思われる。

さて、この土塁1・2と共に、塀もしくは柵によって区切られた空間に1×1間以上の掘立柱建物1棟、それに多くのピットと石組がやが址が発見された。谷戸内の寺院関連遺跡でしばしば確認される石組がから出土する火葬骨は、これらの土壤やが遺構からは確認されていない。

第3面より出土したかわらけには中型かわらけが現れはじめ、口径の大・中・小の分化をはじめる。大型かわらけには精良ではないが、弱粉質粘土の薄手丸深型に近い型を呈するものが見られはじめる。小型かわらけは口径が小さくなっている。13世紀末～14世紀のごく初頭と思われる。また、舶載磁器の器種、出土量は国産陶器類のそれを凌駕し、国産陶器でも瀬戸窯の四耳壺など室内装飾品は出土しているが、甕、皿、鉢などの日常雑器類の出土は少なく、さらに2つの縦耳を持つ白磁水注や銅製水滴と水滴容器、それに銅製灯明白は鎌倉市街地遺跡でも出土の例を見ない製品や器種が目立つ。これらの出土様相は、北条得宗家を含め政権の枢要部にある人物の屋敷もしくは別邸と考えられている今小路西遺跡（御成小学校内）の北谷3面とよく似ている。前述の遺構、あるいは遺物の出土様相を考え合わせると、第3面では武家屋敷あるいは寺院の可能性が大きいと思われる。

第4面、第3面と引き続いて調査地内の平坦な空間を土塁で敷地分割する土地利用が、次の第2面になると変化を見せる。調査区の南側半分を土塁1の頂部に合わせて、高さ60cmにわたって泥岩積みで盛り土し、上下2段の雑壇状の平坦面が造成される。この造成面には、上段ではなんら遺構がなく、下段部に土壤が掘り込まれる。

かわらけは完全に大・中・小に分化している。大型および中型かわらけは粉質で精良粘土の薄手丸深型、小型かわらけでも薄手丸深型がかなり目立ってくる。一方、第3面で見られた室内装飾品を中心とした器種構成はほとんど見られず、遺物の出土量も少なくなっている。ただし、造成の規模とその造成地の空間がほとんど利用されない状況から見て、かなりの権力を備えた武家、もしくは寺院が関連して行われた広域におよぶ生活面の更新であると考えられる。14世紀初頭～中葉頃と思われる。

第2面の大規模造成に続いて、第1面に向けても再び、高さ80cmの盛り土造成が確認される。造成は第2面における雑壇を解消して、調査地内に平坦面を作り出す目的で行われたが、造成を堅固なものとするため、少なくとも2度の造成の目を作り出している。造成面上からは、礎石やピットなどの建物を推定させる遺構は見られず、第2面と同様にやはり広大な敷地の一隅に位置する調査地は空閑地として残されていたと思われる。

造成の目からは、土地の違法行為に伴う地鎮めと考えられるかわらけ溜まりを6カ所確認した。ここより出土したかわらけは、第2面より出土したかわらけの様相と大きな差はないが、小型かわらけでもかなりの割合を薄手丸深型が占めている。

13世紀後半の板廻い建物の庶民階層による継続的居住から、一転して第4面における谷戸内の敷地を土塁を用いて丘陵地から分離した本遺跡地は、その後も大規模な造成を繰り返し14世紀中頃の第1面に至る。こうした第4面以降に繰り返される土塁の構築や盛り土造成が見られる調査地に発見された建物は少なく、多くは土壤であり、または調査地全体が空閑地として残された。土塁で囲まれ、造成の行なわれた地域は調査範囲を超えて広く、調査地はその一角、それも隅であったと思われた。広大な敷地に造成を行える立場の存在は、有力御家人もしくは寺院と考えられるが、石組がからは火葬骨などの出土

はなく、有力御家の敷地であった可能性の方が強いのではと考えてしまうが確たる証拠はない。

調査地点は三善善信邸跡遺跡内に位置するが、天然の生活面限界をなす丘陵側に敢えて大規模な土塁を第4面以降に設置する遺跡地は、一般的な武家屋敷や寺院というよりも、より外の空間から敷地内を分離する意図が強く表されていると思われる。遺跡地は、中世都市鎌倉の東の出入り口である名越坂に隣接し、鎌倉の防衛施設としての機能をも備えた地点ではなかったろうか。その点において、本遺跡地の性格を論じる際には、北条名越氏の存在も忘れてはならないだろう。

しかし、今回の調査範囲は狭く、遺跡の性格理解を急ぐには資料が少ないと思われる。今後の遺跡地周辺での調査を期待したい。

参考文献

- 今小路西遺跡発掘調査団編 1990 「今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書」 鎌倉市教育委員会
- 町瀬戸市埋蔵文化財センター 1997 「古町瀬戸編年表」「町瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀要 第5輯」 町瀬戸市埋蔵文化財センター 244～250頁
- 中野晴久 1994 「赤羽・中野 生産地における編年について」『全国シンポジウム「中世常滑焼をとて」資料集』 日本福祉大学知多半島総合研究所 29～30頁

表1 第5面ピット一覧表(1)

No.	長軸×短軸×深さ(cm)	底面標高(m)	覆土特徵	備考
1	34.0×34.0×不明	13.666		
2	50.0×48.0×不明	13.731		
3	48.0×42.0×不明	13.477		
4	24.0×20.0×不明	不明		
5	64.0×34.0×14.1	13.732		
6	36.0×36.0×28.8	13.600		
7	22.0×20.0×不明	不明		
8	22.0×10.0×12.4	13.796		
9	22.0×22.0×5.3	13.867		
10	28.0×28.0×8.5	13.835		
11	20.0×20.0×6.0	13.910		
12	34.0×30.0×11.6	13.786		
13	76.0×42.0×27.0	13.609		
14	76.0×40.0×20.9	13.651		
15	36.0×28.0×20.6	13.650		45、46に切られる
16	62.0×38.0×25.4	13.606		
17	44.0×44.0×21.8	13.646		
18	30.0×20.0×23.2	13.606		
19	26.0×24.0×11.1	13.789		
20	40.0×30.0×15.6	13.744		
21	14.0×14.0×4.3	13.762		
22	30.0×30.0×26.0	13.616	木片、貝殻片を多く含む	
23	32.0×26.0×26.3	13.612	木片、貝殻片を多く含む	
24	16.0×16.0×不明	不明		
25	20.0×18.0×30.4	13.548		
26	20.0×20.0×4.5	13.815		
27	20.0×18.0×5.4	13.806		
28	22.2×22.0×22.5	13.619		
29	28.0×28.0×31.8	13.550		
30	41.0×34.0×19.1	13.697		
31	50.0×45.0×10.0	13.776	木片多く、貝殻片を少量含む	32に切られる
32	51.0×51.0×15.5	13.696		31を切る
33	30.0×(30.0)×52.4	13.369	上層木片多く含む	35を切る
34	(47.0)×42.0×48.0	13.376	上層木片多く含む	
35	34.0×(25.0)×30.0	不明		33、42、43に切られる
36	28.0×28.0×17.8	不明		
37	70.0×50.0×40.5	13.550		
38	44.0×(32.0)×25.4	13.680		
39	50.0×46.0×11.3	13.776		
40	52.0×48.0×24.1	13.707		
41	26.0×20.0×9.4	13.743		
42	68.0×38.0×不明	不明		34、35を切る
43	48.0×42.0×5.8	13.871		35を切る
44	30.0×30.0×33.0	13.608		
45	(36.0)×34.0×29.3	13.712		15を切る
46	(40.0)×40.0×25.0	13.733		15を切る
47	28.0×28.0×27.3	13.660	上層は木器片多量に含む	
48	28.0×26.0×17.8	13.753	上層は木器片多量に含む	

表1 第5面ピット一覧表（2）

49	38.0×36.0×7.0	13.640	貝殻片を多く含む	土壤1を切る
50	36.0×28.0×22.9	13.483	貝殻片を多く含む	土壤1を切る
51	64.0×50.0×21.7	13.833	泥岩塊を多く含む	
52	44.0×40.0×14.6	13.911	貝殻片を多く含む	
53	64.0×52.0×20.8	13.919	貝殻片を多く含む	
54	32.0×30.0×10.6	14.043	貝殻片を多く含む	
55	50.0×40.0×18.2	13.955	貝殻片を多く含む	
56	38.0×32.0×19.5	13.947	貝殻片を多く含む	
57	48.0×46.0×41.8	13.597		
58	30.0×(26.0)×34.6	13.657	貝殻片を多く含む	

表2 第4面ピット一覧表(1)

No.	長軸×短軸×深さ (cm)	底面標高 (m)	覆土特徴	備考
1	120.0×64.0×54.2	13.268		北側調査区外
2	36.0×32.0×22.3	13.835		
3	64.0×52.0×31.0	13.615		
4	74.0×(70.0)×25.5	13.595		5に切られる
5	64.0×54.0×32.0	13.484		4、6を切る
6	46.0×(42.0)×15.4	13.650		5に切られる
7	52.0×46.0×24.5	13.610		
8	56.0×44.0×21.4	13.654	貝殻片多く含む	
9	30.0×30.0×23.8	13.628		
10	38.0×32.0×21.4	13.658		
11	52.0×50.0×16.4	13.523		
12	56.0×56.0×32.0	13.556		
13	104.0×76.0×34.8	13.502		14に切られる
14	54.0×50.0×30.8	13.549		13を切る
15	48.0×46.0×23.0	13.620		
16	50.0×48.0×28.9	13.612		
17	44.0×(26.0)×22.7	13.610		
18	48.0×(48.0)×17.2	13.640		
19	46.0×46.0×17.4	13.644		
20	44.0×42.0×32.1	13.512		
21	48.0×46.0×10.3	13.624		
22	28.0×26.0×12.8	13.843		
23	欠番			
24	欠番			
25	62.0×48.0×33.9	13.537		26を切る
26	40.0×(32.0)×不明	不明		25に切られる
27	40.0×(18.0)×38.0	13.535		
28	54.0×48.0×27.7	13.585		
29	52.0×(52.0)×23.3	13.662		
30	56.0×(56.0)×4.0	13.855		
31	40.0×(20.0)×29.2	13.600		28、29、30に切られる
32	欠番			
33	欠番			
34	欠番			
35	26.0×(20.0)×9.4	13.833		
36	26.0×24.0×14.4	13.783		
37	58.0×50.0×36.3	13.689		
38	62.0×50.0×18.3	13.843		
39	40.0×40.0×9.8	13.813		
40	欠番			
41	欠番			
42	44.0×(40.0)×19.2	13.750		
43	56.0×(50.0)×20.4	13.738		
44	欠番			
45	欠番			
46	欠番			
47	欠番			
48	欠番			

表2 第4面ピット一覧表(2)

49	58.0×52.0×29.1	13.802	
50	54.0×48.0×11.1	13.898	
51	42.0×36.0×17.8	13.617	
52	34.0×28.0× 8.0	13.720	
53	34.0×30.0× 6.2	13.728	
54	24.0×24.0× 3.9	13.746	
55	40.0×38.0× 2.1	13.795	
56	54.0× (46.0) ×26.0	13.640	
57	40.0× (34.0) ×18.3	13.645	
58	52.0×40.0×24.3	13.625	
59	欠番		
60	欠番		
61	44.0×38.0×13.9	13.884	
62	欠番		
63	欠番		
64	欠番		
65	欠番		
66	欠番		
67	30.0×28.0×23.5	13.871	
68	欠番		
69	48.0× (40.0) ×23.4	13.707	
70	(52.0) ×50.0×26.2	13.703	貝殻片多く含む
71	52.0×50.0×43.0	13.607	
72	欠番		
73	欠番		
74	28.0× (16.0) ×28.5	13.303	75を切る
75	68.0× (16.0) × 8.0	13.508	74に切られる
76	22.0×20.0×28.3	13.305	
77	20.0×20.0×16.0	13.411	
78	24.0×24.0×20.3	13.379	
79	22.0× (14.0) ×13.3	13.450	
80	50.0× (40.0) × 2.8	13.888	81に切られる
81	52.0× (36.0) ×不明	不明	80、82を切る
82	(28.0) × (20.0) × 3.3	13.633	81に切られる
83	60.0× (36.0) ×26.0	不明	

表3 第3面ピット一覧表(1)

No.	長幅×短幅×深さ(cm)	底面標高(m)	覆土特徴	備考
1	32.0×30.0×23.5	14.724		
2	44.0×42.0×29.6	14.461		132を切る
3	32.0×30.0×18.5	14.735	炭化物多く含む	
4	104.0×82.0×44.4	14.327		5を切る
5	(24.0) × 38.0 × 9.7	14.694		4に切られる
6	52.0×38.0×22.9	14.565		
7	88.0×78.0×39.4	14.327		
8	30.0×30.0×14.4	14.647		
9	(48.0) × (16.0) × 不明	不明		北側調査区外
10	32.0×32.0×9.5	14.491		
11	38.0×36.0×13.0	14.496		
12	28.0 × (20.0) × 不明	不明		トレンチにより半分消滅
13	24.0×22.0×16.4	14.522		
14	44.0×42.0×20.3	14.548	上面は炭が充填	
15	28.0×28.0×13.6	14.538		
16	36.0×34.0×22.0	14.200		
17	30.0×28.0×22.4	14.438		
18	22.0×22.0×21.6	14.446		
19	24.0×24.0×19.9	14.444		
20	52.0×46.0×26.9	14.375		
21	50.0×48.0×22.6	14.434		113を切る
22	42.0×42.0×22.8	14.443		
23	48.0×40.0×19.3	14.498		
24	52.0×44.0×36.0	14.434		
25	34.0×32.0×14.1	14.653		
26	32.0×30.0×20.5	14.589		
27	36.0×34.0×23.8	14.528		
28	34.0×28.0×12.6	14.507		116を切る
29	44.0 × (36.0) × 29.1	14.436		
30	(68.0) × 30.0 × 35.3	14.426		
31	56.0×38.0×21.8	14.508		
32	46.0×34.0×16.5	14.571		
33	40.0×34.0×21.4	14.522		
34	52.0×30.0×20.0	14.350		
35	32.0×30.0×20.0	14.554		
36	8.0×8.0×不明	不明		
37	42.0×34.0×69.2	14.602		
38	50.0×48.0×21.2	14.542	山砂を少量含む	
39	30.0×30.0×32.0	14.426		
40	46.0×42.0×22.9	14.517		111を切る
41	92.0×62.0×33.2	14.305		
42	60.0×48.0×20.2	14.516		
43	38.0×36.0×27.4	14.444		
44	40.0×38.0×17.7	14.541		
45	60.0×52.0×20.2	14.496		97を切る
46	30.0×24.0×15.0	14.500		
47	24.0×18.0×13.9	14.506		
48	28.0×26.0×25.1	14.438		

表3 第3面ピット一覧表(2)

49	32.0×28.0×32.7	14.416	
50	20.0×20.0×25.3	14.506	
51	50.0×50.0×35.6	14.486	52を切る
52	44.0×不明×13.5	14.691	51、53に切られる
53	52.0×44.0×37.5	14.439	52を切る
54	14.0×14.0×18.0	14.646	
55	52.0×34.0×28.3	14.535	
56	50.0×42.0×33.4	14.472	57、100を切る
57	30.0×(20.0)×19.2	14.164	56に切られ、100を切る
58	18.0×18.0×21.5	14.548	
59	24.0×22.0×30.8	14.455	
60	50.0×50.0×25.5	14.473	
61	18.0×16.0×16.2	14.566	
62	46.0×40.0×21.0	14.682	101を切る
63	32.0×32.0×24.4	14.574	山砂を少量含む 107を切る
64	104.0×96.0×58.5	14.211	
65	12.0×12.0×21.2	14.634	
66	28.0×24.0×18.0	14.658	
67	60.0×50.0×36.5	14.467	
68	40.0×38.0×21.1	14.646	
69	40.0×40.0×28.8	14.530	
70	22.0×22.0×16.0	14.654	
71	18.0×14.0×15.2	14.636	
72	20.0×16.0×1.4	14.740	粘質化した炭化物が充填
73	14.0×12.0×12.3	14.642	粘質化した炭化物が充填
74	14.0×12.0×8.0	14.679	粘質化した炭化物が充填
75	46.0×42.0×17.9	14.582	
76	30.0×28.0×10.4	14.670	
77	30.0×28.0×12.5	14.733	
78	54.0×48.0×37.6	14.482	
79	80.0×77.0×35.0	14.500	122、123を切る
80	32.0×30.0×31.6	14.554	
81	106.0×72.0×18.7	14.706	82に切られる
82	80.0×72.0×26.6	14.596	81を切る
83	46.0×40.0×31.0	14.462	
84	18.0×16.0×10.4	14.830	
85	22.0×16.0×不明	不明	79、122に切られる
86	40.0×38.0×20.8	14.798	
87	28.0×26.0×不明	不明	
88	32.0×30.0×18.4	14.626	
89	82.0×71.0×84.0	14.720	
90	34.0×32.0×不明	15.480	
91	40.0×(17.0)×30.4	15.182	
92	58.0×54.0×21.0	14.466	
93	32.0×30.0×12.7	14.549	
94	62.0×48.0×21.6	14.445	
95	30.0×26.0×17.0	14.482	
96	20.0×18.0×8.4	14.546	
97	54.0×42.0×25.4	14.402	45に切られる

表3 第3面ピット一覧表(3)

98	20.0×16.0×13.7	14.336	
99	42.0×38.0×30.0	14.339	
100	50.0×46.0×10.8	14.588	56、57に切られる
101	80.0×68.0×24.9	14.422	62に切られる
102	56.0×52.0×28.0	14.425	
103	28.0×28.0×18.4	14.674	
104	40.0×30.0×22.7	14.625	
105	42.0×34.0×30.0	不明	
106	46.0×38.0×15.9	14.568	
107	28.0×24.0×19.7	14.570	63に切られる
108	14.0×14.0×16.8	14.596	
109	42.0×40.0×28.2	14.440	
110	60.0×56.0×33.2	14.374	
111	50.0×38.0×18.1	14.531	40に切られる
112	42.0×42.0×29.3	14.445	
113	56.0×52.0×35.4	14.408	20に切られる
114	46.0×46.0×14.2	14.572	
115	50.0×40.0×40.6	14.266	
116	44.0×40.0×31.5	14.260	28に切られる
117	50.0×44.0×20.0	14.402	
118	50.0×46.0×14.8	14.421	
119	40.0×36.0×3.4	14.661	
120	36.0×34.0×27.3	14.543	
121	30.0×30.0×20.5	14.637	
122	18.0×14.0×37.5	14.398	79に切られ、123を切る
123	56.0×46.0×23.1	14.542	79、122に切られる
124	28.0×26.0×20.8	14.790	
125	36.0×34.0×7.0	14.881	
126	32.0×30.0×22.8	14.710	
127	10.0×10.0×不明	14.357	
128	46.0×44.0×38.6	14.374	
129	8.0×8.0×不明	14.178	
130	36.0×34.0×不明	不明	
131	32.0×24.0×28.3	14.553	土壤1を切る
132	40.0×38.0×25.2	14.442	2に切られる
133	50.0×50.0×22.8	14.470	
134	30.0×26.0×37.5	14.330	
135	30.0×30.0×34.4	14.382	
136	50.0×40.0×14.4	14.577	
137	58.0×50.0×20.7	14.527	
138	28.0×26.0×7.9	14.158	
139	24.0×(10.0)×22.5	14.834	
140	10.0×10.0×不明	不明	

表4 遺物観察表(1)

図版	No.	種別	口径	底径	器高	備考
9	1	常滑 瓶				長石小粒をわずかに混じえる灰色緻密土。器表は明茶褐色を呈する。
9	2	釣	遺存長 5.0	径0.5		
9	3	鉢				「元祐通寶」
9	4	ささら状竹製品	遺存長7.55	幅0.2~0.26		
10	1	常滑 瓶				長石無~小粒を多く混じえる暗灰色土。器表は暗茶褐色を呈する。
10	2	伊勢系土鍋				白色小粒を混じえる淡茶色土。煤が付着。
10	3	かわらけ	8.4	6.4	1.75	黑色無砂を多く混じえる淡茶色粉質土。
10	4	白磁口兀皿	8.65	5.6	1.75	素地は淡紅色緻密土。釉は青味乳白色を呈する。
11	1	手づくねかわらけ				黒色無砂。雲母片を多く混じえる暗褐色粉質土。
11	2	かわらけ	8.4	6.4	1.8	黑色無砂をわずかに混じえる粉質土。
14	1	かわらけ	8	6	1.6	黑色無砂を多く混じえる砂質土。
18	1	かわらけ	7.55	4.9	2.1	砂粒、白色泥粒を混じえる淡紅色土。
18	2	かわらけ	8.1	5.35	2.1	黑色砂、を混じえる淡褐色土。
18	3	かわらけ	8.4	5.4	2.2	黑色砂、赤褐色泥粒を多く混じえる淡茶色土。薄く煤が付着。
18	4	かわらけ	8.4	5.1	1.75	砂粒を混じえる淡橙色粉質土。内外面に煤が付着。
18	5	かわらけ	7.4	4.75	1.7	砂粒、白針をわずかに混じえる淡茶色粉質土。
18	6	かわらけ	7.7	5	1.5	砂粒を混じえる淡茶色粉質土。
18	7	かわらけ	12.2	8.05	3.0	黑色砂、白針を混じえる淡茶色粉質土。
18	8	かわらけ	12.0	6.45	3.4	黒色、白色砂を混じえる灰黑色粉質土。
18	9	かわらけ	12.8	8.9	3.6	黑色砂を混じえる淡茶色土。
18	10	常滑 瓶				白色細石を混じえる粘質灰黑色土。
18	11	常滑 瓶				白色細石を混じえる明灰色土。
18	12	山茶碗底系こね鉢			13.2	白色小石~細石を混じえる黄灰色土。
18	13	龜山 瓶				黒色、白色無砂を混じえる黒灰色土。二次焼成を受ける。
18	14	子供用草履芯	全長15.6	厚さ0.25		植物茎痕残る。
18	15	子供用草履芯	全長16.75	厚さ0.25		
18	16	草履芯	遺存長23.0	厚さ0.35		
18	17	草履芯	全長23.0	厚さ0.45		
18	18	草履芯	全長23.2	厚さ0.35		
18	19	通幽下駄	全長33.26	幅9.65	厚さ1.2	
18	20	横櫛	遺存長1.3	幅5.5		黒色漆が塗布される。
18	21	雲形	遺存長3.8			黒色漆が塗布される。
18	22	調度類脚部	全長5.9	幅2.4	厚さ1.5	黒色漆が塗布される。
18	23	六弁花唐リ	全長8.1	厚さ0.2		黒色漆が塗布される。
18	24	形代	全長13.5	幅0.49	厚さ0.3	
18	25	漆刷毛	全長10.1	厚さ0.4		先端部に黒色漆が付着する。
18	26	漆巾	全長15.0	径0.75		
18	27	漆器輪	(6.6)			遺存部は全面黒色漆が塗布される。文様はない。
18	28	漆器輪				黒色漆を塗布後、赤色漆による手描きの草花文。
18	29	漆器皿			7.1	黒色漆を塗布後、赤色漆による手描きの桜、竹文。
19	1	木製容器の蓋	遺存長30.5	幅7.0	厚さ0.7	
19	2	ヘラ	全長23.1	径1.2		
19	3	ヘラ	遺存長23.2	径1.9		
19	4	ヘラ	遺存長20.4	径1.1		
19	5	箸箸?	全長30.7	径1.1		
19	6	箸箸?	全長31.4	径1.1		
19	7	箸箸?	遺存長25.0	径0.9		

表4 遺物觀察表(2)

閥版 No.	種別	口徑 底徑 壓高	備考
19. 8 葵		全長19.0 檻0.7	
19. 9 葵		全長19.3 檻0.8	
19. 10 葵		全長20.2 檻0.6	
19. 11 葵		全長21.3 檻0.7	
19. 12 葵		全長21.5 檻0.8	
19. 13 葵		全長22.6 檻0.6	
19. 14 葵		全長23.8 檻0.9	
19. 15 葵		全長23.7 檻0.7	
19. 16 葵		全長23.3 檻0.7	
20. 1 葵		全長22.6 檻0.7	
20. 2 葵		全長22.1 檻0.7	
20. 3 葵		全長22.7 檻0.7	
20. 4 葵		全長22.7 檻0.7	
20. 5 葵		全長22.8 檻0.6	
20. 6 葵		全長22.3 檻0.6	
20. 7 葵		全長22.9 檻0.8	
20. 8 葵		全長22.7 檻0.8	
20. 9 葵		全長22.6 檻0.6	
20. 10 葵		全長22.0 檻0.6	
20. 11 葵		全長23.0 檻0.7	
20. 12 葵		全長23.9 檻0.7	
20. 13 葵		全長21.1 檻0.6	
20. 14 葵		全長23.1 檻0.7	
20. 15 葵		全長23.6 檻0.7	
20. 16 葵		全長22.8 檻0.7	
20. 17 葵		全長23.1 檻0.6	
20. 18 葵		全長23.7 檻0.8	
20. 19 葵		全長24.3 檻0.7	
20. 20 葵		全長23.1 檻0.7	
20. 21 葵		全長24.1 檻0.7	
20. 22 葵		全長24.1 檻0.6	
20. 23 葵		全長24.9 檻0.8	
20. 24 葵		遺存長23.6 檻0.7	
20. 25 葵		全長24.3 檻0.7	
20. 26 葵		全長23.1 檻0.7	
20. 27 葵		全長23.9 檻0.8	
20. 28 葵		全長24.5 檻0.7	
20. 29 葵		全長22.6 檻0.5	
20. 30 葵		全長23.7 檻0.7	
20. 31 葵		全長21.5 檻0.7	
20. 32 葵		全長24.7 檻0.7	
20. 33 葵		全長24.3 檻0.7	
20. 34 葵		全長24.5 檻0.6	
20. 35 葵		全長23.7 檻0.7	
20. 36 葵		全長22.85 檻0.6	
20. 37 葵		全長22.8 檻0.8	
20. 38 葵		全長21.0 檻0.7	

表4 遺物觀察表(3)

圖版	No.	種別	口徑	底徑	器高	備考
20	39	筍			全長21.8 徑0.7	
20	40	筍			全長21.6 徑0.7	
20	41	筍			全長22.7 徑0.7	
20	42	筍			全長21.3 徑0.8	
20	43	筍			全長22.4 徑0.7	
20	44	筍			全長21.0 徑0.7	
20	45	筍			全長20.7 徑0.7	
20	46	筍			全長22.5 徑0.6	
20	47	筍			全長22.2 徑0.7	
20	48	筍			全長22.1 徑0.6	
20	49	筍			全長21.3 徑0.6	
20	50	筍			全長21.3 徑0.6	
20	51	筍			全長20.2 徑0.6	
20	52	筍			全長20.8 徑0.7	
20	53	筍			全長19.5 徑0.8	
20	54	筍			全長20.0 徑0.7	
20	55	筍			全長20.3 徑0.7	
21	1	筍			全長21.6 徑0.7	
21	2	筍			全長21.0 徑0.7	
21	3	筍			全長20.0 徑0.8	
21	4	筍			全長21.3 徑0.6	
21	5	筍			全長20.9 徑0.7	
21	6	筍			全長21.6 徑0.7	
21	7	筍			全長21.8 徑0.7	
21	8	筍			全長21.5 徑0.7	
21	9	筍			全長22.7 徑0.7	
21	10	筍			全長22.5 徑0.7	
21	11	筍			全長21.7 徑0.7	
21	12	筍			全長21.3 徑0.7	
21	13	筍			全長21.8 徑0.7	
21	14	筍			全長22.2 徑0.5	
21	15	筍			遺存長22.2 徑0.8	
21	16	筍			全長22.8 徑0.6	
21	17	筍			全長23.4 徑0.8	
21	18	筍			全長21.0 徑0.7	
21	19	筍			全長23.2 徑0.8	
21	20	筍			全長23.6 徑0.7	
21	21	筍			全長23.3 徑0.8	
21	22	筍			全長23.6 徑0.7	
21	23	筍			全長24.7 徑0.7	
21	24	筍			全長24.4 徑0.6	
21	25	筍			全長24.7 徑0.7	
21	26	筍			全長23.7 徑0.7	
21	27	筍			全長23.3 徑0.7	
21	28	筍			全長23.1 徑0.7	
21	29	筍			全長22.7 徑0.8	
21	30	筍			全長21.0 徑0.7	

表4 遺物觀察表(4)

圖版	No.	種別	口徑	底徑	器高	備考
21	31	箸	全長23.6	徑0.6		
21	32	箸	全長24.4	徑0.7		
21	33	箸	全長23.6	徑0.7		
21	34	箸	全長24.7	徑0.7		
21	35	箸	全長24.2	徑0.6		
21	36	箸	全長24.6	徑0.7		
21	37	箸	全長23.0	徑0.7		
21	38	箸	全長22.4	徑0.6		
21	39	箸	全長21.2	徑0.7		
21	40	箸	全長20.7	徑0.5		
21	41	箸	全長21.0	徑0.8		
21	42	箸	全長22.2	徑0.7		
21	43	箸	全長22.5	徑0.7		
21	44	箸	全長21.9	徑0.7		
21	45	箸	全長22.7	徑0.8		
21	46	箸	全長22.7	徑0.8		
21	47	箸	全長22.5	徑0.7		
21	48	箸	全長22.1	徑0.6		
21	49	箸	全長21.3	徑0.6		
21	50	箸	全長21.2	徑0.6		
21	51	箸	全長21.0	徑0.7		
21	52	箸	全長18.2	徑0.9		
21	53	箸	全長19.3	徑0.5		
21	54	箸	全長20.3	徑0.6		
22	1	箸	全長22.5	徑0.7		
22	2	箸	全長23.3	徑0.9		
22	3	箸	全長24.1	徑0.6		
22	4	箸	全長22.2	徑0.7		
22	5	箸	全長22.9	徑0.7		
22	6	箸	全長22.1	徑0.6		
22	7	箸	全長22.6	徑0.7		
22	8	箸	全長22.2	徑0.8		
22	9	箸	全長22.6	徑0.7		
22	10	箸	全長22.5	徑0.6		
22	11	箸	全長22.6	徑0.8		
22	12	箸	全長23.8	徑0.8		
22	13	箸	全長22.8	徑0.6		
22	14	箸	全長23.9	徑0.8		
22	15	箸	全長24.5	徑0.6		
22	16	箸	全長23.7	徑0.7		
22	17	箸	全長21.5	徑0.8		
22	18	箸	全長24.0	徑0.6		
22	19	箸	全長24.5	徑0.6		
22	20	箸	全長21.0	徑0.7		
22	21	箸	全長22.1	徑0.8		
22	22	箸	全長22.6	徑0.6		
22	23	箸	全長24.3	徑0.8		

表4 遺物観察表(5)

団版 No.	種別	口径	底径	器高	備考
22_24 箸		全長23.5	徑0.7		
22_25 箸		全長23.0	徑0.7		
22_26 箸		全長23.8	徑0.7		
22_27 箸		全長24.5	徑0.7		
22_28 箸		全長23.9	徑0.7		
22_29 箸		全長24.7	徑0.7		
22_30 箸		全長23.9	徑0.7		
22_31 箸		全長23.5	徑0.7		
22_32 箸		全長23.5	徑0.7		
22_33 箸		全長19.1	徑0.6		
22_34 箸		全長24.3	徑0.6		
22_35 箸		全長28.6	徑1.1		
22_36 箸		全長21.3	徑0.7		
22_37 箸		全長22.6	徑0.7		
22_38 箸		全長22.6	徑0.7		
22_39 箸		全長23.4	徑1.0		
22_40 箸		全長21.7	徑0.9		
22_41 箸		全長21.7	徑0.7		
22_42 箸		全長22.8	徑0.7		
22_43 箸		全長21.5	徑0.7		
22_44 箸		全長16.8	徑0.7		
22_45 箸		全長22.6	徑0.6		
22_46 箸		全長21.2	徑0.9		
22_47 箸		全長22.5	徑0.7		
22_48 箸		全長20.9	徑0.7		
22_49 箸		全長20.3	徑0.6		
22_50 箸		全長16.7	徑0.6		
24_1 かわらけ		8.3	7.2	1.5	黒色、白色紗、白針を混じえる淡茶色粉質土
26_1 かわらけ		7.4	5.4	1.7	黒色紗を多く混じえる飴色粉質土
26_2 早島 親			4.5		黑色微砂、石英粒をわずかに混じえる紅味黄白色微砂土
26_3 木製容器の底		全長5.0	幅1.8	厚さ0.3	
26_4 人形		全長10.5	幅2.6	厚さ1.1	
26_5 不明木製品		全長9.4	幅1.5		
26_6 箸		全長23.6	徑0.6		
26_7 箸		全長23.2	徑0.7		
26_8 箸		全長23.6	徑0.7		
26_9 箸		全長23.7	徑0.6		
26_10 箸		全長21.9	徑0.5		
26_11 箸		全長24.8	徑0.6		
26_12 箸		全長24.5	徑0.5		
28_1 かわらけ		8.7	6.2	1.95	黒色紗を多く混じえる飴色粉質土
28_2 五郎頭		10.1	5.8	2.35	灰黑色微砂土
28_3 青磁折鉢					基地は黒色微砂を混じえる明灰色微砂粘質土、釉は灰綠色を呈する
28_4 青磁道弁文碗		13.4			基地は白色微砂、黒色微砂を混じえる明灰色粘質土、釉は淡草綠色を呈する
28_5 銀					「太平通寶」
28_6 銀					「皇宋通寶」
28_7 箸		全長18.0	徑0.7		

表4 遺物觀察表(6)

図版	No.	種別	口径	底径	高さ	備考
29	1	手づくねかわらけ	8.2	6.9	1.95	黒色砂を多く混じえる淡茶色砂質土 煤付着
29	2	かわらけ	8.1	6.5	1.75	黒色砂を多く混じえる橙色砂質土
29	3	かわらけ	7.1	4.5	1.5	橙色砂質土 混人物は少ない
29	4	かわらけ	7.5	5.55	1.65	淡茶～肌色砂質土 煤付着
29	5	かわらけ	7.8	5.15	1.85	黒色砂、白針を多く混じえる赤褐色弱砂質土
29	6	かわらけ	7.3	5.3	1.7	黒色砂を多く混じえる肌色砂質土
29	7	かわらけ	7.8	5.4	1.15	白色砂を多く混じえる淡茶色弱砂質土
29	8	かわらけ	8.1	5.5	1.75	黒色砂、泥引粒を混じえる淡茶色弱砂質土
29	9	かわらけ	8.0	5.15	2.0	黒色砂を多く混じえる淡茶色弱砂質土
29	10	かわらけ	8.7	5.7	2.1	黒色砂を多く混じえる淡茶色強砂質土
29	11	穿孔かわらけ	8.5	5.8	1.8	黒色砂を混じえる淡茶色弱粉質土
29	12	かわらけ	12.0	8.25	3.1	黒色砂を多く混じえる淡茶色砂質土
29	13	かわらけ	12.1	7.3	3.1	黒色砂を混じえる暗肌色弱粉質土
29	14	かわらけ	12.8	8.8	3.3	黒色砂を混じえる淡褐色弱砂質土
29	15	かわらけ	13.1	9.35	3.3	泥岩粒、白針を多く混じえる橙色弱砂質土
29	16	かわらけ	13.2	7.6	3.05	黒色砂を多く混じえる淡茶色弱砂質土 黒色漆を全面に帯布する
29	17	漆塗瓦質火鉢				3.7 淡黄～明灰色刷毛質密塞土 外底部はヘラ切り
29	18	薬臼 壁型入子	8.6	5.6		白色微細をわずかに混じえる暗灰色弱粉質密塞土
29	19	深美 壺				長石微粒、石英微粒・小粒を多く混じえる灰～暗灰色微密土
29	20	常滑？ こね鉢				石英微粒、長石小粒を多く混じえる暗灰色微密土
29	21	山茶園窓系こね鉢				白色微細・小粒を多く混じえる灰～暗灰色微密土
29	22	常滑 小型	10.0			白色微細・小粒を多く混じえる暗灰色微密土 器表は明茶色を呈する
29	23	常滑 壺？				白色小粒をとでも多く混じえる暗灰色土 軽い二次焼成を受ける
29	24	常滑 壺？				白色微細・小粒を多く混じえる灰～暗灰色微密土
29	25	常滑 瓶				白色微細・中粒を多く混じえる灰色微密土 器表は明茶色を呈する
29	26	常滑 壺				白色微細・中粒を多く混じえる暗灰色土 器表は明茶～糞褐色を呈する
29	27	青磁碗	10.8	3.7	1.7	素地は白色微粒を多く混じえる灰色弱粘質密塞土 脚は暗草綠～明灰綠色
29	28	青磁蓮弁文瓶	12.9			素地は白色微粒を多く混じえる明灰白色粘質密塞土 脚は草綠色を呈する
29	29	青磁蓮弁文折枝小鉢	13.0			素地は黑色微粒をやや混じえる明灰白色粘質密塞土 脚は暗オリーブ色
29	30	白磁口元皿	11.2	6.6	2.7	素地は砂、白色粒を混じえる灰味白色弱粘質密塞土 脚は乳白色
29	31	白磁口元皿	11.8			素地は砂、白色粒をやや混じえる灰味白色弱粘質密塞土 脚は乳白色
29	32	青白磁壺の蓋	蓋径9.5	蓋高1.4		素地は黑色砂、白粒をやや混じえる白色弱粘質密塞土 脚は淡水色を呈する
29	33	釘状鋲製品	全長7.2	徑0.3		
29	34	釘	遺存長8.5	徑0.5		
29	35	鏡				「天祐通寶」
29	36	鏡				「景祐元寶」
29	37	滑石鍋板用達中品				
29	38	鏡	遺存長1.5×5.1×1.0			暗灰色を呈する黑色粘板岩
29	39	平足軸用頭石	遺存長9.1×6.3×2.5			白色微粒、雲母片を多く混じえる明灰色瓦質密塞土
29	40	馬鹿鼻殿 砥石	遺存長8.6×3.1×1.2			明灰色を呈する泥岩
29	41	馬鹿鼻山 砥石	遺存長8.3×3.9×1.1			黃味淡紅色を呈する泥岩
29	42	上野 砥石	全長13.7×5.9×2.7			淡綠色を呈する泥灰岩
30	1	漆器皿	9.6	6.8	1.2	黒色漆を塗布 遺存面に文様はない
30	2	漆器皿	7.6	5.4	1.2	黒色漆を塗布の後、赤色漆による手描きの筆竹文
30	3	漆器皿	9.9	(8.0)	1.0	黒色漆を塗布の後、赤色漆による手描きの柳葉草文
30	4	漆器皿	9.0	7.1	1.2	黒色漆を塗布の後、赤色漆による手描きの醉葉草文
30	5	漆器皿		7.8		黒色漆を塗布の後、赤色漆によるスタンプの梅文

表4 遺物観察表(7)

図版 No.	種別	口径	底径	器高	備考
30 6 漆器輪				(7.7)	黒色漆を施す後、赤色漆による手描きの菊文
30 7 板杓子		全長24.9	幅5.6	厚さ1.1	
30 8 曲物の蓋		遺存長19.3	幅6.7	厚さ0.6	一部焦げる
30 9 葵		全長25.0	径0.7		
30 10 葵		全長24.0	径0.6		
30 11 葵		全長20.8	径0.6		
30 12 葵		全長21.7	径0.7		
30 13 葵		全長23.0	径0.8		
31 1 かわらけ		7.7	6.0	1.6	黒色砂を多く混じえる淡橙色弱粉質土
31 2 かわらけ		8.0	5.65	1.8	白灰を多く混じえる淡橙～橙色粉質土
31 3 かわらけ		7.2	4.2	2.25	黒色砂を多く混じえる橙色強粉質土
36 1 常滑 茶		37.0			白色小石～小粒を混じえる暗灰色土 器表は茶色を呈する
36 2 かわらけ		13.0	6.95	3.4	白色砂、赤褐色泥粒を混じえる淡橙色粉質土
38 1 かわらけ		7.15	5.1	1.6	黒色微砂を多く混じえる淡橙～赤褐色土
38 2 かわらけ		7.3	5.2	1.6	黒色微砂を多く混じえる淡橙色 内外面に煤付着
38 3 かわらけ		7.2	4.3	1.9	黒色微砂を多く混じえる淡橙色粉質土
38 4 かわらけ		7.3	4.8	1.7	黒色微砂を多く混じえる淡橙色粉質土
38 5 かわらけ		7.8	5.75	1.8	黒色、白色砂を混じえる肌粉色粉質土
38 6 かわらけ		10.1	5.8	3.0	黒色微砂を多く混じえる赤褐色～淡橙色粉質土
38 7 かわらけ		10.25	4.4	3.6	雲母片を混じる橙色土
38 8 かわらけ		11.8	5.1	3.5	白灰、雲母片を混じえる橙色弱粉質土
38 9 かわらけ		12.5	7.4	3.5	黒色微砂を多く混じえる橙色弱粉質土
38 10 常滑 茶		35.4			白色、黒色微粒をわずかに混じえる強粉質土 器表は暗茶色を呈する
38 11 常滑 茶		27.4			白色小石～小粒を混じえる暗灰色土 器表は灰茶色を呈する 二次焼成
38 12 常滑 茶					白色微砂～小石を混じえる暗灰色土 器表は暗茶色を呈する
38 13 常滑 茶					白色、黒色粒を混じえる暗灰色土 器表は茶～暗茶色を呈する
38 14 天草 磁石		遺存長3.7×6.2×3.0			凝灰岩
39 1 瓶					『天祐通寶』
40 1 かわらけ		8.1	5.8	1.1	黒色微砂を多く混じえる淡橙色砂質土 内外面に煤付着
40 2 かわらけ		7.1	5.2	1.7	黒色微砂を多く混じえる淡橙色土
40 3 かわらけ		11.6	7.4	3.3	黒色微砂を多く混じえる淡橙色土
40 4 常滑 小瓶					白色小石～小粒を混じえる暗灰色土
41 1 かわらけ		7.25	5.9	1.6	黒色砂を多く混じえる淡橙色弱粉質土 内外面に煤付着
41 2 かわらけ		7.0	5.0	1.8	黒色微砂を多く混じえる橙色土
41 3 かわらけ		7.2	5.1	1.7	黒色砂を多く混じえる淡茶色弱粉質土
41 4 かわらけ		8.7	6.1	1.6	白色微砂を多く混じえる暗褐色弱粉質土
41 5 かわらけ		8.0	4.8	1.6	黒色微砂を多く混じえる橙色土
41 6 かわらけ		7.8	5.6	1.6	黒色微砂、泥岩粒を多く混じえる淡橙色粉質土
41 7 かわらけ		8.0	5.6	1.6	黒色微砂を多く混じえる橙色土
41 8 かわらけ		7.6	5.3	1.5	黒色微砂を多く混じえる淡褐色土
41 9 かわらけ		8.0	5.7	1.5	黒色微砂を多く混じえる淡橙色砂質土
41 10 かわらけ		7.75	5.7	1.1	白灰、白粒を多く混じえる淡茶色弱粉質土
41 11 かわらけ		7.3	5.0	1.15	黒色砂を混じえる淡橙色弱粉質土
41 12 かわらけ		7.0	4.1	1.5	黒色微砂を混じえる淡橙色土
41 13 かわらけ		8.3	6.2	1.8	黒色微砂を多く混じえる暗淡橙色粉質土
41 14 かわらけ		7.6	5.8	1.7	黒色微砂を混じえる淡橙色土
41 15 かわらけ		8.1	5.8	1.8	黒色微砂、泥岩粒を混じえる淡橙色弱粉質土

表4 遺物観察表(8)

図版	No.	種別	口径	底径	器高	備考
41	16	かわらけ	7.4	3.2	1.5	黒色微砂を混じえる淡褐色土
41	17	かわらけ	8.0	5.4	1.76	雲母片を混じえる肌色粉質土 内外面に焼付着
41	18	かわらけ	7.4	4.5	1.6	黒色微砂を混じえる橙色弱砂質土 内外面に焼付着
41	19	かわらけ	7.3	4.1	1.6	黒色微砂を混じえる橙色弱砂質土 内外面に焼付着
41	20	かわらけ	8.0	5.3	1.9	黒色微砂を多く混じえる淡褐色粉質土 内外面に焼付着
41	21	かわらけ	8.0	5.3	1.8	黒色微砂を混じえる橙色弱砂質土
41	22	かわらけ	7.6	4.6	1.4	黒色微砂を混じえる淡茶色砂質土
41	23	かわらけ	7.5	5.1	1.9	黒色微砂を混じえる橙色土
41	24	かわらけ	7.8	5.8	1.7	黒色微砂を混じえる淡褐色粉質土
41	25	かわらけ	7.6	4.85	1.7	黒色微砂を混じえる淡褐色土
41	26	かわらけ	7.6	4.6	1.7	黒色微砂を混じえる橙色土 内外面に焼付着
41	27	かわらけ	8.1	6.1	1.6	黒色微砂を混じえる橙色粉質土
41	28	かわらけ	7.3	5.1	1.5	黒色微砂を混じえる淡褐色弱砂質土
41	29	かわらけ	7.8	5.3	1.8	黒色微砂を混じえる淡褐色粉質土
41	30	かわらけ	7.9	5.8	1.9	黒色微砂を混じえる橙色土
41	31	かわらけ	7.8	5.2	1.9	黒色微砂を混じえる淡褐色弱砂質土
41	32	かわらけ	7.1	5.6	1.8	黒色微砂を多く混じえる淡褐色弱砂質土
41	33	かわらけ	7.7	5.7	1.7	雲母片を混じえる橙色弱砂質土
41	34	かわらけ	7.2	4.0	1.8	黒色微砂を混じえる淡褐色土
41	35	かわらけ	7.7	4.8	1.8	泥岩粒、黒色微砂を混じえる淡褐色粉質土
41	36	かわらけ	7.6	5.2	1.9	黒色微砂を混じえる淡褐色土
41	37	かわらけ	7.0	5.6	1.7	黒色微砂を混じえる淡褐色弱砂質土
41	38	かわらけ	7.8	6.3	1.7	泥岩粒を多く混じえる淡褐色得粉質土
41	39	かわらけ	7.65	5.0	1.95	黑色微砂を混じえる肌色粉質土
41	40	かわらけ	6.9	5.1	1.6	黒色微砂を多く混じえる淡茶色砂質土
41	41	かわらけ	8.0	5.6	1.7	黒色微砂を混じえる淡褐色弱砂質土
41	42	かわらけ	7.8	5.6	1.7	黒色微砂を多く混じえる淡褐色弱砂質土 内外面に焼付着
41	43	かわらけ	7.4	4.8	1.6	黒色微砂を混じえる橙色粉質土
41	44	かわらけ	8.2	5.4	2.0	黒色微砂を混じえる淡褐色土
41	45	かわらけ	7.5	4.5	1.6	黒色微砂を混じえる肌色土
41	46	かわらけ	8.0	5.0	2.0	黒色微砂を混じえる肌色土
41	47	かわらけ	7.0	4.5	1.8	黒色微砂を多く混じえる肌色粉質土
41	48	かわらけ	7.4	5.6	1.9	黒色微砂を混じえる淡褐色土
41	49	かわらけ	8.1	5.7	1.8	黒色微砂を多く混じえる淡褐色弱砂質土
41	50	かわらけ	7.4	5.2	1.8	黒色微砂を多く混じえる橙色粉質土
41	51	かわらけ	8.2	6.2	2.0	黒色微砂を多く混じえる橙色粉質土
41	52	かわらけ	7.2	4.6	2.1	黒色微砂、泥岩粒を多く混じえる淡褐色粉質土
41	53	かわらけ	7.0	4.9	2.0	黒色微砂を混じえる淡褐色砂質土
41	54	かわらけ	7.0	4.2	2.2	黒色微砂を混じえる淡褐色粉質土 内外面に焼付着
41	55	かわらけ	10.2	5.2	2.1	黒色微砂を多く混じえる淡褐色粉質土
41	56	かわらけ	11.0	6.1	3.0	黒色微砂を混じえる淡褐色粉質土
41	57	穿孔かわらけ	10.4	6.6	3.2	黒色微砂を混じえる橙色粉質土
41	58	かわらけ	10.9	7.4	3.2	黒色微砂を混じえる淡褐色粉質土
41	59	かわらけ	12.3	8.1	3.7	黒色微砂を混じえる淡褐色弱砂質土
41	60	かわらけ	12.7	7.0	3.3	泥岩粒、黒色微砂を多く混じえる暗褐色砂質土
41	61	かわらけ	11.1	6.7	2.1	泥岩粒を多く混じえる橙色弱砂質土
41	62	かわらけ	11.8	7.8	3.0	黒色微砂を混じえる橙色弱砂質土

表4 遺物観察表(9)

開版 No.	種別	口径	底径	器高	備考
41 63	かわらけ	12.1	6.5	3.3	泥岩粒、黒色微砂を多く混じえる灰褐色粉質土
41 64	かわらけ	12.1	7.8	3.0	黒色微砂を混じえる褐色土
41 65	かわらけ	12.4	8.0	3.1	泥岩粒を多く混じえる淡褐色粉質土
41 66	かわらけ	13.0	6.8	3.6	黒色微砂を多く混じえる褐色粉質土
41 67	かわらけ	12.8	6.2	3.5	黒色微砂を混じえる褐色粉質土
41 68	かわらけ	12.6	6.6	3.65	黒色微砂を混じえる褐～淡褐色土
41 69	軒平瓦				黒色繊～小粒、白色小粒、雲母片を混じえる灰褐色密土
42 1	瀬戸四貫壺	12.3			胎土は石英粒を混じる灰白色粘質土。釉は草綠色透明地
42 2	常滑 小瓶	12.2			白色小石～粒、黑色砂をわずかに混じえる灰白色粘質密土。器表は明茶色
42 3	常滑 壺				長石微粒をやや混じる断灰褐色密土。器表は茶色を呈する
42 4	常滑 壺	8.0			白色微砂を混じる黒灰色土。器表は灰色を呈する
42 5	常滑 壺				長石、石英粒を多く混じる灰褐色粘質土。器表は暗茶褐色を呈する
42 6	常滑 壺				長石小粒を混じる灰褐色粘質土。器表は暗茶色を呈する
42 7	常滑 壺				白色小石～粒を多く混じえる暗灰色粘質土。器表は暗茶褐色を呈する
42 8	常滑 壺				白色小石～粒をわずかに混じえる灰褐色粘質密土。器表は暗褐色を呈する
42 9	常滑？ こね鉢				白色小石～粒を多く混じえる暗灰色土。器表は暗赤茶色
42 10	すり常滑				遺存長5.8×4.7×1.0
42 11	山茶碗京系こね鉢	32.6	15.7	11.8	白色粘土を多く混じる灰色粘質土 燐付有
43 1	青磁合口碗				素地は黑色微砂を多く混じる灰色粘質密土。釉は淡草綠色を呈する
43 2	青磁刻花唐介文碗	11.7	3.3	5.1	素地は黑色微砂を多く混じる明灰白色粘質密土。釉は暗草綠色を呈する
43 3	青磁蓮弁文碗	12.6			素地は白色微砂を混じる暗灰色粘質密土。釉は暗青色を呈する
43 4	青磁蓮弁文碗	16.0			素地は黒色微砂を混じる灰白色粘質密土。釉は青緑色を呈する
43 5	青磁蓮弁文碗	14.5			素地は黒色微砂を混じる明灰白色粘質密土。釉は草綠色を呈する
43 6	青磁蓮弁文碗	15.8			素地は黒色微砂を多く混じる暗灰色粘質密土。釉は暗草綠色を呈する
43 7	青磁蓮弁文碗	(4.7)			素地は黒色微砂を多く混じる灰白色粘質密土。釉は草綠色を呈する
43 8	青磁蓮弁文碗		5.6		素地は白色微砂を混じる暗灰色粘質密土。釉は暗オリーブ色を呈する
43 9	青磁碗		5.2		素地は黑色微砂を混じる明灰白色粘質密土。釉はオリーブ色を呈する
43 10	青磁折腹鉢	11.4	6.5	3.8	素地は白色、黒色微砂を混じる明灰白色粘質密土。釉は暗灰綠色を呈する
43 11	青磁蓮弁文鉢	13.2			素地は黒色微砂を混じる灰綠色粘質密土。釉は暗オリーブ色を呈する
43 12	青磁蓮弁文折線小鉢	11.9			素地は黒色、白色微砂を混じる灰白色粘質密土。釉は灰綠色を呈する
43 13	青磁蓮弁文折線鉢				素地は黒色微砂を多く混じる明灰白色粘質密土。釉は草綠色を呈する
43 14	青磁双魚文鉢	11.0			素地は黃味灰白色粘質密土。釉は暗オリーブ色を呈する
43 15	青磁盤		10.6		素地は灰白色粘質密土。釉は草綠色を呈する
43 16	青磁盤		10.3		素地は橙色粘質密土。釉は乳白綠色を呈する 強い二次燒成を受ける
43 17	白磁水注	9.6	8.8	19.6	素地は黑色微砂をやや多く混じる淡灰色粘質密土。釉は青味乳白色
43 18	白磁口元碗	14.5			素地は黑色微砂をわずかに混じる明灰色粘質密土。釉は暗味灰色を呈する
43 19	白磁口元皿	10.6			素地は黑色微砂を多く混じる明灰白色粘質密土。釉は灰味乳白色を呈する
43 20	白磁塑作口口元皿	11.0			素地は白色粘質密土。釉は乳白色を呈する ごく軽い二次燒成を受ける
43 21	白磁塑作口口元皿	14.7			素地は白色粘質密土。釉は乳白色を呈する
43 22	白磁塑作印花文皿		3.4		素地は白色粘質土。釉は乳白色を呈する
43 23	青白磁焼作り合子身 受径8.9 高台径5.1 器高2.5				素地は明灰色粘質密土。釉は淡水色を呈する
44 1	銅製水滴容器	5.9	5.3	2.3	
44 2	銅製水滴	1.6	4.2	2.6	
44 3	銅製灯明台		幅1.1 厚さ0.15		
44 4	銅製火箸？		遺存長16.5 幅0.4		
44 5	刀子		遺存長14.9 幅2.0		
44 6	刀子		遺存長14.1 幅1.3		

表4 遺物観察表(10)

編版	No.	種別	口径	底径	器高	備考
44	7	釘			全長6.6 径0.5	
44	8	錢				「開元通寶」背面は「月」、「京」
44	9	錢				「祥符通寶」
44	10	錢				「皇宋通寶」
44	11	錢				「熙寧通寶」
44	12	錢				「元祐通寶」
44	13	錢				「元豐通寶」
44	14	錢				「元祐通寶」
44	15	錢				「元祐通寶」
44	16	錢				「元祐通寶」
44	17	錢				「元祐通寶」
44	18	錢				「紹聖元寶」
44	19	錢				「聖宋元寶」
44	20	錢				「大觀通寶」
44	21	算再加工品	全長7.7	幅1.0	厚さ0.3	
44	22	瓦	遺存長12.4	幅1.0	厚さ0.3	
44	23	鳴滌山田 砥石	遺存長8.5	幅4.1	厚さ0.8	淡緑色を呈する泥岩
44	24	鳴滌中山 砥石	遺存長7.3	幅3.1	厚さ1.6	淡黄色を呈する泥岩
44	25	天草 砥石	遺存長8.3	幅5.1	厚さ5.2	淡紅灰色を呈する泥灰岩
45	1	達爾下駄	遺存長19.0	幅4.1	厚さ1.9	
45	2	達爾下駄	全長22.3	幅9.5	厚さ1.2	
45	3	達爾下駄	遺存長17.0	幅9.5	厚さ1.1	
45	4	草履芯	全長23.7	幅10.2	厚さ0.3	
45	5	箸	全長19.5	径0.6		
45	6	箸	全長21.5	径0.6		
45	7	箸	全長21.1	径0.6		
45	8	箸	全長26.3	径0.7		
45	9	箸	全長25.3	径0.6		
45	10	漆器輪			6.8	
45	11	漆器輪			7.8	
45	12	漆器輪	9.0	6.7	1.3	
45	13	漆器輪			8.8	
45	14	板状円板		径7.1	厚さ1.3	
45	15	形代	全長21.5	幅2.3	厚さ0.3	
48	1	かわらけ	7.2	6.1	2.4	黒色、白色砂を混じえる淡褐色粉質粘土
48	2	かわらけ	10.8	5.65	2.9	黒色微砂を多く混じえる淡褐色土
48	3	かわらけ	10.9	6.3	3.05	黒色、白色砂を混じえる淡橙色土
48	4	かわらけ	11.1	6.3	3.0	黒色微砂を混じえる淡橙色粉質土
48	5	かわらけ	11.4	6.8	3.2	黒色、白色砂を混じえる淡橙色粉質土
48	6	かわらけ	12.4	6.8	3.45	黒色砂を多く混じえる淡褐色土
48	7	かわらけ	12.5	7.9	3.5	黒色砂、白針を多く混じえる橙色土
48	8	かわらけ	12.3	7.4	3.4	黒色砂、泥粒を多く混じえる淡茶色粉質土
48	9	かわらけ	12.3	7.4	3.3	黒色砂を混じえる明橙色土
48	10	かわらけ	12.6	7.8	3.6	黒色砂を多く混じえる淡橙色粉質土
48	11	かわらけ	13.1	7.6	3.4	黒色微砂を混じえる淡褐色粉質粘土
48	12	かわらけ	14.0	7.35	3.5	黒色砂をとれど多く混じえる橙色土
48	13	かわらけ	13.8	7.95	3.6	黒色砂を多く混じえる明橙色土

表4 遺物観察表 (11)

図版	No.	種別	口径	底径	器高	備考
50	1	かわらけ	12.6	7.3	3.45	黒色微砂、白針を混じえる淡橙色粉質土
50	2	かわらけ	12.6	7.3	3.45	黒色微砂、白針を混じえる淡橙色粉質土
51	1	桜小かわらけ	4.2	3.0	0.86	黒色微砂を混じえる桜色砂質土
51	2	桜小かわらけ	4.2	3.0	0.9	黒色微砂を混じえる桜色砂質土
51	3	かわらけ	7.6	5.6	1.4	黒色微砂を混じえる淡橙色砂質土
51	4	かわらけ	7.9	5.15	1.8	白針を多く混じえる桜色粉質土
51	5	かわらけ	7.8	5.1	1.6	黒色微砂を多く混じえる淡橙色泥粉質土
51	6	かわらけ	7.8	4.6	1.7	泥岩粒を多く混じえる淡橙色泥粉質土
51	7	かわらけ	7.8	4.9	2.0	黒色微砂を多く混じえる淡橙色砂質土
51	8	かわらけ	7.4	4.4	1.7	泥岩粒を混じえる淡橙色泥粉質土
51	9	かわらけ	8.1	5.9	1.8	黒色微砂を多く混じえる淡橙色砂質土
51	10	かわらけ	7.7	4.5	1.75	白針を混じえる淡橙色粉質土
51	11	かわらけ	7.8	5.1	1.8	白色、黒色微砂を混じえる淡橙色粉質土
51	12	かわらけ	8.2	4.8	2.1	白色、黒色微砂を混じえる淡橙色粉質土
51	13	かわらけ	7.4	4.6	2.1	黒色砂を多く混じえる淡橙色泥粉質土
51	14	かわらけ	7.8	5.1	1.8	黒色微砂を多く混じえる淡橙色粉質土
51	15	かわらけ	7.5	5.05	2.25	黒色微砂を多く混じえる淡橙色粉質土
51	16	かわらけ	7.2	4.2	2.2	黒色微砂を多く混じえる淡橙色泥粉質土
51	17	かわらけ	6.7	4.2	2.1	雲母片を混じえる淡橙色泥粉質土
51	18	かわらけ	7.6	4.5	2.2	黒色微砂を混じえる桜色砂質土
51	19	かわらけ	7.0	4.2	2.1	泥岩粒を混じえる淡橙色泥粉質土
51	20	かわらけ	7.3	4.6	2.0	黒色微砂を混じえる淡橙色泥粉質土
51	21	かわらけ	7.1	4.7	2.0	雲母片を混じえる淡橙色粉質土 内外面に煤付着
51	22	かわらけ	7.0	5.0	2.0	黒色微砂を混じえる淡橙色粉質土
51	23	かわらけ	7.1	4.9	2.2	白針を混じえる桜色泥粉質土
51	24	かわらけ	7.1	4.3	2.2	黒色微砂を混じえる淡橙色泥粉質土
51	25	かわらけ	7.6	4.5	1.9	黒色微砂を混じえる桜色粉質土
51	26	かわらけ	7.1	4.2	2.3	黒色微砂を混じえる桜色泥粉質土 内外面に煤付着
51	27	かわらけ	7.6	5.2	2.1	泥岩粒を多く混じえる桜色砂質土
51	28	かわらけ	7.2	4.1	2.1	黒色微砂を多く混じえる桜色粉質土
51	29	かわらけ	7.1	4.2	2.1	黒色微砂を混じえる淡橙色泥粉質土
51	30	かわらけ	7.6	4.3	2.2	黒色微砂を混じえる淡橙色砂質土
51	31	かわらけ	7.1	4.7	2.0	泥岩粒を混じえる淡橙色泥粉質土
51	32	かわらけ	7.0	4.3	2.2	黒色微砂を混じえる淡橙色泥粉質土
51	33	かわらけ	7.5	4.7	2.1	黒色微砂を混じえる淡橙色粉質土
51	34	かわらけ	7.2	4.3	2.15	白色、黒色微砂を混じえる淡橙色土
51	35	かわらけ	5.5	4.7	4.25	黒色砂、白針を混じえる淡橙色粉質土 内外面に煤付着
51	36	かわらけ	7.3	4.2	2.15	黒色微砂、白針を混じえる明橙色粉質土
51	37	かわらけ	7.6	5.0	2.0	黒色微砂を混じえる淡橙色泥粉質土
51	38	かわらけ	10.2	4.8	3.0	黒色微砂を混じえる桜色砂質土
51	39	かわらけ	11.0	6.6	3.5	黒色微砂を混じえる淡橙色粉質粘土 内外面煤付着
51	40	かわらけ	11.0	5.8	3.0	黒色微砂を多く混じえる桜色砂質土
51	41	かわらけ	11.1	6.6	3.2	泥岩粒を混じえる桜色砂質土
51	42	かわらけ	11.0	6.0	3.1	白針を混じえる暗橙色砂質土
51	43	かわらけ	12.1	6.8	3.0	泥岩粒を多く混じえる淡橙色泥粉質土
51	44	かわらけ	12.6	8.0	3.1	黒色微砂を混じえる淡橙色粉質土 内外面に煤付着
51	45	かわらけ	12.9	8.3	3.45	白色、黒色微砂を多く混じえる桜色土 外面に煤付着

表4 遺物観察表(12)

図版	No.	種別	口径	底径	器高	備考
51	46	かわらけ	11.8	7.0	3.6	黒色微砂、雲母片を多く混じえる肌色粉質土
51	47	かわらけ	12.6	7.15	3.05	黒色微砂を多く混じえる褐色粉質土
51	48	かわらけ	12.7	8.1	4.55	白色、黒色微砂を混じえる明褐色粉質土 内外面に縦付着
51	49	平瓦				白色微砂～小石を多く混じえる瓦質土 器表は橙色を呈する
51	50	瓦質複鉢型火鉢	11.1	30.0	9.55	黒色微砂を多く混じえる淡黄色粉質土
52	1	薬臼 四耳壺				胎土は淡石微砂を混じえる明灰色粘質細密土 軸は白湯気味の淡緑色
52	2	薬臼 磨型入子	7.6	4.3	2.7	胎土は白色微砂を混じえる灰白色粗良土
52	3	薬臼 磨型入子	9.2	4.8	3.1	胎土は白色砂を少量混じえる黄褐色粉質土
52	4	常滑 麻			28.6	胎土は白色小石～小粒を多く混じえる暗灰褐色土 器表は暗茶色を呈する
52	5	常滑 麻			32.3	胎土は淡石、石英を多く混じえる黄茶色土
52	6	常滑 麻				胎土は淡石を多く混じえる黄橙色土
52	7	常滑 麻				胎土は長石小～颗粒を多く混じえる灰褐色土
52	8	常滑 麻				胎土は長石小～颗粒を混じえる灰褐色土 器表は赤褐色を呈する
52	9	青磁割文瓶	13.0			素地は黒色微砂を少量混じえる灰白色粘質土 軸は白湯気味の淡緑色
52	10	青磁反魚文鉢			6.6	素地は黒色微砂を少量混じえる灰白色粘質細密土
52	11	白磁口丸皿			10.2	素地は白色微砂を混じえる白色粘質細密土
52	12	白磁型作り小皿	6.8	2.35	1.1	素地は淡黄味白色微密土 軸は乳白色を呈する
52	13	白磁型作り小皿				素地は白色微砂土 軸は淡綠味乳白色を呈する
52	14	鳴滝中山 砥石				遺存長:0×3.3×0.6 淡黄色を呈する泥岩
52	15	天草 砥石				遺存長:5.1×5.1×1.2 淡緑色を呈する凝灰岩
52	16	天草 砥石				遺存長:7.1×6.2×6.1 淡褐色を呈する凝灰岩
52	17	帝石鍋				再加工途中品
52	18	鏡				「嘉祐通寶」
57	1	かわらけ	7.4	4.5	1.8	白色、黒色微砂を多く混じえる明褐色粉質土
57	2	かわらけ	7.3	5.15	2.05	白色、黒色微砂を多く混じえる淡茶色粉質土
57	3	かわらけ	7.2	4.55	2.0	白色、黒色微砂を多く混じえる明褐色粉質土
57	4	かわらけ	7.5	4.7	1.3	白色、黒色微砂を混じえる淡褐色粉質土
57	5	かわらけ	12.7	8.0	3.15	黒色微砂を多く混じえる橙色粉質土
57	6	かわらけ	12.1	7.2	2.9	白色、黒色微砂を多く混じえる明褐色粉質土
57	7	かわらけ	12.9	7.25	3.55	白色、黒色微砂を多く混じえる明褐色粉質土
57	8	かわらけ	12.7	8.4	3.4	黒色微砂を混じえる橙色土
57	9	かわらけ	13.0	8.1	3.05	黒色微砂、雲母片を混じえる淡褐色粉質土
57	10	かわらけ	13.7	7.4	3.45	泥岩粒、黒色微砂を多く混じえる淡褐色粉質土
57	11	かわらけ	13.76	8.2	3.8	黒色微砂を混じる淡褐色粉質土
57	12	かわらけ	13.7	6.6	3.85	黒色微砂、雲母片を混じえる淡褐色粉質土
57	13	かわらけ	13.9	7.6	3.9	黒色微砂、白針を混じえる淡褐色土
57	14	かわらけ	13.7	7.5	3.85	白色、黒色微砂を混じえる淡褐色粉質精良土
57	15	白磁口丸皿	11.0	5.8	3.4	素地は白色粒を多く混じえる白色土 軸は乳灰色を呈する
57	16	かわらけ	7.8	4.6	1.9	白針を混じる淡褐色粉質精良土
57	17	かわらけ	7.4	5.0	2.0	黒色微砂を混じえる淡褐色粉質土
57	18	かわらけ	7.4	5.4	2.0	黒色微砂を混じえる淡褐色粉質土
57	19	かわらけ	6.8	4.0	2.1	黒色微砂を多く混じえる淡褐色粉質土
57	20	かわらけ	11.8	8.0	3.6	黒色微砂を混じる淡褐色粉質土
57	21	晶石				遺存長:10.5×6.9×2.2 淡石製
57	22	かわらけ	7.4	4.0	2.2	黒色微砂を混じえる淡褐色粉質土
57	23	かわらけ	7.1	3.5	2.1	黒色微砂を混じえる淡褐色粉質土
57	24	かわらけ	7.4	4.15	2.0	黒色微砂を混じる淡褐色粉質土

表4 遺物觀察表(13)

図版 No.	種別	口径	底径	器高	備考
57 25	かわらけ	7.6	4.3	2.3	黒色微渺を混じえる橙色砂質土
57 26	かわらけ	7.3	4.1	2.7	白色、黒色微渺を混じえる橙色砂質土
57 27	かわらけ	10.4	6.8	2.8	黒色微渺、雲母片を多く混じえる橙色砂質土
57 28	かわらけ	10.6	7.0	3.1	黒色微渺、雲母片を混じえる橙色砂質土
57 29	かわらけ	12.0	7.7	3.6	黒色微渺、雲母片を多く混じえる淡橙色砂質土
57 30	かわらけ	12.8	8.2	3.3	黒色微渺を混じえる淡橙色粉質土
57 31	かわらけ	13.0	7.9	3.5	白色、黒色微渺を混じえる淡橙色粉質土
57 32	かわらけ	13.4	6.6	3.4	黒色微渺を混じえる淡橙色粉質土
57 33	かわらけ	12.6	7.8	3.3	黒色微渺を混じえる淡橙色粉質土
57 34	かわらけ	12.8	7.1	3.3	黒色微渺、雲母片を多く混じえる淡橙色砂質土
57 35	かわらけ	12.0	7.3	3.4	白色、黒色微渺を混じえる淡橙色砂質土
57 36	かわらけ	12.8	6.4	3.6	白色、黒色微渺を混じえる淡橙色粉質土
58 1	かわらけ	8.0	6.1	1.7	黒色微渺を混じえる暗淡橙色粉質土
58 2	かわらけ	8.0	5.6	1.8	黒色微渺を多く混じえる暗淡橙色粉質土
58 3	かわらけ	7.6	5.8	1.7	白色、黒色微渺を混じえる淡茶～淡褐色粉質土
58 4	かわらけ	7.4	4.7	2.1	雲母片を混じる赤褐色粉質土
58 5	かわらけ	7.6	5.0	2.1	黒色微渺を混じえる暗淡橙色砂質土 内外面煤着
58 6	かわらけ	7.6	5.1	1.8	黒色微渺、泥岩粒を多く混じえる淡橙色粉質土
58 7	かわらけ	7.3	5.0	2.15	黒色微渺を混じえる淡橙色砂質土
58 8	かわらけ	7.2	4.4	2.2	白色、黒色微渺を混じえる淡橙色砂質土
58 9	かわらけ	7.2	4.8	2.0	黒色微渺を混じえる肌色粉質土
58 10	かわらけ	7.1	4.9	1.9	白色、黒色微渺を混じえる淡茶色土
58 11	かわらけ	8.0	5.3	1.9	黒色微渺、雲母片を多く混じえる淡橙色粉質土
58 12	かわらけ	7.2	4.4	1.9	黒色微渺を混じえる淡橙色砂質土
58 13	かわらけ	7.6	4.3	1.9	黒色微渺を混じえる橙色粉質土
58 14	かわらけ	7.9	5.8	2.05	黒色微渺を多く混じえる淡茶～肌色粉質土
58 15	かわらけ	7.1	5.2	1.9	黒色微渺を混じえる卵形質土
58 16	かわらけ	7.4	5.4	2.0	黒色微渺を多く混じえる肌色粉質土
58 17	かわらけ	7.6	5.8	1.9	黒色微渺を混じえる淡橙色粉質土
58 18	かわらけ	7.2	4.5	1.7	白色、黒色微渺を多く混じえる橙色土
58 19	かわらけ	7.1	4.3	1.8	黒色微渺、雲母片を混じえる橙色粉質土
58 20	かわらけ	7.8	6.0	1.4	黒色微渺を混じえる淡橙色粉質土
58 21	かわらけ	7.8	5.6	1.85	雲母片を混じえる肌色粉質土
58 22	かわらけ	6.6	4.1	2.1	黒色微渺を混じえる淡橙色砂質土
58 23	かわらけ	7.2	4.3	2.2	黒色微渺を混じえる橙色砂質土
58 24	かわらけ	7.35	4.5	2.2	白色、黒色微渺を混じえる淡橙色粉質土
58 25	かわらけ	7.05	4.15	2.0	黒色微渺を混じえる淡橙色粉質土
58 26	かわらけ	7.3	4.03	2.15	黒色微渺を多く混じえる橙色粉質土
58 27	かわらけ	6.8	4.2	2.2	黒色微渺を混じえる橙色粉質土
58 28	かわらけ	7.2	5.1	2.2	黒色微渺、雲母片を多く混じえる淡橙色粉質土
58 29	かわらけ	7.45	4.15	2.05	黒色微渺、雲母片を混じえる淡橙色粉質土
58 30	かわらけ	7.0	4.7	2.5	白色、黒色微渺を混じえる淡橙色砂質土
58 31	かわらけ	6.8	4.3	2.2	黒色微渺を混じえる橙色砂質土
58 32	かわらけ	7.2	4.5	2.15	泥岩粒、雲母片を混じえる淡茶～淡褐色粉質土
58 33	かわらけ	7.8	4.1	2.2	白色、黒色微渺を混じえる橙色粉質土
58 34	かわらけ	7.8	4.6	2.2	黒色微渺を混じえる淡橙色粉質土
58 35	かわらけ	7.25	4.3	2.2	黒色微渺を混じえる淡橙色粉質土

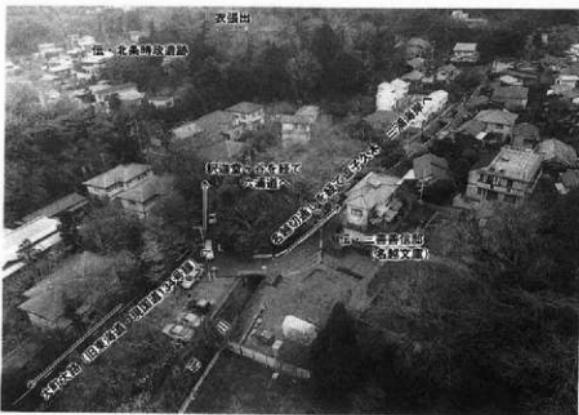
表4 遺物觀察表(14)

図版	No.	種別	口径	底径	器高	備考
58	36	かわらけ	7.8	4.45	2.2	白色、黒色微紗を混じえる淡橙色粉質土
58	37	かわらけ	7.6	4.6	2.1	黒色微紗、雲母片を多く混じえる淡橙色粉質土
58	38	かわらけ	7.5	4.45	2.25	黒色微紗、雲母片を混じえる淡橙色粉質土 内外面に煤付着
58	39	かわらけ	7.2	4.1	2.1	白色、黒色微紗を混じえる淡橙色粉質土
58	40	かわらけ	7.3	3.8	2.25	黒色微紗を多く混じえる淡橙色粉質土
58	41	かわらけ	10.4	6.0	2.7	黒色微紗、雲母片を混じえる淡茶色粉質土
58	42	かわらけ	11.8	6.6	3.0	白色、黒色微紗を混じえる淡茶色粉質土
58	43	かわらけ	10.8	6.2	3.5	黒色微紗、雲母片を多く混じえる淡橙色粉質土
58	44	かわらけ	10.8	6.4	3.0	黒色微紗を混じえる淡橙色粉質土
58	45	かわらけ	10.7	5.8	3.15	黒色微紗、泥岩粒を多く混じえる淡橙色粉質土
58	46	かわらけ	10.6	6.5	3.0	黒色微紗、雲母片を多く混じえる淡茶色粉質土
58	47	かわらけ	11.3	8.0	3.2	黒色微紗、雲母片を多く混じえる淡橙色粉質土
58	48	かわらけ	10.4	6.4	3.1	黒色微紗を多く混じえる淡橙色粉質土
58	49	かわらけ	10.8	5.8	3.4	黒色微紗を混じえる淡橙色粉質土 内外面に煤付着
58	50	かわらけ	11.0	6.15	3.35	白色紗、泥岩粒を多く混じえる淡橙色粉質土 内外面に煤付着
58	51	かわらけ	11.6	6.9	3.3	黒色微紗を混じえる淡橙色粉質土
58	52	かわらけ	13.0	8.7	3.35	黒色微紗を混じえる淡橙色粉質土
58	53	かわらけ	12.4	7.1	3.6	黒色微紗、泥岩粒を多く混じえる淡橙色粉質土
58	54	かわらけ	12.6	7.6	3.45	黒色微紗を多く混じえる赤褐色粉質土
58	55	かわらけ	12.4	7.9	3.0	黒色微紗を混じえる淡橙色粉質土
58	56	かわらけ	12.8	6.8	3.5	黒色微紗、白針を混じえる淡橙色粉質土
58	57	かわらけ	11.8	7.5	3.0	黒色微紗、白針を混じえる暗褐色粉質土
58	58	かわらけ	12.8	7.7	3.2	黒色微紗を多く混じえる淡茶色粉質土
58	59	かわらけ	11.8	6.1	3.0	黒色微紗、泥岩粒を多く混じえる暗橙色粉質土
58	60	かわらけ	12.3	7.7	3.15	黒色微紗、雲母片を混じえる淡茶色土
58	61	かわらけ	13.1	7.4	3.1	黒色微紗、泥岩粒を混じえる淡茶色土
58	62	かわらけ	14.0	7.4	3.8	黒色微紗、雲母片を多く混じえる淡茶～暗褐色粉質土
58	63	かわらけ	13.4	7.5	3.8	黒色微紗、雲母片を混じえる淡橙色粉質土
58	64	かわらけ	14.2	7.8	3.6	黒色微紗を混じえる淡橙色粉質土
59	1	瓦質火鉢	40.8	28.0		黑色微紗、雲母片を混じえる淡紅色粉質土
59	2	瓦質輪花型火鉢				黑色微紗を混じえる灰色粉質土
59	3	瓦質輪花型火鉢				白色細石、泥岩粒を多く混じえる淡紅色粉質土
59	4	鉄鉢型	内径10.8	鉢径15.4		黒色微紗、雲母片、白針を混じえる淡橙色粉質土
59	5	船形天日碗	10.4	3.6	4.5	釉は白の微紗を混じえる暗茶色耐熱土 軸は暗黒色不透明 二次焼成
59	6	吉白磁壺の蓋	蓋径8.6	器高1.4		素地は黒の微紗を混じえる白色粘土密土 軸は淡水色を呈する
59	7	鏡				「政和通寶」
60	1	かわらけ	6.8	4.2	1.8	黒色微紗を多く混じえる淡橙色粉質土
60	2	かわらけ	7.2	4.5	2.0	黒色微紗を混じえる淡橙色粉質土
60	3	かわらけ	7.2	4.8	2.0	黒色微紗、雲母片を混じえる暗褐色粉質土
60	4	かわらけ	7.1	5.0	2.2	黒色微紗を混じえる淡茶色粉質土
60	5	かわらけ	7.6	5.1	2.1	黒色微紗、雲母片を混じえる暗褐色粉質土
60	6	かわらけ	7.4	3.8	2.2	黒色微紗を多く混じえる淡橙色粉質土
60	7	かわらけ	7.4	5.0	2.2	黒色微紗を混じえる淡茶色粉質土
60	8	かわらけ	12.4	7.4	3.6	黒色微紗を混じえる淡橙色粉質土
60	9	瓦質輪花型火鉢				雲母片を混じえる暗灰色瓦質土
60	10	漸円 灰釉皿				胎土は黄味灰褐色粘土質土
60	11	漸円 緑釉小皿	11.8			胎土は灰褐色粘土 軸は淡草绿色を呈する

表4 遺物観察表(15)

図版	No.	種別	口径	底径	器高	備考
60	12	喝達中山 砥石	遺存長1.9	×3.0	×0.7	淡黄色を呈する泥岩
60	13	喝達 砥石	遺存長3.5	×2.8	×0.6	淡黄色を呈する泥岩
60	14	喝達 砥石	遺存長2.8	×2.3	×0.5	淡赤褐色を呈する泥岩

写 真 図 版



a. 調査地点を上空から望む



b. 調査区西壁土層堆積状況



c. 調査区東壁土層堆積状況

図版 2



a
第5面全景（南から）



b. 第5面 板囲い建物1（東から）



c. 第5面 板囲い建物1内遺物出土状況



d. 第5面 井戸1（西から）



図版 4



a. 第3面 全景（西から）



c. 第3面 水滴出土状況

b. 第3面 土器3（北から）



d. 第3面 石組炉1（東から）

図版 5

a. 第2面
全景 (東から)



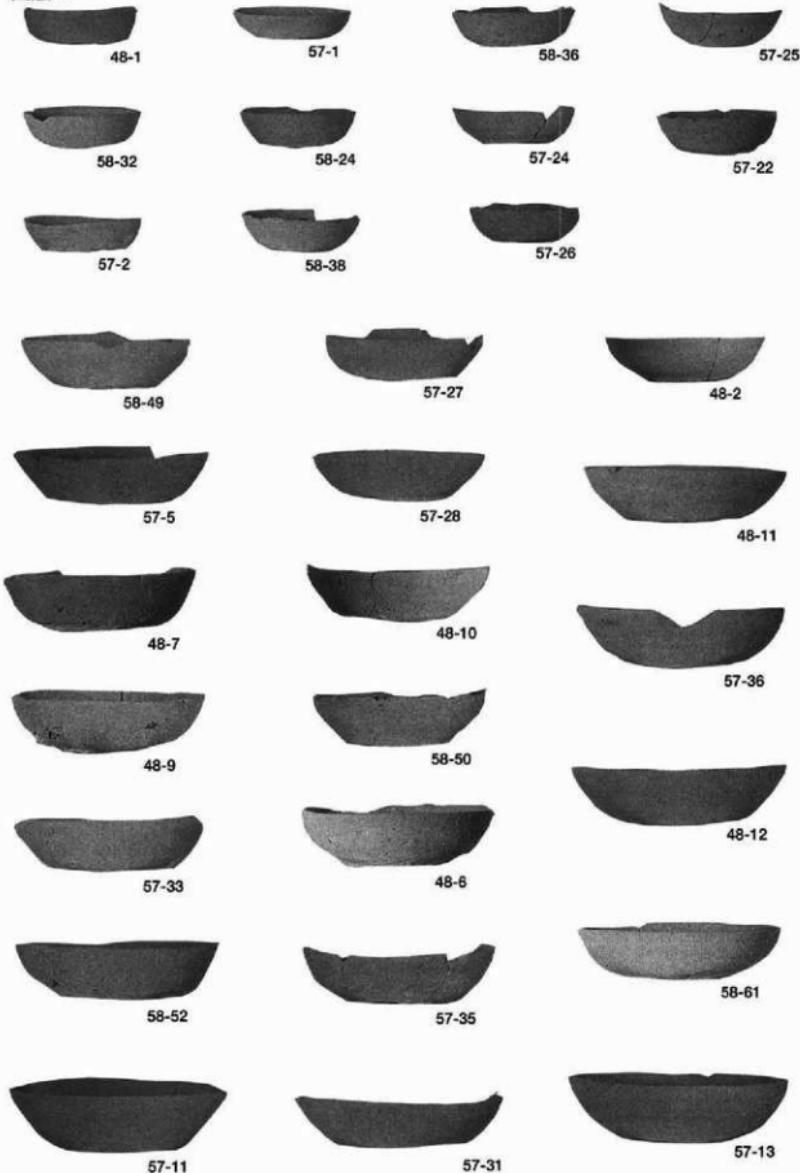
b. 第1面 構成地盤状況
(南から)



c. かわらけ溜り 1



図版 6

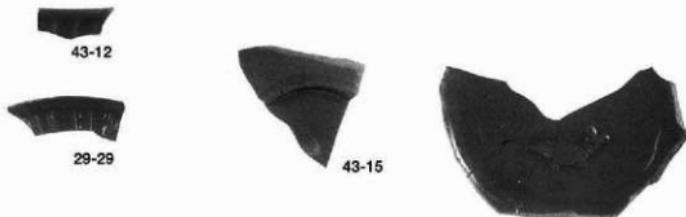
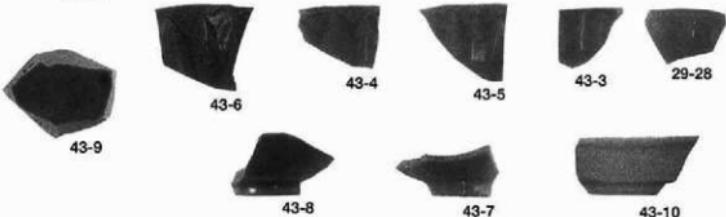
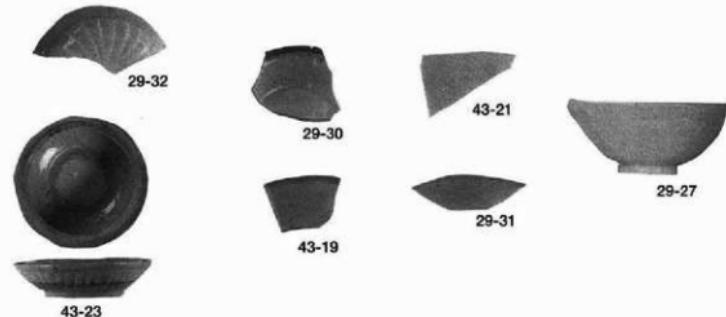


かわらけ

図版 7

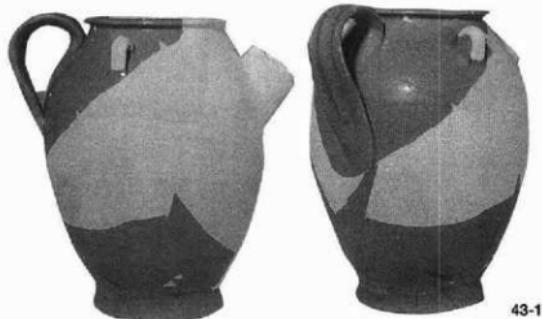


常滑

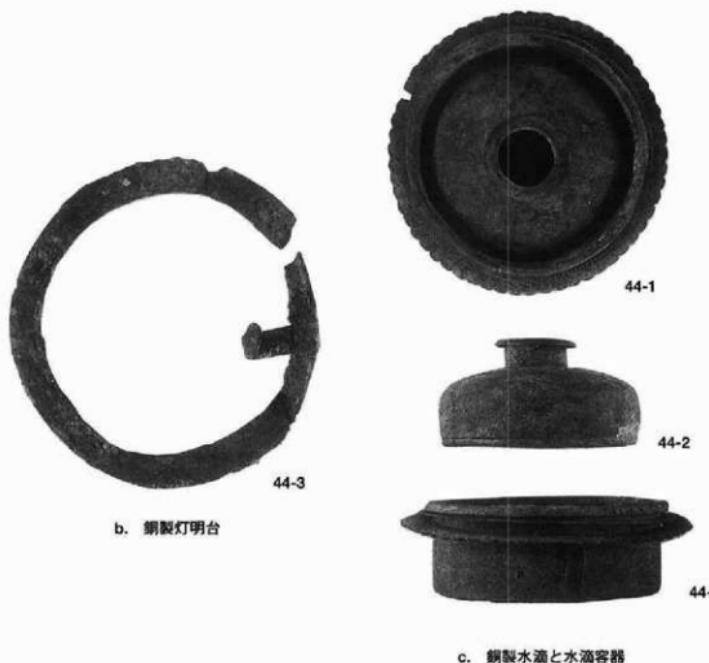


常滑、舶載器

図版 8



a. 白磁水注



b. 銅製灯明台

c. 銅製水滴と水滴容器

図版 9



18-19



45-1



18-14



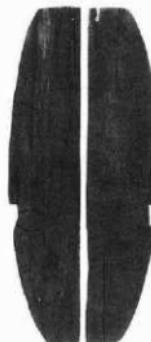
18-15



18-18



18-17



45-4



26-4



18-24



45-14



30-5

木製品

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	宗基富貴子・遠藤雅一							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 神奈川県鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦1998年3月							
ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所 在 地	コ ー ド	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	かながわけんかまく らしおまち 神奈川県鎌倉市大町 四丁目1736番2外	204 市町村 No.231 遺跡番号	35° 19' 18"	139° 34' 12"	1996 2月15日 ~ 5月18日	182m ²	個人住宅 地下式車庫造成	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
名越ヶ谷遺跡	都市遺跡	鎌倉時代	掘立柱建物 板張り建物 土塁 石組垣、炉 基礎 通路状遺構 土壤、柱穴 かわらけ溜まり	2軒 1軒	かわらけ 国産陶器 舶載磁器 銅製品 木製品	土地利用の変遷が明瞭に確認できた。特に第3面では土塁と堀で区画された屋敷もしくは寺院の空地を発見した。 第3面下より白磁の水注、銅製水滴と水滴容器も灯明台が出土した。		

こめまち い せき
米町遺跡 (No.245)

大町二丁目931番1

例　　言

1. 本報は、神奈川県鎌倉市大町三丁目391番1に所在する米町遺跡同庫補助事業発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は鎌倉市教育委員会が平成8年3月21日～4月26日にかけて実施した。
3. 調査にあたっては以下のとく体制を編成して行った。
調査担当 田代郁夫（東国歴史考古学研究所所長）
調査員 浜野洋一（東国歴史考古学研究所研究員）、梅木信之
調査補助員 本田 礼、笠原さやか、深尾義子、佐藤慈子、鈴木真由美、青木綾子、石井ちづ子、蒲谷由利子、成田サキ、上田求美、山田純子、奥寺章典
調査協力者 箕田孝善、岸名富雄、本瀬正道、河原龍雄、山下俊明、田口 豊、渡辺輝彦（以上、財団法人 鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本報作成にあたっては、遺物実測・トレースを梅木信之、本田 礼、宗基富貴子、小野和代、馬瀬直子、笠原さやか、深尾義子、宗基秀明が行ったうえ、遺跡地の歴史的環境を田代郁夫、遺構を梅木伸之と本田 礼が、遺物を宗基富貴子がそれぞれ執筆し、まとめは調査関係者討議の上、田代郁夫と宗基富貴子が責任執筆した。編集は宗基富貴子がおこなった。
5. 本書に使用した写真は遺構を本田 礼、遺物を笠原さやかと馬瀬直子が撮影した。
6. 発掘調査および本報作成に際し、下記の方々よりご協力・ご教示を賜った。記して深く感謝いたします。（敬称略）
木村美代治、汐見一夫（鎌倉考古学研究所）
7. 本調査における出土遺物、図面、写真等は鎌倉市教育委員会が保管している。

本文目次

第一章 遺跡地の概要.....	99
第1節 歴史的環境.....	99
第2節 調査地点	104
第二章 発見された遺構と遺物	105
第1節 中世・第1面	105
第2節 近世・第1面上層	128
第三章 米町遺跡の花粉化石	135
第四章 まとめ	142

挿図目次

図1 遺跡位置図(1).....	100	図18 1面井戸1	126
図2 遺跡位置図(2).....	102	図19 1面井戸1出土遺物	126
図3 土層堆積図	103	図20 1面土壌3・4・5	127
図4 1面全測図	106	図21 1面土壌5出土遺物	128
図5 1面方形竪穴建物1	107	図22 1面ピット13・32出土遺物	128
図6 1面方形竪穴建物1出土遺物	108	図23 1面上層全測図	129
図7 1面方形竪穴建物1出土縄銭一覧 (1)~(5).....	109~113	図24 1面上層建物基礎群と柱穴列1・2・3	130
図8 1面方形竪穴建物2	114	図25 1面上層柱穴列1・2・3	131
図9 1面方形竪穴建物2出土遺物	115	図26 1面上層柱穴列2(ピット96)出土遺物	132
図10 1面方形竪穴建物2出土縄銭一覧 (1)~(5).....	116~120	図27 1面上層柱穴列3(ピット93)出土遺物	132
図11 1面方形竪穴建物3・4	121	図28 1面上層土壌2出土遺物	132
図12 1面方形竪穴建物3出土遺物	122	図29 1面上層石列、土壌1・2	133
図13 1面方形竪穴建物4出土遺物	122	図30 1面上層出土遺物	134
図14 1面方形竪穴建物5	123	図31 試料採取位置	135
図15 1面方形竪穴建物5出土遺物	124	図32 試料採取地点付近の土層断面図	135
図16 1面板廻い建物1	125	図33 米町遺跡の花粉化石分布図	138
図17 1面板廻い建物1出土遺物	126		

表目次

表1 米町遺跡の産出花粉化石一覧表	137
-------------------------	-----

写真図版目次

図版 1	米町遺跡の花粉化石 (1).....	140	b. 土壙 4 と方形竪穴建物 4		
図版 2	米町遺跡の花粉化石 (2).....	141	c. 井戸 1	148	
図版 3	a. 調査区全景 (東から)		図版 7	a. かわらけ	
	b. 板廻い建物 1 (東から)			b. 土鍤	
	c. 同上.....	145		c. 湿美	
図版 4	a. 方形竪穴建物 1 (北から)			d. 砥石	
	b. 方形竪穴建物 2			e. 金属製品	
	c. 方形竪穴建物 2 内出土鏡			f. 骨製品.....	149
	d. 方形竪穴建物 2 北東隅.....	146	図版 8	a. 目盛付き斧	
図版 5	a. 方形竪穴建物 4 (東から)			b. 目盛付き斧 (拡大)	
	b. 方形竪穴建物 4 床材等発見状況			c. 解体痕のある獸骨	
	c. 方形竪穴建物 4 東柱.....	147		e. 魚骨.....	150
図版 6	a. 方形竪穴建物 5				

第一章 遺跡地の概要

第1節 歴史的環境

遺跡の名称である「米町」が文献上に初めて登場するのは、『吾妻鏡』建暦三年（建保元年）（1213）五月二日の条である。それは和田合戦において、武田五郎信光が義盛の与党朝夷奈三郎義秀と若宮大路米町口において行合ったこと、また義盛の軍勢が前浜の辺に逃れた後、北条義時が軍勢を率いて中下馬橋を警固する中、足利三郎義氏等が米町の辻と大町大路等の切所（戦の際、攻防とともに要害の地形、場所）において義盛勢と合戦したという。さらに同月四日の条に、乱後の論功行賞に関する記事中には、先の戦いについて米町あるいは米町合戦とある。

以下、米町の登場する記事として次のような記述がある。

寛喜三年（1231）正月十六日の条に米町の辺りで失火し、横町の南北六町余りに及んで罹災。

仁治二年（1241）十二月二十七日条。先の和田合戦の際のこととして、若宮大路の東頬米町の前を通り、由比の浦の方に向かう。

寛元四年（1246）十二月二十八日条。紀伊七郎左衛門尉重経の所従等が丹後の國の所領徳分の物を持って逐電した疋夫を米町の辺りで発見。

建長三年（1251）十二月三日条。鎌倉中の在々処々の小町屋および売買の設けの事について禁制を加えるように沙汰があり、鎌倉中に小町屋として定め置かれる所は、大町、小町、米町、亀谷の辻・和歌江、大倉の辻、氣和飛坂山上で、この他は以後、絶対に停止すべき旨が触れる。

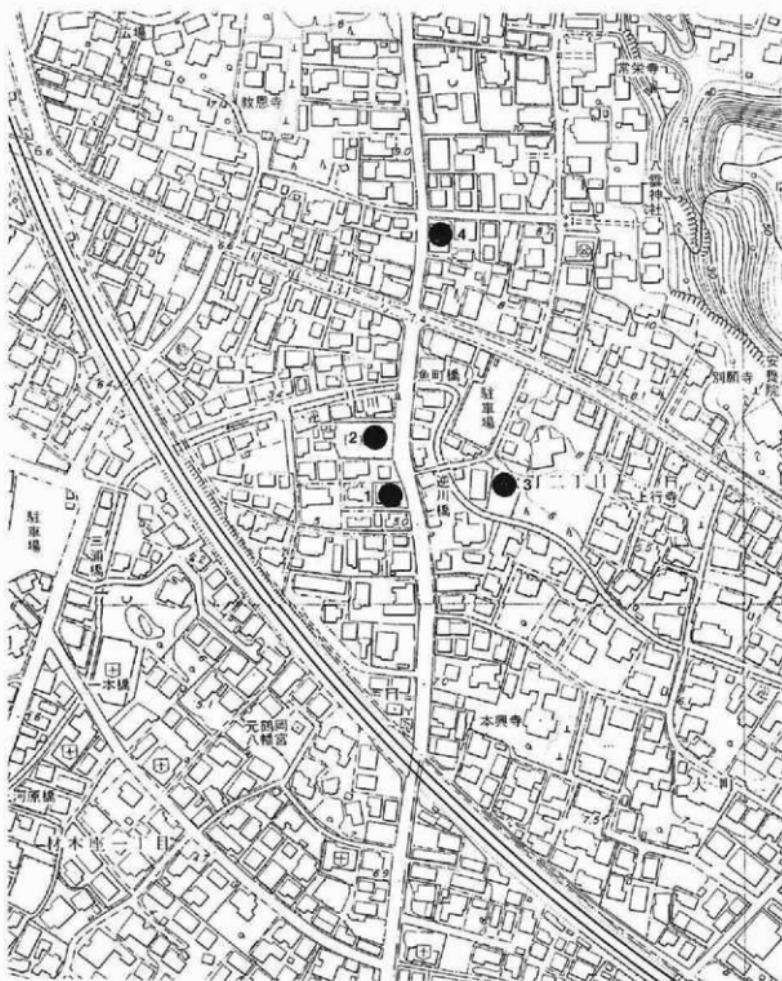
文永二年（1265）三月五日条に同じく鎌倉中に散在することを禁止されている町屋等について九ヶ所が許される。禁止を免除された場所は、大町、小町、魚町、穀町、武藏大路下、須地賀江橋、大倉辻である。

この穀町は米町のことと考えられている。

建暦三年と仁治二年の記事は和田合戦の際とそれに関連したものである。この記事からは、米町の位置が幕府および北条義時の小町上の邸など政治的中枢域と前浜の辺を結ぶ地点にあることがわかる。この付近は滑川の支流が東西方向から相前後して合流する地点であり、戦においては所謂「切所」なのであろう。

ところで、米町といい大町といい、町とは「人が多く集まり住んでいるところ」、「商店の多く並んだ区域」、「市街地で道路で囲まれた一区画」、「市場また店舗」（大辞林）等々といわれている。中世都市鎌倉に知られている地名の内、「・町」と称するのは、大町、小町、米町、魚町である。魚町について高柳光寿氏は廿綱あたりであろうとされているが、その他の町はいずれも滑川の下流域に展開している。物資の集積地としての前浜および滑川の河口域から都市内部への搬入流路として、滑川の果す役割は重要である。滑川と各支流が合流する辺りの河岸は、荷揚げ場として利用され、あるいは倉庫群が立ち並んでいたであろう。まさに町というふさわしい地域であった。

康平六年（1063）に相模守源頼義が石清水八幡宮を勧請して、鎌倉郷由比に社殿を造営したのは、現在の元八幡の地とされている。中世の町場は、この八幡社を最奥中心に据えた古代由比の集落を土台として、当初滑川の河口城に発生し、中世都市の経済的役割を担いつつ、更に滑川の上流に向かって北側



1. 調査地点
2. 米町道路（大町二丁目933番地 地点）
3. 米町道路（大町二丁目2315番地外地点）
4. 清興建設ビル用地

図1 遺跡位置図(1)

に発展したのものと思われる。大町、小町の名称はまさに、この町の発展形態を象徴した名称ではなかろうか。高柳氏は、いわゆる鎌倉の「町」は自然に発生したものであり、奈良や京都のように概念的な都市計画の上から工人や商人の居住地域を規定したものではないとしている。事実、都市鎌倉における物資の流入路としての滑川の河口の位置や流路は、当初まさに自然のままであったろう。そこに商・工人は集住したのである。

他方、陸路の果す役割も見逃せない。上述した古代以来の滑川と山比郷の八幡社との関わりに加えて、中世における町の発展を考慮すれば、若宮大路の東側に滑川とともに南北に走る道こそ「町」の名を冠するにふさわしい路である。氏は、計画的に敷設された京都の三条大路や四条大路を例にとり、幾つかの町を貫通するも通りの名はひとつであるとの考え方から、小町大路がこの南北路であって、大町大路は古東海道が名越に抜ける道としている。前述した町の発展過程を前提とすれば、小町と大町は夷堂橋によって結ばれていたのではなかろうか。わたしは夷堂を堺に、北を小町大路、南を大町大路とする南北の通りと考える「鎌倉志」と「風土記稿」の説を踏襲したい。氏は一方で、極楽寺の坂下から名越の坂下までではなくとも、少なくとも甘繩を離れた今日の原之台から名越の長勝寺付近までは大町大路と思われるとしている。それでは、氏の言うところの、通りの名として一貫していない。小町大路といい大町大路といい、いずれもはじめ通りの名であって、町の名ではないとする高柳氏の説は再考を要しよう。通りの名に「町」の名が冠せられていることの意味が重要なのである。計画路でない路は、各々その路際の町の名を冠して呼ばれたものであろう。それは滑川が上流から下流に到るまで種々の名で呼称されるのと同じではなかろうか。

米町、大町、小町の名は、吾妻鏡によれば、若宮大路米町口、大町大路として建暦三年（1213）に登場し、小町の名は小町大路として建久二年（1191）に登場する。『吾妻鏡』成立の時期の問題とも関わるが、記事としては、12世紀末から13世紀の極く初めである。貞永元年（1232）に和歌江島の埠頭が舟船の着岸の頃をなくすために築かれる。これには北条泰時も合力し諸人が助成したという。この時期、滑川河口域から下流域にかけての着船の困難さが問題視され、諸人が助成している状況からも既に付近に町が形成されていたことが窺える。こうしたところへ、建長三年（1251）、文永二年（1265）に鎌倉中に散在する町屋、小町屋、売買の設けを場所的に限定する法令が発令され、そのなかに米町も禁止外の地として許されるのである。まさに13世紀中頃の鎌倉が物質的に最も豊かになり始める頃である。ただし、米町の位置およびその範囲については定かではない。やや時代は下るが、明応頃（1492～1501）の作成と考えられている津久井邦にある光明寺所蔵の寺地図がある。ここに米町と注する道筋が描かれている。現在の下馬四つ角から名越方面に入る通りの入り口付近に幾つかの民屋が通りに面して描かれている。絵図は米町の範囲を描こうとする目的で作成されたものではないので、米町の範囲は明瞭ではないが、当時の付近を米町といったことは間違いない。また『鎌倉志』に、教恩寺は米町の内にありとしている。教恩寺の寺域には、もと光明寺の末寺であった善昌寺という寺があり、廃亡したので教恩寺をこの地に移したというものである。鎌倉廃寺事典は「金沢文庫古文書」にみえる名越善勝寺や『鎌倉志』に米町善昌寺は善宝寺と同一寺院かとしている。このようにみてみると米町の南北の範囲は、おおよそ夷堂橋の南側、教恩寺の寺域を含む辺りから辻の薬師堂辺りまで、西側は若宮大路の東側を限り、東側は「町大路」付近までということではなかろうか。

さて、米町の町並みは、どのようなものであったろうか。「小早川家文書」の中に次のようなものがある。

譲与 息男政景分所領事合

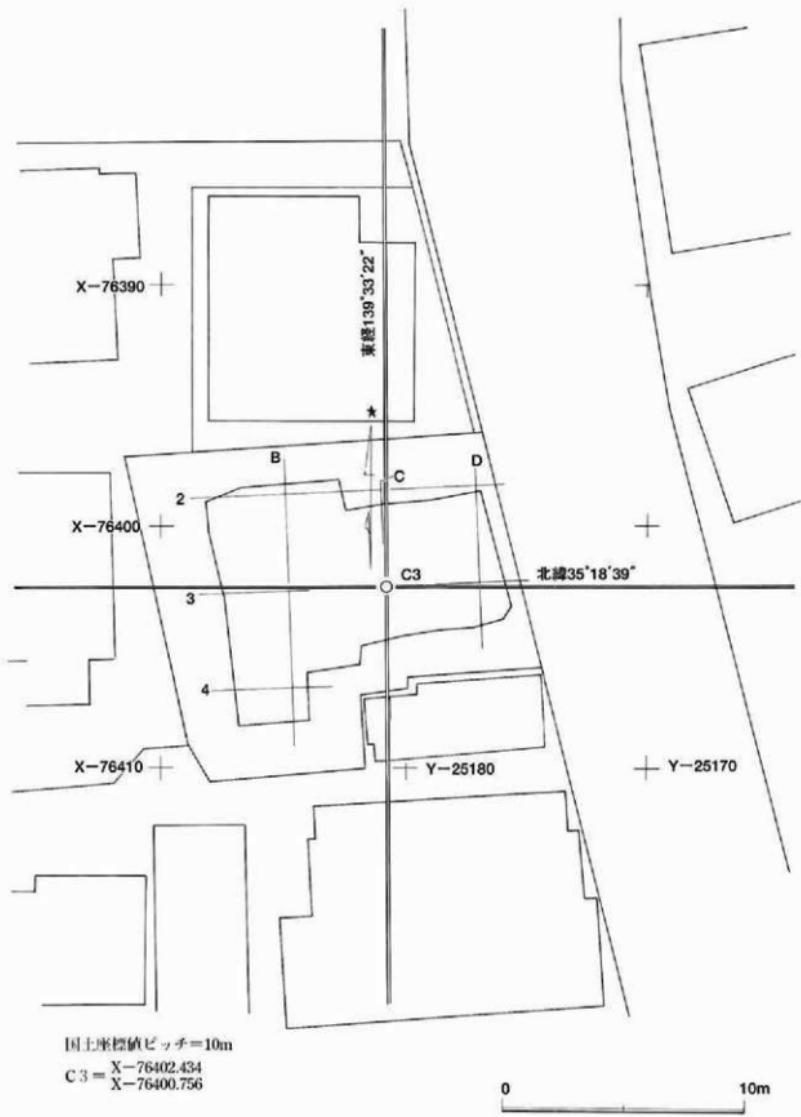


図2 遺跡位置図(2)

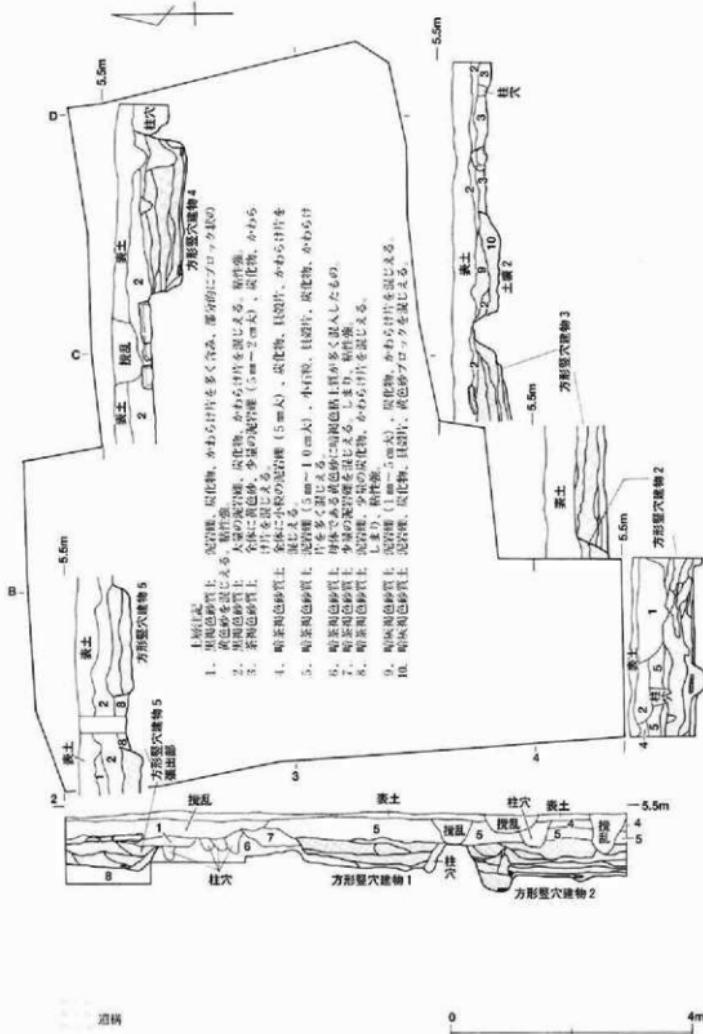


図3 土層堆積図

(中略)

一、鎌倉米町在家一字跡 宗次入道居住跡

右件所領等任譲状可知行也、(中略) 仍為後日沙汰譲状如件

正嘉元年(1258)七月十九日 沙弥(小早川茂平)

同文書の正嘉元年二月十六日付の小早川景宗の子政宗宛の譲状にも、上記のような鎌倉米町の在家一字跡がある。また、建武五年二月二十四日付の小早川景宗の祐景宛の譲状では同じものを鎌倉米町の屋地とし、貞治二年六月二十九日付の重宗宛の小早川重景譲状にも同様に記している。このことから、在家と屋地がほとんど同じ内容であることがわかる。これらのことから鎌倉の庶民は、そのほとんどが社寺や御家人などの所領の屋地に住んでいたと言えている。通りに面した所や河岸に面した所には、店や荷揚げの施設があり、その内側には倉庫もあったであろう。御家の屋敷も存在していたかもしれない。町の中にはそうした様々な建物が混在していたものと思われる。「宇津保物語」にいう「町ひとつに榆皮の大殿・廊・渡殿・倉・板屋など、いとおほく建てたる」といった状況であろう。

明応六年(1497)の光明寺蔵「善法(宝)寺分年賃注文」(県史3-6410)には10人の作人が記され、その名前の肩には米町、中座、辻子、兼子か辻子といった地名や日常物屋、紙屋、銀細工、塗しといった職業が記され、一人坪当たり四文の年貢を納めている。この頃になると米町付近には坪の制が行われている。丈尺の制による戸主の制から坪を単位とする在家の制へと移っており、これは田舎の繁華な集落に過ぎなくなったことを物語るものといわれている。

付近の調査例としては、当該遺跡の北側にはほど近い大町二丁目933番地において、昭和63年に、270m²程が鎌倉市教育委員会および米町遺跡発掘調査団によって発掘されている。無数の柱穴群と土壙、井戸などが検出されている。そこでは民屋的な建物が立ち並んでいる状況が指摘されている。

参考文献

貴志正造編 1979 「全譜 吾妻鏡」 新人物往来社

鎌倉国宝館編 1969 「鎌倉の古絵図Ⅱ」 国録第十六集

貫 達人・川副武胤 1980 「鎌倉廃寺事典」 有隣堂

高柳光寿 1959 「鎌倉市史 総説編」 鎌倉市教育委員会

第2節 調査地点

調査区外に任意の点を設け、磁北に平行する南北基本軸Cラインを設定した。調査区中央付近のCライン上に「C-3点」を定めると、同点から東西軸を発生させ、更に4m方眼を組んだ。東西軸にアルファベットを、南北軸に算用数字を付し、各方眼の呼称には北東交点を使用した。なお、本調査地周辺に点在する鎌倉市4級基準点を用いてトランバース測量した「C-3点」の国土地理院基準点は〔X-76402.434 Y-25180.756〕で、磁北に平行する調査区南北軸は、真北に対して2°30'西に傾く。

第二章 発見された遺構と遺物

調査にあたっては、試掘調査によって判明していた近現代の堆積土を重機を用い、現地表（標高5.30m）下約30cmまで掘削することから始めた。これを除去すると、遺物包含層が現れた。ここからは、人力による遺構検出作業を進めた。標高4.80m付近より、方形竪穴建物や土壙、柱穴などの中世遺構を確認できたが、面としては確認できなかった。さらに10~20cmほど掘り下げる中世地山層が露出したので、これをもって第1面とし、発掘調査を実施した。また、第1面までの遺物包含層を掘り下げる途上では、中世遺構の確認標高よりも若干高い地点（標高4.90m付近）で泥岩組の建物基礎群、跡跡と鎌倉石の石列が発見された。これらの帰属時期については、良好な遺物を作りうわけではないが、上層観察から鑑みて、近世以降の所産と考えられる。ただし、面を作りうるものとしては確認はできなかったので、やはり土層観察から近世帰属と推定された2基の土壙をも含めて、1面上層の遺構として扱うこととした。

以下、発見した遺構と遺物を、年代の古いものより順に報告する。

第1節 中世・第1面（図4）

調査区内は、後世の削平により中世の生活面が失われており、遺構確認は貝殻片を多く含む黄褐色砂質土の中世地山上で行うことになった。便宜的にこれを第1面とする。第1面から発見された遺構は、板開き建物1基、方形竪穴建物5基、井戸1基、土壙3基、ピット約140口である。

方形竪穴建物1（図5）

B-4グリッドに確認した。その一部は調査区外に延びており、全貌を把握しえなかった。また、北側の一部は井戸1を埋め立てた後に造っているため、この部分のしまりは弱く、調査時に壁面が崩落してしまった。また、この軟弱さを補うために、井戸上に鎌倉石を入れた後にそれを基礎として、その上に方形竪穴建物1を作りうる礎板が据えられていた。平面は東西370cm×南北220cmの長方形を呈し、確認面から底面までの深さ45cm、底面南北幅180cmを測る。断面は逆台形で、ほぼ平坦な底面の海拔高は4.50m。長軸の軸線方位はN-85°-E。本建物の底面からは、東西壁下に約60cm間隔、東壁下に約1m間隔の礎板を作りうる柱穴と、数多くの束柱跡を確認した。また確認面下約10cmの地点では、多くの板片が出土している。

覆土は壁面付近でいわゆる三角堆積が認められ、少なくともある段階までは、自然に埋没していった状況を窺える。色調、含有物などから12層に分けられた。

図6-1は丸瓦。胎土は白色微砂を多く混じえる暗青灰色緻密土。凸面は糊目叩きの後、ナテ調整され、凹面は布目痕が残る。2は瀬美の壺の口縁部片。胎土は白色微砂を多く混じえる淡橙~灰色弱粘質緻密土。3は常滑の小壺。底径は7.8cmを測る。胎土は暗灰緻密土。体部外表面下位はヨコナデ、体部外表面中位付近は指頭による押さえ、肩部上方はヘラ状工具による調整がされる。外底部は砂底。4は絹銭。一枚は69枚。最古初鋳銭は「開元通寶」、最新初鋳銭は「嘉定通寶」で銭種は20種類に及ぶ。枚数の多い銭種は「皇宋通寶」が10枚、「元豐通寶」と「元祐通寶」が9枚、「開元通寶」が7枚であった。なお、絹銭一覧は図7に示した。図中の「表裏」は縦状態で図の右から左へみた場合の状況を示す。5~11は錢。5は「開元通寶」。6は「治平元寶」。7は「熙寧元寶」。8も「熙寧元寶」。9は「元豐通寶」。10

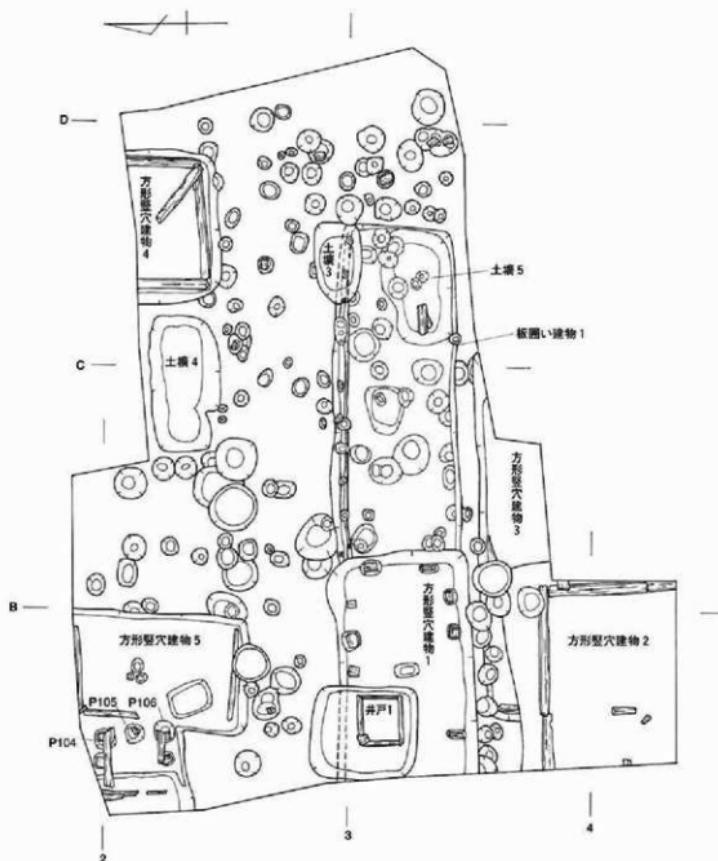
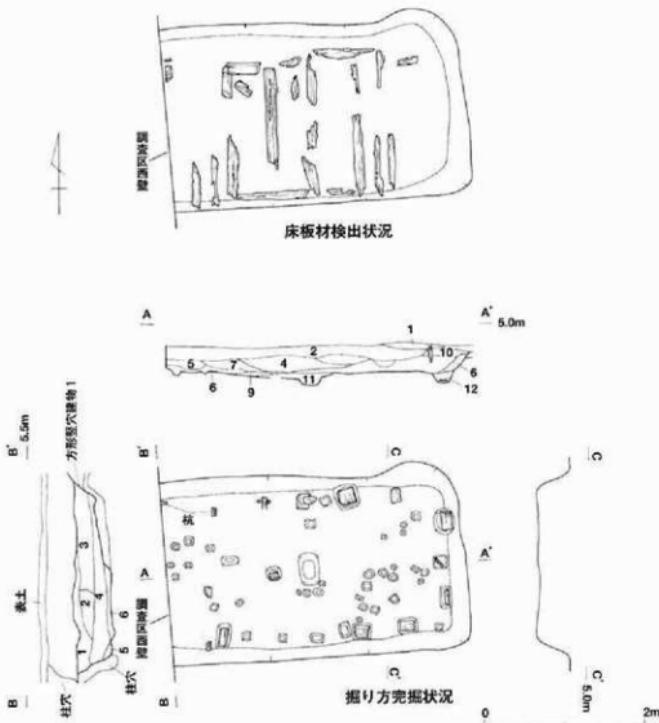


図4 1面全測図



(方形堅穴建物 1 土解注記)

1. 喻茶褐色砂質土 泥岩塊（5 mm～2 cm大）が大量に混入し、炭化物、貝殻片、小石様、かわらけ片が多く混じる。
2. 茶褐色砂質土 全体に黄色砂を多く含み、泥岩塊（5 mm～2 cm大）、貝殻片、炭化物、少部分の木片、かわらけ片を混じえる。
3. 喻茶褐色砂質土 泥岩塊（5 mm～2 cm大）、炭化物（5 mm～2 cm大）を全体に多く混じる。粘性強。
4. 喻茶褐色砂質土 三層に比して炭化物の混入が密である。
5. 茶褐色砂質土 三層の上に黄色砂が多く混入したもの。
6. 黄色砂 小段粒子が大量に混入し、泥岩塊、炭化物、かわらけ片を混じえる。
7. 茶褐色砂質土 全体に黄色砂を含み、泥岩塊、炭化物、少量のかわらけ片を混じえる。粘性強。
8. 黑色砂質土 多量の炭化物、少量の泥岩塊（5 mm大）、かわらけ片、木片を混じえる。
9. 喻茶褐色砂質土 全体に少量の砂を含み、泥岩塊（5 mm～2 cm大）、炭化物、かわらけ片、少量の木片を混じえる。粘性強。
10. 黄色砂 少量の木片を混じえる。
11. 黑色砂質土 炭化物、貝殻片、かわらけ片を混じる。
12. 茶褐色砂質土 ピット面上、炭化物、貝殻片、かわらけ片を混じる。全体に多くの砂を含み、しまりに弱い。

図 5 1面方形堅穴建物 1

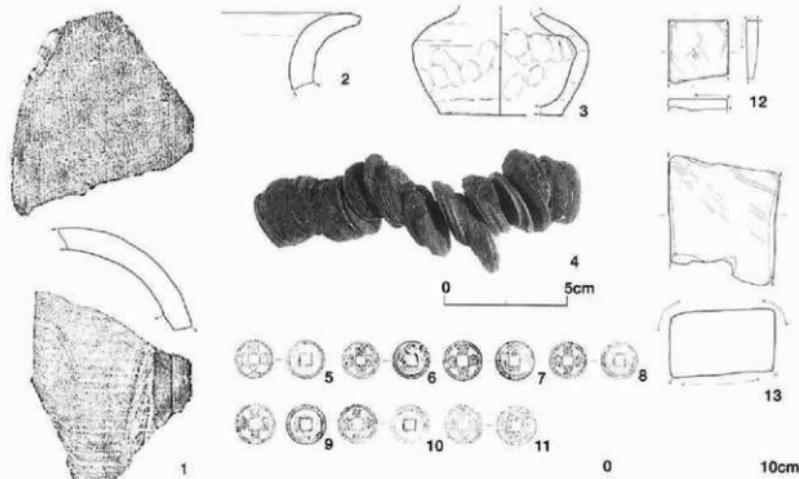


図6 1面方形堅穴建物I出土遺物

は「聖宋元寶」。11は「嘉泰通寶」、背面は「元」。12は鳴瀬中山産の淡橙色泥岩の砥石。遺存長は3.9×3.7cmを測る。13は天草産の淡紅色凝灰岩の砥石。表面は破損後、再調整される。遺存長は7.1×6.7cmを測る。

方形堅穴建物2(図8)

B-4～B-5グリッドにかけて発見した。遺構は調査区外に延びており、全貌を把握しえなかった。後述の方形堅穴建物3を埋め立てた後に構築されたものである。平面形は、東西方向に長軸を持つ長方形であろう。確認できた規模は、東西350cm×南北270cm、確認面から底面までの深さ75cmを測る。長軸の軸線方位はN-83°-E。断面は箱型で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面海拔高は4.30m。調査区外にまで延びるものも含めて、多くの建築部材が遺されていた。特に良好に遺存したものとしては、東壁に確認した幅28cm×長さ190cm×厚さ3cmの壁板と幅16cm×長さ170cm×厚さ4cmの土台材、そして北壁に確認した幅27cm×長さ220cm×厚さ2cmの壁板と幅12cm×長さ215cm×厚さ4cmの土台材などが挙げられる。土台材はいずれも底面に水平に据えられていた。これらの建築部材は寸法が揃わず、規格が統一されていないため、本建物構築の際に転用材が使われたものと考えられる。

覆土は、壁面付近でいわゆる三角堆積がみとめられ、少なくともある段階までは、自然に埋没していた状況を窺える。色調、含有物などから12層に分けられた。

図9-1は手づくねかわらけ。胎土は淡橙～橙色粉質土。体部外面のナデ調整は二段。口径9.7cm、底径6.9cm、器高1.6cmを測る。2は上鍤。胎土は黒灰～暗褐色かわらけ質土。全長5.25×1.5cmを測る。3は常滑の壺口縁部片。胎土は淡黄灰色弱粘質密土。第4型式くらいであろうか。4は山茶碗窓系こね鉢片。胎土は白色小石～微粒を多く混じえる灰色弱粘質土。使用による磨滅痕は確認できなかった。5は絹錢。一辯は65枚で、絹錢の周囲には幅0.6cm、厚さ0.2cmの木片が貼り付くように遺存していたが、出土状況からはこれが錢を収めていた木箱と積極的には考えられない。最古初鋳錢は「開元通寶」、最

錢名表裏	拓本	錢名表裏	拓本
皇宋通寶 表		元豐通寶 表	
解說不能 表		開元通寶 裏	
開元通寶 表		淳化元寶 裏	
嘉祐通寶 表		元豐通寶 裏	
紹聖元寶 表		紹聖元寶 裏	
元豐通寶 裏		熙寧元寶 裏	
元豐通寶 裏		皇宋通寶 裏	
天聖元寶 表		皇宋通寶 表	

圖7 1面方形豎穴鑄物1出土續錢一覽(1)

錢名表裏		拓本	錢名表裏		拓本
皇宋通寶	表		裏		
宣和通寶	表		裏		
元祐通寶	裏		裏		
嘉祐通寶	表		裏		
紹聖元寶	表		裏		
元祐通寶	表		裏		
嘉定通寶	表		裏		
皇宋通寶	表		裏		

圖7 1面方形豎穴建物1出土續錢一覽（2）

錢名表裏	拓本	錢名表裏	拓本
皇宋通寶 表		嘉祐通寶 表	
祥符元寶 表		政和通寶 表	
熙寧元寶 裏		元豐通寶 裏	
開元通寶 表		治平元寶 表	
政和通寶 表		開元通寶 表	
紹聖元寶 表		聖宋元寶 裏	
嘉祐通寶 裏		元祐通寶 表	
元祐通寶 表		皇宋通寶 表	

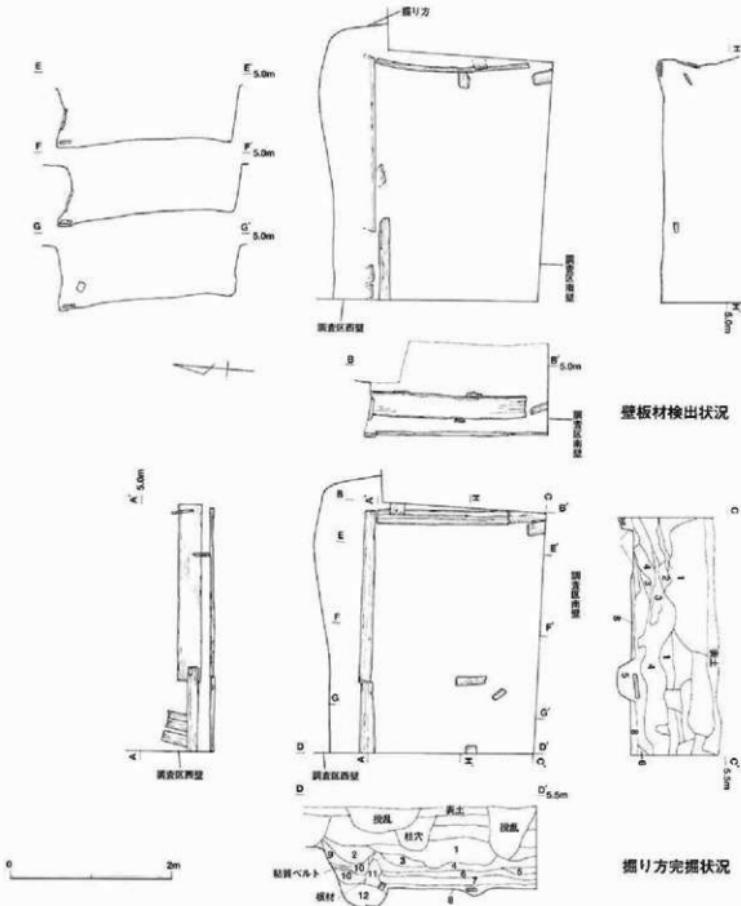
圖7 1面方形豎穴鑄物1出土緝錢一覽（3）

錢名表裏	拓本	錢名表裏	拓本
元祐通寶 表		元祐通寶 表	
元祐通寶 裏		元豐通寶 表	
紹聖元寶 表		至道元寶 表	
皇宋通寶 表		開元通寶 表	
元豐通寶 表		皇宋通寶 裏	
至和元寶 表		元祐通寶 表	
熙寧元寶 裏		熙寧元寶 表	
皇宋通寶 裏		開元通寶 表	

图7 1面方形竖穴建物1出土繕钱一覽 (4)

錢名表裏	拓本	錢名表裏	拓本
元豐通寶 裏			
天聖元寶 表			
元祐通寶 裏			
淳化元寶 表			
天禧通寶 表			

圖7 1面方形豎穴建物1出土繕錢一覽（5）



(方形空窓建物 2 1面図)

1. 黄褐色砂質土：柱状の黃白色土を含み、多量の炭化物。少量の貝殻片。かわらけ片。少々の瓦礫と多量の貝殻。

2. 黄褐色砂質土：柱状の黃白色土を含み、少量の内溶隙（5mm-1cm大）。炭化物。かわらけ片を混じえる。貝殻片。

3. 黄褐色砂質土：柱状の黄白色土を含み、大量的貝殻片。貝殻片は2種類の貝殻であるが、大型の砂貝殻。炭化物。少量の貝殻片。少々の瓦礫と多量の貝殻。

4. 黄褐色砂質土：柱状の黄白色土を含み、多量の炭化物（3mm-2cm大）。炭化物。少量の貝殻片。少量の木片。少々の瓦礫。少々のけいれん骨を混じる。貝殻片。しまり殻。

5. 黑色砂質土：全体に青灰白色土を多く含み、泥溶隙。かわらけ片。少量の木片。大量的炭化物を混じる。しまり殻。

6. 青灰白色砂質土：泥溶隙。かわらけ片。少量の炭化物を混じる。しまり殻。

7. 黄褐色砂質土：柱状の黄白色土を含み、泥溶隙（3mm-2cm大）。炭化物。かわらけ片。貝殻片を混じる。

8. 黄褐色砂質土：貝殻片が帶状に混入し、しまり殻片。

9. 黄褐色砂質土：少量の泥溶隙。炭化物を混じる。

10. 黑色砂質土：人掌の貝殻片を含む。船上ブロックが海水に混入。少量の貝殻片。

11. 黄褐色砂質土：多量の貝殻片。少量の炭化物。木片。かわらけ片を混じる。

12. 黄色砂質土：大量の貝殻片。少量の炭化物。木片。かわらけ片。貝殻片の貝殻ブロック。微量の炭化物を混じる。

掘り方完掘状況



図 8 1面方形窓穴建物 2

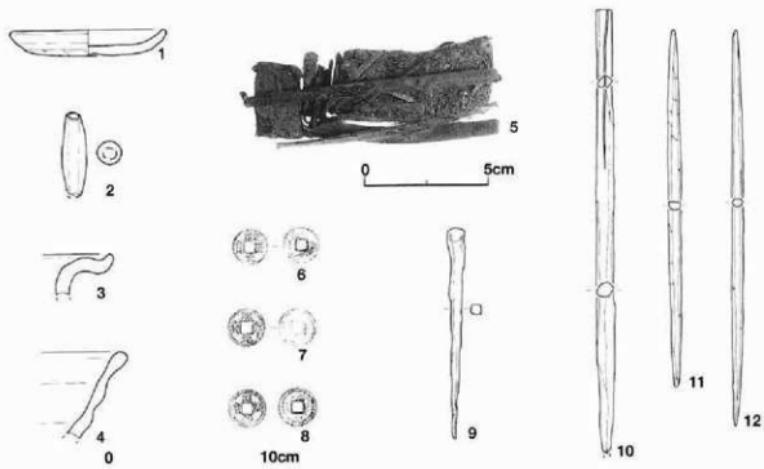


図9 1面方形堅穴建物2出土遺物

新初鑄銭は「開禧通寶」で、銭種は方形堅穴建物1より出土した銕錢と同様、20種類に及ぶ。枚数の多い銭種は「元豐通寶」が11枚、「元祐通寶」が9枚、「皇宋通寶」と「熙寧元寶」が6枚であった。なお、銕錢一覧は図10に示した。6～7「熙寧元寶」、8は「元祐通寶」。9は釘。全長13cmを測る。10は肅巾。上端部は2枚に割けている。遺存長は27.5cm。11～12は箸。11は全長22.3cm、12は22.7cmを測る。自然遺物はサメ類の椎骨1点、大型魚類の頭骨3点、鯨類の部位不明骨1点、アカニシ2点、サザエ1点、サザエのフタ2点、ダンベイキサゴ13点、バイガイ3点、ツメタガイ5点、チョウセンハマグリ50点、サルボウ2点、ムラサキガイ2点、アサリ3点、マガキ2点、アワビ3点が出土している。

方形堅穴建物3（図11）

C-4～B-4にかけて発見。造構の大部分は調査区外に延び、また南西部は方形堅穴建物2に切られているため、全貌を把握しえなかった。垂直に近い掘り込み壁を呈する断面とその規模から方形堅穴建物と判断した。確認しうる範囲の規模は東西540cm×南北115cm、確認面からの深さは40cmを測る。東西軸方位はN-83°-E。底面はほぼ平坦で、海拔4.30mである。北西隅の底面に礫板を1枚発見した。また、北壁に壁板の一部と思われる板材を発見した。

覆土は調査区の南壁で観察し、色調、含有物などから9層に分けられた。

図12-1・2はかわらけ。1は口径11.8cm、底径6.9cm、器高3.1cmを測る。胎土は肌色砂質土で器壁はゆっくり開きながら立ち上がる。2は口径12.2cm、底径7.2cm、器高3.0cmを測る。胎土は黒色微砂、白針を多く混じえる砂質土。器壁はゆっくり開きながら立ち上がる。3は土鍤。胎土は淡橙～赤褐色を呈するかわらけ質土。全長4.9cmを測る。自然遺物はサザエ1点、ツメタガイ2点、チョウセンハマグリ12点、サルボウ1点、カキ1点が出土している。

錢名 表裏		拓本		錢名 表裏		拓本	
皇宋通寶	表			元祐通寶	表		
熙寧元寶	表			至道元寶	表		
聖宋元寶	裏			開元通寶	表		
開元通寶	表			開禧通寶	表		
大觀通寶	裏			元祐通寶	表		
紹聖元寶	裏			熙寧元寶	裏		
元祐通寶	表			聖宋元寶	裏		
政和通寶	裏			明道元寶	裏		

圖10 1面方形堅穴建物2出土緡錢一覽（1）

錢名表裏		拓本	錢名表裏		拓本		
紹聖元寶	裏			治平元寶	表		
祥符元寶	裏			天聖元寶	表		
皇宋通寶	表			元祐通寶	表		
治平元寶	裏			開元通寶	裏		
淳熙元寶	裏			元豐通寶	裏		
嘉祐通寶	表			元豐通寶	表		
天聖元寶	裏			聖宋元寶	裏		
元豐通寶	裏			聖宋元寶	表		

圖10 1面方形空穴鑄物 2出土銀錢一覽 (2)

錢名表裏	拓本	錢名表裏	拓本
元豐通寶 表		元豐通寶 裏	
元豐通寶 表		元豐通寶 裏	
祥符元寶 表		開元通寶 表	
皇宋通寶 表		元豐通寶 裏	
元祐通寶 表		元豐通寶 裏	
天禧通寶 表		皇宋通寶 表	
聖宋元寶 裏		熙寧元寶 表	
熙寧元寶 表		元祐通寶 裏	

圖10 1面方形豎穴鑄物2出土錯錢一覽（3）

錢名表裏		拓本	錢名表裏		拓本
熙寧元寶	裏		政和通寶	裏	
景祐元寶	表		皇宋通寶	裏	
元祐通寶	裏		紹聖元寶	裏	
慶元通寶	表		元豐通寶	表	
天禧通寶	裏		元豐通寶	表	
大觀通寶	裏		治平元寶	裏	
熙寧元寶	表		元祐通寶	裏	
元祐通寶	表		皇宋通寶	裏	

圖10 1面方形堅穴鑄物2出土銅錢一覽（4）



図10 1面方形豎穴建物2出土銘銭一覧（5）

方形豎穴建物4（図11）

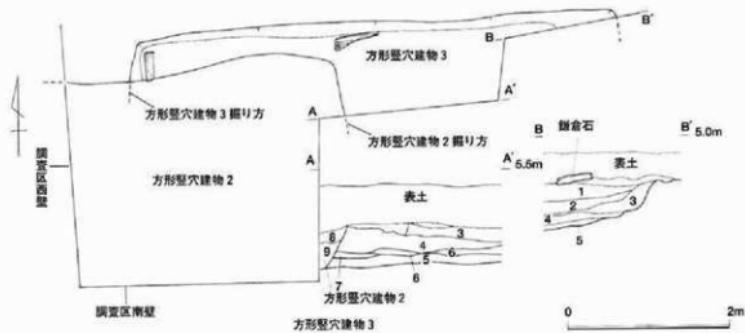
D-3グリッドに発見。建物は調査区北外に広がり、南側上部は土壁1に切られているため全貌を確認できなかった。確認できた規模は、東西255cm×南北140cm、確認面から底面までの深さ50cmを測る。南北方向に長軸を推定すれば、軸線方位はN-2°-W。底面海拔高は4.30m。断面形は壁の垂直に切り立つ箱型である。掘り方内部には、確認面下20cmから底面までに、非常に多くの木片が堆積するとともに、東側、南側、西側の壁下場に遺存良好な板材が、また南東隅には内側へ倒れこんだ隅柱が発見された。確認できた板材の各々の寸法は、東側のものが厚さ4cm×横幅12cm×長さ120cm以上。南側のものが厚さ4cm×横幅10cm×長さ180cm。西側のものが厚さ4cm×横幅12cm×長さ110cm以上である。隅柱は上部が欠損していたが12cm×12cm×100cm以上を測る。

覆土は、色調、含有物などにより7層に分層できた。

図13-1はコースター型かわらけ。口径7.0cm、底径8.5cm、器高1.3cmを測る。胎土は淡茶色を呈し、白針と黒色微砂を混じえる粉質土。口縁部は回しナデで調整され、大きく内側に折れこむ。自然造物は大型魚類の頭骨1点、魚類の不明骨1点、チョウセンハマグリ5点が出土している。

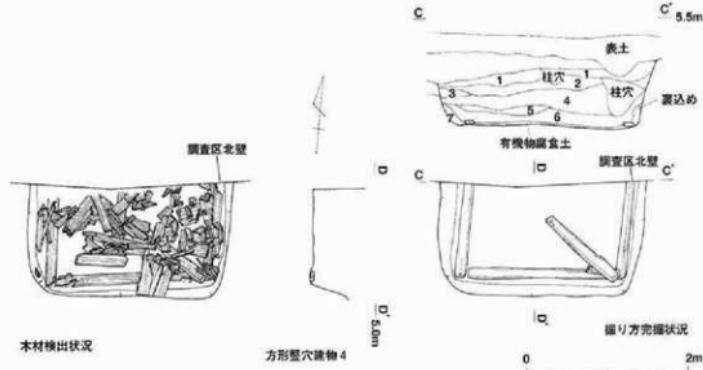
方形豎穴建物5（図14）

B-3グリッドに発見。調査区外にまで広がっており、全貌を把握しえない。平面プラン確認時には、二基の方形豎穴建物が重複するものと考えられたが、底面の観察状況から、西側に張出部をもつ方形豎穴建物と考えられる。なお、張出部西側に15cmほどの落ち込みを発見したが、これについては本址に伴うかどうか不明である。平面形は底面及び遺存する板材の様子から、南北方向に長軸をもつ長方形と思われる。断面形は壁の垂直に立ち上がる箱型。確認しうる規模は、主体部が東西180cm×南北280cm、確認面から底面までの深さ35cm。張出部が東西130cm×南北170cm、確認面から底面までの深さ30cmを測る。底面はほぼ平坦である。長軸の軸線方位はN-2°-E。本建物主体部南側と北側の壁下場に角材が発見された。寸法は南側のものが長さ150cm×横幅6cm×厚さ4cm、北側のものもほぼ同じ寸法であった。さらに、西側底面には6cm×10cmのホゾ穴のあいた土台角材（南側部分が欠損しているが、遺存長90cm×横幅12cm×厚さ4cm）を発見した。この角材の下には玉砂利が敷かれ、角材の安定を意図している。また、底面には柱穴3口が確認されている。張出部では、南側壁に沿って、長さ50cm×幅12cm×厚さ2cmの床板と思われる木片が出土した。その下には玉砂利が敷かれている。砂利面の下からは12cm×12cmの礎板を作り柱穴が2口45cm間隔で並ぶように発見されている。北側にもそれと平行するかたちで、長さ100cm×横幅12cm×厚さ2cmの床板が出土し、その下からも2枚の板材が敷かれていた。また、それら板材の下には、南側と同様に12cm×12cmの礎板を作り2口の柱穴が45cm間隔で並ぶのを確認した。二列の柱穴列の柱間は約100cmで、東側2口を結ぶ中央に8cm×12cmの礎板を作り柱穴が検出された。



(方形堅穴建物 3 上層注記)

1. 茶褐色砂質土 全体に黄色砂を含み、少量の泥岩塊（5mm～2cm大）、炭化物、かわらけ片を混じえる。粘性強。
2. 哈茶褐色砂質土 3層の上に多量の炭化物、少量の貝殻片、かわらけ片。本片が混入したもの。
3. 哈茶褐色砂質土 基本的には2層と同様であるが、炭化物、貝殻片の含有量が少ない。
4. 哈茶褐色砂質土 泥岩塊、炭化物ほか、特に貝殻片の貝殻片が多く含む。
5. 黑褐色砂質土 全体に黄色砂を含み、泥岩塊（5mm～2cm大）、炭化物、貝殻片。かわらけ片を混じえる。
6. 黑褐色砂質土 基本的には2層と同様であるが、炭化物の含有量が多い。
7. 黄色砂 大量の貝殻片、少量の粘土ブロック、微量の炭化物を混じえる。
8. 黑褐色砂質土 大量の砂を含み、貝殻片、炭化物、小粒の泥岩塊、かわらけ片を混じる。
9. 黄色砂 粘土ブロックが堆積し、大量の貝殻片、少量の泥岩塊、炭化物を混じる。



木材検出状況

方形堅穴建物 4

(方形堅穴建物 4 上層注記)

1. 茶褐色砂質土 全体に黄色砂を含み、多量の泥岩塊（5mm～2cm大）、炭化物、貝殻片、少量の木片、かわらけ片を混じる。しまり、粘性強。
2. 哈茶褐色砂質土 多量の貝殻片、少量の炭化物、木片。かわらけ片を混じえる。
3. 哈茶褐色砂質土 泥岩塊、炭化物、貝殻片を多く混じえる。
4. 茶褐色砂質土 全体に黄色砂を含み、泥岩塊（5mm～2cm大）、炭化物、貝殻片。かわらけ片を混じる。
5. 黑褐色砂質土 黄色砂が帶状に混じる。しまり。
6. 黑色砂質土 全体に青灰色砂を含み、泥岩塊、かわらけ片、少量の木片、大量の炭化物を混じえる。しまり強。
7. 青灰色砂質土 全体に黄色砂を含み、大量の泥岩塊、小石粒を混じる。（要略）

図11 1面方形堅穴建物 3・4

これらは、上屋を支えた主柱穴と思われる。張出部西側の掘り込み部でも大小の板材が出土しているが、この部分についての性格は上述したとおり不明瞭である。

覆土は色調、含有物などから大きく2層に分層できた。

図15-1は土器質脚付火鉢。口径39.8cm、底径24.0cm、脚部を含めた器高は10.3cmを測る。胎土は白色細石を多量に混じえる黒色土で器表は淡黄色を呈する。伊勢系上鍋とよく似た胎土で作られる。体部外面中位から内面にかけてはヨコナデ、体部外面中位付近はヨコナデの後、粗いヘラ削りで調整される。外底面は回転ヘラ切り痕が残る。2はかわらけ。口径7.5cm、底径4.25cm、器高1.65cmを測る。胎土は橙色を呈する砂粒を多く混じた砂質土。体部外面中位に強い稜を持ち、器壁は外反気味に立ち上がる。3は常滑の山茶碗口縁部片。4は常滑の壺。口径11.6cmを測る。5～6は釦。5は遺存長5.5cm、6は4.0cmを測る。7は「開元通寶」。8は「祥符通寶」。9は「皇宋通寶」。10は「治平元寶」。11は「元豐通寶」。12は「元□通寶」。13～14は判読不能。15～17は方形竪穴建物5の張出部より出土した。15は銅製管。全長1.6cm、幅1.2cmを測る。16～17は青磁蓮弁文碗。16は口径15.8cmを測る。素地は灰色粘質土。釉は灰緑色を呈する。17は高台径4.6cmを測る。素地は黒色微砂をわずかに混じえる明灰色粘質土。釉は青味灰緑色を呈し、内外面に貫入が入る。自然遺物は解体痕の残るウシの椎骨25点・頸椎2点・肋骨4点、イヌの肋骨15点、ヒシクイの脛骨1点、マダイの半截された前頭骨1点・左の角骨2点・右の主上顎骨2点、マグロ類の関節骨2点、メジロザメの椎骨3点出土している。

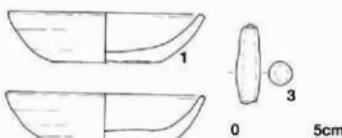
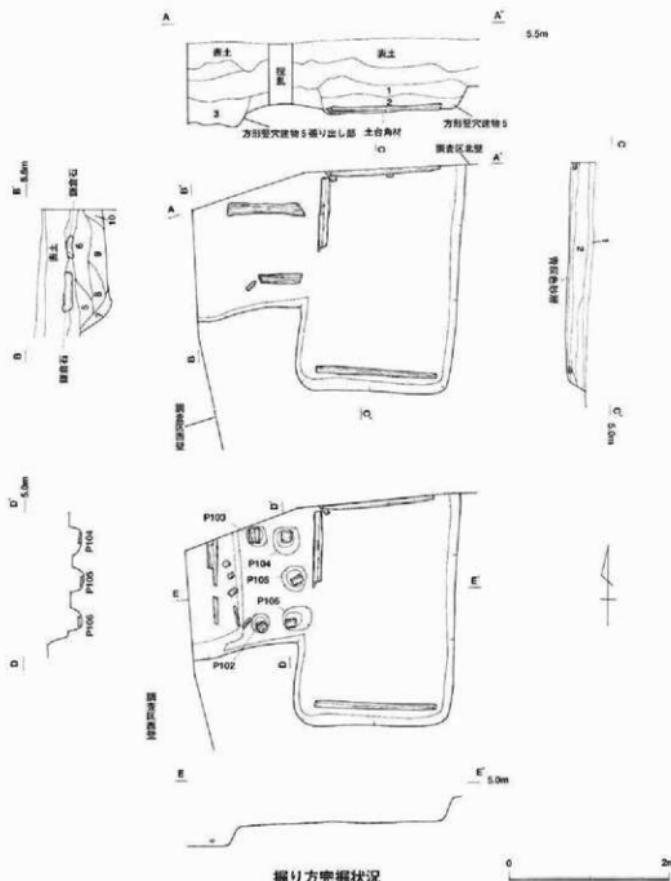


図12 1面方形竪穴建物3出土遺物



図13 1面方形竪穴建物4出土遺物



掘り方発掘状況

- (方形容穴建物5上斜面E)
1. 喷出褐色砂質土 全体に青褐色の粘土を表面に含み、多量の炭化物、泥岩層(5mm～10mm)、かわらけ片を混じえる。しまり強。
 2. 喷出褐色砂質土 1層の上に砂が多く含み、しまりは弱い。炭化物、かわらけ片を含む。
 3. 喷出褐色砂質土 砂層、炭化物、玉石、AIV、BIVを多く含む。しまり、粘性強。
 4. 喷出褐色粘土層 1層に青褐色粘土の混入が多い。含有量の多い層は1層に比して少ない。
 5. 黄褐色砂質土 小粒の砂、かわらけ片を混じえる。
 6. 喷出褐色砂質土 1層の上に砂多く混入する。
 7. 喷出褐色砂質土 1層に黒い色調が明るい。
 8. 喷出褐色砂質土 8層に比してしまりに弱い。
 9. 喷出褐色砂質土 泥岩層、炭化物のかわらけ片を混じる。しまり強。

図14 1面方形竪穴建物5

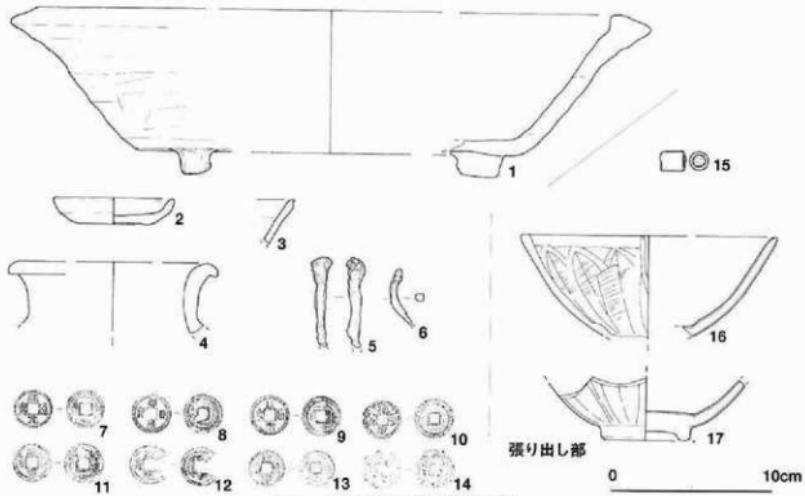


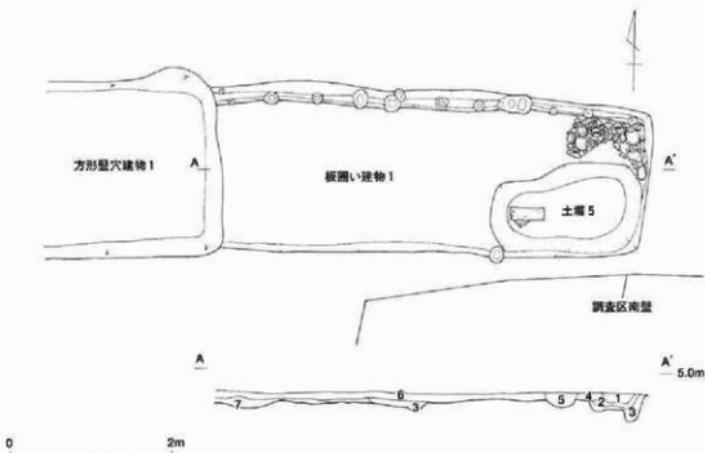
図15 1面方形竪穴建物5出土遺物

板塀い建物1 (図16)

C-4～D-4グリッドで発見された。西側の一部を方形竪穴建物1に切られている。確認できる平面形は長方形で、東西に長軸をもつ。規模は東西530cm×南北200cmで、確認面から底面までの深さは15cmを測る。長軸を主軸とする遺構軸線方位はN-86°-E。後世の削平により壁の遺存状態が悪く、断面形は定かでない。北壁下には、幅20cm、深さ15cm、断面形がU字形の周溝状の掘り込みがある。その中に約50cm間隔で並ぶ10cm×12cmの杭痕が9口発見された。

覆土は、色調と含有物などから8層に分けられた。底面は本址よりも新しい時期の柱穴による影響を受けているが、断面で観察するかぎり平坦で、底面海拔高は4.65mである。南東隅に確認された土壙5は本址に伴うものであろうか。

図17-1はかわらけ。口径8.8cm、底径4.9cm、器高2.25cmを測る。混入物の少ない粉質胎土で器壁は薄く、内壁気味に立ち上がる。内外面に煤が付着し、内底面は剥離している。2は涅美の壺。口径11.4cmを測る。胎土は灰～暗灰色泥粘質緻密土。肩部周辺にはヘラによる窓印が施される。3～4は山茶碗系こね鉢。3は口径32.4cmを測る。胎土は白色小石～細粒を多く混じえる灰色土。体部外面下位から下方は回転ヘラ削りで調整され、口唇部に浅いミゾがめぐる。体部内面下位から下方にかけて使用による磨滅痕が残る。4は3と同様、灰色を呈するボソボソな胎土で口唇部にはミゾは見られない。5は鳴滝中山産の淡橙色泥岩の砥石。遺存長は3.3×3.05cmを測る。6は斧。7～19は錢。7は「至道元寶」。8は「天聖元寶」。9は「皇宋通寶」。10は「治平通寶」。11は「熙寧元寶」。12は「元祐通寶」。13は「元祐通寶」。14は「紹聖元寶」。15は「紹熙元寶」。16は「聖宋元寶」。17は「寛永通寶」。18～19は判読不能。



- (板圓い建物1土壁5)
1. 喷茶褐色砂質土 ピット覆土。多量の炭化物、泥岩礫、かわらけ片、貝殻片も混じる。
 2. 黄色砂質土 少量の炭化物、泥岩礫を全体に混じえ、粘土ブロック（5mm～1cm大）が部分的に混入する。
 3. 喷茶褐色砂質土 少量の炭化物、泥岩礫、かわらけ片を混じえ、部分的に砂のブロックが混入する。しまり強。
 4. 喷茶褐色砂質土 全体に多くの黄色砂を含むため、1層や3層に比べ色調は明るい。少量の炭化物、泥岩礫、貝殻片を混じる。
 5. 喷茶褐色砂質土 ピット覆土。多量の泥岩礫（1mm～5mm大）、少量の炭化物、かわらけ片を混じる。砂ブロック、疊合石片（1cm大）が部分的に混入する。しまり、熱性強。
 6. 喷茶褐色砂質土 上層、炭化物、かわらけ片を混じる。
 7. 灰褐色砂質土 少量の炭化物、かわらけ片を混じる。

図16-1 面板圓い建物1

井戸1 (図18)

B-3～4グリッドに確認した。西側の一部分が調査区西壁外に延び、掘り込み上部の大部分が方形堅穴建物1によって壊されていたため、全貌を把握しえなかった。確認した掘り方は、東西155cm×南北175cmの不整方形を呈し、深さ140cmを測る。井戸の掘り方底面は東西140cm×南北150cmのはば方形で、その南東隅に、長さ80cm×横幅5cm×厚さ10cmの角材が正方形に組まれた井戸枠が遺存していた。また、長さ70cm×横幅10cm×厚さ2cmの側板が南側、北側に各1枚ずつ内側に倒れこんだ状態で遺されていることから、この井戸は「方形横線支柱式」と考えられる。

覆土は、上層が炭化物、木片、褐色粘土を混じえる貝砂層で、下層が炭化物や岩礫が混入する褐色砂である。

図19-1は手づくねかわらけ。口径9.2cm、底径7.9cm、器高2.0cmを測る。淡橙～橙色を呈する白色微砂をわずかに混じえる弱砂質土。体部外面のナデは2段。2は釘。全長11.6cm。3～4は箸。3は遺存長23.7cm。上方は焦げる。4は遺存長22.5cmを測る。いずれも先端は丁寧な削りが入れられている。

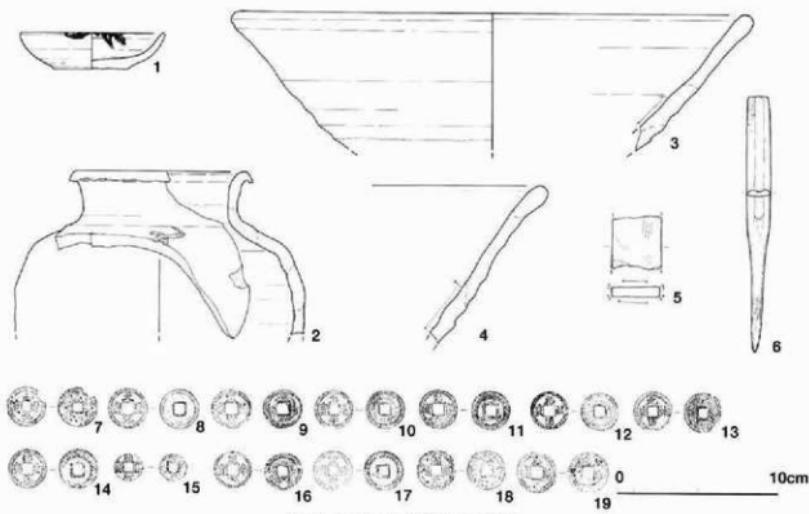


図17 1面板囲い建物1出土遺物

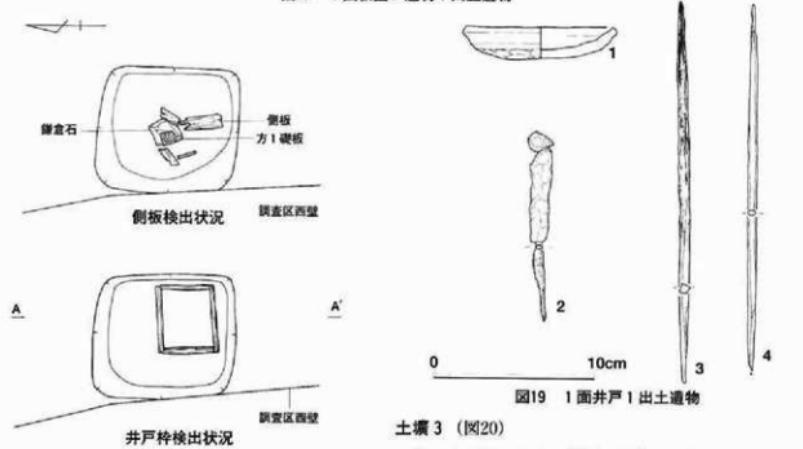
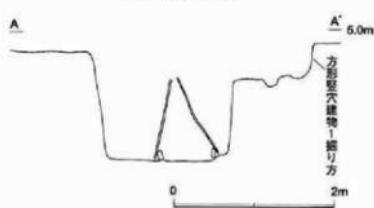


図19 1面井戸1出土遺物



土壤3(図20)

D-3グリッド内、板開き建物1に切られて発見された。東西135cm×南北80cmの平面楕円形を呈し、確認面からの深さは50cmを測る。断面形は擂鉢状で、底面海拔高は4.30mである。

覆土は、上層より粘質土を多く混じえる黄色砂質土が20cm程、その下に10cm~30cm程の泥岩層、さらに下層に茶褐色粘質土が底部まで堆積する。

図示できる出土遺物はなかった。

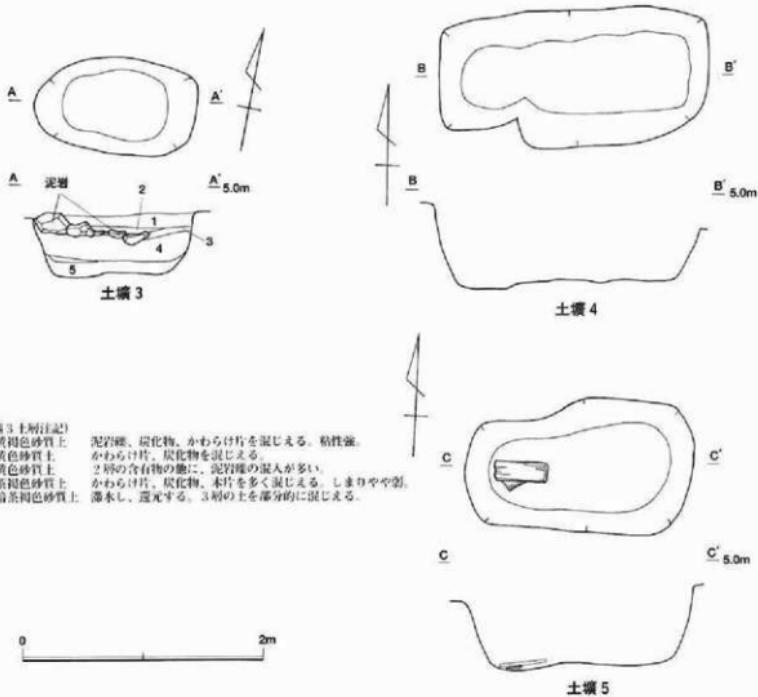


図20 1面土壤3・4・5

土壤4(図20)

C-3からD-3グリッド、調査区北壁際に発見された。東西方向に長軸をもつ不整長方形を呈し、東西225cm×南北120cm、確認面からの深さ70cmを測る。ほぼ平坦な底面の海拔高は4.10m。断面形は描鉢状である。

覆土は暗茶褐色粘土を含む黄色砂で、ほぼ一層であるため、人為的な埋め戻しが考えられる。その形状および覆土、断面の観察から、掘堀上塙の可能性を指摘できよう。

図示できる出土遺物はなかった。

土壤5(図20)

D-4グリッド、板塀い建物1の南東隅に発見された。東西方向に長軸をもつ不整梢円形を呈し、東西180cm×南北120cm、確認面からの深さ60cmを測る。断面形は描鉢状で、底面海拔高は4.20m。

覆土は暗茶褐色粘土を多く混じえる黄色砂である。長さ50cm×幅20cm×厚さ3cmの板材が西側底面に貼り付いていた。柱穴か。覆土から以下の遺物が出土している。

図21-1は糸切りかわらけ。口径7.5cm、底径5.3cm、器高1.7cmを測る。白色微砂を多く混じえる暗

茶色弱砂質胎土。器壁は薄くゆっくり開きながら立ち上がる。内外面に煤が付着する。自然遺物はイスの椎骨1点、鯨類の椎骨1点、不明哺乳類9点、アカニシ1点、チョウセンハマグリ1点、アサリ1点、カキ2点が出土している。

その他の柱穴出土遺物（図22）

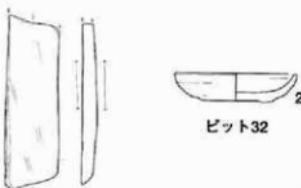
図22-1はピット13より出土した黄味淡緑色泥岩製の鳴滝産砥石。遺存長は10.8cm×3.3cm。破損剥離後に再成形、再利用している。2はピット32より出土した糸切りかわらけ。口径7.4cm、底径4.6cm、器高1.7cmを測る。胎土は淡橙色を呈する黒色微砂、雲母片を多く混じえる砂質土。器壁は薄めで内壁気味に立ち上がる。



図21 1面土壤5出土遺物



ピット13



ピット32



図22 1面ピット13、32出土遺物

第2節 近世・第1面上層（図23）

近世に属する遺構としては、泥岩組みを根固めとした建物基礎群、それらを区画すると思われる塀、鎌倉石の石列、土塀2基が発見された。これらの遺構が発見された経緯は上述した通りで、遺構に伴う面は確認できなかったため、1面上層とした。遺構が確認された土層は、泥岩片やかわらけ片を混じえる「褐色を帯びた、やや粘土質の黒灰色砂質シルト」（後節の花粉分析用資料参照）であった。

建物基礎群（図24）

調査区のほぼ全域にわたり、泥岩組みを根固めの建物基礎を計10個発見した。大小複数の泥岩を組み合わせて形成された個々の基礎は、一辺が約50cmの正方形である。建物基礎群は柱穴列に囲まれた敷地内に位置し、3間×4間の規模である。北端の2基を除く基礎群が東西方向に1間、南北方向に2間のほぼ等間隔をおいて並ぶ。東西軸方位はE-80°-N。

本遺構より出土した遺物はない。

柱穴列1（図25）

建物基礎群の西側に確認された。覆土は炭化物、黄色砂ブロックを混じえる茶褐色砂質土。角柱状の柱痕が遺存していた。

柱穴列1に帰属するピットより出土した遺物で図示できるものはなかった。

柱穴列2（図25）

建物基礎群の東側に南北方向に確認された。覆土は柱穴列1とよく似る黄色砂ブロックを混じえる茶褐色砂質土であり、柱穴列1と2は同時期に存在していた場の可能性も考えられる。いずれのピットの底面にも礎板が置かれていた。

図26は柱穴列2に帰属するピット96より出土した。

図26-1は7世紀代の土師器の壺。胎土は砂粒、雲母細粒を混じえる淡橙色土。口径は13.6cmを測り

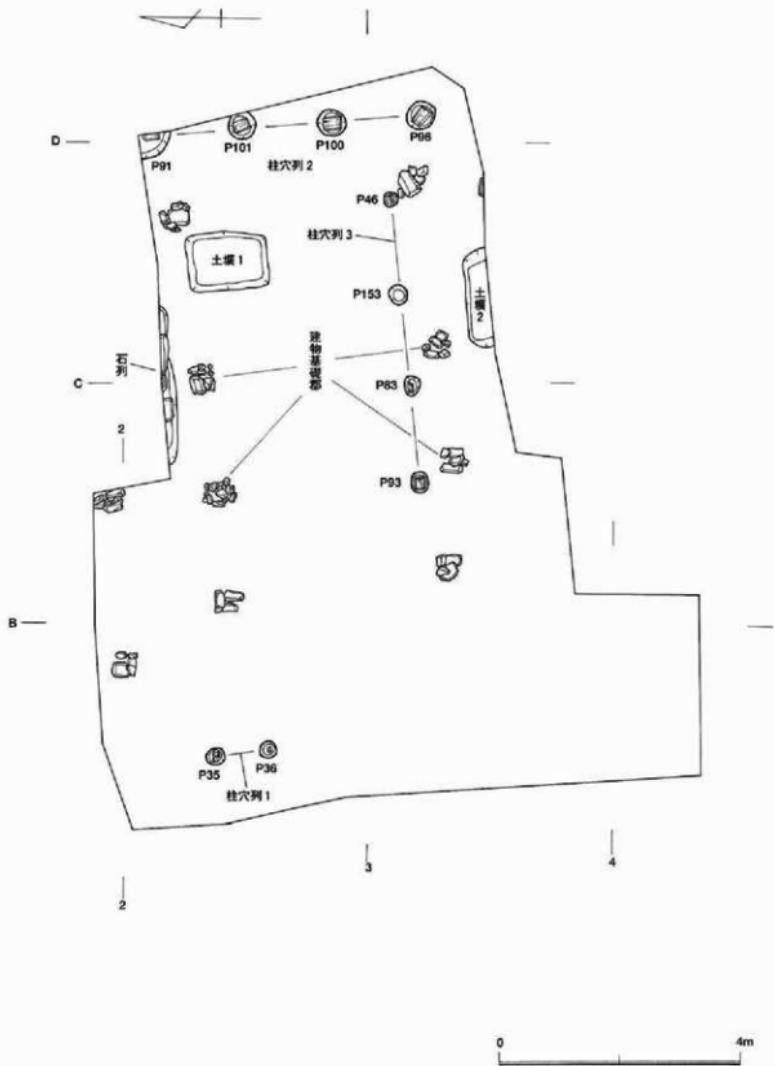


图23-1 面上层全测图

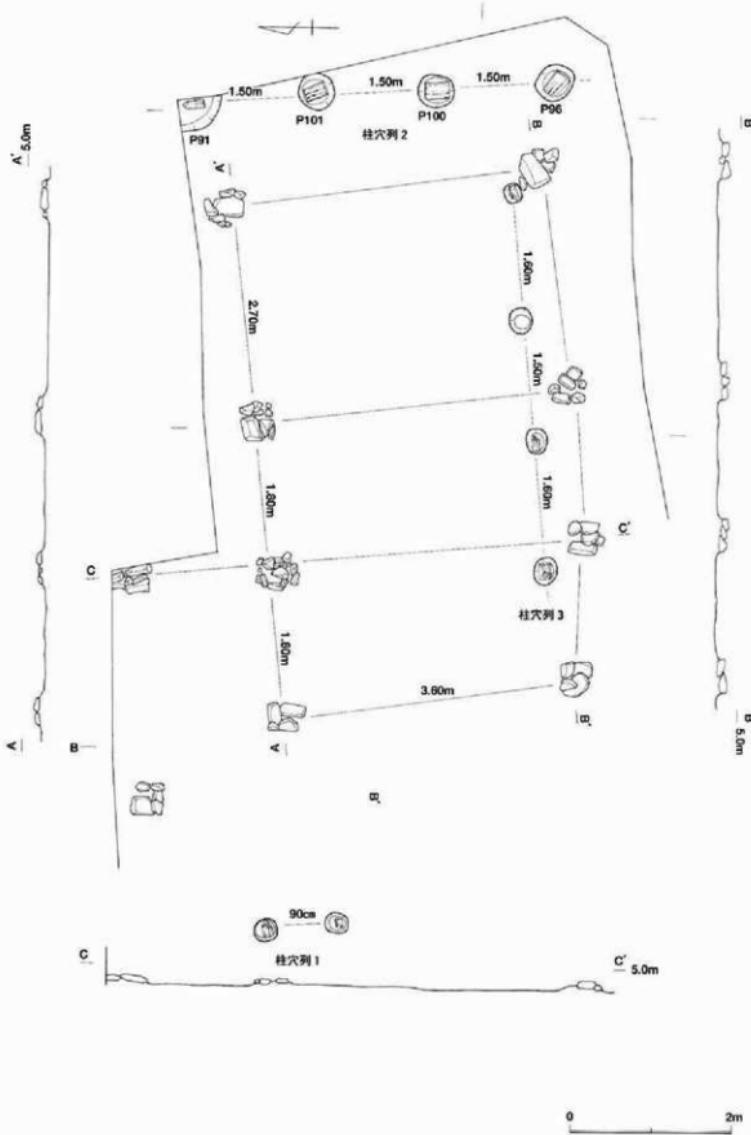
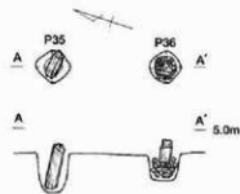
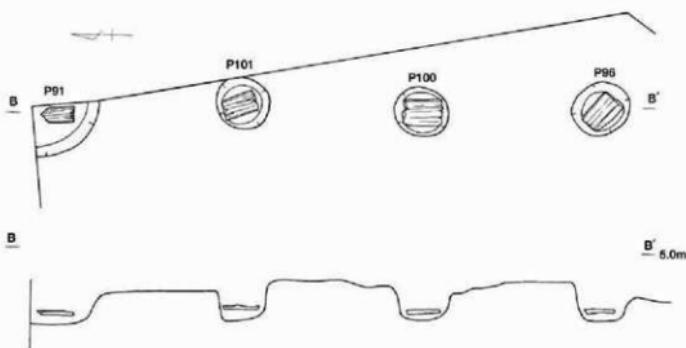


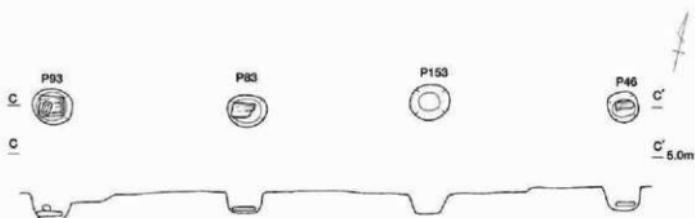
図24 1面上層建物基礎群と柱穴列1・2・3



柱穴列 1



柱穴列 2



柱穴列 3



图25 1面上磨柱穴列 1 · 2 · 3

大きめである。2は手づくねかわらけ。口径8.9cm、底径7.6cm、器高2.2cmを測る。白色微砂を多く混じる肌色砂質胎土。3は糸切りかわらけ。口径7.9cm、底径5.2cm、器高1.9cmを測る。胎土は黒色微砂、白針を多く混じる淡橙色砂質土。器壁は内縁気味に立ち上がり、口唇部は大きく外反する。4は国産磁器の壺か瓶類の蓋。素地は白色緻密土。わずかに呉須が残っている。5は「政和通寶」。

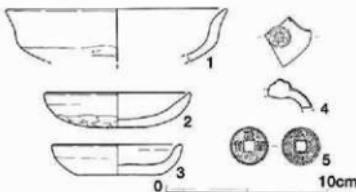


図26 1面上層柱穴列2(ピット96)出土遺物

柱穴列3(図25)

建物基礎群南列の北側に東西方向に確認された。建物基礎群との新旧関係は不明である。覆土は泥岩、炭化物を多く混じる暗茶褐色砂質土。ピット153以外は底面に礫板が置かれていた。

図27-1は瀬戸緑釉小皿。ピット93より出土した。口径は12.3cmを測る。胎土は白色細粒を多く混じる淡黄白色粉質土。釉は淡緑色を呈する。古瀬戸後期後半くらいか。

以上の柱穴列は建物基礎群の建物を三方から囲う敷地区画を行っていると考えられる。

石列(図28)

調査区北壁際、C-D-3グリッドにて鎌倉石(凝灰岩)の切り石3個が列をなして発見された。個々の石の寸法は長軸30cm~60cm、厚さ約20cmである。石列には、ほぼ切り石のかたちをした掘り方が認められ、西端に切り石一個が抜き取られた痕を確認した。掘り方は調査区外にまで及ぶため、その規模は把握できなかった。確認できたかぎりで、東西270cm×南北20cmを測る。鎌倉石の切り石は他の壁面の土層中にも数点確認されたが、列を形成するものはこれのみである。

本遺構より出土した遺物はない。

土壤1(図28)

調査区北東、D-3グリッドに発見した。平面形は長方形で、南北方向に長軸をもつ。東西95cm×南北135cm、確認面から底面までの深さ25cmを測る。断面形は壁が垂直に立ち上がる箱型である。

覆土は、主に粘性の強い茶褐色の砂質土で、泥岩疊の混入がみられる。

図示できる遺物はない。

土壤2(図28)

D-4グリッドに発見。遺構の大半は調査区外に延びており、全貌を把握しえなかった。確認した

かぎりでの規模は、東西165cm×南北35cm。確認面から底面までの深さは40cm。底面海拔高は4.50mを測る。断面形は浅い皿型。

覆土は暗灰褐色砂質土に、泥岩疊、貝殻片、炭化物そしてブロック状の黄色砂を混じる。

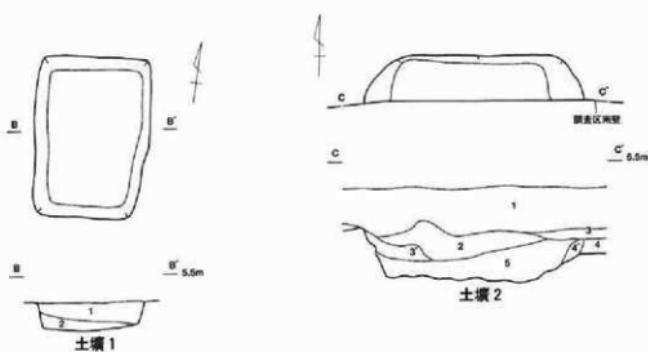
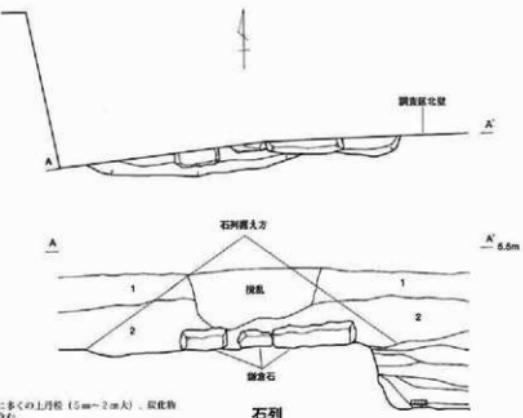
図29-1は糸切りかわらけ。口径7.6cm、底径4.65cm、器高2.35cmを測る。胎土は橙色を呈する雲母片を多く混じる弱粉質土。器壁は厚めで直立気味に立ちがり、体部内面中位に稜を持ち、口唇部にむけて外反する。



図27 1面上層柱穴列3(ピット93)出土遺物



図28 1面上層土塗2出土遺物



- (土壤1) 土剖面記述
1. 黑褐色砂質土 全体に多くの砂を含み、炭化物、かわらけ片を含む。
2. 黑褐色砂質土 下部より砂の混入が多い、炭化物、かわらけ片を含む。

- 始葉褐色砂質土 表土、全体に多くの泥炭（5mm～2cm大）、炭化物、かわらけ片を含む。
- 黒褐色砂質土 上層、炭化物、かわらけ片を多く含み、部分的に黑色砂ブロックが混入する。
- 黒褐色砂質土 全体に炭化物が明るい、かわらけ片を含む。
- 始葉褐色砂質土 全体に黄色砂が張り、少部分の泥炭（5mm～2cm大）、かわらけ片を含む。3層に比して粘性に覆われる。
- 始葉褐色砂質土 全体に多くの炭化物、泥炭（5mm～2cm大）、かわらけ片を含む。3層に比して粘性に覆われる。
- 始葉褐色砂質土 3層の上に多くの炭化物、少部分の貝殻、上部層、木片が含まれる。

0 1 2m

図29 1面上層石列、土壤1・2

1面上層出土遺物(図30)

図30-1～6は舶載磁器。1は青磁刻花文碗。素地は灰色粘質緻密土、釉は灰緑色を呈する。2～3は青磁蓮弁文碗。2は高台径4.6cmを測る。素地は黒色微砂を混じえる明灰色粘質緻密土。釉は青味灰緑色を呈し、厚めに施釉される。高台周辺は露胎で鉄発色する。3は口径11.1cmを測る。素地は黒色微砂を混じえる灰色弱粘質緻密土。釉は乳青色を呈する。外面に施された蓮弁文はだいぶ退化している。4は青磁碗。高台径は5.4cmを測る。素地は黄味灰色粘質緻密土。釉はオリーブ色を呈し、施釉は薄めである。疊付から底裏にかけては露胎。内底面に使用によるキズがわずかに残る。5は青磁折縁鉢。口径は16.6cmを測る。素地は黄味灰色弱粘質緻密土。釉はオリーブ色を呈し、内外面に貫入が入る。施釉は厚め。6は白磁口兀皿。口径11.2cmを測る。素地は黒色微砂を混じえる白色弱粘質緻密土。釉は乳白色を呈する。7は近世瀬戸と思われる鉄絵折縁小皿。口径9.1cm、高台径4.1cm、器高3.0cmを測る。胎土は淡黄色弱粉質緻密土。釉は口縁部に緑色を呈する銅綠釉が施釉されている。見込みに描かれた鉄絵の文様は不明。8～9は石英の火打石。10は粗粒安山岩製の磨石。箱根付近のものと思われる。11は釣り針。全長は10.4cmを測る。12は掛金具類か。全長は6.8cmを測る。13は「開元通寶」。14は目盛付笄。小さい目盛りはおおよそ1cm前後で5本、大きな目盛りはおおよそ2cm前後で3本がノミ状工具により荒く彫り込まれている。造存長は5.7cm、最大幅1.7cmを測る。15は笄。造存長は5.8cm、最大幅は1.4cmを測る。自然遺物はウシカウマの肋骨9点と椎骨1点、イスの肋骨6点と椎骨1点、マダイの舌骨1点、サメの椎骨1点、大型魚類の椎骨2点、鯨類の上顎骨1点が出土している。

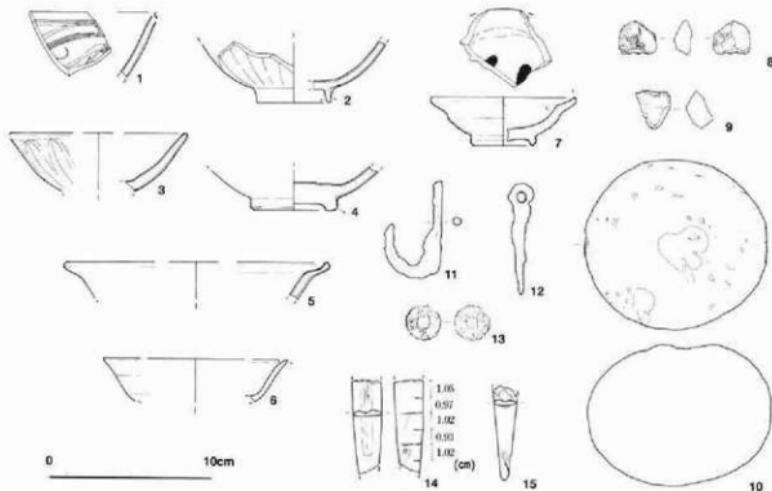


図30 1面上層出土遺物

第三章 米町遺跡の花粉化石

これまで鎌倉市内において行なってきた花粉分析は、史跡永福寺跡などの北部や、北条政村屋敷跡などの西部、および若宮大路近辺を中心とした地点が主体であった。今回の米町遺跡は鎌倉市東部地域の大町二丁目に所在しており、この地域においては初めての花粉分析例となり、興味深い。

この米町遺跡において行われた発掘調査では、14世紀とみられる方形堅穴建物などの遺構・遺物が検出されている。この時期の鎌倉は、幕府の倒壊（1333年）とその後の復興といった激動の時代であり、その前の13世紀は鎌倉が最も栄えた時期に当たる。こうした繁栄・倒壊・復興にともなって鎌倉周辺の植生は大きな影響をうけ、そうした様相、特に繁栄時における土地開発および木材利用などでスギ林や照葉樹林が減少した様相が上記した各遺跡で認められている（鈴木1996など）。平野東部に位置する米町遺跡においても同様のことが示されることが予想されるが、樹木類はまったく無く、雑草類で占められていたのであろうか。こうした観点から花粉分析を行い、遺跡周辺の古植生について検討した。

1 試料

試料は、2号方形堅穴建物址の西壁（図31の矢印）より柱状で採取し、室内における再度の観察の後、11試料を分割した。花粉分析はそのうち、最下層を除く各層1点の9点について行った（図32）。以下に各層について簡単に記すが、層位番号は遺跡発掘調査団より頂いたセクション図に示されているものを使用した。

最上部は褐色を帯びたやや粘土質の黒灰色砂質シルトで、泥岩（土丹）片やかわらけ片が含まれる。



図31 試料採取位置

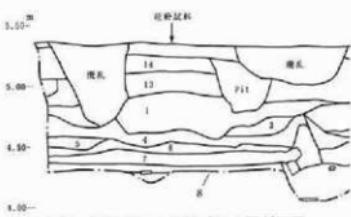


図32 試料採取地点付近の土層断面図

本層は出土遺物から江戸時代と考えられている（試料1）。14層は褐色を帯びた黒灰色の砂質シルトで、泥岩片が散在しており、炭片が認められる（試料2）。13層も褐色を帯びた黒灰色の砂質シルトで、泥岩片が散在しており、かわらけ片がみられ、小さな空隙が多く認められる（試料4）。1層は2つに分層され、上部は褐色を帯びた黒灰色の砂質粘土質シルトで、泥岩片や炭片が散在している（試料6）。下部は褐色を帯びた黒灰色の砂質シルト・シルト質砂で、泥岩片や炭片が認められる（試料7）。4層は黄褐色泥岩片や炭片が点在しており、貝殻の小片が散在している（試料8）。6層も黄褐色を帯びた黒灰色の粘土質砂で、硬くしまっている。また、泥岩片や炭片が点在しており、貝殻の小片が散在している（試料9）。7層は黒・黒褐色の粘土質砂で、貝殻小片が散在しており、材片も認められる（試料10）。8層は黒褐色の粘土質砂で、最下部1～2・を除く下半部は非常に固くなっている（試料11）。最下層は黄褐色の細粒砂で、大型貝片を含む貝殻小片が多量

に認められ、また最上部からは箸状の材片が認められた。時代については出土遺構・遺物から、最上部および最下部を除く1～8と13、14層が中世（14世紀）と考えられている。

2 木材遺体

2号方形堅穴建築北より検出された羽目板2点（北壁の東側・西側）、床板1点、床面の材1点、西壁断面からは材片（6層）と箸状材（8層最上部）の2点、および調査区北東部端から検出された板材密集部（図31の●印）より3地点の計9点について樹種同定を行った（松葉（パレオ・ラボ）が担当）。方法は、片刃カミソリを用いて試料の横断面（木口と同義）、接線断面（板目と同義）、放射断面（柱目と同義）の3断面をつくり、ガムクロラール（Gum Chloral）で封入し、永久標本を作成する。これらの標本を光学顕微鏡下で観察し、現生標本との比較により同定した。以下に各標本の記載を示す。

各標本ともほほは同様の形質を示し、水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹材で、早材から晩材にかけての移行はやや急。放射組織は、柔細胞からなり、單列で2～13細胞高からなる。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に普通2個見られる。

以上の形質から、スギ科のスギ (*Cryptomeria japonica* (Linn. fil.) D. Don) の材と同定した。スギは東北から九州にかけての温帯から暖帯にかけて分布する常緑針葉樹である。

3 分析方法

最下層を除く9層各1点の9試料について、次のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約4～5g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の籠にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混液を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

4 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉21、草本花粉20、形態分類で示したシダ植物胞子2の総計43である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表1に、また、主要な花粉・シダ植物胞子の分布を図33に示した。なお、分布図における各分類群は全花粉・胞子总数を基準とした百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるが、それぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括し入れてある。また、花粉化石の単体標本（花粉化石を一個体抽出して作成したプレラート）を作成し、各々にPLC SS番号を付し、形態観察用および保存用とした。

検鏡の結果、上部試料1～6および9においては検出できた花粉化石数が非常に少なく、分布図として示すことができなかった。試料9を除く下部についてみると、草本花粉が圧倒的に多く、80～90%を占めている。そのうちイネ科が最も多く、最下部の試料10、11では60%に達し、上位の7、8では半減するが30%を越えている。次いでヨモギ属が多く検出されており、試料7では20%を越えるなど、上位の試料7、8で多くなる傾向がみられる。同様の傾向が10%前後検出されているアカザ科ヒュウ科や、5%前後のカヤツリグサ科、アブラナ科、タンボボ亜科などに認められる。その他、ヨモギ属を除く他

表1 米町遺跡の産出花粉化石一覧

和名	学名	1	2	4	6	7	8	9	10	11
樹木										
マキ属	<i>Podocarpus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1
モミ属	<i>Abies</i>	-	-	-	-	-	-	-	3	1
ツガ属	<i>Tsuga</i>	1	-	-	-	-	-	-	5	2
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	1	-	-	-	-	-	1	-
マツ属複管束亞属	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	-	1	-	-	2	2	-	6	5
マツ属(不明)	<i>Pinus (Unknown)</i>	1	-	1	-	2	2	-	2	1
コウヤマキ属	<i>Schima</i>	-	-	-	-	-	-	-	2	-
スギ属	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don T. C.	1	1	-	-	1	10	-	8	17
イチイ科-イヌヤマ科-ヒメキ科	<i>Juglans</i>	-	-	1	-	-	1	-	4	1
クルミ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	-	-	-	-	-	1	-	1	2
カバノキ属	<i>Betula</i>	-	-	1	-	1	-	-	1	5
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	1	1	3	2	-	1	-	1	2
ブナ属	<i>Fagus</i>	-	-	1	-	1	1	-	2	3
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	-	2	-	-	-	-	-	1	2
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	-	-	-	1	1	-	6	2	-
シノキ属-マタバシイ属	<i>Castanopsis - Parania</i>	-	-	-	-	1	-	-	1	-
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	-	-	1	-	1	-	-	1	-
ブドウ属	<i>Vitis</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1
サカキ属-ヒサカキ属	<i>Cleyera-Eurya</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	-	-	-	2	4	-	2	-	-
草本										
イネ科	<i>Gramineae</i>	10	11	10	4	59	89	2	279	299
ガマ科	<i>Cyperaceae</i>	-	-	-	-	-	21	-	6	9
クワ科	<i>Moraceae</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	4
ギンシジ科	<i>Rubiaceae</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1
サナエタデ第1-ウナギツカエ第	<i>Polygonum sect. Persicaria-Echinocaulon</i>	-	-	-	-	1	-	-	1	1
イタドリ科	<i>Polygonum sect. Reynoutria</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1
アカバナ科-ヒユ科	<i>Chenopodiaceae - Amaranthaceae</i>	2	-	1	23	34	-	28	20	-
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	-	-	-	-	1	-	-	3	2
カラマツソウ属	<i>Thlaspietrum</i>	-	-	-	-	-	-	-	2	-
他のキンボウゲ科	<i>other Ranunculaceae</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	1
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	4	3	3	-	17	19	-	5	7
メヌ科	<i>Leguminosae</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	2
フウロソウ属	<i>Geraniaceae</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-
トウダイグサ科	<i>Euphorbiaceae</i>	-	-	-	-	-	-	-	2	-
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	-	-	-	-	-	2	-	-	-
ナス属近似種	<i>cf. Solanaceae</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-
オオバコ属	<i>Plantago</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Arenaria</i>	2	1	2	1	43	44	-	45	54
他のキク科	<i>other Tubuliflorae</i>	-	5	-	-	2	4	-	3	7
タンボポ科	<i>Liguliflorae</i>	4	5	3	2	12	24	-	4	15
シダ植物										
球形孢子	<i>Monocolpate spore</i>	6	5	4	-	5	15	-	2	16
三角形孢子	<i>Trilete spore</i>	-	2	-	-	3	10	-	6	5
樹木花粉	<i>Arboreal pollen</i>	5	6	8	2	9	26	0	47	51
草木花粉	<i>Noarboreal pollen</i>	22	26	18	8	159	238	2	381	422
シダ植物孢子	<i>Spores</i>	6	7	4	0	8	25	0	8	21
花粉、孢子总数	<i>Total Pollen & Spores</i>	33	39	30	10	176	289	2	436	494
不明花粉	<i>Unknown pollen</i>	6	10	4	1	23	11	0	13	8

T. - C. は Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae を示す

のキク亜科もこの4試料から1%ほど得られている。樹木類ではスギが最も多く検出され、次いでマツ属複維管束亞属（アカマツ、クロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）、コナラ属アカガシ亜属となつているがいずれも5%以下である。

5 遺跡周辺の古植生

上記したように、上位試料からは花粉化石がほとんど得られず、この頃の植生については不明である。ここで扱っている花粉は丈夫な外膜を持ち、水中などの還元環境下では良好な状態で保存される。しかしながら紫外線には弱く、地上に落下したものは容易に分解されてしまう。また、土壌中のバクテリアなどによっても分解される。米町遺跡の13層においては小空隙が多くみられ、土壤化作用をうけていると推測される。このように、上位層については乾燥化状態にあったとみられ、多くの花粉化石は紫外線

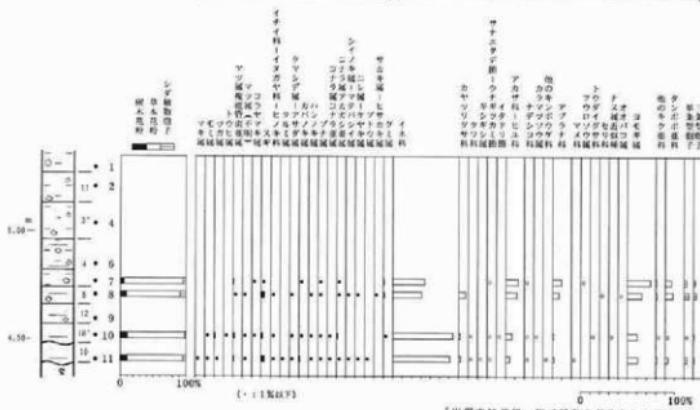


図33 米町遺跡の花粉化石分布図

やバクテリアの作用で分解・消失してしまったと思われる。

下位層についてみると、保存状態はよいものではないが、草本花粉を中心に比較的多く検出されており、おむね当時の植生を反映していると思われる。それによると、遺跡周辺はイネ科を主体に、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属、タンボボ亜科などの雑草類が多く生育していたと推測される。同様の傾向が大倉幕府周辺遺跡群（鈴木1991）や政所跡（鈴木1992）、北条小町邸跡（鈴木1996）などにみられる。このうち政所跡では、12世紀末から13世紀前半頃の遺跡周辺の植生は人間の干渉をうけ樹木類はまばらで、アカザ科-ヒユ科やヨモギ属などの雑草が目立つ植生であったと推測されている（鈴木1992）。このように、幕府成立後、北条氏に実権が移った13世紀にはさらなる発展を遂げ、府内は雑草類が目立つ植生であった。14世紀前葉の鎌倉時代末頃の米町遺跡周辺は町屋地域と予想され（河野1989）、繁栄期から引き続き住居の周りなどではほとんど樹木類はみられず、イネ科を中心、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属、タンボボ亜科などの雑草類が目立つ植生であった。

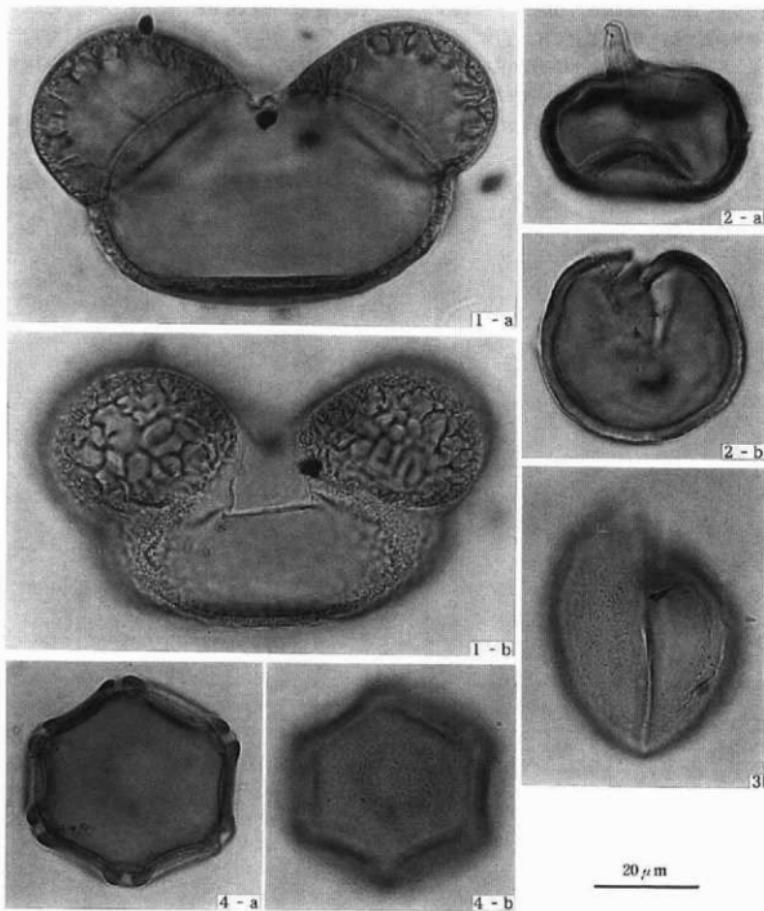
樹木類では、少ないなかでスギが最も多く検出されており、次いでニヨウマツ類が得られている。これらは風媒花であり、多くの花粉が空中に散布され、風によって遠方まで運ばれる。このように、鎌倉周辺の丘陵・山地部に分布していたであろうスギ林やマツ林より飛来し、堆積したものと推測される。このスギとマツについて北条小町邸跡（泰時・時頼邸）の花粉分析結果をみると、それまで優勢であったスギ属林や照葉樹林からニヨウマツ類やコナラ亜属の優勢へと13世紀前半に交代が認められ（鈴木1996）、他の地点における花粉分析結果からも同様のことを読み取ることができる。米町遺跡においては検出花粉数が少なく、そうした傾向を読み取ることはできないが、樹種同定を行った試料全てがスギであり、このことからも少なくともスギ林が大きな影響を受けたことが推測される。そうしたなか、スギが少ないながら最も多く検出されたことから、スギ林が遺跡近辺丘陵部の一部に残存していたことが推測される。

引用文献

- 鈴木 茂 1991 「大倉幕府周辺遺跡の構内堆積物の花粉分析」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7 平成2年度発掘調査報告」 鎌倉市教育委員会刊 85~91頁。
- 鈴木 茂 1992 「政所跡構内堆積物の花粉化石」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8 平成3年度 発掘調査報告」 鎌倉市教育委員会刊 163~169頁。
- 鈴木 茂 1996 「花粉分析」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12 平成7年度発掘調査報告(第2分冊)」 鎌倉市教育委員会刊 261~270頁。

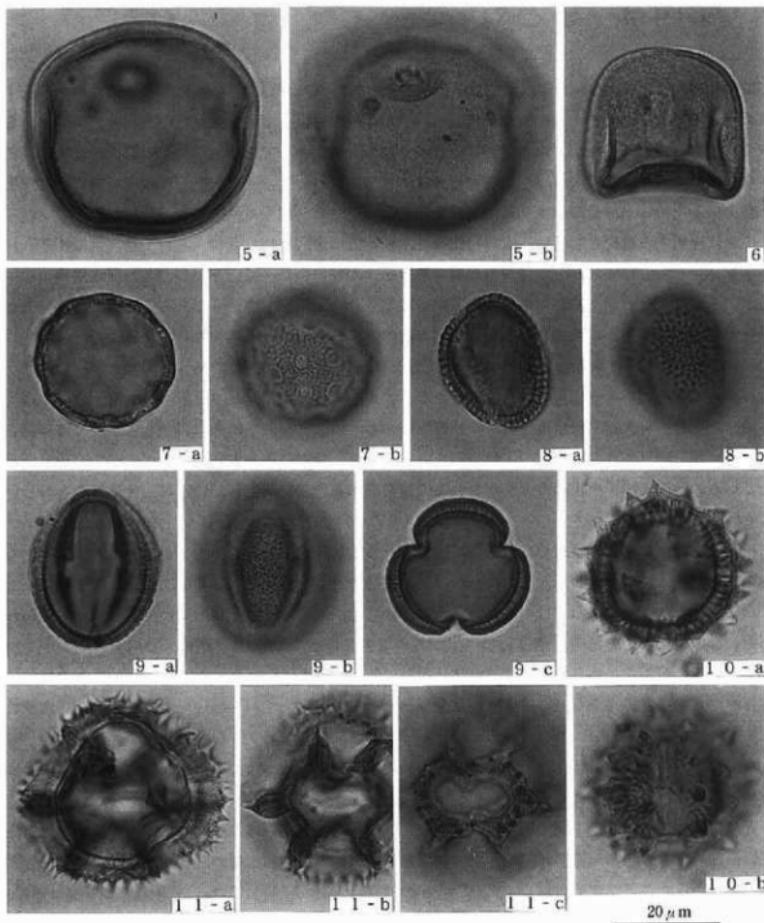
鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

図版1



米町遺跡の花粉化石 (1)

- 1: マツ属複維管束亞種 PLC.SS 1836 試料8
- 2: スギ属 PLC.SS 1833 試料9
- 3: イチイ科一イスガヤ科一ヒノキ科 PLC.SS 1831 試料9
- 4: ハンノキ属 PLC.SS 1834 試料9



米町遺跡の花粉化石 (2)

5: イネ科 PLC.SS 1838 試料8

6: カヤツリグサ科 PLC.SS 1839 試料6

7: アガサ科—ヒュ科 PLC.SS 1842 試料6

8: アブラナ科 PLC.SS 1840 試料6

9: ヨモギ属 PLC.SS 1835 試料9

10: ヨモギ属を除く他のキク亜科 PLC.SS 1837 試料8

11: タンボボ亜科 PLC.SS 1841 試料6

第四章　まとめ

遺跡地の現在の標高は5.3mで、中世の遺構を確認できたのは標高4.8mあたりの中世地山を形成する黄褐色砂質土上で、そこからは13世紀代から14世紀前半の遺構・遺物を発見した。現地表下30cmから中世遺物包含層を確認したが、出土遺物は中世前半期のものばかりで、15・16世紀の遺構・遺物は確認できなかった。文献資料によれば、遺跡地周辺は中世後半にもいまだ「町」として栄えていたことが推測されているため、当該遺跡の中世後半期以後の遺構・遺物は、削平されてしまった可能性が高い。

中世に帰属する遺構としては、板開き建物址1棟、方形竪穴建物址5棟、井戸1基、土壙4基、柱穴多数を発見した。柱穴群からは建物の規模・形態をつかむにいたっていないが、方形竪穴建物、板開き建物、土壙などは南北あるいは東西の二方向に限定された主軸をもつようである。この二方向の主軸の意味が経時的な町並みの変化にともなう規制方向の違いか、あるいは多數の柱穴群によって構成されていたであろう建物群とのセット関係のなかで機能的に制約された方向性であったのかといった問題は、今後の遺跡地周辺の調査成果を待ちたい。ただし、調査区の東側に接して位置する大町から海岸に向かう道路が中世の町大路（鎌倉市史のいう小町大路）とどのような関係にあるのか考古学的には確認されていないが、発見された遺構群の主軸方向を考慮すれば、現在の南北方向の通りが現在の町並みを規定しているのと同様に、中世の町大路がこれらの遺構群の方向性を規定していた可能性は高いものといえよう。

出土遺物はいわゆる「浜地」に隣接して建てられる方形竪穴建物から出土する遺物と大きな年代差あるいは性格差はないと思われる。ただし、渥美の製品が21点（壺あるいは甕は20点、鉢は1点）出土していること、手づくねかわらけが混じることなどから「浜地」よりは年代的にわずかに遅ると思われる。また、縄の羽口などの鋳造関連遺物の出土が極めて少なかった。他方、「浜地」と同様、ウシかウマ、イス、魚類、鯨類を主体とする動物遺存体は多い。特にウシあるいはウマなどの大型哺乳類の肋骨には解体痕が多く残り、完全な形を遺すものは全く出土しておらず、すべて細片であった。また、四肢骨はまったく出土していない。これらの出土様相が「浜地」で見られるような骨材加工職人の存在を示唆するものなのか、遺跡地の名称が示すとおり「市」の機能の内で食材などを供給していた地域なのかは、今後の周辺の調査を待たなくてはならない。

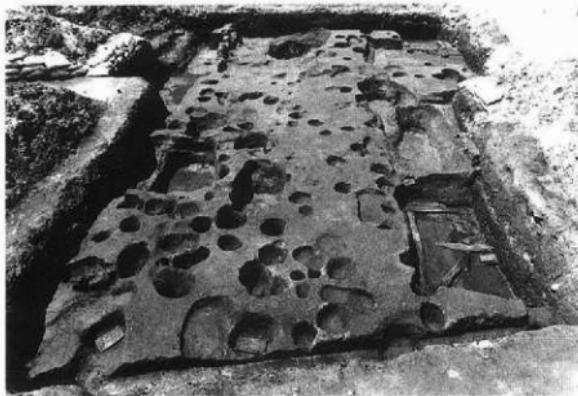
近世以降と考えられる1面上層では、調査地とほぼ同様の柱穴列によって三方を囲まれた敷地内に泥岩根固めをもつ建物配置が確認できた。調査地点では、この1面上層の近世から現在まで敷地分割が変わらなかったことが認められる。また、現在の通りは、真北に対して西に14°振れ、礎石群は西に11°振れている。礎石列は、現在の通りと3°ずれているが、中世の遺構群の長軸は、ほぼ真北に平行かあるいは直交している。南北に走る町大路の方向性が推察されようか。

1面上の生活面は中世後期以降の時期に削平が行われたものと思われ、1面上層より出土した遺物は少ないうえに染付など近世に属する遺物は細断片が多く、出土遺物から年代比定することはむずかしい。

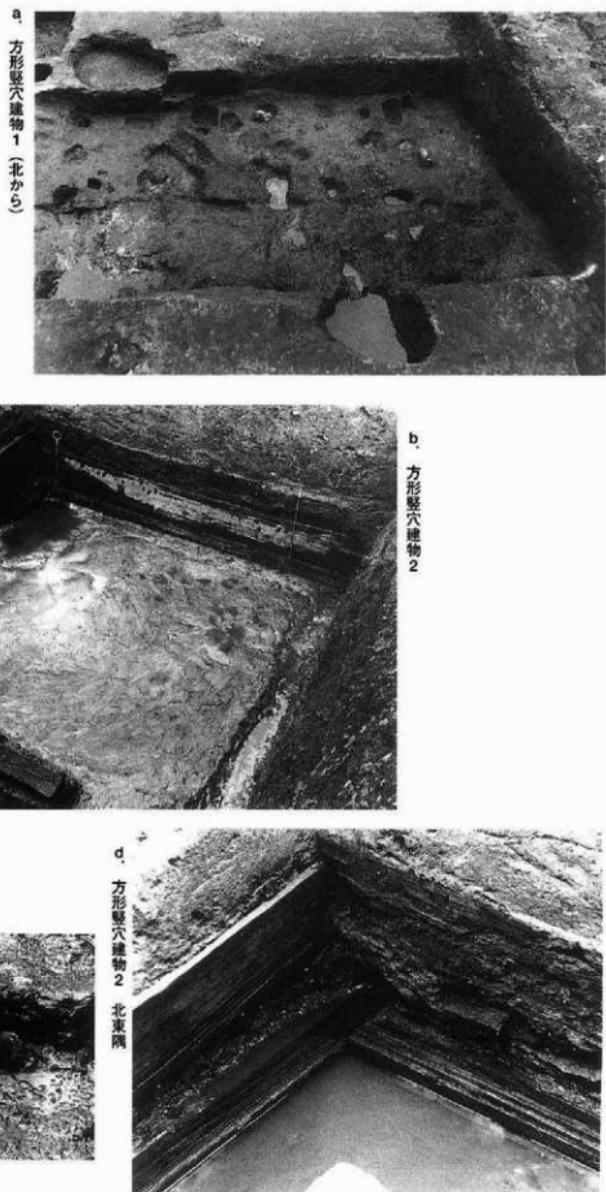
現在、方形竪穴建物とその他の掘立柱建物、板開き建物等との建物相互の関係については、未だ明瞭にされていない。調査区の狭さもその一因ではあるが、方形竪穴建物址が、集中して、順次建て替えられるため、掘立柱の柱穴を破壊してしまうことにも因るようである。今後の課題である。

今回の調査では予定建築物の基礎深度との関係で調査できなかったが、中世地山である砂質土中から7世紀代の土師器片も多く出土しており、さらに下層には、古代の遺跡の存在も予想される。

写 真 図 版



図版 4





図版 6





a. かわらけ



c. 涼 美



b. 土 鐘



30-12



d. 磁 石



30-11



e. 金属製品



17-6

f. 骨製品

図版 8



a. 目盛り付口笄



b. 同左 拡大

30-14



c. 解体痕のある獸骨



d. 魚 骨

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさはうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14
副書名	
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	宗益富貴子
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-8686 神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1998年3月

ふりがな 所収遺跡名	しょざichi 所 在 地	コ ー ド		北緯 °°°	東経 °°°	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こめまちいせき 米町遺跡	かながわけんかまく らしおおまち 神奈川県鎌倉市大町 二丁目931番1	204	No.245			1996 3月21日 ～ 4月26日	140m ²	自己用店舗併 用住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
米町遺跡	都市	鎌倉時代	方形堅穴建物 板扉い建物 井戸 土壤、柱穴	5棟 1軒 1基	かわらけ 渥美、常滑 舶載磁器 縁錢	方形堅穴建物2棟よ りそれぞれ縁錢が1 組ずつ出土した。

ほうじょうときふさ あきときていあと 北条時房・顯時邸跡 (No.278)

北条時房・顯時邸跡 (No.278)

雪ノ下一丁目272番地点

例　　言

1. 本書は、北条時房・源時耶跡遺跡内の神奈川県鎌倉市雪ノ下一丁目272番地における集合店舗併用個人住宅建設に伴う国庫補助事業発掘調査の報告である。ただし、調査地内に発見された遺構と遺物を個人住宅の国庫補助事業相当分と原因者負担事業相当分を分割して扱うことは、遺跡の理解をそこなうおそれもあり、発見された生活面枚数にそれぞれの割合を案分して、本版では第4面と第3面の成果を報告する。なお、他の生活面調査成果も、遺跡理解のため、多少加味してある。

2. 発掘調査は、鎌倉市教育委員会が、平成8年4月19日より同年7月19日にかけて実施した。発掘調査対象面積は、国庫補助事業相当分120m²、原因者負担事業相当分110m²の合計230m²である。

3. 調査にあたっては以下のとおり体制を編成して行なった。

調査担当 宗基秀明（神奈川大学非常勤講師・鎌倉考古学研究所）

調査員 宗基富貴子（鎌倉考古学研究所）、馬瀬直子、川又隆央（鎌倉考古学研究所）、真中泰行

調査補助員 小野和代、鍛治屋勝二、弓削拓郎、渡辺佑史

調査協力者 富岡眞之、川村四志男、福本寿夫、石渡辰男、長島三男、菅野五郎、松崎靖弘
(以上、鎌倉市シルバー人材センター)

4. 本書作成にあたっては、遺物実測・トレースを宗基秀明、宗基富貴子、小野和代、馬瀬直子、川又隆央、真中泰行が行なった上、遺構関係を宗基秀明、遺物関係を宗基富貴子が執筆し、まとめは調査関係者討議の上、宗基秀明、宗基富貴子が責任執筆した。編集は宗基富貴子がおこなった。また、自然科学分析は㈱パレオ・ラボに依託した。

5. 出土遺物の詳細については本編後段の遺物観察表を参照されたい。

6. 本書に使用した遺構および遺物写真是宗基秀明が撮影した。

7. 本書の遺構・遺物の縮尺は次のとおりである。

遺構全測図：1/120 個別遺構実測図：1/60 遺構実測合成図：1/2000 遺物実測図：1/3

なお、各挿図にはスケールを表示している。

8. 本発掘調査によって出土した遺物および調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

9. 発掘調査および本書作成に際し、下記の方々より御協力、御教示を賜った。記して深く感謝の意を表したい。（敬称略・順不同）

近藤好和（國學院大學講師）

大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）

熊谷哲也（明治大学非常勤講師）

Zaki NASER（拓殖大学講師）

松尾宣方（鎌倉国宝館）

浜野洋一（東国歴史考古学研究所）

手塚直樹、原廣志、菊川英政、菊川泉、汐見一夫（鎌倉考古学研究所）

本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	159
第1節 鎌倉の地勢と遺跡の位置	159
第2節 遺跡地の歴史的環境	161
第二章 調査の経緯と成果の概要	167
第1節 調査の経緯	167
第2節 調査成果の概要	168
第三章 発見された遺構と遺物	173
第1節 遺跡の基本土層層序	173
第2節 第4面(古代)	174
第3節 第3面(中世)	177
第四章 自然科学分析	226
第1節 北条時房・源時耶跡の中世以前の堆積層の粒度組成	226
第2節 土壌34の花粉分析	229
第3節 寄生虫卵からみた土壌34	233
第五章 調査成果のまとめと考察	236
第1節 遺構の変遷	236
第2節 若宮大路側溝と地割り	240
第3節 中世と近世以降の便所出土遺物について	245
第4節 柱穴底面に置かれるアワビについて	246

挿図目次

図1 鎌倉市全図	160	図14 道路土層図	182
図2 中世初頭の遺跡立地地点(宗基1996)	162	図15 第3面東西道路出土遺物	182
図3 調査地点と周辺の遺跡	163	図16 第3面塀EW2・3・4	183
図4 調査区内グリッド設定図	167	図17 第3面塀NS2・3・4	184
図5 遺構変遷概念図1	169	図18 第3面塀2(ピット389・743)	184
図6 遺構変遷概念図2	171	出土遺物	185
図7 第4面全測図	175	図19 第3面塀3(ピット405・433・632・ 665・693)出土遺物	185
図8 第4面溝5と柱穴列	176	図20 第3面塀4(ピット315)出土遺物	186
図9 第3面全測図	178	図21 第3面建物1と塀EW3C	188
図10 第3面大路側溝(溝8)	179	図22 第3面建物1(ピット59・286・311・ 631)出土遺物	189
図11 第3面大路側溝(溝8掘り方) 出土遺物	180	図23 第3面建物2	189
図12 第3面大路側溝(溝8)出土遺物	181	図24 第3面建物3	190
図13 第3面東西道路基礎と土留め	182		

図25	第3面溝4と塚N S 5	190
図26	第3面建物2(ピット325)、 塚5(ピット420)出土遺物	190
図27	第3面井戸3	191
図28	第3面土壙34	191
図29	第3面土壙34出土遺物①	192
図30	第3面土壙34出土遺物②	193
図31	第3面土壙11	194
図32	第3面その他の遺構(土壙31)	194
図33	第3面その他の遺構(土壙9・15・ 16・30・31)出土遺物	195
図34	第3面その他の遺構(ピット310・ 316・355・369・412・418・471) 出土遺物	196
図35	第3面その他の遺構(ピット490・ 492・654)出土遺物	198
図36	第3面その他の遺構(ピット664) 出土遺物①	199
図37	第3面その他の遺構(ピット664) 出土遺物②	200
図38	第3面その他の遺構(ピット717・ 719・723・748)出土遺物	201
図39	第3面下出土遺物	201
図107	出土貝類種別グラフ	224
図108	粒土分布図	227
図109	土壙34の土層断面図	229
図110	土壙34の花粉化石分布図	231
図111	土壙34の寄生虫卵分布図	233
図112	遺構変遷概念図1	237
図113	遺構変遷概念図2	238
図114	遺跡周辺遺構合成図	243~244

表 目 次

表1	遺物観察表(1)~(8)	202~209
表2	哺乳類・鳥類骨分類表(1)~(4)	210~213
表3	魚骨分類表	214
表4	貝類分類表(1)~(9)	215~223
表5	植物遺存体分類表	225
表6	粒土分析結果	227
表7	地山の堆積物の各種統計指標	228
表8	土壙34の産出花粉化石一覧表	230
表9	試料1cc当たりの寄生虫卵数	233

写真図版目次

図版1	土壙34の花粉化石	234
図版2	土壙34の寄生虫卵	235
図版3	a. 遺跡地調査前 b. 第4面溝5と塚1(東から) c. 溝5土層断面(南から)	249
図版4	a. 溝5と塚1(北から) b. 塚1ピット516 c. 塚1ピット503底面アワビ 出土状況	250
図版5	a. 第3面西側(東から) b. 第3面東側(西から) c. 第3面東側(南から)	251
図版6	a. 大路側溝8と7(北から) b. 橋脚礎板 c. ピット316底面丸瓦 d. 土壙34(便所) e. 建物1ピット353礎板	252
図版7	a. 第2面西側(東から) b. 第2面東側(西から) c. 第2面西端部の柱穴と錢 散乱状況	253
図版8	a. 溝7桁と束柱 b. 溝7桁と束柱(北から) c. ピット437礎板	254

d. 壁ピット600礎板	254	図版13 その他のかわらけと土器	259
図版9 a. 第1面西側（東から）		図版14 土製品と瓦	260
b. 第1面東側（西から）		図版15 国産陶器	261
c. 便所1（東から）	255	図版16 船載・国産磁器	262
図版10 a. 井戸1（東から）		図版17 石・金属・骨角製品	263
b. 便所2（東から）	256	図版18 木製品（1）	264
図版11 かわらけ	257	図版19 木製品（2）	265
図版12 墓書かわらけ	258	図版20 自然遺物	266

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

遺跡の所在する神奈川県鎌倉は、1180年秋、源頼朝の入府に始まる鎌倉幕府の創設以後、日本史の中で一躍脚光を浴びる地となり、誰でもが知る古都の一つとなっている。現在の鎌倉市は、そうした古都鎌倉を含めて、周辺の大船、玉縄、七里ヶ浜、腰越等の地域をも取り込んでいる。

第1節 鎌倉の地勢と遺跡の位置

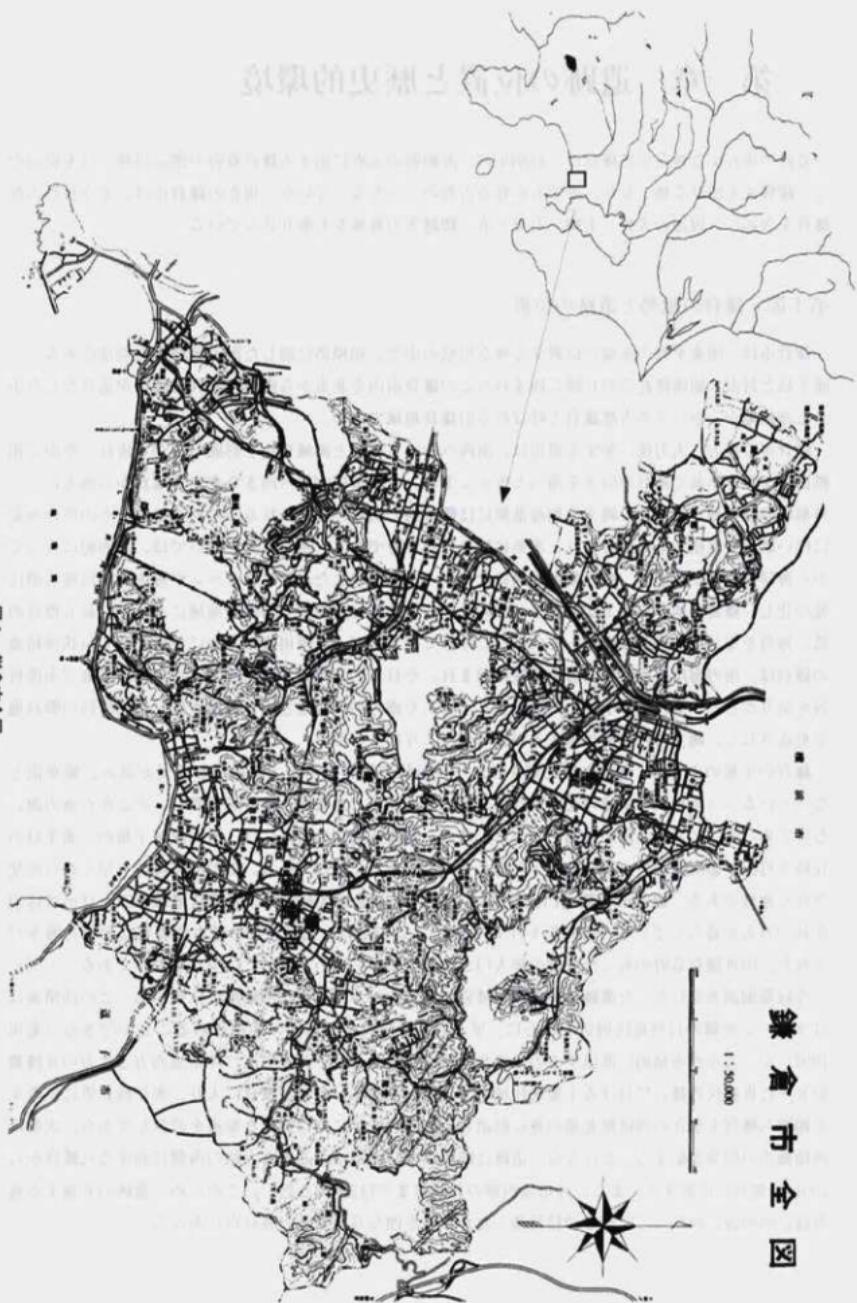
鎌倉市は、関東平野の南端に位置する神奈川県の中で、相模湾に面した海浜地域の南東部にある。三浦半島と丹沢・嵐岡隆起帯の丘陵に囲まれたこの鎌倉市内を北東から南西に流れる滑川が造りだした小さな沖積地が、かつての古都鎌倉と呼ばれる旧鎌倉地域である。

鎌倉市の西方、大刀洗に発する滑川は、南西へむけて河谷と流域平地を形成しながら流れ、やがて相模湾の1キロ手前で流れの向きを南へと変えて下る。この滑川が南へ向きを変える地点から南方に、三角形状の沖積地が広がる。縄文前期海進期には鎌倉湾であったと思われるこの沖積地は、その後の海退に伴い砂泥が堆積する湿地となり、次第に陸化した平野である。さらに海岸沿いでは、第四紀に入ってから海岸砂丘帯が発達し、砂丘帯の裏側にはラグーンを形成した。このラグーンが弥生後期以後次第に乾燥化し、鎌倉の地が出来上がる。かつてのラグーン地帯は現在でも旧鎌倉地域にあって、最も標高の低い地帯をなして、東西に広がっている。こうして出来上がった滑川流域と海にむけて開く扇状沖積地の鎌倉は、南の海岸を除いて三方を丘陵に囲まれ、それらの丘陵から流れ落ちる小河川が各地で小開析谷を造りだしている。この小河川の開析谷と、滑川や南方の沖積地との合流地点に、自然堤防の微高地が形成されて、縄文時代中期以降人々が住みつくようになった。

鎌倉の平地の中でも、海にむけて開かれた三角形状の沖積地帯が、現在最も開発が進み、繁華街となっている。三角形状の平地の北の頂点に、源頼朝が勧請した鶴岡八幡宮が位置し、そこから南の海にむけて真っ直ぐに若宮大路が貫通している。また、鶴岡八幡宮の西方には、滑川流域平地が三浦半島の丘陵と丹沢・嵐岡隆起帯の接合地点へと約2キロにわたって延びている。この滑川流域も早くから開発された地域である。鎌倉市の総人口172,240人の内、七ヶ浜地区を含めた旧鎌倉地域1422キロm²には現在46,991人が暮らしている(1994年1月1日現在)。この数は、文献資料や考古学資料などから導きだされた、中世鎌倉幕府のあった時期の総人口とさほど変わらない、もしくは少ない数字である。

今回発掘調査を行なった遺跡は、鶴岡八幡宮の南に広がる三角形状沖積地に位置する。この沖積地にはラグーン北側の自然堤防周辺を中心に、早くも8世紀代より居住の跡を認めることができる(菊川1997)が、人々が本格的に進出するのは鎌倉中期からである。それまでは、沖積地西方と北方の丘陵麓が8~12世紀代の鎌倉における主要居住域であった。1180年、頼朝が鎌倉に入り、翌年砂丘帯に位置する鶴岡八幡宮を現在の沖積地北端の地に勧請し、また1182年に南に伸びる参道を設置してから、次第に沖積地帯の開発が始まることになる。遺跡は鶴岡八幡宮参道である若宮大路の西側に面する八幡宮から200mの地点に位置する。また、沖積地西側の丘陵麓までは300mと近い。このため、遺跡の立地する地点は、南の海に向かって広がる沖積低地と北から西を囲む丘陵麓との移行点にあたる。

鎌倉市全図



第2節 遺跡地の歴史的環境

縄文時代

「昭和7年横浜国立大学附属小学校用務員室前に井戸を開鑿したおりに、現地表下3.8~4m付近の砂層から後期の称名寺式の深鉢と浅鉢型土器の2点が出土」(赤星1935)。また、「昭和11年荏柄天神社石段下の民家(二階堂七七番地)の井戸を開鑿」したときには、「現地表下3mの粘土層下の砂層、海拔9m前後から縄文前期の諸磯式土器71点、中期の阿玉台式土器14点、打製石斧1点」(赤星1936)が発見されている(鎌倉市史)。

弥生時代

海退に伴う谷の埋没によって、鎌倉湾は次第に後退。後期には、三浦半島の海蝕洞窟の位置の観察から、3~5mの隆起が起きたと想定されている。また、海岸での砂丘帯の成長によって、砂丘裏が湿地の湿地帯として取り残されたと思われる。こうした環境のもと、鎌倉には中期の宮ノ台式土器を伴った住居址が、谷を覆った堆積土と滑川などの河川との間に形成された微高地に残される。滑川、二階堂川、東御門川の合流する地点から北西の滑川北岸に多くの弥生中期・後期の住居址が発見されている。

古墳時代

古墳時代には、前期を中心とする住居址と後期の古墳群が現在の海浜地域に発見されている。鎌倉の地に古墳時代の人々が生活していたことは確かであるが、遺跡地周辺では、散発的に土器の破片が出土するのみである。

奈良・平安期

8世紀奈良時代には、現在の鎌倉市役所の南隣に相模国鎌倉郡の郡役所(郡衙)の設けられていたことが、御成小学校内遺跡の発掘調査で確認されている(河野他1990)。この時期、鎌倉郡に包括されていた郷には、「相模國封戸租交易帳」、正倉院御物などの記述から鎌倉郷、荏原郷、尺度郷、沼津郷、方瀬郷があったとされる。これらの郷名はそれぞれ現在の、鎌倉郡衙を中心とした鎌倉の中心部、荏柄天神周辺、大船から横浜市の戸塚にかけてのかつての古大船方面、逗子市方面、鎌倉市から藤沢市にかけての片瀬海岸方面と想定されているが、果たしてこれらの郷名が鎌倉郡内の全ての郷であった証拠はない。ただし、このころより、もしくはそれ以前より鎌倉は相模湾に面した地域の政治的中心をなしていたと思われる。なお、遺跡地の周辺は、鎌倉郷に包摂されていたのであろう。

平安時代になると、鎌倉郡は沼津、鎌倉、埼立、荏原、沼津、尺度、大島の七郷のあったことが「後名類聚録」にみえる。また、こうした国衙領の周囲には山内庄、玉輪荘の荘園が形成されている。

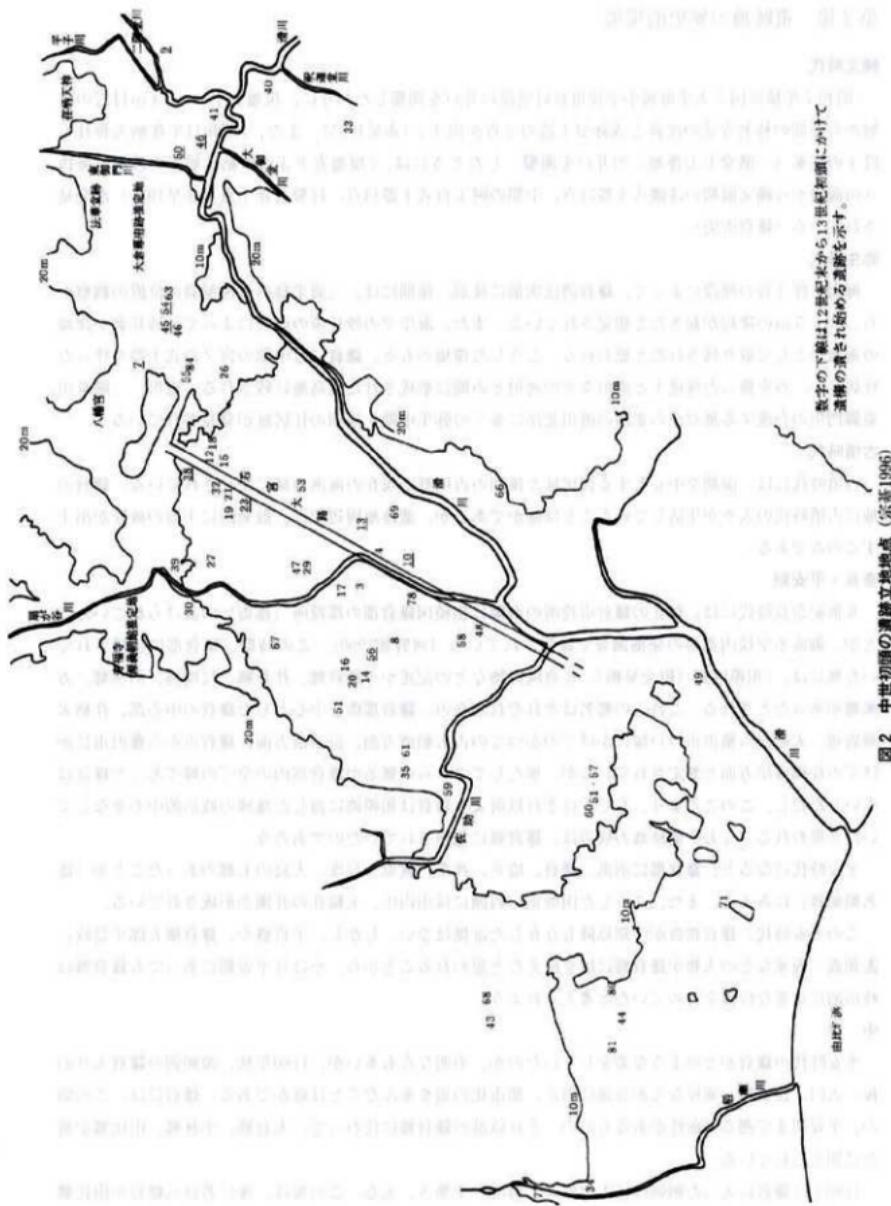
この平安時代、鎌倉郡衙が中期以降も存在した証拠はない。しかし、平貞盛や、鎌倉惟五郎平景政、源頼義・義家などの人物が鎌倉郷に居を構えたと思われることから、やはり平安期にあっても鎌倉郷は政治的に重要な位置を占めていたと考えられよう。

中世

平安時代の鎌倉がどのような姿をしていたのか、不明な点も多いが、1180年秋、源頼朝の鎌倉入りの後、人口、建築物、家屋などが急速に増え、都市化の道を歩んだことは確かである。鎌倉には、この頃か、平安期まで遡る可能性があるものの、それ以前の鎌倉郷に代わって、大倉郷、小林郷、由比郷が新たに加えられている。

1180年に鎌倉に入った頼朝は、大倉郷に「御所」を築き、入る。この地は、後に若宮八幡宮が由比郷から勧請された現在の鎌倉鶴岡八幡宮の東隣であり、滑川の右岸に沿いながら武藏野国金沢の六浦へと

数字の下継は12世紀末から13世紀初頭にかけて
造橋の済成を示す。



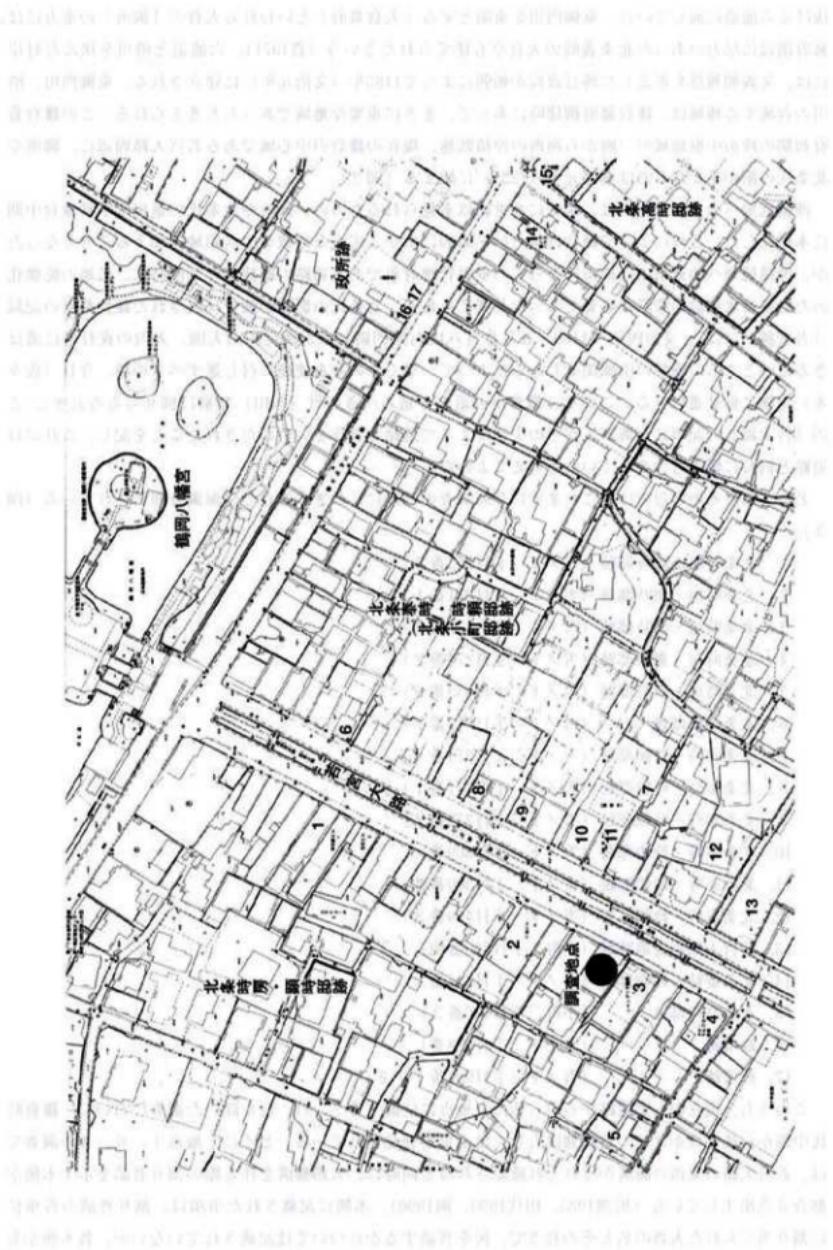


図3 稲作地と圃場の道路

抜ける六浦道に面していた。東御門川を東限とする「大倉幕府」といわれる大倉の「御所」の東方には、幕府創設に尽力のあった北条義時の大倉亭も建てられたという（貴1971）。六浦道と滑川を挟んだ対岸には、父義朝報恩を祈念した勝長壽院が頼朝によって1185年（文治元年）に建立される。東御門川、滑川の合流する地域は、鎌倉幕府創建時にあって、まさに重要な地域であったと考えられる。この鎌倉幕府初期の政治中枢地域の一画から南西の沖積低地、現在の鎌倉の中心域である若宮大路周辺に、御所や北条氏の館が築かれるのは嘉禄元年（1225）に始まる（図2）。

沖積低地への人々の進出は、すでに8世紀以来見られるものの、御所や北条氏の進出は中世鎌倉中期に本格化した。これによって鎌倉は新たに平面的に広がる広大な地域を生活領域に加えることとなったが、沖積低地への進出には都市にとっての重要管理対象である道路の維持管理と同時に、低地の乾燥化のために排水施設の設置が必要であったと考えられる。北条氏の影響が強く反映された鎌倉幕府の記録『吾妻鏡』には、「文治四年（1189）五月廿日八田右衛門尉知家が郎従庄司大則、大内の夜行番に遣はさるるのところ、懈緩の由風聞せしむるによつて、早くその身を使應に召し進ぜべきの趣、今日（佐々木）定綱に仰せ遣はる。この上、鎌倉中の道路を造るべきの旨（八田）知家に仰せらるる云々」。この『吾妻鏡』の記事は、御家人がその失態によって道路の管作をいいわたされたことを記し、これには道路と同時に側溝も含まれていたと考えてよいだろう。

若宮大路とその周辺では、これまでに今回調査のほかに、つぎの地点で発掘調査報告されている（図3）。

1. 北条時房・顯時邸跡（雪ノ下一丁目265番3）
2. 北条時房・顯時邸跡（雪ノ下一丁目271番1）
3. 北条時房・顯時邸跡（雪ノ下一丁目273番9）
4. 北条時房・顯時邸跡（雪ノ下一丁目274番2）
5. 北条時房・顯時邸跡（雪ノ下一丁目233番9）
6. 北条小町邸跡（雪ノ下一丁目377番7）
7. 北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目374番2）
8. 北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目371番1）
9. 北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目372番7）
10. 北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目369番）
11. 北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目369番他）
12. 北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目419番3）
13. 若宮大路周辺遺跡群（小町二丁目366番他）
14. 北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目395番）
15. 北条高時邸跡（小町三丁目426番3）
16. 政所跡（雪ノ下三丁目988番）
17. 政所跡（雪ノ下三丁目987番1・2）

このうち、現在の主要道路から引っ込んだ地点に位置する7、11、12を除いた調査において、鎌倉時代中期から後半にかけての道路側溝もしくは土星が発見されている。とくに、地点1、6、8の調査では、若宮大路の東西の側溝がそれぞれ確認されると同時に、大路側溝を作る際の割り普請を示す木簡が都合6点出土している（馬渕1985、田代1990、岡1996）。木簡に記載された事項は、割り普請の各単位に割り当てられた人物の名とその長さで、何を普請するかについては記載されていないが、各木簡が発

見られた幅3mに及ぶ溝遺構とその溝が現在の若宮大路の両側に位置することから、普請は大規模な溝であり、またそれは若宮大路の側溝であることは確実である。木簡が発見された大路側溝は、桁と梁それに側板を持つおがかりな木組み溝で、それぞれは13世紀半ば以降のものであるが、当初の木組み側溝は嘉祐元年（1225）まで遡るものと考えられている。また前節で記した鶴岡八幡宮前面の沖積低地の開発が鎌倉時代中期まで待たねばならなかったことは、このおがかりな木組み溝の嘉祐元年の設置とおそらくは一致するものと考えてよい。しかし、最近年調査を行なった地点6の発掘では、八幡宮前面の沖積地に開墾された最古の溝は、12世紀末まで遡る可能性が指摘されている（馬渕1996）。その溝は、義和二年（1182）に北条政子の安産祈願を行なうための八幡宮参道（置石）に伴うものである可能性が調査者によって示唆されている。今回調査を行なった遺跡の位置する地域では、頼朝の鎌倉入府直後から若宮大路と側溝が造営された可能性は高いが、これまでのところ12世紀末にまで遡る若宮大路側溝および生活遺構は上記地点6を除いて発見されていない。

しかし、13世紀前半以降の生活痕跡ともなると、急激な増加を見ることができる。現在若宮大路西側の「北条時房・顯時邸跡」の遺跡名が付けられた一帯では、若宮大路に面して4箇所の地点が調査されている。いずれも若宮大路から西方に長く伸びた長方形敷地での調査で、13世紀中頃から14世紀にかけての大路側溝と共にその西側地域に掘立柱建物や長屋様の建物が発見されている。また、大路側溝に交差する溝もいくつか確認されており、「北条時房・顯時邸跡」遺跡地に若宮大路に沿った敷地分割が想定されている。敷地分割された地域に発見される遺構は、上述のように屋敷跡というよりはその裏手にあたるような建物で、遺跡地名の示す「北条時房・顯時邸跡」としても、郎等などの居住城であったと考えられる。

ところで、この「北条時房・顯時邸跡」の遺跡名は、顯時の屋敷が「鎌倉赤橋（八幡宮赤橋）辺」との「金沢文庫文書」識語編2064奥書の記述と、やはり赤橋南方で若宮大路東側の泰時小町邸との関係から推定されている。ただし、時房の屋敷については、確証はなく判然としない（秋山1996）が、北条氏との結び付きを示す当遺跡地が鎌倉時代に重要な地域であったことに変わりはないであろう。北条時房（1175～1240）は、時連ともいい、承久の変に際して上洛し、六波羅初代南方探題、後に泰時執権のもとで連署・相模の守に任せられ、元仁元年に歿するまで任じた。

北条顯時（1248～1301）は、引き付け衆・評定衆を歴任した後、弘安八年（1285）の霜月騒動において岳父安達泰盛に縁座して、下總埴生庄に配流される。父を実際に持つ顯時は、出家の後、父の開いた武藏国六浦庄金沢郷の文庫（金沢文庫）の充実に尽力した。

中世後半以降の鎌倉は、足利直義が成良親王を征夷大將軍と奉じて、二階堂美作山城入道貞綱の亭を御所に構えた後、成良親王殺害に始まる軒余曲折をへて、正平四年（1349）年鎌倉府開設を見る。形式上において、京都の室町幕府に応じる形で、鎌倉府は東國の政務にあたることになった。鎌倉府將軍は「鎌倉殿」と呼ばれ、その居所も「御所」と呼ばれた。鎌倉府御所の所在は明確でないものの、淨明寺に残る「公方屋敷」の字名、また氏溝の大倉谷の御所、さらに義詮の二階堂別当坊などの居住地名は、遺跡地から北東に離れた地域に相当し、当遺跡地は鎌倉時代ほどの政治的重要性を失い始めたことが想像できる。足利氏の菩提寺も若宮大路から遠く離れた淨明寺にある。

近世

応仁の乱の後、伊勢長氏（北条早雲）は小田原城を奪い、永正九年（1512）鎌倉をも落とし、相模を手にいれる。この後北条氏の時代、鎌倉の行政名として「鎌倉中」などの記述がみえ、鎌倉が村ごとに分れた村落としてではなく、それらが集合した領域ととれられていたものと考えられる。こうした状況

は家康の朱印状にも引き継がれる。元は一體内に纳入する事からか、御用事と表記される事の方が多い。

参考文献

- 赤星直忠 1935 「鎌倉の考古学的研究(一)」「鎌倉」 第1巻第2号

赤星直忠 1936 「荏柄天社前出土上器」「鎌倉」 第2巻第5号

河野真知郎他 1990 「今小路西遺跡 御成小学校内」 鎌倉市教育委員会

貫 達人 1971 「北条氏亭址考」「金沢文庫研究紀要」 第8号

馬淵和雄 1985 「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目371番-1 地点発掘調査報告書」 鎌倉市教育委員会

田代郁夫 1990 「北条時房・頼時邸跡 雪ノ下一丁目265番3」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6」

岡陽一郎 1996 「北条小町邸跡(泰時・時頼邸)(No.282) 雪ノ下一丁目377番7地點 第三章第3節 人名木簡について」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12」(第2分冊) 254~260頁

佐山裕樹 1992 「御所と「多色刷り」」「鎌倉時代の鎌倉文化財緊急調査報告書12」(第2分冊) 207~212頁

秋山首雄：1996「御所と北宋式邸」『藤原市埋蔵文化財叢書』第2回、282～289頁。

宗基秀明 1996 「中世都市と排水施設」『日本考古学』第3号 101~111頁

菊川英政 1997 「古代鎌倉の様相—奈良・平安期における鎌倉郡中心域の変化—」『考古論叢 神奈川』 第6集
35~52頁

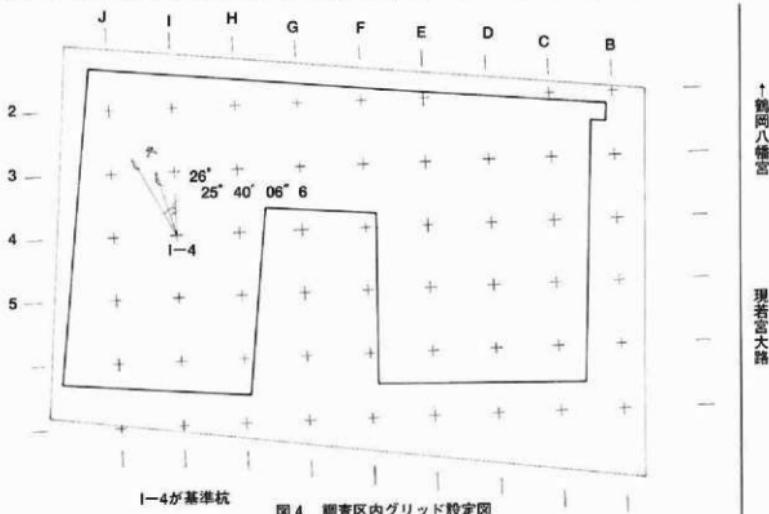
第二章 調査の経緯と成果の概要

第1節 調査の経緯

北条時房・顕時跡遺跡内所在、神奈川県鎌倉市雪ノ下一丁目272番金子久枝宅新築工事に伴う建築申請を受けて、鎌倉市教育委員会文化財課は周知の遺跡地内におけるビル新築工事に先だって埋蔵文化財の発掘調査の必要性を認め、金子久枝氏の御了解を戴いて埋蔵文化財の発掘調査を行なうこととなつた。当該遺跡地内におけるビル新築工事対象面積は230m²であるが、その内訳は110m²が営業用テナント入居相当面積、残りの120m²が個人住宅分である。そのため、同教育委員会文化財課は後者の個人住宅相当面積を国庫補助事業埋蔵文化財発掘調査、前者を事業者負担埋蔵文化財発掘調査と認めた。同教育委員会は宗基秀明に北条時房・顕時跡遺跡内国庫補助事業埋蔵文化財発掘調査の主任担当を依頼し、宗基秀明はそれを受けた。同時に同教育委員会の立会のもと、金子久枝氏と宗基秀明の組織した北条時房・顕時跡発掘調査団は平成8年3月27日に埋蔵文化財発掘調査の委託契約書を交わし、事業者負担埋蔵文化財発掘調査を行なう運びとなった。

委託契約を交わした直後から調査団では、調査方法のほか機材・資料の集取など発掘作業準備を始め、実際の発掘調査を平成8年4月19日から同年7月19日までの期間で行なうこととした。また、調査にあたっては調査中の排土搬出が困難なため、調査対象地域を二分して、調査対象地西半分を一次、東半分を二次調査区とし、各調査区での調査途上に生まれる排土をそれぞれの調査対象外地域で処理することとした。

4月19日、現況の民家解体後の調査地にて、重機を用いて一次調査区表土の掘削を開始する。地表下40cmにて、13世紀中頃の遺物片を混じえる遺構面を確認し、この面を第一面と確認した。重機による掘



削を深度を40cmと確定する。重機による掘削と作業小屋の設置を同月22日までに終え、翌23日から手作業による発掘調査を開始した。

調査を開始するにあたって、調査区内に測量用の方眼を設定した。設定にあたっては、遺跡地の歴史的環境を配慮して、遺跡地の前面に位置する若宮大路の軸線を意識した。調査区内に設けた方眼の南北方向軸線を若宮大路の南北方向軸線と一致させるため、次のように方眼を派生させた。現在若宮大路に残る段葛と呼ばれる道路中央の盛り土道の南端である二の鳥居と北端の三の鳥居を結ぶ中央軸線を設定し、二の鳥居から北方向へ287.039mの地点から西方向へ28mの調査地内に方眼基準点を設置する。さらにこの方眼基準点と国土座標系との関係を平面直角座標系 AREA 9 に属する鎌倉市三級基準点53207 をトラバースにより振り込んだ。その結果、遺跡地内の基準点の国土座標 X = -75504, 548, Y = -25126, 624 の数値を得た。これを基準に遺跡地内に若宮大路南北方向軸線に平行直角方向の方眼を 2 m 単位で設定し、南北方向基準線の名称を東からアルファベットで示し、東西方向の基準線を北からアラビア数字で示した。なお、遺跡地内の基準点は方眼の名称では I - 4 である。また、遺跡地内方眼の南北方向基準線は、真北に対して $25^{\circ}40'06''$ 6、磁北に対して 26° 東に傾いている。

第1面の精査を進めるうちに、この生活面からは13~14世紀代のかわらけが発見されるものの、ここから振り込まれた遺構はすべて近代に至つてからのものであることが出土遺物と遺構の形態から確認できた。後の第2面調査時の成果によれば、鎌倉後期から末にかけての生活面を割り取つて、近代の生活面を築いたことが判明している。そのために第1面は、鎌倉時代の遺物が多く混入する生活面であった。また第二次調査を含めて第1面と第2面の間に近世の生活痕跡を部分的に確認できたが、当時の生活面としては残つていなかつた。以下、下層へと調査を進め鎌倉時代の建物を作つた第2面と第3面の調査に加え、さらに下層に古代の生活面を第4面として確認した。このようにして6月4日に第一次調査区での作業を終了し、翌6月5日から二次調査区の調査を開始した。まず重機を用いて表土掘削を行ない、その後に手作業による調査を開始した。二次調査区では一次調査区同様に第一面の調査から開始したが、第1面から第3面に至るまで、若宮大路の側溝とその西側に広がる居住地域との境の塀などが主な遺構であった。また二次調査区では第4面の生活痕跡は認められなかつた。

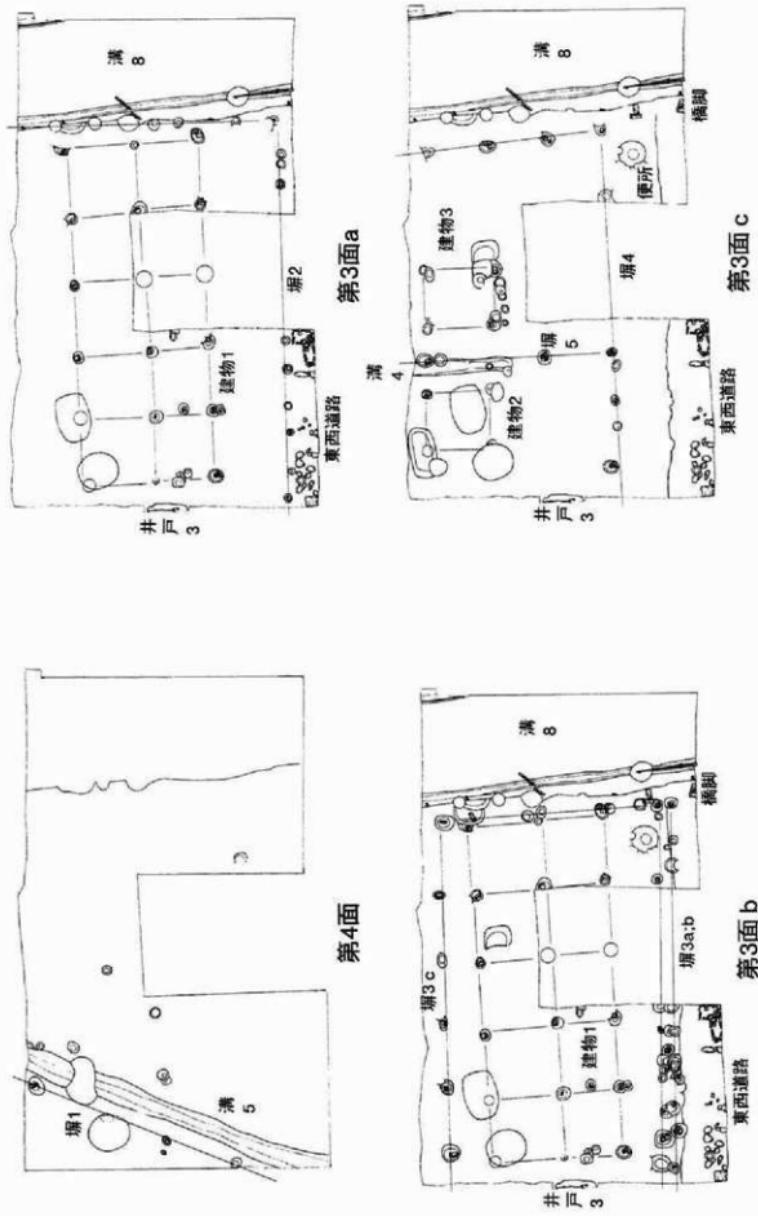
調査は梅雨時の大雨に見舞われながらも、7月19日をもって予定どおり終了した。

第2節 調査成果の概要

現在の若宮大路に面した地点でこれまでに行なわれた調査成果を参考にしながら行なつた今回の調査においては、中世から近世にかけての時期に若宮大路の側溝とその西方に居住域が発見されるとともに、さらに下層からは時期を特定できない古代の溝と塙跡が確認された。以下にその概要を遺構と遺物を会わせて下層より上層に向けて記述する。

調査では第1から第4までの4枚の生活面を調査確認した。最下層の第4面では、遺物がほとんど出土せず、その時期決定に不安を残す。この資料的不足を補うために本報告ではこの生活面をなす堆積土の粒土分析を掲載し、土壤形成の観点から生活面の時期を考察する資料を提供している。発見された遺構は中世期以降に認められる若宮大路側溝とは全く異なる方位で走る断面箱型の溝とその溝の西側に沿つて並ぶ柱穴列である。溝は調査区の西端に発見されたが、面構成上はこの周辺のみが黄褐色の砂質土ある一方、東側にはこの土壤は認められず黒色強粘質土であった。こうした溝の位置とその生活面の土質の違いは、古墳後期以降と思われる第4面の時期の地勢を復元するための良好な資料になる。

図5 道路交連概念図1



第3面は、第4面の上に乗る黒色粘質土を生活面としている。発見された造構と遺物は13世紀第2四半期から中頃と考えられる。調査区東端に南北方向の木組みの若宮大路側溝がみられ、側溝の南端では側溝に直交しない路地が東西に走る。大路側溝と路地に囲まれた地域はさらに堀で南北と東を囲まれた細長い居住域とされ、そこに建物が2回の立て替えにわたってそれぞれ1棟と2棟が建てられる。ただし、北の堀の外側には路地や溝などの地境を確認できなかったため、北の堀は同一敷地内での空間分離である可能性を残している。大路側溝の幅は3.2mを計る。東西の路地はその幅を確認できなかった。居住域を限る東西の堀は新旧2回作り替えられる。路地の東端には1.4m間隔に橋脚の礎板が位置し、路地から大路側溝を渡って若宮大路に直接出ることができたと考えられる。しかしながら、居住域から東西路地へ聞く出入り口は調査区内に発見されていない。より西方にその出入り口があるのだろうか。さらに居住域から直接若宮大路をわたる位置に橋が架かっていた様子は本調査区のはほか他の若宮大路に面する遺跡地でも発見されていない。大路側溝を渡る橋の袂には堀と路地の間に土壙の便所が1基発見されている。建物は2間×5間以上の細長い建物1棟と1間×2間が2棟である。

第2面は、泥岩混じりの褐色土を用いて造成されているが、面としては確認できず、文化層中に造構の掘り込みを発見した。発見された造構は第3面とはほぼ同一の若宮大路側溝と堀、堀に囲まれた居住域に建てられた建物である。各造構の配置もほとんど変わらないが、路地がさらに北へと移動もしくは広がり、堀と路地との間に細い溝が付設される。また、居住域北側の堀がなくなり、かわって細い東西溝が現われる。この溝の南北には第3面にあった跡跡ではなく、第3面と第2面を通じて、この位置にある堀や溝に敷地を明確に区切る地境機能はなく、敷地内の空間分離であったろうと考えられる。よって第3面と第2面に発見された中世期の居住域敷地は西と北へより広がりのあるものと考えられる。大路側溝は木組みが2時期確認されているが、用いられた材はおそらく第3面の木組みを分解した後に再利用している。大路側溝の作り替えは、第3面から数えて都合3回行なわれ、その都度西側の肩が東西に移動する一方、直接大路に接する東側の肩は常に一定の位置を踏襲している。側溝の作り替えにあたって、若宮大路そのものを壊すことはなく、大路は一定の幅を維持していたことを確認できる。居住域では大路側溝に平行した南北の堀に大型礎板の用いられているのが特徴である。幅20cm長さ50cmを越えるものが多く、建物の礎板に比べて2倍以上はある。居住域を囲む堀は路地に沿った東西に2列、そして大路側溝に沿った南北に3列が発見され、少なくとも1度の作り替えがなされている。建物は調査区の西側に2×2間以上が1棟、南北1間×東西3間以上の1棟を確認した。細長い建物には、その北東にL字状の日陰し堀が付属する。建物と東の堀の間には2mほどの空間地を残して土壙が数多く掘り込まれる。居住空間のゴミ捨て場が大路側溝に沿う堀際に設置されていたのであろう。出土遺物では、大路側溝の中に大量のかわらけや陶器、木製品、貝殻が捨てられ、中には内外面に花押らしき筆跡が墨書きされた山茶窓室系こね鉢と、内面にやはり花押様の墨書きが残るサルボウガイが発見された。花押は判読できなかったが、北条氏系統の花押の特徴を示している。また、2面を整地する際の上のの中から刀の鞘に付けられる足金物の鋳型が、そして道路側溝の覆土からはとりべの底に残った銅（青銅）の塊が出土している。建物規模とこうした出土遺物を合わせてみると、若宮大路に面する今回の調査地点は、屋敷であったとしてもその裏手の郎等たちの暮らす、または呼び入れた職人達の作業空間であった可能性が高いと考えられる。

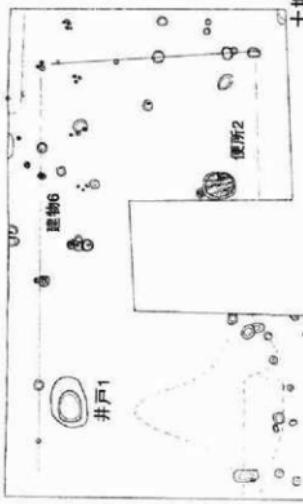
第1面は近世から近代にかけての造構が混じりあって発見された。基本的には近代の生活面であるが、近代の整地作業の際に、それまでの地表面を削り取っているため、深く掘り込まれた近世の造構も同時に発見されることとなった。また、整地作業の削り取りにあたっては、第2面の実際の生活面を含めて

図 6 造跡変遷概念図 2

第1面 b

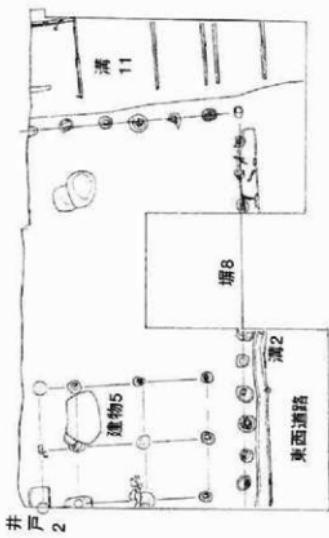
東西道路

土壌19



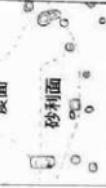
第2面 b

東西道路



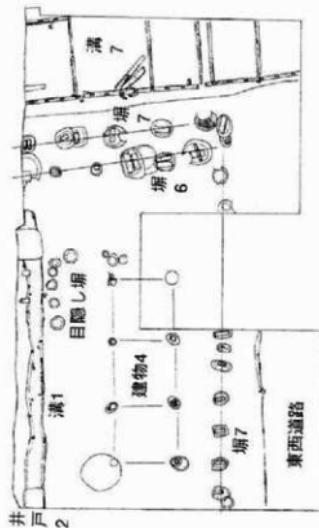
第1面 a

東西道路



第2面 a

東西道路



中世の生活面まで削り取ったと思われ、13世紀末から14世紀にかけてのかわらけなどの遺物もこの面から発見されている。発見された造構は第3面以降から引き続き同一位置にある東西方向の路地と若宮大路側溝、井戸1基、便所2基、それに塀跡と思われる杭列である。東西方向の路地は砂利と砂を混じた簡易舗装で路地から敷地内へと砂利面と炭面が凸状に広がって庭地へと続いている。大路側溝は位置的にほとんど中世期と変わらないが、西側の敷地内から緩やかに下る崖地状に埋まりかけている。この若宮大路を埋めている覆土は第1面の砂と砂利の他、泥岩粒を多量に含む褐色土で、覆土に含まれる遺物は13世紀後半から14世紀前半のかわらけばかりであった。すなわち、第1面を整地する際に削り取った鎌倉後期以降の文化層土で若宮大路を崖地になるほどまでに埋めてしまったと考えられる。

塀跡と思われる杭列は、大路側溝に沿う南北列と調査区の北端を東西に並ぶL字状に発見され、南端の路地跡と合わせて、中世期の生活空間を踏襲しているようである。この生活空間の中に建物跡は確認できなかったが、便所跡を2個所で確認した。2基の便所跡はそれぞれ矩形と楕円形の形状で、北の塀際と大路側溝近くに位置する。おそらくは異なる時期に設置されたものであろう便所はともに底板からほんの少し立ち上がる壁を残す板組である。

以上に今回発見された造構と遺物について、その概要を記したが、中世期に若宮大路に交わる路地と、その路地から直接若宮大路へと渡る橋が大路側溝に架かっていたことを確認した意義は大きいと思われる。これまでの若宮大路に面した多くの調査地点での成果と研究をなぞらえるように屋敷もしくは生活空間内から若宮大路へ開く出入り口はやはり確認されなかったが、屋敷地と屋敷地との間の路地から若宮大路へと通ずる橋の発見は中世鎌倉の都市景観研究に再考を迫るものとなろう。また、中世の生活空間単位が近代にまで引き継がれていく鎌倉の都市がどのように維持され続けたのかも重要な歴史研究視点になると思われる。

第三章 発見された遺構と遺物

調査区内に発見された第1～4面までの生活面とそこに遺存した遺構と遺物を、本章の以下の節で下層から上層へ向けて順次説明していく。各生活面に対して、本報告書では大きな時代区分を与え、第4面を古代、第3面から第2面を中世、第1面を近代との副題をつけた。

第1節 遺跡の基本土層層序

調査前現地表海拔高は、8.5mであった。付近の現地表と比較すると、隣接する敷地とは緩やかに北から南に、また西から東へ傾斜し、南の海に向かって下がる地形をなぞっているが、調査地西壁とは50cm以上の段差を持ち、ある時期に調査地内の敷地で西側の部分を若宮大路に面する部分の標高に合わせて削り取ったことを示している。この削平は、以下の土層説明でも判断でき、また前節で述べたように近代の生活面整地に際してなされたものである。以下に調査区の西壁と北壁に確認できた土層堆積図(図7)を主に用いて、遺跡の基本土層堆積状況を下層より説明する。

発見された最下層の第4面生活面は、泥岩と貝殻の細かな粒子を含み水流によると思われる鉄分を混入する暗褐色(7.5YR 3/4)粘質土・第1層の上面を利用する。第1層は、西ほど黄褐色の山砂を多く混じえ厚く堆積し、調査区中ほどで消失する自然堆積土と思われるが、粒度分析結果を後章に掲載した。この第1層上面の海拔高は、7.25mではほぼ平坦であるが、溝5を境にして一旦10cmほどの段を持ち、溝の東側がやや高まる。

第1層の上に乗るのが中世の地山となる暗灰色(N 3/0)強粘質土の第2層である。水分をやや含み、小量の泥岩粒、木片、かわらけ細片を混じえる。この第2層の上面に13世紀第2四半期から中頃までの遺構が残されることになるが、第2層中に混入するかわらけや木片は、遺跡地に明瞭な生活痕跡を残す以前の12世紀後半から末の遺跡地周辺に人々の暮らしのあったことを示している。第2層もその上面はほぼ平坦で海拔7.32mであるが、その厚さは、調査区の西端で10cmだが、調査区中央辺りから東に向けて急激に厚くなり、深さ1mある大路側溝の底面よりさらに下位にまで達している。古代から中世にかけての鎌倉の地形形成と街の展開に関して、この第2層の堆積状況は多くの情報を提供しうる。

第2層の上には、調査区の北西部分にのみ炭化物と泥岩塊を多く混じえた良くしまる暗灰色(N 3/0)粘質土が2層にわたって堆積し、部分的一時的に3面が更新されている。下層より第3・第4層とする。

第4ないし第2層上に泥岩塊と貝殻片、炭化物を多く混じえる黒褐色(7.5YR 3/1)粘質土から暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘質土が堆積し第2面が整地されている。泥岩塊を混じえるこの第5層は、人為的整地による整地層であると考えられるが、全体にしめっぽく、またしまりも悪いため、本来の整地層の上面ではないと考えられる。第5層の上面は7.7～7.4mの間を所によって上下し、一定の平坦面、もしくは傾斜を示さないことからも、本来の整地層上面を保っていないと考えられる。実際、中世遺物を出土する第5層の直上に中世遺物を混じながらも近代遺物を出土する泥岩大型塊による近代の地業盛り土層が乗っていることからも、第5層は削平を受けていることがうなづける。

第6層となる第5層上の大型泥岩塊地業層からは、13世紀後半から14世紀代のかわらけの他、近世から明治期以降の染付磁器が出土する。この状況から、第6層は近代に入ってから行なわれた地業であり、その際にかつての鎌倉後期以降の生活面を削平して行なわれたものと判断できる。

第2節 第4面（古代）

本遺跡に発見された最も古い生活面である。発見された遺構は溝1条（溝5）、溝に伴う柱穴4口（跡跡）の他に柱穴が9口であった。生活面全体は、ほぼ平坦で、北西から南西へと下がる緩やかな傾斜面をなす。生活面の海拔高は、北西隅で7.25m、南西隅で7.05mである。この緩やかに傾斜する生活面の北西隅に調査区を斜に走る溝が位置する。柱穴のほとんどもこの溝付近に発見されており、調査区内での生活痕跡はほぼ調査区の北西部に限られていた。当時の生活領域が海拔高い調査区の北西部からより西方に広がっていたのではないかと思われる。

溝5

調査区内に発見された全長10m14cmの溝5は、やや蛇行しながらもほぼ直線的に調査区の北西から南西へと走る。南端部で若干南東へと向きを変えるような感じを持っているが、確かではない。隣接する調査地点（図3地点3）では中世以前の生活面を確認していないために、この溝5の延長線は未発見で、溝の調査区外での位置・方位は確認できない。やや蛇行する溝の幅は一定せず、1m10cmから1m30cmを測る。深さは北端の土肩壁で58cmを確認している。断面逆台形の箱型の溝の底面の海拔レヴェルは、北端で6.7m、b-b'ラインでは6.54mで北から南へ傾斜する。

溝を埋めた堆積土の堆積状況と土質からは、底面付近に水流により運ばれた砂質粘土が平坦に堆積する一方、上層ではかなりの速度で丘陵部の泥岩を混じえる上で溝が埋まってしまった様子を示している。最上層の堆積土は後に中世の地山面を形成する土質と同じであり、下層の砂質粘土が溝5の機能していた期間に堆積し、その後、溝の管理がされなくなつてから上層の覆土が堆積しながら生活面全体が中世地山をなす堆積土で覆われたものと考えられる。また、溝覆土からは遺物が一片も出土せず、溝が機能を停止してから後に、付近には人の活動な生活は行なわれずに、中世地山となる堆積土が堆積するのみであった様子を示唆している。溝の南北軸方位はN-57°30'-E。

柱穴列

溝5の西、溝肩から30cmほど離れ、溝に沿って4口発見された。北からピット512・529・516・503である。柱穴の規模はまちまちであるが、ピット516に残る柱根の規模からして、かなりしっかりしたものであったことが解かる。ピット529が後世のコンクリート井戸によってほとんどが壊されているため、不安な数値であるが、柱の間隔は、2m30から2m40mである。柱穴の内部には、礎板や上述の柱根が残る他に、底部にアワビが遺存するものも見られる。ピット512には根固めをかねて礎板が5枚配置される一方、ピット516では根固めに柱穴の底に泥岩を荒く整形した塊を上下2段に設置してから直径19cmの面取り八角柱を乗せている。この八角柱は、柱穴列を廻す際に地上部分を切り倒して再利用したと思われ、遺存する柱の上面はきれいに切り取られた痕跡を残している。また、ピット503では礎板や柱根が残っていなかったが、底面にマダカアワビの貝殻が裏向きに遺存していた。おそらく、アワビの貝殻はその位置からして、礎板や柱の下に配置されていたものと考えらる。アワビを伴った儀礼は、山比ガ浜海岸地域遺跡の古墳時代生活面から土器を伴って発見されている他に、本遺跡では中世に属する柱穴にもアワビが底面に配された例を確認できる。

直径19cmの柱を用いた柱穴列は、調査区内には発見されていないが西へと広がる建物の一部を構成する柱であった可能性を否定できないが、同時期の溝の間近に沿って遺存する柱穴列の状況は、溝5の西

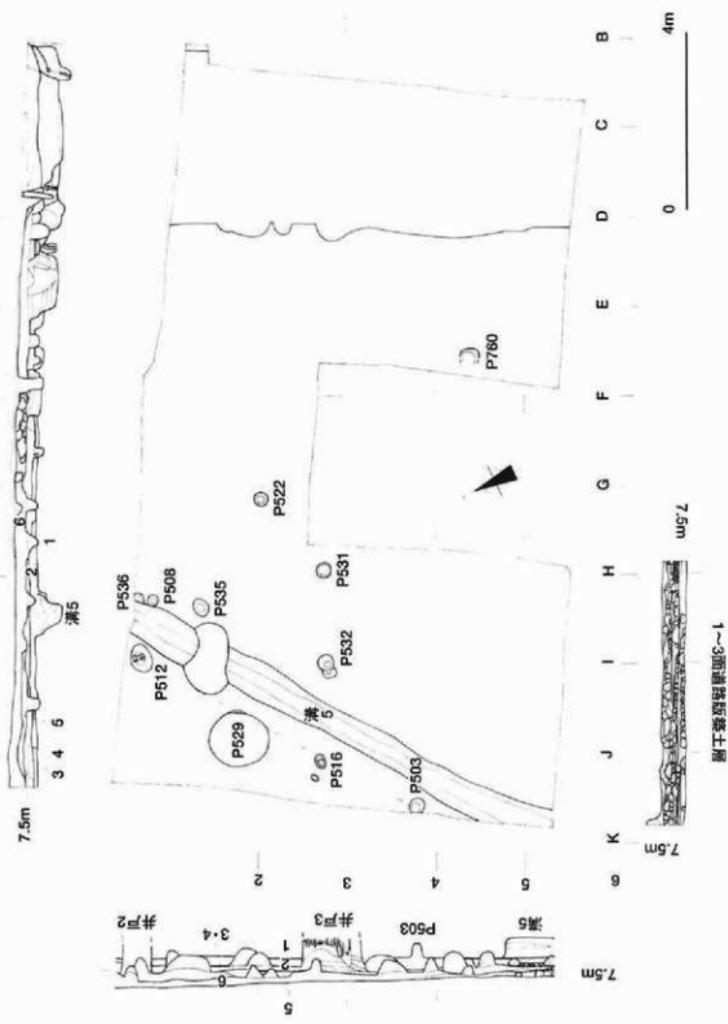


图 7 第4面全剖图

を居住空間とする敷地を限る壁であった可能性が高いと考えられる。

その他の柱穴列とピット

柱穴列の他に第4面からは9口のピットが発見された。その多くはやはり溝5の付近に位置し、溝の東に6口がある。ピット508・536に限れば、溝5より古く、溝5開墾以前に一時的に他のピットとともに柱穴列同様の敷地を限る壁をなした可能性があるが、判然としない。

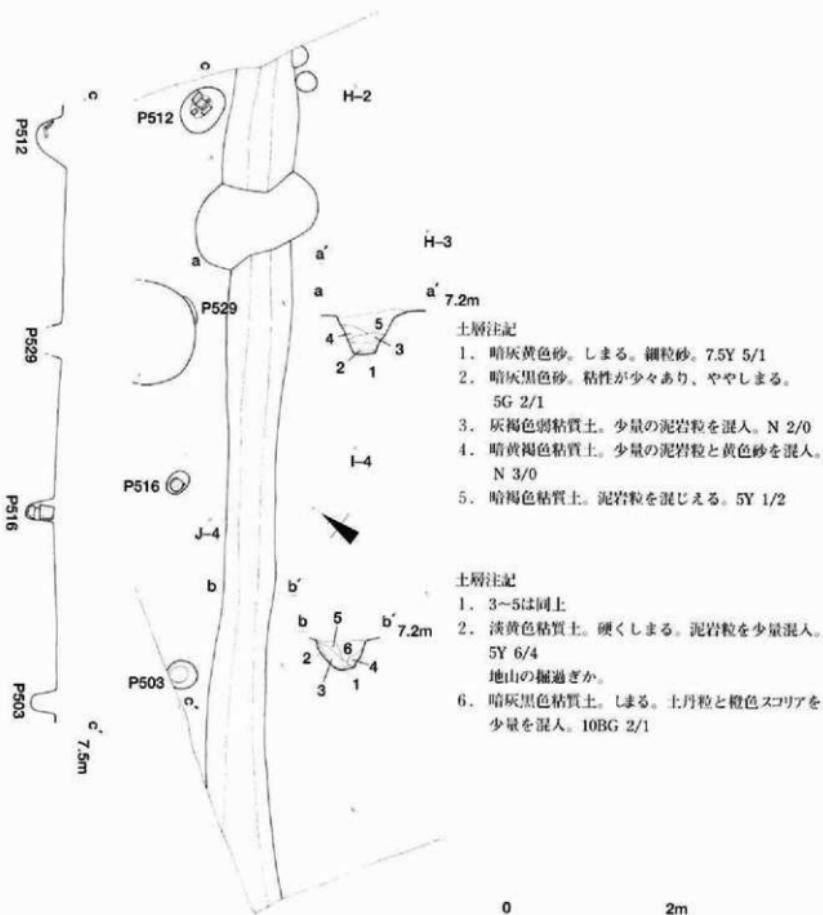


図8 第4面溝5と柱穴列

第3節 第3面（中世）

第4面上に堆積する強粘質土上面に確認された生活面では、これまでに遺跡地周辺で行なわれた調査結果から、遺跡地における中世最古の生活面であると判断できる。この中世最古の第3面からは、第4面と比べ、一転して多数の遺構と構築物を確認できた。まず、若宮大路のかつての側溝が調査区の東端に南北いっぱいに発見されたのを始め、この若宮大路側溝に対応する形で東西方向の道路、建物跡、土塙、井戸、そして建物などの建つ敷地を囲む堀跡が次々と確認できた。

若宮大路の西側に位置する建物が建つ敷地を囲う堀跡は、東と南の二方に確認できた。また北側では一時的な地境の存在を認めたが、西側には全く地境遺構は発見できず、敷地はより広がりのあるものと考えられる。堀跡は少なくとも3時期、建物は2時期にわたって作り替えが行なわれており、一定期間内に敷地の拡大縮小と建物の占地状況も変化している。

また、発見された東西道路の東端には、若宮大路との間に位置する大路西側側溝を渡るための橋の橋脚が発見された。この大路側溝を渡る橋脚の発見によって、大路の西から直接若宮大路へ出ることができたことを確認した。

若宮大路西側側溝（溝8）

発見された若宮大路の西側側溝は、隣接する調査地に発見されている大路側溝の延長線上にあり、その走行方向も同一である。この若宮大路西側側溝は第3面と後の第2面とにわたって、何度か作り替えられているが、順序観察から第3面に埋設する大路側溝は本遺跡地では最古のものであることを確認できた。しかし、当初の側溝の姿はほとんどが壊され、掘り方と掘り方内に木組み溝の側板を設置した浅く細い溝、そして一部そこに遺存する側板のみが確認できた。この溝8の北端に、全幅と掘り方の底面東西脇に残る浅い溝と側板の一部を認めることができた。この地点での大路側溝である溝8の規模は、掘り方幅4m10cm、木組み溝幅3.0m、深さ60cmである。ただし、確認できた溝肩の位置は溝の東西で異なり、東の若宮大路側が高く、そこからの深さは77cmを測る。遺存する側板は、溝底面からの深さ8~23cmの浅い溝の中に設置され、直径3cmほどの打ち込み杭で両側から支えられている。側板は幅36.7cm、厚さ2cmで横方向にさし渡されており、溝の下半部分のみを支えるものであり、さらにもう一枚上に側板がさし渡されていたものと考えられる。この部分の側板は、後後に抜き取られてしまったのであろう。

調査地の南に隣接する遺跡の調査では、側板を設置する浅く細い溝の内側に地枠が配され、その地枠から東柱を立ち上げて梁を通し、箱型の溝を木組みで作りだしている。おそらく溝8もこれと同じような木組みで大路側溝を作りだしていたと考えられるが、今回は側板を設置する細い溝を確認したのみであった。これ以外の枠材や梁は、後の改修時に持ち去られたと思われる。後世の第2面に発見された大路側溝には、枠と梁を用いた木組み溝が作られている。ただし、後述のようにこの第2面の大路側溝の木組みは、その構築方法がこれまでに他遺跡で発見された若宮大路側溝の木組み構築法とは異なっている。

側板の設置された細く浅い溝の方位から、溝8全体の方位を確認できる。その方位は、N-25°30' - E。溝8はほぼ同位置のまま、第2面、第1面においても改修を重ねながら機能し続けるが、その改修の度に溝内覆土が浚渫されるため、溝8の溝内覆土は全く残されていない。ただ、本来作られていた木組み溝の外側である掘方部分の覆土だけが当時の堆積物を残している。

図11は溝8の掘り方より出土した遺物である。

図 9 第3面全測図

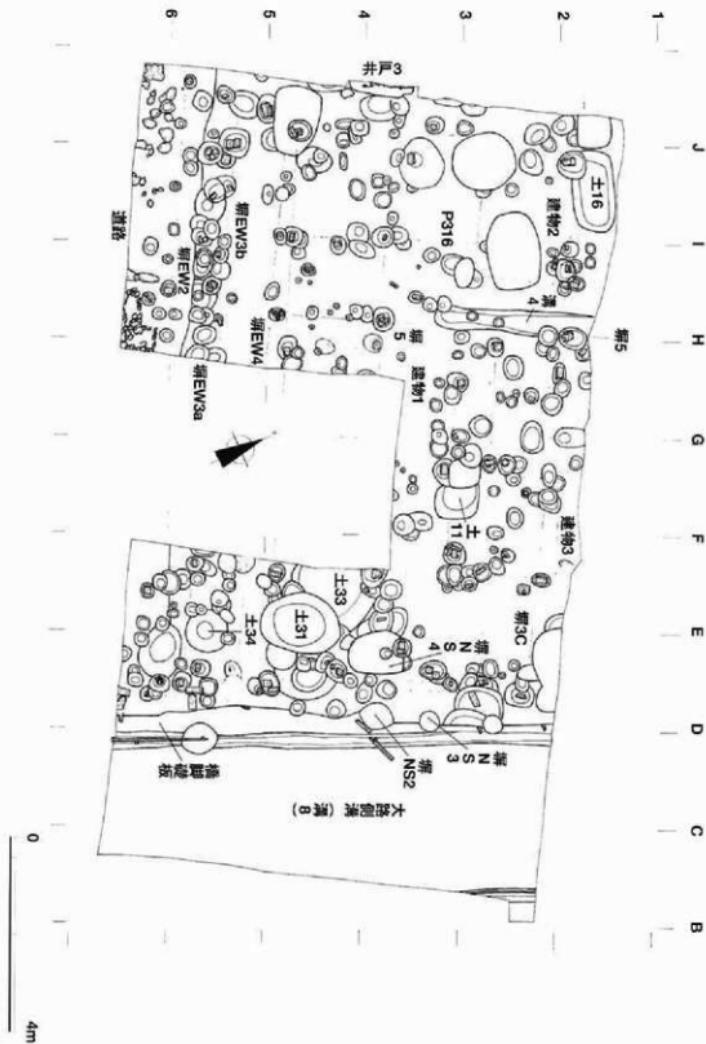


図11-1～6はかわらけ。出土したかわらけは底部糸切りが多く、おむね弱砂質胎土である。小型、大型ともに背低で器壁はゆっくり開きながら立ち上がるものが主流を占める。手づくねかわらけは弱粉質胎土で、外面中位の稜は強いものが多い。7は黒縁皿。器壁内面は丁寧にヨコナデで調整される。8は青磁彫刻花文碗。釉層中に気泡が浮く。

図示できなかった遺物には、白かわらけ1点、摩滅痕の残る常滑の6型式以降の鉢1点・帰属年代不明の器種不明3点、摩滅痕の残る山茶碗窓系のこね鉢2点、青磁刻花文碗1点、青磁蓮弁文碗1点、内外面に黒色漆を塗布した漆器碗1点、箸1点、折敷1点、チョウセンハマグリ2点、マダカアワビ1点、アカニシ2点が出土している。

図12は溝8覆土より出土した遺物である。

図12-1～6はかわらけ。2は極小かわらけである。大型、小型ともにおおむね胎土は砂っぽく、器壁はゆっくり開きながら立ち上がる。大型はやや背高気味である。図示できなかった手づくねかわらけはおおむね体部中位の稜は弱く、口唇は丸く収まる。掘り方出土のものと比べて大きな年代差はないと思われるが、他の3面造構造より出土したものよりやや新しめの様相を呈している。7は瓦質浅鉢型火鉢。口縁部周辺はヨコナデの後、端部周辺にのみミガキ状の調整がおこなわれる。外面上位から下

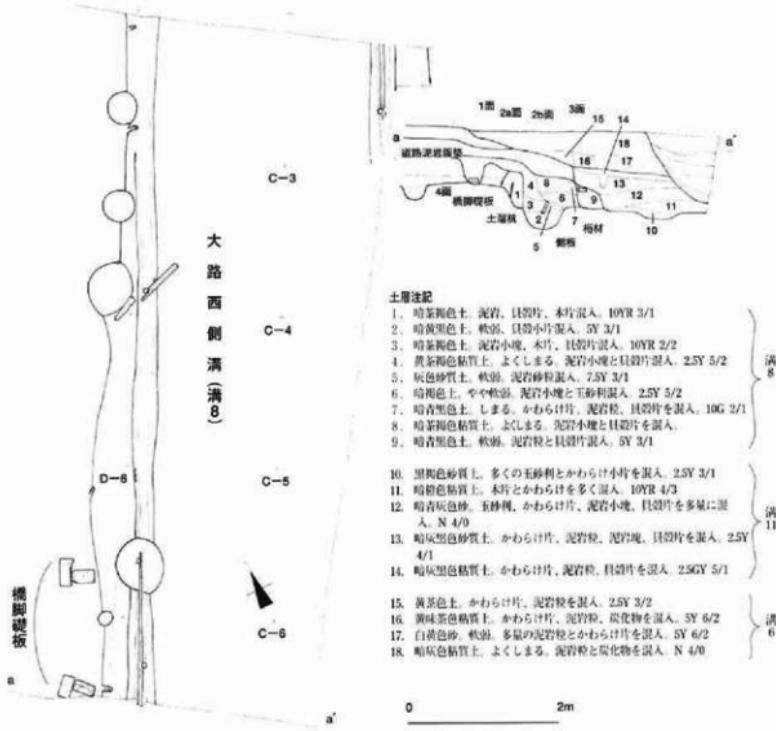


図10 第3面大路測溝（溝8）

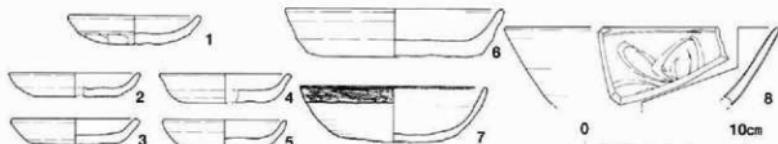


図11 第3面大路溝（溝8）出土遺物

方は指頭押さえ、内面は指頭押さえの後にヨコナナデで調整される。8は青白磁型作り輪花环。二次焼成を受ける。9は白磁壺の底部。施釉はごく薄い。10は釘。11～43は木製品。11は漆器椀。外面は黒色漆の下地に赤色漆で葉を描いたものと思われる。葉脈を搔き取りで表現している。12は草履芯。13は露卯下駄の前部。前縫付近に押圧痕が残る。14は差歎下駄の歎。下側面の摩滅痕はわずか。15～18は円板。15は六角形を呈する。やや小さく、転用品と思われる。16は曲物の底か。17は八角形を呈する。17と18は中央が穿孔される。19～20は用途不明木製品。21は草履芯。22～34は箸、35～38はヘラ、もしくはヘラ状製品、39～41はチュウ木か。いずれも割りが入らず、割り取られただけのものである。42は形代か。頂部に細かい割りが入る。43は杭か。

図示できなかった遺物には、平瓦2点、軒丸瓦1点、緑釉陶器1点、常滑の甕か壺5点、淡黄色粘質胎土の甕1点、舶載緑釉盤1点、青磁蓮弁文碗2点、ニホンジカの左上腕骨1点、ハマグリ2点、チョウセンハマグリ5点、マダカアワビ2点、アカニシ2点、サザエ2点、ダンベイキサゴ5点、モモの種子1点が出土している。

東西道路

調査区の南端に東西に走る泥岩版築道路が発見された。道路はその全幅を調査区内に確認できず、南の路肩は調査区のさらに南に位置する。道路の版築にあたっては、まず版築を行なう地点を浅く掘り込み、そこに泥岩を入れている。第3面では、この道路が1度改修され、掘り込みが2度行なわれ、改修後の北側路肩はより北へと移動している。そのため、最初の掘り込みの位置は失われているが、遺存する版築泥岩によって、およそその路肩位置を推定できる。調査区南西部と調査区西壁の土層堆積に見られる泥岩版築が道路面の基礎である。土層図には3枚の泥岩版築面を確認できるが、その一番下が第3面の改修後の路面基礎である。西壁に路面の北側路肩を示す路面基礎を入れ込んだ浅い掘り込み開始位置が柱穴掘り込みによって埋されているが、より北方向との海拔高と比べれば、路面基礎の掘り込みは明かである。平面的に観察すれば、改修後の道路造営にあたっては、版築の北側に版築層の流れ出しを防止するための木組みによる土留めが施されている。

土層図と版築泥岩の遺存範囲から推定できる調査区内的道路幅員は、当初の路面が50cmほど、改修後の路面が80cmであるが、上述のように路面上はさらに調査区外南へと広がっている。本調査区の南に隣接する調査地点では、本調査区の第3面に相当する中世下層生活面の北端に幅1mほどの東西溝が発見されており、今回発見された道路は調査区から2mほど離れたその東西溝を越して南までは広がっていないことは確かである。さらに後述するこの東西道路の東端にある大路側溝を渡るための橋の橋脚の位置などからも、この道路が3mを越えるような大きな道路ではなかったと考えられる。道路は泥岩版築の上に薄く砂質土を敷いて実際の路面としている。

発見された道路の東西方位は、N-60°30'-Wである。

図15は東西道路より出土した遺物である。1～3はかわらけ。出土したかわらけでは手づくねかわら

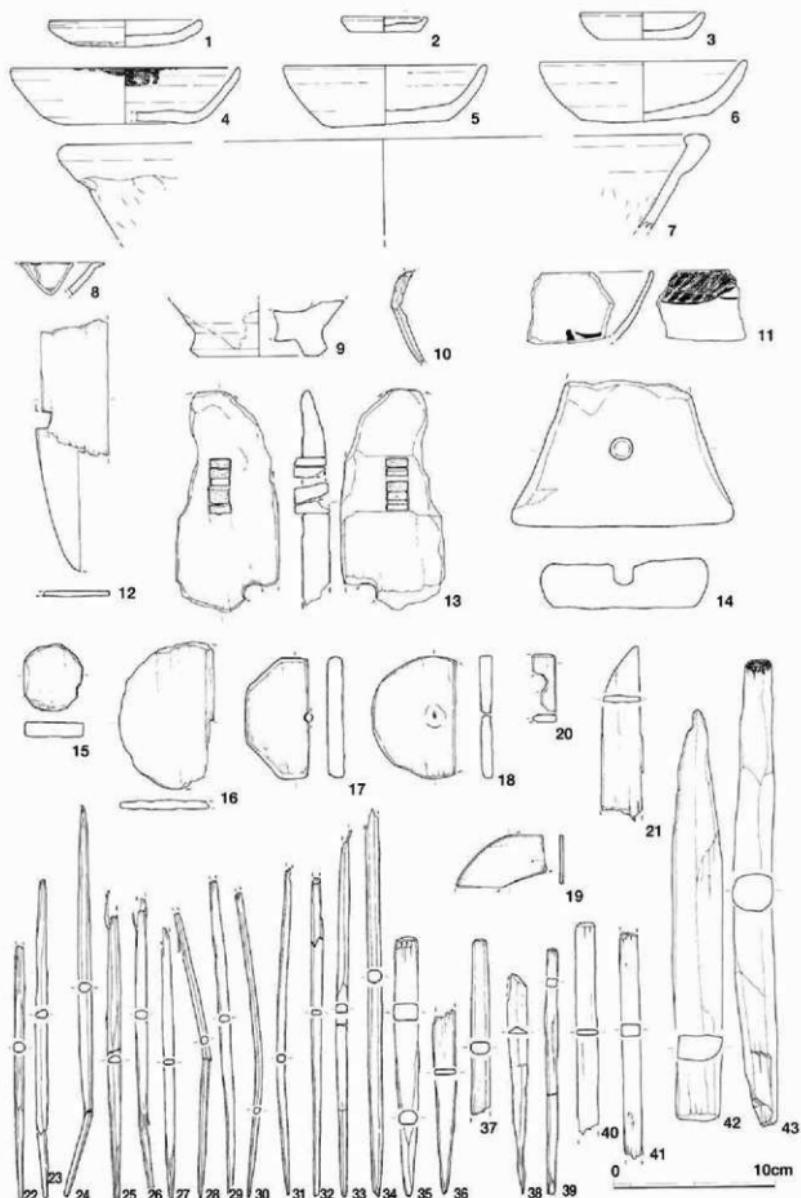


圖12 第3面大路測溝（溝8）出土遺物



図13 第3面東西道路基礎と土留め

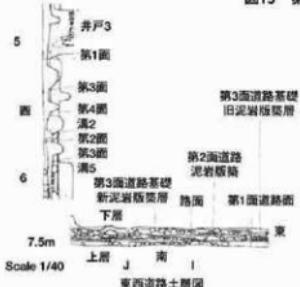


図14 道路土層図

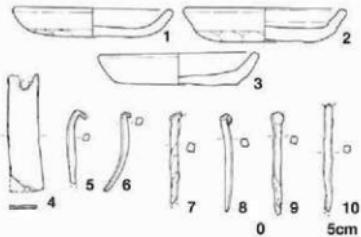


図15 第3面東西道路出土遺物

橋脚

東西道路の東端、若宮大路西側側溝の掘り方に接して、橋脚の礎板が発見された。東西道路の版築面が大路側溝に崩れ落ちないよう、側溝際に設けられた土留めから50cm西に礎板が2枚ずつ配置された柱穴が2口位置する。芯で140cmの間隔を持つ柱穴の深さは30cm。設置された礎板は、他の柱穴に用いられたものより厚く、また特徴的な形状をしている。橋脚礎板は長さ29cm、幅19.5cm、厚さ8.5cmの直方体の短辺の片方が屋根形に削り取られたものと、通常の直方体の礎板が2枚セットで組み合わされている。一部が屋根形に整形された礎板が大路側溝に対して直角に置かれ、西を向いた屋根形部分、すなわち大路側溝から離れた位置に屋根形礎板に対して直角に通常の形状の礎板の長辺をあてがって配置される。このT字形に配置された大きな礎板は、その位置と礎板形状の特殊さ、そして礎板のズレを防ぐ周到な設置方法から通常の建物礎板ではなく、大路側溝を渡るための橋の橋脚と考えられる。絵巻物「蒙古襲来絵詞」に描かれた木組み溝の外側に橋脚を持つ橋と同様の橋脚配置であると思われる。

これまでに若宮大路周辺における発掘調査で発見された溝に架かる橋は、2例ある。まず本調査地の

けが多く、胎土は粉っぽく、底部は丸い。糸切りかわらけはやや粉っぽく、糸切り幅の広いものが多い。4は小札か。遺存厚は非常に薄く、両端に孔が1穴ずつある。5~10は釘。

図示できなかった遺物には、伊勢系土鍋2点、白色粉質胎土の平瓦1点、渥美の甕か壺3点、常滑の甕2点・鉢1点、摩滅痕の残る山茶碗窯系こね鉢1点、輪羽口1点、スラグ1点、ハマグリ1点、チヨウセンハマグリ3点、アサリ1点、マダカアワビ1点、メガイアワビ1点、アカニシ2点、サザエ1点、ダンペイキサゴ15点、モモの種子1点が出土している。また、道路を泥岩版築にするために浅く掘られた道路下地より出土した遺物の内、図示できるものは無いが、剥砂質胎土の糸切りかわらけが多く出土しており、手づくねかわらけは弱粉質胎土の小片が2点、メガイアワビ1点、アカニシ2点、ダンペイキサゴ4点、ツメタガイ1点、モモの種子3点が出土している。

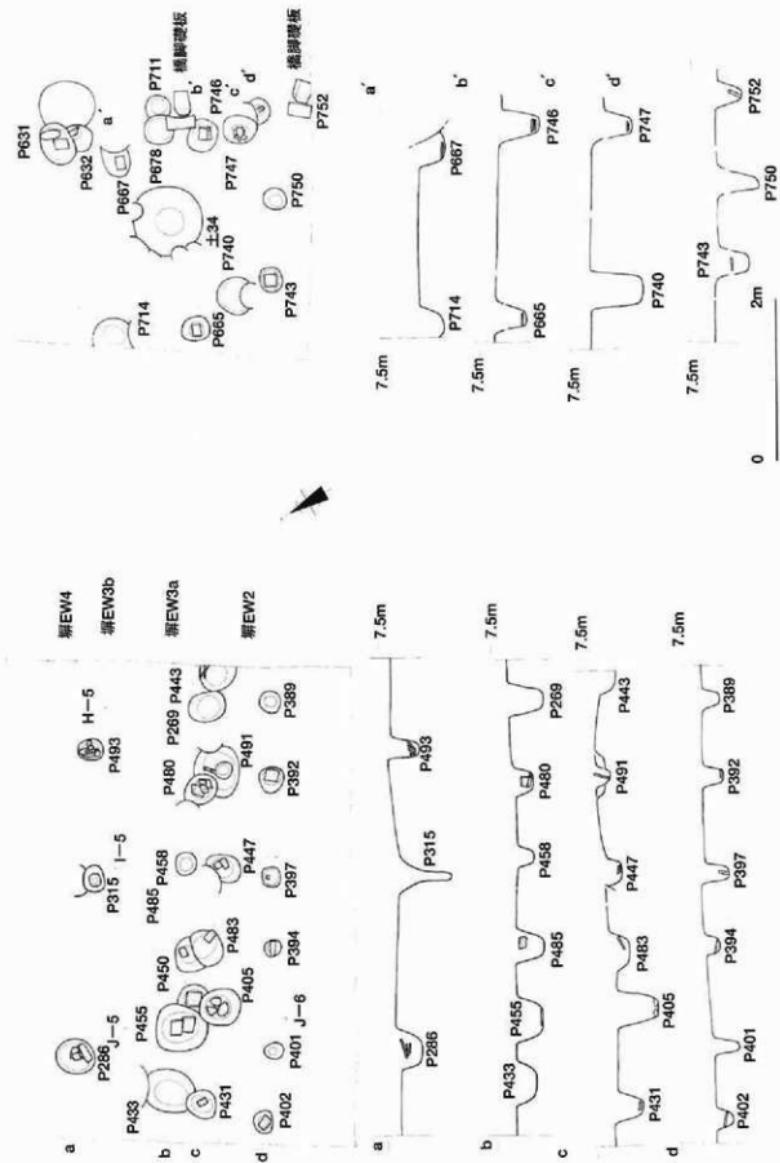


图16 第3面解EW2・3・4

南に隣接する雪ノ下一丁目273番口地点に発見された東西溝Ⅱに架かるもので、120cm間隔の橋脚基礎板が溝底に位置していたもの。これに対して、若宮大路を挟んで東に位置する「北条泰時・時頼邸跡」の雪ノ下一丁目371番地点では、若宮大路東側側溝に架かる橋の橋脚基礎板が溝底面に幅150cm間隔で並んでいた。

橋脚施設に伴う出土遺物はない。

堀

調査地の東端を南北に位置する若宮大路側溝とやはり調査地の南端を東西に走る道路によって2辺を限られた空間は、その内側がさらに堀と考えられる柱穴列によってその2辺が限定されている。

堀は、若宮大路側溝に沿って南北に3列、東西道路に沿って東西に4列ある。それぞれの堀跡は、位置が少しずつずれており、作り替えを示している。作り替えられた位置と柱穴の並びを勘案すれば、この二つの堀跡は最初の造作の後、2回の作り替えが同時に実行されている。このほかに、調査地の北端を東西に並ぶ堀跡が一時的に1列、それに調査区の中央を南北に並ぶ堀跡がやはり一時的に設置される。以下、第3面に発見された作り替えを伴う堀跡を順次説明するにあたって、古い堀から新しい堀へと番号を付け、南北方向のものにNS、東西方向のものにEWの記号を与えた。同一番号を持つ堀跡は同一時期での存在を示す。

堀2

第3面最古の堀跡。東西道路の北と若宮大路の西に並ぶ。それぞれ、堀EW2、堀NS2である。大路側溝の掘り方調査によって失われてしまった柱穴もあるが、東西道路と大路側溝に限られた空間を最大限に囲う堀でもある。EW2では改修前の東西道路の北の際に位置し、改修後の道路地盤によって埋没させられている。東西9口、南北3口の柱穴が確認され、芯芯での柱間は110cmを測る。ただしNS2では150cmを測る柱位置も見られる。柱穴の規模は大路側溝近くでは深くなる傾向があるが、概して直径30cm、深さ30cmと小ぶりで、底面に18×12cmの長方形基礎板を1枚設置する。EWはN-61°-WとNSはN-30°-E。EWとNSは、91°のほぼ直角に交わる。

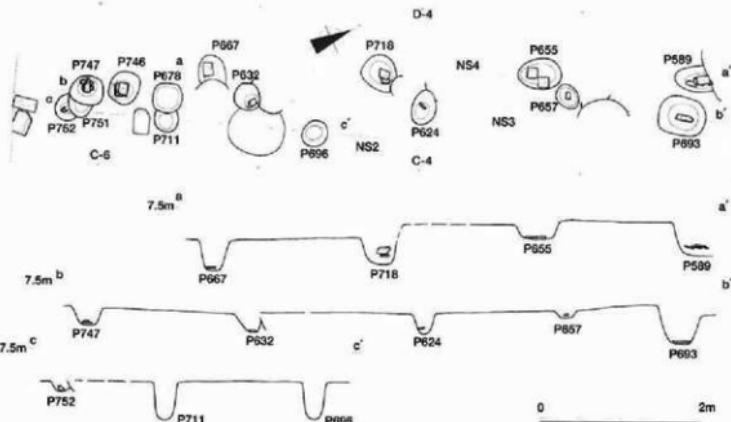


図17 第3面堀NS2・3・4

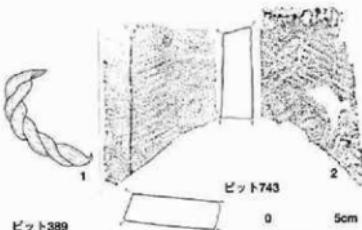


図18 第3面2 (ピット389・743) 出土遺物

たものには、弱砂質～粉質粘土の手づくねと糸切りかわらけ片、チョウセンハマグリ2点、ダンベイキサゴ1点がある。

塙3

東西道路の改修に伴って作り替えられた塙である。EW3では改修された道路の土留めのすぐ北に作られ、同時に塙N S 3はN S 2より30cmほど西へ移動して作り直されている。また、この塙3の時期には、EWがほぼ同位置で再度作り替えられている（塙EW3 b）のに加えて、新たに調査区の北端を東西に並ぶ塙（EW3 c）が作られる。

東西方向の塙のうち道路版築土留めにあるEW3 aは、直径40～50cmの柱穴底部にまちまちの大きさの礎板を2枚ほど設置し、中には泥岩礎を敷いている例（ピット405）もある。柱穴の深さも一定しないが、柱穴間隔は110cmと一定である。塙EW3 bは、塙EW3 aから北に30cm西に移動して塙EW3 aの柱穴と切り合うように柱穴が掘り込まれている。柱穴は直径30～60cmとやはりまちまちだが、深さは海拔6.9mと一定し、18×12cmの礎板が2～3枚柱穴底面に設置される。柱穴間隔は基本的に110cmを測るが、部分的に、補強か何らかのために90cmの間隔で設置されているピット433・445・485がある。EW3 aはN=60°-W、EW3 bはN=59°-Wに、NSはN=27°-E。EWとNSは、87°の鋭角的に交わる。

この塙EW3 a・bに対応する南北方向の塙が、塙N S 3である。塙N S 2の西30cmにN S 2の柱穴を切って位置する。直径30～40cmの掘り込み形状に海拔6.9mの一定した深さの底面に細長い不正形の礎板を設置する。柱穴の芯芯距離は2.0mを測り、東西方向の柱穴とは異なる柱穴間隔である。

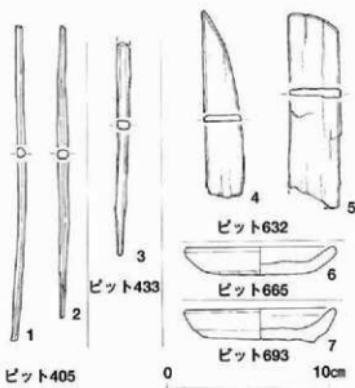


図19 第3面3 (ピット405・433・632・665・693) 出土遺物

図18は塙2に帰属するピットより出土した遺物である。

図18-1はピット389より出土した縄の一部。

図18-2はピット743より出土した平瓦。四面は縁に対して斜め方向の糸切り痕、凸面は縄目叩き痕が残り、両面ともにハナレ砂痕が明瞭に残る。狭端面はヘラ削り調整される。

塙2に帰属するピット出土遺物で図示できなかつたものには、弱砂質～粉質粘土の手づくねと糸切りかわらけ片、チョウセンハマグリ2点、ダンベイキサゴ1点がある。

図19は塚3に帰属するピットより出土した遺物である。

図19-1～2はピット405より出土した箸。

図19-3はピット433より出土した箸。下端にのみ細い削りが入る。楊枝のようなものか。

図19-4～5はピット632より出土した木製品。4は形代と思われる。先端部右側縁は削りが入る。5は用途不明木製品。

図19-6はピット665より出土した手づくねかわらけ。弱砂質胎土で平底、器壁はゆっくり開きながら立ち上がる。

図19-7はピット693より出土した弱砂質胎土の糸切りかわらけである。

塚3に帰属するピット出土遺物で図示できなかつたものの中には、青磁劃花文碗1点、スラグ1点、ガソ・カモ類の左脛骨1点、ハマグリ3点、チョウセンハマグリ3点、アサリ1点、アカニシ1点、サザエ1点、ダンベイキサゴ2点が出土している。かわらけは手づくねの胎土は粉っぽく、底部は平らに近く、体部中位の棱は弱いものが多い。糸切りかわらけは弱砂質胎土。

塚4

第3面に発見された敷地を囲う塚としては最新の塚である。調査区南に東西の塚と大路側溝に沿って南北の塚が位置する。東西の塚EW4は、他のEW2・3から北へ1m20cm移動している。柱穴は、東西が比較的小ぶりで、30×20cm、南北が50×40cmの楕円形の掘り方を持つ。柱穴底面は大路側溝付近の東西EW4とNS4では海拔6.7mと深く、他は海拔7.0mと第3面の他の塚と同様の深さである。ただし、この塚4では小さな礎板を多く配置する傾向を東西、南北列ともに見ることが出来る。造営当初における明確な意図を持たず、ありあわせの板を礎板に転用したために何枚も用いなければならなくなつたのであろう。

EWはN-59.5°-WとNSはN-25.5°-E。EWとNSは85°に交わる。第3面の柱穴列の塚は東西列ではN-60°-Wを保つが、南北列は次第に西へと傾きを強めていき、塚の交わりは鋭角的になる。

第3面における以上のような若宮大路西側における敷地を囲う塚と考えられる柱穴列の変遷のなかで、その塚と若宮大路西側側溝に向けて東西方向に走る

版築道路と大路西側側溝に架かる上述の橋脚の位置

から、発見された橋脚は、改修後の版築道路に伴い、

また塚3a～4にかけての時期に機能していたと考えられる。

図20は塚4に帰属するピットより出土した遺物である。

図20-1はピット315より出土した自在鉤。上方に釘が打ち込まれたままで出土した。また、一部に煤が付着している。

塚4に帰属するピット出土遺物で図示できなかつたものには、弱砂質胎土で器壁の厚い手づくねと糸切りかわらけが2点ずつ、モモ科の種子1点、アカニシ1点がある。

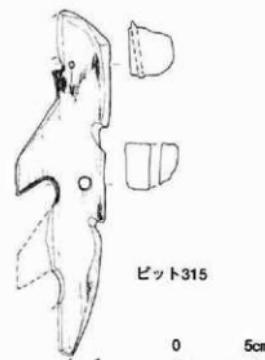


図20 第3面塚4（ピット315）出土遺物

建物

建物1

調査区の中央に東西に長く発見された。発見されたかぎりでの規模は、東西5間、南北2間の長方形である。南北2間のうち南側の柱間に半間の位置に他の柱穴に比べて小さな柱穴が東西に並ぶ。直径40cmの掘り方に深さ40~50cmの規模を持つ柱穴は、底面もしくは柱穴の途中に21×9cmを基本とした大きさの礎板を必ず1枚以上設置する。ただし、ピット156のように礎板を用いずに柱を直接据えた柱穴もあり、一辺12cmの柱根が依存していた。また、ピット353に設置された3枚のうち最上段の礎板には柱当たりの部分に焼け焦げて炭化した個所が認められる。他の礎板や柱根に被火の跡を確認できないため、火災家屋からの転用礎板であると思われる。

柱間は、平均芯志距離で2.2m、南側の半間の位置に小型の柱穴を添える部分で90~100cmと不規則な数値である。建物の位置とその広がりから、この建物1は第2~3の時期に建てられたと考えられる。建物の南北軸方位は、N-26.5°-Eである。ほぼ大路開溝の方位と一致する。

図22は建物1に帰属するピットより出土した遺物である。

図22-1~2はピット59より出土した。1は手づくねかわらけ。弱砂質胎土で丸底、体部中位の稜はとても強い。2は「元祐通寶」と思われる。

図22-3はピット286より出土した手づくねかわらけ。弱砂質胎土で丸底、口唇部に浅めの沈線が巡る。

図22-4はピット311より出土した手づくねかわらけ。弱砂質胎土で平底、指頭痕も不明瞭である。かわらけは手づくねのものが多く、丸底で稜の強いもの、平底で稜の弱いもの、口唇に沈線がめぐるものなどが出土している。砂っぽい胎土の糸切りかわらけが若干混じる。また、図示できなかったものなかに静止糸切りのかわらけ片が確認されている。

図22-5はピット631より出土した礎板に転用された連歛下駄。前縁周辺に指圧痕、台部中央には刃物痕が残る。後歛の摩滅は著しい。

建物1に帰属するピット出土遺物で図示できなかったものには、砂質胎土の静止糸切りかわらけ1点、摩滅痕のない山茶碗窯系のこね鉢1点、青磁懸掛文碗1点、青磁蓮弁文碗1点、漆器椀1点、モモの種子1点、アカニシ1点がある。

建物2

調査区の北西に発見された。1間×1間の規模のうちの3口を確認したのみであり、非常に不安な建物の復元であるが、柱穴の形状と規模、そして、すぐ脇にある溝4と塹N S 5との方向と良く一致しているため、建物跡と認めた。全形を確認できた柱穴は1口だけで、他は後世の柱穴と井戸によって半分ほどが壊されている。半分ほどが壊されている柱穴は円錐形に50cmほどまで深く掘り込まれ、おそらくは礎板を用いずに直接柱を埋め込んだものと思われる。柱間隔は2.0mである。また南北軸方位は、溝4と全く同一のN-30.5°-Eである。

前述のように、建物2、3およびそれらを区画する溝4と塹5は同一機能施設と考え、出土遺物は図26にまとめて図示した。

図26-1は建物2に帰属するピット325より出土した平瓦。胎土は明白白色粉質緻密土で永福寺創建期のものと同胎である。凹面は無刻の叩き板でプレスされ、凸面は斜め方向の撻目叩き痕が残る。側面下半はヘラ切り後、指ナデによる調整がされる。破損断面には砂目痕と粘土の離ぎ足しが観察されることからこの製品が再製されていることが理解できる。

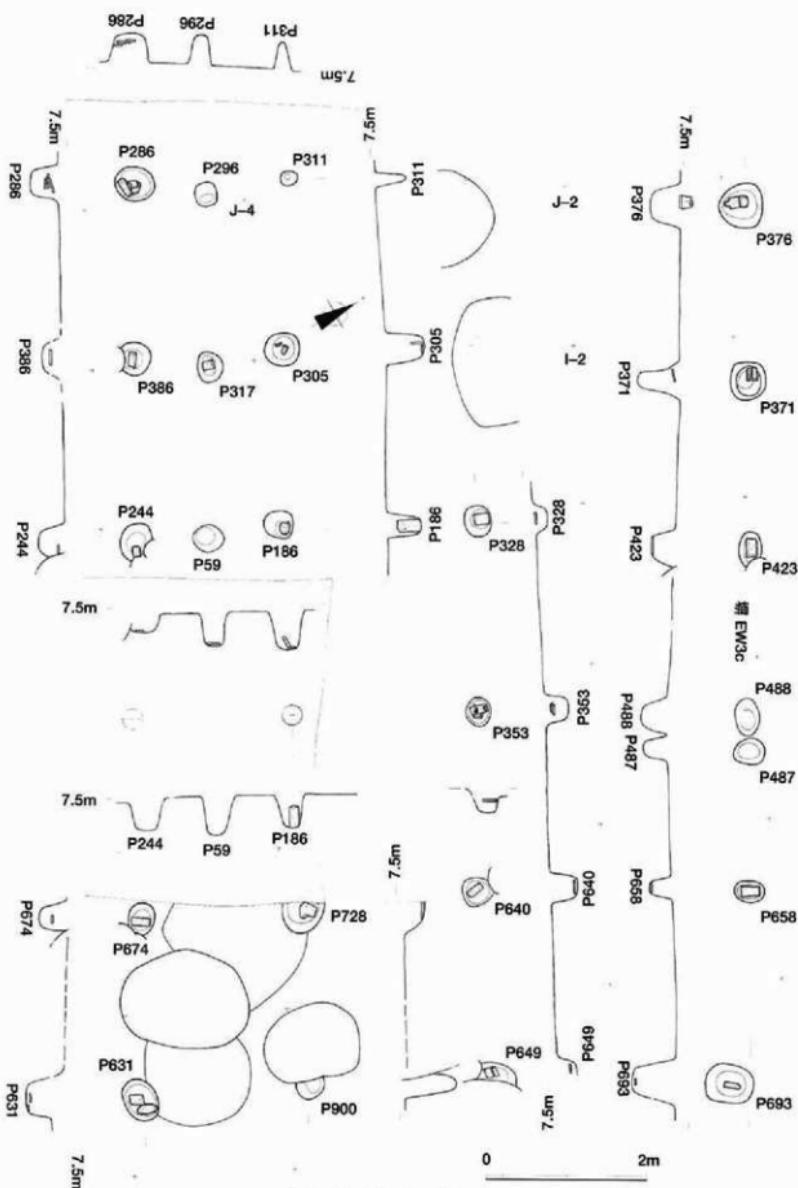


図21 第3面建物1と堀EW3C

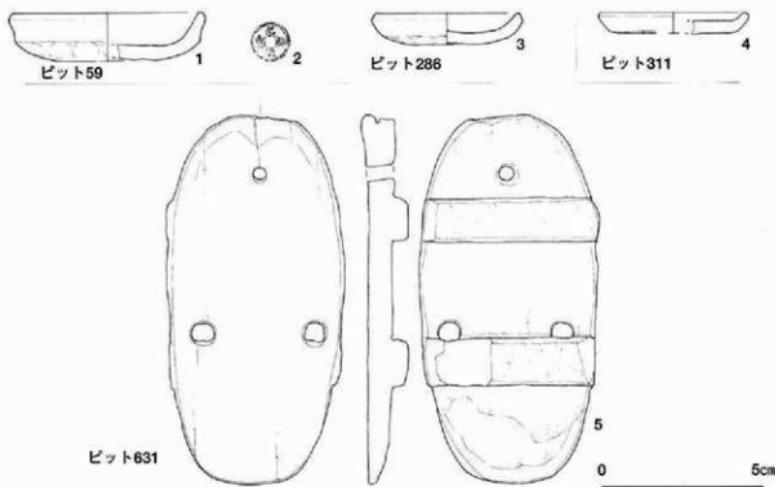


図22 第3面建物1(ビット59・286・311・631)出土遺物

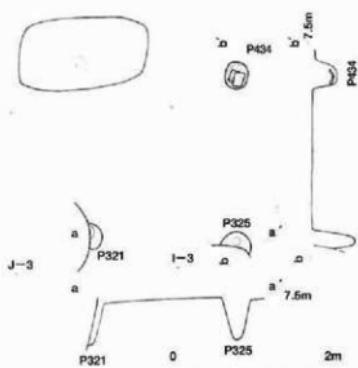


図23 第3面建物2

隠し塀であろうか。

建物3の南北軸方位も、N-30.5°-Eである。

建物3に帰属するビット出土遺物で図示できたものは無かったが、粉質胎土で口唇に沈線が巡り、体部内面中位に後のある古手の手づくね、砂質胎土の糸切りかわらけの破片がわずかに出土している。

以上の小型の建物2と3は、小数の柱穴並びからのやや不安な復元であるが、建物軸方位の数値から第3面における塀4に囲まれた敷地内での部分的空間分離を行なう塀5と溝4が機能していた時期に用いられたものと考えられる。そして、建物配置と柱穴の切り合い関係から、塀2・3とともに機能していた建物1が取り壊された後の時期相に、これらの塀4と5・溝4・建物2と3が機能していたと細分できる。

建物2に帰属するビット出土遺物で図示できなかったものには、粉質胎土の手づくねかわらけの細破片がわずかにある。

建物3

調査区の中央北側、溝4と塀5の東に発見された。1間×1間以上の建物と思われる。柱穴は不揃いに見えるが、確認面のレヴェル差によるもので、柱穴の底面海拔高はほぼ7.0~6.9で一致している。掘り方直径の差も確認面レヴェルの違いに起因する。柱穴底面に据えられた礎板は、かなりしっかりしたものから大小取り混ぜて多数を入れ込んだものまで多様である。

この建物の南西部に、およそ35cm南に離れて浅いピット群が列をなして発見されている。建物3の日

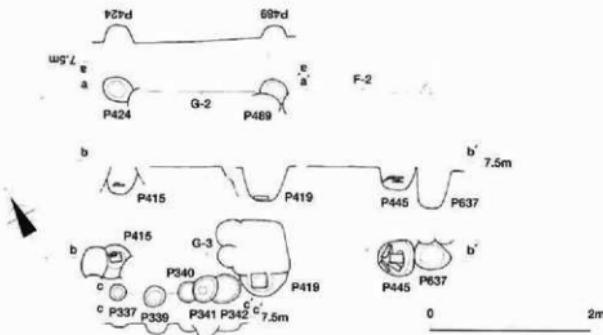


図24 第3面建物3

図5

遺構の切り合いからみた新旧関係は明確でないが、他の遺構、とくに廻との関係から最も新しい廻4と同時に存在したものと考えられる。調査地の中央や西よりに南北に位置する。廻4の柱穴ピット493から北へ柱間隔2mで調査区外へと伸びている。一部の柱穴は、この廻5の西に接して南北に掘り込まれた溝4の調査によって消失してしまっている。海拔7.0mの一定した柱穴の底面には、下駄をはじめ $20 \times 9 \times 5$ cmのしっかりした板材までの多様なものが基礎に利用されて2枚以上重ねられている。南北軸方位はN-30°-Eである。

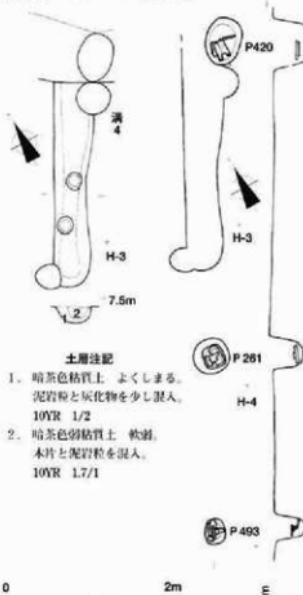


図25 第3面溝4と廻N5

図26-2は廻5に帰属するピット420より出土した手づくねかわらけ。胎土は粉質で、器壁は厚く、体部内面中位から外反している。外面中位の稜も強いてある。糸切りかわらけは見られない。

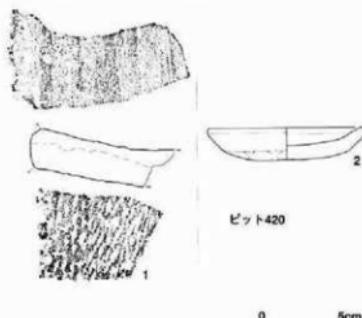


図26 第3面建物2(ピット325)、廻5(ピット420)出土遺物

溝4

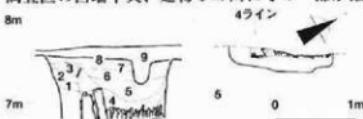
溝5の西に接して調査区の中央から北へ調査区外へと伸びる。幅98cm、深さ20cmの小さな溝である。溝5とともに第3面の最終相にあって、敷地内を部分的に分離する機能を持っていたものと考えられる。南北軸方位はN-30.5°-Eである。

図示できる出土遺物はなかったが、粉質粘土で体部外面中位の縫の弱い、口唇に浅い沈線が遡る手づくねかわらけ、弱粉質粘土の器壁がゆっくり開きながら立ち上がる系切りかわらけの破片がわずかに出土している。

井戸

井戸3

調査区の西端中央、建物1の西にその一部が確認できた。井戸本体の大部分は調査区外にあり、調査8m



土層注記

1. 黒色粘土質土、多くの炭化物、泥炭化、日影付見える。N 2/0
2. 喀灰黄色粘土質土、よこしまる、混入物同上。2.5Y 4/2
3. 黒色粘土質土、混入物同上。N 2/0
4. 黑色粘土質土、本分多し、炭化物、泥炭化、日影付、本片、かわらけ片混じる。N 2/0
5. 喀灰黄色粘土質土、やや硬い、混入物同上。N 3/0
6. 喀灰黄色粘土質土、硬い、土堆入を多く見える。2.5Y 4/2
7. 黒色粘土質土、多量の混在物混入。N 1.5/0
8. 泥炭フロット、2.5Y 4/1
9. 黄灰黄色粘土質土、1.5m構成土。2.5Y 4/1

図27 第3面井戸3

・確認できたのは四角い井戸の一辺のみである。そのため、井戸内覆土や掘り方覆土を分別した出土遺物の調査は充分にできなかった。確認できた井戸の一辺の規模は、掘り方が129cm、井戸枠が102cm。遺存する幅板の上部と支柱の一部から、おそらく横桟支柱式の井戸枠構造と思われる。覆土最上層は、後の第2面構成土によって堅く付き固められている。

図示できる出土遺物はなかったが、弱粉質粘土の系切りかわらけ片、青磁刻花文碗1点、ダンベイキサゴ1点が出土している。

土壙

土壙34

調査区南東部、若宮大路側溝の脇、北側橋脚の西72cmに、溝EW3と4の間に位置する。直径87cmのほぼ円形の掘り込み上面から底面直径46cmまでの深さ100cmの土壙である。覆土は非常に多くの水分を含み、下層ほどチュウ木と思われる木片を多く混じえ、有機質腐食土と思われるオリーブ色の粘土質土が堆積する。このような遺物と堆積土の観察から、土壙34は便所と考えられる。ただし、踏み板などの遺物は遺存せず、全くの土壙としてのみ発見されている。

以上のように本土壙を便所と考えた場合、その発見された地点には多くの問題が残される。それは、本土壙が第3面における二つの時期相のうちどちらに属するかによって、便所構造が建物が建つ敷地内であるのか、その南にある道路に付随する公的空間

土壙注記

1. オリーブ黒粘土質土、水分多量。多量の貝殻の他、木片を混入。7.5Y 2/2
2. 喀灰黄色粘土質土、水分多し、多量の木片の他、日影付混入。N 3/0
3. 喀灰黄色粘土質土、水分多いが少ししまる。木片と貝殻付、泥岩質を混入。2.5Y 4/2

図28 第3面土壙34

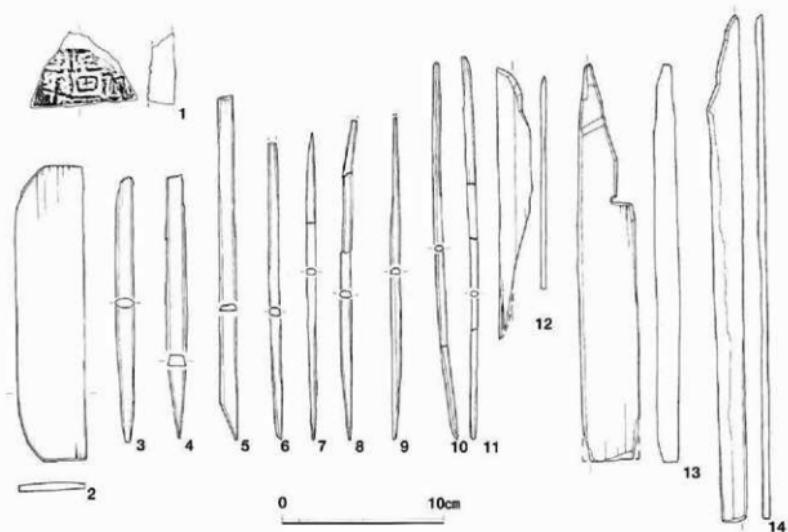


図29 第3面土壙34出土遺物①

に帰属するのか大きく分かれる点である。第3面の早い時期相では建物の建つ敷地は塀EW2・3で囲われ、便所造構は建物に付属する。後半の時期相では建物敷地は塀EW4で囲まれ、便所造構は建物敷地の外にあり、道路に付属することになる。便所造構は建物敷地を開う塀の柱穴と切り合い関係を持たず、考古学的手続きによる明確な第3面時期相への帰属を決定できない。しかし、塀EW3と4の間の空間には、土壙34の便所造構を除いてはほとんど造構ではなく、塀EW2・3の初期相においては全くの空閑地であり、土壙34の便所造構はこの道路造構に付属する空間地に掘られた便所と考えたい。

図29・30は土壙34より出土した遺物である。本造構は前述のとおり、中世便所造構と思われるが、その覆土はチュウ木でびっしり埋められていた。これらと共に図29に図示した1の渥美の壺か壺の叩き目文の残る肩部、2の草履芯、3～5のヘラ状製品、6～11の箸、12～14の形代が出土しているが、その出土数はチュウ木の出土量に比べればごくわずかである。チュウ木はおおむね断面が薄い板状を呈するが、杭状のものも含まれている。しかし、両者ともに4面をただ荒く削り出しただけである。また、堆積土の水選別を行い、総量2.5kgの植物遺体、動物遺体、貝などを抽出した。なお、詳細な科学分析は本書第四章第2・3節に掲載している。

図示できなかった遺物には、草履芯3点、チュウ木199点、板状木製品1点がある。

この他に、堆積土層を含めて本来の形状まで確認できた土壙に調査区中央の土壙11がある。第1面の土壙に切られているが、ほぼ一辺90cmの正方形を呈し、深さ50cmを測る。内部に堆積した土は、中世地山を構成する土の崩壊土で上層に炭化物とかわらけを多く混じえる。

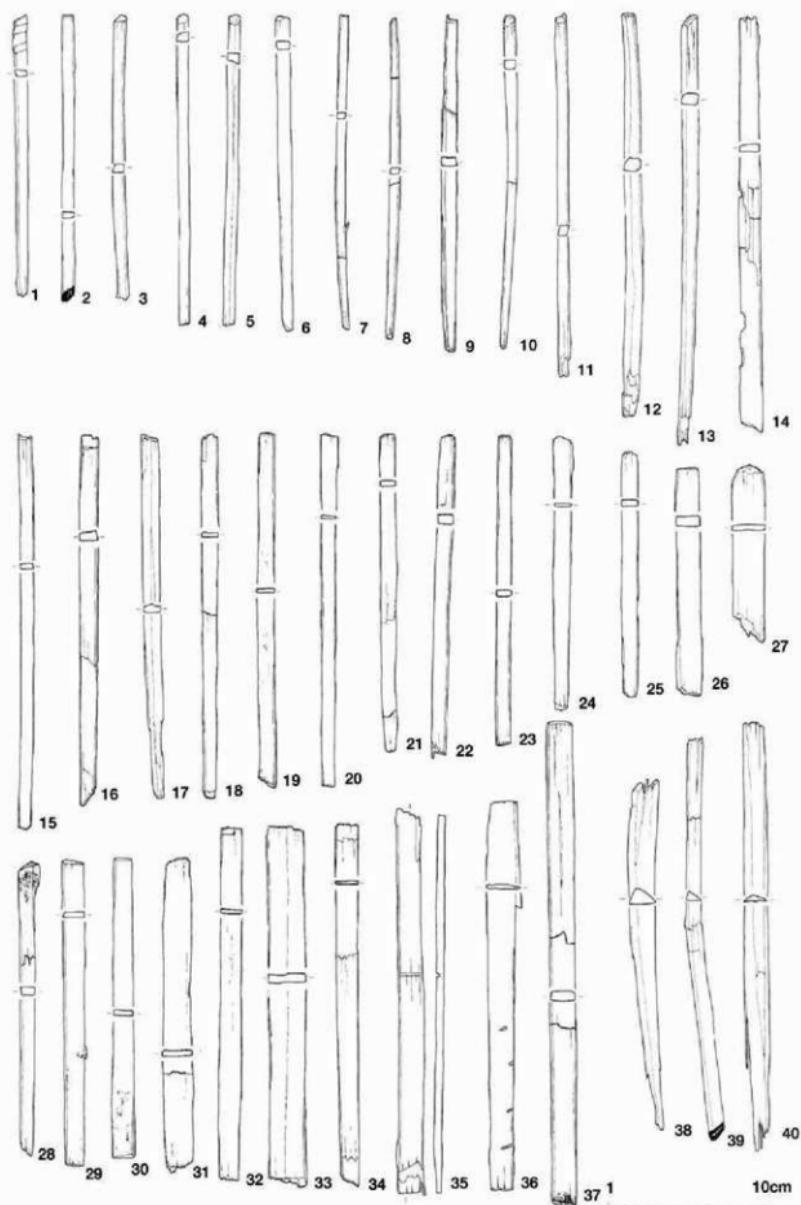


图30 第3面土壤34出土遗物②

その他の遺構

調査区の東、大路側溝の西、塀4に開まれた間に多くの土壌が発見されている。しかし、その多くは後世の第2面での土壌や大型の柱穴によって壊されており、本来の形状を保つものは少なく、多くは浅い掘り鉢上の落ち込みとしてのみ確認できただけであった。

調査区の北西隅に発見された土壌16は、ほぼその形状を残していたが、水分の多い覆土のために堆積土層を確認できなかった。ここではその計測数値と観察できた覆土を書き留めるのみとする。長径164cm、短径86cm、深さ64cmで、橙褐色の植物質腐食土が覆土であった。ゴミ捨て穴であろうか。

土壌31は、掘り方形状164×110cm、深さ63cmと大きな土壌である。湧水による水分を多く含み、木製品を多く遺存させていた。また、覆土中層に炭を多く混じており、ゴミ捨て場と考えられる。最上層には泥岩疊を多く混じえ、埋め戻し整地作業が行なわれている。

ピット316は20×35cmの掘り込み直径から円錐形に掘り込まれた底面に砂質凝灰岩疊をまず設置し、そのうえにアワビらしき貝殻を配してから平瓦を礎石代わりに敷いている。アワビを礎板の下に配した例はすでに第4面の柱穴列をなすピット503で見た。

図33-1～3は土壌9から出土した遺物である。1は同安窯系青磁刻花文碗。施釉はとても薄くおこなわれる。2は木鍤と思われる。全体に丁寧な削りがおこなわれ、上端は切れ込みが巡り、下端は尖り気味に調整されている。3は織具か。弧の部分は丁寧に面取りされている。全体に焦げが著しい。

図示できなかった遺物には、弱粉質胎土の手づくねかわらけと砂質胎土の糸切りかわらけ、凹面はナテ調整、凸面に格子文の残る平瓦1点、マダイの左後頭骨1点が出土している。

国33-4～5は土壌15から出土した遺物である。4は手づくねかわらけ。本構造からは、弱粉質胎土の丸底で器壁の厚い手づくねかわらけが多く出土しているが、弱粉質胎土の糸切りかわらけがわずかに含まれる。5は涅美の鉢。体部外面上方は回転ナデ、下位は回転ヘラで調整される。高台は断面三角形を呈し、丁寧に貼り付けされる。内面の摩滅痕はかなり上方から残る。

図示できなかった遺物には、山茶碗窯系のこね鉢1点、赤色漆による手描きの菊花文を描いた大振りの漆器碗1点、弱粉質胎土で器壁の厚い丸底の手づくねかわらけが多く出土している。

図33-6～7は土壌16から出土した遺物である。6は手づくねかわらけ。図示されなかったものには大型、小型ともに6のような体部外面中位の後の強い手づくねかわらけが多く出土している。また、静止糸切りの小型かわらけが1片出土している。7は草履芯。織維痕、および織維圧痕が残る。

図示できなかった遺物には、伊勢系土鍋1点、常滑の壺か壺1点、淡黄色粘質胎土の壺か壺3点がある。

図33-8～17は土壌30から出土した遺物である。8は東遠江のⅡ期に属するとと思われる山皿。摩滅痕は無い。9～17は箸。

図示できなかった遺物には、粉質胎土の手づくね

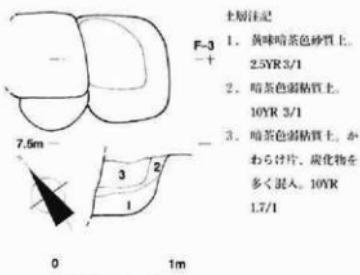


図31 第3面土壌11

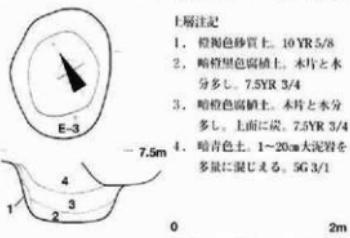


図32 第3面その他の遺構（土壌31）

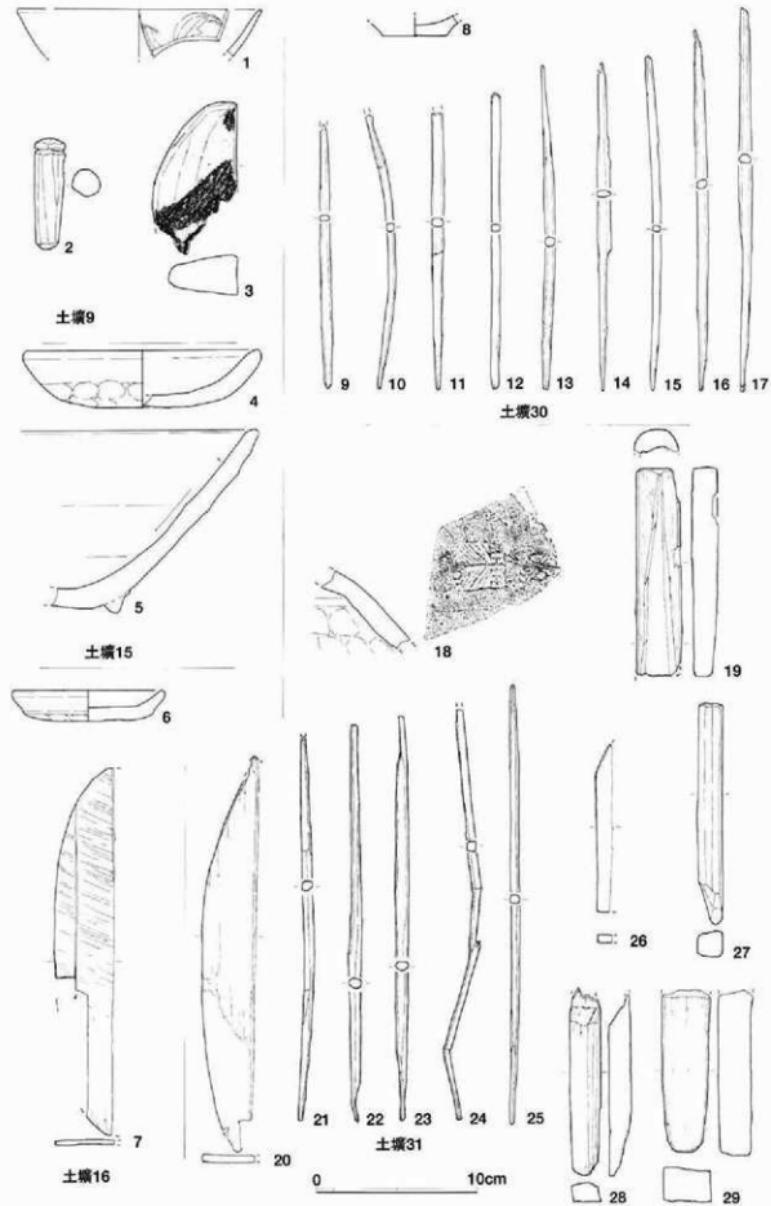


図33 第3面その他の造構（土壤9・15・16・30・31）出土遺物

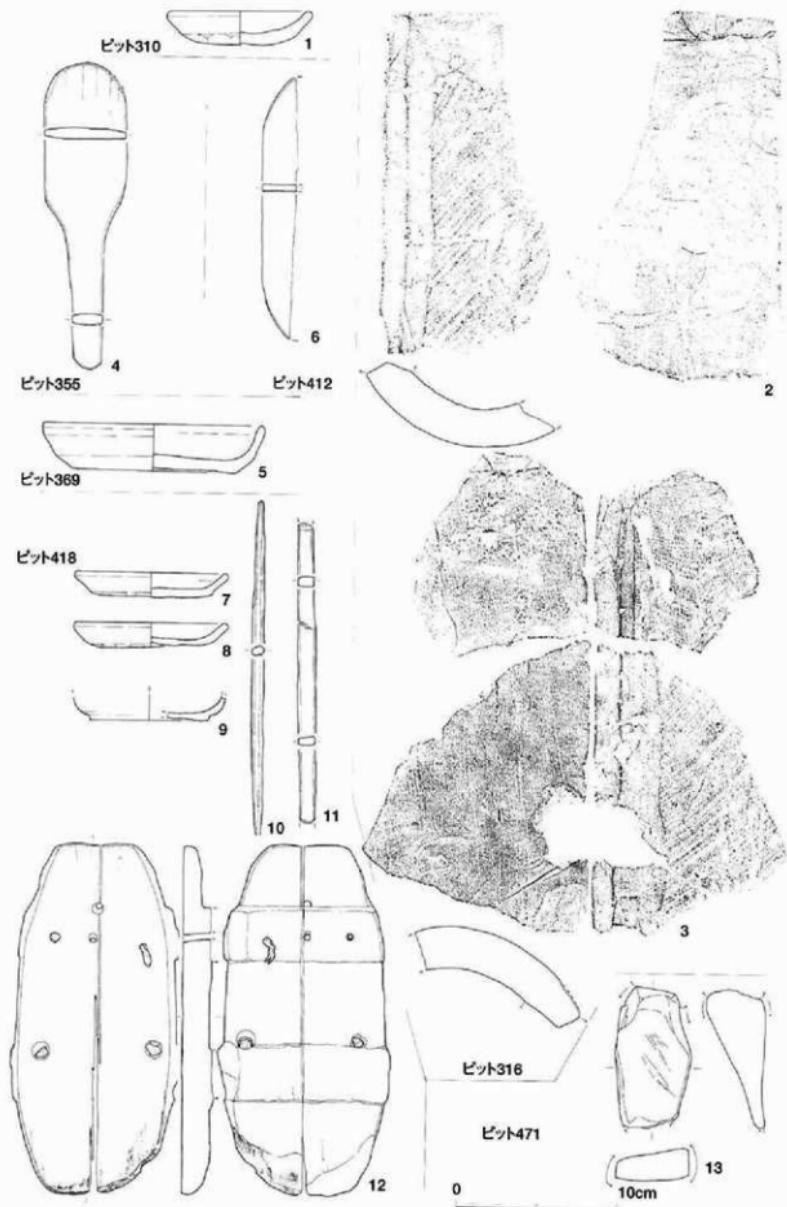


図34 第3面その他の遺構（ピット310・316・355・369・412・418・471）出土遺物

かわらけ、凹面はナデ調整、凸面は縄目叩き痕の残る平瓦1点、ハマグリ1点がある。

図33-18～29は土壙31から出土した遺物である。18は常滑と思われる窓か窓片。19は刀子の柄。上・下端にタガで削った痕が残る。20は草履芯。21～25は箸。26～29は用途不明木製品。

図示できなかった遺物には、弱粉質胎土の手づくねかわらけと弱砂質胎土の糸切りかわらけが半々の割合で、また渥美の窓か窓1点、常滑の窓か窓2点、チョウセンハマグリ7点、メガイアワビ1点、マダカアワビ1点、アカニシ2点がある。

その他の土壙からは、土壙11より粉質胎土の手づくねかわらけと薄い板状の用途不明の木製品4点、土壙27より弱砂質胎土の手づくねかわらけと器壁が厚めの糸切りかわらけが2点ずつ、常滑の窓か窓1点が出土している。

図34-1はピット310から出土した手づくねかわらけ。この他にピット310からは粉質と砂質胎土の丸底で体部内面中位の縫が強い手づくねかわらけを主流としながら、砂質胎土で高台が柱状に残る糸切りかわらけの破片2点も出土している。

図34-2～3はピット316から出土した瓦。両者は礎石として転用されていた。2は淡紅黄色粉質緻密土で八幡宮Ⅰ期と同胎の平瓦である。凹面は側縁に対して斜め方向の糸切り痕、凸面は縄目叩きの後、ナデ消しで調整される。3は灰～灰白色粉質緻密土で八幡宮Ⅰ期と同胎の丸瓦である。凹面は側縁に対して斜め方向の糸切り痕と布目痕、凸面は縄目叩きの後、ナデ消しで調整される。

図34-4はピット355から出土した杓子。

図示できなかった遺物には、弱砂質胎土の手づくねかわらけ3片がある。

図34-5はピット369から出土した糸切りかわらけ。内底面広く背低。弱砂質胎土の手づくねかわらけが共出している。

図34-6はピット412から出土した用途不明木製品。

図示できなかった遺物には、板状木製品1点がある。

図34-7～12はピット418から出土した遺物である。7・8は手づくねかわらけ。胎土は粉っぽく、平底で器壁が薄い。図示されていないが、砂質胎土の糸切りかわらけが多く出土している。9は無文と思われる漆器小椀か。外底部を除き、黒色漆が塗布される。10は箸。11は棒状木製品。両側面ともに面取り風に調整されている。12はピット418に置かれた3枚の旋板のうちの1枚に転用されていた連鎖下駄。前縫が2穴あるが、本来の前縫よりもやや下方に小さめに穿孔され、その両横には釘が打たれている。購入した下駄を寸詰めたものか。

図示できなかった遺物には、常滑の窓か窓1点、器種不明1点、青磁劃花文碗1点、黒色漆が塗布されて赤色漆で文様が描かれる漆器皿の底部片1点、チョウセンハマグリ11点、マダカアワビ1点、ダンベイキサゴ9点、モモの種子1点がある。

図34-13はピット471より出土した上野産の淡黄色を呈す凝灰岩製の砥石。

図示できなかった遺物には、弱砂質胎土で器壁が直立する糸切りかわらけ、櫛の羽口1点がある。

図35-1はピット490より出土した部材と思われる。表面はノミ状工具痕が明瞭に残り、両側面には切れ込みが入る。

図35-2はピット492より出土した連鎖下駄。

図35-3はピット654より出土した箸。

図示できなかった遺物には、粉質胎土で器壁の厚い手づくねかわらけが多くある。また、内外面に黒色漆が塗布され、外面に赤色漆による手書きの文様が描かれる大きめの漆器碗1点、モモの種子1点が

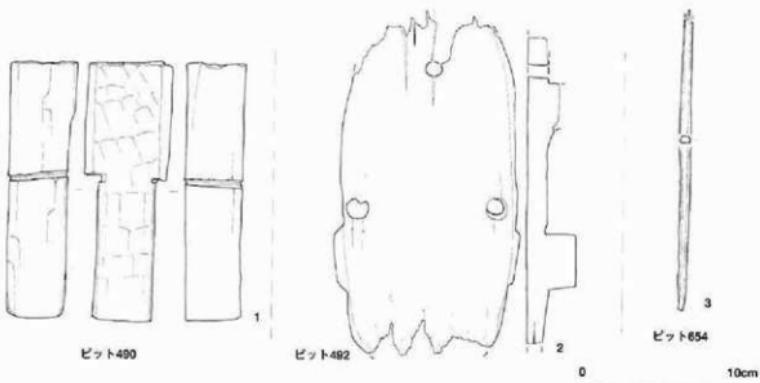


図35 第3面その他の遺構（ピット490・492・654）出土遺物

出土している。

図36・37はピット654から出土した遺物である。この遺構は前述の便所遺構に隣接して発見された。便所遺構より規模は小さいが、覆土は図示できなかったものを含めると200本近い箸で覆われていた。このことは使い心地を気にしなければ箸をチュウ木として再利用したとも考えられる。ただし、覆土の土壤分析および観察などができなかつたため遺構の性格の断定は避けなければなるまい。木製品以外の遺物は全く含まれない。

図36-1は無文の漆器皿。全面に黒色漆を塗布している。また、内底部から外底部に向けて2穴の孔があけられる。外底部には4箇所のツメ痕が残る。2は円板。5箇所の未完通の穿孔がある。図36-3～図37-1～32は箸。断面は円形を呈するものが多いが、長方形あるいは四角形を呈するものも含まれる。出土した箸はその長さが17cm以内のもの、21cm前後のもの、24cm前後のもの、27cmを越すものに分類できそうである。この他に、モモの種子が1点出土している。

図38-1はピット717より出土した遺物である。1は東遼江中期以降の山皿。内底面に軽い摩滅痕が残る。2は箸。

図示できなかつた遺物には、弱粉質胎土の手づくねかわらけとサザエのフタ1点がある。

図38-3はピット719より出土した鑿。刃先が欠損しているが、ほぼ完全な形で出土した。鉄部の先端は徐々に細くなっていることから刃先の細い鑿と考えられる。頂部にリング状の「冠」がはめられており「叩き鑿」と思われるが、本部は腐食が著しく叩き痕などは確認できなかつた。鉄部の首に柄がはめ込まれてしっかりと固定されるが、「基」の形状は確認できない。

図38-4はピット723から出土した釘。

図38-5～8はピット748から出土した木製品である。5は草履芯。切れ込み痕は明瞭に残るが、小孔、植物圧痕は見られない。6～8は箸。6・7は両端とともにまた、8は上端にのみ削りが入れられる。

図示できなかつた遺物には、常滑の淡黄色粘質胎土の甕か壺の破片1点、折れのある箸2点がある。

その他にピットより出土した遺物で図示できなかつたものには、土師器1点、渥美の甕か壺1点、常滑の甕か壺1点、淡黄色粘質胎土の甕1点（ピット459の礎石に転用されていた）、摩滅痕の残る山茶碗窯系こね鉢1点、青磁割花文碗1点、青白磁小皿1点、鳴滝産の砥石1点、釘1点、スラグ1点、チヨウセンハマグリ3点、マダカアワビ2点、ダンベイキサゴ3点、モモの種子1点がある。

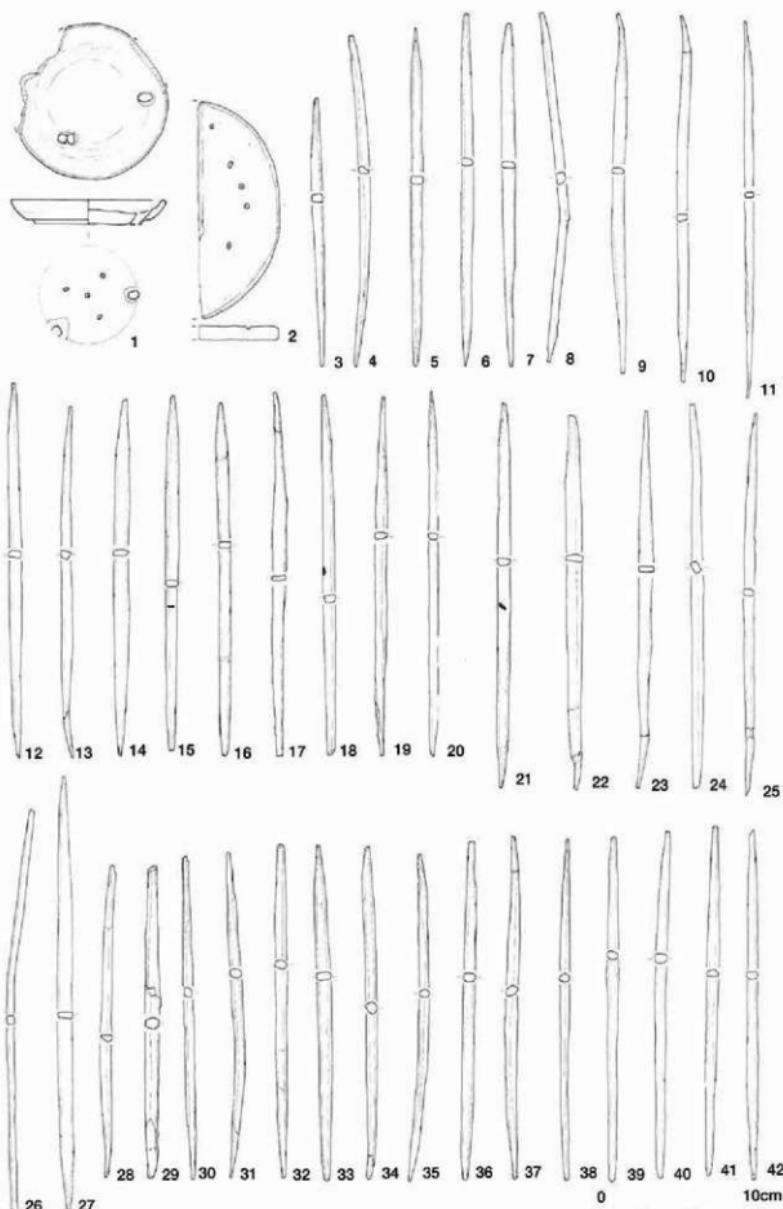


図36 第3面その他の造構(ピット664)出土物①

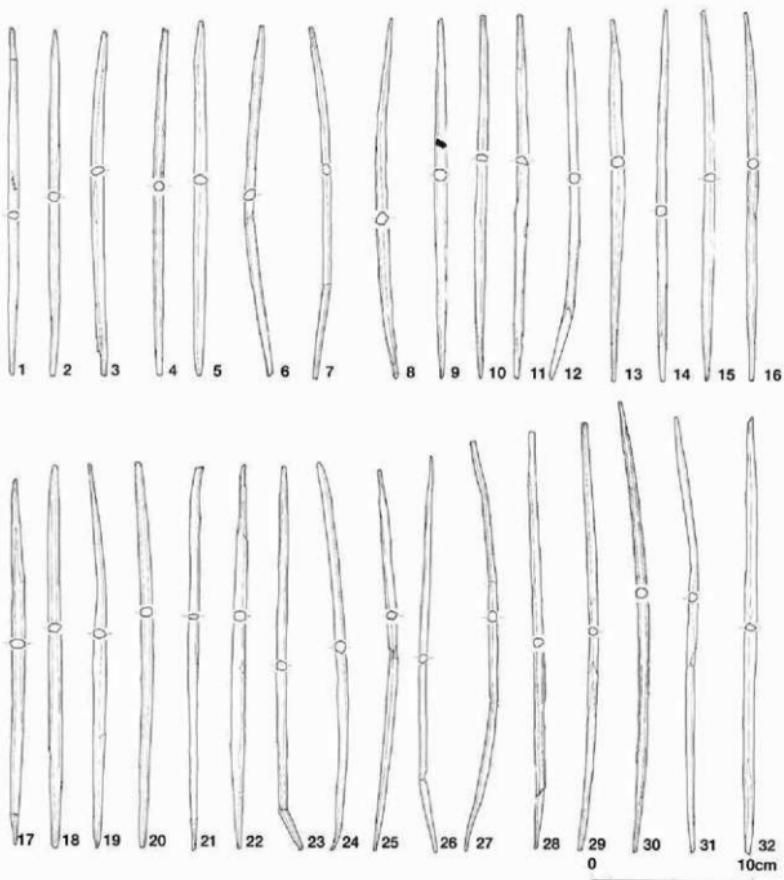


図37 第3面その他の遺構（ピット664）出土遺物②

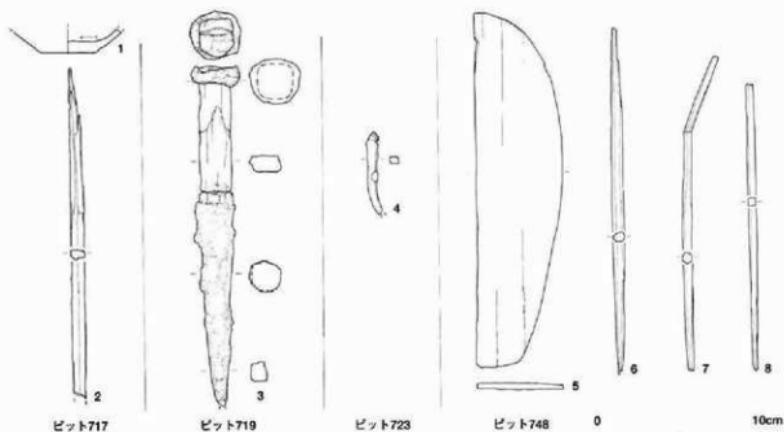


図38 第3面その他の造構（ピット717・719・723・748）出土遺物

第3面下出土遺物

図39は3面下出土遺物である。1は南多摩の須恵器の鬼高式壺蓋。第4面のピット上面から出土したため、第4面の年代を比定しうる遺物なのかは非常に迷うところである。2は粉質胎土の手づくねかわらけ。3は杭と思われる。下半に釘搔きが残る。

図示できなかった遺物には、粉質胎土の手づくねかわらけが多く出土しているが、糸切りかわらけは弱砂質胎土のものがわずかにある。他には渥美の堀か壺1点、青磁刻花文碗1点、スラグ1点、繩の羽口2点、モモの種子2点がある。

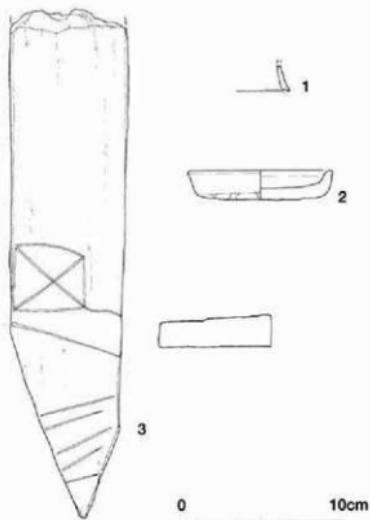


図39 第3面下出土遺物

表1 遺物観察表(1)

遺構番号	採取番号	種別	大きさ(cm)			備考
			口径	底径	器高	
3面大路側溝(溝8掘り方)	11 1	かわらけ	8.40	7.00	1.75	手づくね。橙色。黒色砂粒と白色針状物質を混じえる。
3面大路側溝(溝8掘り方)	11 2	かわらけ	8.20	6.00	1.50	淡茶色。黒色砂粒、泥粒に、白色針状物質を混じる。
3面大路側溝(溝8掘り方)	11 3	かわらけ	8.00	5.70	1.60	淡茶色。黒色砂粒、雲母、泥粒、白色針状物質を混じる。
3面大路側溝(溝8掘り方)	11 4	かわらけ	8.20	6.60	1.80	黒色砂粒、雲母、泥粒、白色針状物質を混じる。
3面大路側溝(溝8掘り方)	11 5	かわらけ	7.80	5.20	1.70	淡茶色。黒色砂粒と雲母を混じえる精良質土。
3面大路側溝(溝8掘り方)	11 6	かわらけ	13.60	11.00	3.00	淡茶色。黒色砂粒、雲母に、白色針状物質を混じる。
3面大路側溝(溝8掘り方)	11 7	黒縁皿	11.60	5.90	3.40	明灰色土。黒色・白色砂粒を多く混じる。
3面大路側溝(溝8掘り方)	11 8	青磁柳条花文碗	17.20			口縁部破片。灰色弱結質土。灰綠色斑。
3面大路側溝(溝8)	12 1	かわらけ	9.60	8.40	1.65	手づくね。淡茶色。黒色砂粒、雲母、白色針状物質を混じる。
3面大路側溝(溝8)	12 2	かわらけ	5.40	4.50	1.00	淡茶色。多くの黒色砂粒に雲母を混じる。
3面大路側溝(溝8)	12 3	かわらけ	7.80	5.40	1.70	淡茶色。黒色砂粒、雲母、泥粒、白色針状物質を混じる。
3面大路側溝(溝8)	12 4	かわらけ	14.40	8.60	4.50	煤付着。灯明皿。橙色。黒色砂粒を多く混じる。
3面大路側溝(溝8)	12 5	かわらけ	12.80	7.95	3.70	淡赤褐色。黒色砂粒、雲母、泥粒、白色針状物質を混じる。
3面大路側溝(溝8)	12 6	かわらけ	13.00	8.10	3.80	淡肌色。黒色砂粒、泥粒、白色針状物質を混じる。
3面大路側溝(溝8)	12 7	火鉢	41.00			瓦質。黒色砂と白色砂を多く混じる暗灰色土。
3面大路側溝(溝8)	12 8	青白磁花环				口縁部破片。明灰白色土。二次焼成。
3面大路側溝(溝8)	12 9	白磁壺			8.60	底部破片。黒色砂粒を混じる灰白色粘質土。
3面大路側溝(溝8)	12 10	灯				
3面大路側溝(溝8)	12 11	漆器碗				口縁部破片。黒漆に、朱漆で水の葉文。
3面大路側溝(溝8)	12 12	草履芯	遺存長15.2×4.1×0.3			
3面大路側溝(溝8)	12 13	湯勺下駄				破片。
3面大路側溝(溝8)	12 14	差荷下駄の歯	9.0×13.8×3.0			
3面大路側溝(溝8)	12 15	木製円盤	径4.2×0.9			
3面大路側溝(溝8)	12 16	木製円盤	遺存径5.5×0.6			
3面大路側溝(溝8)	12 17	木製円盤	径7.5×1.0			
3面大路側溝(溝8)	12 18	木製円盤	径7.5×0.7			
3面大路側溝(溝8)	12 19	不明木製品	遺存長5.2×3.0×0.2			
3面大路側溝(溝8)	12 20	不明木製品	遺存長3.5×1.5×0.5			
3面大路側溝(溝8)	12 21	草履芯	遺存長10.6×2.3×0.4			
3面大路側溝(溝8)	12 22	著	遺存長15.8×0.7×0.6			
3面大路側溝(溝8)	12 23	著	遺存長19.9×0.7×0.5			
3面大路側溝(溝8)	12 24	著	全長24.5×0.8×0.6			
3面大路側溝(溝8)	12 25	著	遺存長17.0×0.8×0.16			
3面大路側溝(溝8)	12 26	著	遺存長18.8×0.4×0.4			
3面大路側溝(溝8)	12 27	著	遺存長16.7×0.6×0.3			
3面大路側溝(溝8)	12 28	著	遺存長18.5×0.7×0.5			
3面大路側溝(溝8)	12 29	著	遺存長19.5×0.6×0.4			
3面大路側溝(溝8)	12 30	著	遺存長17.7×0.15×0.5			
3面大路側溝(溝8)	12 31	著	遺存長20.0×0.5×0.5			
3面大路側溝(溝8)	12 32	著	遺存長19.1×0.6×0.25			
3面大路側溝(溝8)	12 33	著	遺存長22.5×0.7×0.6			
3面大路側溝(溝8)	12 34	著	遺存長24.0×0.8×0.8			
3面大路側溝(溝8)	12 35	ヘラ	全長16.0×1.0×0.8			
3面大路側溝(溝8)	12 36	ヘラ	遺存長11.4×1.3×0.3			

表1 遺物観察表(2)

遺物番号	排列番号	種別	大きさ(cm)			備考
			口径	底径	高	
3面大路側溝(溝8)	12 37	ヘラ	遺存長10.9×1.1×0.7			
3面大路側溝(溝8)	12 38	ヘラ	全長14.0×1.2×0.4			
3面大路側溝(溝8)	12 39	チュウ木	全長15.2×0.6×0.5			
3面大路側溝(溝8)	12 40	チュウ木	遺存長13.0×1.3×0.3			
3面大路側溝(溝8)	12 41	チュウ木	遺存長14.0×1.1×0.75			
3面大路側溝(溝8)	12 42	形代	全長25.7×3.0×1.5			
3面大路側溝(溝8)	12 43	枕?	全長29.0×2.5×2.3			
3面東西道路	15 1	かわらけ	10.00	8.55	1.80	手づくね。淡茶色。雲母と白色針状物質を混じえる 粉質土。
3面東西道路	15 2	かわらけ	10.20	8.80	2.05	手づくね。肌色。多くの黒色砂粒に、雲母と白色針 状物質を混じえる。
3面東西道路	15 3	かわらけ	10.00	7.70	2.00	淡茶色。黒色砂粒、白色針状物質が多く雲母を混 じえる。
3面東西道路	15 4	小札?	全長7.2×2.0×0.15			
3面東西道路	15 5	釘	遺存長4.6×0.4×0.4			
3面東西道路	15 6	釘	全長5.15×0.35×0.55			
3面東西道路	15 7	釘	遺存長5.6×0.5×0.5			
3面東西道路	15 8	釘	全長5.95×0.4×0.45			
3面東西道路	15 9	釘	全長6.3×0.35×0.45			
3面東西道路	15 10	釘	遺存長6.7×0.4×0.4			
3面塚2(ピット889)	18 1	純				
3面塚2(ピット743)	18 2	平瓦				明灰色弱粉質被密土。凸面:純目印きと思われる。 両面共に織れ跡多し。
3面塚3(ピット405)	19 1	著	遺存長19.5×0.6×0.6			
3面塚3(ピット405)	19 2	著	遺存長18.1×0.7×0.5			
3面塚3(ピット433)	19 3	著	遺存長13.2×0.8×0.6			
3面塚3(ピット632)	19 4	形代?	全長11.5×2.3×0.3			
3面塚3(ピット632)	19 5	不明木製品	遺存長11.5×3.2×0.6			
3面塚3(ピット665)	19 6	かわらけ	9.40	6.90	1.75	手づくね。淡橙色。黒色砂粒、雲母、白色針状物質 を混じえる。
3面塚3(ピット693)	19 7	かわらけ	9.40	7.00	1.90	淡茶色。多くの黒色砂粒に雲母と白色針状物質を混 じえる。
3面塚4(ピット315)	20 1	自在鉤	遺存長21.3×5.5×2.9			
3面建物1(ピット59)	22 1	かわらけ	12.20	11.60	3.00	手づくね。帶色。黒色砂粒、雲母、白色針状物質を混 じえる。
3面建物1(ピット59)	22 2	錢				元祐通寶
3面建物1(ピット286)	22 3	かわらけ	9.40	8.00	1.90	手づくね。帶色。多くの黒色砂粒に雲母を混じえ る。
3面建物1(ピット311)	22 4	かわらけ	9.40	8.00	1.30	手づくね。淡茶色。多くの黒色砂粒に雲母を少量混 じえる。
3面建物1(ピット631)	22 5	通面下版	全長22.8×11.0×1.5			
3面建物2(ピット325)	26 1	平瓦				明灰色粉質被密土。凸面:斜めの純目印き。凹面: 無制印き板でプレス。
3面塚5(ピット420)	26 2	かわらけ	9.90	7.90	2.00	手づくね。淡茶色。黒色砂粒、雲母、白色針状物質 を混じえる。
3面土塚34	29 1	深美甕or壺				灰色微密土。白色細石を多く混じえる。
3面土塚34	29 2	草軸芯	全長18.3×4.2×0.5			
3面土塚34	29 3	ヘラ状木製品	遺存長16.4×1.1×0.6			
3面土塚34	29 4	ヘラ状木製品	遺存長16.5×1.0×0.6			
3面土塚34	29 5	ヘラ状木製品	遺存長22.4×1.0×0.4			
3面土塚34	29 6	著	遺存長18.8×0.6×0.5			
3面土塚34	29 7	著	全長19.0×0.5×0.4			
3面土塚34	29 8	著	遺存長20.0×0.7×0.4			
3面土塚34	29 9	著	遺存長20.0×0.6×0.4			
3面土塚34	29 10	著	全長23.5×0.5×0.4			

表1 遺物觀察表(3)

遺物番号	排列番号	種別	大きさ(cm)			備考
			口径	底径	器高	
3面土壤34	29 11	著	全長23.8	0.4	×0.3	
3面土壤34	29 12	形代	全長17.0	2.0	×0.3	
3面土壤34	29 13	形代	全長24.7	3.6	×1.3	
3面土壤34	29 14	形代	全長31.5	2.1	×0.4	
3面土壤34	30 1	チュウ木	全長17.5	0.7	×0.4	
3面土壤34	30 2	チュウ木	全長17.8	0.7	×0.4	
3面土壤34	30 3	チュウ木	全長17.8	0.7	×0.5	
3面土壤34	30 4	チュウ木	全長19.0	0.7	×0.6	
3面土壤34	30 5	チュウ木	全長19.3	0.7	×0.6	
3面土壤34	30 6	チュウ木	全長19.5	0.9	×0.5	
3面土壤34	30 7	チュウ木	全長19.5	0.5	×0.4	
3面土壤34	30 8	チュウ木	全長20.0	0.6	×0.4	
3面土壤34	30 9	チュウ木	全長21.0	0.9	×0.5	
3面土壤34	30 10	チュウ木	全長20.7	0.7	×0.6	
3面土壤34	30 11	チュウ木	全長22.6	0.5	×0.7	
3面土壤34	30 12	チュウ木	全長25.0	1.0	×0.8	
3面土壤34	30 13	チュウ木	全長26.7	1.0	×0.7	
3面土壤34	30 14	チュウ木	全長26.0	1.2	×0.5	
3面土壤34	30 15	チュウ木	全長24.5	0.8	×0.3	
3面土壤34	30 16	チュウ木	全長23.0	1.1	×0.6	
3面土壤34	30 17	チュウ木	全長22.5	1.0	×0.5	
3面土壤34	30 18	チュウ木	全長22.5	1.0	×0.3	
3面土壤34	30 19	チュウ木	全長22.0	1.1	×0.3	
3面土壤34	30 20	チュウ木	全長21.8	0.9	×0.2	
3面土壤34	30 21	チュウ木	全長19.7	0.9	×0.3	
3面土壤34	30 22	チュウ木	全長19.8	1.0	×0.6	
3面土壤34	30 23	チュウ木	全長19.2	0.9	×0.4	
3面土壤34	30 24	チュウ木	全長17.0	1.0	×0.15	
3面土壤34	30 25	チュウ木	全長16.2	2.1	×0.3	
3面土壤34	30 26	チュウ木	全長14.1	1.4	×0.6	
3面土壤34	30 27	チュウ木	遺存長	10.5	×2.0	×0.3
3面土壤34	30 28	チュウ木	全長18.2	0.8	×0.5	
3面土壤34	30 29	チュウ木	全長18.8	1.2	×0.3	
3面土壤34	30 30	チュウ木	全長18.5	1.2	×0.3	
3面土壤34	30 31	チュウ木	全長19.4	1.8	×0.3	
3面土壤34	30 32	チュウ木	全長21.8	1.3	×0.2	
3面土壤34	30 33	チュウ木	全長22.0	2.3	×0.5	
3面土壤34	30 34	チュウ木	全長22.4	1.4	×0.2	
3面土壤34	30 35	チュウ木	全長23.8	1.5	×0.5	
3面土壤34	30 36	チュウ木	全長24.0	2.2	×0.2	
3面土壤34	30 37	チュウ木	全長30.2	2.1	×0.6	
3面土壤34	30 38	チュウ木	全長21.6	1.7	×1.0	
3面土壤34	30 39	チュウ木	全長24.8	0.9	×0.5	
3面土壤34	30 40	チュウ木	全長26.5	1.4	×0.4	
3面その他の遺構(土壤9)	33 1	青磁刻花文鏡	15.40			阿安窯系? 黄灰色粘質緻密土。釉はオリーブ色。
3面その他の遺構(土壤9)	33 2	木鍤?	全長6.9	1.7		
3面その他の遺構(土壤9)	33 3	鐵具	遺存長	7.0	4.2	×2.4
3面その他の遺構(土壤15)	33 4	かわらけ	15.00	12.90	3.50	手づくね。淡茶色。多くの黒色砂粒に雲母を混じる。

表1 遺物観察表(4)

遺物番号	標図番号	種別	大きさ(cm)			備考
			口径	底径	器高	
3面その他の遺構(土壤15)	33 6	鉢			11.30	深美。明灰色緻密土。
3面その他の遺構(土壤16)	33 6	かわらけ	9.60	8.20	1.90	手づくね。橙色。多くの雲母に、白色針状物質を混じる。
3面その他の遺構(土壤16)	33 7	草履芯	全長22.7×3.6×0.3			
3面その他の遺構(土壤30)	33 8	山皿			3.95	東遠江。暗灰色緻密土。
3面その他の遺構(土壤30)	33 9	著	遺存長16.3×0.6×0.4			
3面その他の遺構(土壤30)	33 10	著	遺存長17.0×0.5×0.6			
3面その他の遺構(土壤30)	33 11	著	遺存長17.2×0.8×0.4			
3面その他の遺構(土壤30)	33 12	著	遺存長18.4×0.5×0.4			
3面その他の遺構(土壤30)	33 13	著	全長20.2×0.6×0.6			
3面その他の遺構(土壤30)	33 14	著	遺存長20.4×0.9×0.4			
3面その他の遺構(土壤30)	33 15	著	全長20.8×0.4×0.3			
3面その他の遺構(土壤30)	33 16	著	全長22.5×0.7×0.5			
3面その他の遺構(土壤30)	33 17	著	遺存長23.8×0.8×0.4			
3面その他の遺構(土壤31)	33 18	常滑?壺or壺				灰色緻密土。
3面その他の遺構(土壤31)	33 19	刀子柄	全長121.9×2.7×1.4			
3面その他の遺構(土壤31)	33 20	草履芯	遺存長23.1×厚5.5			
3面その他の遺構(土壤31)	33 21	著	遺存長23.8×0.6×0.6			
3面その他の遺構(土壤31)	33 22	著	全長23.5×0.9×0.4			
3面その他の遺構(土壤31)	33 23	著	全長25.0×0.8×0.5			
3面その他の遺構(土壤31)	33 24	著	遺存長26.4×0.7×0.6			
3面その他の遺構(土壤31)	33 25	著	全長27.2×0.6×0.5			
3面その他の遺構(土壤31)	33 26	不明木製品	遺存長10.5×0.9×0.5			
3面その他の遺構(土壤31)	33 27	不明木製品	全長13.6×1.6×1.6			
3面その他の遺構(土壤31)	33 28	不明木製品	遺存長11.4×1.7×1.2			
3面その他の遺構(土壤31)	33 29	不明木製品	全長10.0×2.9×2.1			
3面その他の遺構(ピット310)	34 1	かわらけ	9.10	7.10	2.10	手づくね。
3面その他の遺構(ピット316)	34 2	平瓦				淡紅黄色粉質緻密土。凸面:繩目叩き後ナデ消し、凹面:斜め糸切痕。
3面その他の遺構(ピット316)	34 3	丸瓦				灰白色粉質緻密土。凸面:繩目叩き後ナデ消し、凹面:斜め糸切痕。
3面その他の遺構(ピット355)	34 4	杓子	全長19.0×5.1×0.7			
3面その他の遺構(ピット369)	34 5	かわらけ	13.80	10.30	2.90	淡茶色。多くの黒色砂粒に、雲母と白色針状物質を混じる、非常に砂っぽい。
3面その他の遺構(ピット412)	34 6	不明木製品	遺存長16.2×2.1×0.4			未製品?

表1 遺物観察表(5)

遺物番号	採取番号	種別	大きさ(cm)			備考
			口径	底径	器高	
3面その他の遺構(ピット418)	34 7	かわらけ	9.60	7.60	1.50	手づくね。淡茶色。黒色砂粒、雲母を混じえる。
3面その他の遺構(ピット418)	34 8	かわらけ	9.70	7.50	1.50	手づくね。淡茶色。黒色砂粒、雲母、白色針状物質を混じえる。
3面その他の遺構(ピット418)	34 9	漆器椀			7.30	無文?
3面その他の遺構(ピット418)	34 10	著	全長20.8×0.8×0.6			
3面その他の遺構(ピット418)	34 11	棒状木製品	全長18.5×1.0×0.6			
3面その他の遺構(ピット418)	34 12	達磨下駄	全長21.6×10.5×1.9			
3面その他の遺構(ピット471)	34 13	砾石	遺存長9.8×4.7×3.7			上野産。淡緑色泥質凝灰岩。
3面その他の遺構(ピット490)	35 1	部材?	全長16.0×5.1×3.3			
3面その他の遺構(ピット192)	35 2	達磨下駄	遺存長20.5×11.4×3.0			
3面その他の遺構(ピット664)	35 3	著	遺存長18.5×0.7×0.4			
3面その他の遺構(ピット664)	36 1	漆器皿	9.60	6.60	1.40	無文。ロクロ爪跡残る。
3面その他の遺構(ピット664)	36 2	木製円盤	全長13.6×5.0×0.8			未貫通穿孔5穴
3面その他の遺構(ピット664)	36 3	著	全長16.7×0.6×0.5			
3面その他の遺構(ピット664)	36 4	著	遺存長20.7×0.6×0.5			
3面その他の遺構(ピット664)	36 5	著	全長21.0×0.7×0.5			
3面その他の遺構(ピット664)	36 6	著	全長21.8×0.7×0.5			
3面その他の遺構(ピット664)	36 7	著	全長21.3×0.7×0.4			
3面その他の遺構(ピット664)	36 8	著	全長25.5×0.5×0.7			
3面その他の遺構(ピット664)	36 9	著	全長22.5×0.8×0.4			
3面その他の遺構(ピット664)	36 10	著	全長22.8×0.6×0.4			
3面その他の遺構(ピット664)	36 11	著	全長23.3×0.5×0.3			
3面その他の遺構(ピット664)	36 12	著	全長23.2×0.8×0.5			
3面その他の遺構(ピット664)	36 13	著	全長21.7×0.5×0.5			
3面その他の遺構(ピット664)	36 14	著	全長22.0×1.0×0.4			
3面その他の遺構(ピット664)	36 15	著	遺存長21.9×0.8×0.4			
3面その他の遺構(ピット664)	36 16	著	遺存長21.8×0.7×0.4			
3面その他の遺構(ピット664)	36 17	著	遺存長22.5×0.8×0.3			
3面その他の遺構(ピット664)	36 18	著	遺存長22.3×0.7×0.5			
3面その他の遺構(ピット664)	36 19	著	全長22.2×0.8×0.4			
3面その他の遺構(ピット664)	36 20	著	全長22.5×0.6×0.4			
3面その他の遺構(ピット664)	36 21	著	全長23.8×0.8×0.4			

表1 遺物観察表(6)

遺物番号	種類番号	種別	大きさ(cm)			備考
			口径	底径	器高	
3面その他の遺構(ピット 664)	36 22	著	遺存長23.1×1.0×0.4			
3面その他の遺構(ピット 664)	36 23	著	全長23.4×0.9×0.3			
3面その他の遺構(ピット 664)	36 24	著	全長23.7×0.5×0.6			
3面その他の遺構(ピット 664)	36 25	著	全長23.8×0.7×0.4			
3面その他の遺構(ピット 664)	36 26	著	遺存長24.8×0.4×0.6			
3面その他の遺構(ピット 664)	36 27	著	全長27.1×1.0×0.4			
3面その他の遺構(ピット 664)	36 28	著	遺存長19.3×0.7×0.3			
3面その他の遺構(ピット 664)	36 29	著	遺存長19.3×0.8×0.7			
3面その他の遺構(ピット 664)	36 30	著	遺存長20.0×0.5×0.6			
3面その他の遺構(ピット 664)	36 31	著	全長20.0×0.7×0.5			
3面その他の遺構(ピット 664)	36 32	著	遺存長20.5×0.7×0.6			
3面その他の遺構(ピット 664)	36 33	著	全長20.7×0.9×0.5			
3面その他の遺構(ピット 664)	36 34	著	全長20.5×0.7×0.7			
3面その他の遺構(ピット 664)	36 35	著	遺存長20.4×0.6×0.5			
3面その他の遺構(ピット 664)	36 36	著	遺存長20.8×0.7×0.5			
3面その他の遺構(ピット 664)	36 37	著	遺存長21.3×0.7×0.6			
3面その他の遺構(ピット 664)	36 38	著	全長21.2×0.7×0.5			
3面その他の遺構(ピット 664)	36 39	著	遺存長21.1×0.7×0.6			
3面その他の遺構(ピット 664)	36 40	著	遺存長21.5×0.7×0.6			
3面その他の遺構(ピット 664)	36 41	著	遺存長21.7×0.7×0.4			
3面その他の遺構(ピット 664)	36 42	著	遺存長21.6×0.7×0.5			
3面その他の遺構(ピット 664)	37 1	著	遺存長21.6×0.6×0.5			
3面その他の遺構(ピット 664)	37 2	著	全長21.5×0.7×0.5			
3面その他の遺構(ピット 664)	37 3	著	遺存長21.4×0.7×0.5			
3面その他の遺構(ピット 664)	37 4	著	遺存長21.5×0.6×0.6			
3面その他の遺構(ピット 664)	37 5	著	全長22.0×0.8×0.6			
3面その他の遺構(ピット 664)	37 6	著	遺存長21.8×0.7×0.8			
3面その他の遺構(ピット 664)	37 7	著	遺存長22.0×0.5×0.6			
3面その他の遺構(ピット 664)	37 8	著	遺存長22.4×0.6×0.8			
3面その他の遺構(ピット 664)	37 9	著	全長22.3×0.7×0.7			
3面その他の遺構(ピット 664)	37 10	著	全長22.5×0.6×0.3			

表1 遺物觀察表(7)

遺物番号	掉落番号	種別	大きさ(cm)			備考
			口径	底径	高さ	
3面その他の遺構(ピット664)	37 11	著			遺存長22.8×0.7×0.5	
3面その他の遺構(ピット664)	37 12	著			全長22.6×0.6×0.6	
3面その他の遺構(ピット664)	37 13	著			全長22.6×0.8×0.7	
3面その他の遺構(ピット664)	37 14	著			全長23.1×0.6×0.6	
3面その他の遺構(ピット664)	37 15	著			遺存長23.1×0.7×0.5	
3面その他の遺構(ピット664)	37 16	著			全長22.9×0.6×0.6	
3面その他の遺構(ピット664)	37 17	著			全長22.7×0.8×0.6	
3面その他の遺構(ピット664)	37 18	著			全長23.7×0.8×0.6	
3面その他の遺構(ピット664)	37 19	著			全長23.8×0.7×0.6	
3面その他の遺構(ピット664)	37 20	著			遺存長23.9×0.8×0.6	
3面その他の遺構(ピット664)	37 21	著			遺存長23.8×0.7×0.5	
3面その他の遺構(ピット664)	37 22	著			遺存長23.9×0.7×0.6	
3面その他の遺構(ピット664)	37 23	著			全長24.0×0.6×0.6	
3面その他の遺構(ピット664)	37 24	著			遺存長24.3×0.6×0.7	
3面その他の遺構(ピット664)	37 25	著			全長23.6×0.6×0.5	
3面その他の遺構(ピット664)	37 26	著			全長24.7×0.5×0.5	
3面その他の遺構(ピット664)	37 27	著			遺存長25.5×0.5×0.7	
3面その他の遺構(ピット664)	37 28	著			全長26.5×0.6×0.5	
3面その他の遺構(ピット664)	37 29	著			遺存長24.6×0.5×0.5	
3面その他の遺構(ピット664)	37 30	著			全長28.1×0.7×0.6	
3面その他の遺構(ピット664)	37 31	著			全長27.2×0.55×0.6	
3面その他の遺構(ピット664)	37 32	著			遺存長27.3×0.7×0.5	
3面その他の遺構(ピット717)	38 1	山皿		3.80	東遠型。暗灰色緻密須恵器質土。	
3面その他の遺構(ピット717)	38 2	著			遺存長20.5×0.9×0.6	
3面その他の遺構(ピット719)	38 3	盤			遺存長21.3×最大径3.1	
3面その他の遺構(ピット723)	38 4	釘			遺存長5.1×0.55×0.4	
3面その他の遺構(ピット748)	38 5	草履芯			全長22.0×5.3×0.3 加工途上品か?	
3面その他の遺構(ピット748)	38 6	著			遺存長21.5×0.8×0.6	
3面その他の遺構(ピット748)	38 7	著			遺存長19.9×0.6×0.6	
3面その他の遺構(ピット748)	38 8	著			遺存長17.8×0.5×0.6	
3面下	39 1	須恵器环蓋			口縁部破片。明灰色土。白色砂を少量混じえる。南多摩古窯址群産。	

表1 遺物観察表(8)

遺物番号	種別	大きさ(cm)			備考
		口径	底径	器高	
3面下	かわらけ	9.00	8.10	1.80	手づくね。肌色。黒色砂粒、雲母、白色針状物質を 混じえる粉質土。
3面下	杭				遺存長31.7×6.9×1.7

表2 哺乳類・鳥類分類表(1)

出土地	頭骨	環椎	軸椎	頸椎	腰椎	肋骨	寛骨	仙骨	歯	角	上顎骨	下顎骨
	r	l	u	r	l	u						
哺乳類												
イス												
溝7裏込め					1s						1per	
溝11上層	1per	1per									1per	1s
北トレンチ					4per							
溝6下層						1s						
溝6												
p 661												
2面下											1per	幼骨
ネコ												
溝11上層					1s						1per	
ウマ												
p 62									1			
溝11上層									1			
p 234												
溝6下層									1			
ニホンジカ												
溝11上層												
p 578												
溝8												
ベルト中												
イノシシ												
溝11上層												
ゾンドウイルカ												
溝11上層										1s	1s	
溝7裏込め										1s		
鳥類												
サギ類												
1面上												
ガン・カモ類												
溝11上層												
溝11下層												
1面下												
p 2												
溝7裏込め												
2面直上												
溝6下層												
2面下												
1面上												
キジ												
1面下												
不明												
溝1												
p 371												

表2 哺乳類・鳥類分類表(2)

出土地	切歯骨	翼膜骨	上腕骨	橈骨	尺骨	中手骨
	r l u	r l u	r l u	r l u	r l u	r l u
哺乳類						
イヌ						
溝7表込				1s		
溝11上層				2per	2per	
北トレンチ						
溝6下層					1per	
溝6		1s				
p661						
2面下						
ネコ						
溝11上層			1per		1per	
ウマ						
p62						
溝11上層		1s				
p234						
溝6下層						
ニホンジカ						
溝11上層		1p	1p, 1d			
p578						
溝8			1d			
ベルト中					1p	
イノシシ						
溝11上層						1per
ゴンドウイルカ						
溝11上層						
溝7表込						
鳥類						
サギ類						
1面上						1s
ガン・カモ類						
溝11上層			1s 1s	1s 1s		
溝11下層		1s				
1面下					1s 1s	
p2						
溝7表込		1s				
2面直上		1s				
溝6下層			2s			
2面下					1s	
1面上						
キジ						
1面下			1d			
不明						
溝1						
p371						

表2 哺乳類・鳥類分類表(3)

出土地	大腿骨	膝蓋骨	脛骨	腓骨	距骨	蹠骨
	r l u	r l u	r l u	r l u	r l u	r l u
哺乳類						
イヌ						
溝7裏込め						
溝11上層	1per		2per 1d			
北トレンチ						
溝6下層						
溝6						
p661			1d			
2面下						
ネコ						
溝11上層						
ウマ						
p62						
溝11上層			1p			
p234						
溝6下層						
ニホンジカ						
溝11上層			1s			
p578			1p			
溝8						
ベルト中						
イノシシ						
溝11上層						
ゴンドウイルカ						
溝11上層						
溝7裏込め						
鳥類						
サギ類						
1面上						
ガン・カモ類						
溝11上層						
溝11下層	1s					
1面下			1s			
p2	1s					
溝7裏込め						
2面直上						
溝6下層						
2面下						
1面上			1s			
キジ						
1面下						
不明						
溝1		1s				
p371		1s				

表2 哺乳類・鳥類分類表(4)

出土地	中足骨			中手・足骨			手・足根骨			基節骨			中節骨			末節骨		
	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u
哺乳類																		
イヌ																		
溝7裏込め																		
溝11上唇				2per														
北トレンチ																		
溝6下唇																		
溝6																		
p661																		
2面下																		
ネコ																		
溝11上唇																		
ウマ																		
p62																1per		
溝11上唇																		
p234																		
溝6下唇																		
ニホンジカ																		
溝11上唇																		
p578																		
溝8																		
ベルト中																		
イノシシ																		
溝11上唇																		
ゴンドウイルカ																		
溝11上唇																		
溝7裏込め																		
鳥類																		
サギ類																		
1面上																		
ガン・カモ類																		
溝11上唇																		
溝11下唇																		
1面下																		
p2																		
溝7裏込め																		
2面直上																		
溝6下唇																		
2面下																		
1面上																		
キジ																		
1面下																		
不明																		
溝1																		
p371																		

表3 魚骨分類表

出土地	椎骨	角骨	前頸骨	後頸骨	前咽蓋骨	側咽骨	上顎骨	主上顎骨	主下顎骨	主咽蓋骨	
マダイ	1										
p210											
道筋橋											
1面下	3	—	—								
上歯9											
虎2	2	—	—	—							
p189											
土嚢13		1									
2面下	1	—	—								
p621		1									
2面冠上											
1面上		—									
181		1									
6連下顎											
マダラ											
深6											
コイ科											
深11上顎											
メジロサメ											
p210		1*									

*は解剖鏡を用いたものを示す

表4 貝類分類表(1)

	干貝群集	内湾砂底群集	澗外砂底群集
1面上			
1面下	1		
1b面下			
2面上			
2面直上			
2面下	1		
3面			
3面上			
3面道路下地			
p1			
p14			
p185			
p189			
p19		1	
p2			
p20			
p201			
p21			
p23			
p234			
p235		1	
p24			
p25			
p26			
p266		1	
p27			
p272			
p28			
p285			
p286		1	
p287			
p29		1	
p30			
p30			

表 4 貝類分類表 (2)

標本番号	干潮群集		内潮泥底群集		内潮砂底群集		外潮底群集		資料出處
	アサリ	カキ	アサリ	カキ	アサリ	カキ	アサリ	カキ	
p315									1
p33									
p37									1
p394									2
p404									2
p405									3
p405									2
p409									
p418									
p418									11
p433									1
p433									
p438					1				
p459									1
p465									1
p474									1
p478									
p495									
p503									
p537						1			3
p563						1			
p576				1					
p577									
p579									
p583						1			
p600									
p606									
p609									
p617									
p621					3				
p625							1		21
p633								1	
p639				1			3		
p662								1	

表 4 項目分類表 (3)

干飼群集		内溝跡群集					溝外跡群集	
		アカニシ	バレイガタ	セガタ	イタチ	カモシカ	アカニシ	バレイガタ
p 666								
p 671								
p 672								
p 676								
p 679								
p 682								
p 693								
p 695								
p 704								
p 81								
井戸2								
塗1		1						
塗11		1						
溝11下層								
溝11上層	4							
溝2	1							
溝3								
溝3底面	1							
溝6								
溝7								
溝7底込砂								
溝8								
溝8掘り方								
土堆24	1							
土堆25								
土堆3		1	2					
土堆30								
土堆31				2				
土堆7								
道路1								
道路面		1	0	0	1	4	47	14
合計	8	0	7	0	1	111	13	0
						11	2	712

表 4 貝類分類表 (4)

	海外珍稀群集		当地群集										
	オキアトリ	アカガレイ・リスレザイ	ホタテ	サンベイキガイ	ノロウヒガイ	ベニシメイガイ	アカモク	ミツモク	イワヅシ	スズメガイ	イワヅシ	ナガハマガイ	ナガハマガイ
1面上				3									
1面下				8									
1b面下													
2面上				6									
2面直上													
2面下				1	32								
3面													
3面上													
3面道路下地				4									
p1													
p14				1									
p185													
p189													
p19													
p2				1									
p20					1								
p201						4							
p21													
p23							1						
p234								2					
p235													
p24								3					
p25									2				
p26									1				
p266										1			
p27											3		
p272													
p28													
p285												2	
p286													
p287													
p29												2	
p30												3	
p30												1	

表4 貝類分類表(5)

海外動植物集		岩手県集									
	オキアツリ アカガレイ リスレガイ キタガレイ ダンベイタガリ ベンケイガレイ マダカガレイ ラコウガレイ マダカガレイ ハマチゲアリガレイ ハマチゲアリガレイ ハマチゲアリガレイ	トコブシ	イワガニ	スガメイ	サザエ						
p315											
p33			1								
p37			2								
p394		1									
p404											
p405											
p405											
p409	1										
p418		1									
p418			8								
p433			2								
p453											
p458											
p459		2									
p465											
p474		1									
p478		1									
p495			2								
p503											
p537											
p563											
p576											
p577		1									
p579											
p593											
p600			2								
p606		1									
p609		1									
p617		1									
p621											
p625		2									
p633											
p639											
p662		1									

表4 品種分類表 (6)

	海外移出群集		岩礁群集												
	アカガレイ	ワスレガレイ	ダシソウイキウタガラフニキモウ	ベニシマウタガラフニキモウ	トコヅシ	エビアツリビ	アマダナアツリビ	トコヅシ	エビアツリビ	スガシ	ツワヨシ	アガリ	黒鰭サザエ	ヒメイカ	ホタルウオ
p666	3														
p671		1													
p672															3
p676															
p679	1	1													
p682		2													
p693															1
p695															
p704															
p81															
井戸2															
溝1															
溝11															
溝11下壁	4	1	2	3											1
溝11上壁		11	35												
溝2		11													1
溝3底面		2	7												2
溝6		15													1
溝7															4
溝7裏込め		1													4
溝8		5													2
溝8掘り方															2
土嚙24		2													
土嚙25															1
土嚙3		1	1												
土嚙30															
土嚙31															1
土嚙7															
道路1			6												
道路面			25												
合計	4	1	0	21	225	0	0	1	35	12	0	1	23	1	4
															1

表 4 月齢分類表 (7)

	皆無群集	コシダガニ群集	コケゴロモ群集	ハナビラガニ群集
1面上	ナキヘビガニ	コシダガニガニ	コケゴロモガニ	ハナビラガニガニ
1面下				
1b面下				
2面上				
2面直上				
2面下				
3面				
3面上				
3面諸路下地				
p1				
p14				
p185				
p189				
p19				
p2				
p20				
p201				
p21				
p23				
p234				
p235				
p24				
p25				
p26				1
p266				
p27				
p272				
p28				
p285				
p286				
p287				
p29				
p30				
p30				

表4 貝類分類表 (8)

	貝類群集								
p.315									
p.33									
p.37									
p.394									
p.404									
p.405									
p.405									
p.409									
p.418									
p.418									
p.433									
p.453									
p.458									
p.459									
p.465									
p.474									
p.478									
p.495									
p.503									
p.537									
p.563									
p.576									
p.577									
p.579									
p.593									
p.600									
p.606									
p.609									
p.617									
p.621									
p.625									
p.633									
p.639									
p.662									

表4 貝類分類表 (9)

		岩礁群集			
		ササヘビガイ	コシダカガイ	ムラサキイガイ	コテアコモガタ
p 666					ハリビラタカウガイ イボニシ
p 671					
p 672					
p 676					
p 679					
p 682					
p 693					
p 695					
p 704					
p 81					
井戸2					
溝1					
溝11				1	
溝11下層				1	
溝11上層		4	2	5	1
溝2					1
溝3					
溝3底面					
溝6					
溝7					
溝7裏込砂					
溝8					
溝8腹り方					
土嚢24					
土嚢25					
土嚢3					1
土嚢30					
土嚢31					
土嚢7					
道路1					
道路面					
合計	4	3	5	2	1
					1
					1

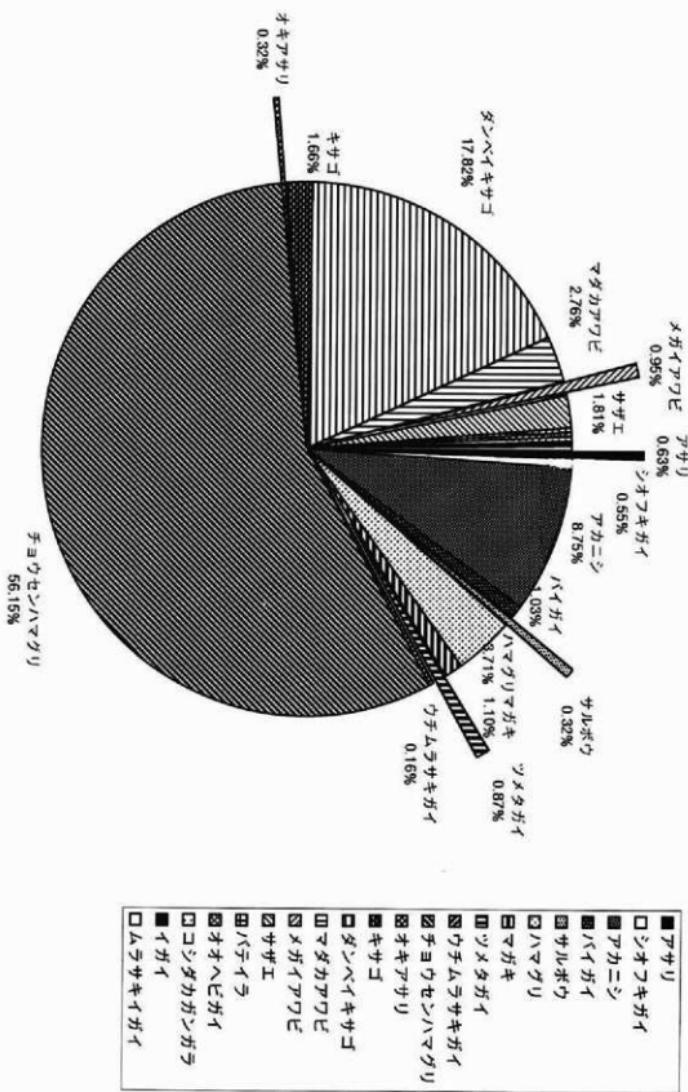


図107 出土異類別グラフ

表5 植物遺存体分類表

種	クルミ科 Juglans	クルミ属オニダルミ seiboldiana Maxim	クルミ属ヒメグルミ subcordiformis Dode	スペリヒユ科 Purslane	サクラ属 ウメ <i>Purunus Armeniaca mume</i> Sieb.	サクラ属モモ <i>Purunus Amygdalus persica</i> L.	マツ科 Pinaceae
出土地							マツ属クロマツ <i>Pinus thunbergii</i>
1面下	2					7	
1面上	1					1	
2面下						1	
2面上						1	
2面直上	1						
道路面		2		2			
3面道路下地		1					
ピット6						3	
ピット14						1	
ピット23						1	
ピット25	1						
ピット27						1	
ピット30						4	
ピット33						1	
ピット37		1					
ピット59						1	
ピット201						1	
ピット235						1	
ピット240		1				1	
ピット409						1	
ピット418	1						
ピット461						1	
ピット478						1	
ピット542						1	
ピット563						1	
ピット621	1						
ピット643						1	
ピット615						1	
ピット655						1	
ピット679						1	
溝1	1			2		2	
溝2	2					3	
溝3	1					1	
溝3底面						3	
溝6	2						
溝6下層						3	
溝7						1	
溝8						1	
溝11下層						2	
溝11上層	2					4	1
土壤3						2	
土壤19	1					6	
北トレンド						1	
ベルト中							
総数	16	5		4		63	1

第四章 自然科学分析

第1節 北条時房・顯時邸跡の中世以前の堆積層の粒度組成

1. 概要

北条時房・顯時邸跡は、鶴岡八幡宮の南方約400mに位置し、南の山比ヶ浜に向かって緩やかに傾斜している。この付近は绳文海進期に形成された海成の泥層や砂層が厚く堆積し、上部数mを淡水層や人為層が覆う。ここでは遺跡の地山となる中世及び中世以前と推定される堆積物の堆積環境を推定することを目的に粒度組成の検討を行った。

粒度組成の検討を行った地点は、YTA VI地点で堆積物はおおむね砂ないシルトからなり上位より1、2、3、4、5の5層に層位区分されている。最下部の5層(30cm以上)は黒褐色シルト質砂、4層(28cm)は暗灰色シルト質砂、3層(20cm)は灰黄色シルト質砂、2層(18cm)は黄褐色シルト質砂、1層(8cm)は暗褐色砂質シルトからなる。いずれの層も堆積構造はみられない。なお、分析地点やセクション図等については関係する章を参照されたい。

処理は試料約100gを取り恒温乾燥器で110度で乾燥し、乾重を秤量後1000ccのビーカーに入れ水を加え超音波処理、過酸化水素処理を行い分散し、4.5φの標準フルイを通して、粗粒成分と細粒成分に分離する。粗粒成分については恒温乾燥器で110度で乾燥し、標準フルイを1/2φ間隔で4.5φ(44μm)まで重ねて振とうした。細粒成分は、島津達心沈降式粒度分布測定装置により光透過法による粒度分析を行った。

測定結果は粒度分布の積算頻度表(表6)とヒストグラムにして示した(図108)。また、Friedman(1961)の積率法により平均粒径、淘汰度、歪度、尖度を算出した(表7)。計算式は以下のとおりである。

$$\text{平均粒径 } x\phi = (\sum f_i x_i) / 100$$

$$\text{淘汰度 } \sigma\phi = \sqrt{(\sum f_i (x_i - x\phi)^2) / 100}$$

$$\text{歪度 } a\phi = (\sum f_i (x_i - x\phi)^3) / 100 (\sigma\phi)^3$$

$$\text{尖度 } \beta\phi = (\sum f_i (x_i - x\phi)^4) / 100 (\sigma\phi)^4$$

f_i : 各粒度階の重量% x_i : 各粒度階の中央粒径値(ファイ尺度)

粒度分析結果はすべてファイ(ϕ)尺度で表示している。ファイ尺度では、0φ(1mm)を基準に、負ほど粗粒で正は細粒になる。ファイ尺度は $\phi = -\log_2$ (ミリメートル単位の粒度/1mm)で示される。逆に、ファイ尺度をミリメートルにするには、mm値 = $2^{-\phi}$ で換算される。また、各種の統計指標のうち、平均粒径は粒度分布全体を代表する値である。淘汰度は粒子の大きさのそろい方を示し、数値が0に近いほど粒径が良く揃っていることを示す。歪度は粒径分布の片寄りを示し、0を対称に正ほどモードが平均より粗い方に片寄り、逆に負は細粒の方に偏していることを示す。尖度は粒径分布曲線の山の尖り方を示し、係数の大きいものは突出した曲線を、逆に小さいのはへん平な曲線を示す。

2. 粒度分析結果と堆積環境に関する若干の考察

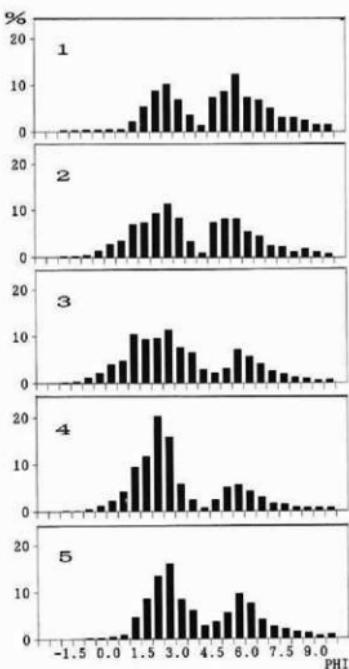
粒度分布は、いづれも双峰性(bimodal)を示し、下位のNo.5・4では粗粒成分の頻度が高いが、No.3より上位では細粒成分の割合が高くなり、No.1では細粒成分の比率が粗粒成分のそれをうわまわる。平均粒径はNo.5では4.01φであるが、No.4より上位では3.18~4.81φの値を示し、粒度分布にみられるように上位ほど細粒になる。淘汰度は2.07~2.34φと悪い。

表6 粒土分析結果

図108 粒土分布図

phi	1	2	3	4	5
-1.5	0.23	0.10	0.13	0.09	
-1.0	0.52	0.32	0.45	0.23	
-0.5	0.90	0.81	1.59	0.64	0.08
0.0	1.28	2.22	3.70	1.83	0.24
0.5	1.81	4.91	7.69	4.06	0.69
1.0	2.32	8.41	12.38	8.16	1.57
1.5	4.58	15.39	22.80	17.53	6.23
2.0	10.01	22.75	32.16	29.24	14.71
2.5	18.74	32.13	41.69	49.48	28.12
3.0	28.97	43.52	53.04	55.24	44.12
3.5	35.89	51.89	60.64	70.97	52.49
4.0	39.43	55.24	67.21	73.34	58.50
4.5	40.71	56.21	70.11	74.04	61.27
5.0	48.12	63.55	72.29	76.42	64.84
5.5	56.76	71.81	75.40	81.45	70.41
6.0	65.11	80.07	85.56	87.01	79.95
6.5	76.52	85.58	88.16	91.24	87.51
7.0	83.31	90.16	92.20	94.16	91.47
7.5	88.26	92.68	94.69	95.75	94.05
8.0	91.34	94.97	96.55	97.21	96.03
8.5	94.43	96.12	97.88	98.00	97.42
9.0	96.90	98.02	98.73	98.67	98.51
9.5	98.45	99.18	99.35	99.33	99.21
10.0	99.99	99.99	100.00	100.00	99.99
試料(gr)	73.59	78.96	79.47	88.52	50.43

(残留重量百分率)



碎屑性堆積物の粒度組成を規制する要因としては、流体の密度、流速、流量（掃流力）、水深や河床勾配などがある。さらに、周囲の地質が異なれば供給碎屑物の粒度や形状及び砂粒子の密度が関係することは言を得たない。粒度組成は、これら要因の複合の状態や作用の状態、つまり堆積過程と堆積の場の環境により規制される。また、粒度分布は運搬の様式と運搬媒質のエネルギー条件を反映することから堆積環境によって特有の粒度組成を示す可能性が期待され（碎屑性堆積物研究会編1983）、統計指標を用いて環境区分を一般化しようとした研究も少なくない（Friedman 1961；上杉1972）。

一方、碎屑粒子の運搬堆積条件についての研究は古くから知られ、Hjulstromは1939年に碎屑粒子の挙動と粒径・運搬媒質の平均速度の関係図を示した。Visher (1969) は、確率累積曲線をいくつかの線分に分け、各線分と運搬・堆積機構を論じた。また、井口ほか (1977) は水理条件が推定できる河床物質の粒度組成を検討し、粗い方より A、B、C、D の4つの正規分布集団に区分し、A集団を surface creep (循環)、B集団を saltation (躍動)、C集団を suspension (浮流)、D集団を wash load に由来するとした。森山・神辺 (1978) は A、B集団の平均粒径が掃流力の速度表示である摩擦速度ときわめて高い相関があることを示した。このように各集団の運搬様式や掃流力と粒度組成との関係については一応の決着は得られているが、掃流力の推定に関しては水理条件の算定など問題がないわけではない。

ここでは、粒子の運搬様式を推定するため井口ほか (1977) の方法により正規分布集団の分離を行つ

表7 地山の堆積物の各種統計指標

No.	平均 (ϕ)	標準偏差 (ϕ)	歪度 (ϕ)	尖度 (ϕ)	集団の割合(%)				各集団の平均粒径(標準偏差(SD); ϕ)			
					A	B	C	D	A(SD)	B(SD)	C(SD)	D(SD)
1	4.81	2.27	-0.01	2.38	3	30	11	55	0.2(1.2)	2.4(0.6)	4.0(0.9)	6.3(1.7)
2	3.92	2.34	0.31	2.36	-	48	12	40	-	2.0(1.3)	3.9(1.1)	5.4(1.9)
3	3.39	2.34	0.53	2.52	-	68	10	22	-	2.1(1.3)	5.2(0.7)	6.5(1.7)
4	3.18	2.10	0.95	3.31	-	68	10	22	-	2.3(1.2)	4.1(1.1)	6.1(1.8)
5	4.01	2.07	0.57	2.45	2	48	18	32	0.7(0.6)	2.5(0.7)	4.2(0.8)	6.1(1.7)

た。つまり、正規確率紙にプロットした粒径頻度曲線の屈曲の変換点に基づき複数の集団に区分し各集団の混合率を得た。各混合半から各集団の粒径に対する累積頻度を算定し、頻度に近似する直線を求める。直線に沿って分布しないようであれば、もう一度屈曲の変換点を検討し同じ手順を繰り返す。さらに、各集団の混合割合で合成妥当性を検定した。

各試料を構成する粒子の正規分布集団の分離結果を表2に示す。No.1と5は4つの集団から、他の試料は3つの集団から構成される。粗粒成分からA、B、C、D集団と仮称する。各集団の平均粒径は、A集団は0.2~0.7φの粗粒砂、B集団は2.0~2.5φの中細粒砂、C集団は3.9~5.2φの極細粒砂ないし粗粒シルト、D集団は5.4~6.5φの中粒シルトである。各試料の各集団の頻度は、No.4~No.1では粒度分布パターンと同様に下部では粗粒のB集団の割合が高いが、上位ほど細粒のD集団の頻度が高くなる。なおC集団は概ね同様である。また、No.5試料についてはNo.2に類似する。

堆積物の運動様式を示したBagnold (1966) のダイヤグラムでは粒径0.2mm以下では掃流様式ではなく、無次元掃流力が高くなると躍動から浮流様式に、さらに粒径0.1mm以下は浮流様式のみからなる。こうしたことから、平均粒径が0.03~0.07mmのC集団や0.011~0.015mmのD集団は浮流様式で運搬され、D集団についてはシルト以下と細粒であることからwash loadに由来するとみられる。粗粒成分のA集団やB集団については、複数の正規分布集団からなりそれが一定の運動様式で構成されているとみられることから、荷行なし躍動様式に由来する可能性が推測される。仮にA、B集団の運動様式を躍動様式とし、河床勾配を現在の地形の傾斜(0.0074)を用いて無次元掃流力の計算式($\theta = \tau'(\sigma - \rho) g d$; τ' : 掃流力、 σ : 砂粒の密度、 ρ : 水の密度、g: 重力加速度、d: 粒径)から求めた場合、水深は数cm~30cm程度になる。

このように、A、B集団から推定される水深が浅いことやC、D集団の浮流様式やwash loadの集団が多く占めることから、全般に比較的緩やかな流れの堆積環境にあったと推定される。さらに、No.4より上位では細粒化し、D集団の頻度が高くなることから營力が堆積にともない一方的に低下したとみられる。

引用文献

- Bagnold, R. A. 1966 An approach to the sediment transport problem from general physics. U. S. Geol. Surv. Prof. Paper, No. 422-I, pp. 1-37
- Friedman, G. H. 1961 Distinction between dune, beach and river sands from the textural characteristics. Jour. Sed. Petro., No. 31, pp. 514-529
- 井口正男・磯部豊彦・河村和夫 1977 「沖積河川における河床砂れきの粒度組成について(III)」『筑

波大学水理実験センター報告』No.1、1~15頁

松本秀明 1983 「海浜における風成・海成堆積物の粒度組成」『東北地理』35 1~10頁

森山昭雄・神辺敏明 1978 「1976年9月洪水で堆積した長良川河床堆積物の粒度組成」『地理学報告』47、162~176頁

碎屑性堆積物研究会編 1983 「堆積物の研究法 - 砂岩・砂岩・泥岩 - 」 地学叢書24、地学団体研究会刊

上杉 陽 1972 「粒度頻度分布からみた風成砂・海成砂の諸特徴」『第四紀研究』11 49~60頁

Visher, G. S. 1969 Grain size distribution and depositional processes. *Jour. Sed. Petro.*, No.39, pp. 1074-1106

吉川昌伸 (パレオ・ラボ)

第2節 土壌34の花粉化石

鎌倉市雪ノ下一丁目272番において行われた北条時房・顧時跡の第VI次発掘調査で、13世紀前半の土壌が検出された。この土壌より採取された土壌試料について花粉分析を行い、周辺植生について検討した。また、その形状から土壌はトイレ遺構ではないかと考えられ、花粉化石とあわせて寄生虫卵についての観察も行った。

1. 試料と分析方法

図109に土壌34の土層断面を示したが、試料採取に際し、土壌は水没したため明瞭な層準での試料採取はできなかった。しかしながら、水没以前に行われていた土層記載から試料1が②層と判断され、やや砂質の暗灰色粘土で、木の小片が多く含まれ、ウリ類の種子も観察される。試料2、3は③層と判断され、オリーブ黒色の砂質粘土で、貝殻小片が多く含まれ、やはりウリ類の種子が認められる。また、試料2の方が3よりしまりぎみである。これら3試料(1~3)について以下の方法で花粉分析を行った。

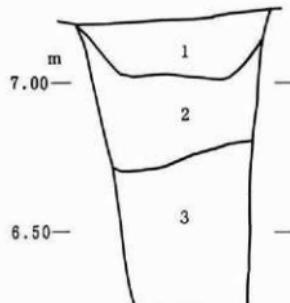


図109 土壌34の土層断面図

体積を測定した試料(約0.5~0.7m³)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトナリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混液を加え3分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え体積を測定する。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

2. 花粉分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉20、草本花粉23、形態分類で示したシダ植物胞子2の総計45である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表8に、また、その分布を図110に示した。なお、表や図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本

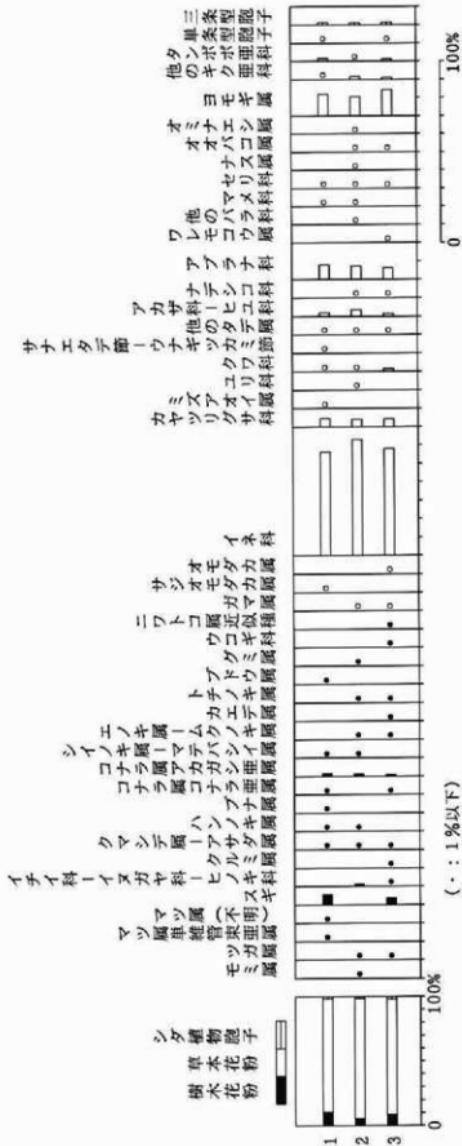
表8 土壌34の産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3
樹木				
モミ属	<i>Abies</i>	-	1	-
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	1	1
マツ属單種管束胚属	<i>Pinus subgen. Haploxyylon</i>	1	-	-
マツ属(不明)	<i>Pinus (Unknown)</i>	1	-	-
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	23	-	17
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T. - C.	-	8	2
クルミ属	<i>Juglans</i>	-	-	1
クマシデ属-アサガ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	2	5	3
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	1	1	-
ブナ属	<i>Fagus</i>	1	-	-
コナラ属コナラ属	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	1	-	1
コナラ属アカガシ属	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	7	9	5
シノノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis - Fasania</i>	3	3	-
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	-	1	2
カニデ属	<i>Acer</i>	-	-	1
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	1	1
ブドウ属	<i>Vitis</i>	1	-	-
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	-	1	-
ウコギ科	<i>Araliaceae</i>	-	-	1
ニワトコ属近似種	cf. <i>Sambucus</i>	-	-	2
草本				
ガマ属	<i>Typha</i>	-	1	1
サジオモダカ属	<i>Alisma</i>	1	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	-	1
イネ科	Gramineae	224	369	256
カヤツリグサ科	Cyperaceae	18	23	19
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	1	-	-
ユリ科	Liliaceae	-	1	-
クワ科	Moraceae	3	4	7
サンエタデ属-ウナギツカミ属	<i>Polygonum sect. Persicaria-Echinocaulon</i>	1	-	-
他のタデ属	other Polygonum	3	1	1
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	8	21	6
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	1	1
アブラナ科	Cruciferae	32	43	28
ワレモコウ属	<i>Sanguisorba</i>	-	-	1
他のバラ科	other Rosaceae	-	1	-
アメ科	Leguminosae	1	1	-
セリ科	Umbelliferae	3	1	1
ナス属	<i>Solanum</i>	-	1	-
オオバコ属	<i>Plantago</i>	-	5	1
オミナエシ属	<i>Patrinia</i>	-	1	-
日モギ属	<i>Artemesia</i>	47	61	63
他のキク科	other Tubuliflorae	3	9	5
タンボボ科	Liguliflorae	6	3	5
シダ植物				
單条型胞子	Monolete spore	1	-	2
三系型胞子	Trilete spore	5	7	6
樹木花粉	Arboreal pollen	41	31	37
草本花粉	Nonarboreal pollen	351	547	396
シダ植物胞子	Spores	6	7	8
花粉・胞子总数	Total Pollen & Spores	398	585	441
不明花粉	Unknown pollen	9	13	27

T. - C. は Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceasを示す

粉木花樹

草本花粉・シダ植物胞子



(出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

図110 土壌34の花粉化石分布図

花粉に一括して入れてある。また、花粉化石の単体標本(花粉化石を一個体抽出して作成したプレパラート)を作成し、各々にPLC.SS番号を付し、形態観察用および保存用とした。

検鏡の結果、草本花粉が圧倒的に多く、そのなかでイネ科が60%前後と最優占している。次いでヨモギ属であるが出現率は10%を越える程度であり、つづくアブラナ科は10%弱を示している。その他、カヤツリグサ科やアカザ科・ヒユ科が1%を越えて得られている。樹木花粉ではスギが最も多いながら10%には達しておらず、次ぎに多いコナラ属アカガシ亜属はやっと1%を越えた程度である。

3. 遺跡周辺の古植生

試料を採取した土壌34は道路と堀に挟まれた地点に位置しており、土壌近辺に樹木類は無かった可能性が高く、また、径65cmほどの狭い堆積盆地から樹木花粉は供給されにくい環境であったと推測される。こうしたことから、樹木花粉の少ない結果が示されたと思われるが、そのなかでスギとアカガシ亜属が樹木類では目立って検出されている。これまで鎌倉市内各地で花粉分析が行われてきたが、鎌倉では13世紀代において森林植生が大きく変わる様相が明らかになりつつある。すなわち、宇津宮辻子幕府跡(小町二丁目361番1地点)では13世紀中葉にスギ林や照葉樹林からニヨウマツ類への交代が示され(鈴木1997)、永福寺跡では13世紀前半におけるスギ林や照葉樹林の減少とニヨウマツ類の増加および後半における交代が認められている(鈴木1996)。今回の分析からは遺跡近辺丘陵部ではスギ林や照葉樹林が優勢であったと考えられ、時期はニヨウマツ類(マツ属複雜管束亜属)が増加する以前の13世紀前半頃の土壌と上記から推測される。これは出土遺構・遺物から考えられている時代と符合する結果を示している。

土壌近辺の植生については、イネ科やカヤツリグサ科、アカザ科・ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属などの雑草類が多かったと推測される。これは上記の宇津宮辻子幕府跡の溝周辺にみられる植生(鈴木1997)と同様である。そのうち最も多く得られているイネ科についてみると、その多くはイネと同様の表面模様を有しており、母植物はイネである可能性が高いと思われた。こうしたことから、予察的にプラント・オバール分析を行ったところ、イネの機動細胞珪酸体が多数観察された。これは、土壌34周辺においてイネが栽培されていたとは考え難いことから、稻藁などが捨てられた結果、土壌内にイネの花粉や機動細胞珪酸体が供給されたものと推測され、他の分類群についても同様のことが考えられる。

また、本土原はトイレ構造である可能性があり、花粉化石は糞便として土壌内に供給されたことも考えられる。上記した分類群のうちアブラナ科はそうした可能性が高いように思われ、花が食された結果、糞便として土壌内にもたらされたことが推測される。

引用文献

- 鈴木 茂 1996 「史跡永福寺跡の花粉化石(平成6年度)」「永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書-平成6・7年度-」 鎌倉市教育委員会刊、40~54頁
- 鈴木 茂 1997 「宇津宮辻子幕府跡の花粉化石」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13 平成8年度発掘調査報告」(第2分冊) 鎌倉市教育委員会刊、240~247頁

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

第3節 寄生虫卵からみた土壤34

表9および図111に同試料から得られた寄生虫卵の一覧と分布を示した。最も多く得られたのは試料2で、総数で約8,300、最も少い試料3で約2,900である。個々についてみると、多く得られているのは鞭虫卵で、試料1、2では最優占している。試料3では肝吸虫卵が最も多く特徴的であり、他の試料においても比較的多く検出されている。これら寄生虫卵の検出数について金原(1997)は、「1cc中に1,000個以上あれば糞便の堆積といえる」と述べている。先にも記したが本土からは少ない試料においても3,000個に近い寄生虫卵が観察されており、土壤の形状も考え合わせ、土壤34はトイレ遺構である可能性が高いと判断されよう。なお、鞭虫卵・蛔虫卵は野菜から、肝吸虫卵・横川吸虫卵は淡水魚からの感染が考えられる(中村ほか1994)。

表9 試料1cc当たりの寄生虫卵数

試料No.	全寄生虫卵	鞭虫卵	蛔虫卵	肝吸虫卵	横川吸虫卵
1	3355	2171	395	691	99
2	8311	5280	1467	1467	98
3	2860	1027	293	1393	147

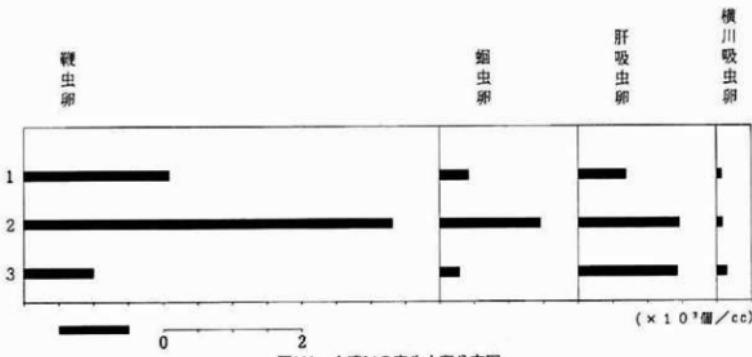
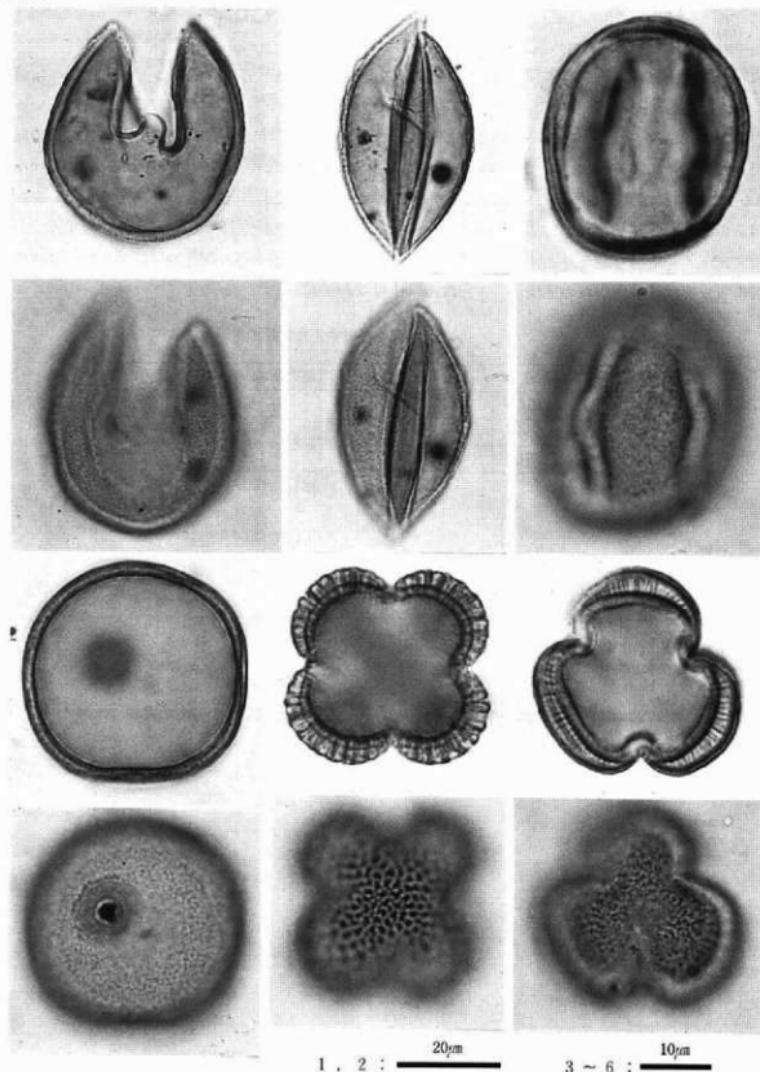


図111 土壌34の寄生虫卵分布図

引用文献

- 金原正明 1997 「自然科学的研究からみたトイレ文化」「トイレの考古学」 大田区立郷土博物館編、東京美術刊。
197~216頁
- 中村敏夫・佐藤淳夫・荒木恒治・辻 守康 1994 「医学要點双書10寄生虫病学」 第2版 金芳堂。
鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

図版1



1 : スギ PLC.SS 2096 No.2

2 : イチイ科—イスガヤ科—ヒノキ科 PLC.SS 2097 No.2

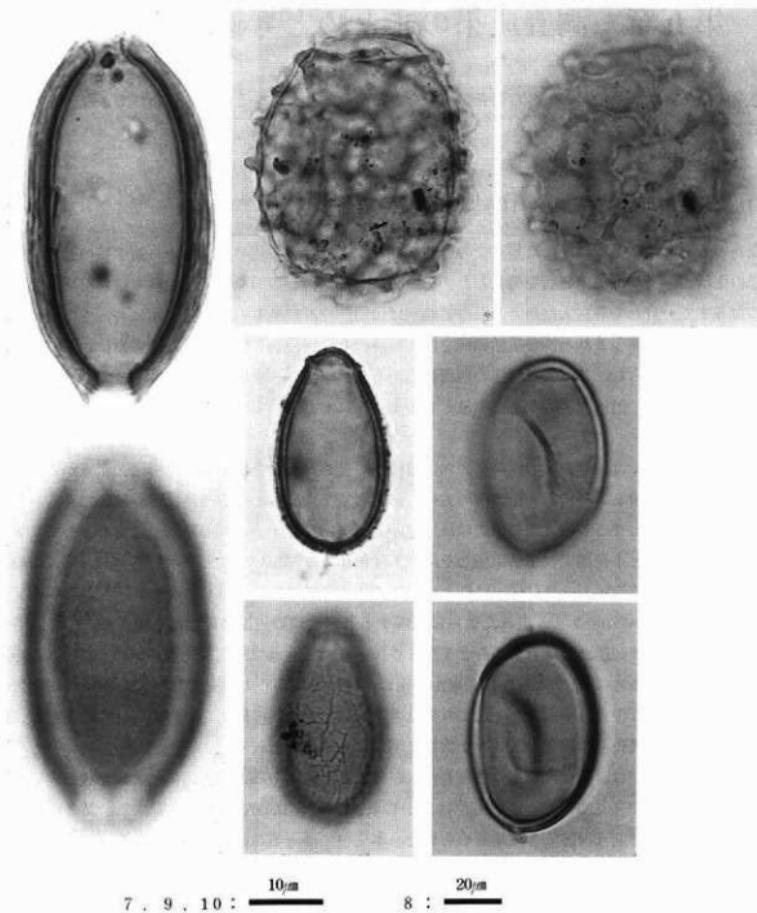
3 : コナラ属アカガシ亜属 PLC.SS 2093 No.1

4 : イネ科 PLC.SS 2095 No.1

5 : アブラナ科 PLC.SS 2094 No.1

6 : ヨモギ属 PLC.SS 2092 No.1

土壤34の花粉化石



- 7 : 線虫卵 PLC.SS 2098 No. 1
8 : 回虫卵 PLC.SS 2101 No. 2
9 : 肝吸虫卵 PLC.SS 2100 No. 2
10 : 横川吸虫卵 PLC.SS 2102 No. 3

土壤34の寄生虫卵

第五章 調査成果のまとめと考察

本章では、前章までに記してきた調査の成果をまとめるとともに、そこから現われてきた問題点について若干の考察を加える。

第1節 遺構の変遷（図112・113）

現在の若宮大路の西側に面した地点での今回の発掘調査では、古代の第4面から第1面の近世・近代までの生活面および遺構確認面を発見した。その大まかな遺構変遷のなかで、中世の鎌倉前期から第1面に至るまで一貫して若宮大路側溝と東西道路がほぼ同一位置にある一方、第1面にあってはそれらと全く異なる方向に開削された溝と生活領域を限る堀跡の存在が注意される。また、各面においても新旧の遺構変遷が認められ、若宮大路側溝の西側に広がる生活空間の利用は中世以降にあっても常に変化していた。本節では、遺構配置の変遷を単位とする文化相にもとづいて、遺構変遷を概念図を用いてまとめておきたい。

最下層の第4面では、調査区の西部にのみに遺構が発見された。発見された遺構は、北東から南西へと、以後の敷地利用および若宮大路側溝の方位とは異なる1条の溝とその西側に建つ堀跡である。後に中世鎌倉の中心軸となる若宮大路の周辺にはほとんど遺構ではなく、またこの時期の遺物もきわめて少ない。第4面の時期と中世期では生活領域とその空間軸線が異なっていたことを示している。第4面の溝5と同様の流下方位を示し、ほぼ同一時期と思われる溝が遺跡地周辺では2個所で確認されている。

調査地から南北へ270mあまり離れた地点に位置する若宮大路周辺遺跡群内鎌倉市小町2丁目5番23外地点と若宮大路周辺遺跡群鎌倉市小町2丁目4番10地点の2地点である（後者は1997年春に調査を終了したばかりである）。両地点ともに、北東から南西へ向けた溝からの出土遺物は少なく時期決定に不安を残しているが、中世遺構面下の土層より発見されている。今後の他地点での調査継続によって、時期確定とともに中世以前の鎌倉の町並みが次第に明かになると思われる。

第3面と第2面では、調査区の東にある若宮大路側溝と南端にある東西道路に囲まれた敷地内に中世に帰属する遺構群が発見された。溝の方位は北から東に25~26°振れて南北に位置する。第3面では建物で2時期、敷地を囲う堀跡で3時期認められた。本文中では、第3面を建築相による2文化相に分けて記述したが、ここでは堀の交替による3時期相の変遷を概念図に示した。大路側溝は一部の側板だけを残し木組みは除かれ、溝の掘り方が確認されている。大路側溝とは直交せずに位置する東西道路は次第に北へ移動する。そうした3面における最古の第3面aでは、堀2が東西道路方位を基本として直角に敷地の南と東を、大路側溝と道路際までいっぽいに囲う。堀に囲まれた敷地内には、次の第3面bへと引き継ぎ用いられる東西5間、南北2間の細長い建物1が配置される。堀は程なく30cmほど内側にあいつで堀3a・bに作り替えられる。その際、建物の北に敷地内の空間分離としての堀3cが新たに作られるが一時的なもので次の第3面cでは建物配置を含めて大きく敷地内空間利用が変わる。第3面cでは敷地を囲う堀4が全体に1m内側に移動し、狭く囲われた敷地内がさらに東西に空間分離されそれぞれに1間×1間の小さな建物が1軒づつ建てられる。

こうした調査地における敷地利用と遺構配置の中で注目しなければならないのは、南北道路の東端にある橋脚礎板と土壠34である。大路側溝際に位置する橋脚礎板は、東西道路から直接若宮大路へと出る

図112 連携実験概念図

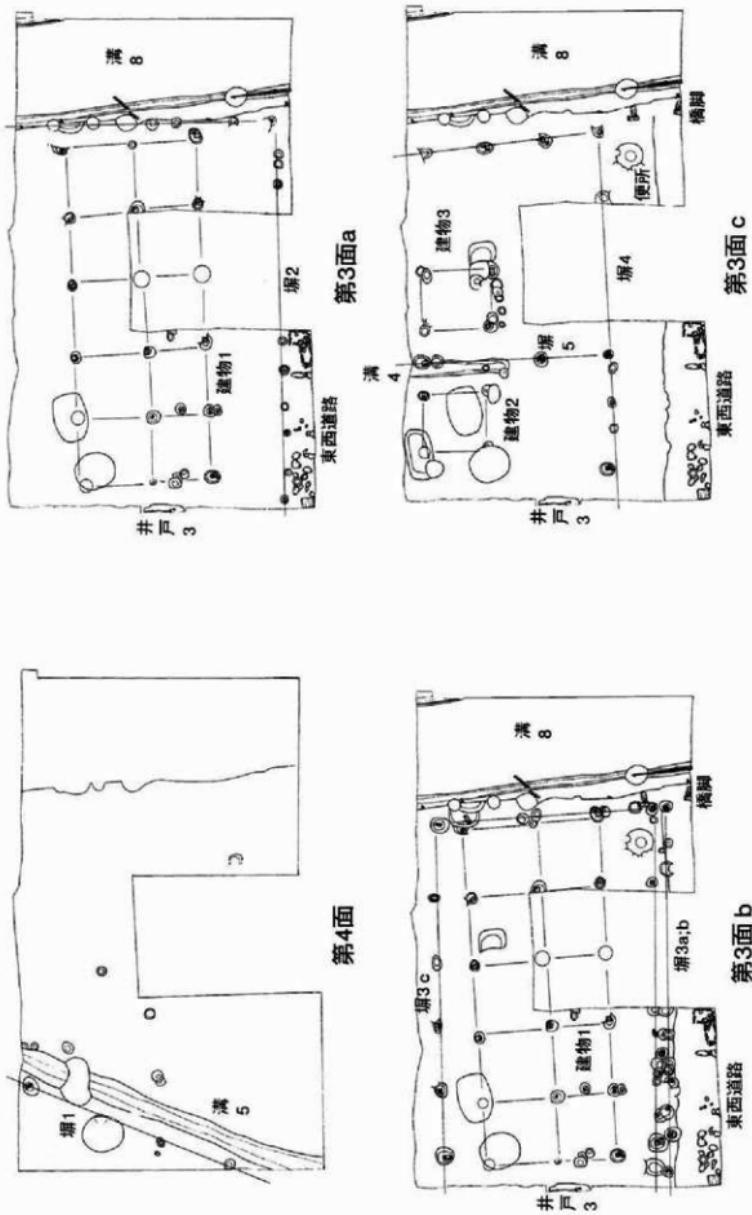
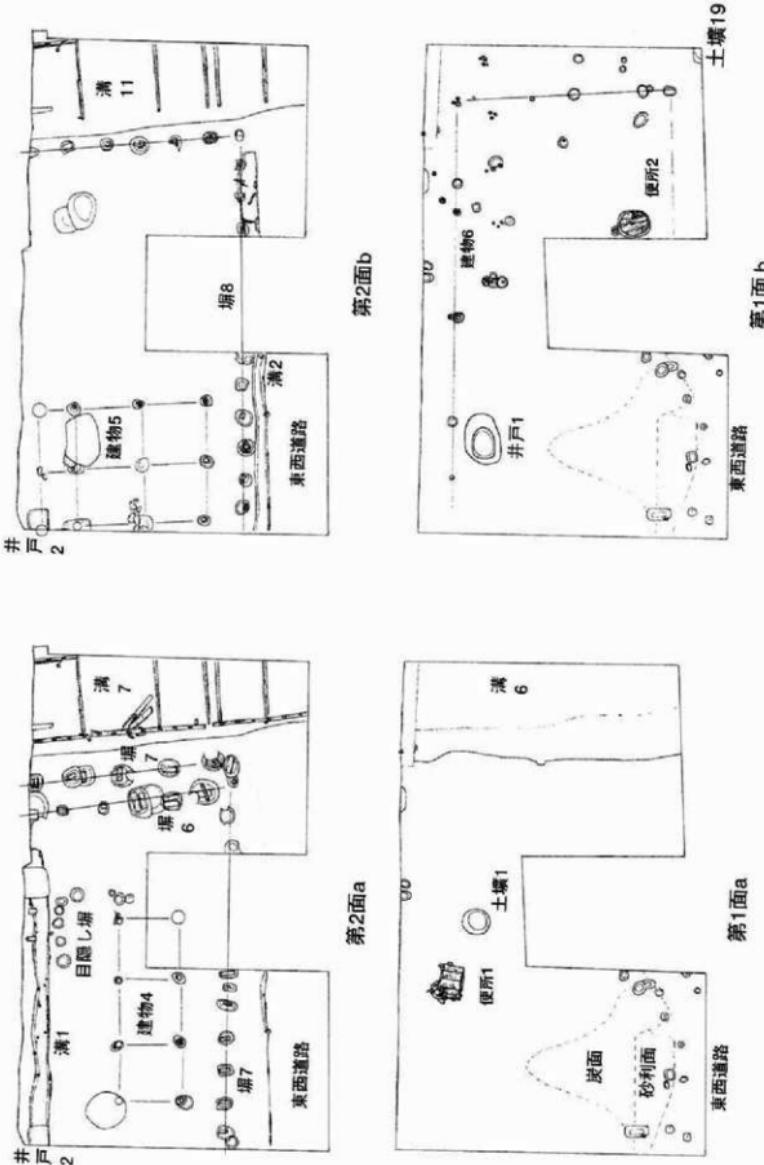


図113 造林変遷概念図2



ことのできる大路側溝を渡る橋を支えるものである。若宮大路周辺の居住空間域から直接若宮大路へと開いた門跡やそれに架かる橋は今回の調査を含めこれまでに2例発見されている。また、今回の調査区の南隣の調査地点では今回発見された東西道路に伴うと考えられる東西溝に架かる橋の跡が確認されている。これらの調査成果からは、若宮大路周囲の住人は敷地の南北のどちらかに開いた出入り口から東西道路へと出てから若宮大路に至ることができたと考えられる。中世鎌倉の枢軸道路であった若宮大路とその周囲の敷地住人の行動を考察する際の貴重な資料をこの橋脚は示唆している。また、橋脚礎板の間隔は140cmで橋脚幅は1.4mであったと考えられるが、次の第2面の若宮大路側溝に再利用された木組み梁の長さ259cm、桁の長さ379cm(1.4m×2.5)を見ると、若宮大路に架かる橋の規模は用材の規格に合わせて作られていたことも解かる。

土壇34は中世の便所跡と考えられたが、それは、若宮大路へと出る直前の橋の袂にある。本文中で述べたことであるが、この土壇は造構の切り合いから帰属する時期を第3面の中の新旧どちらに置くか問題を残しているが、最新の時期であったならば、道路脇に位置する公共の便所ということになる。

第2面も中世に帰属する。やはり大路側溝と東西道路に南と東を限られた敷地の一画として確認された。この面では建物と堀、その他の造構も2文化相に分けられる。第2面aでは、溝の上幅に桁と梁を持つ木組み側溝が残り、堀7に開まれた敷地が部分的空間分離の溝1で北を限られた中に1間×3間の建物4が建てられる。堀7の前身である堀6は第3面cの堀4とほぼ同じ位置に作られるが、大路に沿う南北の堀には出入り口が存在した可能性がある。

第2面後半の第2面bでは、東西道路に側溝の溝2が敷設され、敷地を開う堀8は大路側溝と東西道路跡へと移動して敷地の拡大が行なわれる。この敷地の拡大に伴って、大路側溝の西肩と底面は埋没して木組みの西側桁は見えなくなってしまう。この拡大された敷地内には、2間×2間に半間の張り出しを持つ建物5が敷地の西に寄って建てられる。

第2面の最終期には、若宮大路側溝が部分的ながら埋没し、浚渫されない。大路側溝の維持管理の衰退が見られたことを示している。今回の調査地点同様に中世若宮大路の側溝を発見している調査ではこれまでに3地点で大路側溝の造営にあたって御家人役による割普請を示す木簡が都合6点出土しており、若宮大路の側溝は幕府の維持管理下にあったと考えられている。出土した木簡は遅くとも13世紀末までのものと考えられており、鎌倉幕府が充分に機能していた時期に収まる。また、大路側溝中から木簡の出土した地点の調査では、木簡の出土した側溝より新しい大路側溝がそれまでより幅が狭くなっていることも指摘されている。しかし、ここでは若宮大路とその側溝の管理に変化がみられる。今回調査の第2面bに見られる敷地の拡大と大路側溝の部分的埋没もこれらの社会的変化と軋を一にしているものであると思われる。

最上層造構面の第1面は、近代に中世から近世までの文化層を削り取って造成された生活面であるため、遺物はかわらけを含む中世に帰属するものから近代に至るまでのものを混じえている。他方、造構は近世に帰属するものの大方は消失し、近代に礎石建物が建てられていた時期の堀跡や深く掘り込まれた造構だけが発見された。そのため、第1面に発見された造構は、主にその覆土と軸線の方位によって時期分類した。その結果、第1面も2文化相に細分できた。また、東西道路付近には炭が一面に広がっており、火災跡のあとかたづけを示している。

第1面aは近世に帰属する造構と思われる。調査区の南には東西道路が引き続き発見されたが、若宮大路側溝はほとんど埋め尽くされ、木組みなどは全く確認されない浅い窟みとなってしまっている。大路側溝と東西道路によって依然開まれている敷地内には、板作りの矩形の便所跡と土壇が1基のみ発見

されている。

調査地で最新の第1面bには、若宮大路側溝が全く埋没した後に、かつての大路側溝上に南北の堀、そして調査区の北端に東西の堀が作られ、東西道路を加えた三者によって三方を囲まれた敷地を確認できる。敷地内には、井戸枠のない井戸と便所が1基づつ発見された。

平安時代と思われる第4面から近代の第1面bに至る時期の生活空間が確認できた今回の調査では、第3面aにおける若宮大路側溝と東西道路の造営がこの地域での土地利用を一変させ、以後近世の第1面aまで引き継がれてきたことを示している。その後、若宮大路側溝は埋立てられ、また現在では東西道路も消失しているが、大路側溝と直角に交わらない東西道路の方位は現在の調査地周辺の地割りを規定していることが次節に掲げた地図に見て取れる。大路側溝と直交しない東西道路とはほぼ同様の方位を示す東西溝が、遺跡地の南に隣接する調査地点でも確認されている（北条時房・顯時邸跡 雪ノ下一丁目273番一ロ地点）。

第2節 若宮大路側溝と地割り（図114）

これまでに、若宮大路に面した地点での調査は20個所以上を数え、報告書も17地点に及んでいる。各調査地点では、中世鎌倉、少なくとも13世紀前半以降の鎌倉枢軸地域の中心軸であった若宮大路の側溝とその東西に広がる生活空間が少しづつ確認されている。こうした調査成果をもとに、中世鎌倉の街割や若宮大路の規模についての復元が大きく進んだ（馬渕1987、大三輪1989）。その結果若宮大路は33.6mの11丈で、その東西に広がる屋敷地も11丈を単位とするものであったろうとする見解が導きされている。それらの多くは、若宮大路を中心軸にした方形区画を想定している。ただし、今回の東西道路とこれまでに発見されている他の小路側溝とを考慮に入れるならば、街割の区画はかなり歪んだものであったと考えられている。

発見されている若宮大路、横大路、小町大路や今大路の側溝は、現在の鎌倉の町並みを支える基本道路に沿って発見されている。それぞれの側溝は現在の道路に面した敷地内に位置し、側溝を含めたかつての大路は現在の道路より広かったことがうなづける。こうした大路の走る方位やその規模を現在の鎌倉市街図や地形図に重ね合わせることで上記のような中世鎌倉の街割の解釈が生まれている。また、その底流には京都などの律令制都市における恭賀の目状方形区画町並みが下敷きにある。

しかし、今回発見された東西道路は、そうした中世鎌倉の町並みの基本をなすと考えられている若宮大路とは直交せず、方形区画論議に対して疑問を生じさせる。東西道路と若宮大路側溝の方位を中世最下層である第3面aで見てみると次のようになる。東西道路はN-60°30'-W。若宮大路西側側溝はN-25°30'-E。両者の交わる角度は86°。ほぼ直交するとも言えるが、この4°のズレを街割に適応した場合には大きな歪みとなってしまう。こうした若宮大路の軸線とズレを持つ造構が周囲の調査地点で確認できるのか、以下に各調査地点での中世最下層に確認された造構から探ることとする。

図114は、現在の鎌倉市市街地図に若宮大路周辺で調査確認された造構実測図を重ね合わせたものである。今回発見された東西道路と同様な方位を示す造構が、同じ北条時房・顯時邸跡の図114の2地点で発見されている。地点4と5である。ここで発見された造構は、おそらく敷地境の東西溝の北側掘り込み肩である。遺跡地は若宮大路から西方の今大路へと向かう現況道路の北に面しており、確認はないが、この敷地境溝の南に道路が存在していた可能性は高く、溝は道路側溝と思われる。この地点に発見されている東西側溝の方位は、今回の東西道路とほぼ同一で、中世若宮大路西側側溝とは直交せず、両

者は 86° で交わる。この東西溝の発見された地点5では地境の南北溝も確認されているが、この地境溝の南北方位は若宮大路側溝の南北方位から 3° 東へ傾いている。すなわちこの地点における東西溝とほぼ直交する 89° の角度をなしていることが分かる。若宮大路西側側溝の軸線ではなく、それからずれて交わる東西道路に付属するであろう側溝の軸線を基準として地割りが行なわれているのである。

このように今回調査を行なった若宮大路の西側に面した調査地周辺に確認できる地割りの軸線は、若宮大路西側側溝、もしくは若宮大路そのものの軸線とは直交しない東西道路やその側溝軸を基本としていることを確認できるが、こうした東西軸線方位はどのようにして生まれたのだろうか。

これを見るかぎり、現在の小町大路、今小路、横大路の道路の多くは中世におけるそれらの道路側溝と想定されているものと同一方位を示していることを確認できる。若宮大路もその例に漏れない。第一章に記したように、若宮大路の木組み側溝は嘉禄元年（1225）前後に構築されたものが最古であるとこれまでの調査で確認されているが、治承四年（1180）に由比ガ浜から現在の地に遷され、翌年には現在の地に本宮造営がなされた鎌倉八幡宮の若宮への参道は養和二年（1182）に築かれたともされており（吾妻鏡養和二年三月大十五日の条、宮田真他1983）¹¹、若宮大路の造作は鎌倉初期にまで遡る可能性がある。その一方で、若宮大路周辺への御家人を始めとする人々の集住は先の嘉禄元年以降ではなかったかともされている（松尾1993、宗臺1996）。これらの研究成果の示すところは、若宮大路が1182年の鎌倉最初期にその規模がどうであれ造られていたとしても、人々の住む生活空間の基軸でなかったことが想定される。

他方、若宮大路の西方、政所推定地の向かいに鶴岡八幡宮前面を東西に走る横大路の側溝が地点14に確認されている。現在この付近に残る横小路の字名より横小路、もしくは横大路とも推定されることもあるこの道路は中世大路側溝と同一方位を示す。現在より居住空間が寄り南側に下がった状態であるが、若宮大路の北端を横切る中世の道が同じ地点を走っていたことを確認できる。この横大路ともされる鶴岡八幡宮前面を抜ける道路は、六浦道と共に嘉禄元年以前において鶴岡八幡宮、大倉幕府、長勝寺院等の建ち並ぶ東西方向に広がる政治的空間軸を構成していたとされ（伊藤1991、松尾1992、馬淵1992）、鎌倉時代初期においては、非常に重要な道路であったと考えられる。そして、この横大路自体もしくはその側溝は、若宮大路付近で確認されていないものの、地点14での側溝を延長した若宮大路との交点角度が 86° と今回調査した地点22のほか地点5の東西道路や側溝の若宮大路となす角度と同一である。若宮大路の周辺、特に鶴岡八幡宮社頭に近い地域では、この八幡宮前面を抜ける道の方位に街割りが規定されている可能性が高いと考えられよう。

しかし、これまでに若宮大路周辺で発見されている街割りや地割りを示す遺構のすべてが若宮大路側溝と 86° 前後で交わっているわけではなく、図114の地点6と地点2に発見されている東西溝と道路は直角に大路側溝と交わる方位を示している。地点2に発見された東西道路は、中世最下層の生活面でなく、13世紀末のものとされているため、当初の地割りから移動している可能性が高い。他方、地点6は若宮大路の東に面し、北条泰時邸跡と推定される地域の一角に位置し、13世紀前半の、嘉禄元年頃の若宮大路側溝構築前後の遺構であり、鎌倉前期の姿を示している。すなわち、若宮大路と 86° の角度で交わる横大路とに囲まれた地域である若宮大路に接した東西の地域において、若宮大路の東に面する地点6の東西溝は、若宮大路に直交する地割を示し、若宮大路の西に面する今回の調査地点の東西道路は若宮大路に直交せず、横大路に平行な地割を示すように、若宮大路の東西で地割に相違のあったことを示している。

若宮大路周辺を対象としたような地割や道路の整備に関する記録は、「吾妻鏡」に次の3つがある。

①治承四年十二月十二日

…保御家人等同じく宿館を構ふ。より以降、東国皆その有道を見て、推して鎌倉の主となす。所はもとより辺鄙にして海人野叟のほかは・卜居の額これを少なうす。まさにこの時に富る間、岡巷路を直にし、村里に號を授く・しかのみならず、家屋覺を並べ、門扉軒を廻ると云々。

②養和二年三月大十五日乙酉

鶴岳の社頭より由比の浦に至るまで、曲横を直して詣往の道を造る。これ日來御素願たりといへども、自然に日を拂る。しかるに御室所御懷孕の御祈によつて、故にこの儀を始めらるるなり。武術手づからこれを沙汰せしめたまふ。よつて北条殿已下おののおの土石を運ばると云々。

③嘉祐元年十月四日

霽る。相州・武州、人々を相具して、宇津宮辻子ならびに若宮大路等を巡検せしめて、始めて丈尺を打たる。鷲岐入道（二階堂）行西泰行として、事始以下官時事、（安倍）國道朝臣に尋ね問答。今月十三日・十二月五日、両日の間に御意あるべきの由、これを申す。しかれども来廿二日は、故ニ品の百ヶ日なり。その御佛事以後にこれを始めらるべきによつて、十二月五日を用うべきの旨、治定せしめをはんぬ。旧御所を破却せらるべしと云々。今日、天火日なりと云々。

①は頼朝が鎌倉に入つてもない、1180年12月である。この記述は、頼朝の入府によって、鎌倉がそれ以前とは異なる都市となったことを象徴的に示すための意図的文言とも考えられている条である。松尾や馬淵が指摘するように、鎌倉初期の政治的空間基軸は古代以来の西の義朝の館前辺りから東は住柄天神へ至る東西の道を踏襲していたのではないかとされている（松尾1993、馬淵1993²）。しかし、こうした古代以来の道を踏襲しながらも、すでにある道を変更した可能性はあったと考えられる。なぜならば、今回の調査地点に発見された中世以前の側溝は、頼朝の入府以後に作られたことの確実な中世の東西道路や大路側溝とは全く異なる方位軸を持っていた。この中世以前の溝の年代を確定できない今、この溝によって区切られていたと考えられる居住域の占地軸線の基準がどこまで下りえるのか確定できないものの、中世に至るまで他の溝などの地割造構を確認できないことから、頼朝入府まで大きく変わることはなかつたと考えられる。この地形に大きく制約された鎌倉の土地利用が、頼朝の入府に伴う鎌倉幕府の成立によって、大きく変化したのではないだろうか。

②は、すでに記した政子の安産祈願に伴つて、若宮大路もしくはその前身を鶴岡八幡宮から海浜へと向けて造作したと述べるの養和二年（1182）の条であるが、この若宮大路がその周辺の、特に西側の地割軸線と一致しないことを見た。そして、③は御所が鎌倉初期の政治的空間軸線にあった大倉から若宮大路東側の宇津宮辻子幕府へと移転するに当たって丈尺を打つことを述べる。この「丈尺を打つ」行為については、見解の相違が研究者の間に見られるが、新たな御所の占地を決定するに当たって、測量の行われたことを示している。その後も若宮大路の東側では、宇津宮辻子幕府から若宮大路幕府へと幕府の移転がなされるが、この地域では地点6に見たように若宮大路と地割溝が直交する。また、この嘉祐元年頃に木組みの若宮大路側溝が築かれ、次第に若宮大路周辺にも屋敷地が整備され始めていたと想定される（宗基1996）。

以上の「吾妻鏡」の記述とこれまでに確認されている13世紀前半までの若宮大路周辺における地割の状況は、まず治承四年に古代以来の義朝の館前住柄天神へ至る東西の道を踏襲しながら、その全面に広がる低湿地帯に横大路に対応した地割を行い、養和二年にその中を若宮大路の最初期の道が横大路を基本とする地割りとの直交から4³ずれて通され、さらにその後嘉祐元年にいたり御所移転に伴う「丈尺を打つ」ことによって、若宮大路東側の地割は若宮大路に直行することになったと想定できよう。し



遺跡名

21. 今小路西遺跡 (扇ガ谷一丁目131番1)
 20. 若大路周辺遺跡 (小町二丁目39番地他)
 5. 北条時房・源時郷跡 (雪ノ下一丁目233番9)
 4. 北条時房・源時郷跡 (雪ノ下一丁目274番2)
 3. 北条時房・源時郷跡 (雪ノ下一丁目1273番)
 22. 北条時房・源時郷跡 (雪ノ下一丁目272番)
 2. 北条時房・源時郷跡 (雪ノ下一丁目271番1)
 1. 北条時房・源時郷跡 (雪ノ下一丁目265番3)
- (遺跡地点番号は図3と同一である)
6. 北条小町郷跡 (雪ノ下一丁目1377番7)
 8. 北条泰時・時賴郷跡 (雪ノ下一丁目374番2)
 9. 北条泰時・時賴郷跡 (雪ノ下一丁目372番7)
 11. 北条泰時・時賴郷跡 (雪ノ下一丁目369番)
 19. 宇都宮辻子郷跡 (小町二丁目134番12番)
 14. 北条泰時・時賴郷跡 (雪ノ下一丁目395番)
 2. 北条高時郷跡 (小町三丁目426番)
 18. 北条泰時・時賴郷跡 (雪ノ下一丁目432番2)

図114 遺跡周辺構成図

かし、嘉祥元年以降も幕府の移転がみられなかった若宮大路の西側はいぜんとして横大路を屋敷地分割の軸線としていたのではないだろうか。

なお、中世都市鎌倉における地割は、若宮大路を中心とする鶴岡八幡宮、御所、武家屋敷などが集中する中心部では、大路に対して溝や道路の地割構造がこの嘉祥元年以降直交する指向性を持つが、いかんせん、狭い鎌倉の沖積地では、それを貫徹することは困難、もしく是不可能であり、丘陵に沿って走る小町大路や今小路、大町大路と若宮大路は平行直交関係を保てない。各大路に面する地域では、大路になるべく直交する方位の地割を行うものの、大路と大路の間では、両大路から派生した地割軸線のつじつま合わせがなされたと考えられる（図114の中世地割軸線と現在の幹線道路と路地との関係を参照）。こうした大路と大路との軸線方位の違いから、中世鎌倉では、東西に抜ける道が「辻子」と呼ばれる「通り抜け道」であり、「街通り道」でなかったと指摘されている（山村1997）³¹。

第3節 中世と近世以降の便所出土遺物について

これまでの鎌倉における発掘調査において便所と確定されている遺構は少ない。踏板や杭などの便所施設が検出される例は別として、素掘りの土壤から出土する遺物からだけで便所と判断を下すことは困難であり、それが便所遺構を確定できない大きな原因でもある。馬渕和雄氏は鎌倉市街地遺跡での事例をいくつか挙げたうえでそれらに共通する特徴を「形態や規模にさほど統一性があるわけではないこと」「群集する傾向があること」と挙げている。これを参考にしながら本遺跡地で検出した便所遺構と思われる例を検証してみる。

本遺跡地では中世と近世以降の面で合計3箇所の便所とその可能性を指摘できる遺構を2箇所発見した。

中世3面で確認された土壤34とした便所遺構の覆土は、大量のチュウ木とわずかな有機質腐植土で覆われていた。チュウ木は300本以上出土したが、おおむね4面を製いたままの板状もしくは杭状のもので、先端が削った箸状を呈すものはほとんど混じらない。また、土壤34は調査中に便所遺構と推定できたために、堆積土の水選別をおこなった。堆積土を水中にて筋にかけ、総量2.5kgの動植物遺存体資料が得られた。目視できる範囲内の観察では、植物はウリ科の種子がとても多く、ほかに小梅、クルミ、イネ、炭化米、ブドウ属の種子、バラ科の棘状突起が確認された。詳細は第四章第2節の鈴木茂氏による科学分析を参照されたい。また、動物遺体では魚種を特定できていないが、大型魚類より小型魚類が多く、炭化したもの、一部焦げているものなどバラエティーに富む調理法で調理された様子が窺える。頭骨は完全なものは少なく、細破片のものが多かった。歯骨、鳥類骨は混じていなかった。貝類はカウントしうる大きさに成長しているものでハマグリが1点、ショウセンハマグリが1点、マダカアワビが1点、サザエが3点、バイガイが2点、ダンベイキサゴが1点出土しているが、多くはカウントできないような幼貝もしくは細破片であった。一方、土壤34に隣接して確認されたピット664の覆土も大量の箸とわずかな有機質腐植土で覆われ、土壤34と似た土質であったが、こちらはチュウ木を混じせず、200本以上の箸だけで占められていた。また、堆積土の詳細な分析を行っていないため便所とは確定できない。

同様に2面では、建物5の東側に広がる空間地の隙間に発見された擂鉢状の土壤621と571も踏み板などの便所施設は確認されず、覆土および出土遺物の様相などを考え合わせるとむしろゴミ穴の可能性が大きいと思われる。

1面において確認された遺構は前述のとおり、近現代の大規模な造成により遺構の底部しか確認できなかった。近隣の他遺跡地でも状況は変わらず、近現代に大きな造成を行っている様子が窺える。しかし、本遺跡地では、底板と僅かに残る側板のおかげで、近世～近代にかけての便所遺構が2箇所確認できた。特に、便所2ではおよそその年代を決定しうる遺物が肥前および瀬戸の染付製品を中心に一括で出土している。肥前染付については1780年～19世紀半ばまでに取まる製品で、18世紀後半から19世紀初め頃のものが一番多く出土している。しかし、瀬戸染付が共伴していることを考慮すると若干年代が下ると思われる。

その中で、図98-5に示した18世紀第2四半～3四半期に編年される肥前染付輪花小皿は、内面に手描きの岩松の文様と五弁花文が描かれ、外面にはアラビア文字風の唐草文が描かれる。大橋康二氏によれば「五弁花文はかなりクセの強い表現で描かれていることから、有田などの中心部の窯ではなく、周辺の窯で焼成された可能性があり」また、外面の唐草文は「17世紀末に始まった唐草が写されながら崩れていった文様」で「1680年代後半頃～18世紀後半」に見られる唐草文のさらに崩れた文様として捉えることができるとの御教示をいただいた。

ところで、この唐草文はアラビア文字のスクリプトにたいへんよく似た文様であり、これについては熊谷哲也氏とザキ・ナセル氏より興味深い仮説を御教示をいただいた。

イスラームの教えの一つに「契約」（六信五行に集約されるような信徒の守るべき義務を神と約束すること）と「榮光」（神との約束を守った者のみに与えられる来世での幸福）があり、イスラーム世界においては「契約」と「榮光」というように対句で用いる。出土した小皿に描かれた輪文の下側に描かれた唐草文はこの「榮光（マジドゥン）」（）のスクリプトに酷似しており、だとすれば、輪文の上側に描かれた文様は必然的に「契約（アフドゥン）」（）となりえるという仮説である。

肥前染付の手本ともなった中国染付は早くからオランダの東インド会社を通じて東南アジア、ペルシャ、ヨーロッパなどへ輸出され、イスラームの国々へ輸出されるものにはイスラームの教典であるコラーンの一節が描かれるものも焼成されていることは伝世品や海外の発掘調査による成果で知られている。また、17世紀半ばにその染付の輸出拠点が中国の政治的混乱から肥前に移行することで肥前染付の隆盛期が始まる。こういった経緯のなかで、肥前染付がオランダ商人の要望に応じてイスラーム文化圏への輸出用として何らかの手本を模倣したことも予測できるが、全く根拠の無い仮説に過ぎず、今後の事例もしくはアラビア文字の描かれた中国磁器や南蛮漆器などを調べる必要があろう。

便所1では堆積土の水選別を行い、総量650gの動植物遺存体の資料を得た。目視できる範囲での観察では、動物遺体では大型魚類の椎骨と頭骨が多く、肋骨は少なかった。一方、小型魚類は椎骨と肋骨が多いが、頭骨は少なかった。また、双方とも炭化しているものは全く見られない。小型魚類の遺存体は中世3面の便所遺構で出土した遺存体の大きさと比べると、細断片が少なく、原形を留めるものが多かった。これは中世と近世以降で大型魚類と小型魚類の調理法、もしくは食べ方の違いを示唆していると思われる。植物遺体では、ウリ科の種子がとても多く見られたが、同じウリ科の植物でも便所1ではカボチャ状の平べったい形状の種子が多く出土しており、中世便所遺構で見られたようなメロン状の細長い形状の種子は全く見られなかった。

第4節 柱穴底面に置かれるアワビについて

本遺跡地では4面ピット503、3面ピット316で礎板や柱の下に置かれたアワビもしくはその痕跡を確

認でき、注目される。食用や螺鈿の材料としたアワビ以外については、鎌倉市街地遺跡の特に7世紀から8世紀にかけての浜地周辺の遺跡地に発見されている。そこでは、アワビは土師器の上に重ねられるように配置され、時に鉄錐や甕を作った祭祀遺構から出土している（原廣志1989、大河内勉1996・1997）。その目的は現在までのところ、ただ漠然と「儀礼」のためとしか解釈されていないが、伊勢神宮での熨斗鮑作りや、宮中正月飲食に必ず用いられるなど、古墳後期以降にアワビと儀礼との関係を見て取れるることは確かである（『建武年中行事注解』）。

この飲食儀礼に用いられるアワビは、アワビに不老長寿の効能があることに起因するであろうと『本草和名』は推測している。贈答儀礼においてアワビもしくは熨斗鮑を必ず供えることも、相手に長命を願う意志を表すとも解釈できる。もしこのような解釈を拡大していくならば、今回発見された柱穴に配置されたアワビは、構築物の堅牢さ、そしてそこに住まう人々の長命を願うものであったかもしれない。

註

1. 「義和二年三月大十五日乙酉鶴居の社頭より山比の浦に至るまで、曲横を直して詣往の道を造る。これ日来御素願たりといへども、自然に日を拂る。しかるに御室所御懷孕の御祈によつて、故にこの儀を始めらるるなり。武衛手づからこれを沙汰せしめたまふ。よつて北条殿已下おのおの土石を運ばると云々」。
2. 宮田真他（1983）では、中世初期の泥岩敷き参道が鶴岡八幡宮境内現若宮前に発見されている。
3. 宗塩は、この義朝の館前通りから佐柄天神に至る東西方向を鎌倉初期の政治的軸線とする状況を鎌倉の三方ととりまく丘陵の麓と河川微高地を生活空間として利用するしかなかった地形的制約を強調している（宗塩1996）。同様に、今回調査した地点に発見された古代溝も、第4面における土層堆積状況から、中世以前の鎌倉における地形に制約されて湿地的状況をなす現在の若宮大路周辺を避けるように北から西方に延びる丘陵の麓の微高地を利用していたことを示していた。
4. 研究史の把握解釈に多くの問題点を残しているものの、さまざまな構造軸の重なり合いの指摘と「嘉祥四年」の宇津宮幕府移転以後の鎌倉を「街通りでない道」の「辻子」の成立を強調する点が当を得ている（山村亜希1997）。

参考文献

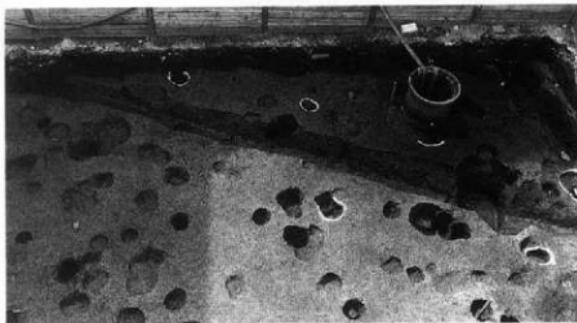
- 福田 誠 1990 「若宮大路周辺遺跡群 小町二丁目5番23外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告6』 301～316頁、鎌倉市教育委員会
- 原 廣志 1988 「北条時房・頼時邸跡 雪ノ下一丁目274番2地点発掘調査報告書」 北条時房・頼時邸跡発掘調査団
- 原 廣志 1988 「北条時房・頼時邸跡 雪ノ下一丁目273番口2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4』 9～76頁 鎌倉市教育委員会
- 原 廣志 1989 「北条時房・頼時邸跡 雪ノ下一丁目271番-1地点発掘調査報告書」 北条時房・頼時邸跡発掘調査団
- 原 廣志他 1990 「北条時房・頼時邸跡 雪ノ下一丁目265番3」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6』 91～128頁 鎌倉市教育委員会
- 原 廣志他 1993 「山比ヶ浜中世集団墓地遺跡（No.372）山比ヶ浜二丁目1034番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9』 第1分冊 鎌倉市教育委員会
- 原 廣志他 1996 「北条高時邸跡 小町三丁目426番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12』 24～120頁

鎌倉市教育委員会

- 伊藤 正義 1991 「鎌倉・大倉幕府から宇都宮辻子幕府へ－御所の破却と政権の再生－」「『吾妻鏡』の総合研究」 55~66頁
- 馬渢 和雄 1985 「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目371番-1 地点発掘調査報告書」 鎌倉市教育委員会
- 馬渢 和雄 1987 「北条時房・頼時邸跡 雪ノ下一丁目233番9他地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書3」 5~100頁 鎌倉市教育委員会
- 馬渢 和雄 1992 「中世鎌倉における谷戸開発のある側面」「鎌倉」 No.10 17~24頁
- 馬渢 和雄 1995 「第四章 まとめ 2. 便所遺構について」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11(第1分冊)」 121~124頁 鎌倉市教育委員会
- 馬渢和雄他 1996 「北条小町邸跡(泰時・時頼邸) 雪ノ下一丁目377番7地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12」 119~310頁 鎌倉市教育委員会
- 松尾 利次 1992 「宇都宮辻子御所考」「山形大学史学論集」12
- 松尾 利次 1992 「武家の「首都」鎌倉の成立－將軍御所と鶴岡八幡宮を中心とした「都と郷の中世史」 96~140頁 吉川弘文館
- 宮田 真他 1983 「鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書、直会殿用地発掘調査報告書」「鶴岡八幡宮、直会殿用地発掘調査団
- 大三輪龍彦 1989 「鎌倉の都市計画－政治都市として・軍事都市として」 石井進・大三輪龍彦編 「よみがえる中世3・武士の都鎌倉」 44~51頁 平凡社
- 大河 内勉 1996 「由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書・鎌倉市由比ヶ浜四丁目1134番地点における古代および中世遺跡の埋蔵文化財調査報告」 第1分冊 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団
- 大河 内勉 1996 「12. まとめ・出土土器の変遷と各種遺物について 貝」「由ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書(第1分冊・古代編)」 242~245頁 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団
- 大河 内勉 1997 「由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書-由比ヶ浜四丁目1136番地点-」 第1分冊 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団
- 大田区立郷土博物館 1996 「考古学トイレ考」
- 宗臺 秀明 1996 「中世都市と排水施設」「日本考古学」 第3号 101~111頁 日本考古学協会
- 宗臺 秀明 1992 「中世、14世紀かわらけの変遷」「考古論叢 神奈川」 第1集、82~102頁 神奈川考古学会
- 田代郁夫他 1987 「北条時房・頼時邸跡 雪ノ下一丁目233番9他地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書3」 101~125頁 鎌倉市教育委員会
- 山村 亜希 1997 「中世鎌倉の都市空間構造」「史林」 八十卷二号 42~82頁 京都大学史学科研究室
- 和田英松著・所功校訂 1989 「建武年中行事注解」「講談社学術文庫」



a. 遺跡地調査前（手前は若宮大路）

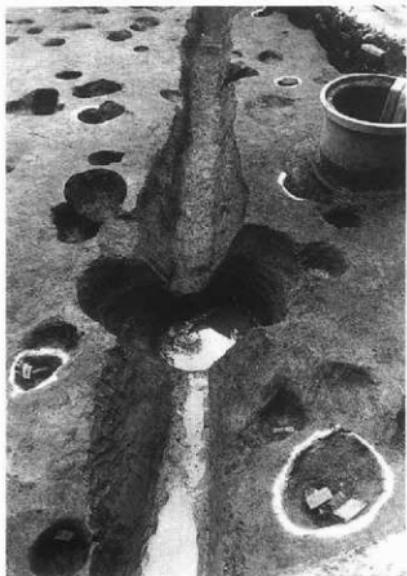


b. 第4面溝5と堀1（東から）

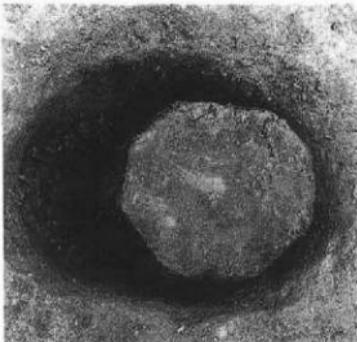


c. 溝5土層断面（南から）

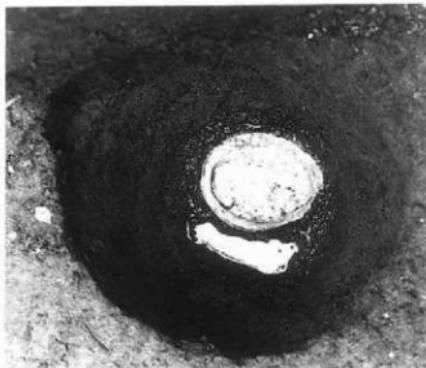
図版4



a.溝5と堀1【向かって右の柱穴列】(北から)



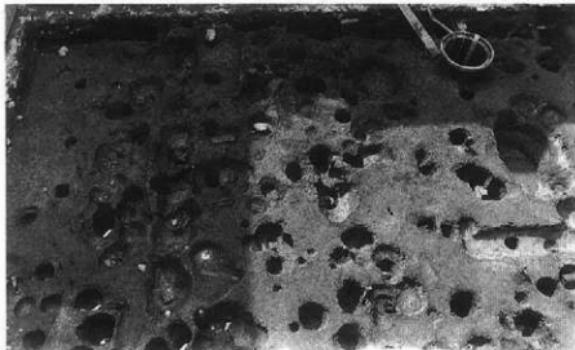
b.堀1ピット516 (上段:上から、下段:南から)



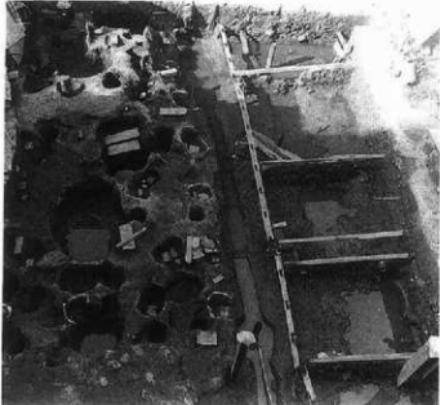
c.堀1ピット503底面アワビ出土状況

図版 5

a.第3面西側（東から）

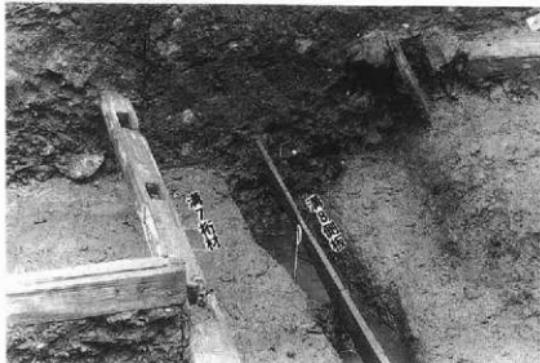


b.第3面東側（西から）



c.第3面東側（南から）

図版 6

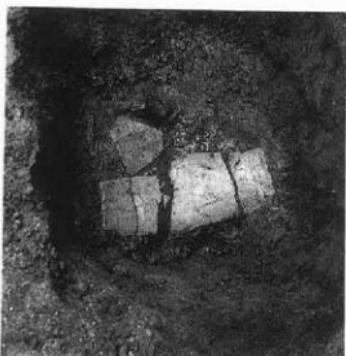


→橋脚礎板

a.大路側溝8と7（北から）



b.屋根形橋脚礎板の平面形と側面形



c.ピット316底面丸瓦



d.土壙34（便所）



e.建物1ピット353便所

図版 7



a.第2面西側（東から）

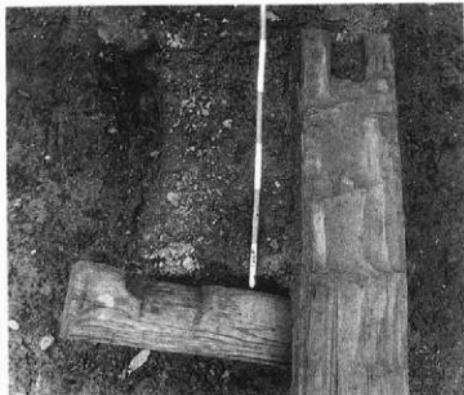


b.第2面東側（西から）



c.第2面西端部の柱穴と
鉄散乱状況

図版 8



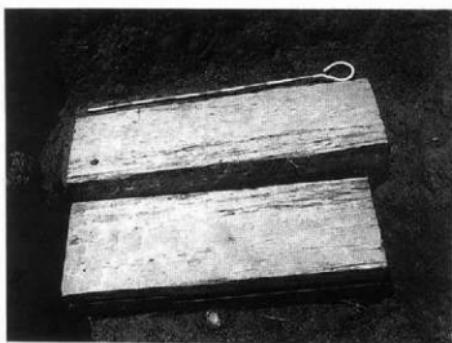
a.溝7、桁と東柱



b.溝7、桁と東柱（北から）



c.ビット437櫛板

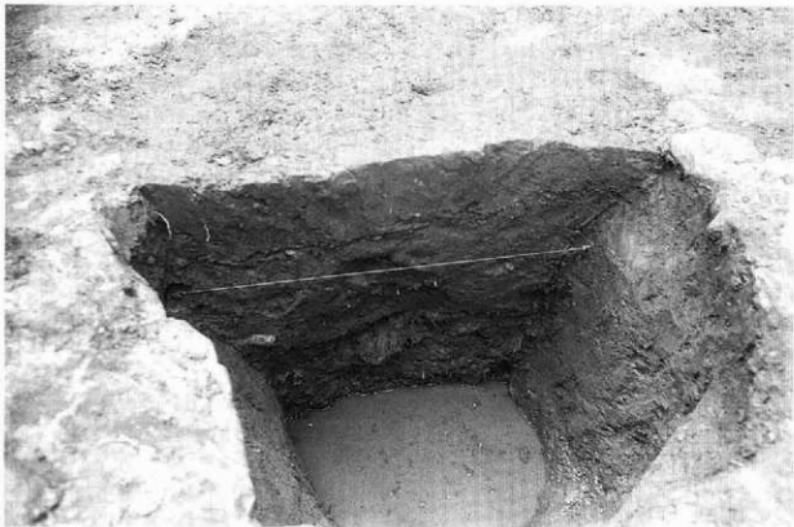


d.堀6 ビット600櫛板

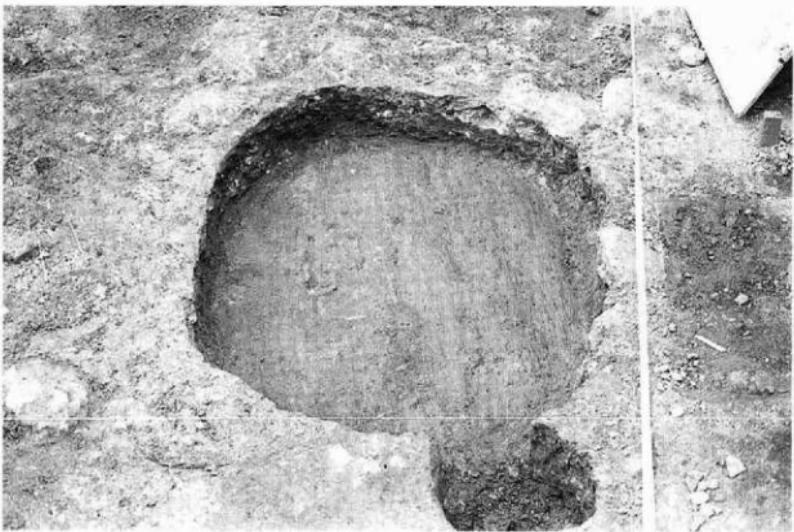
図版9



図版10

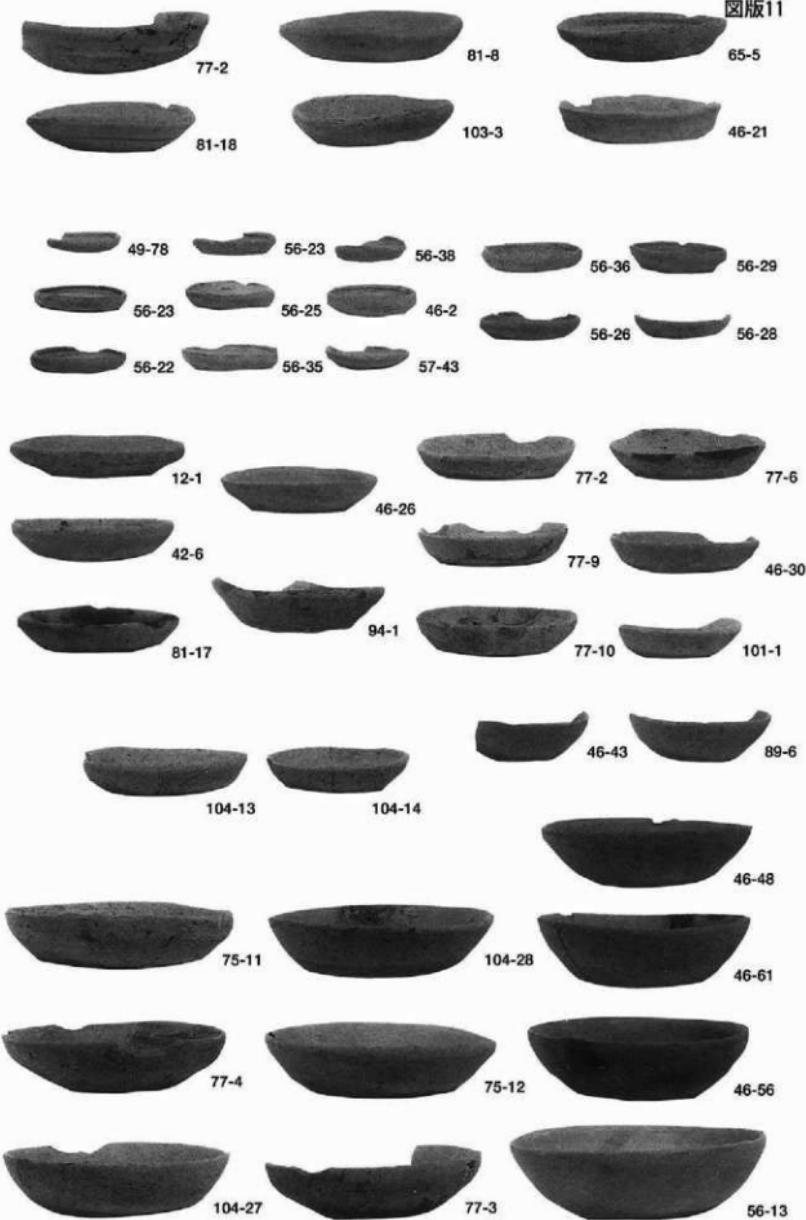


a. 井戸1 (東から)



b. 便所2 (東から)

図版11



図版12



56-48



56-47



56-45



56-44



46-70



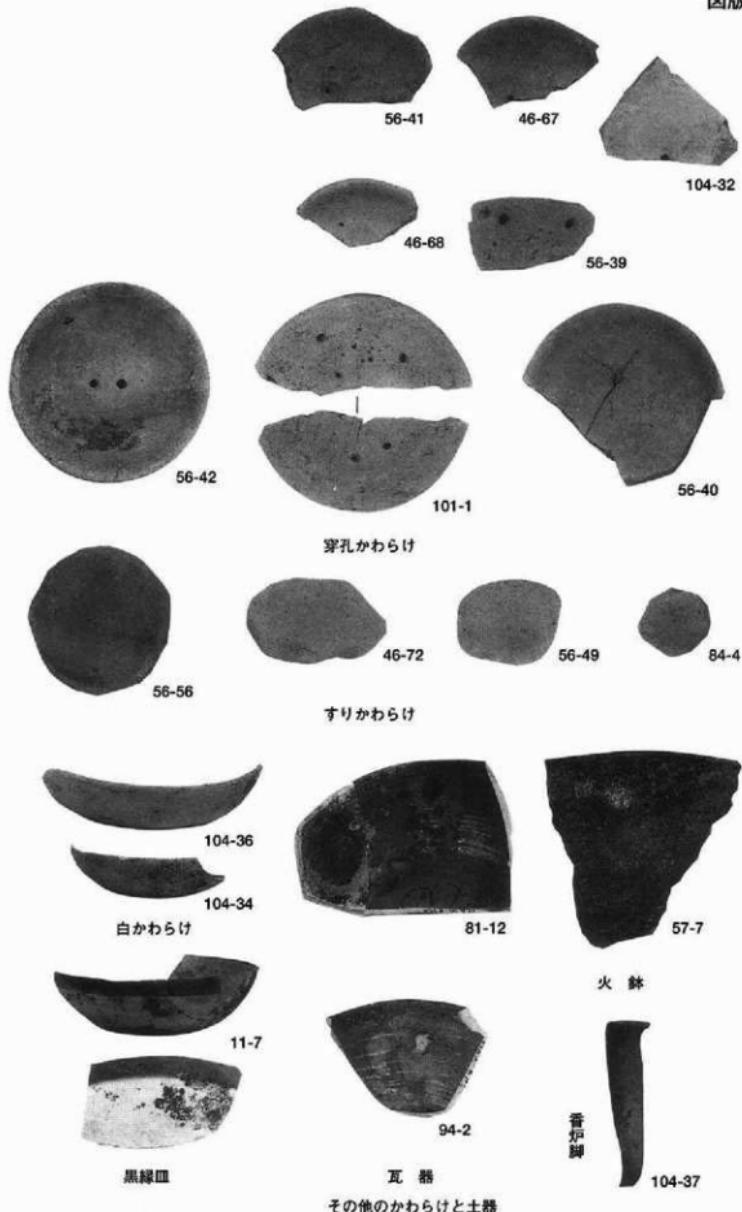
56-48



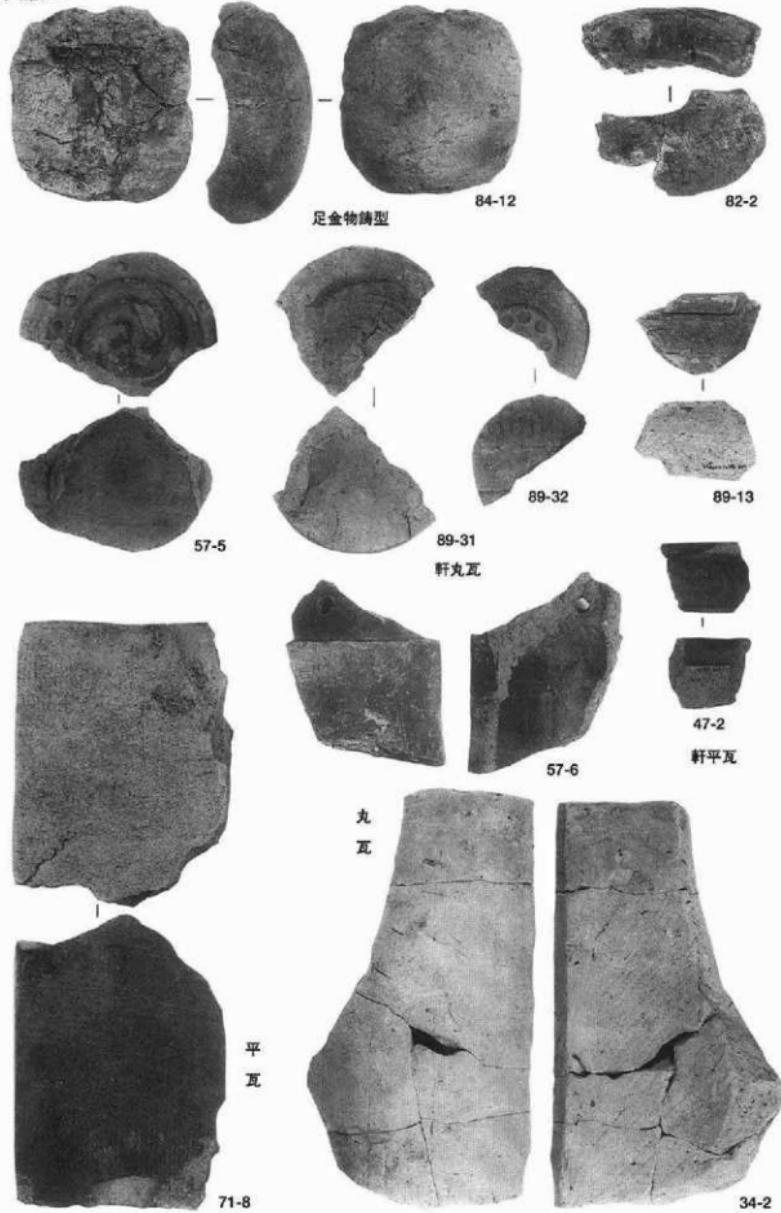
56-46

墨書きわらけ

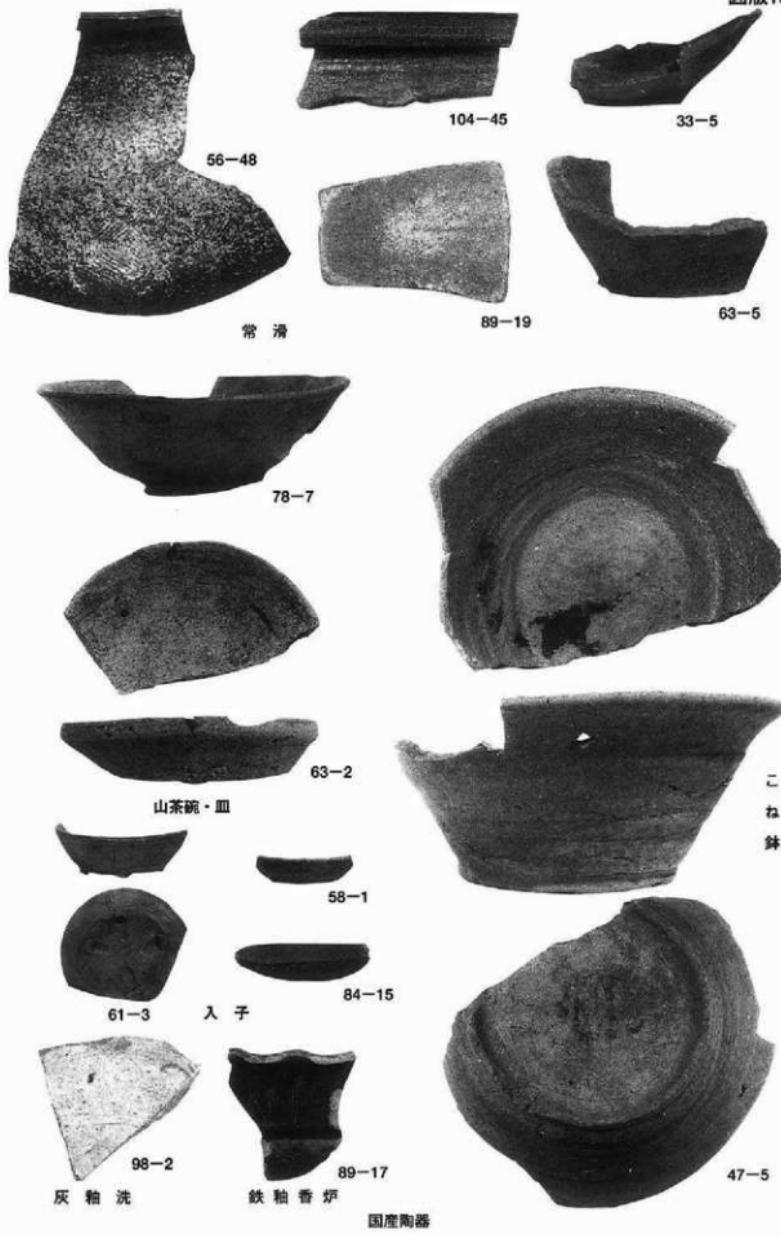
図版13



図版14



図版15



国産陶器

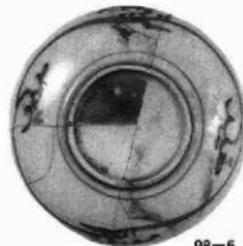
图版16



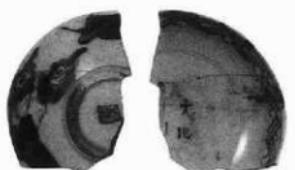
84-21・22



105-1



98-5



98-11



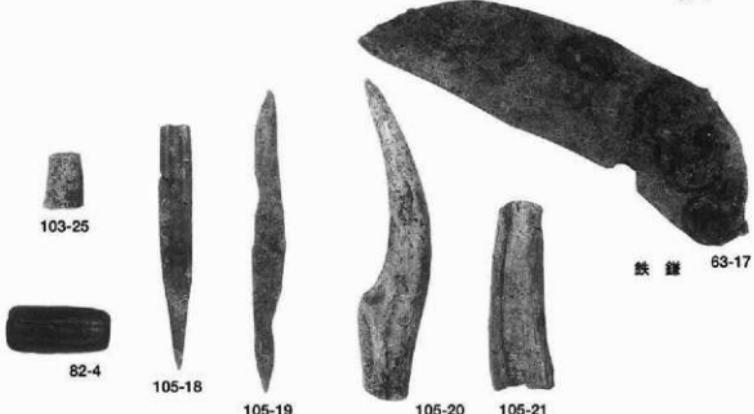
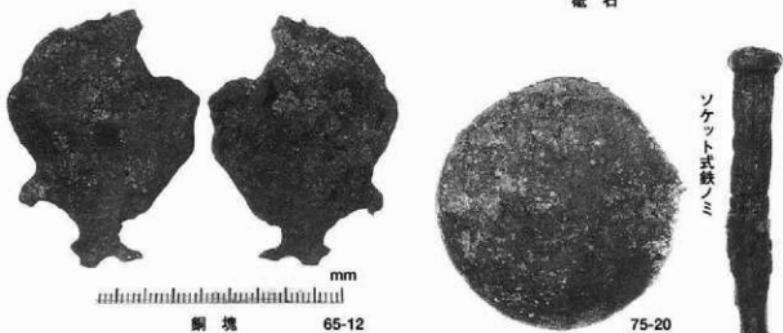
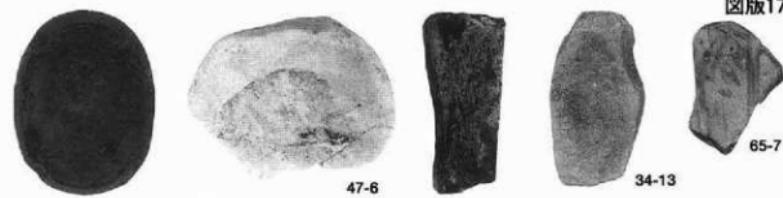
98-6



98-8

舶載・国产磁器

図版17



骨角製品
石・金属・骨角製品

図版18



22-5



下 駄

34-12



75-22



櫛

61-5

脛骨



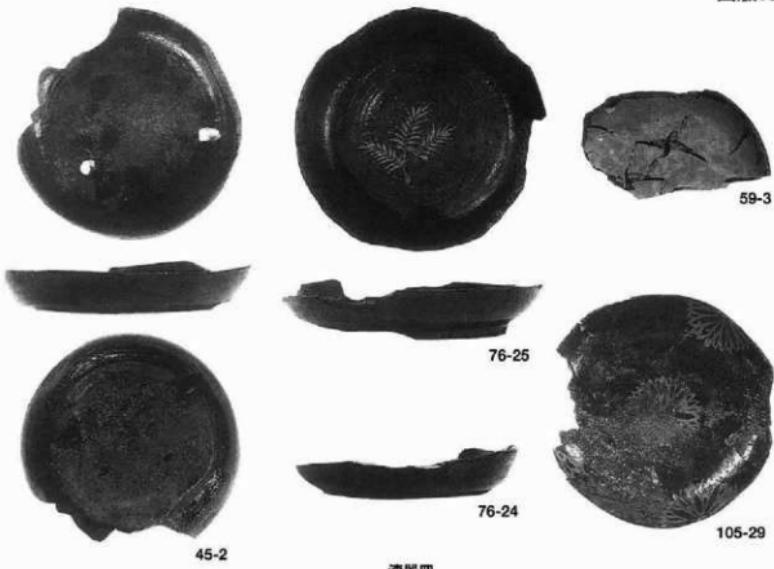
59-2

しゃもじ

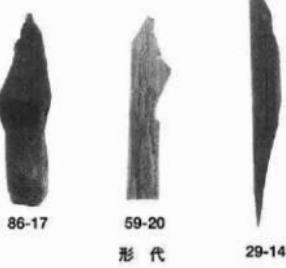


34-4

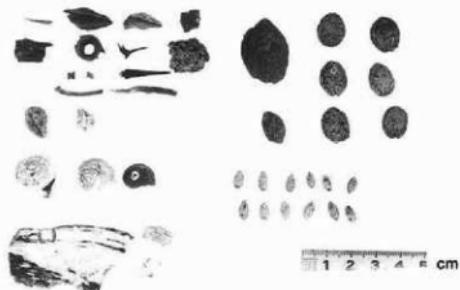
木製品 (1)



漆器四



図版20



中世便所3出土



近代便所1出土

自然遺物

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	
巻次	14
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	宗並富貴子
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-0012 神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1998年3月

ふりがな 所取遺跡名	しょざいいち 所 在 地	コード		北緯 度	東経 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほうじょときふさ・ あきときていあと 北条時房・頼時邸跡	かながわけんかまく らしゆきのした 神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目272番	204	No.278			1996.4.19 1996.7.19	120m ²	個人住宅建設

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北条時房・ 頼時邸跡	都市	古代 鎌倉時代 江戸時代 近代	道路3 溝8 便所3 掘立柱建物6	かわらけ、常滑、瀬戸、源美、肥前染付、青白磁、白磁、瓦質製品、墨書きこね跡、鉄製品等	中世若宮大路側溝と、それに交わる道路に区切られた敷地の確認。大路側溝を渡る橋、および橋の袂の便所

ほうじょう こ まちていあと やすとき ときよりてい
北条小町邸跡（泰時・時頼邸）(No.282)

雪ノ下一丁目370番1地点

例　　言

1. 本報は、神奈川県鎌倉市雪ノ下一丁目370番1地点における店舗併用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の内、国庫補助事業による自己用住宅部分の報告である。
2. 発掘は鎌倉市教育委員会が実施し、田代郁夫が担当した。
3. 発掘調査は、原因者負担事業分と並行して行った。調査期間は原因者負担分を平成8年2月29日より4月21日まで、国庫補助事業分を4月22日から5月14日までとした。
4. 本報告は全調査面積110m²のうち、自己住宅範囲にあたる調査区西側の40m²の調査報告である。ただし中世期の若宮大路側溝については、自己住宅範囲よりも若干広がって確認されたので、遺跡の理解を損なわないため、原因者負担事業成果も加味している。また下層のIV・VI面の確認は、部分的で、国庫分調査範囲内に発見できなかった。
5. 発掘調査團の構成は以下の通りである。

調査担当者 田代郁夫（東国歴史考古学研究所所長）

調査員 土屋浩美・浜野洋一（以上、東国歴史考古学研究所研究員）

調査補助員 遠藤雅一・渡辺王夫・高橋健一郎・岩崎卓治（以上、東国歴史考古学研究所員）。

上田求実・島雄幸・森かおり・村上和久・小針恵子・小川婦美子・高井和彦・澤野麻美・松浦久美子・田代眞・田中克巳・青木綾子・荒井ソノ・石井ちず子・蒲谷由利子・成田サキ。

調査協力 藤枝正義・吉本修三・田口康雄・池田義春・照井三喜・沼上三代治・岸親男・柴崎栄輔・渡辺久夫・千葉盛男（以上、鎌倉市高齢者事業団）。

6. 本報告の作成にあたって、遺物の項を宗臺富貴子が、遺構を土屋浩美が執筆し、土屋浩美が編集した。また遺物実測、トレース及び図版作成は宗臺秀明・宗臺富貴子・笠原さやか・馬瀬直子・小野和代が行い、遺構のトレースと図版の作成を深尾義子が行った。
 7. 本報告で使用した中世遺構全景写真是、木村美代治（鎌倉考古学研究所）がリモコン式高所撮影装置を用いて撮影した他、個別の遺構写真を土屋浩美と上田求実が、遺物写真を笠原さやかと馬瀬直子が撮影した。
 8. 発掘調査及び本報告の作成に際し、下記の方々よりご教示・ご協力を賜った。記して深く感謝いたします（敬称略・順不同）。
- 上田薰（神奈川県教育委員会）、上本進二（県立旭高校）、大三輪龍彦・河野真知郎（鶴見大学教授）、桜井隼也（慶應義塾大学講師）、手塚直樹・齊木秀雄・宮田眞・大河内勉・福田誠・木村美代治・原廣志・菊川英政・汐見一夫（鎌倉考古学研究所）、佐藤仁彦（逗子市教育委員会）、鎌倉市高齢者事業団、高橋組。

本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	273
第二章 調査の経緯	276
第1節 調査に至る経緯	276
第2節 測量方眼の設定	276
第3節 調査経緯	276
第4節 堆積土層	279
第三章 発見した遺構と遺物	282
第1節 I面	284
第2節 II面	286
第3節 III面	289
第4節 IV面	292
第5節 V面	295
第四章 まとめ	299

挿図目次

第1図 遺跡地周辺地図	274
第2図 調査地点測量方眼設定図	277
第3図 調査区の地理学的位置	278
第4図 調査区壁土層堆積図	280
第5図 表採遺物	282
第6図 I面上出土遺物	283
第7図 I面全測図	285
第8図 I面若宮大路出土遺物	286
第9図 I面若宮大路側溝出土遺物	286
第10図 I面下出土遺物	286
第11図 II面全測図	287
第12図 II面若宮大路出土遺物	288
第13図 土壙3	288
第14図 土壙3出土遺物	289
第15図 II面下出土遺物	289
第16図 III面全測図	290
第17図 III面若宮大路側溝出土遺物	291
第18図 IV面下出土遺物(1)	293
第19図 IV面下出土遺物(2)	294
第20図 V面全測図	296
第21図 V面若宮大路側溝東側肩部	297
第22図 V面若宮大路側溝出土遺物	298
第23図 V面直上出土遺物	298
第24図 V面下出土遺物	298

表目次

表1 遺物観察表(1)	301
表2 遺物観察表(2)	302
表3 遺物観察表(3)	303
表4 遺物観察表(4)	304

図版目次

図版 1 調査区標準堆積土層断面図 (調査区南壁)		図版 5 若宮大路側溝土層断面図 (右側が若宮大路道路構成土)	
I面全景(東より望む).....	307	III面縦層検出状況	311
図版 2 I面検出状況		図版 6 III面縦層遺物出土状況	
I面若宮大路及び側溝	308	V面全景(西側より望む).....	312
図版 3 I面若宮大路道路面		図版 7 V面若宮大路側溝東側肩部	313
II面検出状況	309	図版 8 出土遺物(1).....	314
図版 4 II面若宮大路及び側溝		図版 9 出土遺物(2).....	315
II面若宮大路道路面	310		

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

遺跡地は鎌倉市雪ノ下一丁目370番1、鶴岡八幡宮の南約150mの若宮大路東側に面して位置する。こより東方320mには滑川が南流する。遺跡地の現地表面は標高8.8mである。

遺跡地周辺には、鶴岡八幡宮から南方の海岸にむけて南北に「若宮大路」が縱貫し、その鶴岡八幡宮前を東西に「横大路」が、また若宮大路東方約200mを南北に「小町大路」が走る。この横大路、若宮大路、小町大路に囲まれた一辺約200mの区画は、神奈川県遺跡台帳では「北条小町邸跡」(鎌倉市No.282)として登録されており、若宮大路西側に比定される「北条時房・顯時邸跡」と大路を挟んで向かい合っている。当該地はこの「北条小町邸跡」の若宮大路に面した一角にある(第1図)。

『鎌倉市史』によると、「北条小町邸跡」は鎌倉時代中期～後期に執権北条泰時・時頼の正邸のあった場所とも、若宮大路幕府があった場所とも述べられている。また遺跡地のある大路東側には宇津宮辻子幕府が造営されたと記されている。当時の幕府の枢要な建物群はいずれも若宮大路東側に位置していたことになる。

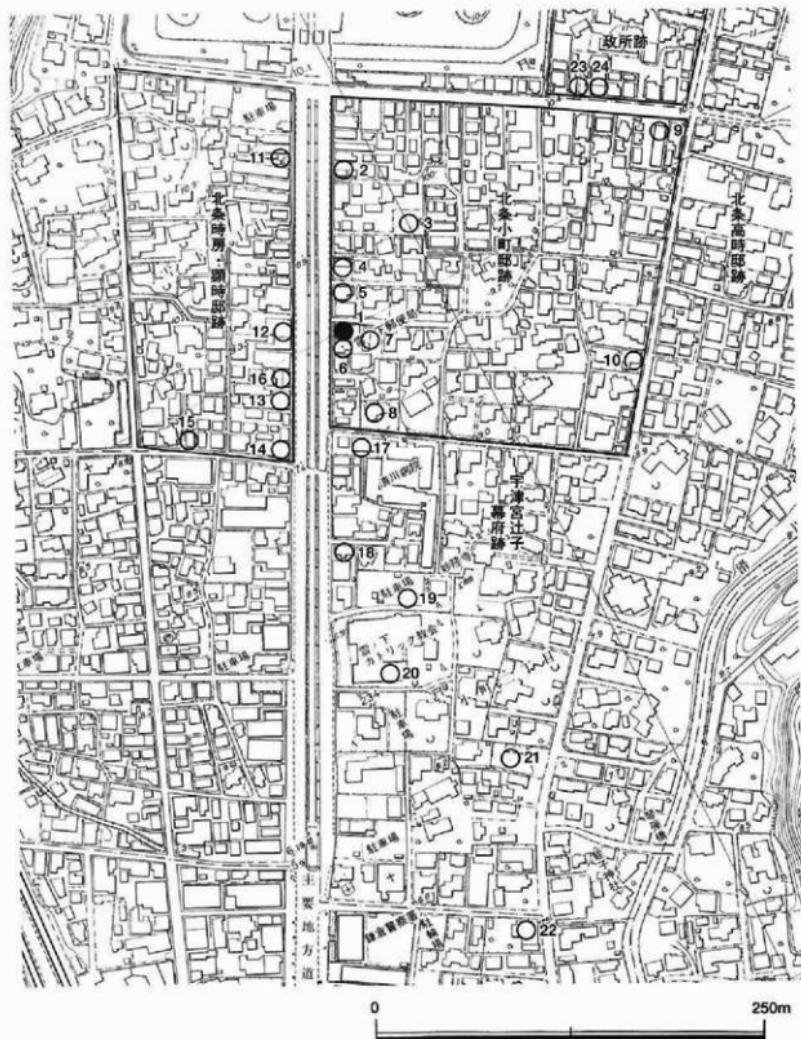
『吾妻鏡』によれば、幕府は当初大倉にあったが、建保5年(1217)に焼失したため、嘉祐元年(1225)に政子の死とともに宇津宮辻子に移転し、さらにわずか11年後の嘉祐二年(1236)には土公の崇りを忌避するという理由で、「若宮大路東側」に移転がなされたという。この宇津宮辻子幕府の規模について『吾妻鏡』には、「東西256丈5尺、南北61丈」とある。しかし松尾剛次氏はこの『吾妻鏡』に記された数値は御所の大きさではなく、方達にともなう計測値と考えている。

また、若宮大路幕府の位置についても確定的な論証はなく、宇津宮辻子幕府と同一廓内にあったものとする説と、北側に移動したとするものとに分かれる(註1)。『吾妻鏡』によれば、宇津宮辻子幕府北側には北条泰時の正邸があったとされており(註2)、宇津宮辻子幕府から若宮大路幕府へと幕府が北方に移転したとするならば、それに伴って泰時邸が移転されていなければならないことになる。『吾妻鏡』には、この点についての記述はなく、不明な点が多い。

鎌倉幕府三代目執権、北条泰時(1177～1242)の邸については、『吾妻鏡』が小町大路西北、宇津宮幕府に近接し、同廓内に閑左近大夫将監宅と尾藤左近将監宅があったとしている(註3)。また、正家としての泰時邸は経時・重時に維がれたという(註4)。さらに五代目執権、北条時頼(1226～1263)邸について、『吾妻鏡』は小町大路に面して入口があったと記している(註5)。

北条小町邸跡と推定される区域内では、現在までに9カ所の発掘調査が行われており、そこでは若宮大路、小町大路、横大路の各主要道路と並走関係にある木組みを作う溝、掘建柱建築址、玉砂利敷きの地業面等が発見されている(第1図-2～10)。このうち第1図-2・3・4地点では、木組みを作う若宮大路東側側溝が確認されている。この側溝については、類例の増加に伴い近年その変遷が次第に明らかになってきているが、特に第2地点ではより詳細な変遷の考察がなされている(註6)。またこの側溝底面からは、人名と長さの単位が記された木筒が3点出土しており、当時の側溝の普請が御家人役として、各御家人達に割り当てられていたことが示唆されている(註7)。

他方、若宮大路を挟んで向かい合う「北条時房・顯時邸跡」とされる区域内でも6カ所の調査が行われており(第1図-11～16)、若宮大路西側側溝と考えられる木組みを作う南北溝や掘建柱建築址等が確認されている。また「北条小町邸」に対し、横大路を挟んで向かい側の「政所跡」とされる区域においても発掘調査が行われ、横大路側溝と思われる木組みの溝や多数の柱穴が確認されている(第1図-



- | | | | |
|----------------|------------------|-------------------|-----------------|
| 1. 調査地点 | 7. 雪ノ下一丁目369番他 | 13. 雪ノ下一丁目273番口 | 19. 小町二丁目354番12 |
| 2. 雪ノ下一丁目377番7 | 8. 雪ノ下一丁目419番3 | 14. 雪ノ下一丁目274番2 | 20. 小町二丁目354番2 |
| 3. 雪ノ下一丁目374番2 | 9. 雪ノ下一丁目395番他 | 15. 雪ノ下三丁目987番1.2 | 21. 小町二丁目389番1 |
| 4. 雪ノ下一丁目371番1 | 10. 雪ノ下二丁目432番2 | 16. 雪ノ下一丁目272番 | 22. 小町一丁目325番イ外 |
| 5. 雪ノ下一丁目372番7 | 11. 雪ノ下二丁目293番1 | 17. 小町二丁目366番1 | 23. 雪ノ下一丁目271番1 |
| 6. 雪ノ下一丁目369番 | 12. 雪ノ下二丁目1271番1 | 18. 小町二丁目361番1 | 24. 雪ノ下一丁目273番口 |

第1図 遺跡地周辺地図

23・24) (註 8)。

(註 1) 高柳光寿『鎌倉市史 総説編』吉川弘文館、1959年。

松尾剛次「武家の「首都」鎌倉の成立－將軍御所と船岡八幡宮を中心にして－」「都と都の中世史」吉川弘文館、1992年。

(註 2) 「新訂増補 国史大系 吾妻鏡」宝治元年七月十七日の条。吉川弘文館、1988年。

(註 3) 前掲書 元仁元年六月二十七日の条。

(註 4) 前掲書 宝治元年七月十七日の条。

(註 5) 前掲書 建長四年四月一日の条。

(註 6) 馬淵和雄他「北条泰時・時頼跡 雪ノ下一丁目371番1地点発掘調査報告書」北条泰時・時頼跡発掘調査団、1985年。

馬淵和雄他「北条泰時・時頼跡 雪ノ下一丁目372番7地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1 昭和59年度発掘調査報告」鎌倉市教育委員会編、1987年。

馬淵和雄他「北条小町跡(北条泰時・時頼邸) 雪ノ下一丁目377番7地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12 平成7年度発掘調査報告 第2分冊」鎌倉市教育委員会編、1996年。

(註 7) 國陽一郎「人名木簡について」馬淵他1996年所収。

(註 8) 手塚直樹・宮田 真「神奈川県鎌倉市 政所跡」政所跡発掘調査団、1991年。

第二章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

平成7年12月、鎌倉市雪ノ下一丁目370番1地点における店舗併用住宅の建設申請が提出された。当該地は神奈川県道跡台帳掲載の「北条小町跡」内にあたり、建築計画にもとづく基礎掘削によって、下層に埋蔵される文化財の破壊が予想された。事業者と鎌倉市教育委員会文化財課との協議の結果、建築工事に先立って建築面積110m²のうち、個人住居相当分40m²を国庫補助事業、残りの80m²を原因者負担事業とする埋蔵文化財の発掘調査を行うこととした。また、建設工事に伴う基礎掘削は現若宮大路歩道の現地表下95cm（標高7.1m）までであるため、発掘調査も標高7.1mまでとし、以下については、現状のまま後世の調査に委ねた。

第2節 測量方眼の設定（第2・3図）

調査区内の測量方眼設定にあたっては、近年調査された若宮大路周辺の諸遺跡（註1）で用いられた、若宮大路中軸線を原点とする方眼を当調査区にも取り入れた。

この若宮大路中軸線を基線とする方眼は、その発生点を鶴岡八幡宮二ノ鳥居両礎石北辺間の中点に取った任意座標であるが、この方眼の共用によって大路周辺遺跡調査地点の各位置関係を明確にしようとするものである。

当調査区では、二ノ鳥居原点より北へ320m、東へ24mの地点にC-2方眼基点を設け（第2図）、これより若宮大路中軸線と直行平行をなす4m間隔の測量方眼を導いた。設定した測量方眼には、それぞれ東西方向にアルファベット、南北方向に算用数字を付した（第3図）。

またC-2方眼基点の第9座標系における国土座標値は、X = -75499.828、Y = -25063.947である。そして真北は、Cラインに対し26°53'50"西偏する（第3図）。

第3節 調査経過（第3図）

現地調査は、原因者負担分をA～Dラインまで、国庫補助事業分をD～Eラインまでとしたが（第3図）、遺跡の性格把握を損なわないようにするために、実際の調査では両調査を並行して行った。

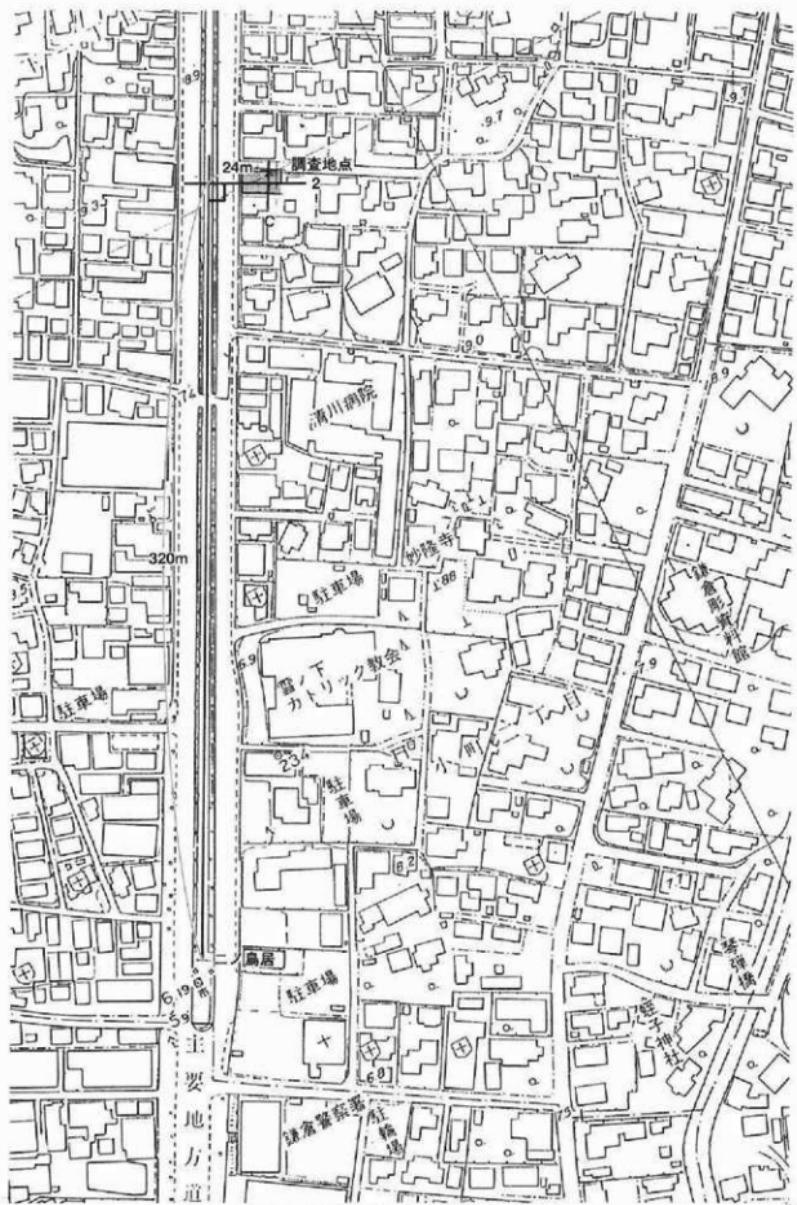
1996年2月29日、重機によりアスファルトと路盤材の除去作業を行い、その下層に堆積する近年の耕作土を人力により掘削したところ、地表面下70cmに最初の良好な近代の生活面を確認した。調査はこの後、近世遺構面、中世遺構面と順次下層へと進められ、5月14日にすべての現地調査を終了した。発見した遺構は以下の通りである。上層より順次生活面にローマ数字を与えている。

I面 標高8.05m 大正以降

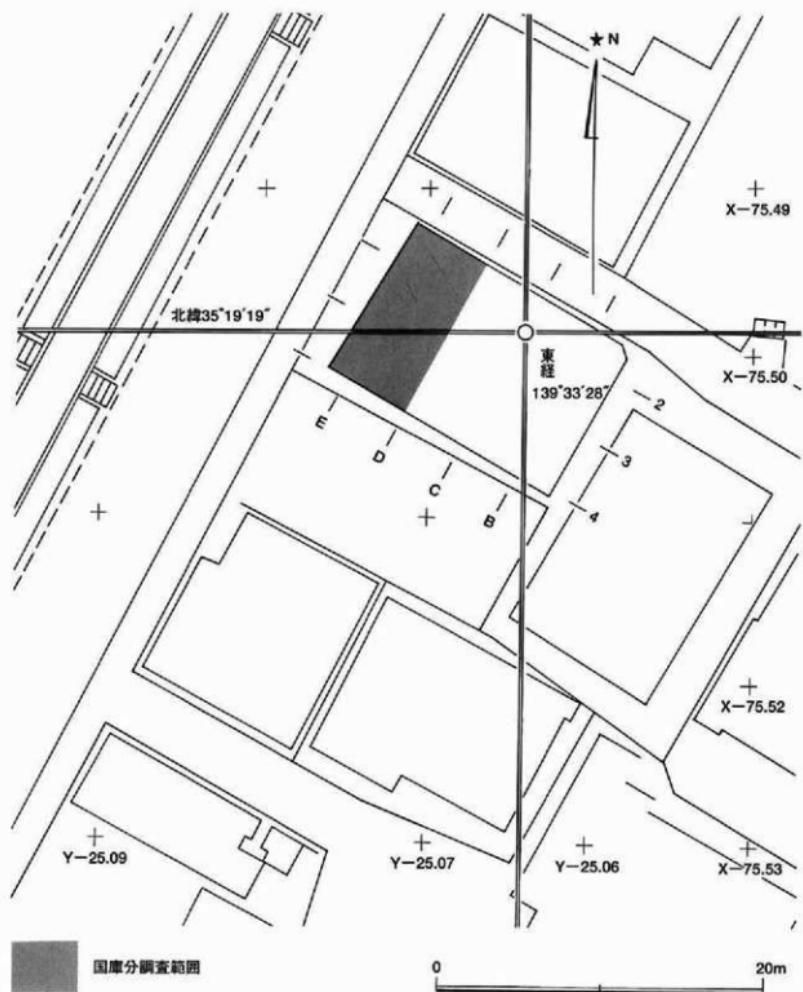
若宮大路、大路側溝1条、柱基礎根固め4基、石列2基、井戸2基、土壙1基、柱穴7口。

II面 標高7.95m 近世

若宮大路、大路側溝1条、土壙3基、木桶5基、溝1条、井戸2基。



第2図 調査地点測量方眼設定図 (1 : 2000)



第3図 調査区の地理学的位置

- III面 標高7.45m (II面の削平により側溝底面のみ遺存)。
大路側溝1条
- IV面 標高7.9m 中世 (II面の削平により部分的に遺存)
柱穴18口。
- V面 標高7.8m 中世
大路側溝1条、柱穴列8条、土壙7基、井戸1基。
- VI面 標高7.7m 中世
大路側溝1条、柱穴29口、土壙4基(かわらけ埋納遺構を含む)、井戸4基。

調査日誌抄

- 2月29日 表土掘削開始。機材搬入。
- 3月4日 I面確認作業開始。遺構確認と調査を行う。
6日 I面全景写真撮影。
- 7日 I面全測図作成。II面検出作業開始。
- 8日 II面精査の後、遺構確認と調査を行う。
- 12日 II面全景写真撮影。
- 13日 IV面確認作業。遺構確認と調査を行う。
- 21日 IV面全景写真撮影。
- 26日 V面確認作業開始。
- 27日 V面精査開始。遺構確認と調査を行う。
- 4月4日 V面全景写真撮影。
- 6日 VI面確認作業開始。
- 10日 VI面精査開始。遺構確認と調査を行う。
- 25日 III面紗利層確認作業開始。
- 5月9日 若宮大路側溝を調査深度制限まで掘り下げ作業開始。
- 10日 遺構確認と調査を行う。
- 13日 全景写真撮影、機材撤収。

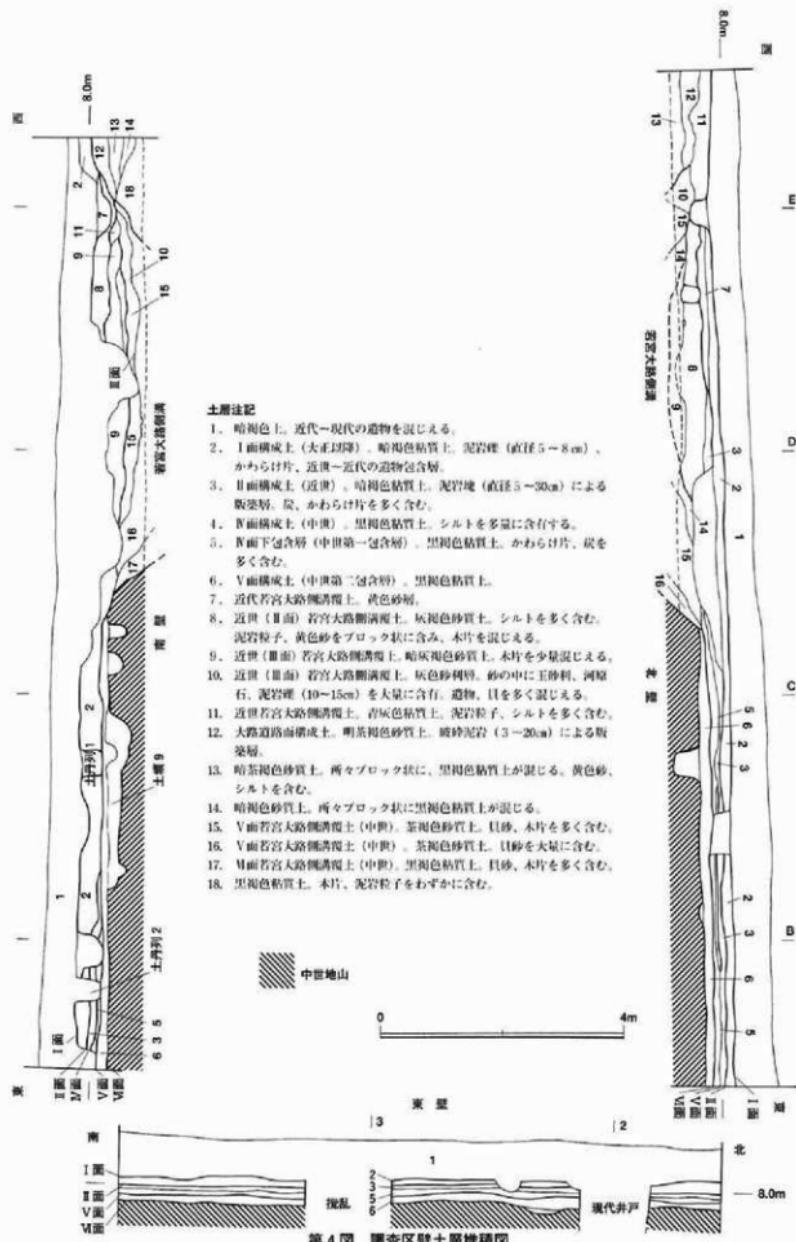
調査区が、狭少であるため、西側の調査は、後半に行うこととなった。

このため、西側のみに確認されたIII層は25日からの調査となった。

第4節 堆積土層(第4図)

調査区内に発見された遺構群配置は、大きく二分できる。すなわち調査区の東側に展開する柱穴群と土壙や井戸のある生活領域と、西側の若宮大路側溝部分である。ただし若宮大路側溝は、今回の調査深度より、はるかに深くまで達する遺構であったため、底面までの調査は出来なかった。

調査区内の土層堆積状況は以下の通りである。現地表面下70cmまでをアスファルトと近年の耕作土が覆っている。これを剥ぐと、近代の生活面が現れる(I面)。その下には、10cm程の遺物包含層を挟んで近世の生活面がある(II面)。この面の南側半分は、近代の削平により既に失われている。この面を剥ぐと、調査区北側では中世遺物を含む柱穴群が現れ(IV面)、西側では近世遺物を含む若宮大路側溝



底面が確認された（Ⅲ面）。これはⅢ・Ⅳ面が共にⅡ面造成時の削平を受けたためと思われる。そして、これより下方には厚さ10cmずつの遺物包含層を挟んで、中世のV面、VI面が遺されている。

以上のように、本調査区内の堆積土層は、総じて各生活面の間にある遺物包含層の厚さが10cm前後と非常に薄い。またⅢ面やⅣ面などは後世の削平の影響を受けている。これらのことから当該地では、鎌倉旧市街地周辺城や、谷戸部の調査に見られるような厚い土丹版築を行う地業というよりも、下層の生活面を削平した後に地業を行うといった方法が想定できよう。

（註1）佐藤仁彦・原廣志「宇津宮辻子幕府跡 小町二丁目389番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12 平成7年度発掘調査報告 第1分冊』鎌倉市教育委員会編、1996年。

原廣志・須佐直子「宇津宮辻子幕府跡 小町二丁目361番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13 平成8年度発掘調査報告 第2分冊』鎌倉市教育委員会編、1997年。

第三章 発見した遺構と遺物

発見された遺構は中世から近代にかけての若宮大路及び御溝、近世の土塙と杭、近代の柱基礎根固めがある。

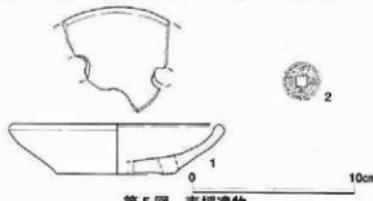
表探遺物（第5図）

第5図-1は産地不明の穿孔陶器。胎土は黒色微砂、白色小石を混じえる肌色土。体部外面は指頭によるナデで調整される。外底部は糸切り痕が残る。見込みに穿たれた3ヶ所の穿孔は焼成前に行われている。施釉はおこなわれない。2は「寛永通寶」。

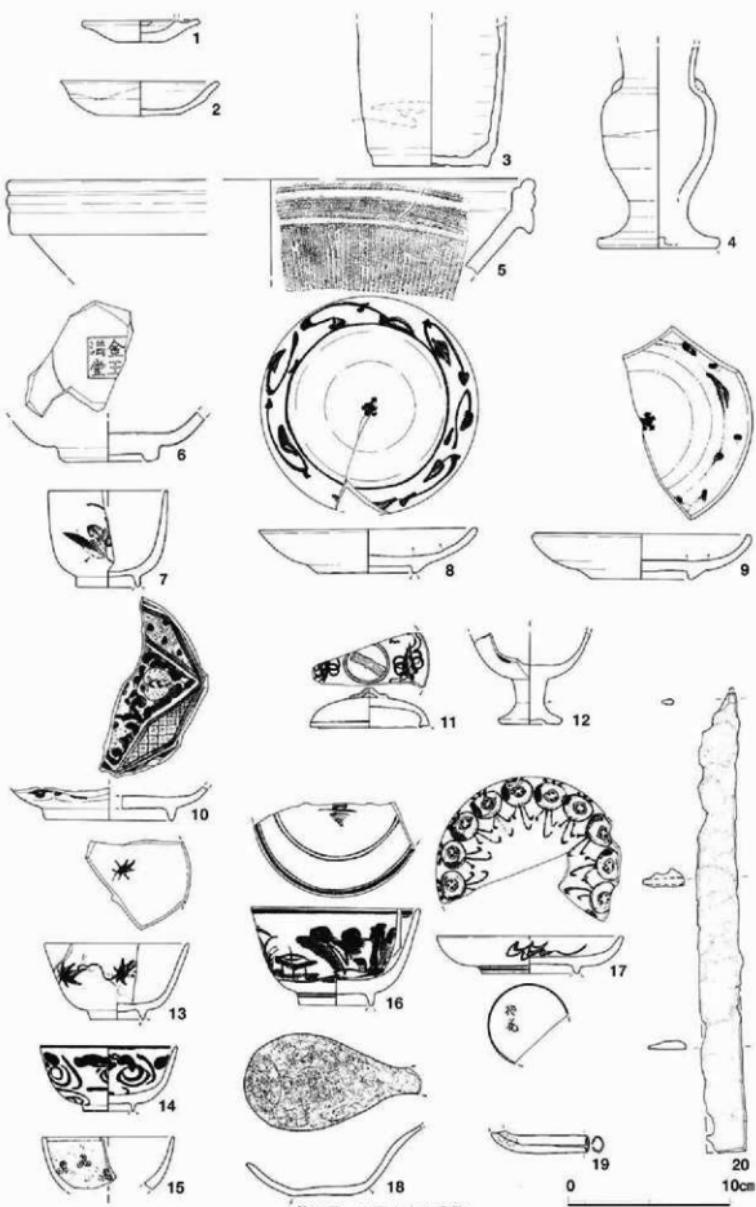
I面上出土遺物（第6図）

I面確認作業中に出土した遺物をここに述べることとする。

第6図-1は産地不明の灯明皿受け皿。白色微砂を多く混じえる橙色を呈する粉質胎土。底部は糸切り。外底部と受け口唇部以外は透明釉が施釉される。2は志戸呂の灯明皿上皿。暗茶褐色を呈する銷釉が施釉されるが、体部外面中位から外底部にかけては露胎。3は瀬戸灰釉の徳利。体部外面は回転ヘラ削りで調整され、内面は明瞭なロクロ痕が残る。外底部はごく浅い削り出しによる小さな高台が作られる。釉は淡黄色を呈し、体部外面下位は釉をふき取っている。4は美濃の18世紀代の掛け分け仏花瓶。外底部は糸切り痕が残る。体部外面中位から上方は灰釉、下方は柿釉が施釉される。5はI型式の堺播鉢。磨滅痕は不明である。6は舶載青磁碗。見込みに「金玉滿堂」の銘が押印される。釉は半透明な灰味水色を呈し、薄めに施釉される。高台脛付から底裏にかけては露胎。7～12は肥前の染付。7は湯呑み碗。外面の文様は手描きの草花文。8～9は蛇ノ目釉ハギ皿。両者とも文様は内面に手描きの草花文、見込みにコンニャク印判による五弁花文が押印される。8の高台脛付は施釉後に工具で釉を雑に搔き取っている。10は六角皿と思われる。文様は内外面ともに手描きの文様が描かれるが、内面に描かれた題材は多彩で丁寧である。11は蓋物の蓋。文様は外面に手描きの宝文が描かれる。12は仏壇器。外面に手描きの文様がわずかに残る。13～18は瀬戸、美濃の染付。13は湯呑み碗。文様は外面と見込みに手描きの植物文が描かれる。14は小碗。内外面に手描きの文様が描かれる。口唇部は黒褐色を呈する口錆がめぐる。15は小碗か。文様は外面に輪文と銅版転写による松葉文が転写される。16は碗。文様は外面に輪文とラフな手描きの山水文、内面に輪文、見込みに手描きの文様が描かれる。透明釉は厚く施釉され、釉下に細気泡が多く浮く。17は皿。外面に手描きの文様、底裏には「梅花」、内面に銅版転写と手描きによる提灯が描かれる。18は型作りのレンゲ。文様は紙刷りによる草花文。外底部は露胎。19はキセル。全体に潰れて歪んでいる。筒内に羅字の痕跡が残っている。20は刀子か。



第5図 表探遺物



第6図 I面上出土遺物

第1節 I面（第7・8・9図）

前述の通り、現地表面下に70cmほど堆積する表土を剥いだところ、泥岩混じりの良好な生活面を発見した。現代の井戸などによりかなり搅乱されていたが、面上からは若宮大路道路面及びそれに伴う側溝、建物の基礎と思われる石組み、柱穴を確認した。

このうち、今回報告分には若宮大路、大路側溝、柱基礎根固めがある。

若宮大路

調査区西際に南北方向に発見した。道路面は3~20cmの大泥岩塊を版築し、非常に堅く締まっていたが、やや雑で凹凸が激しい。標高は調査区の北壁際で8.5m、南壁際で8.4mと僅かに傾斜している。版築は側溝際では薄く、道路中央に向けて、調査区西壁際では25cmと厚くなっている。

道路上から次のが出土した。第8図-1は瀬戸灰釉片口鉢。胎土は黒色微砂と白色細石を混じる黄白色粉質密土。釉は黄色を呈する。体部内外面ともに下位から下方は露胎。また、図示できなかったが、この他に近代陶器、瓦、金属製釦が出土している。

若宮大路側溝

Eラインに沿って、若宮大路東側の側溝を確認した。最大幅60cm、確認面よりの深さ30cm、断面は皿状で、溝底面の幅は40cmを測る。溝の覆土は、黄色砂を主体とする。上層分析によれば、断面にラミナがみられ、流水の影響を随時受けたことが窺える。

覆土中より近代陶器片が出土した。第9図-1は「寛永通寶」。

柱基礎根固め1

D-2グリッドにおいて発見した。直径10cm程の泥岩塊が、一辺80cmの方形に組まれており、その中央部に直径15cmの4本の丸太杭が方形に配置されている。泥岩塊の形状はまちまちであるが、その上面は均一で、こうした泥岩と丸太杭を配した造構は建物の基礎であると思われる。本来は掘り込み内に根固めがなされるが、上面の削平によって掘り込み自体は失われたと考えられる。泥岩石組み中より、近代の陶磁器破片が出土した。

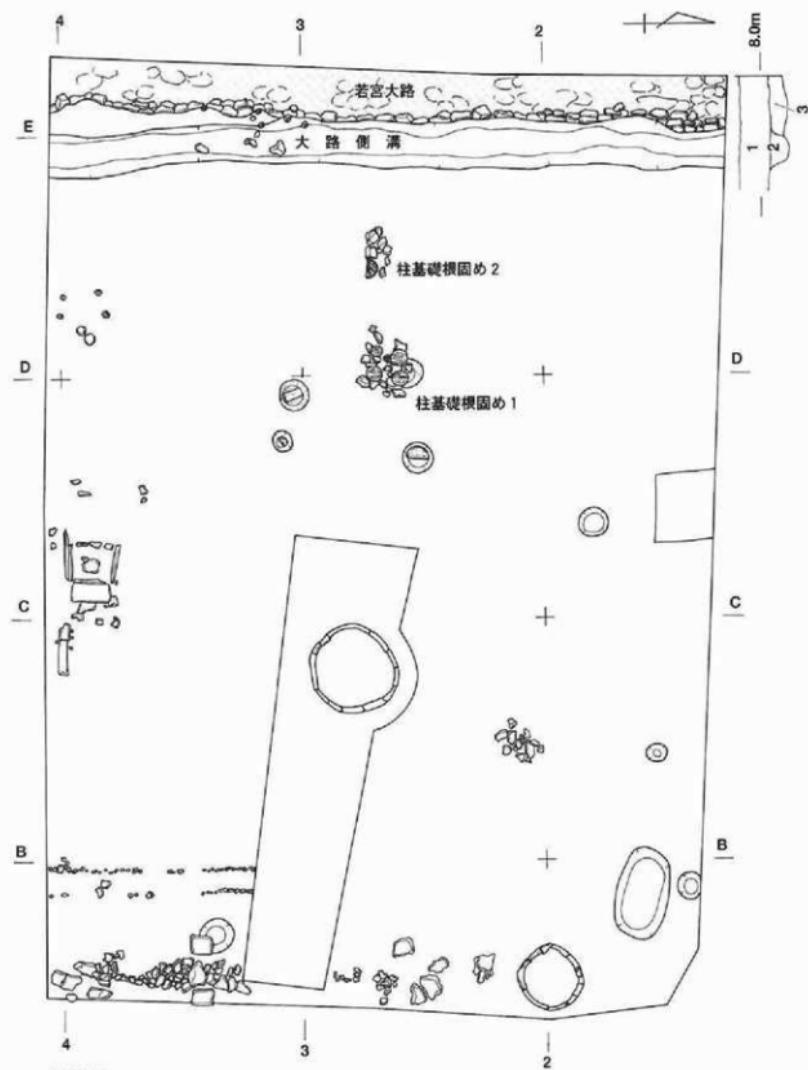
柱基礎根固め2

D-2グリッドに発見した。柱基礎根固め1との距離は悉々で2mある。生活面の削平により、半分ほどは失われているが、元形は柱基礎根固め1と同様のものであったと思われる。直径10cm程の泥岩塊が一辺80cmの方形に組まれているが、丸太杭は確認できなかった。泥岩塊の形状はまちまちであるが、その上面は均一である。この泥岩石組みの中には石臼の破片（約1/2）が含まれていた。礫石に転用されたのであろうか。泥岩石組み中より、近代の陶磁器破片が出土した。

I面下出土遺物（第10図）

I面の下層に堆積する遺物包含層（第4図-2）から出土した遺物をここに述べる。

第10図-1は肥前の青磁火入れ。釉は淡草緑色を呈し、やや厚めに施釉される。高台疊付付近は露胎。使用痕は見られない。2は肥前の染付小壺。体部外面下位から下方は露胎。外面は手描きで「くさつ」

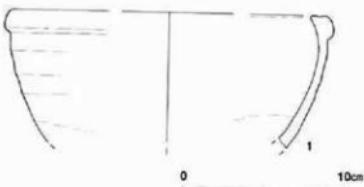


土層注記

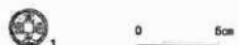
1. 表土。近年の耕作土。
2. 近代若宮大路側溝覆土。黄色砂層。
3. 大路道路面構成土。明茶褐色砂質土。泥岩塊（3～20cm）による軟弱層。

第7図 I面全測図

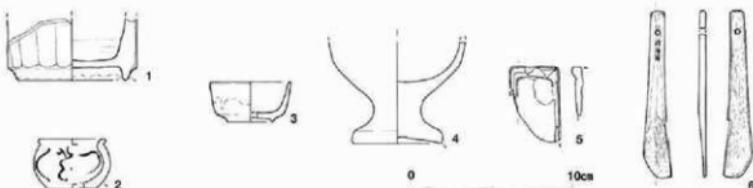
と書かれる。3は産地不明の灰釉陶器。胎土は白灰～淡橙色弱粘質密土。釉は灰緑色を呈するが、強い二次焼成を受け白濁気味である。体部外面中位から下方は露胎。4は産地不明の鉄釉仏龕具。胎土は淡橙茶色弱粘質密土。釉は灰茶～茶褐色を呈する。外底部は露胎。瀬戸、美濃窯の製品の可能性もある。5は天草産と思われる細粒凝灰岩の拂帶用鏡。6は骨製のヘラ。表面の下方と裏面は工具による調整痕が多く残る。上方は穿孔され、その下に草書体の文字が刻まれるが、判読はできなかった。



第8図 I面若宮大路出土遺物



第9図 I面若宮大路側溝出土遺物



第10図 I面下出土遺物

第2節 II面 (第11・12図)

I面の下に15cmほど堆積する近世～近代の遺物包含層を除去したところ、玉砂利及び破碎泥岩版築による良好な地盤面が現れた。調査区の南側半分は、近代の生活面により削平されており、南側の状況は不明瞭である。

細かく碎いた泥岩を緻密に版築した面は、調査区の東で強く、西よりほど弱くなっていくが、中央部から西側にかけては弱い版築の破碎泥岩上に玉砂利を敷いた面となる。こうした版築面が終わるあたりに側溝が掘り込まれる。

発見した構造は若宮大路、若宮大路側溝と土壙一基である。以下にその詳細を述べることとする。

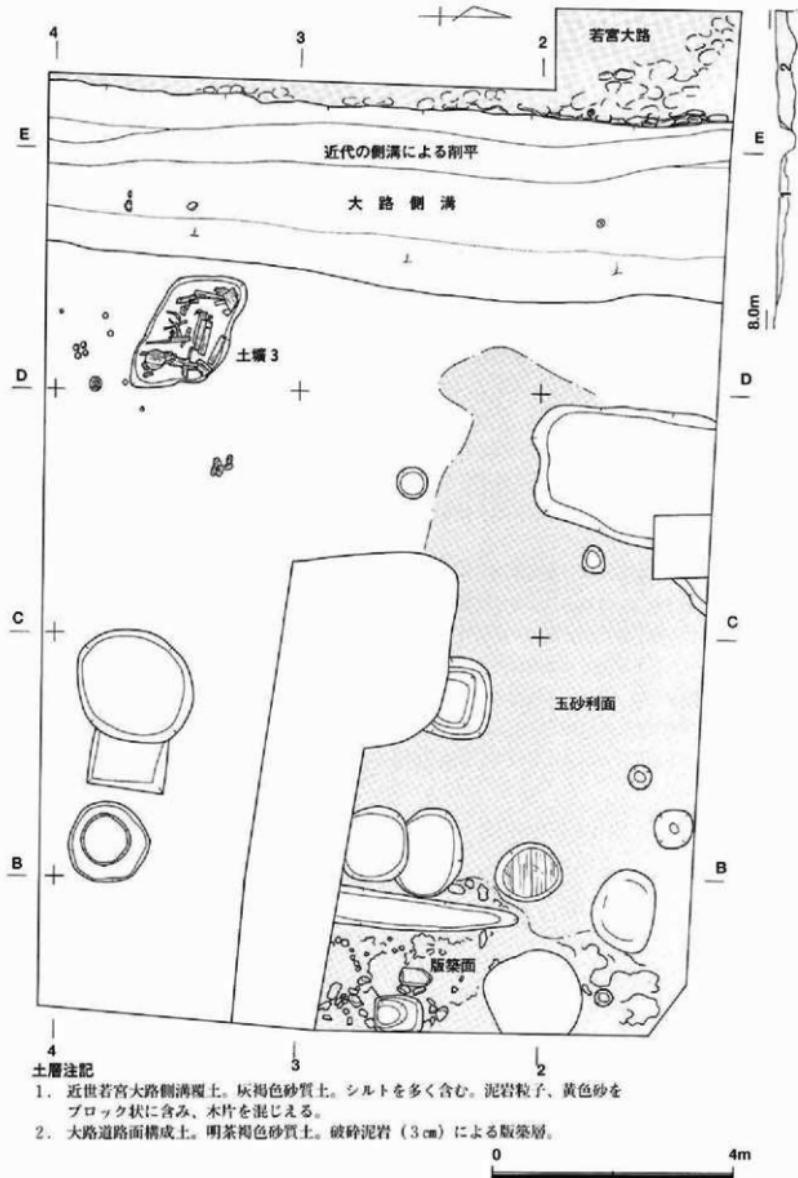
若宮大路

調査区西端に南北方向に確認した。近代の道路とほぼ重なる位置にある。道路面は3～20cmの大泥岩塊を版築し、非常に堅く縮まっており、上層の若宮大路道路面版築に比べ緻密である。大路道路面直上より以下の遺物が出土した。

第12図-1は肥前染付小皿。文様は外面に輪文と手描きの梵字文の崩したもの、見込みは輪文と手描きの崩した「壽」の文字が描かれている。2は鳴滝中山産の泥岩砥石。表面の使用痕は著しく、裏面は破損剥離しているが、一部再利用している。

若宮大路側溝

側溝は近世期に何度も浚渫が繰り返されたらしく、また近代の側溝による削平も受け、平面的には



第11図 II面全測図

不明瞭なものであったが、Eライン付近に若宮大路にともなう浅い鋪溝を確認した。最大幅310cm、確認面よりの深さ20cmを測る。断面は皿状で、溝底面の幅は150cmを測る。覆土は灰褐色砂質土を主体とし、泥岩粒子、黄色砂をブロック状に含み、木片が多く混入する。

覆土中よりかわらけ片、木片が出土した。



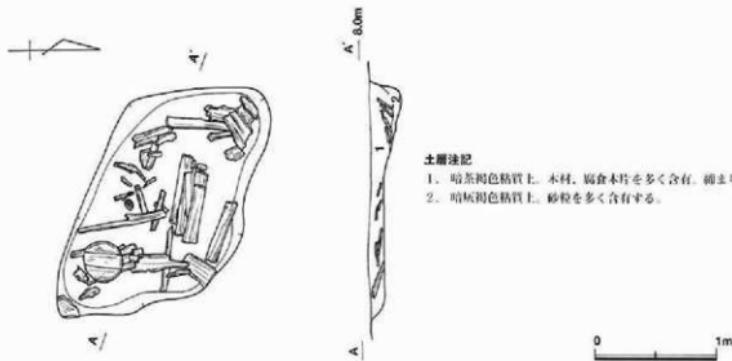
第12図 II面若宮大路出土遺物

土壌3（第13・14図）

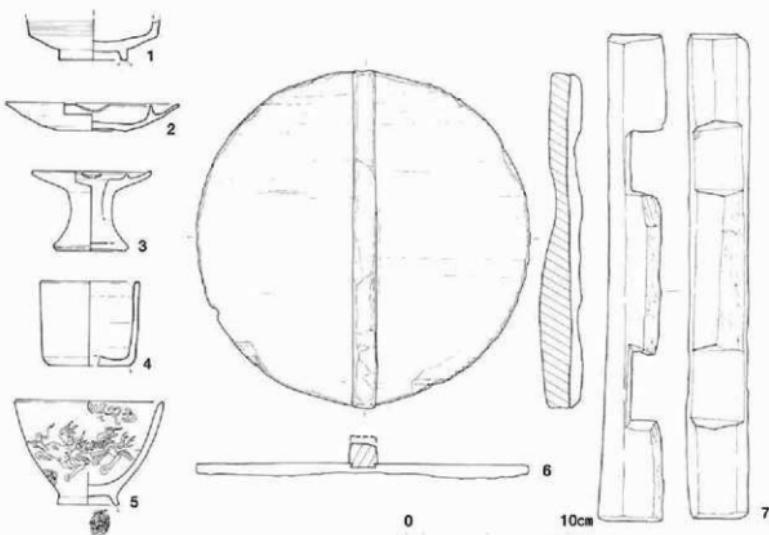
調査区南西寄り、D-4グリッド付近に発見した。II面調査区南側半分は、I面（近代）造成時の削平を受けているが、当該遺構は掘り込みが深かったため遺存していた。平面形はおそらく方形、断面は箱形を呈していたものと思われる。遺存部分で長径190cm、短径120cm、確認面よりの深さ30cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土を主体とし、木製品、木材を大量に混じえる。

土壌3自体の機能は上層の削平によりはなはだ不明瞭ではあるが、土壌周辺に建物の基礎杭1基と直径5cm程の丸太杭4本が確認されていることから、当該遺構は何らかの建物の中に掘り込まれていたものと思われる。また板状の木材が多く確認されていることから圓柱裏の可能性も考えられる。この他に蓋、下駄、桶の部材が出土したが、これらの遺物は廃棄時の投げ込みであろう。この他覆土中より以下の遺物が出土した。

第14図-1は18世紀代の瀬戸腰鉢茶碗。外面は茶褐色を呈する鉄釉、内面は黄味淡緑色を呈する灰釉が掛け分け施釉される。2は美濃灰釉灯明皿の受け皿。外底部は糸切り痕が残る。3は美濃御深井釉の台付燈火受け付き皿。外底面は糸切り痕が残り、露胎。4は肥前青磁の火入れ。釉は淡青色を呈し、ごく薄く施釉される。外底面と体部内面上位から下方にかけては露胎。使用痕は見られない。5は産地不明の陶器質綠釉象嵌碗。胎上は灰色弱粘質緻密土。体部外面上には象嵌による飛竜文が描かれる。釉は濃深緑色を呈し、内外面ともに細貫入が入る。底裏には「錦光山」の刻文が残る。6は木製の蓋。中央にはめ込み式の取手が付けられる。全面に赤色漆が塗布されるが、剥離が著しい。7は部材と思われる。



第13図 土壌3

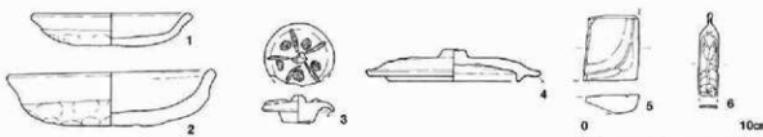


第14図 土壌3出土遺物

Ⅰ面下出土遺物（第15図）

Ⅱ面構成土（第4図第3層）中から出土した遺物をここに述べる。

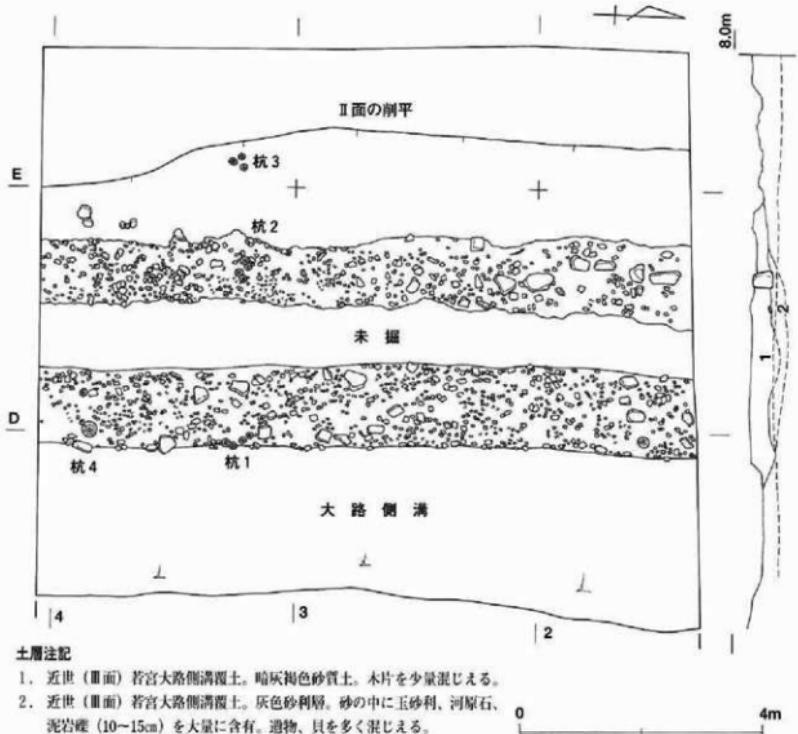
第15図-1～2は削平による混じりと考えられる中世の手づくねかわらけ。1は黒色砂粒を多く混じる砂質胎土。体部外面中位の稜は強く、器壁は大きく開きながら立ち上がる。稜下の指頭痕は不明瞭。2は黒色砂粒を混じえる弱粉質胎土。体部外面中位の稜は強く、背高で器壁はやや直立気味に立ち上がる。稜下の指頭痕は不明瞭。3は古瀬戸中期の鉄軸水滴の蓋。取手周囲には貼り付け文様が施される。4は近世瀬戸鉄軸の蓋の蓋。5は黒色粘板岩の硯。6は銅製の簪。



第15図 Ⅰ面下出土遺物

第3節 Ⅲ面（第16・17図）

Ⅲ面は土層堆積図を見てもわかるように、Ⅱ面造成時の削平を受けており、調査区の東側及び大路道路部分は造されない。ただし、大路側溝部分は比較的良好に遺存していた。以下にその詳細を述べることとする。

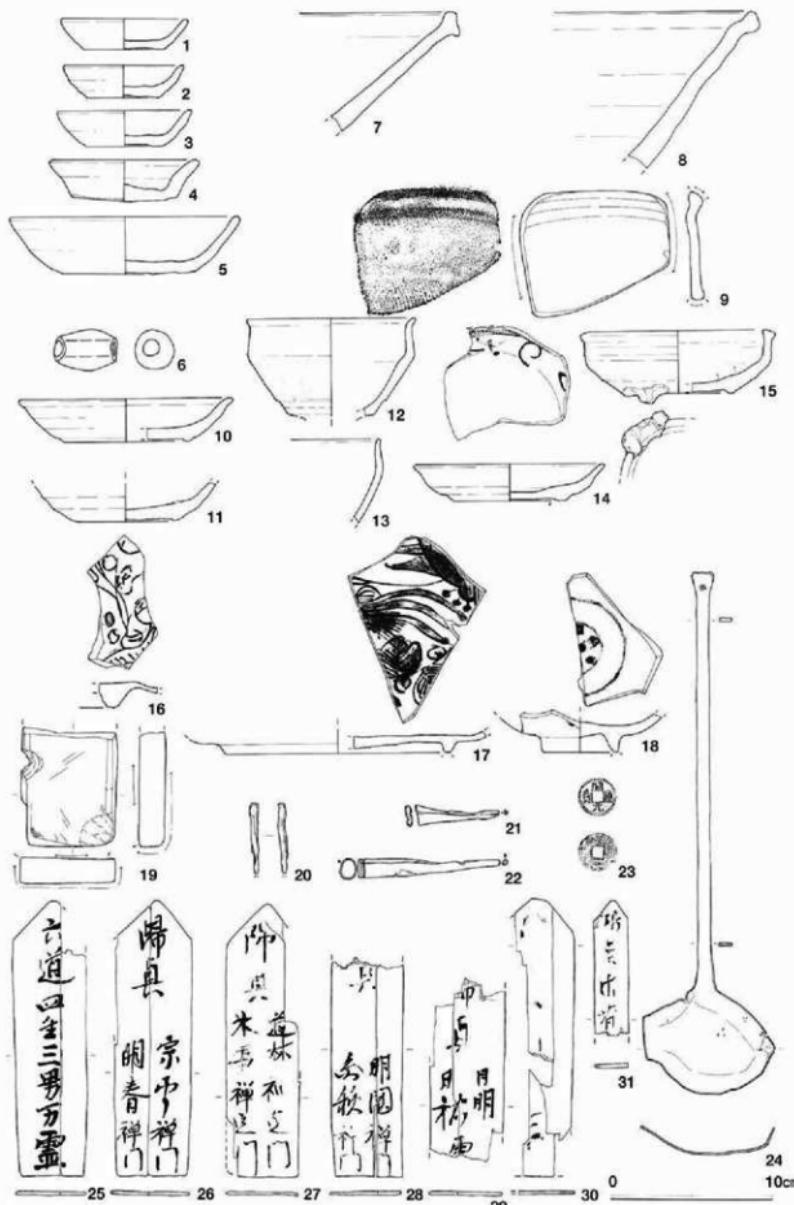


第16図 III面全測図

若宮大路側溝

前述のように、上面は後世に繰り返された浚渫によって不明瞭であるが、おそらく幅約7m前後で、I・II面で確認したものに比べ、その規模は大きい。断面はおそらく逆台形で、底面には凝灰岩塊(5~20cm)及び河原石(6~15cm)が緻密に敷き詰められる。この標面は本来350cmの幅であるが、調査深度制限により中央部は未掘である。このため平面形は2条のように見えるが、同一造構である。標面上からは追善供養塔が7点出土した。側溝に流したものであろうか。この他標面上から以下の遺物が出土した。

第17図-1~5はかわらけ。1~3は弱粉質粘土で背高、側面観碗型に近い様相を呈している。中世期の混じりと考る。4は黒色微砂を多く混じる弱粉質粘土。体部内面中位付近に強い稜を持ち、器壁は大きく外反しながら立ち上がる。5は砂質粘土で器壁は薄く、器壁はゆっくり開きながら立ち上がる。これも中世期の混じりであろう。6は土錐。7~8は瀬戸の擂鉢。口縁部の折り返しは小さい。17世紀後半くらいであろうか。7は条線が17本だが、著しく磨滅している。9は瀬戸の擂鉢口縁部片を転用した磨滅陶片。破損面は著しい磨滅が残る。10~11は美濃の長石釉皿。10は外面に軽い二次焼成を受け、一部白濁する。12は美濃長石釉の天目碗。黄白色を呈する長石釉が厚めに施釉される。体部外下位から下方は露胎。13は瀬戸の17世紀代と思われる天目茶碗。器壁は薄く、口縁部は大きく外反する。



第17図 三面若宮大路側溝出土遺物

瀬戸、美濃の17世紀後半くらいの鉄絵皿。15は高取と思われる灰釉香炉。胎上は白色微砂を混じえる暗赤褐色弱粘質土。削り出しによる高台があり、さらに三脚の脚が付くと思われる。釉は暗緑色を呈し、体部内面上位から外面下位まで施釉される。16は船載染付蓋。素地は黒色微砂を多く混じえる白色粘質土。呉須は暗灰青色を呈し、手描きの草花文が描かれる。受け部周辺には砂が多く付着する。17は船載染付皿。素地は淡灰色弱粘質土。呉須は暗灰青色を呈し、見込みは手描きによる草花文が描かれる。底裏は透明釉を施釉後に釉を拭い取っている。高台骨付には白色砂粒状の微粒がわずかに付着する。18は肥前染付碗。体部外面下位付近に手描きの文様が描かれる。19は灰緑色を呈する稻井石製の硯転用砥石。倅の痕跡がわずかに残るが、破損後に再加工して砥石として使用している。20は釣。21～22はキセルの吸い口。両者ともにツブレが多く見られる。23は「開元通寶」。背面は「月」。24は金桶製のおたま。25～31は追善供養塔。25は「六道四生三界万靈」。26は「帰眞」「明春禪門」「宗□（「雲」か「寧」の可能性がある）禪門」。27は「帰眞」、「□（「米」か「水」の可能性がある）□押定門」、「道林禪定門」。28は「□（「帰」）眞」、「□（「圓」の可能性がある）□（「貴」の可能性がある）禪門」、「朋圓禪門」。29は「□（「帰」）□（「眞」）」、「□（「判読不能」祐」、「月明」、「□（「雲」の可能性がある）」。30～31はともに判読できなかった。25は六道四生に存在するすべての靈と三界衆生に捧げるので、また、26～29は特定故人に捧げられた追善供養塔であろう。

杭 列

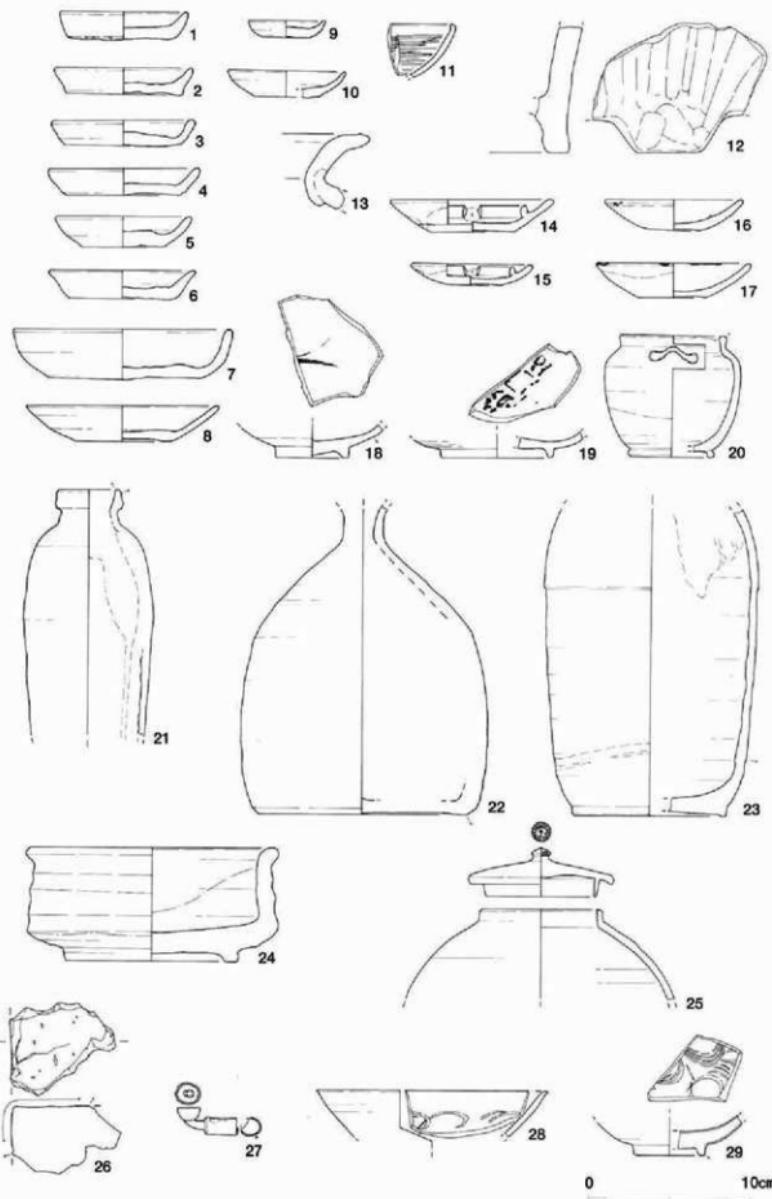
3 ライン付近に大路側溝に直行する丸太杭列を発見した。丸太杭3～4本を一単位とし、東から杭1・杭2・杭3の3基が確認されている（第16図）。また杭1の南側230cmに杭4を確認した。杭4は丸太杭1本が確認されたのみであったが、西側に60cm離れてもう1本の丸太杭が確認されており、ここに杭列がもう一列あったと思われる。杭1～杭2の間は芯々で3m、杭2～杭3の間は1.5mの距離を測る。おそらく杭1と杭2の間に1.5mの間隔でもう一つ丸太杭が存在した可能性が高い。これらは側溝を渡るための構築物の基礎であろうと思われ、その桁は3m以上あったと考えられる。

第4節 IV面

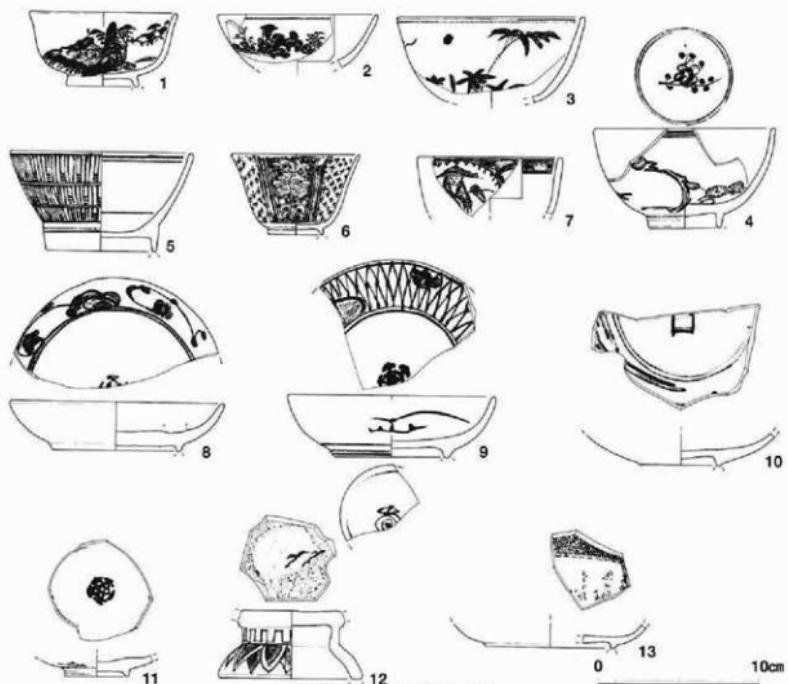
IV面は上層の削平を免れたものが、C-2グリッド付近以東のみに確認された。国庫分調査範囲内では確認出来なかったので、ここではIV面下出土遺物のみを扱う。

IV面下出土遺物（第18・19図）

第18図-1は砂質胎土の手づくねかわらけ。器壁は厚く、直立気味に立ち上がる。底部の指頭痕は不明瞭。2～5は砂質胎土の糸切りかわらけ。おおむね背低で体部外面に稜を持たず、器壁はゆっくり開きながら立ち上がる。6は弱砂質胎土の糸切りかわらけ。体部内面中位に稜を持ち、器壁は大きく外反しながら立ち上がる。7は砂質胎土の糸切りかわらけ。器壁は直立気味に立ち上がる。8は黒色砂粒、雲母片を混じえる粉質胎土の近世かわらけ。器壁は薄く、大きく開きながら立ち上がる。9は弱粉質胎土の極小かわらけ。10は黒色砂粒、雲母片を混じえる白色弱粉質胎土の白かわらけ。底部厚に対して器壁の厚さは薄く、大きく開きながら立ち上がる。11は瓦器碗。12は瓦質輪花型火鉢の脚。13は涅美の堀口縁部片。14～15は瀬戸、美濃の灰釉灯明皿受け皿。14の体部外面中位には重ね焼き痕が残る。16～17は京焼風陶器の灯明皿上皿。18～19は美濃御深井釉の皿。18は鉄釉の手描きによる文様、19は鉄釉の摺



第18図 M面下出土遺物（1）



第19図 N面下出土遺物（2）

絵による文様が描かれる。20は美濃灰釉の小壺。付け高台は貼り付け後に丁寧に調整される。体部外面中位から下方と口縁端部は露胎。21は美濃の徳利。22～23は瀬戸の徳利。22の外底部は糸切り痕が残り、施釉後に釉をふき取っている。23は体部外面下位から底裏にかけて施釉後に釉をふき取っている。24は瀬戸鉄釉香炉。使用痕は見られない。25は相馬焼と思われる関西系陶器の土瓶。外面は青緑色を呈する銅線釉が施釉されるが、全体に強い二次焼成を受け白濁する。26は淡紅～白色を呈する凝灰岩製の天草産砥石。27はキセルの瓶首。28～29は船載青磁刻花文碗。

第19図-1～2は肥前染付小碗。文様は手描きの山水文。3は肥前染付碗。文様は手描きの竹文。4は肥前染付碗。文様は外面に手描きの松竹梅、見込みに手描きの梅が描かれる。内面は軽い二次焼成を受ける。5は肥前染付の広東碗。文様は外面に手描きの梵字崩し、内面は輪文が描かれる。焼継ぎ痕残る。6は肥前染付の猪口。文様は外面にのみ手描きの区画間に格子文と花文が描かれる。7は肥前染付猪口。文様は外面に手描きの人物、内面は帶線の中に列点を配する。焼継ぎ痕残る。8は肥前染付蛇目釉ハギ皿。文様は内面に手描きの草花、見込みにはコンニャク印判による五弁花文が押印される。漆継ぎ痕が残る。9は肥前染付皿。文様は外面に手描きのかなり崩れた唐草文、底裏には渦福文、内面は手描きの松葉が描かれ、見込みにはコンニャク印判による五弁花文が押印される。10は肥前染付皿。内面は手描きの日字鳳凰文が描かれる。高台脇にわずかに砂が付着する。11は肥前染付皿。外面は手描きの不明文様、内面は見込みにコンニャク印判による五弁花文が押印される。12は肥前染付盃洗と思われる。

文様は外面に手書きの蓮弁文、見込みは吹墨技法による月と雁が描かれる。13は瀬戸の銅版転写の角皿。見込みに「君が代」が書き込まれる。

IV面は中世期の生活面で、本来ならばIV面下は中世面の構成上になり、近世以降の遺物が混入することは考えられない。しかし、本遺跡地では前述のとおり、II面期に大きく削平を受けており、その結果、近世以降の遺物が大量にIV面下に混入されたものと解釈する。

第5節 V面（第20図）

V面においては、中世に帰属する若宮大路側溝を発見した。しかし、調査深度制限のため、今回は、側溝東側肩部分を確認するにとどまった。

若宮大路側溝（第20・21・22図）

大路側溝は、近世以降のものに比べて規模が大きく、調査区の約半分を占める。ほぼCラインの西側1m付近に、側溝の東側肩部を確認した。西側の肩部は、近世の削平により不明である。

この側溝は、位置及び形状から、当該遺跡地の南に隣接する雪ノ下一丁目369番地点に発見された南北溝の延長と思われる（註1）。覆土は茶褐色砂質土を主体とし、貝砂、木片を非常に多く含有している。また何回かの掘り直しが土層断面図の観察から窺える。第3層中（第20図）からは14世紀中頃の遺物が多く出土している。

側溝の肩口には柱穴が並んでいる。柱穴は大きいもので直径80cm、小さいものでも直径40cmを測り、深さはそれぞれ40～50cmを測る。さらに側溝の肩口には護岸用に用いられたと思われる木組みが出土している（第21図）。この木組みは木組み1～4の4箇所に確認され、個々の間隔は木組み1～木組み2が2.1m、木組み3～木組み4が1.2mである。すべて南北溝に直交する方向に長軸を持っている。このうち木組み2は長さ117cm、幅5cm、厚さ12cmの角材が幅8cmの2本の杭で固定されている。この角材には中央部に幅10cmのはぞ穴があいている。木組み3・4は長さ60cm、幅5～15cm、厚さ10cmの角材のほぼ中央部の切り込みに、長さ30cm、幅5cm、厚さ5cmの角材が十字に直行するように組まれている。これらと全く同じ構造のものが雪ノ下371番1地点（第1図-4）で発見されている（註2）。控え梁にともなう構築材と考えられる。覆土より以下の遺物が出土した。

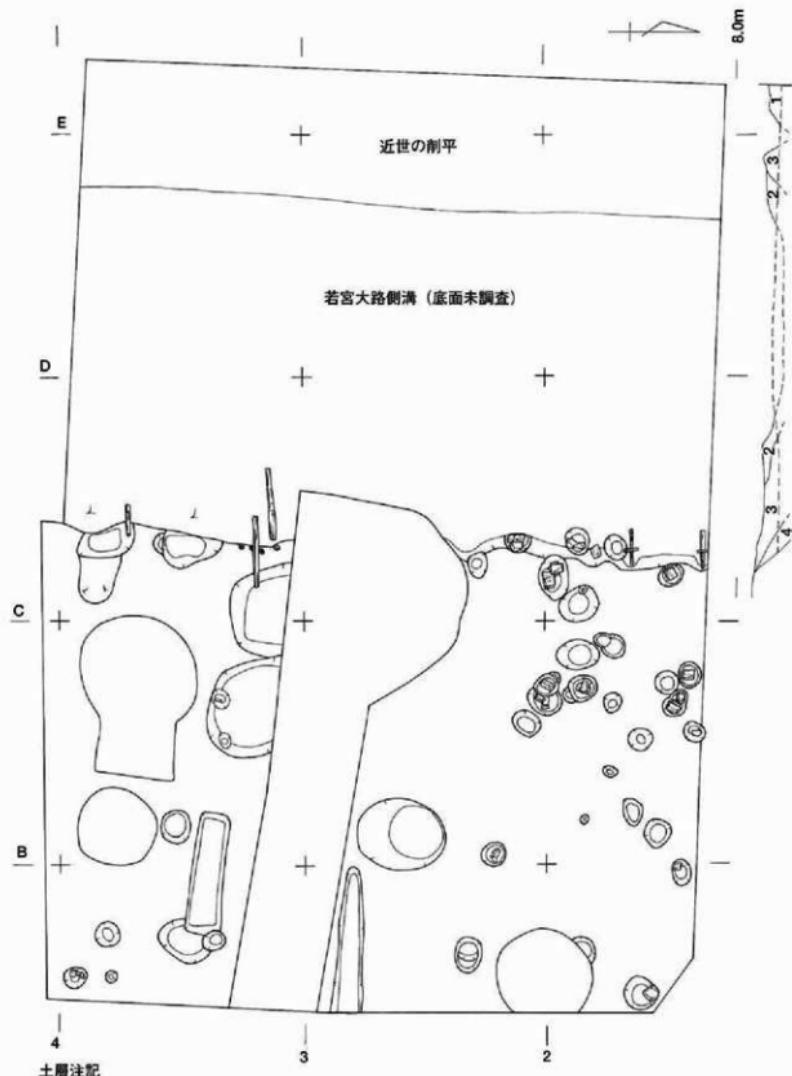
第22図-1～5はかわらけ。1は弱砂質胎土で器壁は薄く内縫気味に立ち上がる。2～3は弱砂質胎土。2は背低で器壁はゆっくり開きながら立ち上がる。3は薄手で側面觀碗型を呈す。4は砂質胎土で中型に分類できよう。器壁は薄く、開きながら立ち上がる。5は弱砂質胎土で器壁はゆっくり開きながら立ち上がる。6は青磁蓮弁文碗。蓮弁文はやや退化している。釉は草緑色を呈し、やや厚めに施釉される。7は黒色粘板岩の硯。8は天草産の凝灰岩製砥石。四面が砥面として使用される。9は凝灰岩製の箱根付近産の砥石。四面が砥面として使用される。

V面直上出土遺物（第23図）

図23-1は釘。2は橙色を呈すかわらけ質胎土の基石と思われる。

V面下出土遺物（第24図）

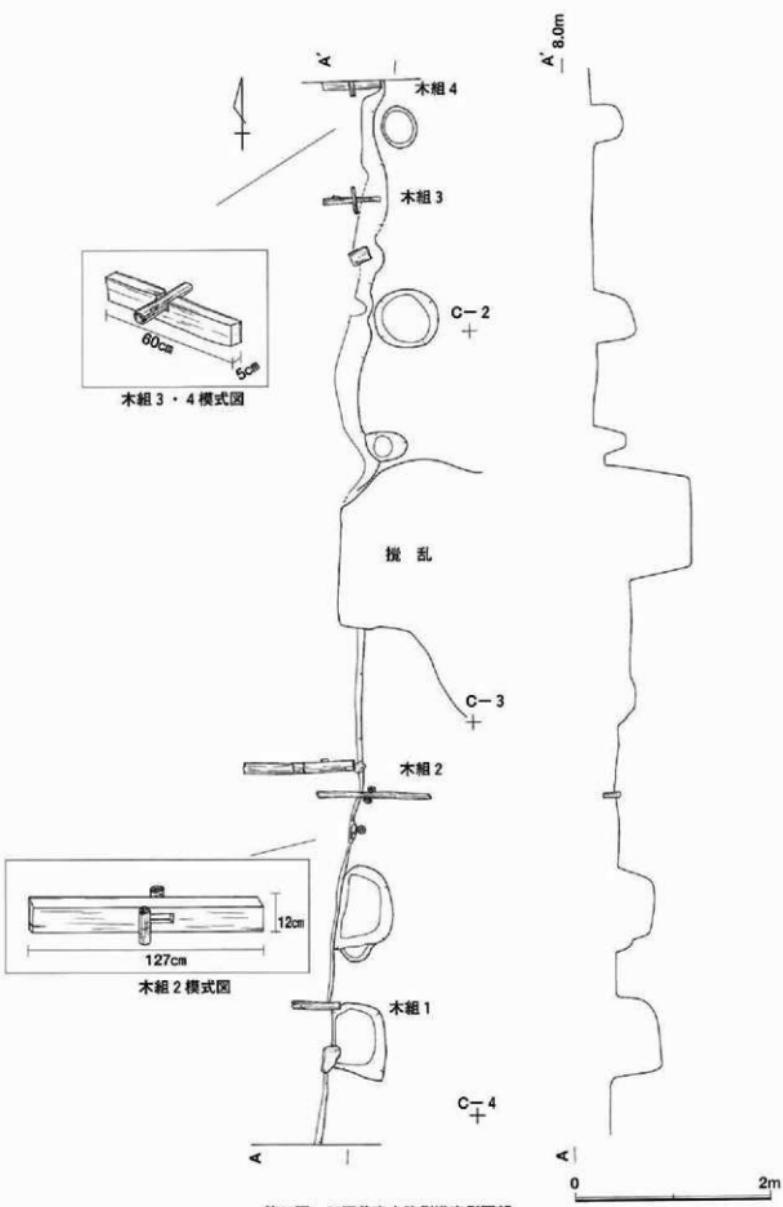
図24-1は内折れ白かわらけ。胎土は白色を呈し混入物の少ない粉質土。胎芯は灰色。2～4は手づ



土層注記

1. 暗褐色砂質土。所々ブロック状に黒褐色粘質土が混じる。
2. V面若宮大路側溝覆土。茶褐色砂質土。貝砂、木片を多く含む。
3. V面若宮大路側溝覆土。暗茶褐色砂質土。貝砂を大量に含む。
4. V面若宮大路側溝覆土。黒褐色粘質土。貝砂、木片を多く含む。

第20図 V面全測図



第21図 V面若宮大路側溝東側肩部

くねかわらけ。2は弱粉質胎土。底部は平らで指頭痕は不明瞭。3～4は弱粉質胎土で体部外面中位に強い稜を持ち、丸底に近い。5は船載青白磁の型作りの合子蓋。釉はごく薄く施釉され、受け端部から体部内面中位付近までは露胎。6は瓦器碗。7は釣。

(註1) 濱田哲夫「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目369番地點」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7 平成2年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会編、1991年

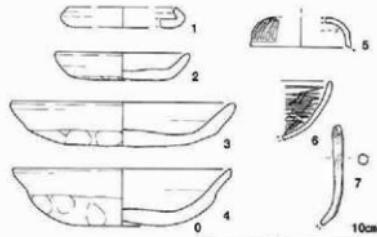
(註2) 馬瀬和雄「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目371番1地點」北条泰時・時頼邸跡発掘調査団、1985年。



第22図 V面若宮大路側溝出土遺物



第23図 V面直上出土遺物



第24図 V面下出土遺物

第4章　まとめ

本遺跡は、鎌倉時代中期から後期にかけて北条泰時・時頼らの正邸のあった場所とも、若宮大路幕府のあった場所ともいわれる「(推定) 北条小町邸(北条泰時・時頼邸跡)」の西辺中央部に位置する。この「北条小町邸跡」は、前述のように鶴岡八幡宮、「政所跡」、「宇津宮辻子幕府跡」に囲まれた当時の政治的重要地区である。

今回報告分は、調査対象地の約1/3にあたる。当該地付近は中世から近代にかけての堆積層が薄く、新しい時期の造成の度に、下層の生活面が削平され、下層の生活面は良好には遺存しない。しかしながら、今回の調査で近世から近代にかけての若宮大路とそれに伴う側溝を確認できたことは、一つの成果である。

今回発見したこの若宮大路と側溝の変遷を以下にみることとする。

V面において確認した若宮大路に伴う南北溝は、断面図から推測すると少なくとも幅7m以上のもので、これまでに若宮大路沿いの発掘調査で確認された大路側溝の規模と構造を勘案すれば、これの延長と考えて間違いないだろう。今回の調査では、調査深度制限により、中世期の側溝底面を確認出来なかつたが、出土した木組み構築材の一部から、護岸のために溝肩地中に控え杭を持つ木組みを伴う側溝であることが予想できる。同様の木組みは、北条泰時・時頼邸跡(雪ノ下一丁目371番1地点)、北条小町邸跡(雪の下1丁目377番1地点)で確認されている。

近世期は、Ⅲ面とⅣ面の2時期が認められた。まずⅢ面では、上面からの削平によって、側溝底部のみの調査であったが、礫屑を確認した。この礫屑は玉砂利、河原石などが緻密に敷き詰められており、側溝底面に敷かれていたものと思われる。そしてこの側溝には基礎丸太杭列が確認されたことから、橋などの構築物がかけられていたと考えられる。

Ⅳ面では、若宮大路と側溝の両者と共に発見した。道路面は破碎泥岩を舗装したもので、これに側溝が付随する。側溝は浅い皿状を呈し、幅も250~310cmと中世期のものに比べ狭くなっている。「図説鎌倉回顧」などを見ると、明治期までの若宮大路には少なくとも2m近くの側溝が付設している。Ⅳ面の若宮大路側溝は幅などから、これに符合するものと思われる。

次のⅠ面でも若宮大路とそれに伴う側溝を確認した。Ⅱ面の若宮大路とⅣ面の若宮大路は、その肩部の位置と構築方法ともにはば同じである。この事から近世から近代にかけてこの道路面が系統的に使用されていたと考えられる。また、その間、道路幅は大路の東側では変化のなかったことが確認できる。側溝は、Ⅳ面のものに比べ、幅60cmと規模がかなり縮小し、その構築も簡単なものとなっている。上掲の「図説鎌倉回顧」の写真から想定するに、当該造構と側溝は大正以降に帰属するものと考えられる。

以上のように、若宮大路側溝は、中世には少なくとも6m以上もの幅を持つもので、何回かの掘り直しが行われる。その後、近世、近代と徐々にその幅は狭まり、簡素なものとなっていく。今回の調査では、中世から近代にかけての比較的良好な若宮大路資料を提示できたものと思われるが、更に今後の調査の増加に期待するものである。

出土した遺物は前述のとおり、Ⅱ面期に行われた削平によって大きく移動している。また、本報告では遺跡地の西側が対象となったために、主要造構は若宮大路とそれに伴う発掘深度規制のある側溝だけとなってしまったことも、それぞれの面毎の年代観を提示することを困難にさせている。近世以降の各面の年代は細かくは比定できないが、肥前染付、瀬戸窓、美濃窓の陶磁器類はおおよそ17世紀後半~18

世紀代の製品が多く出土しているようである。

中世面からは粉質胎土の手づくねかわらけが出土しているが、図示できなかった遺物の中には弥生土器と古式土師器から青磁櫛搔文碗や精良胎土の薄手丸深のかわらけなどが混じって出土しているため、年代確定はむずかしい。ただし、遺物の出土様相は年代的に近隣の調査地と変わらないと思われる。今後、削平を免れた民間調査部分の遺構より出土した遺物を整理していく上で、各面の年代が推定されると思われる。

引用・参考文献

- 大橋康二 1994 「古伊万里の文様」 理工学社
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1984 図録「北海道から沖縄まで 国内出土の肥前陶磁」
- 田口昭二・龍崎健治 1993 「多治見の古窯第3号 美濃窯の焼物」 多治見市教育委員会刊
- 白神典之 1992 「那須鉢考」「東洋陶磁」VOL.19 東洋陶磁学会
- 藤沢良祐 1987~89 「本業焼の研究(1~3)」「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要」VI~VII
- 中野晴久 1994 「赤羽・中野 生産地における幅年について」「全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集」
- 日本福祉大学知多半島総合研究所
- 馬淵和雄 1985 「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目371番-1地点発掘調査報告書」 鎌倉市教育委員会刊
- 馬淵和雄他 1996 「北条小町邸跡(泰時・時頼邸)雪ノ下一丁目377番7地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告
12」 鎌倉市教育委員会刊
- 岩本 葦 1988 「日本仏教語辞典」 平凡社
- 『図説鎌倉回顧』 鎌倉市、1969年

表1 遺物観察表(1)

開版	No.	出土地	種別	口径	底径	高さ	備考	
5	1	表浜	穿孔陶器皿	13	7.4	3.1	黒色微砂、小石を混じえる褐色弱粘質土 細粒	
5	2	表浜	鉢				「寛永通寶」	
6	1	I面上	透明釉灯明里受け皿	7.0	3.0	1.3	胎土は白色微砂を多く混じえる褐色弱粘質密土 透明釉	
6	2	I面上	志戸呂灯明皿上皿	9.9	5.2	2.1	胎土は白色微砂、雲母片を混じえる淡黄色弱粘質密土 鋼輪	
6	3	I面上	瀬戸灰釉德利			7.2	胎土は黒色、白色微砂を混じえる褐色弱粘質密土 軸は黄色	
6	4	I面上	美濃掛け分け仏花瓶			7.6	胎土は黒色微砂を混じえる褐色弱粘質密土	
6	5	I面上	導管鉢			32.0	胎土は白色微砂～小石を混じえる淡橙色弱粘土	
6	6	I面上	船載青磁碗			6.2	裏面は黒色、白色微砂を混じえる褐色弱粘質土 細粒は不透明な灰味水色 見込みに「金玉滿堂」が押捺される	
6	7	I面上	肥前染付鉢			7.2	4.0	6.0 文様は外面に手描きの草花文
6	8	I面上	肥前染付蛇ノ目輪ハギ皿			13	6.1	2.8 文様は内面に手描きの草花文、見込みはコンニャク印判による五弁花文
6	9	I面上	肥前染付蛇ノ目輪ハギ皿			13.0	6.3	2.8 文様は内面に手描きの草花文、見込みはコンニャク印判による五弁花文
6	10	I面上	肥前染付角皿			7.8	文様は外面に手描きの文様 内面は手描きの区画、魚文、草花文	
6	11	I面上	肥前染付蓋			7.4	2.5 文様は外面に輪文と手描きの宝文	
6	12	I面上	肥前染付仏瓶器			4.0	文様は外面にのみ手描きの文様	
6	13	I面上	瀬戸、美濃染付温存 みぬ			9.0	8.8	4.7 文様は外面と見込みに手描きの植物文
6	14	I面上	瀬戸、美濃染付小瓶			8.4	3.0	4.0 文様は外側面に手描きの文様 口唇部は口錠がめぐる
6	15	I面上	瀬戸、美濃染付小瓶			8.2		文様は外側面に輪文、銅版転写と手描きによる松葉文
6	16	I面上	瀬戸、美濃染付碗			10.4	4.6	6.0 文様は外側面に輪文と手描きの山水文 内面は輪文と見込みに手描きの文様
6	17	I面上	瀬戸、美濃染付皿			11.4	6.0	2.3 文様は外側面に手描きの文様 底裏に「梅花」 内面は銅版転写と手描きの提灯
6	18	I面上	瀬戸、美濃染付型作 リレンジ					文様は内外側面に紙摺りによる草花文
6	19	I面上	キセル彫首			遺存長	6.05	
6	20	I面上	刀子？			遺存長	28.3	
8	1	I面 若宮大路	瀬戸灰釉片口鉢			20		胎土は黒色微砂、白色細石を混じえる黄白色弱粘土 軸は黄色を呈する
9	1	I面 若宮大路 路筋	鐵					「寛永通寶」
10	1	I面下	肥前青磁火入れ			7.0		軸は淡草緑色を呈する
10	2	I面下	肥前染付小壺			3.8	3	3.1 手描きによる「くさつ」
10	3	I面下	灰釉小瓶			5.0	2.8	2.5 底地不明 胎土は白灰～淡橙色弱粘質密土 軸は灰緑色を呈する
10	4	I面下	銅版彷彿具			5.6		胎土は淡橙茶色弱粘質密土 軸は灰茶～茶黒色を呈する
10	5	I面下	鏡			遺存長	4.7×3.0	天草産と思われる銅版觀底岩
10	6	I面下	骨製ヘラ			10.35	×1.5×0.45	
12	1	II面 若宮大路	肥前染付小壺			9.4	5.0	2.8 外面は輪文と手描きの梵字崩し 内面は輪文と見込みに手描きの「釋」
12	2	II面 若宮大路	砥石			5.7	×3.7×0.3	鳴海中山産の泥岩製
14	1	II面 土壤3	瀬戸鶴茶碗			4.2		胎土は淡黃色弱粘質密土 砥石は黄味淡緑色、気泡は茶褐色を呈す
14	2	II面 土壤3	美濃灰釉灯明皿			10.8	4.2	1.7 胎土は淡黃灰土色 軸は淡黃色の半透明釉
14	3	II面 土壤3	美濃青磁井物台付燈 火受け付き皿			7.1	4.2	5.0 胎土は白灰色弱粘質密土 軸は淡緑色を呈する
14	4	II面 土壤3	肥前青磁火入れ			6.2	4.9	5.2 軸は淡青色を呈する
14	5	II面 土壤3	牽地不明 絵巻象嵌			9.0	3.8	6.4 黒色微砂をわずかに混じえる灰色弱粘質密土 軸は濃深緑色を呈する
14	6	II面 土壤3	木製蓋			20.5	×20.9×0.6	全面に赤色漆が塗布される
14	7	II面 土壤3	膠材			30.1	×3.3	
15	1	II面下	手づくねわらけ			9.6	8.0	2.0 胎土は黒色微砂を多く混じえる淡橙色質土
15	2	II面下	手づくねわらけ			12.6	11.6	3.3 胎土は黒色微砂を多く混じえる淡橙～褐色質土
15	3	II面下	瀬戸鉄物滴落蓋			蓋径4.3	高1.7	胎土は白色微砂を混じえる灰白色弱粘土 軸は暗緑茶色を呈する

表2 遺物觀察表(2)

回版	出土地	種別	口径	底径	高さ	備考
15	4 Ⅱ面下	瀬戸鉄軸寄せ	10.8			受け径8.1 地土は黒色微砂と石英小石を混じえる淡黄色粉質土
15	5 Ⅱ面下	鏡		3.9×3.3×1.1		黒色結板岩
15	6 Ⅱ面下	鋤製骨		5.2×1.2×0.1		
17	1 Ⅲ面若宮大路側溝	糸切りかわらけ	7.6	5.0	1.9	地土は淡橙色弱粉質土
17	2 Ⅲ面若宮大路側溝	糸切りかわらけ	7.4	4.4	2.0	地土は白色微砂、土丹粒、雲母片を混じえる淡橙色弱粉質土
17	3 Ⅲ面若宮大路側溝	糸切りかわらけ	8.2	4.8	2.2	地土は黒色微砂、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
17	4 Ⅲ面若宮大路側溝	糸切りかわらけ	9.0	6.4	2.6	黒色微砂を多く混じえる淡橙色粉質土
17	5 Ⅲ面若宮大路側溝	糸切りかわらけ	14.2	8.3	3.6	黒色微砂、土丹粒、白針を混じえる淡橙色粉質土
17	6 Ⅲ面若宮大路側溝	土錐		全長 3.9×2.5		
17	7 Ⅲ面若宮大路側溝	瀬戸搖鉢				地土は黄白色弱粉質土
17	8 Ⅲ面若宮大路側溝	瀬戸搖鉢				地土は淡橙色弱粉質土
17	9 Ⅲ面若宮大路側溝	瀬戸搖鉢板用唐焼陶片				地土は黄白色弱粉質土
17	10 Ⅲ面若宮大路側溝	美濃長石釉皿	12.8	7.8	2.66	地土は淡黄色土 粒は乳白色
17	11 Ⅲ面若宮大路側溝	美濃長石釉皿			6.4	地土は灰土色 粒は淡灰色
17	12 Ⅲ面若宮大路側溝	美濃長石釉天茶碗	10.5			地土は白色砂+微砂を混じえる淡黃白色粉質土 粒は黄白色
17	13 Ⅲ面若宮大路側溝	瀬戸天目茶碗				地土は黄味灰白色微密土
17	14 Ⅲ面若宮大路側溝	瀬戸鉄筋皿	11.4	6.8	2.2	地土は黄味灰白色粉質土
17	15 Ⅲ面若宮大路側溝	高取?灰軸香炉	16.1	6.8	3.85	地土は白色微砂を混じえる暗赤褐色弱粘質土 粒は暗緑色
17	16 Ⅲ面若宮大路側溝	舶載染付壺				素地は黑色砂粒を混じえる白灰色粘質密土 文様は手描きの草花文
17	17 Ⅲ面若宮大路側溝	舶載?染付壺		14.0		素地は黒色、白色微砂を混じえる淡灰色弱粘質土 文様は見込みに手描きの草花文
17	18 Ⅲ面若宮大路側溝	肥前染付碗		4.7		内外面ともに輪文と手描きの文様
17	19 Ⅲ面若宮大路側溝	鏡軸用鏡石		7.3×5.9×1.5		灰綠色を呈する船井石製
17	20 Ⅲ面若宮大路側溝	釣		4.4×0.4×0.4		
17	21 Ⅲ面若宮大路側溝	キセル吸い口		遺存長 5.1		
17	22 Ⅲ面若宮大路側溝	キセル吸い口		全長 8.7×1.2		
17	23 Ⅲ面若宮大路側溝	鉢				「開元通寶」
17	24 Ⅲ面若宮大路側溝	おたま		全長 32.2		
17	25 Ⅲ面若宮大路側溝	供養塔		17.0×4.4×0.25		「六道四生三界万靈」
17	26 Ⅲ面若宮大路側溝	供養塔		17.0×4.9×0.25		「帰真」「明春神門」「宗口神門」
17	27 Ⅲ面若宮大路側溝	供養塔		16.8×4.6×0.2		「帰真」「□□神定門」「道林神定門」
17	28 Ⅲ面若宮大路側溝	供養塔		13.5×4.4×0.25		「□嵐」「□□神門」「朋闇神門」
17	29 Ⅲ面若宮大路側溝	供養塔		11.4×4.6×0.2		「□直」「□梅」「月明」「□」
17	30 Ⅲ面若宮大路側溝	供養塔		17.0×3.55×0.2		判読不可
17	31 Ⅲ面若宮大路側溝	供養塔		8.3×2.1×0.25		判読不可
18	1 IV面下	手づくねかわらけ	7.8	6.9	1.7	地土は黑色、白色微砂を多く混じえる淡橙色粉質土
18	2 IV面下	糸切りかわらけ	8.4	7.0	1.6	地土は黒色微砂、雲母片、白針を混じえる橙色粉質土
18	3 IV面下	糸切りかわらけ	8.6	7.3	1.6	地土は黑色、白色微砂、雲母片を混じえる橙色粉質土

表3 遺物調査表(3)

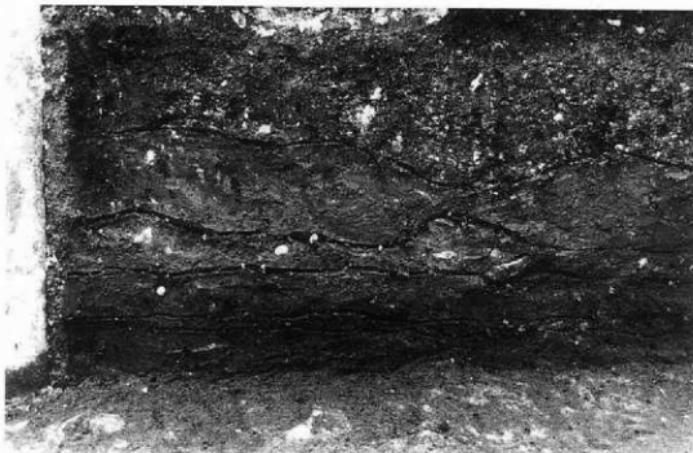
図版	No.	出土地	種別	口径	底径	高さ	備考
18	4	IV面下	糸切りかわらけ	9.2	7.2	1.7	胎土は黒色微砂、白針を混じえる淡橙色砂質土
18	5	IV面下	糸切りかわらけ	8.2	5.0	1.4	胎土は白色、黒色微砂を混じえる橙色砂質土
18	6	IV面下	糸切りかわらけ	9.0	6.6	1.8	胎土は黒色微砂をわずかに混じえる橙色砂質土
18	7	IV面下	糸切りかわらけ	13.3	9.6	3.1	胎土は黒色微砂、雲母片を多く混じえる肌色砂質土
18	8	IV面下	糸切りかわらけ	11.8	6.0	2.2	胎土は黒色微砂、雲母片をわずかに混じえる淡橙色砂質土
18	9	IV面下	極小かわらけ	4.6	3.0	1.1	胎土は黒色微砂、雲母片を混じえる橙色砂質土
18	10	IV面下	白かわらけ	7.2	4.0	1.6	胎土は黒色微砂、雲母片を混じえる白色砂質土
18	11	IV面下	瓦器碗				胎土は混入物の少ない灰味白色砂質密土
18	12	IV面下	瓦質輪火型火鉢				胎土は黒色、白色微粒を多く混じえる灰色砂質土
18	13	IV面下	蘭美甕				胎土は黒色微砂、黄土小石～微粒を多く混じえる灰色砂質密土
18	14	IV面下	美濃燈明皿受け皿	10.0	5.2	2.0	受け径6.8 胎土は黄味灰色弱粘質密土 軸は鉄軸
18	15	IV面下	美濃燈明皿受け皿	7.4	3.0	1.3	受け径4.2 胎土は黄味灰色弱粘質密土 軸は鉄軸
18	16	IV面下	京焼風陶器灯明皿	8.4	3.1	1.9	胎土は黄白色弱粘質密土 軸は半透明軸
18	17	IV面下	京焼風陶器灯明皿	9.4	4.2	2.1	胎土は黄白色弱粘質密土 軸は透明軸
18	18	IV面下	美濃御深井軸皿		4.6		胎土は灰白色弱粘質密土 軸は淡緑色半透明軸
18	19	IV面下	美濃御深井軸皿		7.0		胎土は灰白色弱粘質密土 軸は淡緑色透明軸 鉄輪は明茶色を呈する
18	20	IV面下	美濃軸小豆	6.6	5.0	6.5	胎土は黒色微砂をわずかに混じる黄白色弱粘質密土 軸は淡青味灰色を呈する不透明軸
18	21	IV面下	美濃德利		3.7		胎土は黒色微砂を混じる灰色砂質土
18	22	IV面下	瀬戸鉄軸德利		13.0		胎土は黒色砂を少量混じる淡黄色砂質土 軸は濃茶色を呈する
18	23	IV面下	瀬戸灰軸德利		9.4		胎土は淡黃白色砂質土 軸は淡黄色を呈する
18	24	IV面下	瀬戸跳輪香炉	15.4	10.6	7.0	胎土は黒色微砂、白色砂を混じえる白色砂質土 軸は暗茶色を呈する
18	25	IV面下	相馬？銅鏡軸上部				胎土は黄味弱粘質密土 軸は青緑色を呈するが、二次焼成を受け一部白漏
18	26	IV面下	砥石		5.3×6.8×4.2		淡紅～白色を呈する凝灰岩
18	27	IV面下	キセル彫首	全長	3.7		羅字径1.1 火直径1.5
18	28	IV面下	船載青磁割花文碗	14.1			素地は灰白色弱粘質密土 軸は淡灰青色を呈する
18	29	IV面下	船載青磁割花文碗		4.4		素地は灰白色弱粘質密土 軸は灰綠色を呈する
19	1	IV面下	肥前染付小碗	9.0	4.4	4.6	文様は外面上に手描きの山水文
19	2	IV面下	肥前染付小碗	9.8			文様は外面上に手描きの山水文
19	3	IV面下	肥前染付碗	11.4			文様は外面上に手描きの竹文
19	4	IV面下	肥前染付碗	11.0	4.4	6.2	文様は外面上に手描きの松竹梅 見込みは輪文と手描きの梅
19	5	IV面下	肥前染付広東鏡	11.2	6.6	6.2	文様は外面上に輪文と手描きの梵字鏡し 内面は輪文
19	6	IV面下	肥前染付猪口	7.9	3.4	5.0	文様は外面上に手描きの区画間、格子文、花文
19	7	IV面下	肥前染付猪口	8.8			文様は外面上に手描きの人物 内面は帶縞の中に列点
19	8	IV面下	肥前染付鉢ノ目輪ハ平皿	13.1	7.8	3.0	文様は内面上に手描きの草花文、見込みはコンニャク印判による五弁花文
19	9	IV面下	肥前染付皿	12.6	7.0	3.8	文様は外面上に輪文と手描きの唐草文、底裏は満福 内面は手描きの松葉、見込みはコンニャク印判による五弁花文
19	10	IV面下	肥前染付皿		5.0		文様は内面上に手描きの日字臘飴文
19	11	IV面下	肥前染付皿		4.0		文様は外面上に輪文と手描きの文様 見込みにコンニャク印判による五弁花文
19	12	IV面下	肥前染付盃洗		8.8		文様は外面上に手描きの蓮弁文 見込みに吹墨技法による月と雁
19	13	IV面下	瀬戸、美濃染付皿		8.0		文様は内面上に銅版鉛写による「君が代」
22	1	V面若宮大路側溝	糸切りかわらけ	7.2	4.6	2.0	胎土は黒色微砂、雲母片、土丹粒を混じえる淡茶色弱粘質土
22	2	V面若宮大路側溝	糸切りかわらけ	7.6	5.5	1.7	胎土は雲母片、白針、土丹粒を混じえる淡茶色弱粘質土
22	3	V面若宮大路側溝	糸切りかわらけ	7.2	4.3	2.3	胎土は白色微砂、白針を混じえる淡茶色弱粘質土
22	4	V面若宮大路側溝	糸切りかわらけ	11.2	7.4	3.1	胎土は黒色微砂を多く混じえる淡橙色砂質土
22	5	V面若宮大路側溝	糸切りかわらけ	13.4	9.1	3.6	胎土は白色微砂、白針を混じえる橙色弱粘質土
22	6	V面若宮大路側溝	船載青磁碗	12.8			素地は黒色微砂を混じえる明灰色弱粘質土 軸は草緑色を呈する

表4 遺物観察表(4)

図版	No.	出土地	種別	口径	底径	器高	備考
22	7	V面若宮大 路側溝	甕		8.9	2.3×0.95	黒色粘板岩
22	8	V面若宮大 路側溝	砥石		5.8	1.8×1.2	天草産 磨拭岩製
22	9	V面若宮大 路側溝	砥石		7.7	2.2×2.25	船模周辺産 磨拭岩製
23	1	V面直上	釦			遺存長 6.3×0.4	
23	2	V面直上	土製碁石		1.9	1.9×0.6	胎土は褐色かわらけ質土
24	1	V面下	白かわらけ	6.6	6.0	1.2	胎土は白色粉質土
24	2	V面下	手づくねかわらけ	8.2	6.4	2.7	胎土は黒色板砂、雲母片を多く混じえる淡茶色砂質土
24	3	V面下	手づくねかわらけ	13.7	11.8	2.7	胎土は黒色板砂、雲母片、白針を混じえる肌色粉質土
24	4	V面下	手づくねかわらけ	13.1	11.6	3.5	胎土は黒色板砂、雲母片、白針を混じえる肌色粉質土
24	5	V面下	船載青白磁合子蓋				受け径6.2 素地は灰味白色弱粘質緻密土 裏は淡水色を呈する
24	6	V面下	瓦器碗				胎土は白色粉質緻密土
24	7	V面下	釦		6.3	0.5×0.6	

写 真 図 版

調査区標準堆積土層断面図
(調査区南壁) ▶



I面全景 (東より望む) ▶



図版 2





I 面若宮大路道路面▲

▼ II 面検出状況

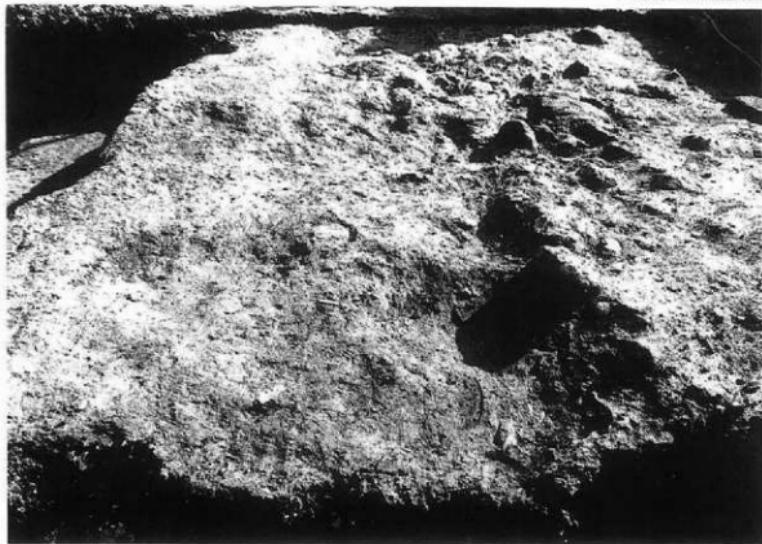


図版 4



II面若宮大路及び側溝▲

▼ II 面若宮大路道路面





若宮大路側溝土層断面図（右側が若宮大路道路構成土）▲

▼Ⅲ面標層検出状況



図版 6



II面砾層遺物出土状況▲

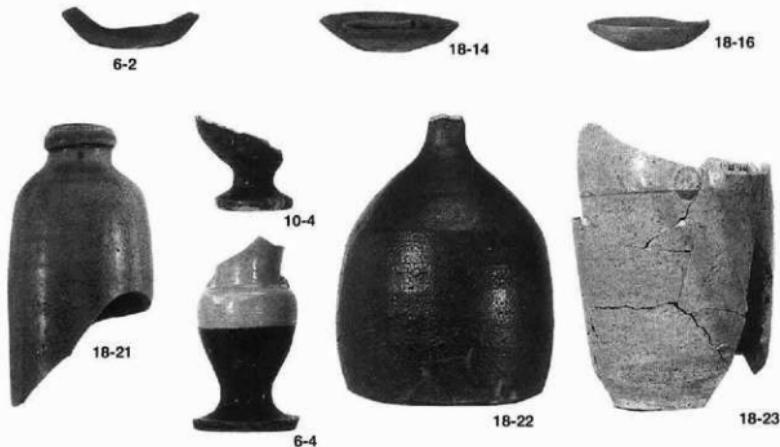
▼V面全景 (西側より望む)



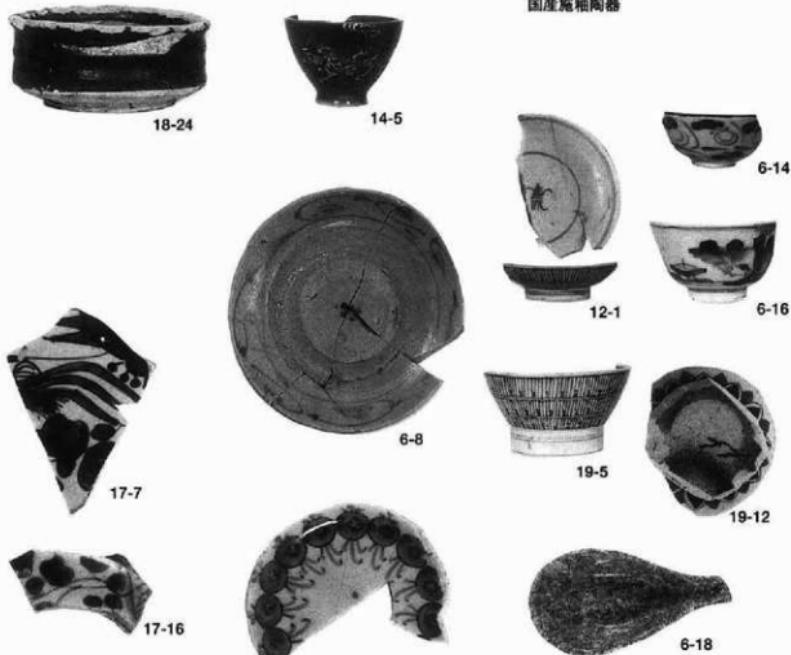


V面若宮大路側溝東便肩部▲

図版 8



國產施釉陶器



明染付

出土遺物（1）



17-31



17-29



17-28



17-30



17-27



17-25
供養塔



17-26



17-24

金属製品 出土遺物 (2)

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14							
副書名	平成9年度発掘調査報告							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	土屋浩美							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 神奈川県鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦1998年3月							
ふりがな 所取遺跡名	しょざいち 所 在 地	コ ー ド	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
市町村	遺跡番号		°'	°'				
北条小町邸跡	かながわけんかまくらしゆきのした 神奈川県鎌倉市雪ノ下一丁目370番1	204	No.282	35° 19' 19"	39° 33' 28"	1996.4.22 / 1996.5.14	40m ²	自己用住宅建 設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
北条小町邸跡	居館 都市	鎌倉時代 近代	近代若宮大路 ・大路側溝 近世若宮大路 ・大路側溝 ・杭列 中世若宮大路側溝				・鎌倉時代の若宮大路側溝を検出 ・近世～近代の若宮大路及び側溝を検出	

えんがくじきゅうけいだいいせき
円覺寺旧境内遺跡 (No.434)

山ノ内字瑞鹿山509番1地点

例　　言

1. 本報は円覚寺旧境内遺跡（No.434）として神奈川県遺跡台帳に登録された範囲の内、鎌倉市山ノ内字瑞鹿山509番1地点に所在する遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は自己用住宅建設に伴う国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査面積は59.5m²、期間は平成8年5月24日～7月13日までの実働43日間で行なわれた。
4. 現地での調査体制は以下の通り。

主任調査員 菊川英政（鎌倉考古学研究所）

調査員 石丸運人・野本賢二

調査補助員 鍛冶屋勝二

協力機関名 ㈳鎌倉市シルバー人材センター

布湘和総合開発

㈱パレオ・ラボ

5. 本報作成は以下の分担で行なった。

遺物実測 兼行枕枝

図版作成 小林重子・石丸運人・兼行枕枝

原稿執筆 菊川英政・兼行枕枝

編集作業 菊川英政

花粉分析 ㈱パレオ・ラボ

6. 出土品等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	321
第二章 調査の概要	325
1. 調査の経過	325
2. 測量軸の設定	325
3. 堆積土層と生活面	325
第三章 発見された遺構	329
1. 一面の遺構	329
2. 二面の遺構	331
3. 三面の遺構	339
4. 最終確認トレンチ	339
第四章 出土遺物	341
1. 一面出土の遺物	341
2. 二面出土の遺物	341
3. 三面出土の遺物	348
4. その他の遺物	358
※ 遺物観察表／遺物点数表	363
第五章まとめ	375
1. 年代と変遷	375
2. 建物の性格	376
3. 遺物の様相	376
付 編 円覚寺旧境内遺跡の花粉化石	399
※ 報告書抄録	410

挿図目次

図1 遺跡位置図	322	図12 柱間距離	337
図2 円覚寺境内縦断図	324	図13 南西部落ち込み	338
図3 グリッド設定図	326	図14 三面検出遺構全体図	340
図4 土層堆積図	327	図15 一面出土遺物	342
図5 一面検出遺構全体図	328	図16 二面上包含層出土遺物（1）.....	343
図6 二面検出遺構全体図	330	図17 二面上包含層出土遺物（2）.....	344
図7 遺物集中範囲・微細図	332	図18 二面北部炭層出土遺物（1）.....	345
図8 建物1	333	図19 二面北部炭層出土遺物（2）.....	346
図9 建物2	334	図20 二面南部青砂層出土遺物（1）.....	347
図10 建物3	335	図21 二面南部青砂層出土遺物（2）.....	348
図11 建物4	336	図22 二面南部炭層出土遺物	349

図23	遺物集中範囲出土遺物（1）	350
図24	遺物集中範囲出土遺物（2）	351
図25	二面南端部砂層出土遺物	352
図26	二面柱穴出土遺物（1）	353
図27	二面柱穴出土遺物（2）	354
図28	二面柱穴出土遺物（3）	355
図29	二面柱穴出土遺物（4）	356
図30	柱穴位置図	356
図31	二面南西部落ち込み出土遺物（1）	357
図32	二面南西部落ち込み出土遺物（2）	358
図33	三面黒褐色粘土層出土遺物（1）	359
図34	三面黒褐色粘土層出土遺物（2）	360
図35	三面土壙・その他の遺物（1）	361
図36	その他の遺物（2）	362
図37	13世紀末葉の遺物	377

図版目次

図版1	調査開始風景／II区一面全景	381
図版2	I区一面全景／溝	382
図版3	I区二面上層／下層	383
図版4	II区二面下層／板壁状遺構	384
図版5	飾り金具／曲げ物出土状態	385
図版6	II区二面P43／P53／祓板ほか	386
図版7	南部炭屑遺物出土状態	387
図版8	II区二面遺物集中範囲	388
図版9	II区二面南西部落ち込み	389
図版10	I区三面段状遺構1	390
図版11	II区二面落ち込み断面／三面土壙	391
図版12	II区三面全景／中央部分	392
図版13	II区三面地割れ痕	393
図版14	I区最終トレンチ／土層の状態	394
図版15	出土遺物（1）	395
図版16	出土遺物（2）	396
図版17	出土遺物（3）	397
図版18	出土遺物（4）	398

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

調査地点はJR横須賀線・北鎌倉駅ホームの南側、主要地方道横浜・鎌倉線（旧鎌倉街道）に沿って北西へ流れる小袋谷川の右岸にある。この一帯は鎌倉市と藤沢市の境となる柏尾川から東南東へ深く湾入した沖積低地であり、本地点はその最奥部近く海拔20m程の所に位置している。南側に連なる海拔40～50mの丘陵上では台山藤源治遺跡に代表される古代集落址が調査され、縄文時代の陥し穴と弥生時代・古墳時代・平安時代の堅穴住居、中世期削平面や道路・橋列などが見つかっている。また、遺跡範囲内及びその周辺では円覚寺明池で近世の護岸が、続燈庵では14世紀後半～15世紀の地下式塙2基と中世の石切り場跡、如意庵では18世紀中頃の堂址が検出され、急傾斜崩壊対策事業に伴うやぐらの調査では、構築年代不明ではあるが合計17基のやぐらが調査報告されている。（図1）

円覚寺は瑞鹿山円覺興聖禪寺と号し、弘安五年（1282年）に無学祖元を開山として北条時宗が創建した臨濟宗円覚寺派の本山である。境内の主要部分は既に国指定史跡となっており、円覚寺旧境内遺跡は建武元年（1334年）頃に描かれた「円覚寺境内絵図」（図2）と概ね重複する範囲を指している。

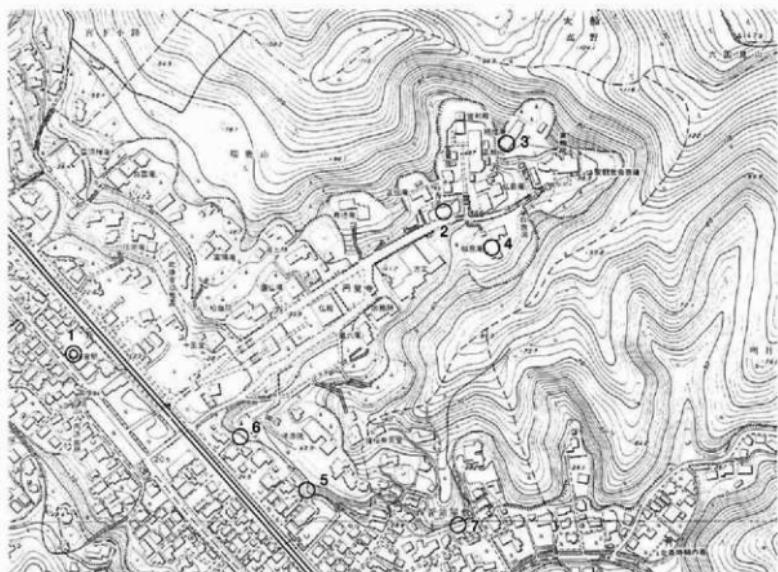
同絵図によれば本調査地点は総門左手の正觀寺前面、ちょうど空閑地となっている辺りに該当する。北方にある正觀寺は円覚寺とは別の禅寺で、今は廃寺となっているが、円覚寺二世の大休正念が示寂した寺（『元亨享訖書』）として知られ、円覚寺文書中では古く弘安七年（1284年）に名前が見える。その後、元亨三年（1323年）の北条貞時十三年忌供養の際には6人の僧衆が参加するなど鎌倉時代を通じて存在したようであるが、同絵図以後の史料は見当たらず寺史など詳しい事は判らない。なお、正觀寺前の土地はもともと円覚寺のものか不明であるが、嘉元四年（1306年）山内庄吉田郷の田一町と在家一字が当該地の替えとして円覚寺に寄進され、徳治三年（1308年）に戻されていることからすると、14世紀初頭には円覚寺の管理する地となっていたようである。

ところで、円覚寺は創建後間もない弘安六年（1283年）で僧100人、行者人工100人、承仕等20人、洗衣4人、方丈行者6人、下部38人の計268人を擁する大寺院であり、北条氏の厚い保護のもとで諸国から集まる修学僧は年々増加した。僧衆の数は暦応三年（1340年）に300人を超えないように規制を受けるが、こうした人員を収容する寮舎も当然整備された筈である。円覚寺門前の地は寺院に仕える半僧半俗の雜役夫らに配分され、地子を取って貸し出されたようである。門前屋地の事として建武四年（1337年）に74間、貞和四年（1348年）に82間が円覚寺正統院の承仕・小番に宛てがわれ、実際の居住者の内には疊刺（疊職人）がいたことも判っている。同絵図では総門外の道を隔てた南側に簡素な建物群が描かれているが、そうした庶民居住区の様子を写したものと思われる。

最後に、本地点に少なからず影響を与えたであろう災害について列記しておく。

＜火災・地震の記録＞

- ・建保元年（1213年）五月廿一日辛酉、午刻大地震、舍屋破壊崩地裂（中下馬橋辺か）、『吾妻鏡』
- ・嘉祐三年（1227年）三月七日丙辰、陰、戌刻大地震、所々門扉築地等転倒、又地割云々、『吾妻鏡』
- ・仁治二年（1241年）四月三日辛酉、晴、戌刻大地震、南風、由比浦大島居内坪殿被引潮流失、着岸船十余艘破損、『吾妻鏡』
- ・正嘉元年（1257年）八月廿三日乙巳、晴、戌刻大地震有音、神社仏閣、一字面無全、山岳顛崩、人屋転倒、築地皆悉破損、所々地裂水湧出、中下馬橋辺地裂破、自其中火炎燃出、色



a. 円覚寺周辺の調査地点 (1/5,000)



b. 調査地点の周辺 (1/1,000)

〈遺跡名および地点別報告書〉

円覚寺境内遺跡 (No. 434)

1. 本調査地点
2. 「円覚寺境内(明香池)」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』鎌倉市教育委員会 1983年
3. 「円覚寺縦燈庵」縦燈庵境内遺跡発掘調査団 1990年
4. 「如意庵」円覚寺境内如意庵遺跡発掘調査団 1990年

帰源院下やぐら群 (No. 176)

5. 「円覚寺境内西やぐら群発掘調査報告書」円覚寺境内西やぐら群発掘調査団 1983年
6. 「帰源院下やぐら群」神奈川県立埋蔵文化財センター 1985年
『帰源院下第8号やぐら』相武考古学研究所 1996年

西管領屋敷南やぐら群 (No. 212)

7. 「西管領屋敷南やぐら群発掘調査報告書」西管領屋敷南やぐら群発掘調査団 1984年

図1 遺跡位置図

青云々、『吾妻鏡』

- ・弘安十年（1287年）十二月二十四日 火災。（罹災程度不明）『北条九代記』『武家年代記裏書』
- ・正応三年（1290年）十二月十二日 火災。『北条九代記』『建長寺年代記』
- ・正応六年（1293年）四月十三、十四日、廿四日戌、晴、参内（中略）去十三日晚関東大地震（震）及數刻之間、將軍御所并若宮ヨリ始天至在家民屋等多以破損入又多死去之由風聞、山岸等又散々凡非所及言語云々、先代未聞珍事也。（建長寺転倒仍火出来焼失云々）、元暦（建暦）元年歎有如此事歎凡不可說之云々。『実射御記』
十三日大地震、鎌倉中ノ山々崩、打殺サル者二千五百余人ト云リ。『神明鏡』
- ・正和五年（1316年）火災。
- ・文保二年（1318年）火災。
- ・応安六年（1373年）十一月十七日 火災。『武家年代記裏書』『続史愚抄』
- ・応安七年（1374年）十一月二十三日 火災。（主要伽藍焼失）『花營三代記』『空華日用工夫略集』
- ・応永八年（1401年）二月晦日 火災。『鹿山略記』
- ・応永十四年（1407年）十一月六日 火災。（主要伽藍焼失）『鎌倉公方九代記』
- ・応永廿八年（1421年）十一月十二日 火災。『鎌倉公方九代記』『武家年代記裏書』
- ・永享五年（1433年）九月十六日・永享五年癸丑九月十六日、大地震、鎌倉築地崩、極楽寺塔九輪落、總唐物共多損、大山二王頽落、前代未聞也、『神明鏡』
十月廿六日條、抑関東有不思儀之怪異、先大地震、堂舍転倒、人多死、八幡宮金燈爐焼失、（全焼云々）、又刀禰川逆ニ流云々、凡四箇条有不思儀、今一箇条不聞、去夏秋之間之事也、『看聞御記』
子刻大地震、夜中三十余度、築地倒懸、廿日間不止地震、『鎌倉大日記』
- ・長禄三年（1459年）一月四日 火災。『鎌倉大日記』
- ・明応七年（1498年）八月二十五日、大地震洪水、鎌倉山比濱海水到千度擅、水勢大仏殿破壊舍屋、溺死人二百余、『鎌倉大日記』
- ・大永五年（1525年）八月廿三日、日本大地震、別シテ鎌倉大地震、山比濱ノ川入江沼、皆埋テ平地ト成、廿七日迄兩夜ノ地震也、『塔寺八幡宮長帳帳』
- ・天文廿二年（1553年）八月戊戌、鎌倉風雨地震、鶴岡宮及堂社破壊、『續本朝通鑑』
- ・永禄六年（1563年） 火災。（山門・仏殿・開山塔など十余カ所焼失）

<引用・参考文献>

- 三浦勝男 1992年 『鎌倉の古絵図』（鎌倉国宝館図録第15集） 鎌倉国宝館
松尾兩次 1993年 『円覚寺境内絵図のコスモロジー』『中世都市鎌倉の風景』 吉川弘文館
高柳光寿・川畠武胤 1972年 『鎌倉市史』 社寺編 吉川弘文館
玉村竹二・井上禪定 1964年 『圓覺寺史』 鎌倉春秋社
東京大学地震研究所 1989年 『新収・日本地震史料』補遺 御日本電気協会
『震災豫防調査会報告』 第四十六號
『神奈川県史』 史料編2、3上 御神奈川県弘済会 1973年

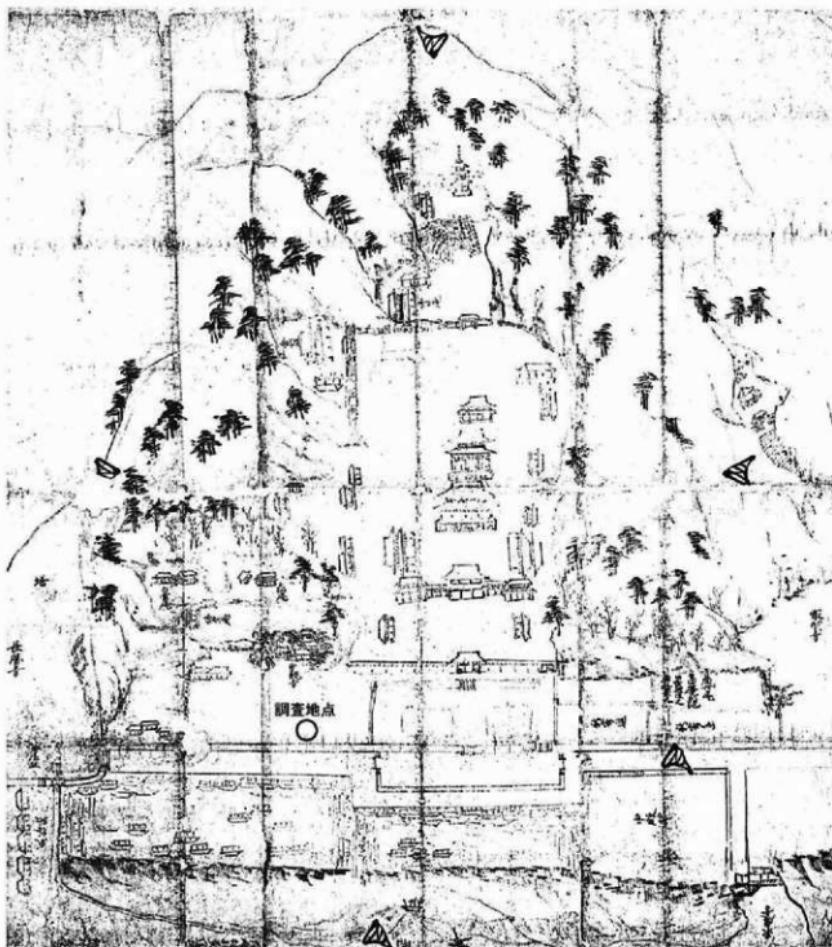


図2 円覚寺境内絵図

「鎌倉の古絵図」ヨリ複写

第二章 調査の概要

1. 調査の経過

鎌倉市教育委員会による試掘調査の後、既存家屋の解体を待って発掘調査に着手した。調査対象面積は新築家屋分59.5m²である。試掘調査の結果に従いバラス混じりの表土約20cm分を重機で除去した後、中世基盤層（地山）まで人力で掘り進めることになったが、調査地周辺はすでに家屋・店舗が建ち並び、空閑地も駐車場として利用されているため、ベルト・コンベア、事務所、トイレ等を設置するゆとりはなく、発掘調査に伴う堆土についても調査区内で処理する必要が生じた。そのため、調査区を東西二分して片側を調査、他方を堆土置場にあて、片側終了後に反転して調査を継続した。東側Ⅰ区は1996年5月27日～6月10日まで、西側Ⅱ区は6月11～7月5日までの期間で行ない、調査前後の準備・事務整理期間を含めて実働日数は43日間を費やした。

2. 測量軸の設定

調査に使用する測量軸は、調査区の形状にあわせて任意に設定した。測量方眼の間隔は2m、東西軸にA～Fまでのアルファベット、南北軸に0～4までの算用数字を付し、その交点はA 0、B 1、C 2、D 3のように表記した。南北軸は磁北に対して約51度東に傾いている。なお、鎌倉市が設置した4級基準点との位置関係は図3に示した通りで、もっとも近くにある基準点P 020の国土地標は（X -73835.684 / Y -25949.633）、北緯35度20分02秒 / 東経139度32分52秒である。

3. 堆積土層と生活面

堆積土層の観察は調査区壁面で行なった。小袋谷川に接した湿地であるため、壁面からは絶えず水が滲み出し、地表近くは土壤中の鉄分によって赤褐色に硬化した状態であった。

堆積土層は概ね10層に分けられる。1層は現代表土。2層上面は時期不明の生活面で、上端と溝を検出した。なお、小袋谷川の護岸裏込め0b層からは幕末～明治期の染め付け破片、0c層からは文久水宝が出土している。3層は鉄分が浸透しているためか2層との境が不明瞭な部分もある。

4層は炭化物と遺物を多量に含む軟質な土層で、調査区南側では4a・4b層に細分できる。しかし、層厚が薄いため同一層を平面的に精査することが難しく、柱穴の多くは黒褐色粘土層である7・8層上面まで下げて確認した。火災面およびその前後の時期の遺構が混在する結果となつたが、建物を復元把握するには都合良く、二面として合成図化した。5層は調査区南側、小袋谷川に沿って帶状に見られた。平坦で非常に硬く板張されており、二面建物に伴う通路／土間状の施設と思われる。6層はⅡ区南西部の落ち込み内堆積土。炭化物と木質腐敗土が互層状に堆積し木製品を含む。

7層は中世遺物を含む黒褐色粘土層。7a・7b層に大別でき、更に7b層は漸移的ではあるが数層に細分できる。また、7b層上面には植物種子（セリ科）がびっしりと付着し、一定期間低湿地であったことを示していた。これら7層をすべて除去した状態を三面として調査した結果、調査区南側は約1mの段差をもつて落ち込み、その下底面（10層上面）で地割れ痕と上端を検出した。

8層は7層とよく似た黒褐色粘土層。中世基盤である。漸移の変化は認められるが、無遺物で縮まり強く、層中に遺構は確認できなかった。9層はⅠ区トレントで確認された旧流路の堆積土。砂礫粒子の状態から自然埋没したことが判る。無遺物。10層は細粒質の青灰色粘土層。縮まり強いが表出して水が加わると溶け始め、非常に軟弱となる。無遺物。

以上の内、7b層～8層～9層～10層は自然堆積層である。

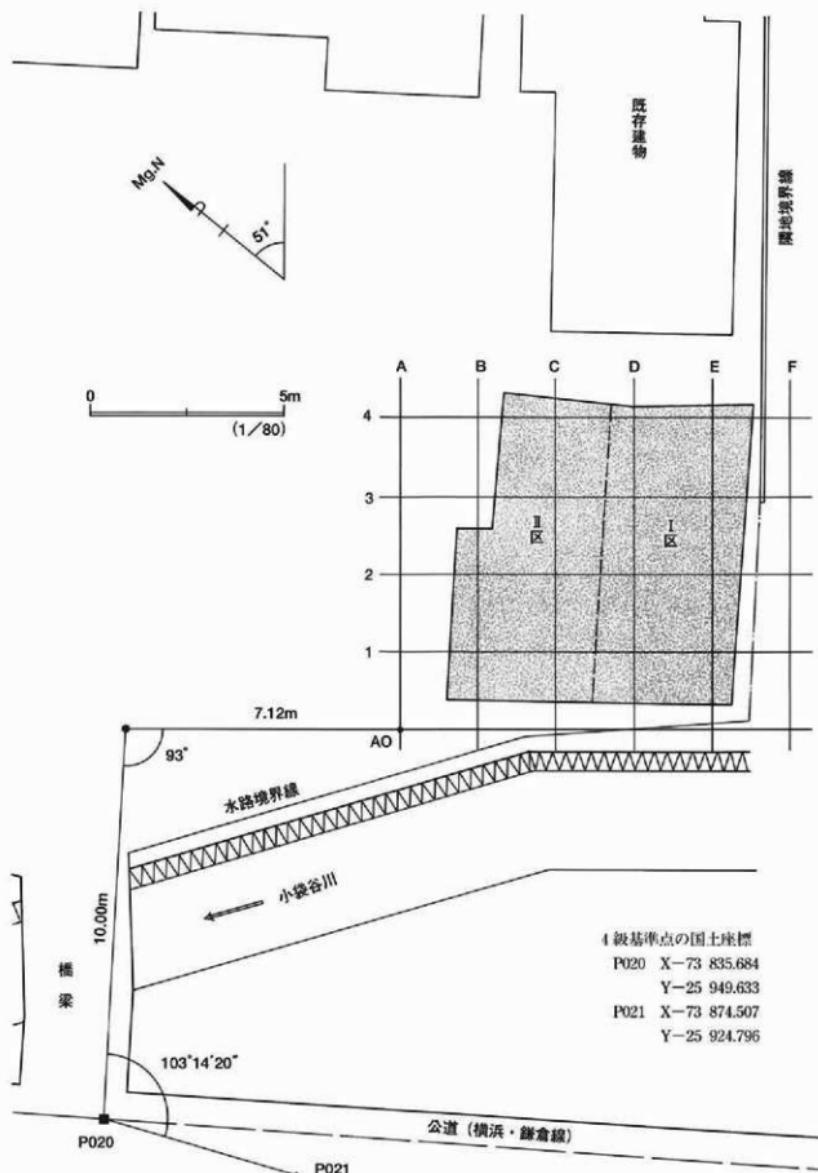
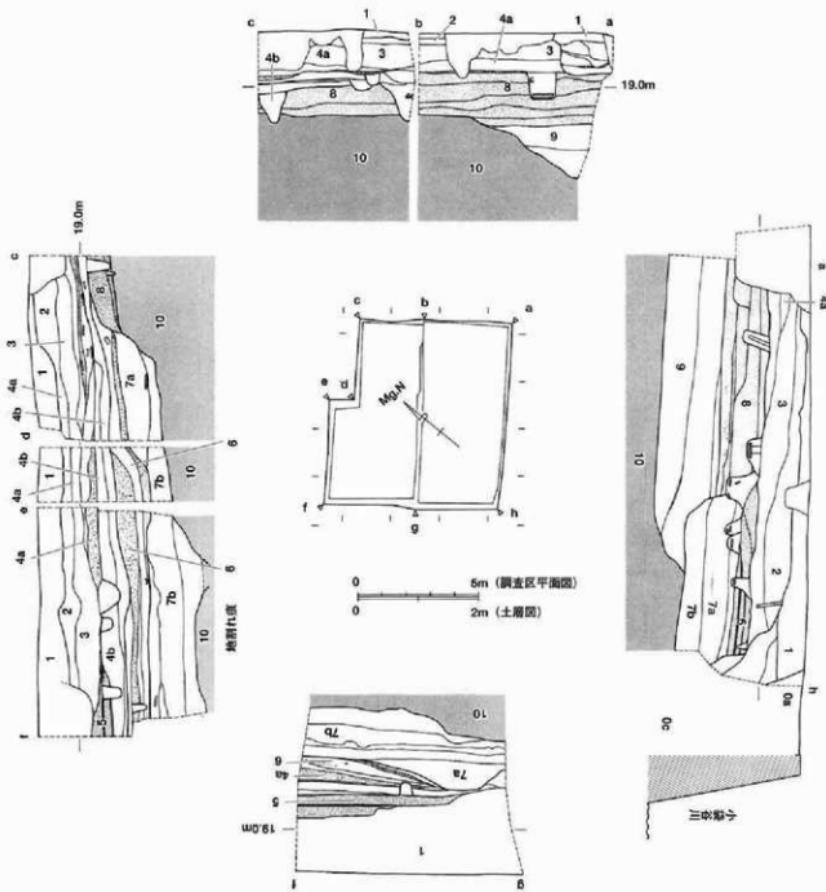


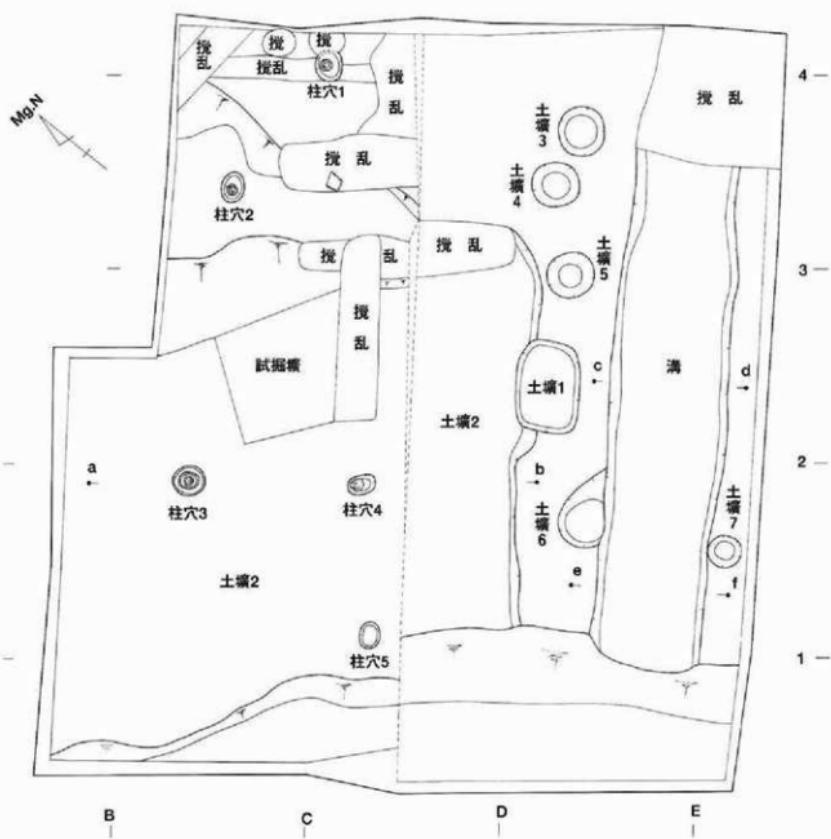
図3 グリッド設定図



〈土層説明〉

- 0 : 茶褐色土層 泥岩塊を含み縫まりなし。0a~0cに大削できる。(小袋谷川調岸の裏込め)
- 1 : 茶褐色土層 (現代土上及び脱風) 上面は鉄分が固着して硬化。
- 2 : 赤褐色土層 泥岩粒、炭粒含む。(中世遺物包含層)
- 3 : 黄褐色土層 炭粒、遺物を多量に含み、縫まりなし。
- 4 : 黒灰色土層 II段では軟泥w4aと4bに分層でき、4aは炭粒多く砂質、4bは粘土質で上面に硬化粘土面あるいは泥岩表面が部分的に見られる。
- 5 : 黄褐色砂層 薄い粘土層を境に分層可能。堅密されて硬化。一部青灰色に変色する。
- 6 : 黑灰色粘土層 炭粒多く下部に木質腐植物が堆積。(山内路落ち込み隕石)
- 7 : 黑褐色粘土層 变化は漸移的。植物種子を挟む層位を境として7a、7bに分層可能。中世基盤層と似ているが、縫より強く遺物を含む。
- 8 : 黑褐色粘土層 变化は漸移的。(中世基盤層)
- 9 : 青灰色砂礫層 上段から粘土質、細粒質砂、砂礫に分層できる。無遺物。(旧流路面上)
- 10 : 青灰色粘土層 粘土質。縫より強く無遺物。

図4 土層堆積図



〈土壤2および溝エレベーション図〉

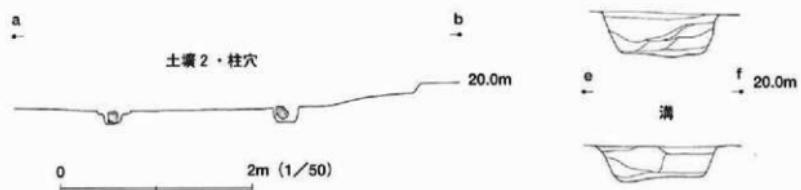


図5 一面検出遺構全体図

第三章 発見された遺構

1. 一面の遺構（図5）

一面は赤褐色に硬化した生活面で、小袋谷川が流下する南西側へ緩やかに傾斜している。調査区北壁付近は地表から20~30cmの深さしかないため、近現代のゴミ穴や電柱埋設用アンカーなどによって擾乱を受け、調査区南壁際は現在の小袋谷川護岸裏込めによって大きく切られていた。検出された遺構には以下のものがある。

溝… I区東壁際にあり、南端を小袋谷川護岸で切られ、北側を擾乱で壊されている。調査区北壁に溝の断面が残ることから、更に北方へ続くことが判る。

溝は上面幅1.2m、底面幅0.8~1m、深さ30~45cm。断面形状は箱形、溝壁の立ち上がりは急角度である。覆土は何層かに細分できるが概ね灰褐色土で占められ、最下部には暗灰色の粘土層が薄く堆積していた。また、E 3杭付近の溝内には凝灰岩切り石が投棄されており、寸法（長辺×短辺×厚さ）の判るものでは、板状（22×17×12cm）、（27×20×13cm）、柱状（25×20×19cm）など比較的小形の切り石が多く見られた。

土壤1… I区のはば中央で検出した。切り合い関係は不明瞭であるが、土壤2より新しいように思えた。平面形は長辺90cm、短辺50cmの隅丸長方形で、深さ15~20cm程の浅い土壤である。覆土は茶褐色砂質土。

土壤2… 平面的には方形を基本とするようであるが、壁立ち上がりに不明瞭な部分が多く、II区北側では緩やかな段差となっている。南側段差は約15cm、北側段差は約20cmの比高差があり、中段平場は海拔19.45m前後、下底面中央の海拔は19.25m前後である。土壤内には炭・泥岩類を含む灰褐色土が堆積しており、底面は鉄分が固着して赤褐色に硬化している。平面形状の不安定さから、土壤であるか単なる生活面の産みであるか判断に迷う遺構である。

柱穴… 建物を復元するには至らないが、同一建物と思われる柱穴がII区側で5穴あり、そのうち4穴には柱根が遺存する。柱根は直径9.5~10.5cmの丸太材で下端は水平に切られていた。近くにある柱根どうしの距離は次の通り。

柱穴1～柱穴2間：1.6m、柱穴3～柱穴4間：1.8m

また、柱根の遺存長および柱穴底面の海拔高（カッコ内）は次の通り。

柱穴1：約47cm（海拔19.26m）、柱穴2：約30cm（海拔19.17m）

柱穴3：約13cm（海拔19.17m）、柱穴4：約15cm（海拔19.08m）

柱穴5：なし（海拔19.07m）。

その他の遺構… I区土壤3～土壤7は出土遺物がなく、覆土の特徴についても記録がないため、擾乱

・土壤・柱穴のいずれであるか判断できない遺構である。平面形、直径、確認面からの深さ（底面の海拔高）は以下の通り。

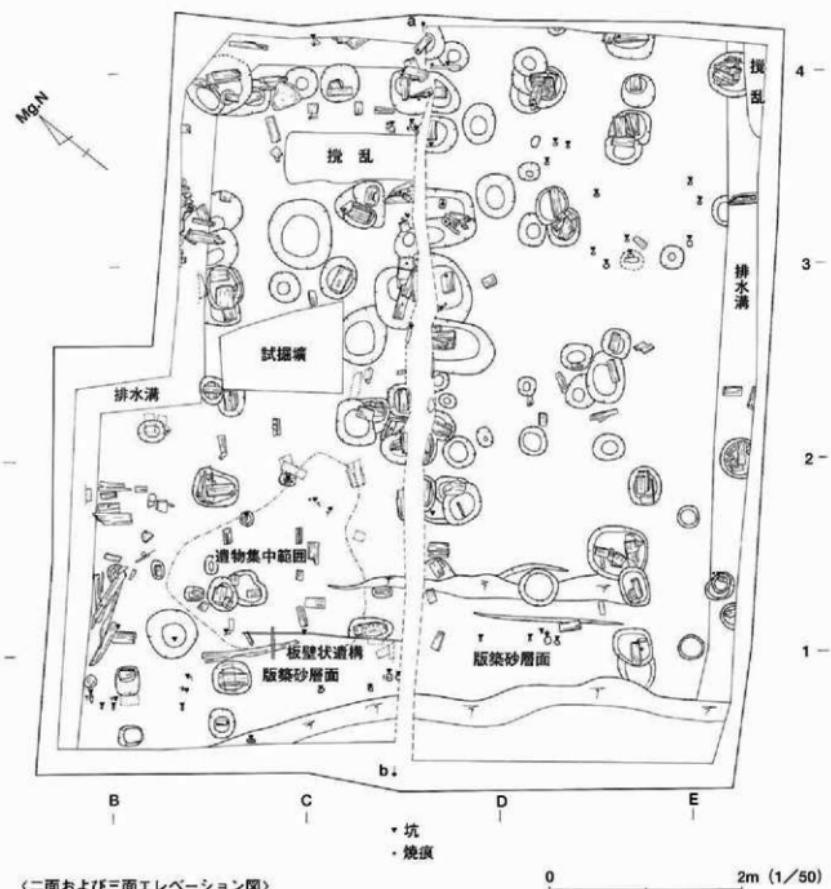
土壤3：円形 直径約50cm 深さ約15cm（海拔19.45m）

土壤4：円形 直径約50cm 深さ約19cm（海拔19.47m）

土壤5：円形 直径約50cm 深さ約27cm（海拔19.40m）

土壤6：不整円形 直径約50cm 深さ約15cm（海拔19.35m）

土壤7：円形 直径約35cm 深さ約6cm（海拔19.45m）



〈二面および三面エレベーション図〉

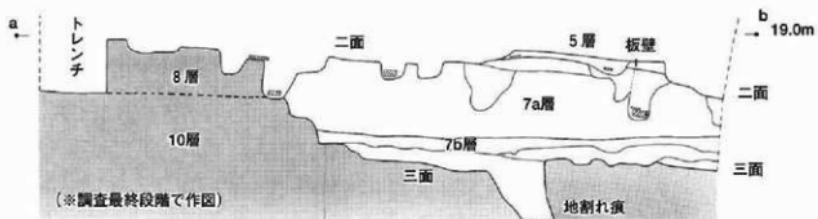


図6 二面検出透構全体図

2. 二面の遺構(図6～図13)

「堆積土層と生活面」の項で述べたように、二面は同一時期の生活面を平面的に精査することが困難で、遺構の多くは黒褐色粘土層上面まで下げて検出した。二面として図示した遺構群は、壁面土層群の検討から少なくとも3時期の遺構が混在しており、便宜的に下位から2a期・2b期・2c期とした。最下面を除く2時期(2b・2c期)は火災を受けたことが明らかで、短期間の内に廃棄されたと考えている。

検出した遺構には柱穴・杭列・掘り方を伴わない礎板・板壁状遺構・版築砂層面・遺物集中範囲など掘立柱建物に付随する遺構の他に、南西部へ傾斜する土壌状の落ち込みがある。

板壁状遺構…II区C1杭付近で検出した。板材の寸法は幅55mm、厚さ5mm、長さ約1.65m、確認高はI・II区境の壁面近くで海拔18.7mである。横板材は倒れないよう両側から杭を打ち、更に黄褐色砂(5層)で埋めて固定したらしい。板材の延長上には杭跡が確認でき、板壁はグリッドラインに沿って東西に続いていると思われる。本遺構は建物内の間仕切りあるいは外壁と推定されるが、小袋谷川との位置関係から後者である可能性が強い。層位的に見て2c期の遺構であろう。

版築砂層面…グリッドラインの南側、つまり板壁状遺構と小袋谷川との間は黄褐色砂(5層)が硬く版築された平坦面となっていた。板壁状遺構が建物内の間仕切りとすれば上間、外壁とすれば川に沿う通路的な空間が想定できる。版築層は薄い粘土層を境に上下に分けられ、2時期にわたって構築されたことが判る。上位面は海拔18.9～18.8m、下位面は海拔18.7～18.6mにあることから、それぞれ2c期と2b期に対応したものであろう。

遺物集中範囲…II区B1、B2、C1、C2杭に囲まれた概ね2×2mの範囲内から、炭化物と共に多量の遺物が出土した。遺物自体に火災を受けた痕跡は不明瞭であるが、火事場整理の際に集めて投棄したものと考えている。遺物の種類には食器具(かわらけ皿、漆椀・漆皿・箸・折敷)、容器(曲げ物)、紡錘具(手押し木)、装身具(鳥帽子・縫櫛・板草履)、貨幣(錢)など日常生活に関わるもの他に建築部材(瓦・板材)が少量見られ、出土高は海拔18.7m前後に集中している。調査区西壁土層では4a層下部の炭層にあたり、2b期建物で使用していた遺物であろう。なお、微細図には遺物の出土状態を示したが、錢・板草履・箸については個々の位置を特定することができなかった。図7の遺物は後章の図23、24を縮小したもので、対応関係は以下の通り。

かわらけ皿 ①～⑩=図23-200～218 漆器椀・皿 ⑪～⑯=図23-219～222

木製品 ⑰～⑲=図23-223～229 箸 ⑳～㉑=図24-230～234

瓦 ㉒～㉓=図24-235～236 錢 ㉔～㉕=図24-237～242

杭列…杭および杭跡は調査区の北側(C～E-3～4付近)、南側(B～D-1ライン沿い)、I・II区境(C～D-2～4付近)に集中するが、杭列として認識できるものは少なく、建物との関係も明らかにできなかった。杭は外壁あるいは間仕切りの板材を固定するために使用したのであろうが、もともと、端材を利用しているため寸法は様々で、形状からは角柱状と板状のものに分類できる。後者は概して短く先端の尖っていない例もあり、板材に添えた後、周囲を埋めて固定したのであろう。板壁状遺構の押さえにはこの方法を採った箇所がある。杭を断面形ごとに整理し寸法を測ると、以下のようなバラツキがある。

角柱状；正方形断面 1.0cm角、1.3cm角、1.5cm角、3.0cm角、長さ10～40cm前後

長方形断面 短辺1.0～3.0cm、長辺2.0～5.5cmまで、長さ15～50cm前後

(平均すると短辺1.7cm、長辺3.3cm、長さ30cm前後が多い)

板状；長方形断面 短辺0.6～1.0cm、長辺2.5～6.0cmまで、長さ15～24cm前後

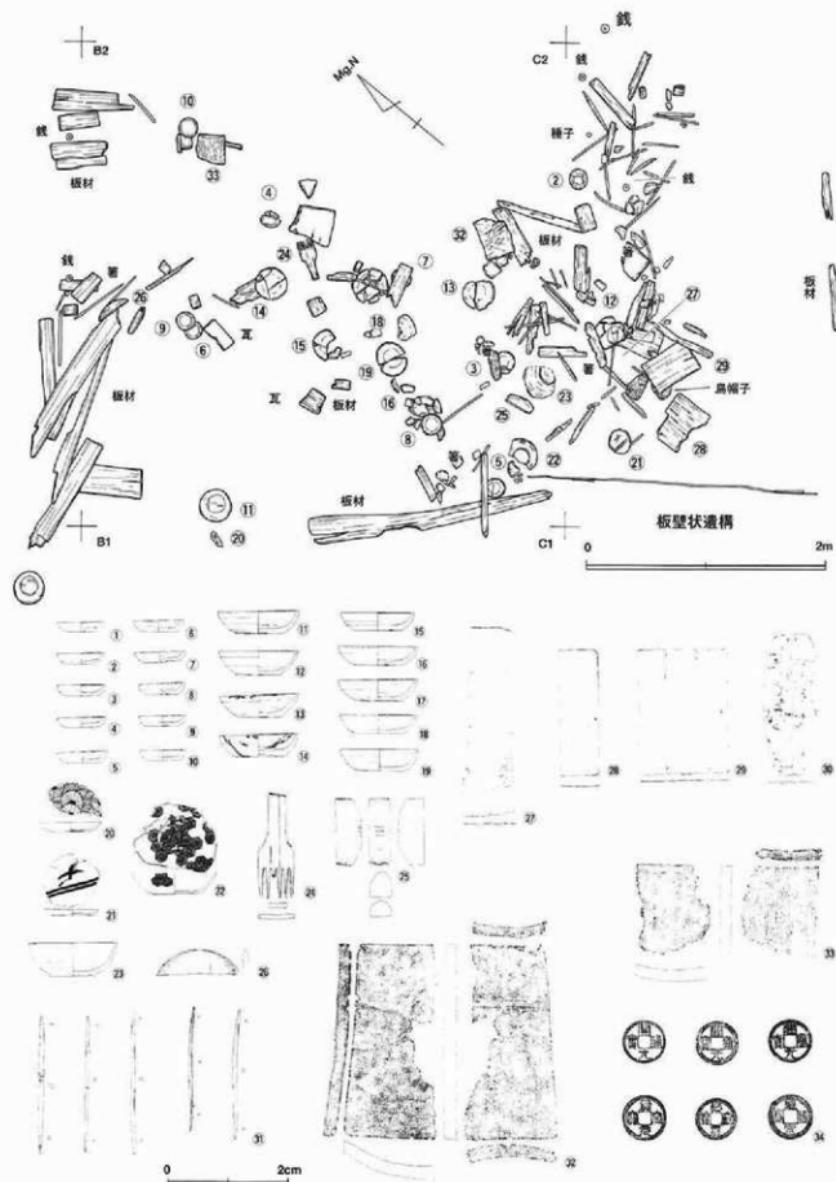
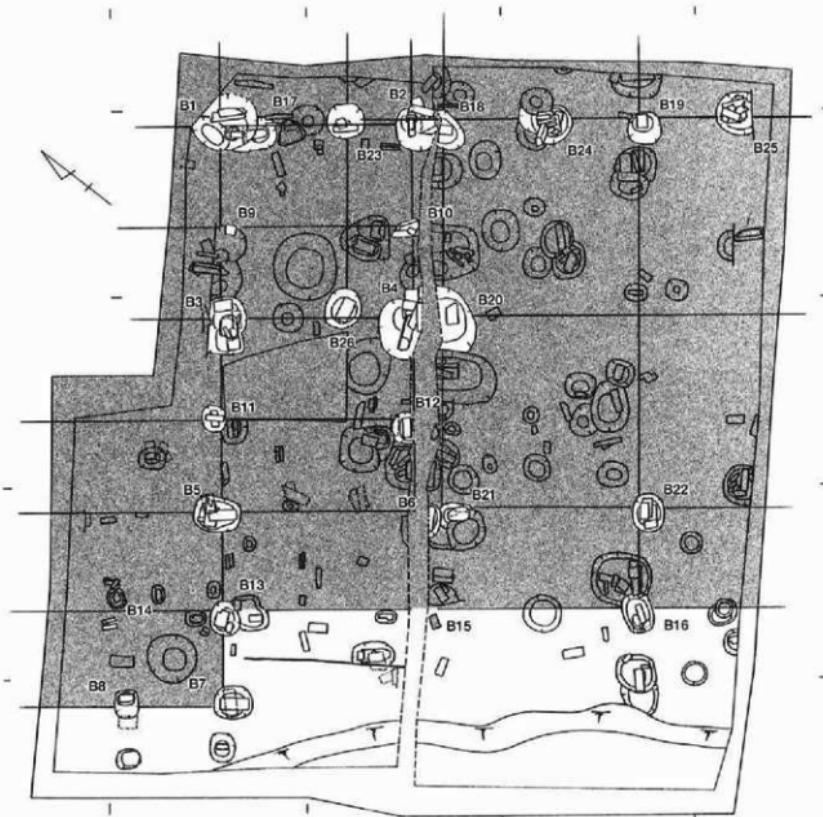
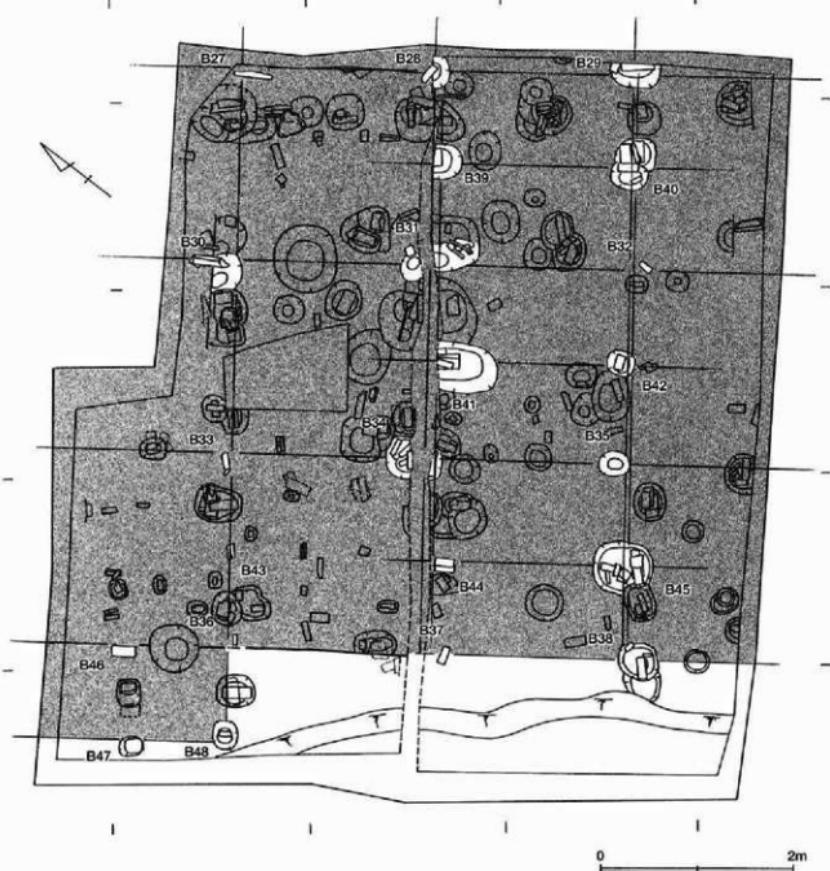


图 7 遗物集中範囲・微細図



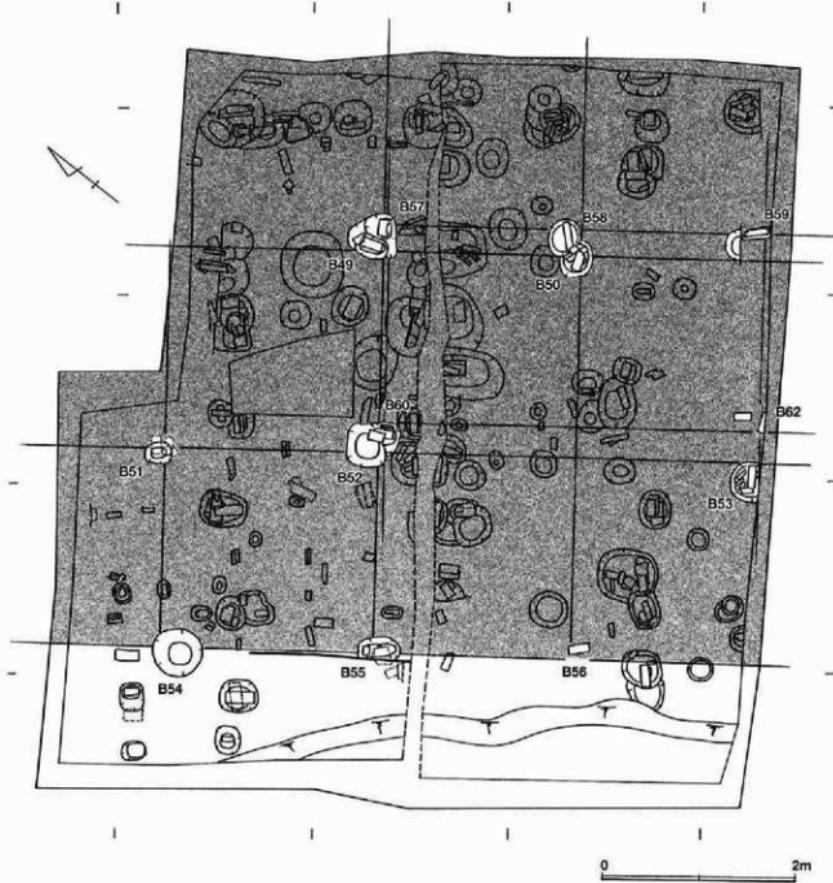
番号	磚板	上面高(海拔)	備考	番号	磚板	上面高(海拔)	備考
B1	なし	18.53 m	P37	B14	2枚	18.61 m	
B2	1枚	18.51 m	柱根 8×14×72cm	B15	1枚	18.68 m	
B3	3枚	18.43 m	焼材転用	B16	1枚	18.75 m	焼材板用
B4	1枚	18.43 m	柱根 7.5×11×65cm 上部に磚板・磚合板 P44	B17	3枚	18.80 m	
B5	3枚	18.63 m		B18	2枚	18.76 m	焼材板用 P25
B6	1枚	18.57 m		B19	1枚	18.78 m	P21
B7	1枚	18.61 m		B20	1枚	18.65 m	焼材転用
B8	1枚	18.44 m	P45	B21	なし	18.64 m	配岩利用 (P34)
B9	1枚	19.00 m	[P50]	B22	5枚	18.60 m	焼材板用 P31
B10	3枚	19.05 m	焼材転用	B23	2枚	18.41 m	
B11	2枚	18.50 m		B24	8枚	18.73 m	柱根 6.5×9.5×58cm 上端焼付る。 P23
B12	2枚	18.62 m		B25	8枚	18.82 m	
B13	2枚	18.45 m		B26	1枚	18.41 m	

図8 建物1



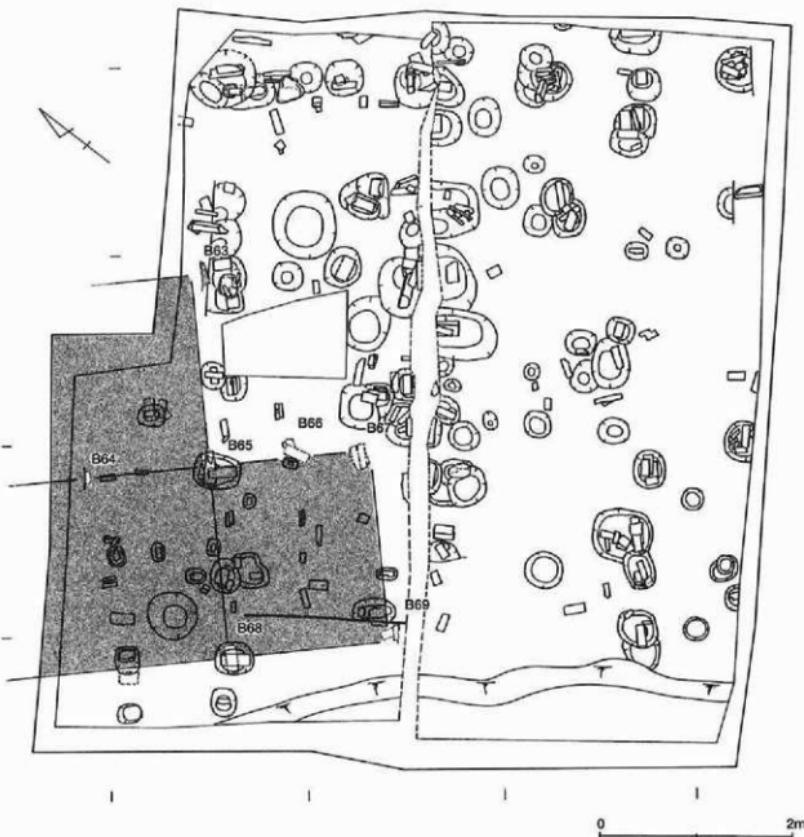
番号	磚板	上面高(海拔)	備考	番号	磚板	上面高(海拔)	備考
B27	?	19.17 m		B37	1枚	18.52 m	
B28	1枚	18.86 m	焼材転用 P24	B38	3枚	18.70 m	焼材転用
B29	2枚	18.88 m	焼材転用	B39	1枚	18.87 m	
B30	1枚	18.88 m	柱材転用か? 柱 8×9×11cm (P53)	B40	5枚	18.98 m	P22
				B41	4枚	18.54 m	P30
				B42	1枚	18.70 m	P35
B31	7枚	19.07 m	焼材転用 P9	B43	2枚	18.60 m	
B32	1枚	19.16 m		B44	2枚	18.72 m	
B33	2枚	18.61 m		B45	10枚	18.70 m	
B34	5枚	18.68 m	焼材転用	B46	1枚	18.66 m	
B35	なし	18.50 m		B47	なし	18.41 m	
B36	1枚	18.57 m		B48	1枚	18.45 m	焼材転用

図9 建物2



番号	壁板	上面高(海拔)	備考	番号	壁板	上面高(海拔)	備考
B49	1枚	18.28 m	上部に焼材含む	B56	1枚	18.61 m	
B50	3枚	19.06 m	(P28)	B57	1枚	18.39 m	
B51	3枚	18.42 m	焼材板用	B58	1枚	18.94 m	(P28)
B52	なし	18.15 m	(P51)	B59	2枚	18.93 m	柱材板用か? P7 柱6×18×29cm
B53	6枚	18.60 m	柱材板用	B60	3枚	18.31 m	焼材板用 (P51)
B54	なし	18.20 m	漏りすぎ	B62	2枚	18.86 m	
B55	4枚	18.33 m	P52				

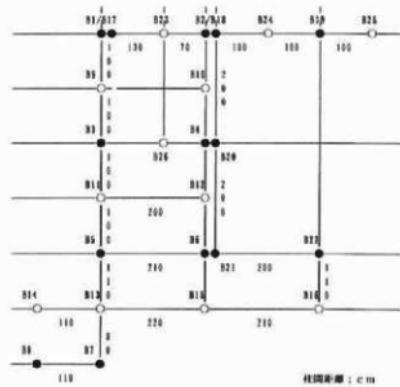
図10 建物3



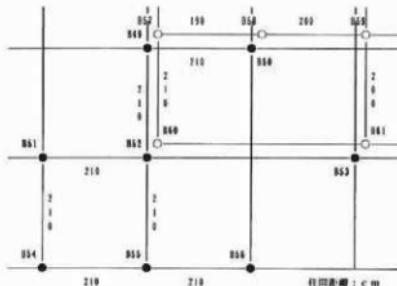
番号	磚板	上面高(海拔)	備考	番号	磚板	上面高(海拔)	備考
B63	1枚	17.93 m		B61	2枚	18.10 m	
B64	1枚	18.15 m		B68	1枚	18.13 m	
B65	1枚	17.90 m		B69	2枚	18.23 m	
B66	3枚	17.91 m					

図11 建物4

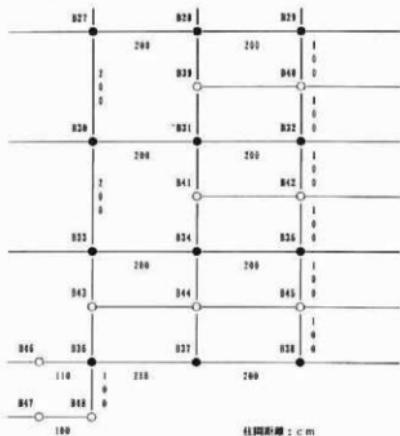
〈建物1〉



〈建物3〉



〈建物2〉



〈建物4〉

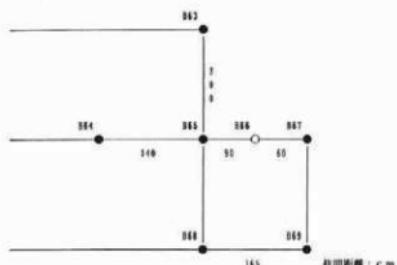


図12 柱間距離

掘立柱建物…想定できる建物を図8～図12に示した。これら建物は円覚寺に関わる雑舎と考えている。復元に際しては柱穴掘り方を見逃したおそれもあり、二面～三面までに検出したすべての礎板を含めて検討した。小袋谷川との位置関係から建物は東・西・北側に広がる可能性がある。なお、礎板にはB(Base)の略号を付して柱穴P(Pit)と区別した。

建物1は柱通りを同じくする柱穴と礎板から復元した。柱間距離は200cmを基本とし、西側には半間間隔の柱穴が集中している。I・II区の境では約30cm程柱穴のずれた箇所があり、2棟(新B1～B16、旧B17～B26)が混在している可能性もある。しかし、B19～B22～B16ラインでは柱通りが揃ってお

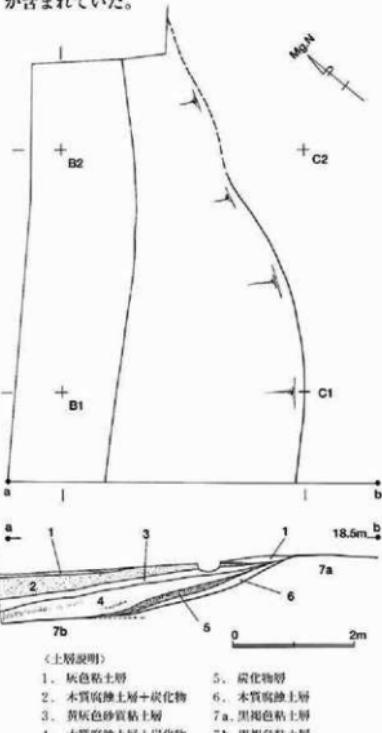
り、部分的改築であろうと判断した。この建物ではB2、B4、B24に柱根が遺存しており、B24の柱根先端部は焼け焦げていた。また、礎板の中にも焼けた板材を転用したものが多く、二面最終段階（2c期）の建物と推定できる。特筆すべき遺物として、完形のかわらけ皿2枚がB2（P37）から出土し、B4（P44）では磚（図28-300）が礎板の中に含まれていた。

建物2は柱間距離200cmを基本とする建物。半間隔の柱穴は東側に集中している。建物1とは南北の柱通りが一致し、縁らしき張り出し部が見られること、焼けた板材を転用した礎板が多いことなどの共通点がある。なお、建物南辺にあたるB36-B37間に板壁状造構があり、本建物の外壁であったことが窺える。板壁状造構の存在から2c期に比定できるが、柱根の遺存する建物1より古い段階に位置づけられよう。

建物3は柱間距離210cmの建物。B49/B57、B50/B58、B52/B60はそれぞれ重複しており、後者の方が新しい。部分的な改築あるいは2棟（新B57～B62、旧B49～B56）に分けられるかもしれない。建物1、建物2とは主軸方位を同じくするが柱間距離が異なり、礎板に焼けた板材をほとんど使用していない点に特徴がある。本建物はB55が板壁状造構の真下にあることから、建物2より古い2b期に比定できる。遺物集中範囲で出土した遺物は、本建物に帰属するものであろう。なお、B55（P52）では礎板の一部として磚2枚（図28・29-301、302）が含まれていた。

建物4は柱間距離200cmと150cm前後が混在し、主軸方位は建物1～建物3と大きく異なる。礎板の内B63、B65、B66は7b層上面にあり柱穴掘り方は確認していない。また、B64、B69が7a層上面から掘り込まれた柱穴底であることから、本建物は2a期に比定できる。なお、B65、B68は建物1と重複する位置にあるが、礎板検出高は約50～70cmも低いため別建物の可能性が高く、I区およびII区北側で礎板の並びがないことから、調査区外西方に広がる建物と考えている。

南西部落ち込み…II区南西部の黒褐色粘土層（7a層）上面で確認した。2a期に比定できるが、柱穴（B64）が覆土を切っており、建物4より古いことが判る。落ち込み内は炭混じりの木質腐蝕土と粘土が互層状に堆積しており、壁の傾斜はかなり緩やかである。人為的に掘った土壙というより、遺跡地の一画にあった窪みにゴミを投棄していたことが考えられる。なお、覆土中の炭層（図13-5層）は2a層に火災があった可能性を示すが、調査区内では7a層上面に焼けた痕跡は確認できず、調査区外から土砂、ゴミと共に運びこまれ、捨てられた可能性が高い。また、火災に限らず単なるゴミの焼却等も想定する必要があろう。



第13図 南西部落ち込み

3. 三面の遺構

三面は調査区南側に堆積する黒褐色粘土層（7a・7b層）を除去した状態で、調査区の北側には二面とした中世基盤層（8層）が一段高く残っている。I区では排土置場の都合上、7b層を完掘できず不完全な調査に終わったため、II区で検出された遺構について説明を行なう。

II区三面では段状遺構1・段状遺構2・土壤・地割れ痕を検出した。図14に示した礎板はすべて7b層までに出土したもので三面からは浮いた状態にある。礎板については、既に二面の項（建物4）で検討しているので省略する。

段状遺構1…調査区の北半部と南半部を分ける段差で、比高差約1mを以て南北方向に続いている。後述する地割れ痕と平行するが、段差直下の地層に乱れではなく、地震の影響で形成された地形とは考え難い。小袋谷川に沿った小規模な段丘あるいは人為的な遺構の可能性がある。なお、本遺構の南側下底面から約30~40cm上の7b層上面には、セリ科植物の種子が一面に付着しており、埋没していく過程において、湿地化していた期間が存在したことを確認できた。

段状遺構2…二面／南西部落ち込みとほぼ同じ位置で検出したが、まったく別の遺構である。段の上端は弧状に巡り、中位に半円形の平場をつける箇所がある。比高差約50cm、下底面は平坦である。段状遺構1と同様に性格不明。

土壤…段状遺構2の壁際で検出した。東側に隣接する小穴は、水路状の隙間を掘り広げたもので遺構ではない。段状遺構2の覆土とは切り合い関係がなく同時期に存在したものと考えている。土壤内には水磨された砂礫が堆積しており、流水作用によって自然埋没したことが判る。遺構の性格は不明、水場的な用途か。常滑壺の口縁部片1点が出土した。

地割れ痕…開口部幅は確認当初20~30cm程度であったが、調査中に崩れて幅広となった。調査区西壁の土層観察結果では、段状遺構2の覆土に乱れではなく、段状遺構2と同時期かより古い地震による地割れと判断できる。ただし、開口部内から手捏ね整形のかわらけ皿（小片1点、実測不可能）が出土しており、この地震が中世以前に遡ることはないと考えている。

4. 最終確認トレンチ

I区では三面検出段階で排土量が置場の限界を超えたため、調査区中央に幅1mのL字形トレンチを設定して下層遺構の有無を確認した。

旧流路…中世基盤層（8層）下、青灰色粘土層（10層）上面で確認した。下底部近くまで掘り下げてしまい流路の状態はよく判らない。図14には対面する壁面土層の上端、下端を各々結んだ推定線で示してある。流路は幅2.5m以上、深さ0.9~1m、東北東から南南西方向に流下する。円覚寺の谷奥から小袋谷川へ流れ出る小河川であろう。流路内には水磨された砂礫が堆積し、粒径の違う堆積状態から自然埋没したことが判った。南側覆土上部は段状遺構1に切られている。出土遺物なし。なお、I区で検出した地割れ痕は、トレンチ内では確認できなかった。

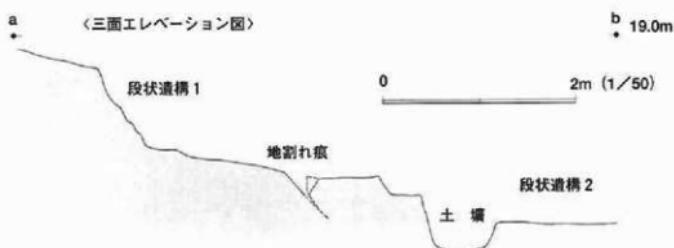
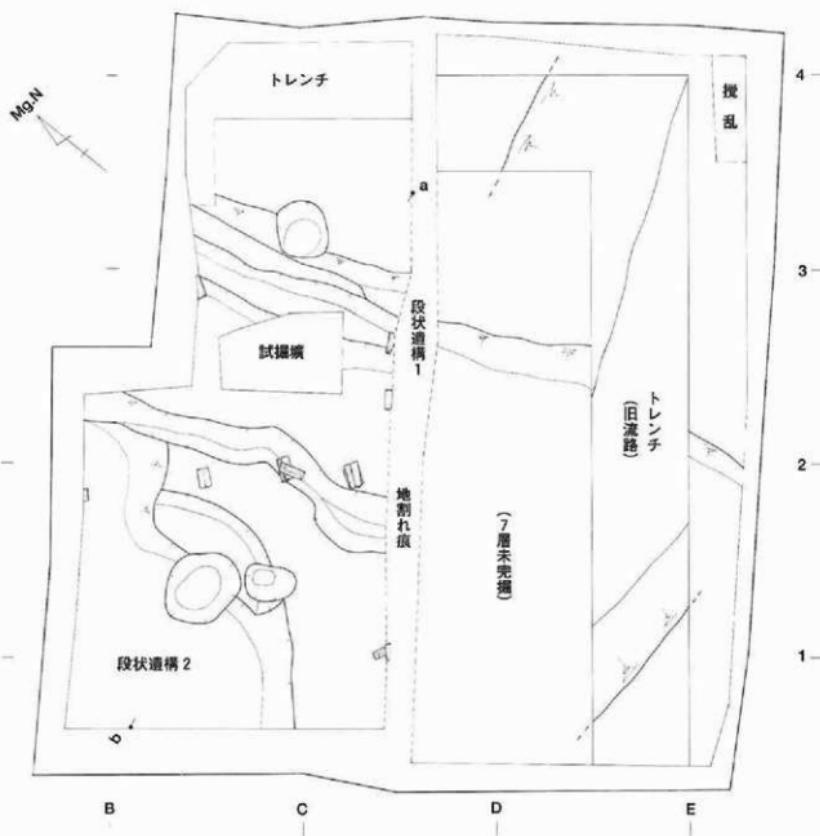


図14 三面検出造構全体図

第四章 出土遺物

建築材（礎板・杭など）を除いた遺物総量は整理箱にして約40箱、その内測図できた遺物は約400点である。遺物の多くは二面精査段階で出土しており、現地での遺物取り上げは炭層に注意しながら細かく行なった。本章では出土層位・遺構ごとに分類し掲載したが、調査時点の名称を使用したため若干の説明が必要である。遺物個々については章末の観察表を参照されたい。

1. 一面出土の遺物（図15）

全体量が少なく小片ばかりである。出土状態の明らかな遺物として、瓦（3）は攪乱層、「文久永宝」（7）は小袋谷川の護岸裏込め（図4-0c層）から出土した。なお、瀬戸縁軸皿（9）とかわらけ皿（13・14）は覆土中の小片であり、遺構の年代を直接的には示さない。

2. 二面出土の遺物（図16～29）

遺物の出土した層位によって、二面上包含層・北部炭層・南部青砂層・南部炭層・遺物集中範囲・南端部砂層・柱穴・南西部落ち込みに分けて取り上げた。

二面上包含層（図16、17）は炭層を確認する前、主として灰褐色土層（図4-3層）から出土した遺物で、2c期建物が廃絶した後の整地層中に含まれていた遺物である。

北部炭層（図18、19）は調査区の北半、グリッド3ライン以北で検出した炭層中の遺物である。炭層は2枚確認されたが、層厚が薄いために遺物を分離することができなかった。2b期～2c期の建物に伴う遺物である。銅製飾り金具（117）は上部炭層面上（2c期）から出土し、かわらけ皿（72・76・78・82）と捏ね鉢（86）は下部炭層面（2b期）精査中に出土したものである。また、青磁双魚文鉢（90）は同一個体片が南部青砂層・南端部砂層中からも出土している。

南部青砂層（図20、21）は調査区中央部の軟質な土層（図4-4a層）から出土し、2b期～2c期建物に伴う遺物と考えられる。かわらけ皿のうち（118、120、128）は上面精査時（2c期）に、（122、129、131）は層中（2b期）から、常滑窯（143）は直上（2c期）に潰れた状態で出土した。瀬戸縁軸皿（140）は上層からの混入。また、鏡では（150～152）が3枚、（153～157）は5枚が連着した織鏡状態で見つかった。

南部炭層（図22）は調査区の中央部、南部青砂層下部で確認した炭層（図4-4a層下部）の遺物である。後述する遺物集中範囲の一部と思われるが、平面的な広がりを持たず炭層中に混在していた遺物をまとめた。160～169が遺物集中範囲の下部から、170～199が上部から出土した。すべて2b期建物に伴う遺物と考えられる。特に、かわらけ皿（180、185）と漆絵皿（191）は西壁際の排水溝で確認された炭層面上にあり、かわらけ皿は大小並べて正置した状態（図版7）で見つかっている。

遺物集中範囲（図23、24）は二面遺構の項で説明した通り、2b期建物に伴う一括遺物である。かわらけ皿は完形もしくは略完形のものが主体となり、日常生活に関わる多種類の木製品が出土した。この他に、遺存状態が悪く測図できなかった遺物として、鳥帽子・箸がある。

南端部砂層（図25）は調査区の南端、小袋谷川の右岸に沿う版築砂層（図4-5層）中の遺物である。砂層は上下に分けられ、各々2b期と2c期に対応しているが、遺物が出土したのは版築状態の弱い上層（2c期）だけである。ただし、南部青砂層との境は不明瞭で、遺物が混入した可能性がある。

柱穴出土遺物（図26～29）は二面建物柱穴内の遺物で、瓦・磚は礎板に転用されたものである。完形

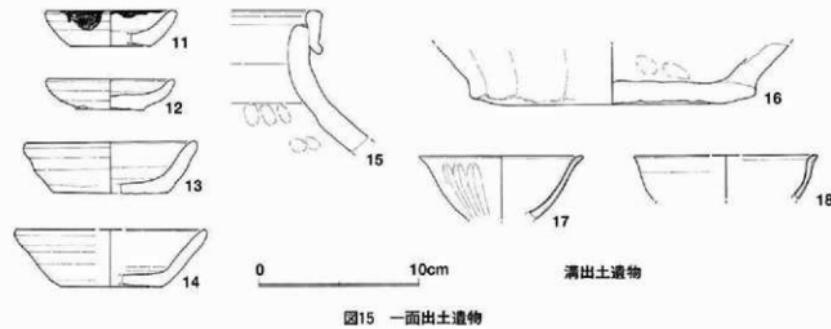
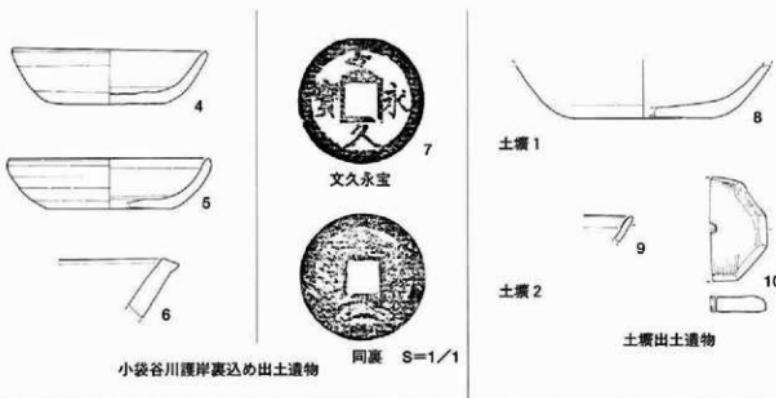
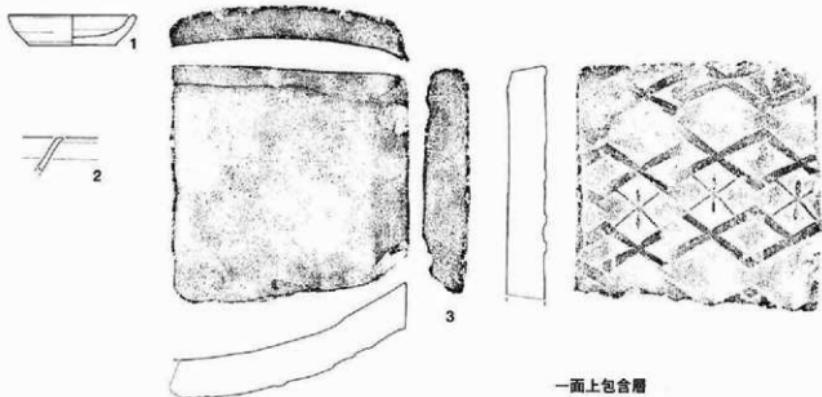


図15 一面出土遺物

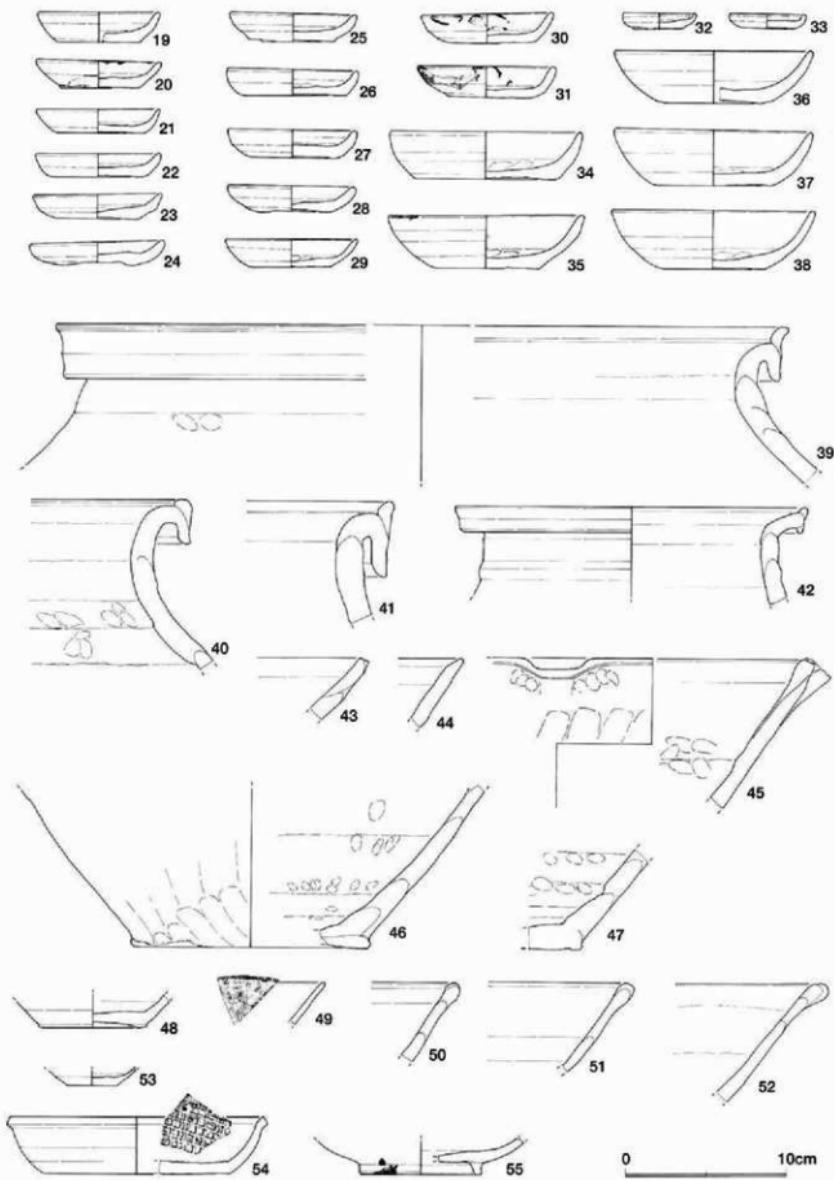


图16 二面上包含层出土遗物（1）

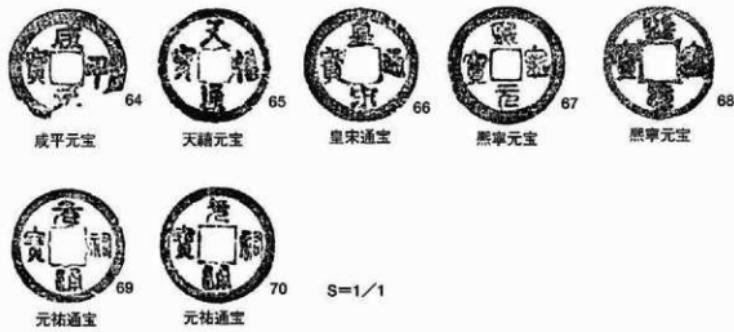
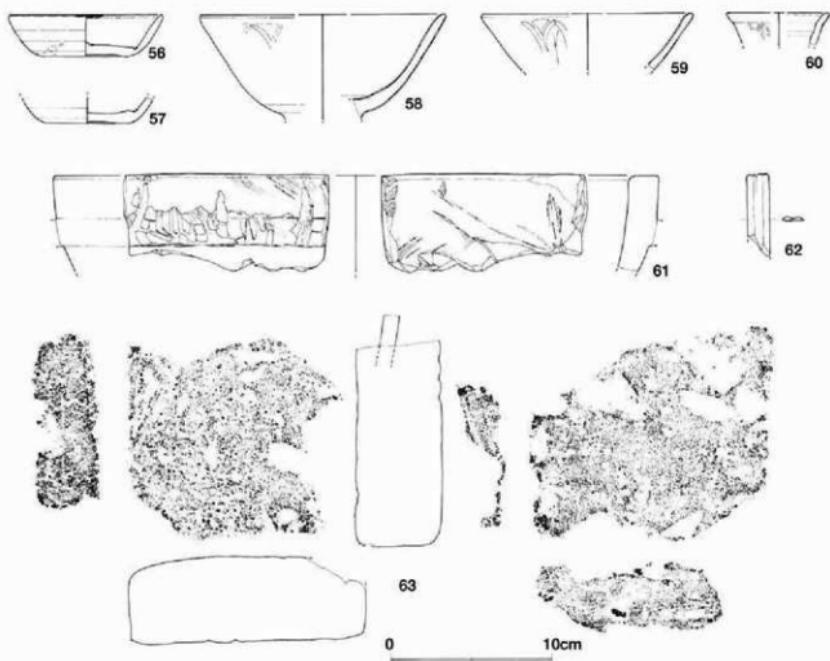


图17 二面上包含层出土遗物（2）

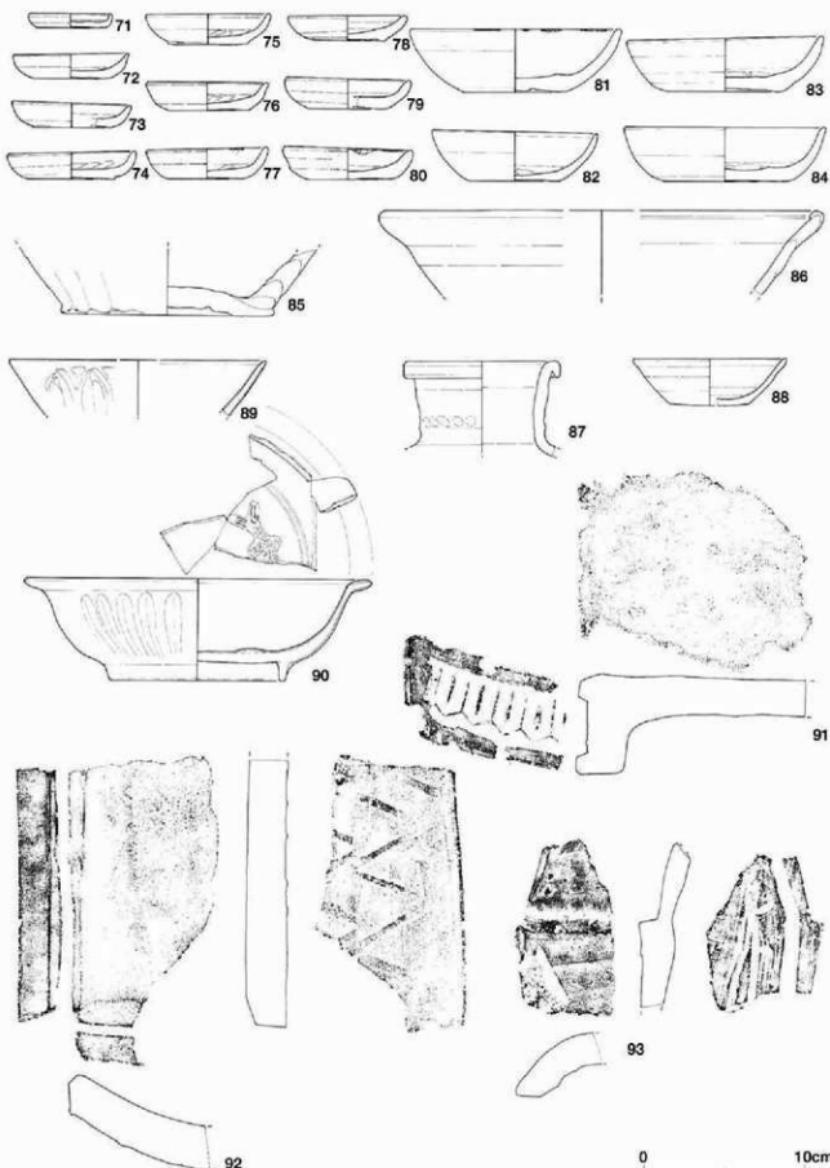


圖18 二面北部炭層出土遺物（1）

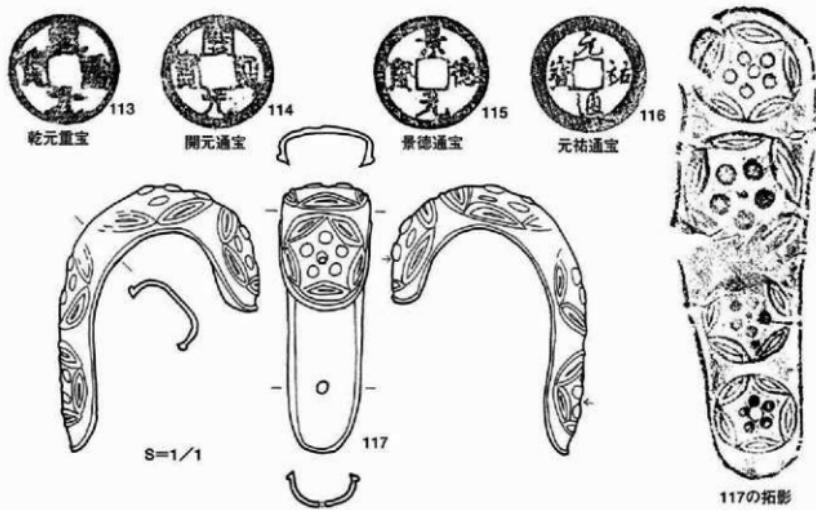
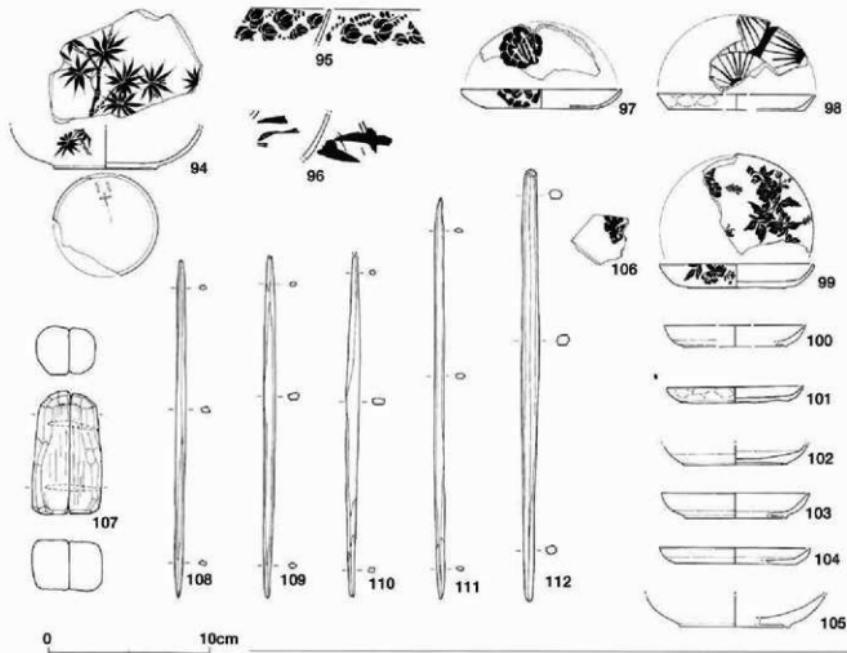


図19 二面北部炭層出土遺物（2）

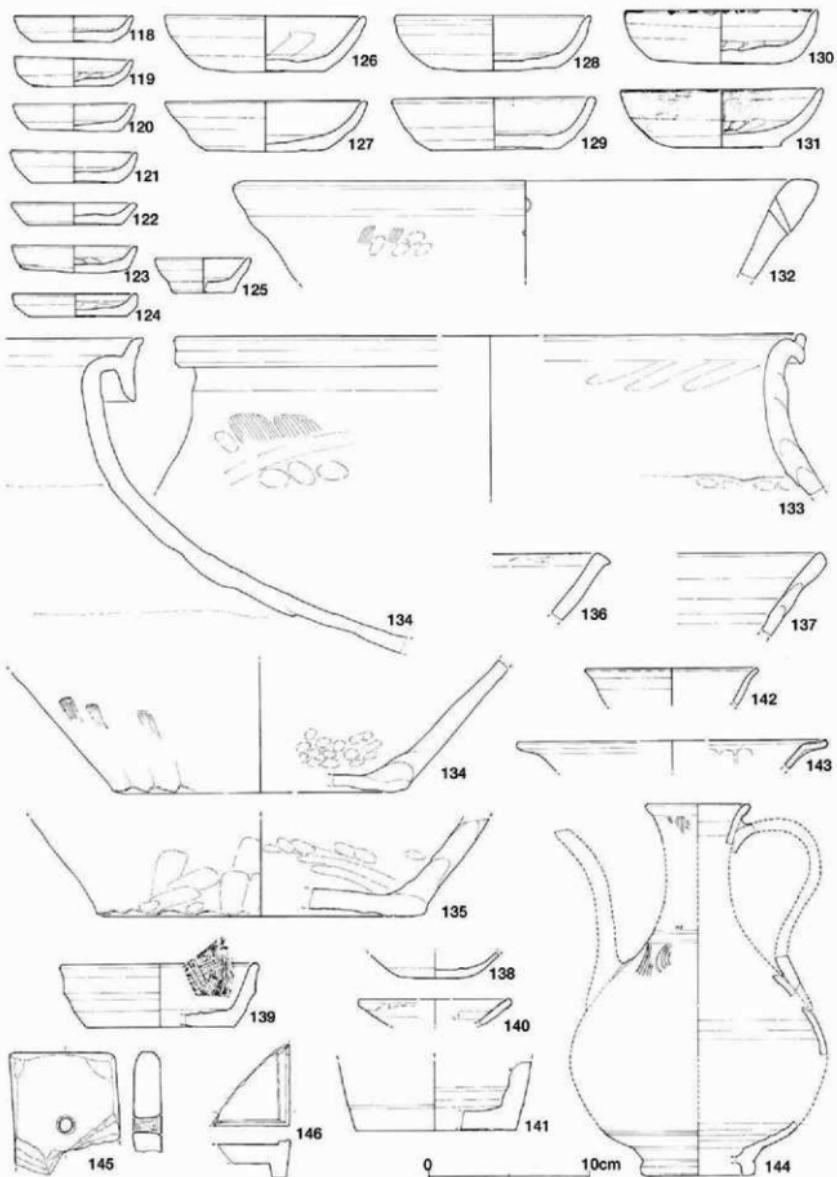


图20 二面南部青砂层出土遗物 (1)

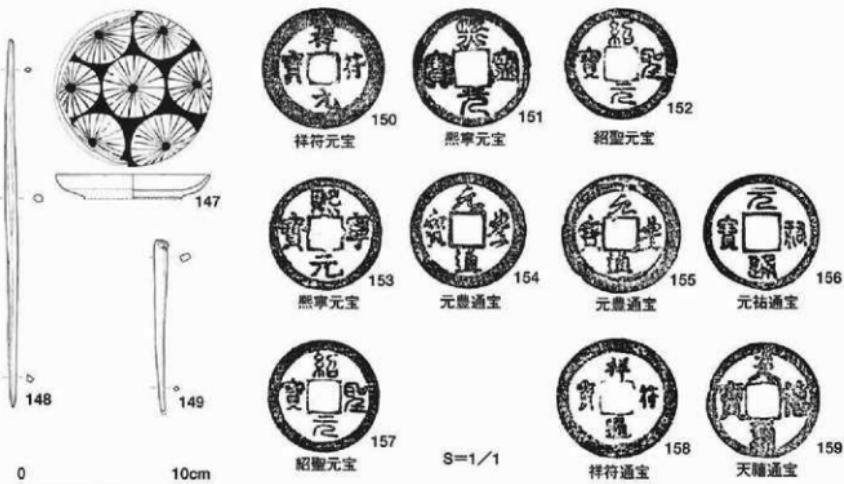


図21 二面南部青砂層出土遺物（2）

のかわらけ皿は（269、271）がP43、（272）がP45、（280）がP34から出土しており、すべて建物1に帰属する。柱穴位置は図30に示したが、前章で復元した4棟の建物ごとに整理すると以下のようになる。

建物1：かわらけ皿（266、267、269、271、272、273、276、279、280、281、283）・常滑窯（287）

・釘（293）・瓦（297、298）・磚（300）

建物2：かわらけ皿（270、274、275、282、284）・手培り（286）・白磁皿（290）・錢（295）

建物3：かわらけ皿（268、278）・捏ね鉢（288）・青磁皿（291）・釘（292）・磚（301、302）

建物4：該当遺物なし。

なお、P53出土としたかわらけ皿（277）・瓦（299）は、後述する壁面採集遺物（4a層／南部青砂層）に含めるのが妥当と思われる。

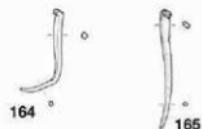
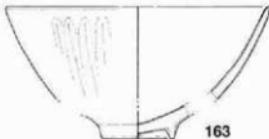
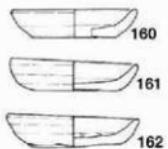
南西部落ち込み（図31、32）は2a期建物4より古い造構で、木質腐蝕土（図4～6層）中には木製品が多量に含まれていた。完形のかわらけ皿は2点（308、385）ある。この他に鳥帽子片・雲母も出土したが測図できなかった。

3. 三面出土の遺物（図33～35）

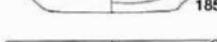
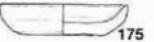
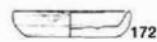
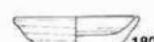
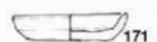
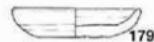
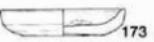
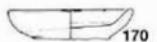
三面では黒褐色粘土層からの出土遺物が多く、造構に伴う遺物はほとんどない。地割れ痕開口部からは、手捏ね整形かわらけ皿が出土したが、小片のため測図できなかった。

黒褐色粘土層（図33、34）は調査区南半部に堆積していた7a層中の遺物である。7b層からは出土していない。かわらけ皿は（355、358、359、363、364）が完形、手捏ね整形の皿は量が少なく、小片ばかりである。木製品では大形の曲げ物がI区7a層下部から出土した。底板が若干ずれているが完形品で、現在、鶴見大学にて保存処理を行なっている。

土壤出土遺物（図35）は常滑窯の口縁部片1点だけである。土壤内に堆積していた砂礫層下部から出土した。三面の年代比定を行なう唯一の資料である。



S=1/1



0

10cm



图22 二面南部炭屑出土遗物

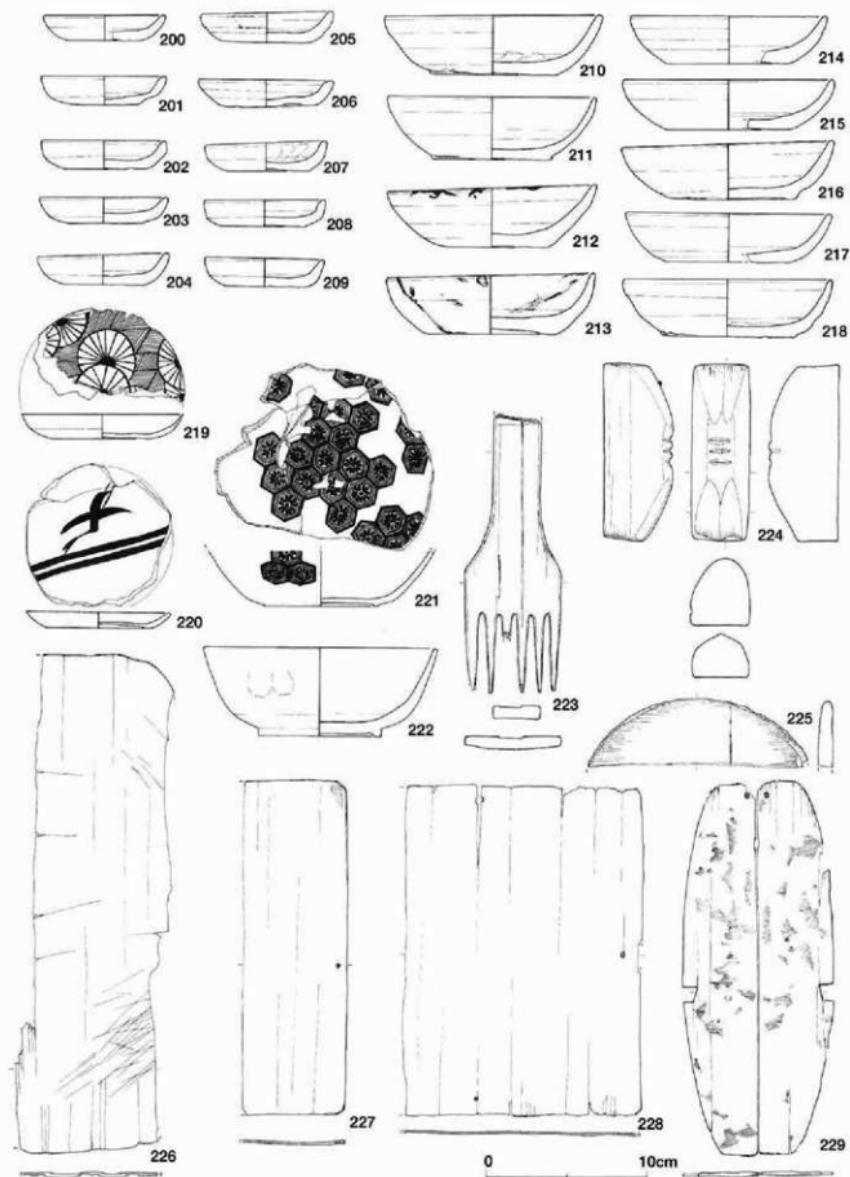


図23 遺物集中範囲出土遺物（1）

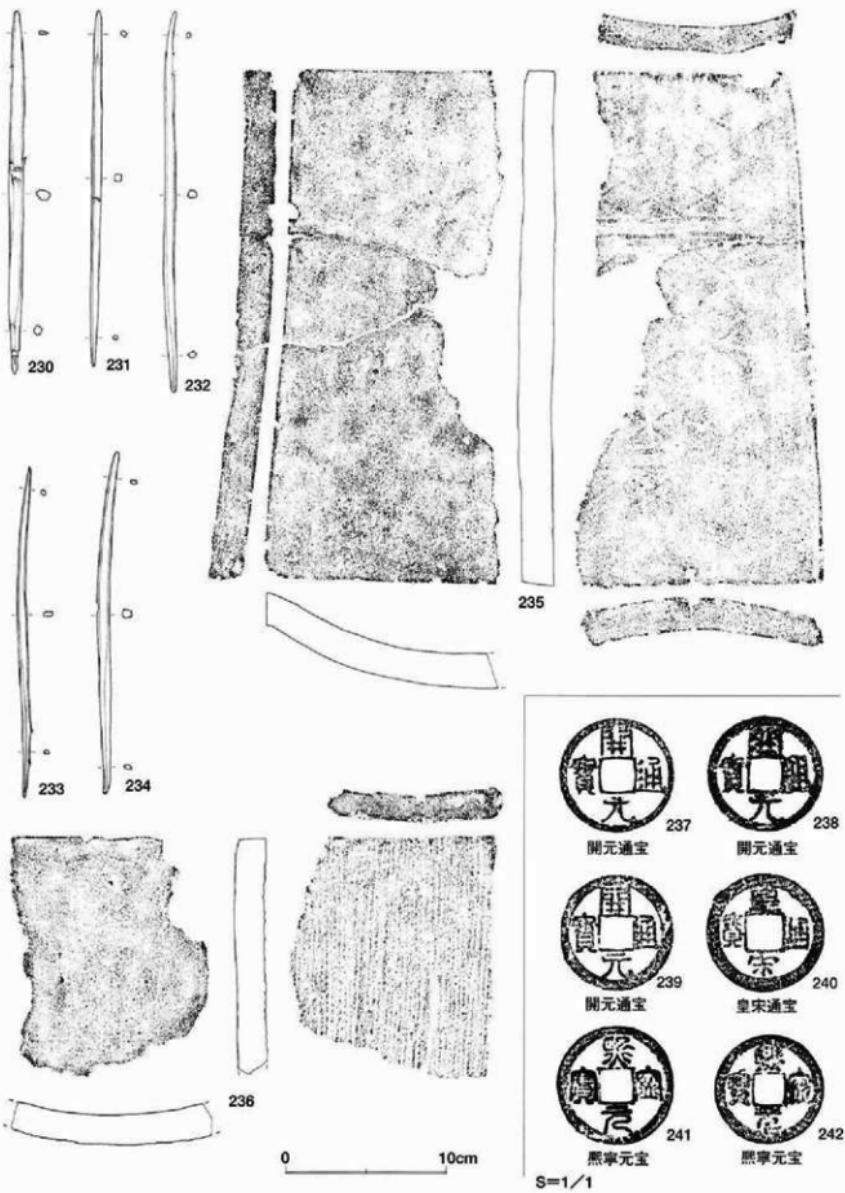
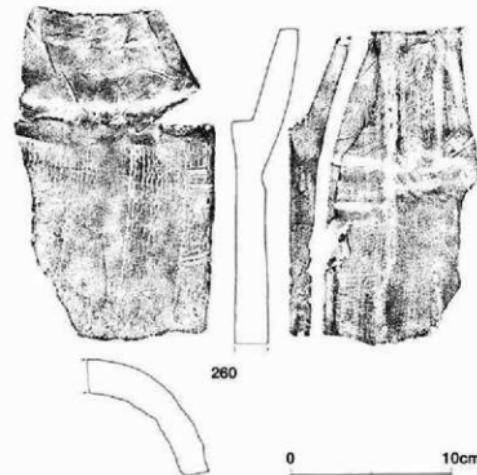
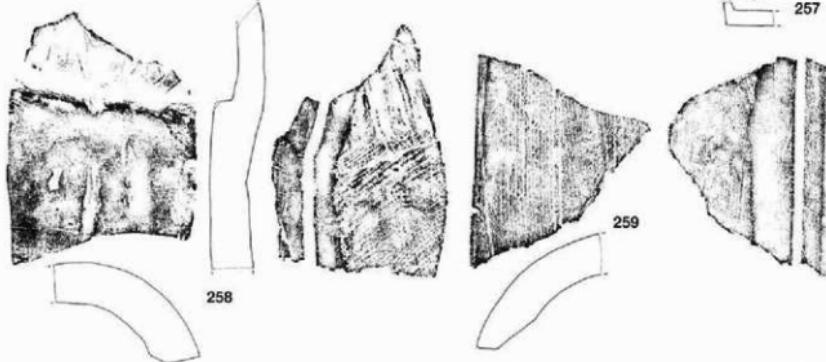
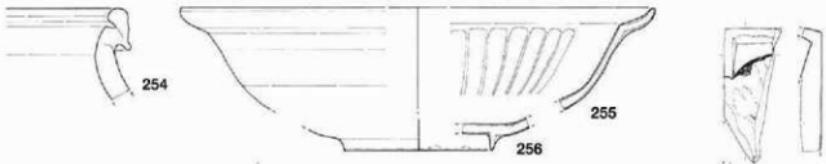
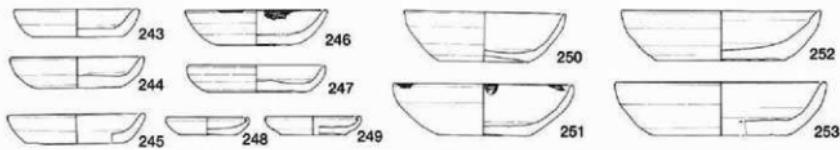


圖24 遺物集中範圍出土遺物（2）



0 10cm S=1/1

图25 二面南部砂层出土遗物

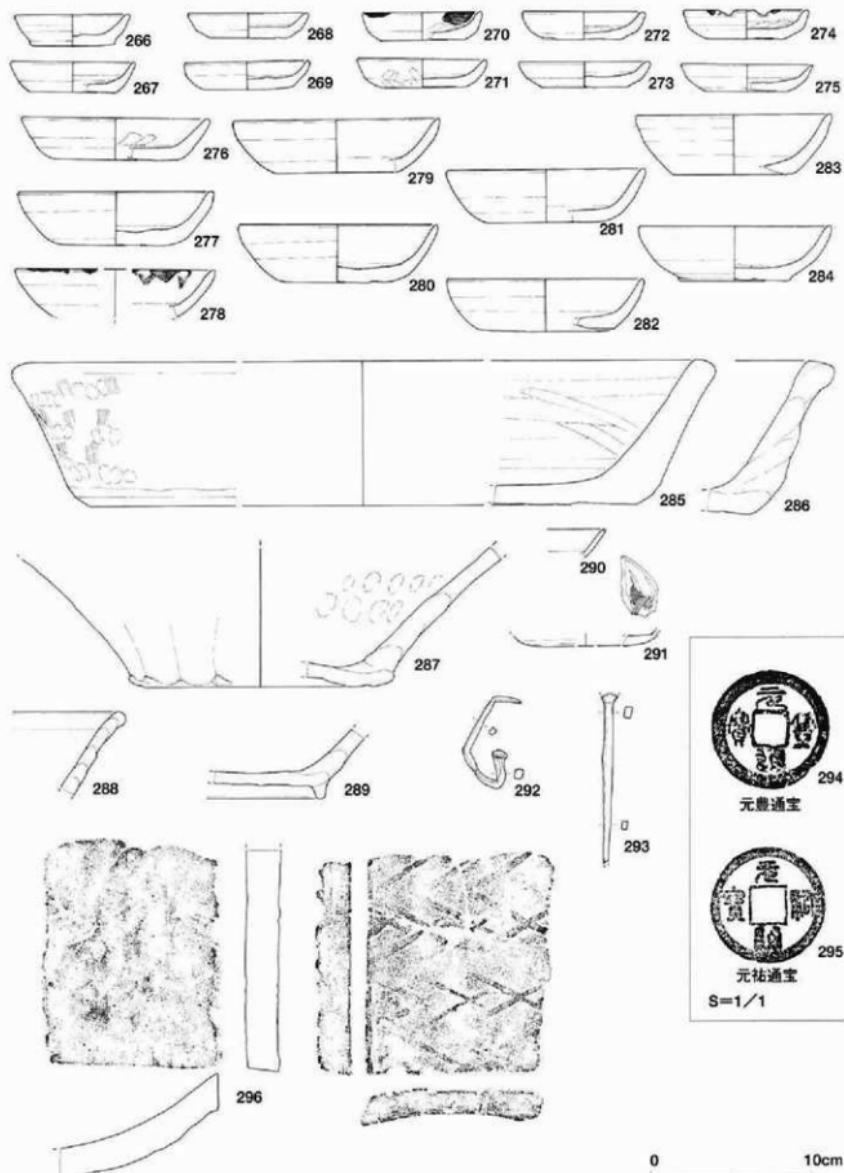


图26 二面柱穴出土遗物 (1)

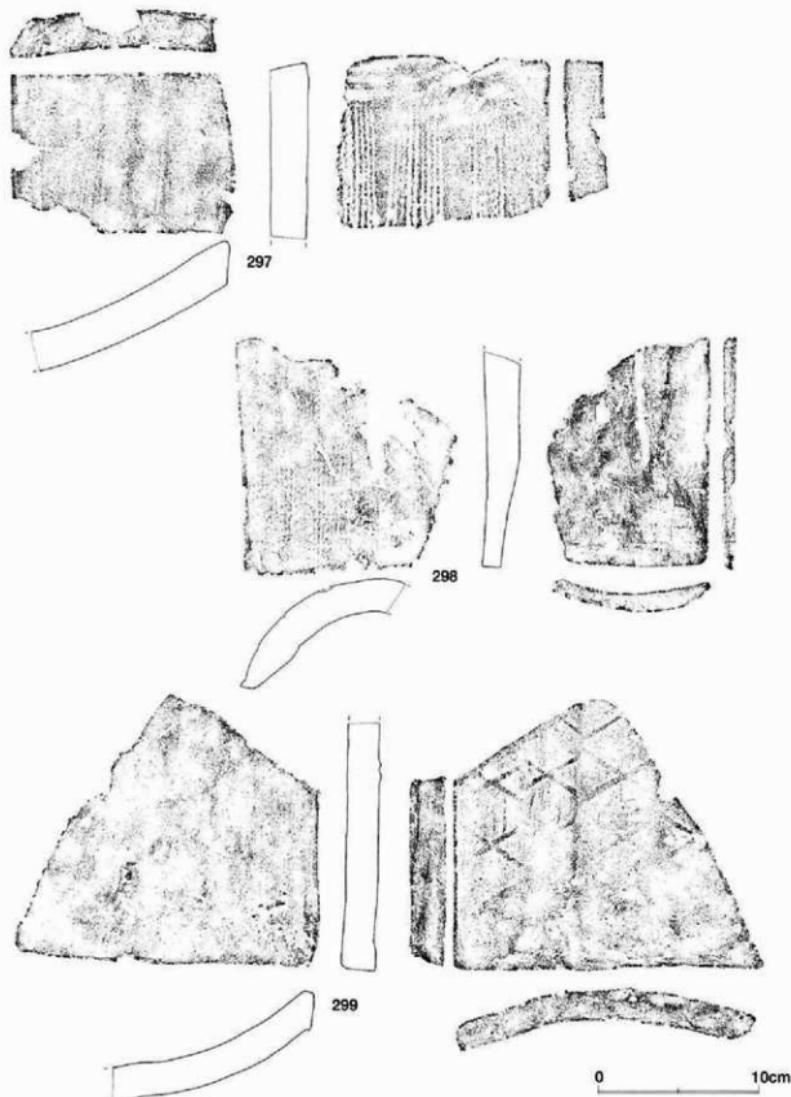
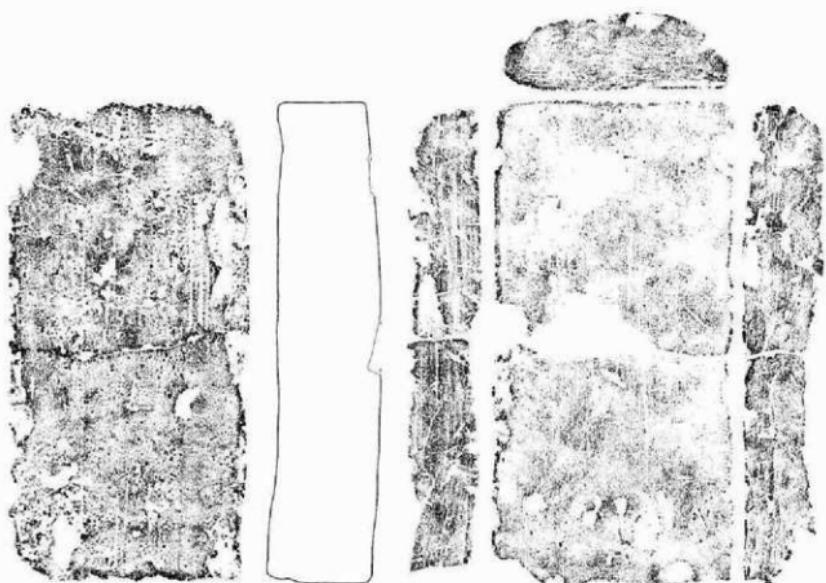


图27 二面柱穴出土遗物（2）



300



301



0

10cm

図28 二面柱穴出土遺物（3）

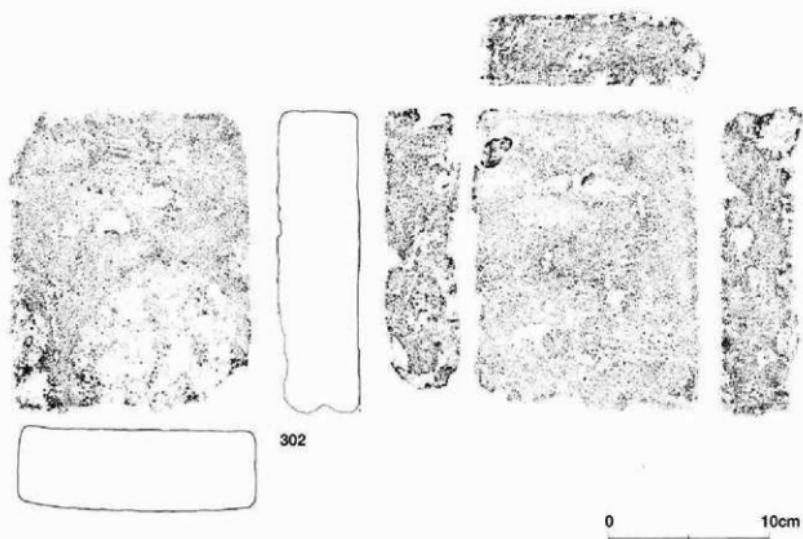


図29 二面柱穴出土遺物（4）

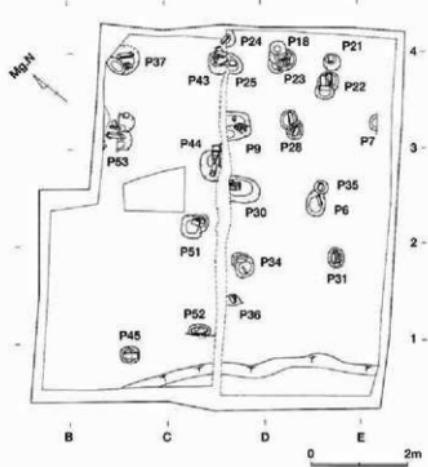


図30 柱穴位置図

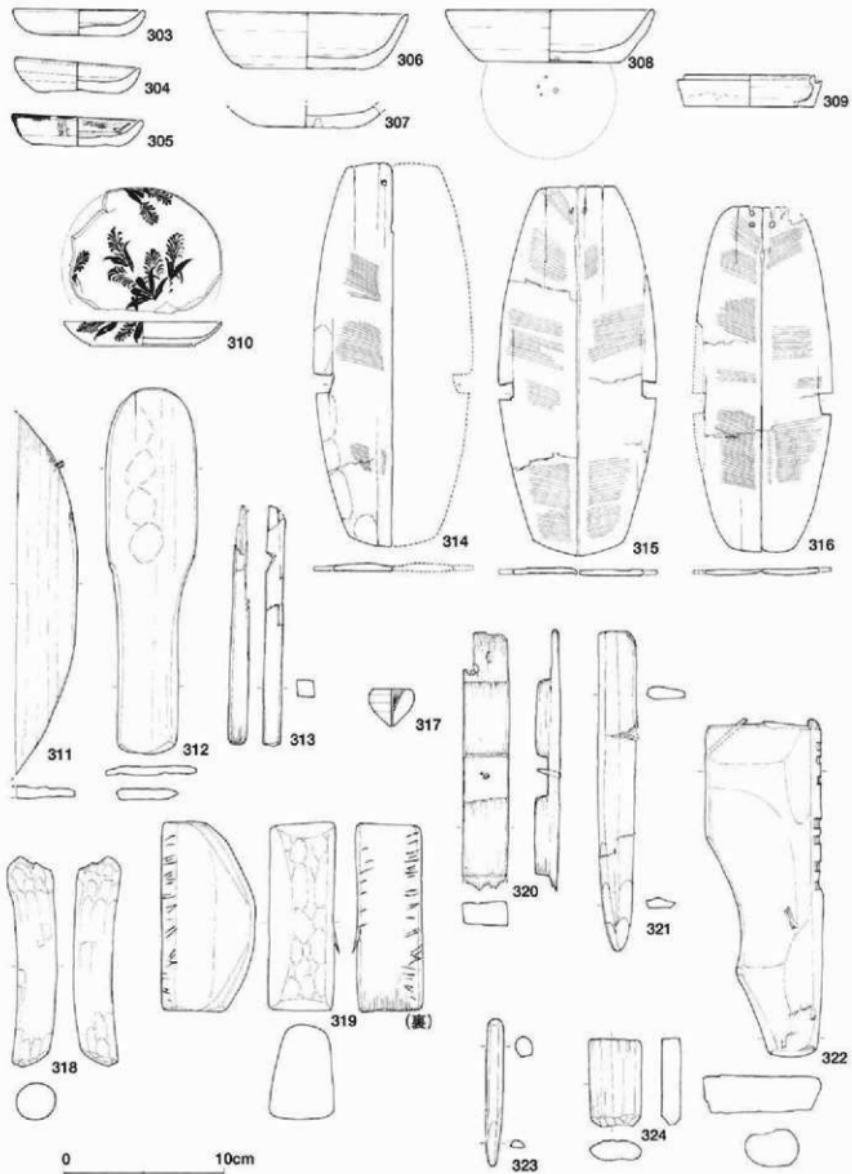


图31 二面南西部落込み出土遺物（1）

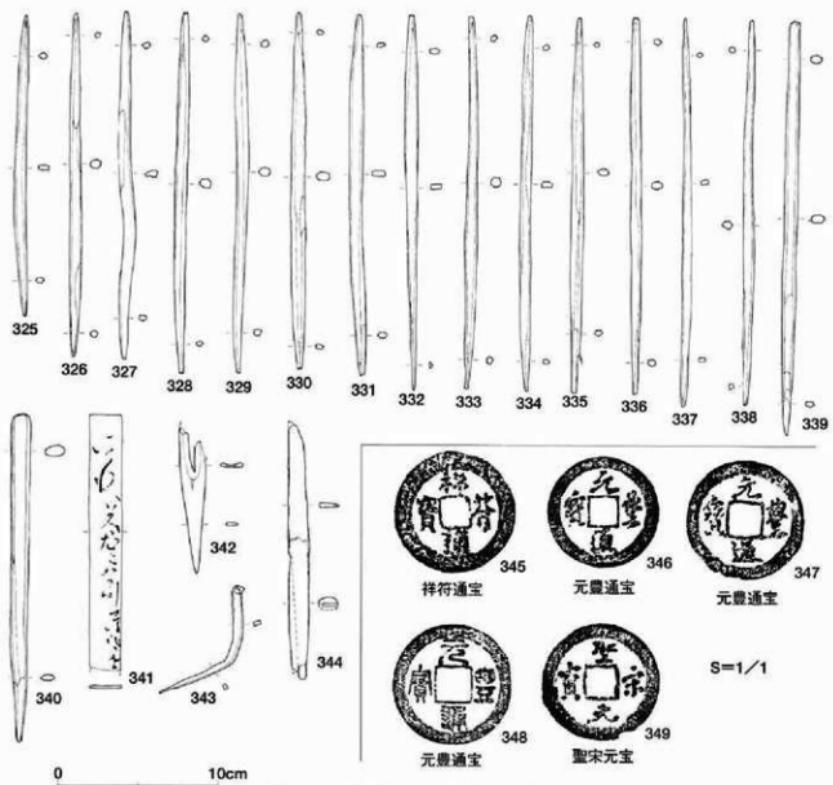


図32 二面南西部落ち込み出土遺物（2）

4. その他の遺物（図35、36）

調査区壁面から採集した遺物と中世以前の遺物をまとめた。

壁面採集遺物（図35、36）はII区西壁にかかる遺物で、三鷄文高麗青磁など特異な遺物がある。採集された層位（前項／二面出土の遺物）との対応関係は以下の通り。

- 3 層（二面上包含層）：高麗青磁・瓶（387）
- 4 a 層（北部炭層）：瓦（388）
- 4 a 層（南部青砂層）：かわらけ皿（384）・青磁（386）・瓦（389）
- 6 層（南西部落ち込み）：かわらけ皿（385）・磚（391）・銭（390）

中世以前の遺物（図36）は一面～三面までの中世層に混入した遺物で、黒褐色粘土層（7 a 層）からの出土が多く、遺構は確認していない。すべて小片である。

縄文時代の土器（407）は1点ある。中期末～後期初頭（加曾利E III・IV式～称名寺式）の深鉢である。

古墳時代の土器には壺と甕がある。壺（393、394、395）は後期末頃、甕（396、398、399）の年代は

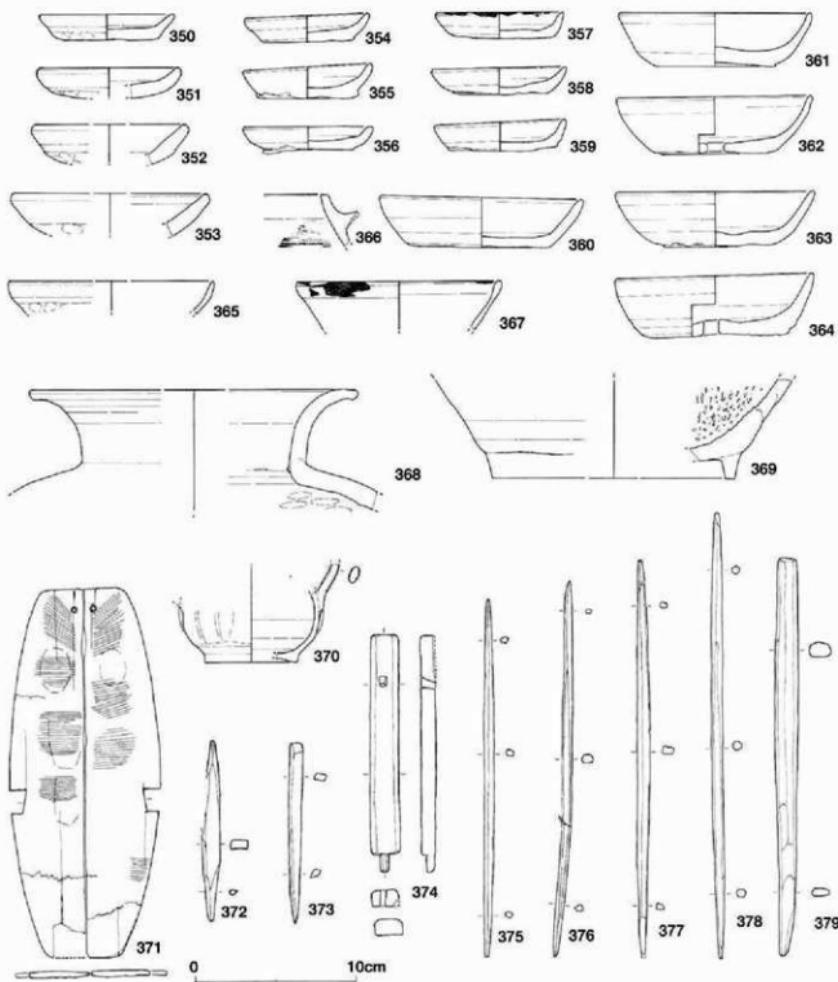
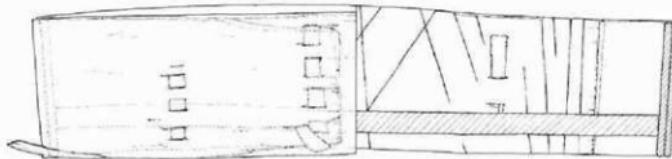


図33 三面黒褐色粘土層出土遺物（1）

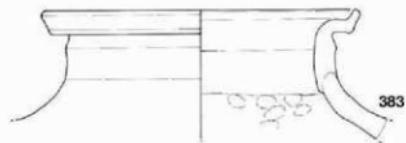
よく判らないが、中期～後期にかけてのものであろう。

平安時代では灰釉陶器・土師器・須恵器があり、総じて9世紀代の遺物である。灰釉陶器碗（392）は内底部を除いた内面に施釉し、外底面の糸切り痕は消されている。K14号窯式。土師器壺（397）は年代不明。須恵器蓋（400）はつまみ部がボタン状に退化したAA1号窯式、須恵器壺（401）は底部回転糸切り後無調整で底径からG37号窯式、須恵器碗（402）は高台部形態からG25～G5号窯式に比定できよう。須恵器壺（403～406）は年代不明である。

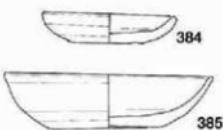


0 10cm

圖34 三面黑褐色粘土層出土遺物（2）



三面土壙出土遺物



388



389



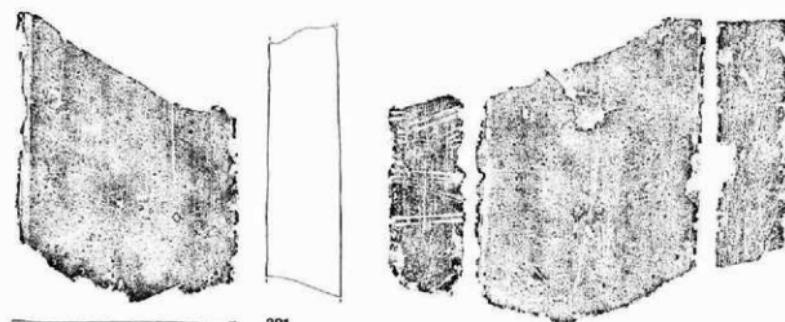
0 10cm



皇宋通宝

S=1/1

図35 三面土壙・その他の遺物（1）



調査区壁出土遺物

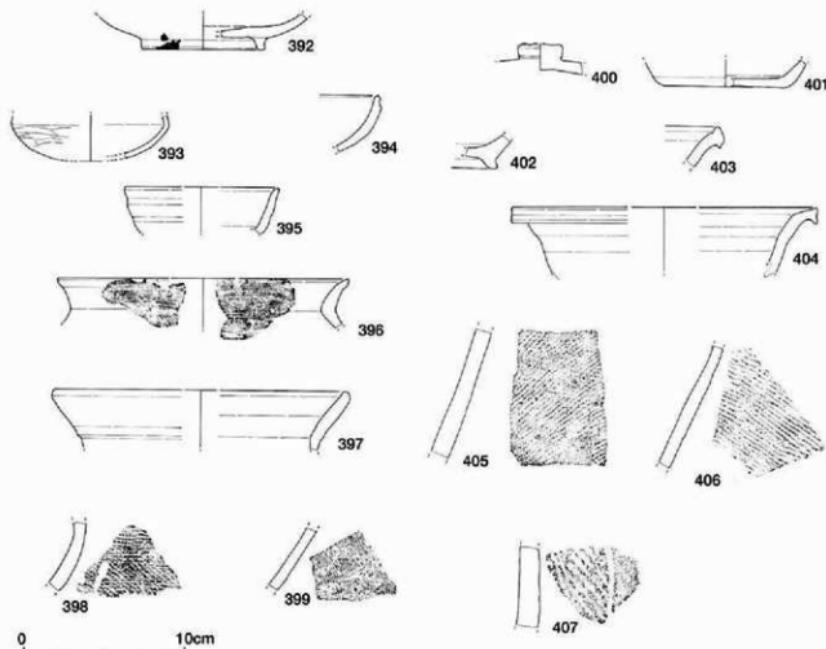


図36 その他の遺物（2）

<遺物觀察表>

一面 包含層	1	かわらけ	法量 口径8.0cm 底径5.4cm 器高1.9cm 胎土 黒色砂粒を多く含む 完形
	2	白磁端反碗	法量不明 小片
	3	平 瓦	寸法 長さ(15.5)cm 幅(14.8)cm 厚さ2.4cm 凸面斜め格子と花菱の印き文
小糸袋 達谷川 瀧原 岸	4	かわらけ	法量 口径12.2cm 底径7.5cm 器高3.4cm 完形
	5	かわらけ	法量 口径12.4cm 底径7.6cm 器高3.1cm 1/2弱残存
	6	常滑捏ね鉢	法量不明 小片
	7	鉢	文久永宝 初鑄年 1863年 楷書 裏面の波紋は不鮮明
土壤 1・2	8	かわらけ	法量 底径(8.6)cm 大型かわらけ 1/3残存
	9	頬口縁軸皿	法量不明 鉄輪遺損け 小片
	10	木製品	寸法 最大径6.4cm 厚さ0.95cm 八角形 0.7cmの穿孔 用途不明 1/2残存
溝	11	かわらけ	法量 口径8.2cm 底径5.0cm 器高2.15cm 灯明皿 口縁部にスス付着 1/3残存
	12	かわらけ	法量 口径8.0cm 底径4.3cm 器高2.85cm 3/5残存
	13	かわらけ	法量 口径(10.8)cm 底径7.2cm 器高3.15cm 1/4残存
	14	かわらけ	法量 口径(12.0)cm 底径(6.2)cm 器高3.5cm 1/4残存
	15	常滑 瓢	法量不明 口縁部の断面 肩部に自然軸 小片
	16	常滑 瓢	法量 底径17.8cm 内底部に自然軸 底部の1/4残存
	17	青磁 碗	法量 口径10.2cm 竜泉窯 鎌運舟文 単弁 軸器 不透明 1/4残存
	18	青磁 碗	法量 口径(11.4)cm 竜泉窯 天日型碗 無文 軸器 半透明 小片
二面 包含層	19	かわらけ	法量 口径7.6cm 底径5.1cm 器高1.9cm 7/10残存
	20	かわらけ	法量 口径7.8cm 底径4.8cm 器高1.75cm 灯明皿 口縁部にスス付着 略完形
	21	かわらけ	法量 口径7.7cm 底径5.2cm 器高1.5cm 薄手 二次焼成を受ける 8/10残存
	22	かわらけ	法量 口径7.8cm 底径5.6cm 器高1.5cm 略完形
	23	かわらけ	法量 口径8.0cm 底径5.1cm 器高1.55cm 二次焼成を受ける 完形
	24	かわらけ	法量 口径8.4cm 底径4.6cm 器高1.5cm 微砂粒を多く含む 完形
	25	かわらけ	法量 口径7.8cm 底径5.3cm 器高1.8cm 完形
	26	かわらけ	法量 口径8.2cm 底径6.2cm 器高1.65cm 胎土 砂粒 白色針状物質を多く含む 完形
	27	かわらけ	法量 口径8.0cm 底径5.3cm 器高1.8cm 胎土 赤色小粒含む 3/5残存
	28	かわらけ	法量 口径8.0cm 底径5.1cm 器高1.65cm 4/5残存
	29	かわらけ	法量 口径8.2cm 底径4.8cm 器高1.8cm 二次焼成を受ける 1/2強残存
	30	かわらけ	法量 口径8.2cm 底径5.05cm 器高1.85cm 胎土 白色針状物質多く含む 灯明皿 完形
	31	かわらけ	法量 口径8.6cm 底径5.35cm 器高1.95cm 灯明皿 口縁部にスス付着 1/2残存
	32	かわらけ	法量 口径4.6cm 底径3.1cm 器高0.95cm 内折型の小皿 完形
	33	かわらけ	法量 口径4.8cm 底径3.25cm 器高0.9cm 内折型の小皿 7/10残存
	34	かわらけ	法量 口径12.0cm 底径8.6cm 器高3.0cm 1/2残存
	35	かわらけ	法量 口径12.2cm 底径6.7cm 器高3.3cm 二次焼成を受ける 7/10残存
	36	かわらけ	法量 口径12.2cm 底径7.0cm 器高3.3cm 1/2残存

	37	かわらけ	法量 口径12.0cm 底径8.6cm 器高3.0cm 3~5残存
	38	かわらけ	法量 口径12.6cm 底径6.2cm 器高3.7cm 2~3残存
	39	常滑 瓢	法量 口径15.2cm 胎土 大小の長石粒を含む
	40	常滑 瓢	法量不明 胎土 長石粒を含む 肩部に自然軸
	41	常滑 瓢	法量不明 胎土 長石粒を含む 小片
	42	常滑 瓢	法量 口径21.8cm 胎土 砂粒 長石粒を含む
	43	常滑捏ね跡	法量不明 小片
	44	常滑捏ね跡	法量不明 口縁部の形状は源美捏ね跡風 口縁部の内面に自然軸 小片
	45	常滑捏ね跡	法量不明 注口残存
	46	常滑捏ね跡	法量 底径14.8cm 底部の1~4残存 内底近くに指頭成形痕 内面磨耗
	47	常滑捏ね跡	法量不明 内面はよく使い込まれて磨耗している
	48	山茶碗室系 碗	法量 底径6.7cm 胎土は灰色 砂粒 長石粒を含み粗い 外底部回転系切り後低い高台がつづくが殆ど脱落 初發痕あり 内部に使用の際の黒っぽい着色あり 南部系(尾張型)
	49	山茶碗室系 碗	法量不明 胎土は灰白色でキメ細かい 内面に斜め格子状の条を刻む 北部系(東濃型)
	50	山茶碗室系 捏ね跡	法量不明 小片
	51	山茶碗室系 捏ね跡	法量不明 内面が焼け焦げてスス付着 小片
	52	山茶碗室系 捏ね跡	法量不明 胎土は白っぽくキメ細かい 内面は磨耗している 小片
	53	漬け入れ子	法量 底径3.1cm 外底部へラ削り 底部1~2残存
	54	漬け御皿	法量 口径16.2cm 底径11.6cm 器高3.5cm 外底部はヘラ削り 灰釉ハケ塗り 二次焼成により内面口縁部と外面は剥離している 残存の口縁部1~5と底部から復元
	55	灰釉 瓢	その他の遺物(図36~39)を参照
	56	白磁口兀皿	法量 口径9.6cm 底径5.2cm 器高2.55cm 外底部は露胎 底部と口縁の一部が残存
	57	白磁口兀皿	法量 底径5.2cm 外底部まで施釉 軸渠は透明 底部が2~5残存
	58	青磁 瓢	法量 口径(15.4)cm 竜泉窯 築道文 复弁 軸渠は透明 体部下位1~4残存
	59	青磁 瓢	法量 口径(13.2)cm 竜泉窯 築道文 复弁 軸渠は半透明 口縁部1~7残存
	60	青白磁	法量 底径5.8cm 口縁部 瓢20~144参照
	61	滑石鍋	法量 内径39.8cm 高さ(5.9)cm 幅12.2cm 厚さ1.9cm 転用途中で断念したか
	62	笄	寸法 長さ(5.0)cm 幅1.4cm 厚さ0.25cm 頭骨 部位不明
	63	磚	寸法 長さ(12.5)cm 幅15.0cm 厚さ5.2cm 胎土 砂粒多量に混入 小石 雲母含む 燐成は甘い 削れ口からかわらけ片が突き出ている 成型時に混入したものと思われる
	64	錢	咸平元宝 初鑄 998年 北宋 楷書 部分欠損
	65	錢	天禧通宝 初鑄 1017年 北宋 楷書
	66	錢	皇宋通宝 初鑄 1039年 北宋 楷書 范ズレ
	67	錢	熙寧元宝 初鑄 1068年 北宋 楷書
	68	錢	熙寧元宝 初鑄 1068年 北宋 楷書
	69	錢	元祐通宝 初鑄 1086年 北宋 楷書 異部
	70	錢	元祐通宝 初鑄 1086年 北宋 楷書

北朝京	71	かわらけ	法量 口径5.2cm 底径4.2cm 器高0.9cm 内折型の小皿 2~5残存
	72	かわらけ	法量 口径7.2cm 底径4.9cm 器高1.55cm 脱土に赤色小粒含む 略完形
	73	かわらけ	法量 口径7.4cm 底径4.7cm 器高1.5cm 脱土に赤色小粒含む 3~5残存
	74	かわらけ	法量 口径8.0cm 底径5.3cm 器高1.7cm 1~2残存
	75	かわらけ	法量 口径7.8cm 底径4.2cm 器高1.9cm 1~2残存
	76	かわらけ	法量 口径7.6cm 底径4.9cm 器高1.8cm 完形
	77	かわらけ	法量 口径7.6cm 底径4.9cm 器高1.9cm 二次焼成を受ける 1~2残存
	78	かわらけ	法量 口径7.4cm 底径4.5cm 器高1.55cm 完形
	79	かわらけ	法量 口径7.8cm 底径1.9cm 器高4.6cm 7~10残存
	80	かわらけ	法量 口径8.1cm 底径5.3cm 器高2.0cm 灯明皿 口縁部にスス付着 略完形
常滑窯	81	かわらけ	法量 口径13.2cm 底径6.4cm 器高3.95cm 二次焼成を受ける 3~5残存
	82	かわらけ	法量 口径10.3cm 底径5.7cm 器高3.1cm 白色針状物質なし 4~5残存
	83	かわらけ	法量 口径12.3cm 底径7.4cm 器高3.3cm 3~5残存
	84	かわらけ	法量 口径12.6cm 底径7.5cm 器高3.4cm 1~2残存
	85	常滑 麦	法量 底径13.2cm 輪積み成形 外面下位は蘗のヘラナデ 内底面に指頭痕が残る
	86	常滑捏ね鉢	法量 口径(27.6)cm 口縁部外側に焼け焦げ 同一遺物が包含層から1片 撫亂から2片出土
	87	常滑 豆	法量 口径9.2cm 同一遺物の口縁部が一面南北溝 二面上包含層からも出土
	88	画入れ子	法量 口径9.6cm 底径5.0cm 器高2.9cm 外底部へラ削り 2~5残存
	89	青磁 碗	法量 口径(16.0)cm 竜泉窓 築蓮弁文 複弁 軸葉は透明 口縁部が3~10残存
	90	青磁 鉢	法量 口径21.6cm 底径11.0cm 器高6.3cm 竜泉窓 内底に双魚文 高台内も施釉 3~10残存
伊賀窯	91	軒平瓦	寸法 長さ(6.1)cm 幅(12.5)cm 厚さ2.3cm 瓦頭の文様は細い陽刻の下向き刻頭文
	92	平 瓦	寸法 長さ(16.6)cm 幅(8.5)cm 厚さ2.4cm 凸面に斜め格子の叩き文 文様が割れています
	93	丸 瓦	寸法 長さ(10.4)cm 幅(5.1)cm 厚さ2.0cm 凸面はヘラ成形 開口部は布目
	94	漆 振	法量 底径6.4cm 黒漆地に朱漆で内外面に竹文 手書き 高台内に「八十」の刻み
	95	漆 振	法量 不明 黒漆塗り 内外面に朱漆で萬文 手書き
	96	漆 振	法量 不明 黑漆塗り 内面に朱漆で飛鶴文 手書き
	97	漆 盤	法量 口径10.0cm 底径7.0cm 器高1.2cm 黒漆塗り 内外面に朱漆で牡丹文 手書き
	98	漆 盤	法量 口径(9.8)cm 底径(8.4)cm 器高1.0cm 黒漆塗り 内面に朱漆で御所文 手書き
	99	漆 盤	法量 口径9.6cm 底径6.0cm 器高1.5cm 黒漆塗り 内外面に朱漆で花卉文 手書き
	100	漆 盤	法量 口径(8.8)cm 底径(6.5)cm 器高1.3cm 黒漆塗り無文 口縁部が1~6残存
丹波窯	101	漆 盤	法量 口径8.5cm 底径6.8cm 器高1.0cm 黒漆塗り無文 外面は面取り整形 1~5残存
	102	漆 盤	法量 底径6.4cm 黒漆塗り無文 底部1~5残存
	103	漆 盤	法量 口径9.2cm 底径6.4cm 器高1.55cm 黒漆塗り無文 底部1~4残存
	104	漆 盤	法量 口径9.4cm 底径7.6cm 器高1.0cm 黒漆塗り無文 1~3残存
	105	漆 盤	法量 底径6.8cm 黒漆塗り無文 底部1~4残存
	106	漆 器	法量 不明 黒漆塗り 内面に朱漆で花卉文 内底部の一部が残存 梵または皿
	107	木製品	寸法 長さ7.7cm 幅4.3cm 厚さ3.1cm 面取りされたカマボコ状の板を2枚合わせたもの 2枚をつなぐ釘孔が2カ所 用途不明

	108	著	寸法 長さ20.9cm 幅0.6cm 厚さ0.4cm両口
	109	著	寸法 長さ21.2cm 幅0.75cm 厚さ0.4cm両口
	110	著	寸法 長さ21.1cm 幅0.8cm 厚さ0.35cm両口
	111	著	寸法 長さ21.9cm 幅0.6cm 厚さ0.3cm両口
	112	著	寸法 長さ26.8cm 幅1.1cm 厚さ0.65cm片口
	113	錢	乾元重宝 初鑄年 758年 唐 楷書
	114	錢	開元通宝 初鑄年 964年 北宋 楷書 范ズレ異部
	115	錢	景德元寶 初鑄年 1004年 北宋 楷書 范ズレ
	116	錢	元祐通宝 初鑄年 1086年 北宋 行書 異部
	117	銅製品	寸法 最大長5.3cm 最大幅2.0cm 上端幅1.8cm 下端幅1.3cm 厚さ0.1cm 形状は逆「し」の字型 用途は飾り金具と思われる 上下端に釘孔が2カ所

二面 南部青砂層	118	かわらけ	法量 口径7.4cm 底径5.1cm 器高1.65cm 完形 *
	119	かわらけ	法量 口径7.4cm 底径4.8cm 器高1.8cm 完形
	120	かわらけ	法量 口径7.6cm 底径5.2cm 器高1.8cm 完形
	121	かわらけ	法量 口径7.9cm 底径5.2cm 器高1.95cm 4~5残存
	122	かわらけ	法量 口径7.8cm 底径5.6cm 器高1.4cm 略完形
	123	かわらけ	法量 口径7.8cm 底径6.2cm 器高1.7cm 略完形
	124	かわらけ	法量 口径7.8cm 底径5.4cm 器高1.45cm 略完形
	125	かわらけ	法量 口径6.0cm 底径3.8cm 器高2.2cm 底部1~2残存
	126	かわらけ	法量 口径12.5cm 底径7.6cm 器高3.5cm 完形
	127	かわらけ	法量 口径12.6cm 底径7.4cm 器高3.15cm 略完形
	128	かわらけ	法量 口径12.2cm 底径7.6cm 器高3.45cm 完形
	129	かわらけ	法量 口径12.7cm 底径8.0cm 器高3.2cm 口唇部が荒れて肥厚 埋場に使用か 2~5残存
	130	かわらけ	法量 口径12.0cm 底径7.4cm 器高3.4cm 灯明皿 口縁部にスス付着 略完形
	131	かわらけ	法量 口径12.6cm 底径6.9cm 器高3.6cm 二次焼成を受ける 完形
	132	火鉢	法量 口径36.4cm 土器質 砂粒を多く含む 口縁部はナデ 外面胴部はタテのヘラナデ貫通穿孔が3カ所残る 他に二面上包含層 二面南西部落込みから小片出土
	133	常滑 瓦	法量 口径(39.4)cm 底径18.2cm 二次焼成を受けて焦げる
	134	常滑 瓦	法量 不明 口縁・底部片とも青砂層直上から出土
	135	常滑 瓦	法量 底径20.4cm 脱土に長石粒多量含む
	136	常滑捏ね鉢	法量 不明 脱土に長石粒多量に含む 二次焼成により外側は剥離 口縁部にスス付着 小片
	137	山茶碗窓手程ね鉢	法量 不明 脱土 灰色 砂粒 長石粒 小石含む 小片
	138	瀬戸入れ子	法量 底径4.4cm 脱土は暗灰色で堅緻 外底部へラ削り 底部1~4残存
	139	瀬戸錦し皿	法量 口径12.4cm 底径9.2cm 器高3.9cm 脱土は茶灰色 灰釉ハケ塗り 1~6残存
	140	瀬戸緑釉皿	法量 口径(9.6)cm 脱土は黄褐色 鉄輪滑掛け 混入か 口縁部1~8残存
	141	瀬戸 蓋子	法量 底径10.0cm 脱土は灰白色 灰釉ハケ塗り 他に二面南端部砂層中から小片出土
	142	白磁口兜皿	法量 口径10.8cm 素地は灰白色 軸葉は透明 口縁部1~4残存

	143	青磁 鉢	法量 口径(19.4)cm 軸部は淡緑灰色半透明 口縁部は折線 内面に型押し蓮弁文 他に二面上包含層 一面小袋谷川灘岸裏込めより小片出土
	144	青白磁水注	法量 口径6.6cm 底径7.0cm 器高(23.0)cm 素地は灰白色 軸部は淡橙色青白色透明溝文と斜線の組み合わせ 二次焼成を受ける 他に一面および二面上包含層より小片出土
	145	滑石 温石	寸法 長さ(7.5)cm 幅6.55cm 厚さ1.8cm 滑石湯転用
	146	硯	寸法 長さ(5.1)cm 幅(4.7)cm 厚さ2.4cm 石材は灰茶色粘板岩 台付き 紙載品
	147	漆 皿	寸法 口径9.6cm 底径6.0cm 器高(1.55)cm 黒漆塗り 内面に朱漆で菊花文 完形
	148	箸	寸法 長さ22.9cm 幅0.7cm 厚さ0.45cm 両1.1
	149	釘	寸法 長さ(11.6)cm 幅0.6cm 厚さ0.4cm
	150	錢	祥符元宝 初鑄 1008年 北宋 楷書 150~152は重なって出土
	151	錢	熙寧元宝 初鑄 1068年 北宋 楷書 空孔あり
	152	錢	紹聖元宝 初鑄 1094年 北宋 楷書
	153	錢	熙寧元宝 初鑄 1068年 北宋 楷書 吳邦 153~157は重なって出土
	154	錢	元豐通宝 初鑄 1078年 北宋 行書
	155	錢	元豐通宝 初鑄 1078年 北宋 行書
	156	錢	元祐通宝 初鑄 1086年 北宋 楷書
	157	錢	紹聖元宝 初鑄 1094年 北宋 楷書
	158	錢	祥符通寶 初鑄 1008年 北宋 楷書
	159	錢	天禧通宝 初鑄 1017年 北宋 楷書

二面 南部 袋形	160	かわらけ	法量 口径7.8cm 底径5.5cm 器高1.75cm 1 / 2 残存
	161	かわらけ	法量 口径8.0cm 底径4.9cm 器高1.85cm 完形
	162	かわらけ	法量 口径12.2cm 底径6.9cm 器高3.6cm 3 / 5 残存
	163	青磁 碗	法量 口径16.6cm 底径4.6cm 器高(8.7)cm 竜泉窯 鎏蓮弁文 高台足付のみ露胎
	164	釘	寸法 長さ6.8cm 幅0.4cm 厚さ0.3cm
	165	釘	寸法 長さ7.5cm 幅0.5cm 厚さ0.25cm
	166	錢	開元通宝 初鑄 964年 北宋 隋書 篆文
	167	錢	咸平元宝 初鑄 998年 北宋 楷書
	168	錢	景德元宝 初鑄 1004年 北宋 楷書
	169	錢	皇宋通宝 初鑄 1039年 北宋 楷書
	170	かわらけ	法量 口径7.8cm 底径4.6cm 器高1.75cm 灯明皿 内外面剥離 4 / 5 残存
	171	かわらけ	法量 口径7.2cm 底径4.9cm 器高1.6cm 完形
	172	かわらけ	法量 口径7.6cm 底径5.6cm 器高1.6cm 灯明皿 口縁部にスス付着 完形
	173	かわらけ	法量 口径9.8cm 底径4.9cm 器高1.6cm 3 / 5 残存
	174	かわらけ	法量 口径8.1cm 底径5.1cm 器高1.85cm 4 / 5 残存
	175	かわらけ	法量 口径8.0cm 底径5.3cm 器高1.9cm 完形
	176	かわらけ	法量 口径8.1cm 底径4.6cm 器高1.7cm 7 / 10 残存
	177	かわらけ	法量 口径8.0cm 底径4.3cm 器高1.65cm 4 / 5 残存
	178	かわらけ	法量 口径8.0cm 底径5.1cm 器高1.6cm 9 / 10 残存

	179	かわらけ	法量	口径8.0cm 底径4.9cm 器高1.8cm 完形	
	180	かわらけ	法量	口径7.8cm 底径5.2cm 器高1.8cm 完形	
	181	かわらけ	法量	口径4.2cm 底径3.6cm 器高0.75cm 内折型小皿 外底部ヘラ削り 3 5残存	
	182	かわらけ	法量	口径4.8cm 底径3.7cm 器高1.85cm 内折型小皿 外底部ヘラ削り 完形	
	183	かわらけ	法量	口径12.6cm 底径7.0cm 器高3.5cm 3 5残存	
	184	かわらけ	法量	口径12.5cm 底径7.5cm 器高3.7cm 9 10残存	
	185	かわらけ	法量	口径12.8cm 底径7.8cm 器高3.7cm 完形	
	186	かわらけ	法量	口径13.2cm 底径7.4cm 器高3.2cm 略完形	
	187	かわらけ	法量	口径12.8cm 底径7.3cm 器高3.2cm 9 10残存	
	188	かわらけ	法量	口径12.2cm 底径6.9cm 器高3.6cm 4 5残存	
	189	かわらけ	法量	口径12.4cm 底径7.0cm 器高3.2cm 2 5残存	
	190	青磁 瓢	法量	底径5.4cm 竜泉窯 鎏蓮文 平弁 葉巻は灰緑色 半透明 底部1 4残存	
	191	漆 盆	法量	口径9.3cm 底径5.6cm 器高1.2cm 黒漆地に朱漆で楳扁文 手描き 略完形	
	192	漆 盆	法量	口径(9.8)cm 黒漆地に朱漆で亀甲花菱文 スタンプ 口縁部1 5残存	
	193	漆 梢	法量不明	黒漆塗り 内面に朱漆で楳文 外面は面取り成形 手描き 小片	
	194	漆 梢	法量	底径(6.8)cm 黒漆地に朱漆で飛鶴文 手描き 底部7 10残存	
	195	曲物 底	寸法	直径16.3cm 厚さ0.7cm 内面は黒漆塗り 周囲に釘孔が7カ所、内2カ所に木釘残存	
	196	著状木製品	寸法	長さ15.3cm 幅0.7cm 厚さ0.35cm 片方の先端部を削った幅半の棒	
	197	錢	治平元年 初鑄	1064年 北宋 草書	
	198	錢	元祐通宝 初鑄	1086年 北宋 草書	
	199	錢	聖宋元宝 初鑄	1101年 北宋 行書	

二面 遺物集中範囲	200	かわらけ	法量	口径7.6cm 底径4.8cm 器高1.6cm 1 2 残存	
	201	かわらけ	法量	口径7.8cm 底径4.35cm 器高1.8cm 完形	
	202	かわらけ	法量	口径7.8cm 底径6.7cm 器高1.8cm 完形	
	203	かわらけ	法量	口径8.0cm 底径4.6cm 器高1.7cm 略完形	
	204	かわらけ	法量	口径8.2cm 底径5.0cm 器高1.85cm 完形	
	205	かわらけ	法量	口径8.3cm 底径5.6cm 器高1.85cm 完形	
	206	かわらけ	法量	口径8.4cm 底径5.3cm 器高1.7cm 略完形	
	207	かわらけ	法量	口径7.6cm 底径5.1cm 器高1.8cm 完形	
	208	かわらけ	法量	口径7.6cm 底径5.1cm 器高1.7cm 完形	
	209	かわらけ	法量	口径7.5cm 底径5.1cm 器高1.8cm 完形	
	210	かわらけ	法量	口径13.6cm 底径7.7cm 器高3.75cm 完形	
	211	かわらけ	法量	口径13.0cm 底径7.5cm 器高3.9cm 7 10残存	
	212	かわらけ	法量	口径13.0cm 底径6.8cm 器高3.7cm 8 10残存 灯明皿 口縁部にスス付着	
	213	かわらけ	法量	口径13.0cm 底径8.2cm 器高3.65cm 略完形 二次焼成を受ける	
	214	かわらけ	法量	口径12.2cm 底径7.6cm 器高3.0cm 3 5残存	
	215	かわらけ	法量	口径13.2cm 底径7.6cm 器高3.1cm 略完形	

	216	かわらけ	法量 口径13.0cm 底径7.8cm 器高3.5cm 完形
	217	かわらけ	法量 口径12.8cm 底径7.7cm 器高3.0cm 略完形
	218	かわらけ	法量 口径13.0cm 底径8.2cm 器高3.55cm 完形
	219	漆 直	法量 口径10.0cm 底径6.2cm 器高1.5cm 2~5残存 黒漆地に朱漆で御所車と波文 手描き
	220	漆 直	法量 口径9.0cm 底径6.0cm 器高1.0cm 略完形 黒漆地に朱漆で飛鶴文 手描き
	221	漆 梅	法量 底径7.0cm 底部3~5残存 内外面 黒漆地に朱漆で亀甲と菊文 スタンプ
	222	漆 梅	法量 口径14.6cm 底径7.6cm 器高5.5cm 7~10残存 黒漆地に無文
	223	漆 梅	寸法 長さ(17.2)cm 幅6.0cm 厚さ0.8cm
	224	手押し本	寸法 長さ10.9cm 幅3.7cm 最大厚さ4.3cm
	225	曲物 底	寸法 直径15.8cm 厚さ0.9cm 1~3残存
	226	折 敷	寸法 長さ30.7cm 幅(8.5)cm 厚さ0.25cm まな板に転用? 刀痕多数あり
	227	折 敷	寸法 長さ20.6cm 幅(6.4)cm 厚さ0.2cm 小孔1カ所残存
	228	折 敷	寸法 長さ20.2cm 幅(14.6)cm 厚さ0.1cm 三方に小孔残存
	229	板草履	寸法 長さ23.0cm 幅9.2cm 厚さ0.3cm 完形 上方に穿孔2カ所 表裏とも葵が残存付着
	230	箸	寸法 長さ22.6cm 幅0.95cm 厚さ0.6cm 両口
	231	箸	寸法 長さ22.6cm 幅0.5cm 厚さ0.45cm 両口
	232	箸	寸法 長さ23.7cm 幅0.6cm 厚さ0.45cm 両口
	233	箸	寸法 長さ(20.3)cm 幅0.6cm 厚さ0.35cm 両口
	234	箸	寸法 長さ21.1cm 幅0.75cm 厚さ0.55cm 両口
	235	平 瓦	寸法 長さ32.0cm 幅(14.4)cm 厚さ2.0cm 凸面 斜め格子叩き文
	236	平 瓦	寸法 長さ(14.6)cm 幅(12.4)cm 厚さ1.9cm 凸面 網目叩き文
	237	銭	開元通宝 初鑄 621年 唐 隸書
	238	銭	開元通宝 初鑄 621年 唐 隸書
	239	銭	開元通宝 初鑄 960年 南唐 隸書
	240	銭	皇宋通宝 初鑄 1039年 北宋 隸書
	241	銭	熙寧元宝 初鑄 1068年 北宋 篆書
	242	銭	熙寧元宝 初鑄 1068年 北宋 篆書

南端部砂層中	243	かわらけ	法量 口径7.8cm 底径5.5cm 器高1.7cm 1~3残存
	244	かわらけ	法量 口径8.4cm 底径5.4cm 器高1.95cm 1~2残存
	245	かわらけ	法量 口径8.6cm 底径6.1cm 器高1.85cm 7~10残存
	246	かわらけ	法量 口径8.8cm 底径5.2cm 器高2.2cm 1~3残存 灯明皿 口縁部にスス付着
	247	かわらけ	法量 口径8.6cm 底径5.9cm 器高1.7cm 1~2残存
	248	かわらけ	法量 口径5.2cm 底径3.4cm 器高1.1cm 1~4残存 内折型小皿
	249	かわらけ	法量 口径6.0cm 底径4.0cm 器高1.15cm 1~3残存 内折型小皿
	250	かわらけ	法量 口径10.0cm 底径5.4cm 器高3.1cm 3~5残存 器壁薄い 硬質
	251	かわらけ	法量 口径11.2cm 底径5.6cm 器高3.2cm 3~5残存 灯明皿 口縁部にスス付着
	252	かわらけ	法量 口径12.4cm 底径8.1cm 器高3.1cm 1~2残存

	253	かわらけ	法量 口径13.2cm 底径8.2cm 器高3.3cm 2/5残存
	254	常滑 麦	法量不明 小片
	255	青磁鉢	法量 口径(29.6)cm 竜泉窯 口縁部折縁 内面に壓押し蓮弁文 軸葉は灰緑色半透明
	256	青磁鉢	法量 底径9.2cm 器高(8.85)cm 255と同一個体と思われる
	257	鏡	寸法 長さ(8.5)cm 幅(3.5)cm 厚さ(1.4)cm 銘板岩製 黒痕が残る
	258	丸瓦	寸法 長さ(17.4)cm 幅(7.6)cm 厚さ2.6cm 凸面 ヘラ成形 四面 布目
	259	丸瓦	寸法 長さ(10.7) 幅(7.3)cm 厚さ2.6cm 凸面 鏡目叩き文 四面 布目
	260	丸瓦	寸法 長さ(19.4)cm 幅(6.4)cm 厚さ3.0cm 凸面 鏡目叩き文 四面 布目
	261	錢	祥符通宝 初鋤 1008年 北宋 楷書
	262	錢	天禧通宝 初鋤 1017年 北宋 楷書
	263	錢	天聖元宝 初鋤 1023年 北宋 楷書
	264	錢	嘉祐通宝 初鋤 1056年 北宋 楷書
	265	錢	熙寧元宝 初鋤 1068年 北宋 楷書
二面 柱穴出土遺物	266	かわらけ	法量 口径7.2cm 底径5.3cm 器高1.75cm 1/2残存 P.45
	267	かわらけ	法量 口径7.8cm 底径5.4cm 器高1.9cm 2/5残存 P.21
	268	かわらけ	法量 口径7.5cm 底径4.8cm 器高1.6cm 1/2残存 P.7
	269	かわらけ	法量 口径7.8cm 底径5.4cm 器高1.75cm 略完形 P.43
	270	かわらけ	法量 口径7.4cm 底径5.2cm 器高1.8cm 2/5残存 P.24
	271	かわらけ	法量 口径8.1cm 底径5.3cm 器高1.8cm 完形 P.43
	272	かわらけ	法量 口径7.6cm 底径4.8cm 器高1.75cm 完形 P.45
	273	かわらけ	法量 口径8.2cm 底径5.3cm 器高1.6cm 1/2残存 P.37
	274	かわらけ	法量 口径7.8cm 底径5.0cm 器高1.75cm 灯明皿 2/5残存 P.35
	275	かわらけ	法量 口径8.2cm 底径4.8cm 器高1.7cm 2/5残存 P.30
	276	かわらけ	法量 口径(11.7)cm 底径7.6cm 器高2.6底部 1/4残存 P.31
	277	かわらけ	法量 口径12.2cm 底径6.9cm 器高3.4cm 7/10残存 P.53
	278	かわらけ	法量 口径(12.4)cm 灯明皿 口縁部 1/6残存 P.7
	279	かわらけ	法量 口径12.8cm 底径8.0cm 器高3.3cm 口縁部1/4残存 P.37
	280	かわらけ	法量 口径12.4cm 底径7.2cm 器高3.6cm 完形 P.34
	281	かわらけ	法量 口径12.4cm 底径7.2cm 器高3.3cm 1/3残存 P.45
	282	かわらけ	法量 口径12.2cm 底径8.35cm 器高3.3cm 2/3残存 P.9
	283	かわらけ	法量 口径12.2cm 底径7.6cm 器高3.7cm 1/2残存 P.25
	284	かわらけ	法量 口径12.0cm 底径6.7cm 器高3.4cm 1/2残存 P.30
	285	火鉢	法量 口径(44.0)cm 底径(34.0)cm 器高9.5cm 外底部は静止糸切りか? 内外面ともに剥離著しい 286と同一個体と思われる 南端部砂層 南部炭層より出土
	286	火鉢	法量不明 P.30
	287	常滑 麦	法量 底径16.4cm 外底部に二次焼成を受ける P.37
	288	山茶碗窯系捏ね鉢	法量不明 口縁部小片 P.51

		289	山茶碗室系 捏ね体	法量不明 底部小片 内底面は磨滅 内面のみ焼け焦げ P. 6
		290	白磁 盤	法量不明 口縁部小片 P. 9
		291	青磁 盤	底径(5.0)cm 同安窯系青磁 内底部に飾書き文 P. 51
		292	釘	寸法 長さ11.4cm 幅0.5cm 厚さ0.6cm P. 28
		293	釘	寸法 長さ(10.4)cm 幅0.4cm 厚さ0.6cm P. 45
		294	錢	元豐通宝 初鑄 1078年 北宋 篆書 P. 18
		295	錢	元祐通宝 初鑄 1086年 北宋 篆書 P. 22
		296	平 瓦	寸法 長さ(14.3)cm 幅(9.8)cm 厚さ2.05cm 凸面斜め格子叩き文 P. 36
		297	平 瓦	寸法 長さ(10.8)cm 幅(11.6)cm 厚さ2.5cm 凸面繩目叩き文 P. 31
		298	丸 瓦	寸法 長さ(14.7)cm 幅(9.2)cm 厚さ2.2cm 凸面繩目叩き文 四面布目 P. 34
		299	平 瓦	寸法 長さ(16.9)cm 幅(12.1)cm 厚さ2.1cm 凸面斜め格子叩き文 P. 53
		300	磚	寸法 長さ30.6cm 幅14.5cm 厚さ5.2cm 板状圧痕が各面に残る 脱土 かわらけと同質 砂粒 粒状物質 赤色粒含む 燐成は付い 完形 P. 44
		301	磚	寸法 長さ(15.4)cm 幅13.8cm 厚さ4.6cm 板状圧痕が各面に残る 脱土 小石 雲母 砂粒を含む 燐成した痕跡あり 1 2 残存 P. 52
		302	磚	寸法 長さ(18.8)cm 幅14.6cm 厚さ5.1cm 脱土 砂粒 白色針状物質 雲母 石粒を含む 燐成した痕跡あり 2 3 残存 P. 52

三面 南西端落込み	303	かわらけ	法量 口径8.2cm 底径5.5cm 器高1.6cm 3 5 残存
	304	かわらけ	法量 口径7.8cm 底径5.0cm 器高1.7cm 完形
	305	かわらけ	法量 口径8.2cm 底径5.4cm 器高1.8cm 灯明皿 口縁部にスス付着 略完形
	306	かわらけ	法量 口径12.5cm 底径7.4cm 器高3.5cm 7 10 残存
	307	かわらけ	法量 底径6.6cm 外底部に径0.5cm深さ0.6cmの貫通しない穿孔あり 小片
	308	かわらけ	法量 口径13.0cm 底径8.4cm 器高3.25cm 外底部に径0.2cm程の穿孔あり 完形
	309	青白磁 合子	法量 口径8.0cm 受け部径9.0cm 底径8.1cm 器高2.0cm 糊葉は淡青白色透明 受け部および体部下位から外底部は露胎 口縁部にスス付着
	310	漆 盤	法量 口径9.8cm 底径6.6cm 器高1.5cm 黒漆塗り 内面に朱漆で花卉文 手描き
	311	曲物 底	寸法 径37.2cm 厚さ0.75cm 木釘が1カ所残存
	312	杓 子	寸法 長さ22.6cm 幅5.7cm 厚さ0.7cm
	313	木製品	寸法 長さ14.6cm 幅1.1cm 厚さ1.0cm 四角柱状に切り込みが入る 人形か
	314	板草履	寸法 長さ23.7cm 幅(4.9)cm 厚さ0.45cm 1 2 残存 薙状圧痕が残る
	315	板草履	寸法 長さ22.8cm 幅9.6cm 厚さ0.3cm 完形 薙状圧痕が残る
	316	板草履	寸法 長さ21.4cm 幅(8.7)cm 厚さ0.3cm 略完形 薙状圧痕が残る
	317	鞆 素	寸法 最大径2.8cm 高さ(2.4)cm 乾燥して変形 心棒は脱落
	318	木製品	寸法 最大径2.6cm 高さ13.9cm 原木の樹皮を剥ぎ、面取り成形 陽物か
	319	手押し木	寸法 長さ10.6cm 幅4.0cm 厚さ5.7cm 面取り成形 底部に摩擦痕が残る
	320	格子の部材	寸法 長さ(15.9)cm 幅2.9cm 最大厚さ2.6cm 釘孔2カ所 内1カ所に折れた鉄釘が残る
	321	へ ら	寸法 長さ19.8cm 幅2.3cm 厚さ0.8cm
	322	木製品	寸法 長さ20.5cm 幅7.1cm 厚さ2.3cm 釘孔2カ所 内1カ所に鉄釘が残る 用途不明

		323	木製品	寸法 長さ9.0cm 幅1.05cm 厚さ1.25cm 用途不明
		324	木製品	寸法 長さ(5.4)cm 幅3.2cm 厚さ1.2cm 用途不明
		325	箸	寸法 長さ18.7cm 幅0.65cm 厚さ0.3cm 両口
		326	箸	寸法 長さ21.4cm 幅0.7cm 厚さ0.55cm 両口
		327	箸	寸法 長さ21.7cm 幅0.7cm 厚さ0.45cm 両口
		328	箸	寸法 長さ22.6cm 幅0.8cm 厚さ0.6cm 両口
		329	箸	寸法 長さ22.4cm 幅0.8cm 厚さ0.5cm 両口
		330	箸	寸法 長さ22.3cm 幅0.85cm 厚さ0.5cm 両口
		331	箸	寸法 長さ22.5cm 幅0.85cm 厚さ0.3cm 両口
		332	箸	寸法 長さ23.4cm 幅0.75cm 厚さ0.25cm 両口
		333	箸	寸法 長さ23.1cm 幅0.65cm 厚さ0.6cm 両口
		334	箸	寸法 長さ23.4cm 幅0.75cm 厚さ0.4cm 両口
		335	箸	寸法 長さ23.3cm 幅0.8cm 厚さ0.4cm 両口
		336	箸	寸法 長さ23.5cm 幅0.7cm 厚さ0.5cm 両口
		337	箸	寸法 長さ24.2cm 幅0.45cm 厚さ0.3cm 両口
		338	箸	寸法 長さ23.9cm 幅0.55cm 厚さ0.4cm 両口
		339	箸	寸法 長さ25.8cm 幅0.8cm 厚さ0.55cm 片口
		340	へら	寸法 長さ20.3cm 幅1.2cm 厚さ0.65cm
		341	墨書き木片	寸法 長さ(15.8)cm 幅2.0cm 厚さ0.2cm 判読不能
		342	笄	寸法 長さ(9.0)cm 幅1.6cm 厚さ0.3cm 銀骨 部位不明
		343	釘	寸法 長さ9.5cm 幅0.45cm 厚さ0.25cm
		344	刀子	寸法 長さ(15.7)cm 幅1.3cm 厚さ0.6cm 柄の木部が片側にはば完全に残る
		345	錢	祥符通宝 初鑄 1008年 北宋 楷書
		346	錢	元豐通宝 初鑄 1078年 北宋 行書
		347	錢	元豐通宝 初鑄 1078年 北宋 行書
		348	錢	元豐通宝 初鑄 1078年 北宋 草書
		349	錢	聖宋元宝 初鑄 1101年 北宋 行書

三面 黒褐色粘土層中	350	かわらけ	法量 口径8.4cm 手捏ね 1~4 残存
	351	かわらけ	法量 口径9.0cm 手捏ね 1~5 残存
	352	かわらけ	法量 口径(9.8)cm 手捏ね 小片
	353	かわらけ	法量 口径(12.4)cm 手捏ね 口縁部1~8 残存
	354	かわらけ	法量 口径7.8cm 底径5.5cm 器高1.65cm 7~10 残存
	355	かわらけ	法量 口径8.0cm 底径3.2cm 器高1.9cm 完形
	356	かわらけ	法量 口径8.1cm 底径5.6cm 器高1.6cm 4~5 残存
	357	かわらけ	法量 口径8.0cm 底径5.8cm 器高1.65cm 灯明皿 口縁部にスス付着 4~5 残存
	358	かわらけ	法量 口径8.4cm 底径5.2cm 器高1.65cm 完形
	359	かわらけ	法量 口径8.2cm 底径6.4cm 器高1.85cm 略完形
	360	かわらけ	法量 口径12.7cm 底径7.8cm 器高3.65cm 4~5 残存

	361	かわらけ	法量 口径12.0cm 底径7.3cm 器高3.35cm 7 10残存
	362	かわらけ	法量 口径12.2cm 底径6.4cm 器高3.55cm 底部に貫通穿孔 2 5残存
	363	かわらけ	法量 口径12.4cm 底径6.6cm 器高3.45cm 完形
	364	かわらけ	法量 口径12.4cm 底径8.6cm 器高3.75cm 略完形 底部に貫通穿孔
	365	白かわらけ	法量 口径(12.8)cm 手捏ね 小片
	366	鶴 鉢	法量不明 伊勢地方産か 脱土に雲母を含む 小片
	367	瓦質 瓢	法量 口径12.8cm 黒緑 口縁部1 3残存
	368	涙美 瓢	法量 口径(20.4)cm 灰釉ハケ塗り
	369	山茶碗窓系 採ね鉢	法量 底径(15.2)cm 高台貼り付け 瓷地面をヘラで削って整形 残存する外側部下位にはヘラ削りがない 内面は使いこまれて磨滅している
	370	青白磁水注	法量 最大径9.0cm 底径5.8cm 瓜型 軸器は水色透明 外側部下位から底部まで露胎
	371	板草瓶	寸法 長さ22.8cm 幅9.3cm 厚さ0.35cm 略完形 瓢状圧痕が残る
	372	木製品	寸法 長さ11.3cm 幅1.1cm 厚さ0.6cm 用途不明
	373	木製品	寸法 長さ11.2cm 幅0.85cm 厚さ0.4cm 用途不明
	374	漆 材	寸法 長さ14.6cm 幅1.8cm 厚さ1.0cm 空孔1カ所 先端をホゾ組用に削る
	375	箸	寸法 長さ22.1cm 幅0.55cm 厚さ0.4cm 両口
	376	箸	寸法 長さ20.2cm 幅0.7cm 厚さ0.5cm 両口
	377	箸	寸法 長さ(24.4)cm 幅0.8cm 厚さ0.55cm 両口
	378	箸	寸法 長さ27.6cm 幅0.65cm 厚さ0.6cm 両口
	379	へ ら	寸法 長さ24.7cm 幅1.4cm 厚さ0.9cm
	380	曲 物	法量 口径約40cm 底板径37cm 器高約8.5cm 側板厚 約0.5cm 底板厚 約1.3cm 側板は二重 底板は釘止めか否か不明
	381	銅製品	寸法 直径1.5cm 高さ0.55cm 銅 外面に鍍金
	382	錢	嘉祐通宝 初鑄 1056年 北宋 隸書

三面 調査区壁出土遺物	383	常滑 瓢	法量 口径16.2cm
	384	かわらけ	法量 口径8.4cm 底径4.8cm 器高1.85cm 完形
	385	かわらけ	法量 口径13.0cm 底径7.3cm 器高3.35cm 4 5残存
	386	青磁 瓢	法量 口径(15.8)cm 童泉窯 鎬蓮弁文 複弁
	387	高麗 青磁瓶子	法量不明 黒色と白色の象嵌 三つ鱗文か 小片
	388	平 瓦	寸法 長さ(20.9)cm 幅(15.9)cm 厚さ2.2cm 凸面 斜め格子叩き文
	389	平 瓦	寸法 長さ(19.6)cm 幅(14.0)cm 厚さ2.0cm 凸面 斜め格子叩き文
	390	錢	皇宋通宝 初鑄 1039年 北宋 楷書
	391	磚	寸法 長さ(17.5)cm 幅13.8cm 厚さ4.4cm 四面に板状圧痕が残る 脱土 赤色粒 雲母 かわらけ片含む 硬質 焼け焦げた痕跡あり 2 3残存

一 二 三 面 中 世 以 前 の 遺 物	392	灰釉碗	法量 底径7.6cm 高台貼り付け 灰釉ハケ塗り内部露胎 1 4残存 二面上包含層より出土
	393	土師器 壺	法量不明 口縁部ナデ 外底部ヘラ削り 丸底 底部剥離 南西部落込みより出土
	394	土師器 壺	法量不明 口縁部ナデ 外底部ヘラ削り 丸底 黒褐色粘土層より出土

	395	土師器 壺	法量 口径(9.6)cm 口縁部ナデ 黒彩 南西部落込みより出土
	396	土師器 壺	法量 口径(18.2)cm 口縁部内外面ヨコ、体部外面タテのハケ調整 黒褐色粘土層より出土
	397	土師器 壺	法量 口径(18.6)cm 脇上 砂粒を多量に含む 口縁部ナデ 黑褐色粘土層より出土
	398	土師器 壺	法量不明 外面はハケ調整 黑褐色粘土層より出土
	399	土師器 壺	法量不明 外面はハケ調整 黑褐色粘土層より出土
	400	須恵器 盖	法量不明 つまみ径2.8cm 針状物質なし 南西部落込みより出土
	401	須恵器 壺	法量 底径7.6cm 外底部回転糸切り 針状物質なし 南西部落込みより出土
	402	須恵器 瓢	法量不明 外底部回転糸切り 高台貼り付け 針状物質なし 小片 南端部砂層中より出土
	403	須恵器 壺	法量不明 小片 南部青砂層中より出土
	404	須恵器 壺	法量 口径(19.0)cm 南西部落込みより出土
	405	須恵器 壺	法量不明 体部外面に平行条印き目 南端部砂層中より出土
	406	須恵器 壺	法量不明 体部外面に平行条印き目 黑褐色粘土層より出土
	407	繩文式土器	法量不明 施線区画内に繩文 南西部落込みより出土

<遺物点数表>

※ 接合後の破片点数

	一 面				二 面								三 面				合計 調査区域 壁
	包含層	測量 表示	溝	土壤	包含層	北部 砂層	南部 青砂層	南部 灰層	遺物集 中範囲	南端部 砂層	柱穴	南西部 落込み	黒褐色 粘土層	地割板 ・土壤			
近世遺物	1	11	2	1	1	1	1	1									18
かわらけ器(手)	98	7	138	55	519	220	229	267	89	148	195	123	190	12	4	2,294	12
國產陶器	潤美														9		9
當滑	39	6	27	1	204	39	140	6		35	37	11	8	1	1	555	
窯戸	2		5	2	11	2	27	2			16						67
山茶輪空					22	3	8				6	1	1	1			42
青磁	6	1	5		14	5	4	4		11	3	4	2				59
船載白磁	1		1		5		2				2	1					12
陶磁	青白磁				2	1	8			2			3				16
その他					褐釉	1									高麗	1	2
土・瓦質製品	4	1		1	8		1			8	5	2	12	1			43
瓦	23	3	14	5	167	49	105	25	5	80	46	27	13		10		572
金属製品	1	1			7	6	10	7	6	6	4		2			1	51
石製品	3			1	11		7			4	2		2				30
木製品	46		2	1	108	152	44	62	77	26	55	330	100	17		1,020	
骨製品					1							1					2
中世以前	2		2	10	7	1	6	5		13	9	8	38	15			116
合計	226	30	196	77	1,087	480	592	378	177	333	380	509	390	48	17	4,920	

第五章　まとめ

本調査での大きな成果は、円覚寺に関わる総門外の建物と円覚寺創建前後の遺構を発見できたことにある。ここでは二面と三面の遺構・遺物に焦点を絞って整理し、簡単なまとめとしたい。

1. 年代と変遷

まず、出土遺物の年代を確認すると、2c期面直上の常滑窯（図20-134）は13世紀第4四半期、三面土壙出土の常滑窯（図35-383）は13世紀第3四半期に比定できる。2c期面廃絶後の整地層（二面上包含層）から出土した常滑・瀬戸・山茶碗窯の製品は概ね14世紀第2四半期までに納まるようであり、二面～三面の年代が14世紀第2四半期～13世紀第3四半期の間にあることが判る。また、かわらけ皿では二面と三面の境に様式上の画期がある。二面は薄手の皿が組成に加わり始める時期、三面は前代に減少傾向を見せ始めた手捏ね整形の皿が、まさに消滅する寸前の時期にあたる。この画期はこれまでの調査から13世紀末頃と推定され、上記年代と矛盾するものではない。

さて、円覚寺は弘安五年（1282年）に創建されるが、弘安十年（1287年）・正応三年（1290年）の火災に加え、正応六年（1293年）の地震によって大きな被害を受ける。永仁四年（1296年）には一応の再建が成ったようであるが、更に正和五年（1316年）と文保二年（1318年）の度重なる火災で荒廃したことは疑いない。すべての再建が完了したのは、元亨三年（1323年）に行なわれた北条貞時十三年忌供養の時であり、建武元年（1334年）頃に描かれた「円覚寺境内絵図」は再建後の姿を寫したものである。

以上を念頭に置くと、遺跡地の変遷は次のように考えることができる。

- 2c期建物焼失後に「円覚寺境内絵図」が描かれた。つまり、二面上包含層は建武元年（1334年）頃を下限とする整地層であり、一面に溝や土壙が作られる14世紀後半以降まで空閑地であった。
- 2c期建物は正応三年（1290年）、2b期建物は弘安十年（1287年）の火災で焼失した可能性が高い。2c期面直上で出土した常滑窯の年代観を根拠とするが、かわらけ皿の様相は2c期～2a期までが一様式内に納まり、後述する2a期と2b期・2c期の年代隔差がほとんどないことを示している。
- 2a期は円覚寺が開山した弘安五年（1282年）の生活面と考える。2a期面の基盤となる7a層は川沿いの湿地を埋めた整地層で、円覚寺創建時の土木工事による排土であろう。また、工事は弘安四年（1281年）夏の戦勝直後に着手したと考えられており、7a層直下（7b層上面）にセリ科植物の種子が付着していた事実と季節的にも一致している。
- 三面は円覚寺創建以前に比定できる。段状遺構や土壙の性格は不明であるが、立地から見て水田耕作に関わる遺構の可能性があり、花粉分析の結果を得たい。なお、円覚寺開創にまつわる奇瑞譚には、弘安元年（1278年）北条時宗と道隆が邊境に起工したところ、円覚経を納めた石櫃が出たという。この年代を信じれば、7b層は少なくとも弘安元年まで遡る。つまり、7b層が自然堆積層であることや後述する三面の上限年代を考慮すると、弘安元年には堆積途中か既に湿地化していたと推測できる。
- 地割れ痕は正嘉元年（1257年）の大地震によるものである。「吾妻鏡」には「地裂水湧出」したと記されており間違いはないだろう。段状遺構・土壙と同時に古く、三面の上限年代を示している。
- 旧流路は中世以前に自然理没したと考えた。ただし、唯一不安として残るのは、黒褐色粘土層（8層）が山裾から流出した二次堆積土であった場合である。この場合は、7b層下にあり地割れ痕が確認できないという事実から、正嘉元年～弘安元年までの間に埋没したと考えざるを得ない。いずれに

しても円覚寺創建以前の流路は、谷の西側山裾近くにあったことが確認できた。

2. 建物の性格

二面で復元した建物は4棟ある。各々の平面構造は更に検討する余地を残すが、2a期～2c期（1282年～1290年）という限られた時間内では、これら建物の性格に大きな変化はなかったと考えている。既に、第三章では円覚寺に関わる雜舎であろうと記したが、その根拠は次のようなことにある。

○円覚寺は創建後間もない弘安六年（1283年）で、僧100人、行者人工100人、承仕等20人、洗衣4人、方丈行者6人、下部38人の計268人を擁する大寺院であり、こうした人員を収容する寮舎が当然整備された筈である。

○永仁四年（1296年）に門前屋地が仏日庵に寄進され、門前屋地の支配は13世紀末に始まっていたことが予想できる。また、建武四年（1337年）と貞和四年（1348年）には、門前屋地が円覚寺の承仕・小番ら半俗人に配分され、地子をとって貸し出されていたことも判っている。「円覚寺境内絵図」には縦横内外に簡素な建物群が描かれており、本地点にも同様の建物があった可能性は十分に考えられる。

○2b期建物に伴う遺物集中範囲のかわらけ皿は、俗にいう「かわらけ溜まり」的な出土状態ではなく、漆器椀・皿・箸・折敷と共に出土しており、日常生活に用いた程度の数量である。また、手押し木の出土は紡錘が行なわれていたことを示すが、これも專業工房に直結するものではなく、町屋における日常的な作業であったことが絵巻物などの史料から窺える。

○瓦の総点数の約90%が二面から出土しており、建物1・建物3では瓦や磚が礎板に転用されていた。これらの遺物は最も近くにある円覚寺から流出したと考えるのが自然で、二面建物の構築に円覚寺が関与していたことを示唆している。

3. 遺物の様相

瓦・磚・舶載磁器の一部など円覚寺から流入した遺物を除けば、2a期～2c期の遺物は13世紀末の町屋で消費された良好な資料と言えよう。特に、かわらけ皿と漆器は完形ないし完形に準ずるものが多く、出土層位によって細かな年代比定が行なえた点に大きな特徴がある。図37に掲載した遺物は2b期～2c期（北部炭層・南部青砂層・南端部砂層）、2b期（南部炭層・遺物集中範囲）、2a期（南西部落ち込み）の他に黒褐色粘土層・三面土壌・調査区壁の遺物を使用した。ただし、2b期～2c期は両時期の遺物が混在し、2b期と一部重複することを示している。

かわらけ皿の形態分類は行なっていないが、薄手型の大皿（385・211）が2a期から存在するに対し、中皿（82・250）はやや遅れた2b期～2c期に出現する。薄手丸深型の大皿・小皿はなく、恐らく2c期以降に出現して大小のセットが完成するであろう。一方、手捏ね整形の皿（350）は2a期以前に消滅したようで、2a期直前にはごく少量の破片が残存するだけである。なお、特殊な器種として内折れ型の小皿（182）が2b期～2c期に量産されている。

漆器は2b期～2c期に多く出土した。施文方法には無文・印判・手書きの三種類があり、印判（221）は少なく主体ではない。底部形態には無高台・ベタ高台・輪高台がある。椀は輪高台だけであるが、厚く大きいもの（222）に対し小さく繊細な輪高台（94、194、221）が主体を占め、皿は無高台（98、104、191、219、220）・ベタ高台（97、99、101）・輪高台（103、147、310）がほぼ同数存在している。なお、文様意匠の同じ椀・皿は少なく、必ずしもセット関係を意識して使用することはなかったようである。

本地点のかわらけ皿と漆器椀・皿は日常供膳具と思われるが、2a期～2c期の内で測定した点数を比較すると（かわらけ：漆器 = 5 : 1）となり、かわらけ皿の使用割合がかなり高かったことが判る。これが町屋における一般的な数値であるか否かは、類例の増加をまって検討する必要があろう。

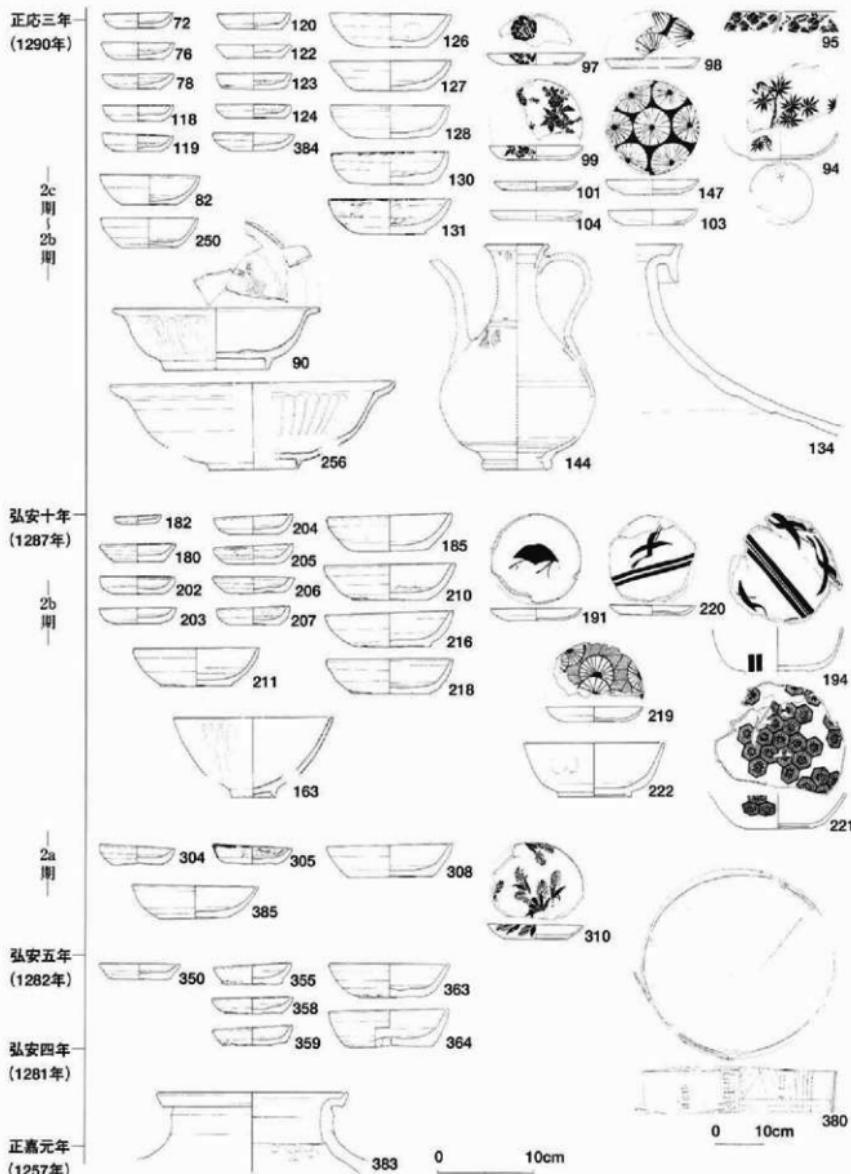
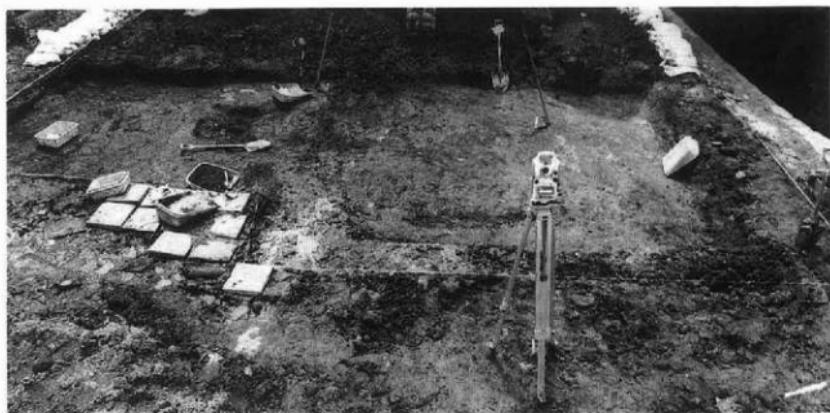


図37 13世紀末葉の遺物

写 真 図 版



▲調査開始風景

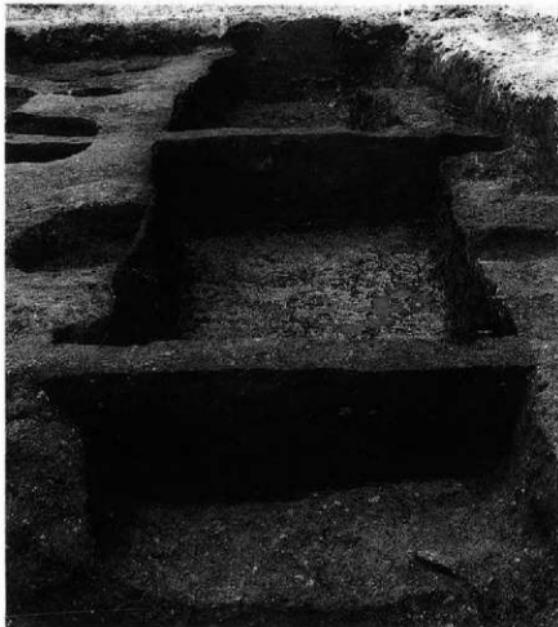


Ⅰ区一面 全景▶

図版 2



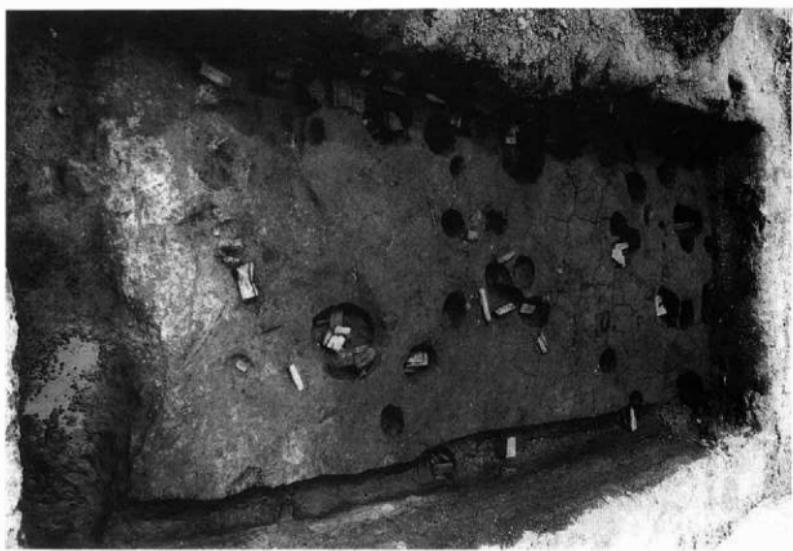
◀ I区一面 全景



I区一面 溝▶



▲ I 区二面 上層



▲ I 区二面 下層

図版 4



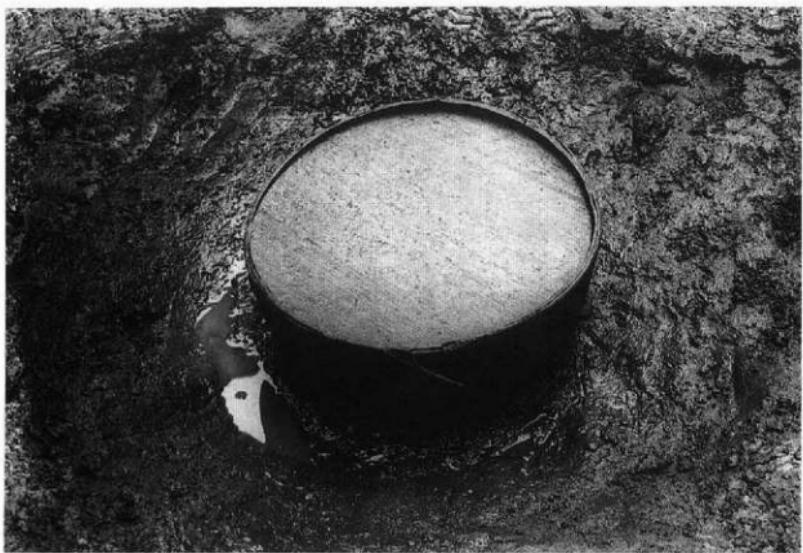
▲ II 区二面 下層



▲ II 区二面 板壁状造構

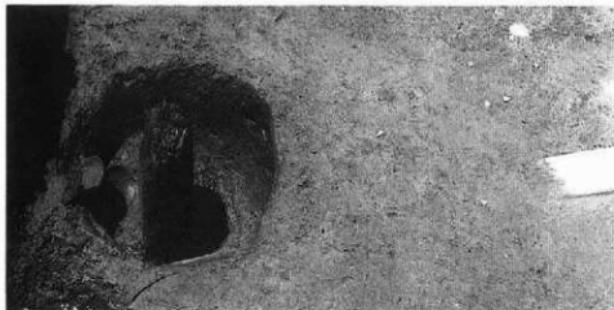


▲Ⅱ区二面 飾り金具出土状態



▲Ⅰ区三面 曲げ物出土状態

図版 6



II区二面 ▶
柱穴 (P43)



II区二面 ▶
柱穴 (P53)



II区二面 ▶
縦板はか



II区二面
南部炭層
(排水溝内)

漆繪皿 (191) · 箸? (196) · 錢・折敷片



II区二面
南部炭層
(排水溝内)

かわらけ皿 (180・185)

図版 8



▲ II区二面 遺物集中範囲（東から）



▲ 同上（南から）



▲ II区二面 南西部落ち込み（北から）

図版10

I 区三面 ▶
段状造構1
(手前は未完掘)



▼I 区三面 段状造構1（西から）





▲Ⅱ区二面 南西部落ち込み断面



▲Ⅱ区三面 土被

図版12



II区三面 全景▶



▲同上 中央部分（東から）

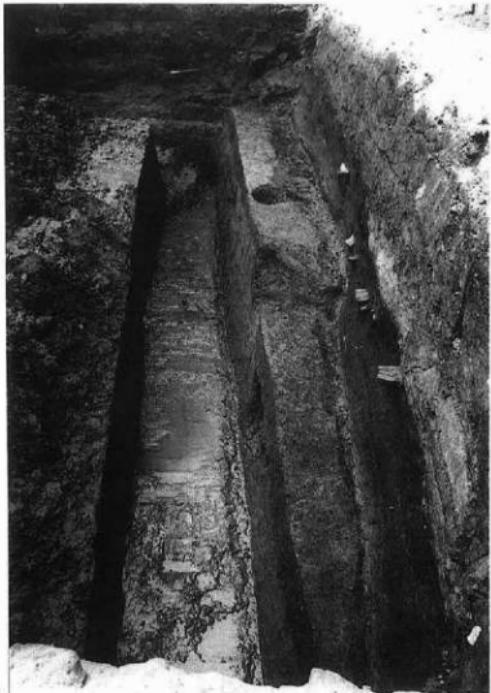


▲Ⅱ区三面 地割れ痕



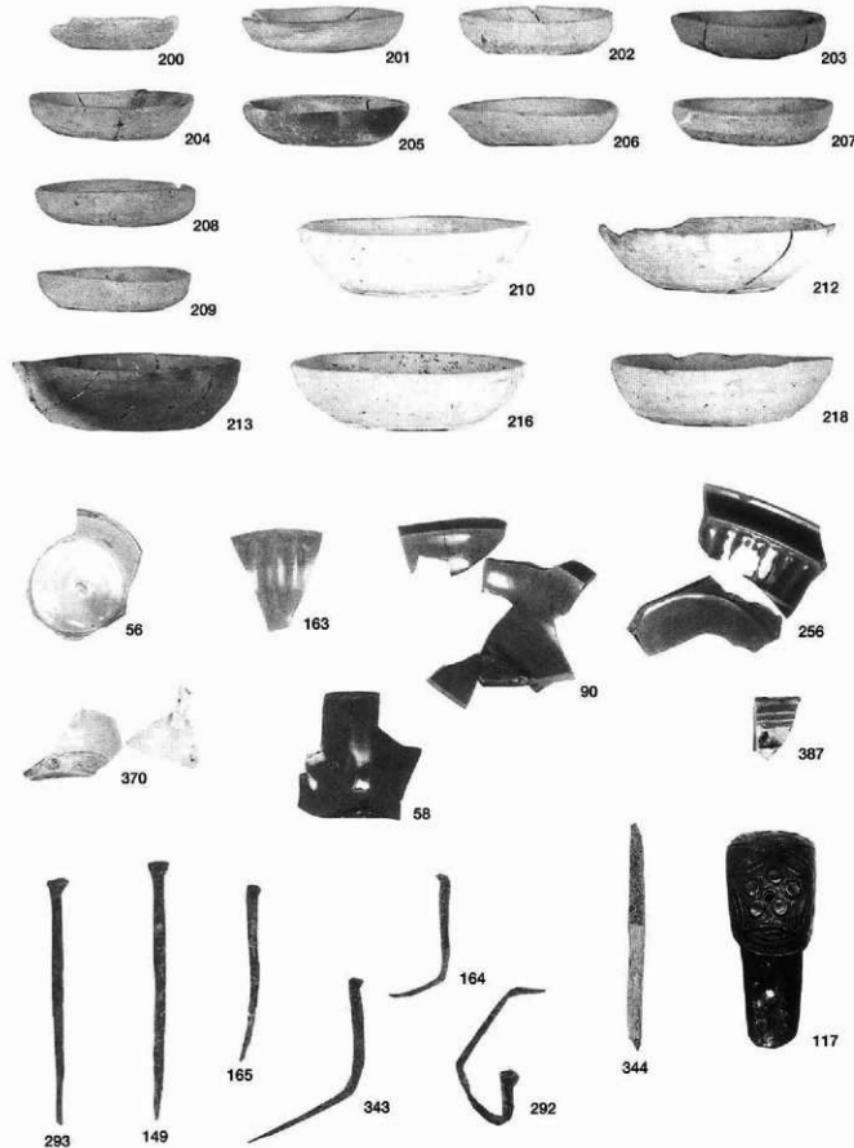
▲同上

図版14

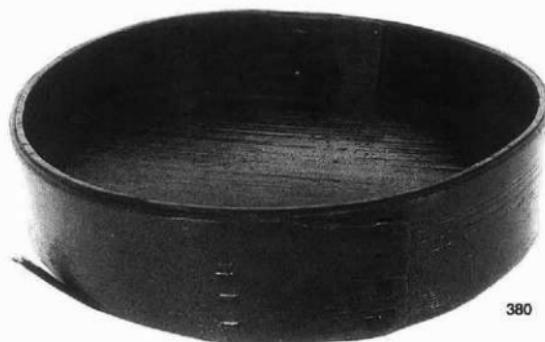


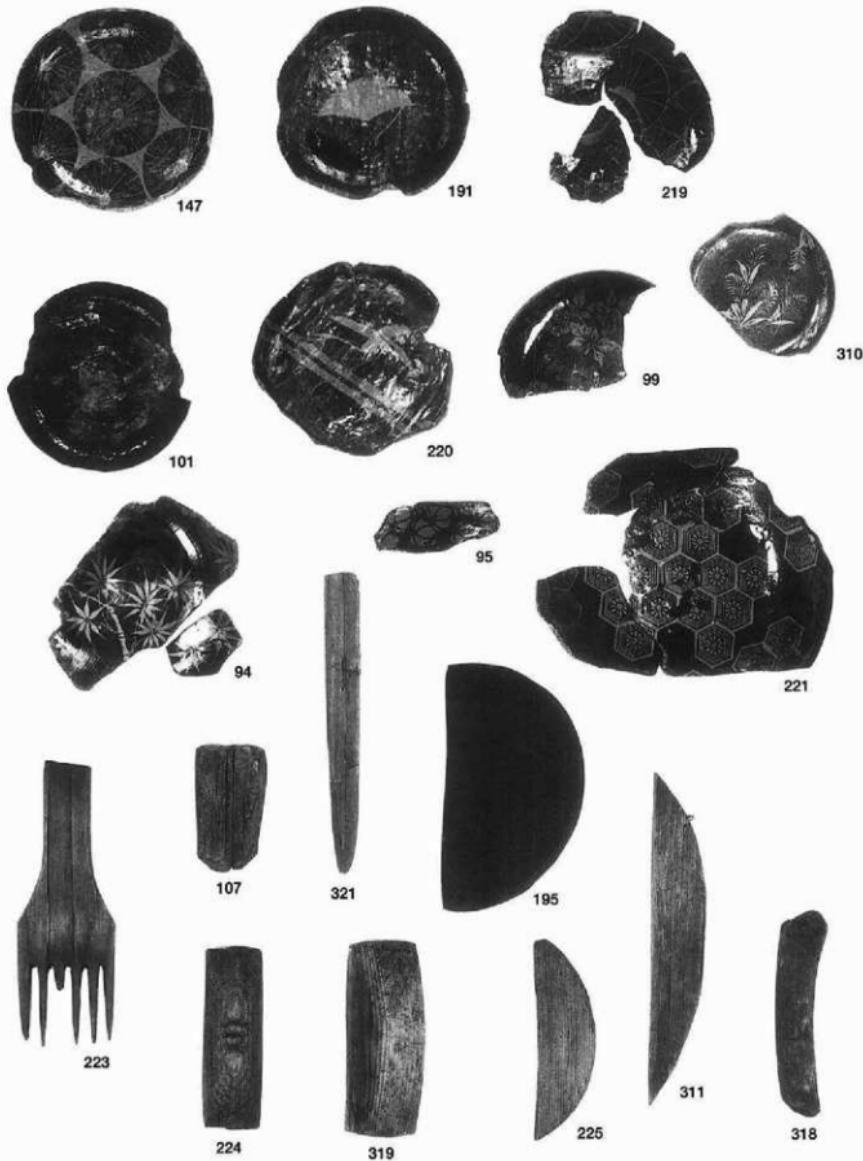
▲同上 壁面土層の状態

図版15

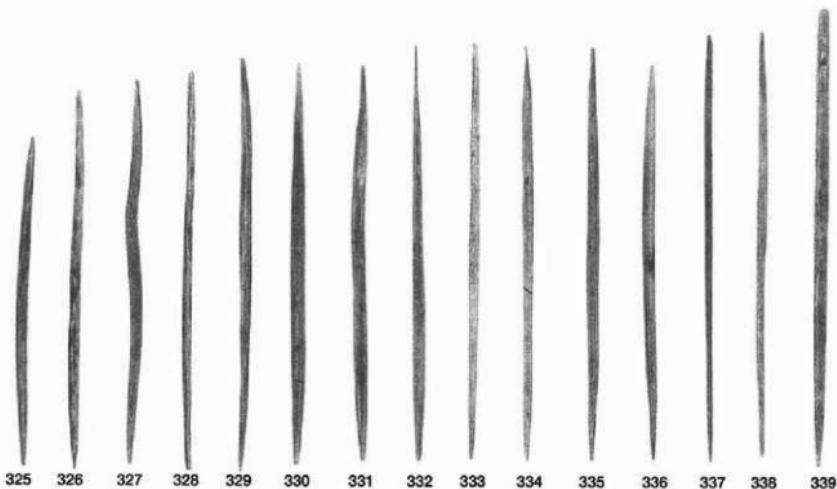


図版16





図版18



円覚寺旧境内遺跡の花粉化石

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

花粉分析を行った円覚寺旧境内遺跡は鎌倉市山ノ内字瑞鹿山509番1地点に所在し、鎌倉幕府の中心地を囲む丘陵部を越えた、いわゆる裏手に位置している。鎌倉市においてはこれまで若宮大路層辺に所在している遺跡を主体に花粉分析などを行ってきており、鎌倉時代における植生破壊の様相が次第に明かとなってきている。しかしながらこれはいわゆる表側であり、裏手における鎌倉時代の植生破壊については分析例がなく不明であった。こうしたことから裏手にあたる円覚寺旧境内遺跡における花粉分析は非常に興味深く、その結果が注目される。

1. 試 料

図1に試料を採取したII区西壁の土層断面を、図2に試料を採取したA、B2地点の地質柱状図と試料採取層準を示した。各土層の詳しい記載については第二章を参照して頂き、ここでは簡単に示すにとどめる。

1層は客土層で、褐色を帯びた黒灰色砂質シルトで、カワラケ片やレキが散在している。2層は黒灰色の砂質粘土～砂質粘土質シルトで、炭片が点在している。3層(試料1)は黒色の砂質粘土で、炭片や黄褐色の砂レキ塊が点在している。また、B地点の3層下部は粘土質砂となっている。4a層上部(試料2)も黒色砂質粘土で、炭片や黄褐色の砂レキ塊が認められる。4a層下部はレンズ状の黄灰色砂レキである。4b層(試料3、4、12)は黒灰色の砂質粘土で、A地点の上部は砂岩小塊が多く混入しており、下部には炭片がみられる。また、B地点では砂が多く、カワラケ片も認められ、上部の砂は酸化している。A地点6層(試料5、6)は黒色砂質粘土を基質とした黄灰色の砂レキ(レンズ状)を挟んだ黒色砂質粘土層で、上部にはレキや炭片が散在しており、下部には炭が多量に混入して最下部1cmは層状に認められる。B地点6層も3つに分層され、上部(試料13)はやや砂質の黒～黒灰色粘土で、炭塊が散在し、材片や有機質粘土塊も認められる。中部(試料14)はモモ核を含む暗褐色の有機質粘土で、砂が一部ラミナ状にみられ、下部は暗黄褐色の砂レキとなっている。7a層(試料7、8)は黒～黒灰色のシルト質粘土で、黄灰色の砂塊やレキ・材片・炭片が点在している。また、下部にはタガラシの種子が一部塊状に認められる。7b層A地点(試料9、10)は黒～黒灰色のシルト質粘土で、砂塊やマツ属球果が認められる。B地点は大きくは3つに分層され、上部(試料15)は暗褐色の有機質粘土で、材

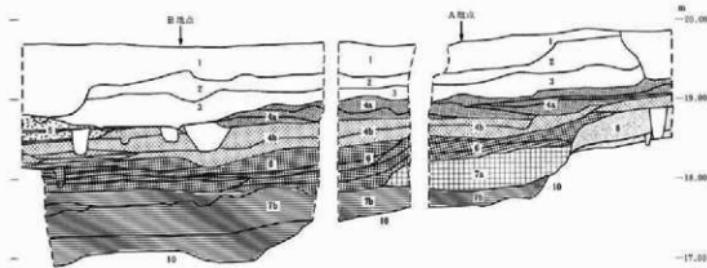


図1 調査II区西壁の土層断面と試料採取位置図

片多く、特に上位境界部には多量に認められる。中部（試料16～19）は黒～黒灰色の砂質粘土で、粘土質の砂塊が散在し、下部にはタガラシの種子が一部的に認められる。下部（試料20、21）は黒～黒灰色のシルト質粘土で、上部で砂が多く含まれている。最下部10層（試料11、22）は青色を帯びた黒灰色粘土で、一部上面には地割れ痕が認められる。

2. 分析方法

上記したA、B 2 地点より採取した22試料について以下の手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約3～4 g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混液を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜ブレバーラートを作成して行い、その際サフランにて染色を施した。

3. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉45、草本花粉41、形態分類を含むシダ植物胞子5の総計91である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表1に、主要な花粉・シダ植物胞子の分布を図3（A地点）、図4（B地点）に示した。なお、分布図は全花粉・胞子総数を基準とした百分率で示した。また、表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・ユキノシタ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に括して入れてある。

検鏡の結果、草本花粉の占める割合が高く、少ない試料22においても約60%で、多くは80%以上を占めている。そのなかで、A 地点の上部において樹木のマツ属複維管束亞属が増加する傾向が認められ、その様相を見るためにA 地点の樹木類について樹木花粉総数を基準として示したのが図5である。これによると上部においてマツ属複維管束亞属が急増する傾向がより明らかに認められ、この出現傾向から花粉化石群集帶（下位よりI、II）を設定した。

花粉帶I（試料3～11）はスギとコナラ属アカガシ亜属の優占で特徴づけられ、次いでイチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科やコナラ属コナラ亜属がやや高い出現率を示している。また、マツ属複維管束亞属

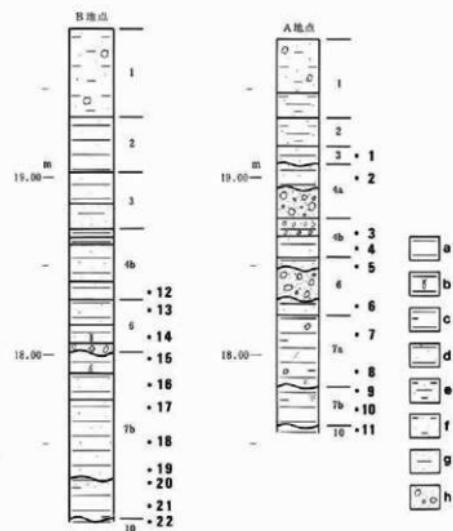


図2 試料採取地点の地質柱状図と試料採取層準

a: 黒土 b: 砂質粘土 c: シルト質粘土 d: 砂質粘土
e: 砂質粘土質シルト f: 砂質シルト g: 粘土質砂 h: 砂

表1 巴覺寺旧境内遺跡の産出花粉化石一覧表

$T_0 = 0$, 且 $\text{Eulerian-Capillary} \ll \text{Eulerian-Acceleration}$

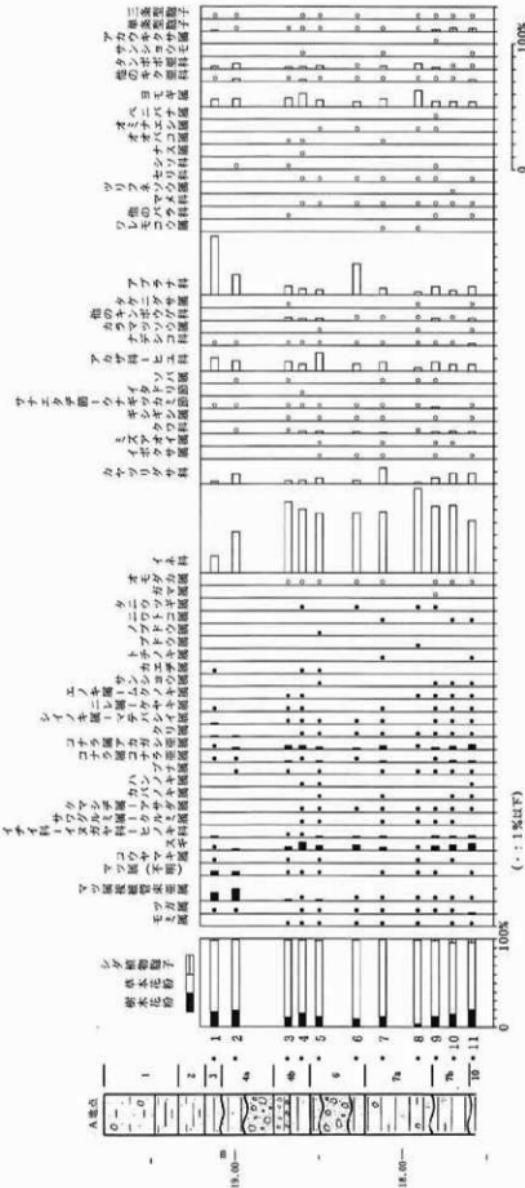
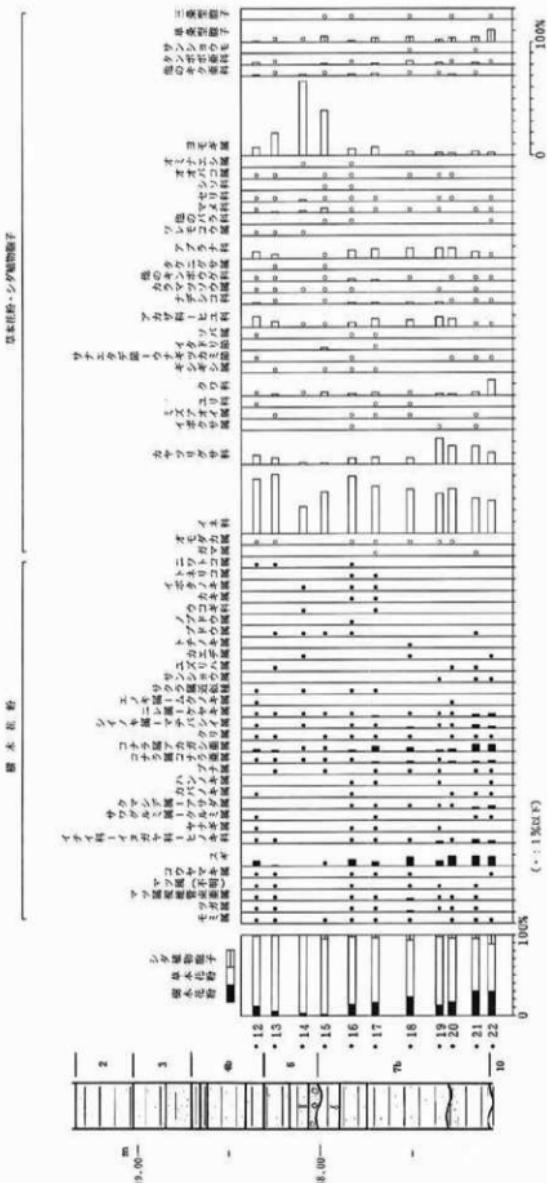


図3 A地点の主要花粉化石分布図(出現半は全花粉・胞子总数を基数として百分半で算出した)

図4 B地点の主要花粉化石分布図(出現半は全花粉・胞子总数として自分で算出した)



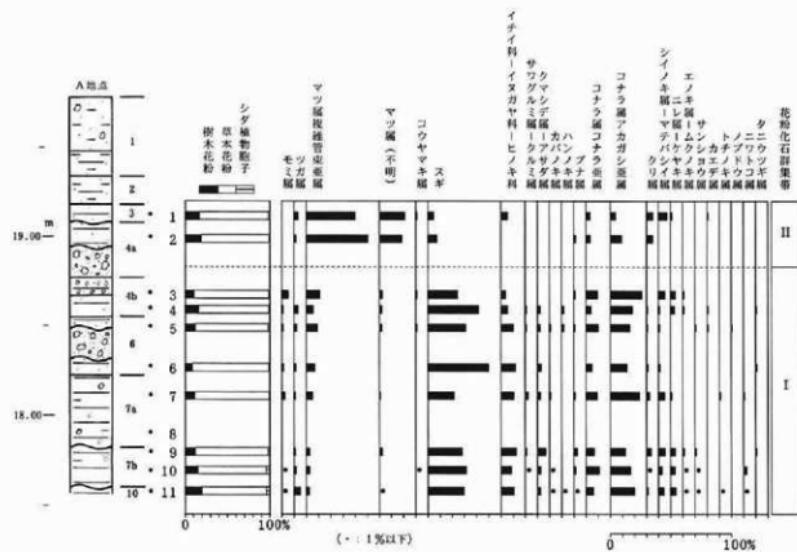


図5 A地点の主要樹木花粉化石分布図（樹木花粉総数を基準として百分率で算出した）

(アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類)が上部に向かい増加する傾向がみられる。草本類ではイネ科が圧倒的に多く、次いでアザゼル科・ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属がやや多く得られている。その他、ベニバナ属が試料9より1点のみであるが検出され、水生植物(抽水植物)のオモダカ属はほぼ連続してみられ、イボクサ属やミズアオイ属も得られている。

また、B地点の各試料においてもイネ科が優占していることなどから、A地点のⅠ帶にあたると考えられる。そのなかで、下部においてカヤツリグサ科がやや多く、上部ではヨモギ属が急増してピークを示し、一時的に最優占している。

花粉带Ⅱ(試料1、2)はニヨウマツ類の優占で特徴づけられ、Ⅰ帶で優占していたスギやアガシ亜属は急減している。草本類ではイネ科が減少し、代わってアブラナ科が急増し、試料1では出現率が50%近くに達している。その他、アザゼル科・ヒユ科やヨモギ属が10%前後を示している。

4. 遺跡周辺の古植生

1) 各土層・各試料の年代について

2および3層は13世紀末~14世紀前半の整地層と考えられ、4a層に認められる2枚の炭層のうち上位の炭層は1290年(正応3年)の火災に対応する可能性が高いことから、試料1、2は13世紀末~14世紀前半と考えられる。

4b層は、4a層下部の炭層が1287年(弘安10年)の火災に対応する可能性が高いことと、下位の7a層の年代から1282年(弘安5年)から1287年(弘安10年)の間と考えられている。また、6層も同様に1282年から1287年の間と考えられ、試料3、4、12(4b層)および試料5、6、12~14(6層)は1282年から1287年の13世紀後半と推測される。

7 a 層（試料 7、8）は円覚寺創建（1282年：弘安5年）の際に削り捨てた中世基盤層の二次堆積土と考えられている。また、7 b 層は自然堆積土と考えられており、上面の下限年代については円覚寺創建工事が着工したとされる説の年代、1281年（弘安4年）と推測されている。さらに、10層上面には地割れ痕が認められ、出土遺物から中世以前に遡ることは考えられず、1257年（正嘉元年）の大地震によるものと推定されている。これらのことから、試料 9、10、17～21（7 b 層）は1257年～1281年の13世紀の中頃から後半にかけてと推測される。また、試料 11、22（10層）は1257年以前の中世と考えられ、試料 7、8（7 a 層）の時代については不明である。

2) 遺跡周辺の古植生変遷

上記した各試料の年代から円覚寺旧境内遺跡周辺の植生変遷について述べる。13世紀の中頃から後半にかけて（1281年まで）の遺跡周辺はスギ林やアカガシ亜属主体の照葉樹林が成立していたとみられるが、これらの花粉化石数が少ないとからしっかりととした森林は少なかった可能性が高い。鎌倉周辺においては鎌倉幕府開府以降急速に開発が進み、丘陵部の森林は大きな影響をうけたことがこれまでの花粉分析結果から予想されており（鈴木 1994など）、ここでも同様の傾向が示されていると思われる。この頃の試料採取地点周辺では水田耕作が行われていたとみられ、この水田にはカヤツリグサ科やオモダカ科（オモダカ）、ミズアオイ科（コナギ）、キンボウケ科のタガラシなどの水田雜草類が生育していた。また、畔などにはアカザ科ヒユ科やアブラナ科、ヨモギ属などが生育していたのであろう。

13世紀後半（1282年から1287年）の円覚寺創建当時の植生も先の時期とほぼ同様であった。なお、B 地点においてはヨモギ属が非常に多く検出されている。最も多い試料 14 は植物遺体を主体とした有機質粘土層であり、この有機質粘土層を含む 6 層は遺跡地西側の窪地にゴミなどを投棄しつつ埋めた整地層と考えられている。こうしたことから、ヨモギ類が除草後他のゴミとともに B 地点付近に捨てられた結果、多くのヨモギ花粉が供給されたことが考えられよう。また、A 地点の試料 6 におけるアブラナ科多産の要因も同様と思われる。

その後本地点には円覚寺に関わる雑舎が建ち、また、この時期少なくとも1987年（弘安10年）と1290年（正応3年）の2度の火災にみまわれた。

13世紀末（1290年）～14世紀前半頃になるとスギ林や照葉樹林に代わりニヨウマツ類が多くみられるようになった。この交代はこれまで分析を行ってきた永福寺跡や若宮大路周辺の遺跡と同様であるが、時期が遅いのが特徴であり興味深い。すなわち、永福寺跡では13世紀中頃にはニヨウマツ類が優占し（鈴木 1996a）、北条泰時・時頼耶跡では13世紀前半からニヨウマツ類の増加がみられ、その後優占している（鈴木 1996b）のである。このように、小袋坂を境に表御（南側）では13世紀前半から開発が進み、跡地にニヨウマツ類の侵入がみられたが、裏手（北側）では小袋坂の整備や円覚寺創建後しばらくして13世紀末～14世紀前半頃になって大きく開発されるようになり、ニヨウマツ類の増加がみられるようになったのであろう。

花粉帯 IIにおいてイネ科花粉が急減しており、水田雜草類とみられる分類群の消滅や先の時期には本地点に雑舎が建っていたことなどから、この頃になって遺跡周辺の水田耕作地は急速に無くなっているとみられる。また、この花粉帯 IIにおいてアブラナ科が多産しているが、その要因については不明である。3 層が13世紀末～14世紀前半の整地層と考えられることから、先のヨモギ属同様アブラナ科植物が捨てられた結果多量のアブラナ科花粉が供給されたのではないかと思われる。

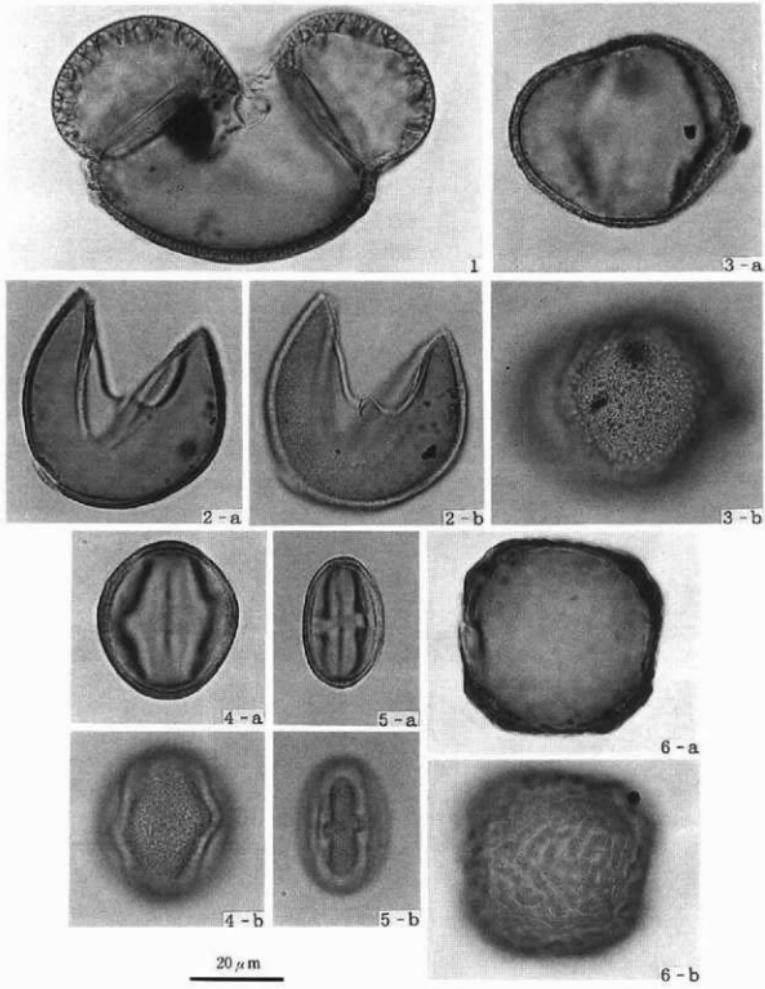
5. おわりに

以上のように、円覚寺旧境内遺跡周辺における大きな森林破壊は、鎌倉幕府中心地側に比べ半世紀ほど遅れて起こったようである。今後このようなわゆる裏手にあたる地域についても分析地点を増やし、裏手における森林破壊の様相をさらに明らかにしていきたいと考える。

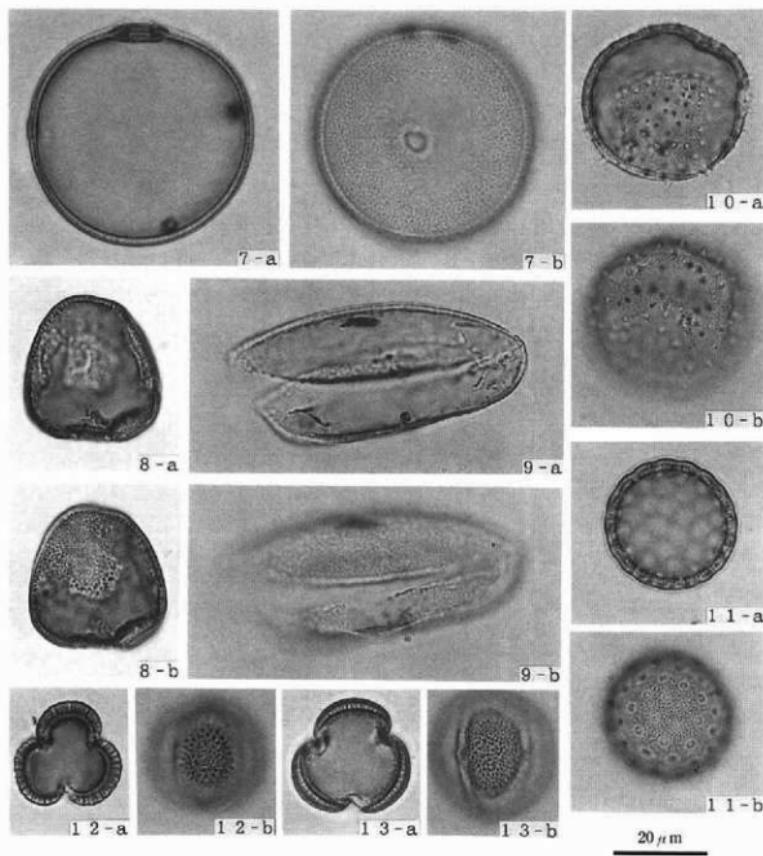
また、試料1、2においてアブラナ科が多産しているが、このアブラナ科について形態からその種類について判断することは難しく、現時点では不明である。おそらく種類が解ることにより増加した要因が推測されると思われ、これも今後の課題であろう。

引用文献

- 鈴木 茂 (1996a) 史跡永福寺跡の花粉化石 (平成6年度), 鎌倉市二階堂国指定史跡永福寺跡国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書 - 平成6・7年度 -, 鎌倉市教育委員会, p.40-54.
- 鈴木 茂 (1996b) 花粉分析, 北条小町邸跡 (泰時・時頼邸), 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12平成7年度発掘調査報告 (第2分冊), 鎌倉市教育委員会, p.261-270.
- 鈴木 茂・吉川昌伸 (1994) 鎌倉市永福寺跡における鎌倉時代の植生変遷, 植生史研究, 2, p.45-51.



図版1 円覚寺旧境内遺跡の花粉化石
 1 : マツ属複維管束型 PLCSS 2123 No.5
 2 : スギ PLCSS 2126 No.10
 3 : コナラ属コナラ型 PLCSS 2129 No.11
 4 : コナラ属アカガシ型 PLCSS 2125 No.10
 5 : シイノキ属マテバシイ型 PLCSS 2132 No.11
 6 : ニレ属ケヤキ型 PLCSS 2117 No.3



図版2 円覚寺境内遺跡の花粉化石

7:イネ科 PLC.SS 2131 No.11

8:カヤツリグサ科 PLC.SS 2130 No.11

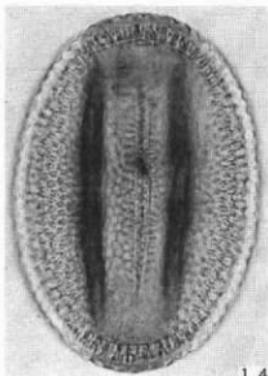
9:ミズアオイ属 PLC.SS 2127 No.10

10:オモダカ属 PLC.SS 2124 No.9

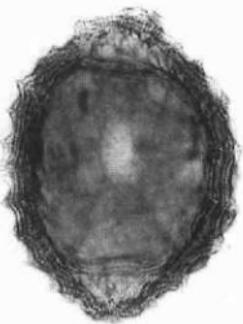
11:アカザ科-ヒュウ科 PLC.SS 2122 No.5

12:アブラナ科 PLC.SS 2121 No.5

12:ヨモギ属 PLC.SS 2120 No.3



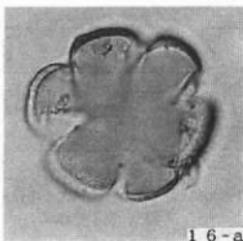
14



15-a



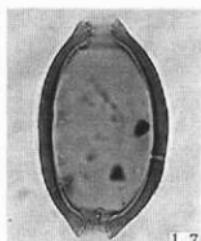
15-b



16-a



16-b



17

20 μ m

図版3 円覚寺旧境内遺跡の花粉化石・寄生虫卵

14: ソバ属 PLC.SS 2118 No.3

15: ベニバナ属 PLC.SS 2116 No.9

16: シミ科 PLC.SS 2133 No.9

17: 蟻虫卵 PLC.SS 2119 No.3

報告書抄録

ふりがな	えんがくじきゅうけいだいいせき							
書名	円覚寺旧境内遺跡							
副書名	山ノ内字瑞鹿山509番1地点							
巻次								
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
シリーズ番号	14							
編著者名	菊川英政 兼行亮枝							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-0012 神奈川県鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦1998年3月							
ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所 在 地	コ ー ド	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
えんがくじきゅうけい だいいせき 円覚寺旧境内遺跡	かながわけんかまく らしやまのうちあざ ずいろくざん 神奈川県鎌倉市山ノ 内字瑞鹿山509番1	市町村 204	遺跡番号 No.434	35° 20' 02"	139° 32' 52"	19960524 19960713	59.52m ²	個人専用住宅 の建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
円覚寺旧境内 遺跡	社寺	13世紀末	獨立柱建物 段状造構 地割れ痕 田流路	かわらけ皿 漆器・木製品 常滑 瀬戸・磁器 瓦・磚など 40箱分出土	13世紀末葉の町屋の 一部を検出。			

ごくらくじきゅうけいだいいせき
極楽寺旧境内遺跡 (No.291)

鎌倉市極楽寺三丁目348番 2 地点

例　　言

1. 本書は、極楽寺旧境内遺跡内の鎌倉市極楽寺三丁目348番2地點に於ける緊急発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は自己用住宅に係る建築範囲30.45m²を対象とし、平成8年6月17日～8月6日にかけて鎌倉市教育会によって実施された。
3. 報告書作成メンバーと担当分野
原稿執筆　兼　実
図版作成　宗臺富貴子、深尾義子、馬瀬直子、
小野和代、小西さつき、辻山美子、
鈴木螢美、佐藤節子
遺物写真撮影　馬瀬直子、笠原さやか
編　集　兼　実
4. 調査体制は以下のとおりである。
調査主体　鎌倉市教育委員会
主任調査員　田代郁夫
調査員　浜野洋一、遠藤雅一
調査補助員　岩崎卓治、上田求実
5. 出土遺物は、鎌倉市教育委員会が保管している。

凡　　例

- ・各図面の縮尺は次のとおりである。
遺跡位置図（1）：1／2500
遺跡位置図（2）：1／250
遺構図：1／40
遺物実測図：1／3
- ・遺構図中の標高数値はすべて海拔高である。

本文目次

第1章 遺跡の諸環境	415
第1節 遺跡の地理的環境	415
第2節 遺跡の歴史的環境	415
第3節 周辺の遺跡	415
第2章 調査の概要	418
第1節 調査に至る経緯と経過	418
第2節 基本層序	418
第3章 発見遺構と出土遺物	420
第1節 発見遺構	420
第2節 出土遺物	429
第4章 まとめ	432

挿図目次

第1図 遺跡位置図（1）	414
第2図 極楽寺境内絵図	416
第3図 遺跡位置図（2）	417
第4図 調査区東壁土層堆積図	418
第5図 第1面遺構全体図	421
第6図 第2面遺構全体図	422
第7図 碕石建物	423
第8図 掘立柱建物	424
第9図 第3面遺構全体図	425
第10図 柱穴列1	426
第11図 柱穴列2	427
第12図 柱穴列3	428
第13図 柱穴列4	428
第14図 第2面上出土遺物	429
第15図 第2面下出土遺物	430
第16図 第3面上出土遺物	431
第17図 柱穴列1内出土遺物	431
第18図 第3面下出土遺物	431

写真図版目次

図版1 第1面全景・遺跡内土層堆積状況	437
図版2 第2面全景・掘立柱抜取痕	438
図版3 第3面全景・面上で出土したかわらけ	439
図版4 出土遺物	440



周辺の遺跡と所収文献

2. 極楽寺境内道路内やぐら
「平成2年度鎌倉山中急傾斜地崩壊対策並進化に伴う発掘調査報告書」
極楽寺境内道路内やぐら発掘調査はか 1992
3. 極楽寺境内道路（極楽寺3丁目355番3地点）
「鎌倉市文化財評定会緊急調査報告書13」鎌倉市教育委員会 1997
4. 極楽寺境内道路（極楽寺3丁目320番1地点）
「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13」鎌倉市教育委員会 1997

第1図 遺跡位置図(1)

第1章 遺跡の諸環境

第1節 遺跡の地理的環境

本遺跡は、江ノ島電鉄極楽寺駅の南西約300mに位置する（第1図）。地番は鎌倉市極楽寺3丁目348番2。地形的には、多摩丘陵の南端部にあたる小尾根に挟まれた、南向きに開口する小谷戸内に位置する。この谷戸は「月影ヶ谷」と呼ばれ、現在、極楽寺本堂のある谷戸とは尾根ひとつ隔てている。地勢的には斜面地にあたり、現況は、谷戸の中央を走る道路脇の斜面上に水平に盛土をして、住宅が設けられている。

第2節 遺跡の歴史的環境

極楽寺は靈鷲山感應院極楽寺と号し、真言律宗奈良西大寺の末寺である。開山は忍性、開基は北条重時である。「極楽寺縁起」によれば、正元元年（1259）、北条重時が良觀上人忍性に、從来一老僧によって營まれていた極楽寺という小寺を大寺に変えて、律院とするのに相応しい場所について詣ったところ、忍性は当時、地獄谷と呼ばれていた現在の境内地一帯を指したといわれている。「忍性菩薩行状略頃」によると、忍性は文永四年（1267）八月に極楽寺に入寺したとあり、この年に伽藍が落成したものと思われる。発願者の北条重時は弘長元年（1261）忍性の入寺を見ることなく歿している。文永四年以降、「七々四十九院」と称されるように威勢を誇った極楽寺は、元弘三年（1333）北条氏の滅亡により有力な後盾を失った後、次第に衰退に向かう。元亀3年（1572）には火災により講堂他3塔頭を残して焼失し、明暦年間には残った講堂を本堂に、仏法寺を方丈として現在地に移した。

盛時の伽藍を描いた古絵図や文獻資料などから、かつての境域には西方寺・仏法寺・真言院・興正寺・蓮華寺・尼寺・福田院・吉祥院・宝幢（塔）院・就学院・勸学院等数多くの支院があったことが知られている。本遺跡のある月影ヶ谷にも、月影地藏四王院・法藏院・無常院・薬湯寮などの名が見える。

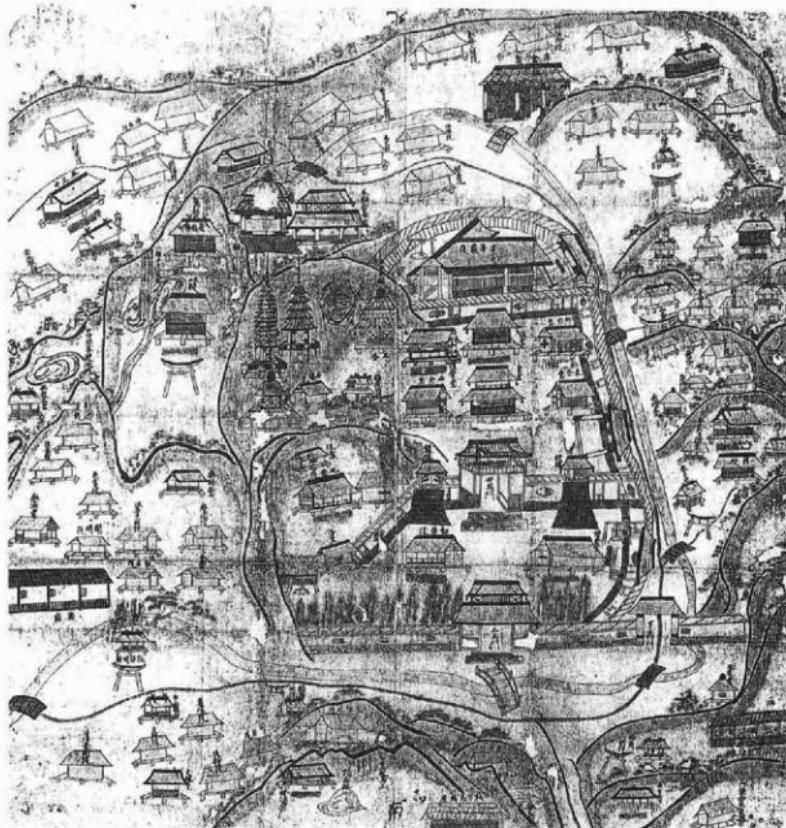
ところで、月影ヶ谷には、阿佛尼の住處という伝承も残っている。「十六夜日記」月影の谷には「あずまにて住むところは、月影の谷とぞ言ふなる。浦近き山もとにて、風いと荒し。山寺の傍なれば、のどかに、すごくて、浪の音、松の風絶えず。」とある。阿佛尼屋敷云々については、律宗に於ける尼寺の存在形態や歴史的意義との関連で議論されているところである。

第3節 周辺の遺跡

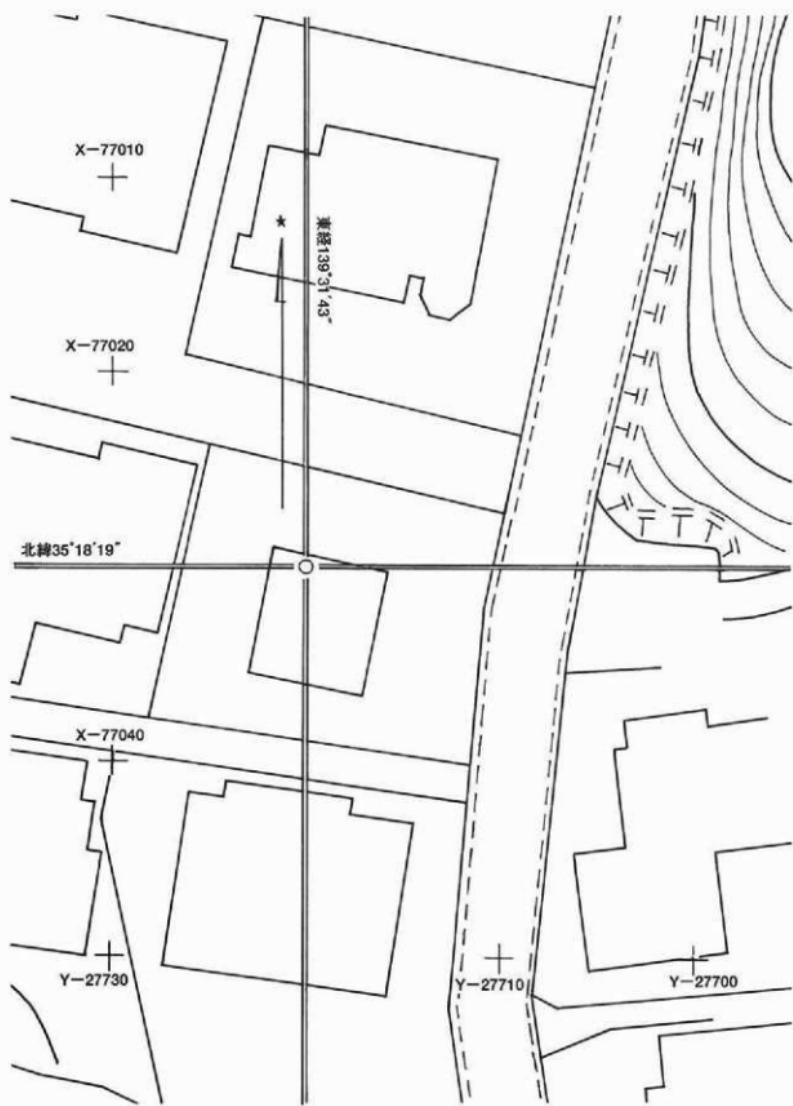
月影ヶ谷内では、今までに3地点で発掘調査が実施されている。遺跡の名称は、極楽寺の旧境内に位置することから、すべて「極楽寺旧境内遺跡」とされる。やぐら2穴が調査された極楽寺旧境内遺跡内やぐら（第1図-2）では、14世紀後半の五輪塔、「享保廿卯八月廿八日」銘の刻まれた地蔵像などが出土している。極楽寺3丁目355番3地点（第1図-3）では、13~14世紀前半の遺物を作り複数の泥岩による版塗地業面が発見されている。極楽寺3丁目320番1地点（第1図-4）では、14世紀前半の遺物を作り地業面上で布掘状の溝と土壙が発見されている。

参考文献

- 赤星直忠『鎌倉市史考古編』吉川弘文館 1959年
高柳光寿編『鎌倉市史社寺編』吉川弘文館 1959年
貫達人・川副武胤『鎌倉庵寺辞典』有隣社 1980年



第2図 極楽寺境内繪図



第3図 遺跡位置図(2)

第2章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯と経過

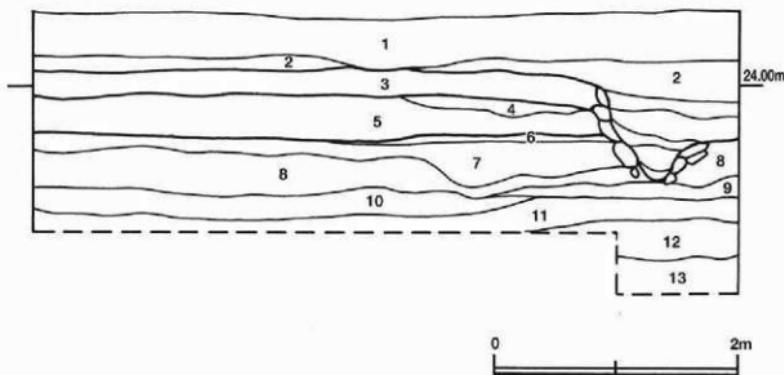
今回の調査は、当該地における個人住宅建築に先だって実施されたものである。まず試掘調査が実施され、現地表下160cmまでに3枚の中世地業面が確認された。この成果を受けて、本格調査の実施が決定した。

本調査は住宅地下室部分約31m²を対象とし、平成8年6月17日に着手した。現地表下40cmまで堆積する現代の盛土を重機により掘削し、現地表下約50cmで最初の地業面を確認した。これを第1面とした。この面上で発見した遺構は東西方向に走る溝1条のみである。第1面構成土は20cmほどの厚さをもって堆積し、この直下で第2面を確認した。第2面で発見された遺構は掘立柱建物、柱穴などである。第2面構成土は30cmほどの厚さをもって堆積し、この直下で、第3面を確認した。第3面で発見された遺構は、欄列、柱穴列、柱穴などである。

最後に、これより時期の遡る文化堆積層における遺構の有無と、土層の堆積状況を探るために、調査区東壁に沿って幅1mの調査坑を設定して、これらの確認にあたった。40cmほどの厚さをもって堆積する第3面構成土を除去したところで、中世基盤層を確認した。この層上では部分的に弱い地業が認められたものの、遺構・遺物共に発見されなかった。さらに、中世以前の遺構確認のため、調査区南東隅に一辺1mの方形の調査坑を設定し、住宅建築深度である現地表下240cmまで掘り下げた。その結果、中世以前の遺構・遺物共に存在しないことが確認され、8月6日に調査を終了した。

第2節 基本層序

遺跡内の堆積土は、中世と現代の地業による客土（第1～8層）と、中世以前の谷戸内沖積土（第9～13層）からなる。以下、本遺跡における基本的な土層堆積について、調査区東壁で記録した土層堆積図を基に説明を記す。



第4図 調査区東壁土層堆積図

第1層：灰褐色砂質土。しまり、粘性共に強。現代の盛土。

第2層：暗灰褐色砂質土。しまり、粘性共に強。現代の盛土。

第3層：暗灰褐色粘質土。大型泥岩塊を多量に含み、しまり強。中世遺物包含層。第1面構成土。

第4層：暗灰褐色粘質土。大型泥岩塊、粒子状炭化物を多量に含み、しまり強。中世遺物包含層。

第2面構成土。

第5層：暗灰色砂質土。砂質強く、しまり弱。

第6層：暗灰褐色粘質土。小型泥岩塊を多量に含み、しまり強。中世遺物包含層。第3面構成土。

第7層：暗灰褐色土。砂質強い。しまり強。第3面構成土。

第8層：灰褐色粘質土。黒色土小塊を含む。しまり強。中世遺物包含層。第3面地業土。

第9層：暗青灰色粘質土。本層以下は澤水層である。しまり強。粒子状の泥岩を含む。中世基盤層。

第10層：青灰色粘質土。しまり強。粒子状の泥岩を少量含む。中世基盤層。

第11層：暗青灰色粘質土。しまり有。有機質に富み、ネットリする。粒子状の泥岩をわずかに含む。

第12層：青灰色粘質土。しまり有。有機質に富み、ネットリする。粒子状の泥岩をやや多く含む。

第13層：青灰色粘質土。しまりやや強。有機質に富み、ネットリする。粒子状の泥岩を含む。

第3章 発見遺構と出土遺物

第1節 発見遺構

ここでは、各地業面毎にその概略と、発見した遺構についての詳述を記す。

1. 第1面（第5図）

第1面は、泥岩塊を多く混じえた粘性の強い地業上の表面を平坦にして設けられる。特に碎石を敷いて面上を整えるような行為はみられない。地業面の標高は約24.1mである。発見した遺構は溝1条、柱穴列1組である。

溝（第5図）

調査区南側で発見した。現在の地境にはほぼ一致する。南側の立ち上がりは北側より50cm低く、溝を境に地業面が段差をもっている。断面形は底の丸いV字状を呈し、壁には泥岩塊が埋め込まれる。溝の深さは、地業面から90cmである。溝の方位は磁北に対し75°西に向く。溝の覆土は上層（第2、3層）で非常に強くしまっており、第1面使用中のある時期に埋められて地業面に組み込まれた可能性がある。

柱穴列（第5図）

調査区東壁付近で発見した。柱穴は南北方向に3穴確認され、南側と北側にそれぞれ延伸する可能性が高い。現在、調査区のすぐ東側に道路があることから、柵や塀といった性格をもつ遺構と考えている。柱穴の間隔は、芯々で160cmと165cmである。柱穴を結んだ軸線の方位は磁北に対し15°東向きで、溝に対して直交する。柱穴の平面形は円形で、断面形はU字状を呈する。地業面からの深さは約25cmである。

2. 第2面（第6図）

第1面と同質の地業土を用いて設けられる。特に碎石を敷いて面上を整えるような行為はみられない。地業面の標高は約23.9mであるが、南側は第1面に伴う溝によって破壊されている。発見した遺構は礎石建物1棟、掘立柱建物1棟、性格不明の柱穴3穴である。

礎石建物（第7図）

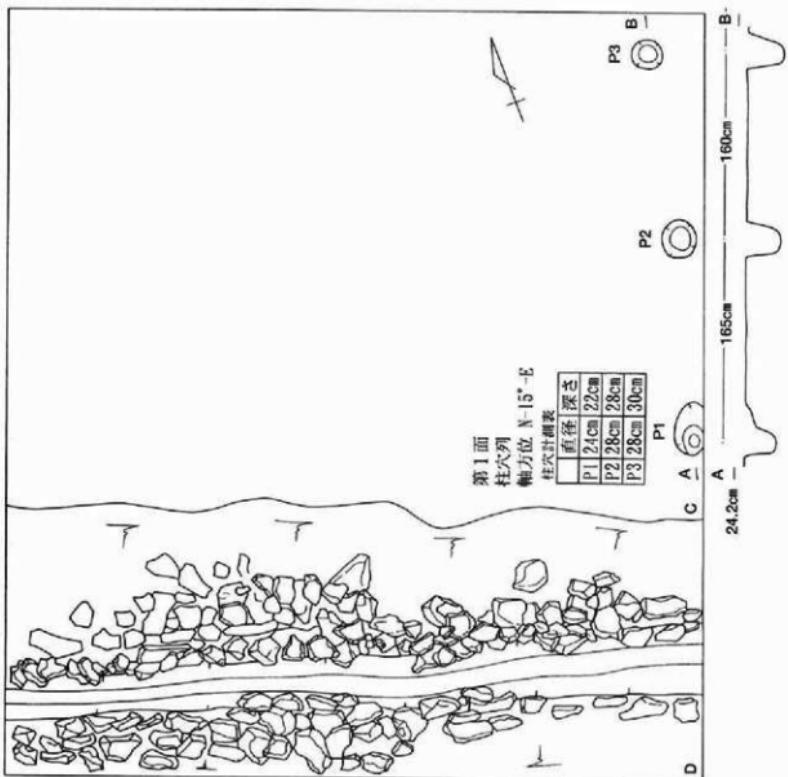
調査区北西隅に発見した。礎石には凝灰岩と安山岩が用いられており、直径80~100cm、深さ20cmの円形の掘り込みに据えられている。掘り込みは、東西、南北方向にそれぞれ2穴ずつ確認されたが、北側と西側にそれぞれ延伸する可能性が高い。柱の間隔は、基本的に芯々で210cmである。南北方向を軸とした建物の方位は、磁北に対し5°東を向く。

掘立柱建物（第8図）

調査区中央で発見した。調査区内で確認された建物の規模は、東西方に3穴（全長420cm）、南北方向に2穴（全長210cm）であるが、北側と西側にそれぞれ延伸する可能性がある。柱穴内には柱の根固めに使われた泥岩が残存しており、柱痕を確認した。柱の間隔は芯々で195~220cmである。南北方向を軸とした建物の方位は、磁北に対し13°東を向く。柱穴の平面形は円形で、地業面からの深さは30~40cmである。柱痕の観察から、柱の形状は一辺15cm前後の方柱であることを確認した。

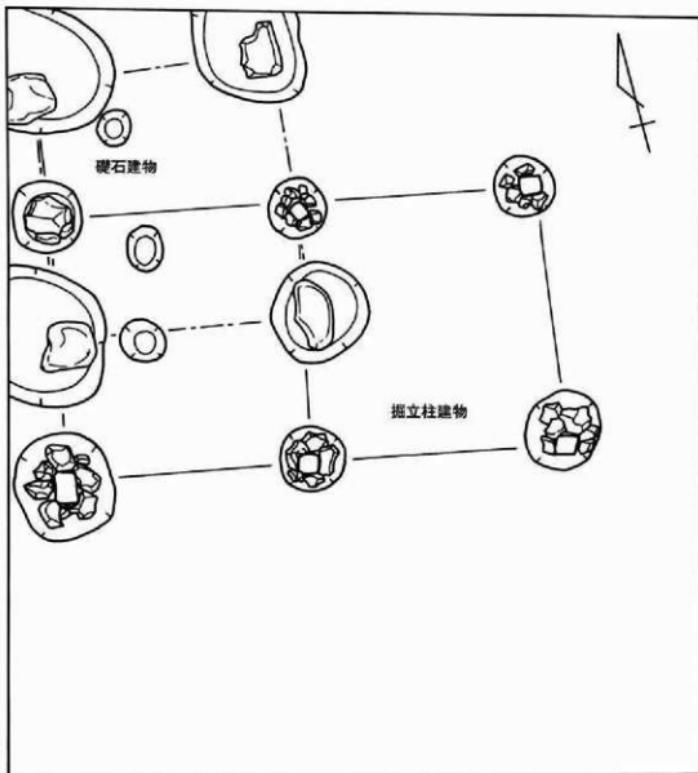
3. 第3面（第9図）

泥岩塊を混じえた粘性の強い地業上の表面を平坦にして設けられる。特に碎石を敷いて面上を整えるような行為はみられない。地業面の標高は約23.6mである。調査区南側は、第1面に伴う溝の残存部によって一部破壊される。発見した遺構は柱穴列4組、性格不明の柱穴14穴である。

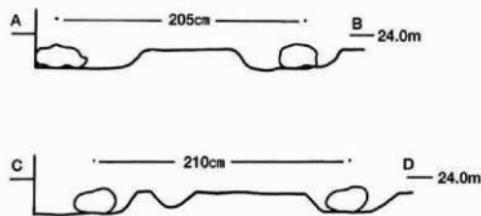
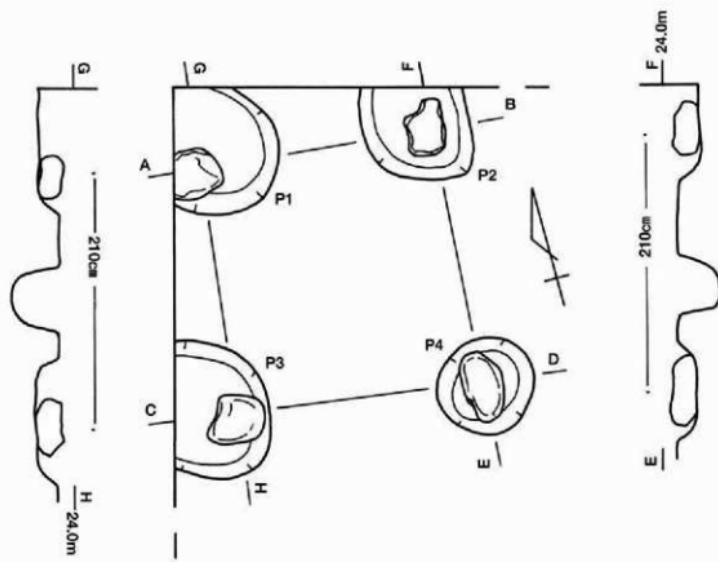


- 1: 喀斯特色粘質土。主に泥岩層で構成される。しまり強。
- 2: 喀斯特色粘質土。小型の泥岩塊を多量に含む。しまり強。
- 3: 喀斯特色粘質土。粒子状泥炭、黒色土など含む。しまりあり。
- 4: 喀斯特色砂質土。しまり強。
- 5: 喀斯特色粘質土。粒子状泥炭を少量含む。しまり弱。
- 6: 喀斯特色砂質土。しまり弱。

第5図 第1面造構全体図



第6図 第2面遺構全体図



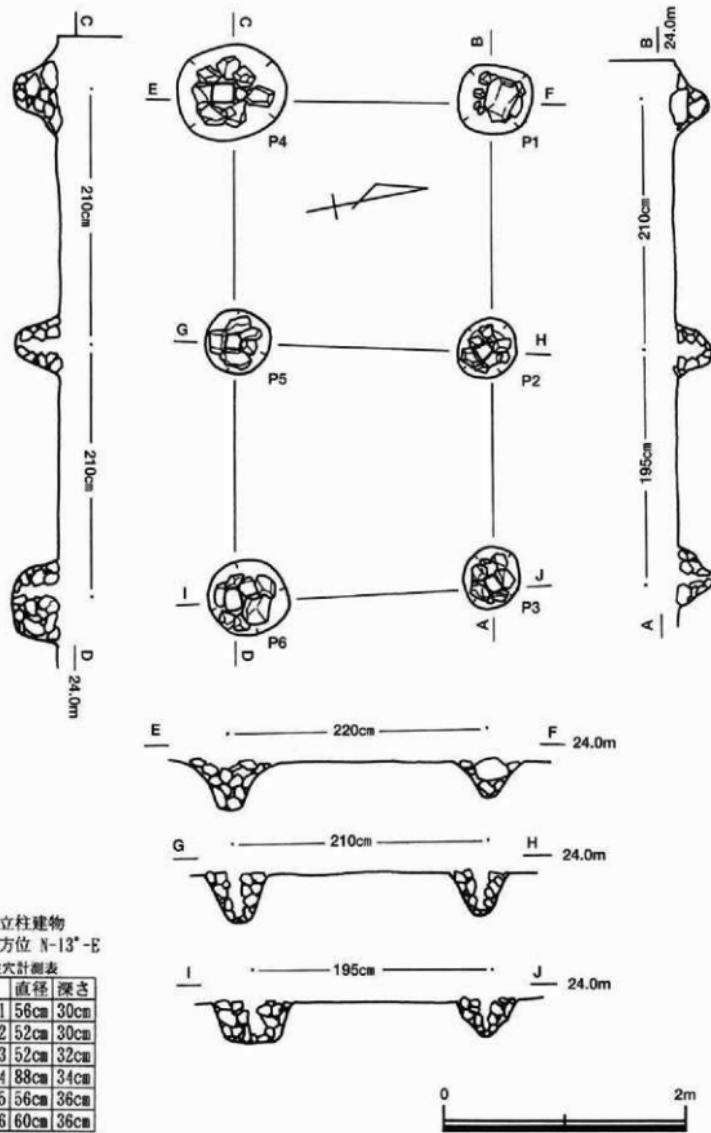
礎石建物
軸方位 N-5°-E

柱穴計測表

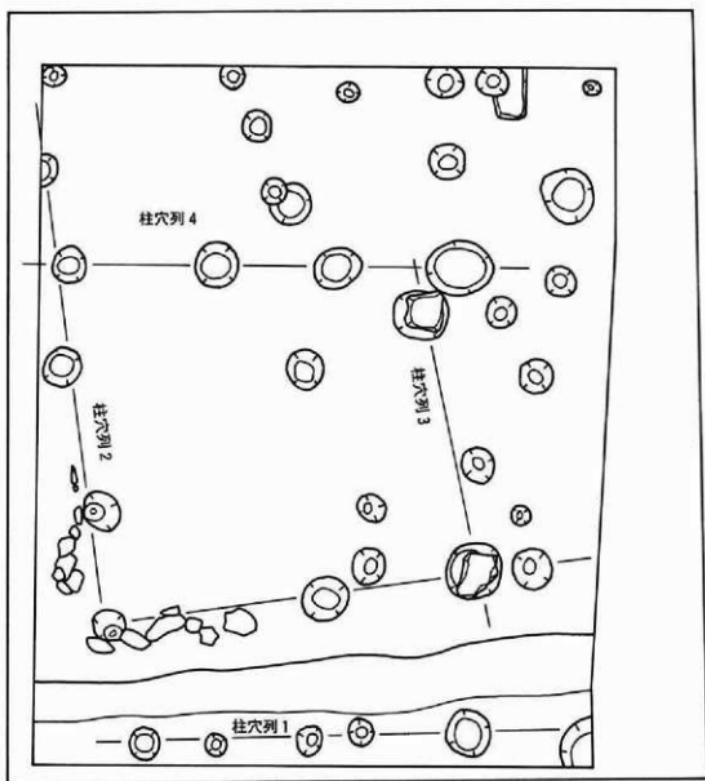
	直径	深さ
P1	90cm	18cm
P2	82cm	20cm
P3	102cm	20cm
P4	80cm	18cm



第7図 磂石建物



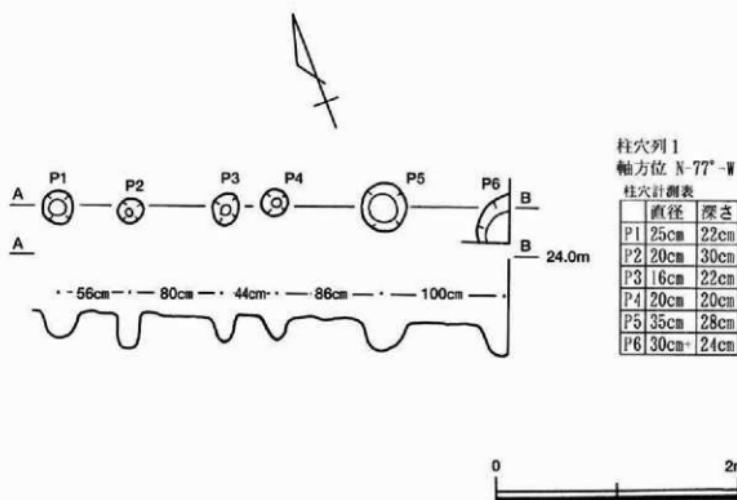
第8図 挖立柱建物



第9図 第3面遺構全体図

柱穴列 1 (第10図)

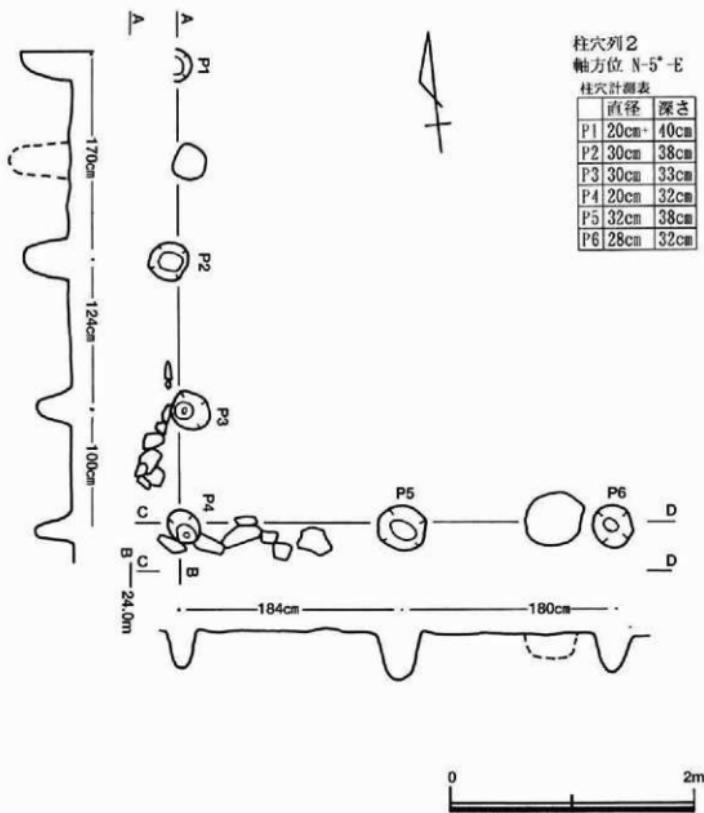
調査区南壁際で発見した。構や壠といった性格をもつ遺構と考えている。調査区内では、東西方向に6穴が確認されたが、東西方向に延伸している可能性が高い。柱穴の間隔は44~100cmと、規則性に欠ける。柱穴の平面形は円形、地業面からの深さは20~30cmである。柱穴を結んだ軸線の方位は、磁北に対し77°西を向く。



第10図 柱穴列 1

柱穴列 2 (第11図)

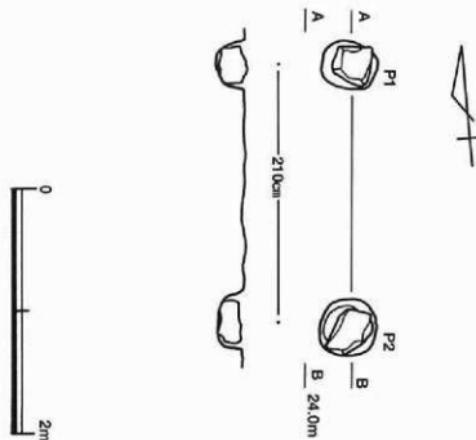
調査区南西隅を起点にL字状に配される柱穴列である。調査区内では東西・南北方向に3穴ずつ確認され、南西隅では柱穴列に沿って地業面上に泥岩塊が確認された。遺跡の性格から考えて、木造基壇の東柱に伴う掘方ではないかと考えている。遺構は北側と東側にそれぞれ延伸している可能性が高い。柱穴の間隔は170~220cmと、規則性に欠ける。柱穴の平面形は円形、地業面からの深さは30~40cmである。南北柱穴列の軸線上には他にも柱穴が確認されており、あるいはこれらも本址に包括されるものかも知れない。南北方向を軸とした遺構の方位は、磁北に対し5°東を向く。



第11図 柱穴列2

柱穴列3（第12図）

調査区中央部で発見した。南北方向に円形の掘り込み2穴で構成され、中には大型の泥岩が据えられる。造構が調査区外に延伸する可能性は低く、性格は不明である。柱穴の間隔は芯々で220cm、地表からの深さは20cmである。柱穴を結んだ軸線の方位は、磁北に対し3°東を向く。



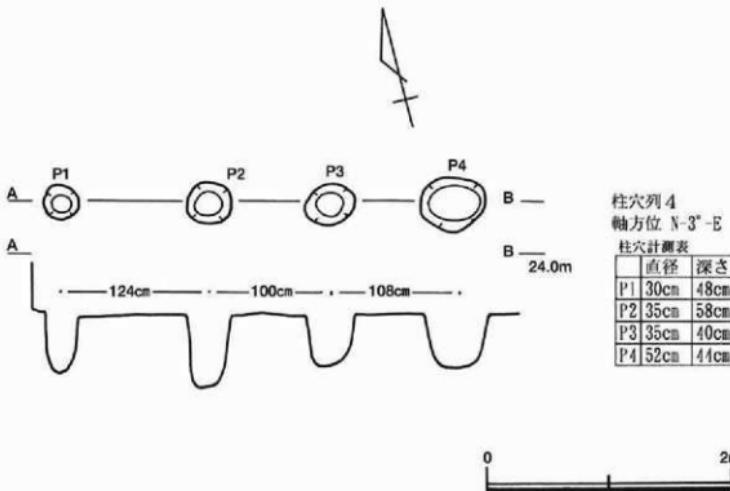
柱穴列3
軸方位 N-77°-W
柱穴計測表

	直径	深さ
P1	40cm	20cm
P2	42cm	20cm

第12図 柱穴列3

柱穴列4（第13図）

調査区中央部で発見された遺構である。東西方向に4穴が確認された。東西方向には遺構の延伸の可能性があるものの、南北方向にはその可能性がなく、横や層といった性格をもつ遺構と考えている。また、西端の柱穴（P1）は、柱穴列2に伴う可能性がある。柱穴の間隔は、100~124cmと、不等である。柱穴の平面形は円形で、地表面からの深さは42~58cmである。柱穴を結んだ軸線の方位は、磁北に対し77°西を向く。



第13図 柱穴列4

第2節 出土遺物

地業構成土中と、地業面上で中世遺物が出土した。遺物の総量は、遺物収納用コンテナ7箱分である。以下、各地業面毎に発見遺物の概要を述べ、図版に掲載した遺物については更に詳述を加える。

1. 第1面

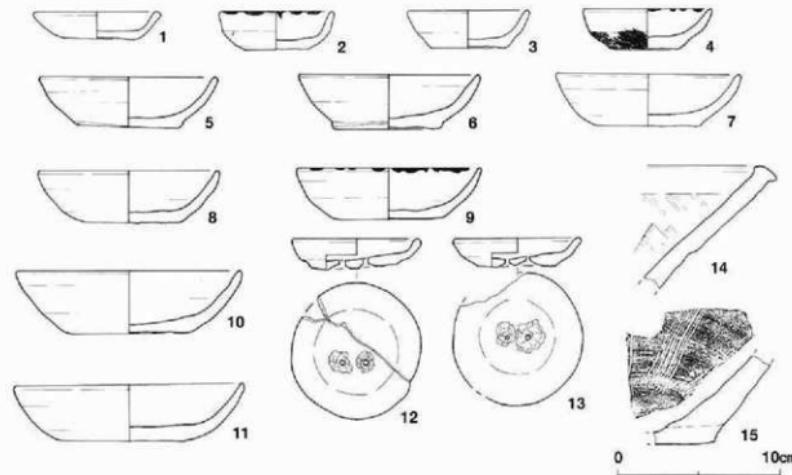
地業面上では、遺物は出土しなかった。地業面上の堆積土中からわずかに中世遺物が出土したが、いずれも細片であり、図示できなかった。遺物の種類は、かわらけ、瀬戸窯製品、常滑窯製品などである。

2. 第2面

地業面上で、多数のかわらけ片を主とする遺物が出土した。遺物の種類は、かわらけ、常滑窯製品、備前の捕鉢、山茶碗窯系捏鉢などである。かわらけ以外の出土量は少なく、いずれも細片である。地業構成土中からは、かわらけ、瀬戸窯製品、瓦質火鉢などが出土したが、かわらけ以外はいずれも細片で出土量も数点である。以下、図版掲載遺物について詳述する。

第2面上出土遺物（第14図）

第14図は地業面上で発見した遺物である。1～13は糸切り底をもつかわらけである。すべて完形。このうち、2、4、9は灯明皿として使用されたもので、口唇部に煤が付着する。4はさらに体部外面下半にも多量に煤が付着する。12、13は底部に2箇所の穿孔がみられる。これは、焼成後に内側から穿たれたものである。かわらけの胎土には、粉質のもの（3、10、11、12、13）と、砂質（1、2、4、5、6、7、8、9）のものがあり、そのいずれにも黒色微緻、雲母片、泥岩粒、白色針状物などが含まれる。以下、各かわらけの法量を口径-底径-器高の順に記す（単位はcm）。1：7.4-5.1-1.6, 2：6.8-3.9-2.3, 3：7.3-4.5-2.3, 4：7.7-4.4-2.5, 5：10.8-6.4-3.1, 6：11.0-6.5-3.3, 7：11.3-6.4-3.2, 8：11.0-6.2-3.2, 9：11.3-6.8-3.1, 10：13.7-7.8-3.9, 11：14.0-7.7-3.6, 12：7.6-5.3-1.8, 13：7.6-4.8-1.8。



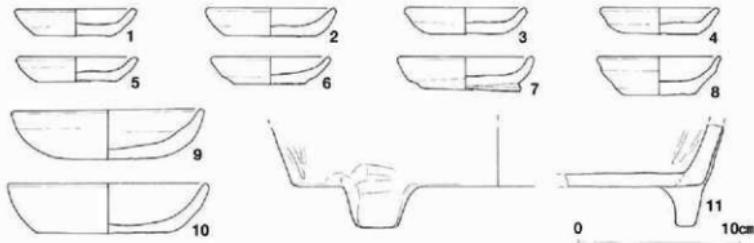
第14図 第2面上出土遺物

14は常滑のこね鉢の口縁部小片である。胎土は、石英小石を多く含む緻密土である。器面の調整は、口縁部が指頭によるヨコナデ、体部外面が指頭による押さえの後、木口状のハケ、体部内面は木口状のハケによる。法量は小片のため不明である。15は備前の掘鉢である。胎土は石英細石を多く含む緻密土である。器面の調整は、体部外面最下位にヘラナデが認められる。摺目は、8条を一単位とする節目にによる。体部内面はよく使用され、表面は著しく磨滅する。

第2面下出土遺物（第15図）

第15図は第2面を構成する地業土中で発見した遺物である。1～10は糸切り底をもつかわらけである。すべて完形。かわらけの胎土には、粉質のもの（1～7, 10）と、砂質（8, 9）のものがあり、そのいずれにも黒色微砂、雲母片、泥岩粒、白色針状物などが含まれる。以下、各かわらけの法量を口径-底径-器高の順に記す（単位はcm）。1：7.1-4.9-1.7, 2：7.7-5.8-1.7, 3：7.3-4.9-1.6, 4：7.0-4.8-1.6, 5：7.1-4.9-1.6, 6：7.1-4.5-1.7, 7：8.1-6.2-2.0, 8：7.4-4.6-2.4, 9：11.5-6.9-3.1, 10：12.1-8.1-3.1。

11は瓦質輪花型火鉢である。胎土は黒色砂を多く含む砂質土である。底部には脚が付く。



第15図 第2面下出土遺物

3. 第3面

地業面上で、多数のかわらけ片を主とする遺物が出土した。遺物の種類は、かわらけ、常滑窯製品、瀬戸窯製品、山茶碗窯系捏鉢、砥石、滑石製品などである。かわらけ以外の出土量は少なく、いずれも細片であった。

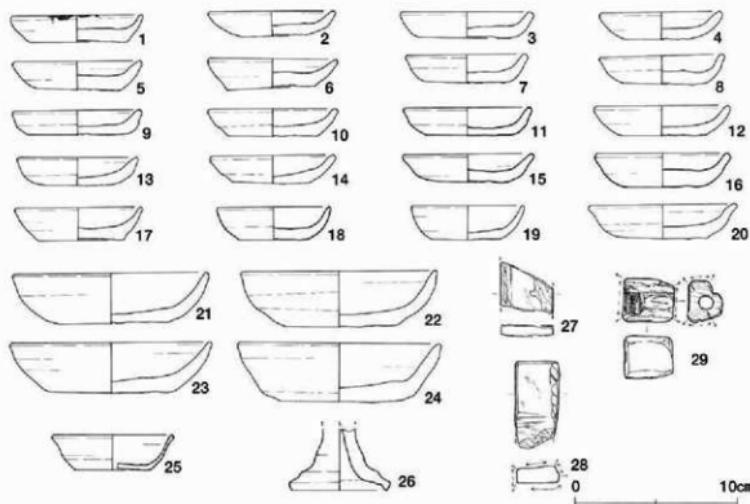
造構に供する遺物では唯一、柱穴列1からかわらけが1点完形で出土した。地業構成土中からは、かわらけ、常滑窯製品、瀬戸窯製品、青磁、白磁などが出土したが、出土量は少なく、殆どが細片であった。以下、図版掲載遺物について詳述する。

第3面上出土遺物（第16図）

第16図は、地業面上で出土した遺物である。1～24は糸切り底をもつかわらけである。すべて完形。このうち、1は灯明皿として使用されたもので、口唇部に煤が付着する。かわらけの胎土には、粉質のもの（1, 18, 19, 20）と、砂質（2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 21, 22, 23, 24）のものがあり、そのいずれにも黒色微砂、雲母片、泥岩粒、白色針状物などが含まれる。以下、各かわらけの法量を口径-底径-器高の順に記す（単位はcm）。1：8.0-5.9-1.7, 2：7.6-4.5-1.6, 3：7.9-6.4-1.6, 4：7.2-4.7-1.7, 5：7.7-5.3-1.8, 6：7.8-5.5-1.8, 7：7.2-5.3-1.7, 8：7.4-5.3-1.7, 9：7.8-6.1-1.5, 10：7.7-5.6-1.7, 11：7.6-5.4-1.8, 12：8.1-5.6-1.9, 13：7.2-5.3-1.8, 14：7.5-4.8-1.7, 15：7.9-5.0-1.7, 16：8.0-5.2-2.1,

17: 7.6-5.4-2.0, 18: 6.9-4.2-2.1, 19: 6.8-4.2-2.2, 20: 8.9-5.5-2.1, 21: 11.8-7.3-3.1, 22: 11.9-6.8-3.4, 23: 12.2-7.9-3.1, 24: 12.3-7.7-3.7。

25, 26は瀬戸窯製品である。25は入子である。胎土は黒砂と白砂をわずかに含む緻密土。外底面はヘラ切り。法量は口径7.4cm, 底径4.6cm, 器高2.2cmである。26は仏壇瓶の脚部である。胎土は緻密土。内面も施釉される。釉薬の色調は灰緑色。27, 28は砥石である。石材の産地は27が鳴滝向田、28が鳴滝中山。いずれも破損した砥石を再加工したものと思われる。29は滑石鍋の鋤部を転用したスタンプの未製品である。



第16図 第3面上出土遺物

柱穴列1内出土遺物（第17図）

糸切り底をもつかわらけが1点、東飴2つ目の柱穴内で出土した。胎土は粉質で、黒色微砂、雲母片、白色針状物を含む。法量は、口径7.5cm, 底径5.3cm, 器高1.9cm。

第3面下出土遺物（第18図）

図示できたものは、糸切り底をもつかわらけ1点のみである。胎土は粉質で、黒色微砂、雲母片、白色針状物を含む。法量は、口径7.4cm, 底径4.6cm, 器高1.6cm。



第17図 柱穴列1内出土遺物



第18図 第3面下出土遺物

第4章　まとめ

今回の調査では、月影ヶ谷内において、初めて中世建物址が発見されたことが大きな成果である。調査範囲が狭小であったため、遺構の規模を含む空間の全体像といった点については窓い知れなかった。ただし、各期を通じてほぼ一定の遺構軸線方位や、溝・柵列など境界的性格を有する遺構の位置などから、現在の道路のラインや地境が中世期から変化することなく継承されてきたことが確認された。以下、本遺跡における最も古い地業面である第3面を第1期とし、各期における調査成果に対する所見と、出土遺物を基にした時期を明らかにしたい。

第1期

中世基盤層上に、泥岩塊を含んだ粘質土を約40cm盛土して構築される。発見遺構には2種類の軸方位が認められる。各遺構の性格も考え合わせ、これらは遺構の時間差を反映するものと思われる。ただし、出土遺物や遺構覆土からこれらの新旧関係を捉えることはできなかった。

本期の遺構で、注目すべきは柱穴列2である。遺構の性格としては、第3章で触れたように木造基壇の東柱の柱痕と思われる（註1）。全盛期の極楽寺は本遺跡の所在する月影ヶ谷内にも多くの支院をもっていたようであり、本址はこれに伴うものである可能性が高い。また、遺構の南側限界は、第1面に伴う溝にあたかも規制されたような状況を呈する。調査区南端で発見された柵列も、この溝に平行するように設けられており、本期には既に溝が存在していた可能性が推察される。

出土遺物の大半はかわらけであったが、かわらけの器型と法量から見て、本期の時期は13世紀末頃とされよう。

第2期

礎石建物と掘立柱建物を発見した。これらは重複して検出され、建物の性格の変化に伴う建て替えを示唆するものかも知れない。建物周辺には他に遺構は見あたらず、土地空間自体は非常に安定した状態を維持していたものと思われる。

第1期同様、出土遺物の大半はかわらけであった。かわらけの器型は、第1期のものと比べ、いわゆる薄手丸深のものが多く認められるようになる。法量的にも口径10~11cmの、いわゆる中型品が増加の傾向にある。ただし、14世紀中葉に盛行する薄手丸深型の胎土に粉質のものが多いために比べ、前代からの砂質のものが依然として多く存在することから、本期の時期は13世紀末~14世紀初頭に比定したい。

第3期

調査区東側に柵列、南側に溝を発見した。溝については、覆土の観察から、第1面使用中に土地空間の拡大に伴って埋められ、地業面となった可能性がある。これらは位置的に現在の地境や道路に対応し、土地空間の東側と南側の限界について、基本的には現代まで継承されることが確認された。

地業面上で遺物が出土しなかったため、地業の時期決定に有効な資料に欠けるが、面上の堆積土中から出土したかわらけに、口唇部がわずかに外反する14世紀後半代のものを確認していることを記しておく。

所見結果

以上の所見から、本遺跡では13世紀末から14世紀前半にかけて、活発な活動が行われていたことを確認した。中世基盤層上で発見された弱い地業面については、出土遺物がなく、時期は不明である。同様の理由から、第3期（第1面）の時期についての明言は避けるが、地業面上堆積土から出土したかわら

けの細片から、15世紀に下ることはないと考える。第1章で触れたとおり、平成8年度に月影ヶ谷内で実施された調査でも、中世の地業の時期は14世紀前半までという結果が報告されている。どの遺跡でも現代の搅乱によって中世後期～近世の堆積土が存在せず、断定はしかねるが、この時期以降、月影ヶ谷内の遺跡は対照的に向かうようである。14世紀前半といえば、元弘3年（1333）北条氏の滅亡、嘉元元年（1303）の開山忍性の病歿など、極楽寺を取り巻く環境にも大きな変化が生じた時期である。これらの遺跡における調査成果は、史実をよく反映するものといえよう。対照的に、14世紀前半には谷内に壠塙状に地業面が造成され、精力的な活動が行われていたようである。今後の調査例の増加により、月影ヶ谷内の寺院・やぐらの展開が、より明らかになることを期待したい。

〔註1〕国指定史跡である鎌倉市二階堂の永福寺の調査では、中心伽藍に伴う木造基壇の東柱の脇方として同様の遺構が報告されており、本址の性格決定の根拠とした。

「史跡永福寺跡－国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書－平成元年度」鎌倉市教育委員会 1990

写 真 図 版



▲第1面全景（北側から）

▼遺跡内土層堆積状況

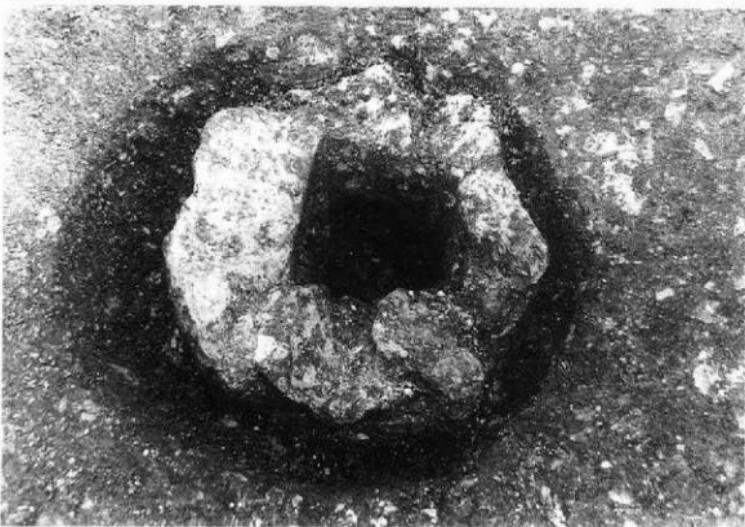


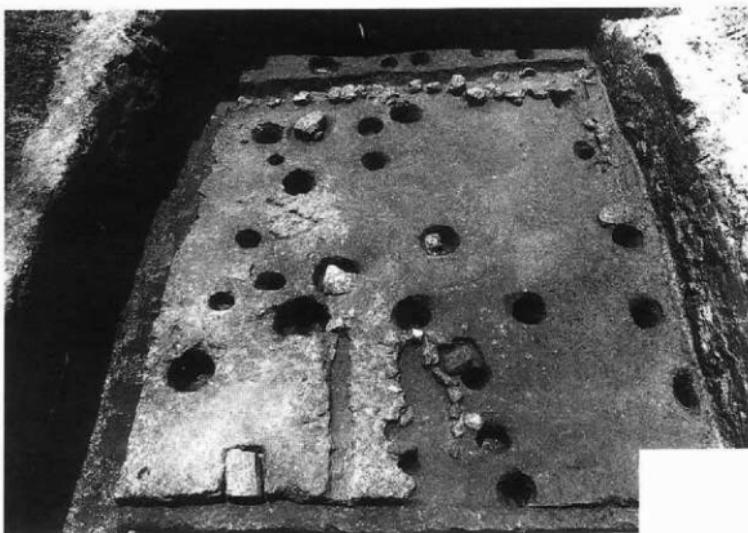
図版2



▲第2面全景（北側から）

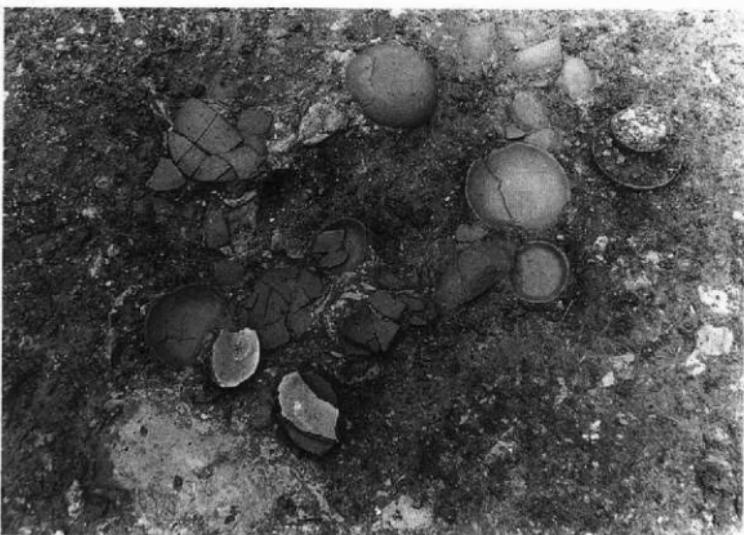
▼据立柱抜取痕





▲第3面全景（北側から）

▼面上で出土したかわらけ



図版 4



かわらけ



砥石



常滑（こね鉢）

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成9年度発掘調査報告							
卷次	14							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	雄実							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 神奈川県鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦1998年3月							
ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所 在 地	コ ー ド	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
ごくらくじきゅうけい だいいせき 極楽寺旧境内遺跡	かながわけんかまく らしごくらくじ 神奈川県鎌倉市極楽 寺三丁目348番2	204 市町村 No.291	35° 18° 19°	139° 31° 43°	19960617 l 19960806	30.45m ²	個人専用住宅 建設	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
極楽寺旧境内 遺跡	中世建物址	中世 (鎌倉時代後 期)	地業面3面 礎石建物 掘立柱建物 横列 溝	かわらけ、青磁、瀬 戸、瓦質手焼、砥石				

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14

平成9年度 発掘調査報告（第1分冊）

発行日 平成10年3月

編集発行 鎌倉市教育委員会

印刷 朝日オフセット印刷株式会社